THE CENTRAL REVIEW

中央公論

七月號

第三十九年 第八號 第四百三十七號

大正十三年六月廿八日印刷納本
大正十三年七月一日發行（毎月一回一日發行）

此廣告を見て御申込の方は中央公論愛讀者なる旨御申添を乞ふ



卑猥なる廣告の申込みは謝絶す　中央公論社

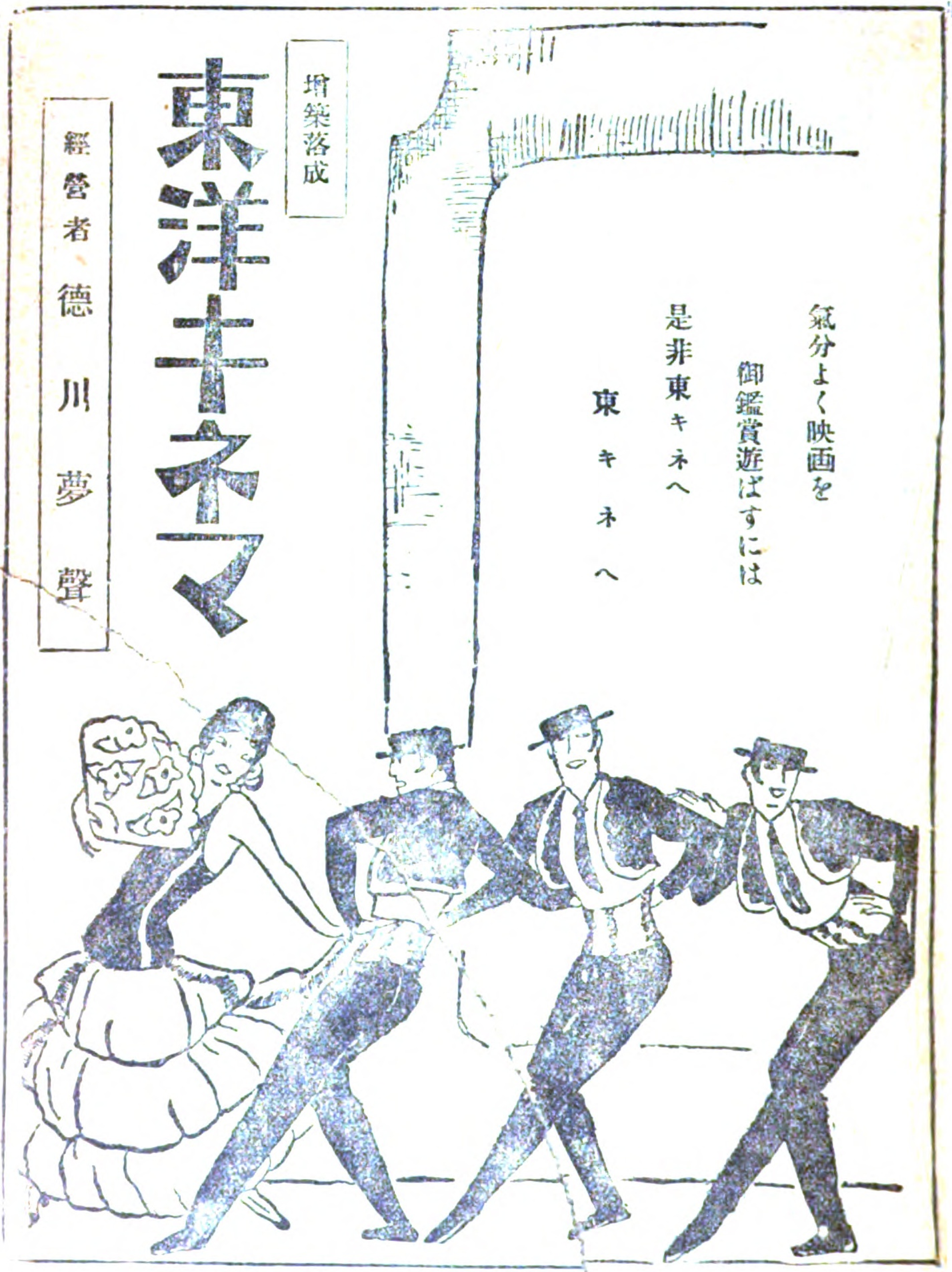

海よし
山よし
帽子よし
鷹(タカ)印
麥稈帽子
今年の鷹印新型が
人氣の焦點となりました
東京・大阪
株式會社 高橋製帽所

▼說苑


歯の為に一番よい
クラブ煉歯磨
朝と食后と寝る前のクラブ歯磨
は歯を強く美しく致します……
家庭用にクラブ粉歯磨
旅行用にクラブ煉歯磨
含嗽用にクラブ水歯磨



花火　　小林古徑筆


氣分よく映画を
御鑑賞遊ばすには
是非東キネへ
東キネへ
増築落成
東洋キネマ
經營者　德川夢聲

新刊

英國劍大教授　ウエッツザム著

農學士　大町芳文譯

科學と思想

四六版
總布函入
定價貳圓五拾錢
郵税拾貳錢

が
所は、科學
學等に如何に影響
か、吾人の思想や生活に如何に
交渉を持つかと言ふ點である。
現代の科學を觀つめて現代の思
想や、生活を考量し批判し度い
人々は是非一讀すべきである。

部 (賣捌) 東京堂・至誠堂・北隆館
東海堂・盛文館・上野

成功者は何れも熟慮果斷の人！

煙草の害を知りつゝ永年禁煙の出來なかつた人も一度「カロット」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸へぬ、乞ふ明かなる事實に聞け！！

實業之日本代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主事に報告しますと主事は「明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御説明申さう」と云て主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて異れました、其處で榮川堂主は自身來社せる趣意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、そして先づ一社員の煙草好な方に御試しを願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫くして其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが社員ノ方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですね」、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立ちになつて「カロット」を取上げてお試しになりました。

「やあこれでは煙草は吸へませんね――」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、其處で更に店主は口を開いて「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇乞をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

特徴

外見人も卷煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを少體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘快味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する惡き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他步行等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

カロット金貳圓　大凡百日分

パイプ
- 同　新流行ベークライト　五拾錢
- 同　象牙製サックス入　壹圓五拾錢

パイプは三種の内希望の品御用命願升

送料　内地　十八錢
　　　臺、朝、樺　四十五錢

引替送料　内地　三十錢
　　　　　臺、朝、樺　五十五錢

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては端書にて御申越次第引換小包にて送品可仕候

東京府大森不入斗四五一

榮川堂

振替東京五二一九壹壹

東京市京橋區瀧山町十三番地

代理店　天下堂

大正十三年

中央公論

七月一日發行

七月號

第卅九年第八號

第四百三十七號

新内閣に對する期待

加藤内閣は成立早々馬鹿に人氣がいゝ。高橋犬養兩老の謙讓に依て三派聯合の陣立が整つたといふことも慥に其一因に相違ないが、主としては其の閣僚に有爲の人材を集め自ら國民をして久しく停滯せる政界に一渓の活路を開くべきを期待せしむるものあるからであらう。現に何今度の内閣程强い頼み甲斐のある者として迎へられたものはない。

從來の内閣は或は樞密院に氣兼し或は貴族院に遠慮し甚しきは軍閥司法閥と稱するが如きの鼻息をさへ伺つたものだ。一々其の指圖を受けたと云はぬまでも、之等特殊階級の何等かの要求を顧ることなくして組閣の事業を完うせるもの曾てあるか。此點に於て今度の内閣は如何。以上の特殊階級の勢りたるや固より一朝一夕の事でないから、公然之を無視することは到底出來ぬだらう。從て其間種々復雜微妙の關係を生ずるは必ずや免れまい。只吾人のひそかに想像する所は、今後或は主客顚倒して樞密院や貴族院や將た軍閥やが寧ろ政府に遠慮し氣兼することになりはしないだらうか。又事實斯うならなくては折角の護憲内閣出現の意義もゼロだ。

× × × × ×

加藤内閣の强みの根據は何處に在るか。人は三派の協戮をいふ。又は有爲の人材を集め得た點を見よと云ふ者もある。併し之れが强みの本當の源だと信ずるならば飛でもない誤である。人材を集めたといふ點だけを取るなら、震災後の山本内閣だつて大した遜色はない。而も政界策士の陰謀に一と溜りもなく沒落を餘儀なくせられたではないか、原内閣が下院に於ける絕對多數を擁し乍ら、樞府上院等の機嫌氣づまを取て辛うじて政權を掌有するを得しに思ひ到らば、三派協調の如き果して何爲するものぞといひたくなる。於是吾人はどうしても加藤内閣の强みの根據を他の新しい何物かに求めなければならぬ。

然らば求むる所の新しい根據は何だ。是れいふまでもなく民衆的信賴である。詳しくいへば政府側の陰陽兩面よりする干涉壓迫ありしに拘らず、民衆の獨立の判斷が能く護憲三派を表面に出したといふ點にある。從來の多數は謂はゞ金で作つた多數に過ぎなかつた。金で作つたものはまた同じく金で崩し得る。是れ從來の多數が常に策士の陰謀に脅かされた所以たると共に、多數黨が敢然として群議を排し自家の素懷宿論を提げて邁進す

る能はざりし所以でもある。然るに今度の多數は少しく之とは模樣が違ふ。不十分ではあるが選擧に對する民衆良心の積極的活躍のあつた所に特色の著しきものがある。一度眼をひらき始めた以上、斯うした正しい傾向は今後は益々發展するあるのみだ。議會の多數に對する不動の基礎斯くして作られんとするを觀るとき樞府上院軍閥の人々が遂に之を輕視し得ざるに至るも當然ではないか。

併し議員と選擧民との眞の人格的關係はまだ〳〵十分でない。それでも其が議會を重からしむること如斯とせば其の關係の今後益々緊密濃厚を加ふることの結果や蓋し想像するに餘りある。政界に重きを爲すの皮相に倣つて專恣橫暴に陷ることなく、其の重きを爲す所以の眞因に思を潛めて切に政客の自重を望まざるを得ない。

× × × × ×

國民として吾人は新內閣に何を希望すべきか。普選の斷行か、之もいゝ。貴族院の改革か、之もわるくはない。綱紀の肅正財政の緊縮皆誠に結構だ。が、吾人は夫よりもモツト〳〵大きな使命を彼等に期待することを忘れてはならない。何ぞや。政界勢力の統一是である。一言にしていへば、樞府上院軍閥等に氣兼し一々彼等の不當なる要求に耳傾け、少くとも彼等の掣肘を受け、結局時代の要求に應ずる何等新施設を爲し得ざるに終る樣では困る、之等の散漫したる諸勢力の姑息的妥協が政界の實勢を支配することが從來百弊の根元であつたのだから、之を打破するを最大の使命とするのでなくては新內閣の華々しく出現した意義はないと云ふことである。

樞府軍閥上下兩院の多數派は從來いはゞ相聯絡して政權を獨占壟斷した特殊部落であつた。この部落に因緣なきものは斷じて政權に有り附けなかつた。其處から色々の弊害は生れる。遂に醜狀暴露拾收す可らざるに至り民衆の後援は期せずして圈外の護憲三派を送り出したのではないか。故に加藤內閣は其成立の由來から云つても民衆的新勢力に據て壟斷的舊勢力と戰はねばならぬ立場にある。之等の點に關しての新內閣に對する希望は別の機會に讓るとして、吾人はこの使命を達せしむる爲に一日も長く加藤內閣を廟堂に立たしめて置きたいと思ふ。揭ぐる所の政策の實行に何れ丈の成績を示すやは第二の問題としていゝ。舊勢力に阿附妥協する態容を示さゞる限り、吾人は極度の忍耐を以て加藤內閣の存續を許さうではないか。只恐る、加藤內閣果してこの吾人の期待に背くことなきや否やを。

中央公論



第卅九年第八號
七月號
第四百三十八號

新たなる神殿（日本版―原本）

所謂『日本式』佛教―乃至、基督教徒の全部、また、世界のすべての『國』の一つ々々に住む所謂『國粹主義者』のすべてに宛てたる公開狀。

小野俊一
〔卯、ア・ア・ゴロフシチコフ〕

全智全能なる天地の神―

全宇宙を司宰ます諸法則の中に、我等の眼にも容姿をば鮮明に認得せしめ給ふ理智なる神よ!!

あなたは物といふ物の一つ々々なる原子の中にも、また音響、電氣、熱、光、の振動の中にも、或はまた生命力、乃至、なほ未だ我等に知られざる他の諸々の振動の中にも、あなたの能力を啓示し給ふ。宇宙に在りとし在る物は、あなたの權能の發現として、みな各々、あなたによつて定められたる其の進化の路を辿つてゐます。然るに我等人類は、あなたの形姿に象りて創造れ、且つまた自由なる意志を賦與られ乍らも、悲しい哉、却つてあなたとあなたの諸法則とに背向いては、已れ自身の未だ不完全なる人間界の法則の上に、今日の果敢なき人類の生活をば營んでをります。

我等は渾沌として秩序のなかつた個人間相互の關係から所謂社會の法律習慣なるものを組立てました。けれども其の社會の法律―習慣たるや實に、あなたの自然律の一つ々々のものが新たに啓示されて行く毎に、忽ち自然に變化せざるを得ぬほど不確かなものなものなのであります。また、我等は我等の生活を自分達人間、の諸法則の上に立て、其の基礎の上に我等人類の種々なる國民的、また階級的差別制度を樹立し、さしうて自然の諸法則と其の力とは、主として互ひの闘爭の爲めに利用してをるので御座います。――

我等は人類の共存的進歩向上の爲めに努力してをるのではなくて、實は社會法則といふものゝ上に建てられた人間各自の權利擁護にいそがはしく、さうしてあなたの宇宙法則の威力を利用しては、たゞ互ひに自分達の仲間を殺戮してをるので御座います。

全能なる神！　どうか人類をもつと賢明にして、彼等を我等が『自然律』と名づける所のあなたの法則を探究するの道に導き給へ。そうして其の道によつて、我等人類を次第にあなたに近寄り、あなたの如く賢明く、力強く、完全なるものとならしめ給へ。どうか今後の我等を、過去の歴史に繰返へされた、民族や國家

が興隆しては滅亡びた、あの進化の經路から免れさせ、さうしてまた、たゞ自分ら人類だけの、一時的にして變化常なき、あの不完全なる社會法則から一日も早くのがれさせ給へ。

さういふ路にではなくして、あなたのもろ〳〵の法則を究明するの道に我等を導き、さうして、終ひには共の道によつて、全宇宙の理智としての、あなたの偉大さにまで、我等にも到達し得るよう許させ給へ。

我等人類のすべてのものを、あなたの法則を究めむとする共通なる理想を以て一つに結合し、終ひに共れによつて我等が、眞に、互ひに、兄弟姉妹の如き關係となり、また同時に人類全體として此の地球上の賢明なる居住者となり得るよう援けさせ給へ。

あなたの宇宙の法則を理解することによつて、或ひは我等の此の祈願の中に表現されたる思想に由つて、いま、人々の心を憎惡と憤怒とを以て滿しつゝある、彼等の訓なる互ひの敵意、侮蔑の念を消滅せしめ、彼等のすべてを全一なるものとして、たゞ一つに結びつけ給へ。

希くは、あなたより賜はりましたる我等が獨創の力をば、人類相互の殺戮の爲めにではなく、また無意義なる黄金獲得の爲めにでもなく、あなたの宇宙的法則と力とを學ぶことによつて我等人類の力を充實させることのみの爲めに振り向けしめ給へ。然らば、それらの力は全體として我等人類に奉仕し、我等に使役され、人類全體は地上に於ても、今までの如き苦惱ではなくて、休息と安心とを持ち得るのであります。

宇宙の全ての力の泉源たる、理智なる神よ！どうか我等人類の理智をもより聰明きものたらしめ給へ。

然らば終ひには、我等もまたあなたに近付いて、あなたの理智なるが如くになることが出來るでありませう。

あゝ希くは、『自然力（卽ちあなたの力）の理解』てふことを以て、人間生存の根本的なる理想たらしめ、それによつて我等人間をも終ひに、あなたに近づけ給へ。

あゝ希くは、一人々々の人間を、その屬する國籍と階級とに關係なく、何れもみな何等かの意味に於て人類全部の爲めに有益なるものたらしめ、彼れをして『全世界の一市民』たることを得せしめ給へ！

また、過去の各時代に於て、人類にあなたの力を理解することに就て進歩を與へてくれた全ての偉大なる働き手を、我等をして『全世界の市民』の中に數へしめ、自然征服者たる彼等の後にあなたの赤子としての我等の集團を從はしめ給へ。而して我等をして日常的『社會』の範圍外なる新しき社會團體——『全世界市民』——の集團を組織せしめ、各自の實生活と實行とを以て我等が從來の社會法則を變更し、其れ等をば二次的意義のものたらしめ、其れによつて現時の世界に、新しき、利己的ならざる、人間の誠心からなる思潮の流れを與ふることを得せしめ給へ。

最高なる理智の神！

希くは人類をして、あなたの宇宙律を理解することによりて現實的なる進歩の道に立ち、それによつて我等にも終ひにあなたに近づくことを得せしめ給へ。

ロシヤに生を享けたる
ア・ア・ゴロフシチコフ　五十二歳

日本に生を享けたる
小野俊一　三十一歳

Alexander A. Golovtschkov と Shun Ichi Ono とは、(各々がその肉親者と有する關係のみを除き、其の外のことに就ては凡て)たとひ現時の法律がそれを認むると認めざるとに拘らず、また現時の人間の心理が斯かる二個體の關係を肯定すると肯定せざるとに拘らず、二つの個體を合體して一個のものとなし、事實上同心一體のものと考ふ。從つて此の論文、(此の公開狀)、の全部も、また當然兩人の合作と考へらる可きものである。

はしがき

明治三十七年(西暦では一九〇四年)の二月、あの日露の戰端が開かれた時に、現筆者の年少なる半身『小野俊一』は日本の東京で、將に小學校の高等二年を卒へやうとしてゐた十二歲足らずの小供だつた。其の時、年長なる半身『ゴロフシチコフ』の方は、土木技師として、それより既に約一年前、シベリヤ鐵道、バイカル湖畔の工事の中、自身受持ちの分を完成させて、東の方ハルビンまでやつて來てゐた——三月の末に、俊一は小石川竹早町にある女子師範の附屬小學校を出て、早稻田中學に入り、まだ其の頃は一面の田圃だつた關口から大隈邸あたりの田舍道を横切つて每日牛込馬場下町まで通ひ、ゴロフシチコフは技師シーモノフの下にあつて露軍の後方勤務に從事し、松花江(スンガリ)に船橋をかけたり、道路を改築したり、……或ひはまた滿洲の各地に兵舍を建てたりしてゐた。——シーモノフといふのは、乃木大將が旅順の包圍攻擊に當つて、「最も落し難い砲臺は何れもみな彼れの手で築いたものばかりだつた」といつて歎稱されたとかいふ男である。

此の頃のゴロフシチコフは、まだやはり、或る程度まで度量の狹い一人の『愛國者』たることを免れなかつた。——

たとひ彼れ自らが『殺人』の直接行動に參加しなかつたとは云へ、其の時の彼れに取つては『日本』よりも『ロシヤ』の方が國としては貴重であり、戰鬪が日本の勝利に終ることよりもロシヤの勝利に終ることの方が、勿論いつでも望ましかつたのだ。——然し乍ら、此の點に於ては、十二歳の彼一の方も決して負けてはゐなかつた。——彼れは『ロシヤ』といふ國と、當時の所謂『露助』なるものゝ全てとを、自分の小さな心全部を以て實に徹底的に憎み惡んだ。彼れの近親者の中からも數名の人々が出征したが、彼れはバイカルまではおろか、遠く露都位まで日本が軍を進めて、當然ロシヤを征服す可きものだと思つてゐた。但し其の時の彼れ自身は、父と共に叔父の出征を汽車で國府津驛まで見送つた時、物心ついてはじめて、箱根の連山なるものを見て心を躍らした程、それほど此の日本といふ小さな島國さへも實にまだ少しより知らなかつたのである。——此の當時、彼れの外祖父『稅所篤人』は大隅國霧嶋に住んでゐた。『稅所』といふ家が持つ數百年前からの特殊なる門閥的關係で、其の『天孫降臨の靈地』に建つてゐる、瓊瓊杵尊其の他八柱の神を祭つた官幣大社霧嶋神宮の宮司をしてゐたのだつたが、其處では勿論、朝に夕に『皇軍戰捷』の祈願が行はれ、また祖父はよく、乃木大將まがひの漢詩や和歌を作つては、自分の戰時氣分を東京の我々にまで傳へて來たものだつた。——實に奇妙なることに、此の祖父は、さういふ重要なる神職に就き乍らも自分はそれ以前既にキリスト教の信者となつてゐた。(たとひそれは、後から考へると、キリスト教の教理そのものに心服してゐた爲めではなく、寧ろ、泰西の文物に對する彼れの憧憬の念によつたのであつた樣であるけれども。)彼れは或る時、日蝕に際して、霧島地方の人達がそれをば「日の神樣が人間に代つて病氣にかゝつて下さつてるのである」といつて感謝して居るに對し、「天照皇太神は火の玉ぢやあないぞ」と喝破して人々を驚かし、また或る時は、既に七十歳位の時だつたが、東京に於て開かれた全國の神官の大會の席上で「日本の神道は宗教ではない」といふ演説をしてたしか宮地嚴夫とか云ふ人と非常なる激論をやり、

井上友一氏の仲裁で、危く鐵拳の飛ぶことだけは無くてすんだ。——此の位の程度にまではわかつた爺であつたが、然しそれでも流石に、日露戰爭以後は少し頭の調子が變つてゐて、彼れは切りにキリスト教の教義を攻撃し、殊に日本のキリスト教徒が、同じ宗旨のものだけを『兄弟姉妹』と呼びつゝ他の人々を異端視することや、或ひはまた彼の内村鑑三氏が御眞影に拜をすることを拒んだといふ様なことを實に口を極めて罵つてゐた。(此れ等の議論は既に俊一が中學五年になつた夏の休暇に、霧嶋や鹿兒島に行つた時、きかされたことなのである。)——丁度日露の戰端が開かれた時の或る夜、霧島の山の上に、幾千とも幾萬とも知れぬ火の柱が立つて、それが空高く上ると見るまに、一齊に西北の方面に向つて飛び去つたといふことが、幾多の目撃者によつて傳へられ、人々は其の必ず、日本の神々が日本の軍隊を守護せむが爲めに戰地に赴かれたのに違ひないことを信じた。さういふ情報は、其の都度、祖父の手紙によつて我々の東京の家に傳へられ一同の心を敬虔の念を以て滿たしめた。さうして其の時、祖父が桑原といふ禰宜の人を派遣し目撃者について調査し報告せしめた詳細なる記錄なども肉筆のまゝいまなほ自分の家に保存してある様なわけである。

かういふ特別な事情もあつたし、またその當時の日本全體を覆ふてゐた雰圍氣が雰圍氣でもあつたし、十二の俊一の心は徹頭徹尾、愛國と敬神との念に燃え立つてゐた。早稻田の田圃路を毎日往復し乍ら、彼れが自分の學友達に向つて主張した所の議論はいつも、典型的なる國粹論であり、武斷論であつた。——仁川、九連城 鳳凰城に始まつて遼陽にまで及びたる連續的なる勝利の戰報、八月十日の海戰、難攻不落といはれたる旅順の開城、……而して終ひに奉天の占領、すべて此れ等の捷報が如何に俊一の小さき心を有頂天にし雀躍せしめたか!!　浦鹽艦隊の跳梁したる時と、ボルチック艦隊の廻航中とだけは流石に可成りの不安と心細さとを經驗しなかつたわけでもないが、それも人皆の知るが如く結局は目出度く萬々歳の大勝利となつて、「それ見ろ」とばかります／＼彼れの氣勢を高めた。凡て此れ等の戰捷を、彼れは

恰かも最初から決定せられてゐた當然の成行きなるかの如くにさへ考へた。何故なれば彼れは茲に、もう言葉そのまゝに、自分の祖國なる日本をば『神國』であり、特別なる『大和魂』なるものの獨占的なる特産地であると信じ切つてゐたのであるから、彼れは神と自分の國との間に一種特別の關係があるといふことを信じて少しも疑はなかつた。即ち、古くは彼の『八百萬の神』といふ神々や、また近くは維新以後に至るまでの歴史中の人物で死後『神』として祀られた様な人々の亡靈は、勿論、自分らのみの神であつて他國には之に類するものはなく、其れ等の神々の特別なる恩惠を受け得るものは日本の國民のみであり、從つてロシヤはおろか、世界中の他の何れの國に較べても、日本よりも優れ、日本よりも強い國は一つとしてある可き道理がないと確く信じてゐたのであるから。（拙著『子孫崇拜論』、三二三頁以下參照）其の當時の皇后の御夢に坂本龍馬の亡靈があらはれて、「日本の海軍のことに就ては、何卒少しも御心配なく」と申上げたとか云ふことをきいても、勿論、極めて當然なることゝ思つた。何故かと云つて、我が日本といふ國の發展は、八分通りまで、そもそも其の建國の始めから、斯かる『神明の加護』と『天佑』とによつて來てゐるのではないか？『大和魂』は兎に角とし、『八咫の烏』、『金色の鵄』、さては元寇に際しての『神風』……等、何れも一つとして、他力本願の象徴でないものはない。――「實力に於ては、軍備に於ては、たとひ多少の缺くる所があつたとしても、我れ等は戰ひには必ず勝つに決つてゐる、何故なれば、我が日本の上にはいつも特別なる神々の加護があり、天佑があるから」といふのが、十二歳の俊一をも含む其の當時の國粹主義者の信念だつたのである。否、我れ等は我が國名が日本であり、さうしてロシヤに對するあて字が露西亞であるといふ一事だけを以てすら、既に日本がロシヤに勝つことを實に當然のことなりと無條件に考へる程、それほど『自信』強くもあつたのだ。だから、奉天と對馬海峽とに『決定的』なる大捷を博するに至るまで、實に前古未聞とも云ふ可き連戰連勝振りだつたことを見てすらも、我れ等は決して特別に驚きはしなかつた。――全てを、恰か

も最初から當然豫定せられてゐた成行きのまゝなるかの如くにさへ考へてゐたが故である。

然るに共の時突如として、青天の霹靂の如く、「呪ふ可き」講和の議は起つた。我れ等が未だ日本海々上の勝利のスバラシさに自ら醉ふて、其の醉のさめざる間に、さうして既に奉天を手に收めたる上、更らに我れ等が彼の『七博士』等と共に、「バイカルまで、或ひはウラルまで乃至は露都までも」と其の後の遠大なる計畫を夢みつゝある間に、未だ皇軍ハルビンにも達せざるに突如として講和の議は起り、さうして政府當局者は『國民の意志と感情』とを無視して終ひに彼の所謂「屈辱的なる」ポーツマウス條約を決定してしまつたのだ。悲憤慷慨せざらむと欲するも豈に得べけむやである。

――上述の如き「國粹的なる」信條を根深く頭に入れ、然かも戰勝の祝酒に醉ひゐたる多くの人々が、(さらぬだに「依らしむ可く知らしむ可からず」的待遇を常に爲政者から受けてゐたことであるから)、沙河―奉天戰を終へたる後の我れ等の軍隊が、たとひ大和魂と天佑とは、其のまゝ乍ら、如何たる士氣と素質と實力のものであつたか? また其の當時の軍資の狀態が果して如何なるものであつか?……などといふことをまるで何も考へず、知つてゐなかつたといつて、其れに少しの不思議もない。況んや十二歳の俊一をや。日露戰爭は、開戰から講和に至るまで全部で一年と九ケ月よりかゝつてゐないのだ。然るに其の間に、大和魂と天佑とは持ち乍らも、僅かばかり浦鹽艦隊が沿海を荒し廻つた時、上村提督の留守宅には既に出入商人が來なくなり、往來からは石が投げこまれた。石と云へば、戰地で、飢ゑた兵卒の喜び開いた牛肉の罐詰めの內容がそれに代へられてゐることもあつた。然し下は十二歳の俊一から上は『七博士』までを含む、時の國粹主義者、戰爭繼續論者達は、さういふマイナスの點は、はじめからまるで計算に入れてゐなかつたのだ。(いま考へると、あの頃日本軍側のマイナス的諸事情と、ロシヤ軍側のプラス的諸事情とを、最もよく、而して公平に知つてゐたのは、多分、乃木將軍の樣な人だつたらうと思ふ。)――今でもよく覺えてゐる、愈々講和條約が決定されたといふ

時、俊一は座敷の椽側で父からいろ〳〵と說明をきかされ乍ら、その號外を持つて二階にかけ上り、人のゐない其の部屋で泣きに泣いた。いくら考へても考へてもくやしくて〳〵涙がとめどもなく流れた。「桂とか小村とか云ふ樣な奴はどうしてこんな腑拔けなのだらう」と實に心の眞底から憤り憎んだ。「まあ此の位のことで仕方がないのだらう」などと比較的に冷靜に構へてゐた自分の父までが實に憾めしくたまらなかつたのだ。さうして彼れが泣きやんだのは、その遺恨の念がなみだと共に流れ去つた爲めではなくて、其の時彼れが自分の小さな心に、「よし、おれは大きくなつたら、どうしても立派な外交官になつてやる。さうしてウイツテだらうが誰だらうがみんな手玉にとつてやる！」と決心したからであつた。彼れは日淸戰爭、北淸事件……等のことを思ひあはせて、日本は今後も五年乃至十年目每には必ず戰爭をやるものと考へてゐたし、少くも「もと〳〵日本のものだつた」樺太を全部日本のものとする爲めに）ロシヤとは當然もう一度やり直さねばならぬことゝ決めてゐた。――然し、さういふ決心で心の鬱憤をまぎらせ乍らも、もし兩親から禁足を食はなかつたとしたら、彼れは勿論、其れから後の數日を日比谷の燒打ち騷動に參加する爲めに送つてゐたであらう。――單なる子供の好奇心からではなく、眞劍なる『國粹主義』的の憤激の念から。

其れから十年たつて大正三年の七月、二十二歲の俊一が渡歐の途上をウラルのあたりまでやつて來た時に世界戰爭は勃發した。――外交官になるといふ子供の時の決心や希望を彼れはいつとはなしに、何處かへ置き去りにして、彼れは中學三年の頃からは理學者として身を立てる決心を固めてゐたわけではあつたが、然かも彼れの國粹主義や軍國主義的の傾向はまだ〳〵依然として根强いものであつた。向陵三年の生活時代、寄宿舍で開かれる『コンパ』の席上で擊劍の竹刀などで卓を打ちたゝき乍ら「萬骨あだに遼東の、鬼となりにし戰ひも、今さら誰れを咎む可き、臥薪嘗膽また更らに、十年待つ間の平和かな。平和よさらば春の夢」など云ふ寮歌の句をうたふ時彼れはまだ『實際』に平和の一時的に・

て、たゞ單に一つの戰爭より次ぎの戰爭に至る一種の休戰期の如きものに過ぎざることを信じてゐたし、實は渡歐の途上、シベリヤを通過するに際しても、彼れは、日露戰爭當時まだ單線だつた部分の既に復線に完成されてゐることを見て、心私かに其れをば自分等の爲めに困つたことゝ考へてゐた樣なわけであつた。

其の『國粹主義者』、『軍國主義者』がどうして今日の如く一人の『世界主義者』、『平和主義者』と變つたか?、其の『愛國』的なりし氣焔家がどうして今日の如く、少くも一部の人々には確かに『非國民』的と思はるゝに相違なき議論や主義を公然となす樣になつたのであるか? ――それは一つには、彼れが僅かばかりでも生物學を學び、其の生物學の見地から社會問題、國家問題、人類問題……等を自ら考へ直ほしたることにより、また第二には、彼れが其の後、偶然の機會によつて五年の歳月を送りたるロシヤの國の人間達が、心の底に殆ど何等の人種的偏見をも持たず、彼れの豫期に正反して、舊敵たりし日本人としても、また一個の人間としても、極めて公平に、公明正大に好遇し交際しくれたることによるのだと思ふが、之れを要するに、彼れは其れを、彼れの心が墮落し退嬰したるが爲めではなく、其れが時代精神の雰圍氣の下に發達し成人し向上したるが爲めに斯かる變化の起つたのであることを信ずる者である。

目下の俊一はロシヤ人『アンナ・ププノーワ』を妻とし、其の間に得たる五歳の男子と、一昨年の六月モスクヴァより呼び寄せたる妻の老母と姉との四人を所謂『直接の家族』として暮してゐる。――一方で、彼れの父と彼れとは、……最近に至つて、互ひに談合の結果、便宜上、一と先づ一切の直接なる親縁關係を斷つた。――それは、父は一分一厘も間違つたことはせぬ極めて正しい人間ではあるが、二人の人生に對する主張や態度が或る程度より先きは、殆ど根本的に別々なものであり、思想の距離が不幸にして餘りに大なるが爲めである。(從つて、後に二人が、俊一が常に衷心より切望するが如く、單に肉體的なる親子といふのではなく、精神上思想上の同志として互ひに相接近し、提携することが

起らぬ限りは、今後の俊一の行動に對して父は何等の義務をも責任をも有せざると同時に、父の言動に對しても俊一は全然沒交渉なることを念の爲めこゝに闡明しておく。）——彼れの家族はみな自ら努力して生きてゐる。滿七十の老母も外國語と農業とを若き人々に教へ、畫家たりし姉は今は印刷術を研究の傍ら星製藥の圖案部に奉職し、妻は『ルリーロ』音樂學校を計營し、さうして一同の住みつゝある小日向臺町の家は、日本少年寮の分寮として使つてゐる。日本少年寮といふのは少青年の純にして須臾もやむことなき生長力を正しく保護し發達せしめむが爲めに小石川雜司ケ谷に設けられた愛の寮舎であつて、日露戰爭の直後、一般の大人に愛想をつかし、未來の希望は唯、子供のみに懸け得らるゝことを信じた奥宮加壽刀自が建てられたものである。寮生の數はいつも大抵三十五人前後ある。今の場所に立つてからでも既に十七年になるので、其處から小學校に通つた子供の中からも、既に世の中に出て活躍してゐる人達も多いし、大學教育を卒つて後、そのまゝ寮に留まつて一緒に生活してゐる人々も相當にある。其れ等兄貴株の出身者と一緒に我々は大正十一年世界平和記念の日に際し、其處に『ルリーロ・デ・ラーモ』『Lullo de l'Amo』即ち『（人類）愛の搖籃』なる思想團體を組織し、事實上、すべての事業の經營を其の手に移した。斯くて、表面上は日本少年寮に附屬しつゝある『ルリーロ』の經營事業は、目下寮舎の外に、少年少女の爲めの音樂學校あり、化學研究室、竝びに生物學研究室があり、また其の化學研究室の擴張として、石井、相良兩學士經營の石井化學研究所があり、其處にて産出せらるゝ色素の類は既に日本よりアメリカの製品を全く驅逐しドイツ製品と伍格の地位にある。——

斯かる背景と基礎の上に立ちつゝ俊一は、約三年前革命のロシヤを逃れて日本に移住して來たゴロフシチコフと精神的に結び付いた。二人は深く交はれば交はる程、其の思想に、趣味に、氣分に、殆ど奇蹟的とも云ふ可き一致融合を見出した。ゴロフシチコフはロシヤにて、土木、建築、竝に採鑛冶金の技師の資格を持つてゐるが、彼れの生命とも云ふ可

きは其の實に限りもなく鋭い發明の才能と獨創の力であり、而してまた、彼れが我れ等人類生存の目的を如何に理想的に見てゐるかといふことにある。――其れ等の考へを短かく表示しやうとしたのが、此の篇の最初に揭げたる『我等の祈願』でもあり、またこの『はしがき』に從ふ所の本文でもあるのだ。

發明獨創の能力を害はざるやう、凡そ如何なる外國語にてもそれをば學習することを見限りたるゴロフシチコフを助けて、彼れの種々なる發明を完成せしめ、其れによつて、我れ等に共通なる理想の實現を現實的に促進せむが爲めに、京大理學部の教職を辭して、俊一が少年寮に歸つたのは今から約一ヶ月以前である。歸京後、俊一は、已れ等の事業の趣意と、人生觀とを普く未知の人にも通達せしむが爲めに、『子孫崇拜論』を單行の普及版として世に出したが、其のはしがきの中に彼れは已れ等の態度を大略次ぎの如くに述べた。

著者は十四五の少年時代から卅二歲となる今日まで十八年の間を、いつも故らに人間の實生活と出來るだけ交涉無き純理問題に趣味と研究との眼を向け、所謂『學究』的立場を固守して生活の大半を研究室と教壇の机の傍に送つた。いまは然し、其の半隱遁的なりし、所謂『學者的態度』なるものゝ、既に過ぎ去りたる前世紀の遺風にすぎざることとを悟り、自己の生涯をより眞劍なるものとなす可く、『大學』と稱する湖の水面を去つて、大衆の波瀾渦卷く社會の外洋に乘り入らうとする。たとひ、發明の天分豐かなる盟友、露國技師ゴロフシチコフがあつて、我れ等はいま諸共に『自然律研究所』の建設に力を注ぎつゝあるとはいへ、我れ等が今より造らむとする『研究所』たるや既に湖上の遊覽船には非ずして、如何にそれが貧弱であり粗雜であらうとも、それは全人類の據る可き道と全人類の福祉とを求めむが爲めに未知の太洋に航せむとする一探檢船であり、『SANTA MARIA』である。

我れ等は一部の識者に反して、我れ等人類の今後の進化向上は、たゞ、聰明なる理智を根柢とする眞の物質文明の發達のみによることを確信し、而して我れ等自らもまた、其の『自然征服戰』の鬪士として、先づ我れ等が終ひに完成したる『逆燃燒』の原理によつて火焰の使用樣式に一般的革新を加ふると同時に、人類の手を以つて造らるゝ他のあらゆる器具と機械とにも、能ふる限りの改善を計るであらう。――我れ等は地上と地下とより、あらゆる汚物と共の中なる寄生蟲病原體との殲滅を圖ると共に、また人間居住地の上空より、あらゆる煤煙と惡瓦斯とを除去するであらう。――我れ等は、もしも人類が理智と究理的努力とによる道を步むならば、今より十年二十年後の世界より見たる現代文明の未だ殆ど兒戲に類するものなることを信じ、全人類の未來と子孫とを祝福する。

多くの親切なる友は云ふ「脫線せずして大學に留まれ」と、著者は答へる「今までの恩義は忘れないが、孵化したる雛はつひに卵殼を脫せざる可らず」と。此の書は殼を出でたる雛鳥が大氣に向つて發したる最初の聲であり、また物質文明の利器たる印刷術の舌を借りて、未知なる兄弟姉妹の間に我れ等が新たなる知己と同志と協働者とを得むが爲めに著者のなしたる述懷でもあるのだ。……と――而して本稿は其の『雛鳥』の發したる第一聲である。

もしも我れ等をして忌憚なく述べしむるならば、我れ等の強みは、我れ等が只單に理論と思想とのみならず、曲りなりにも其れ等をば實現するに必要なる實際的の手段と方法とを握つてをることにある。我れ等は昨年以來、未だ四五の專賣特許を取つたに過ぎぬけれども、我れ等に時と資金との餘裕さへ與へらるゝならば其の數を今後の一年間に十倍し二十倍することは決して困難な事ではない。（但し斯く云ふ我れ等自身は結局に於て『特許』などゝ稱する病的資本制度の不必要となる如き社會の一日も早く實現せられむことを衷心から祈つてゐるものなのだ）――我れ等は我れ等の事業をば敢て、コロンブスのアメリカ探檢に比し、我れ等が建てむとする研究所をば其の乘船たりし『サンタ・マリヤ』にたとへた。誇大妄想の嘲罵は素より承知の上でのことだが、我れ等自身の、自己の仕事に對

する自信は強きが上にも強い。――我れ等には我れ等が理想實現の爲めに必要なるものはすべて何でもある。只、不幸にして缺けて來るのは、金といふ奴ばかりだ。然しそれも如何にしても得られないといふのなら、無理に求めなくてもよい。我れ等は自分らに金といふものがなくても生存し、仕事し得られる樣な新しき組織を發明するばかりである。

正しき人々すらも、金のみを最後の心賴みとして生活すべく余儀なくされ、金さへあれば、如何に無智、無德、無理想、無能なる人間と雖ども、世の理智と德操と理想と才能とのあらゆるものを蹂躙して、たとひ横暴を逞しくするとも自他共に怪しまざる如き人類社會の現狀は、如何にそれをばヒイキ目に見るとも、決して健全なる制度であるとは云へない。實に悲しむべくも、余りに金のみの威光の强き世の中である。然し、如何なるものによつても奴隷とさるゝことを絕對に肯ぜざる我れ等は、たとひ如何に苦しくとも、錢の前にも決して我れ等の頭をば下げぬであらう。我れ等は、たゞ、金によつて使驅せらるゝに非ず、自己の理想實現の爲めに自ら金を使驅しつゝある如き人々のみに檄して其の協力を仰ぎ度く思ふのみである。

後に來る本文の記述によつても知り得る如く、俊一とゴロフシチコフとの二人は、すべての既存せるあらゆる『宗教』をたゞ過度的性質のものとしてのみ肯定する。たとひ我れ等は、其れ等の『宗教』を、人類が今日までの進化を遂ぐる爲めには、各々或る意味に於て必要なりし、(云はゞ蝌蚪の鰓や尾の如き)ものなりとは考へ、また、部分的には、幾多の取る可き內容の含有されつゝあることをも知るとは雖ども、人類今後の進化向上を、より健實ならしめむが爲めには、敢て、其れ等を放棄せむことをすら提唱する。

我れ等は、只單に、既成の「宗教」のみならず、一般にすべてのドグマてふドグマに對して絕對に不肯定の態度を取

る。さうしてそのドグマの一種としての『社會主義』に對してもやはり、今日までに提唱され或ひは實行されたるすべての形に於て、其れが人類今後の進化向上の爲めに、據るに足るべき基調であり得るものだといふ信頼を持ち得ない。トーマス・モーアの夢みたるユートピアの如き、それがたとひ實在し得たるものと假定したる場合に於ても、我れ等はなほ幾多の改革すべき缺陷を認める、――何は兎もあれ、凡ての『反動思想』的要素は、たとひ其れをば或る目的貫徹の爲めの一時的手段としては肯定し得るとしても、本質的には甚だ望ましからざる不純物である。――ロシヤのソヴィエット制度に對する我れ等が批判の言葉もまたそれと同じである。

所謂『國粹主義』なるものは、其れが既存せる或る宗教と結び付きたる時にも、または結び付かざる時にも、其のこと自身として、既に影の淡き前世紀の遺物である。全世界の『國粹主義者』諸氏よ！　よろしく心眼を開いて、事實の眞相を事實そのまゝに直視す可きである。事情と程度とは勿論まち／＼であらうけれども、「よい人間はよい人間、惡い人間は惡い人間。よい物はよい物、惡い物は惡い物。よいことはよいこと、惡いことは惡いこと。……」要するにそれだけの話しで全てが充分にわかるではないか？　何故なればそも、諸氏は人々の屬する族籍によつて議論を十把一からげ的に左右するの必要を感ずるのであるか？

機械によつて多量製作的に産出せられたる物品の場合に於てすら、なほ、絶對的なる均一は求め得られない。況んや、生き且つ自由意志を有する人間の場合に於てをや――。地圖の上の色分けと、國際間の醜關係とは、なほ、しばらく、未だあるがまゝに放置するにしても、我々は須らく、まづ、我々自身の頭の中より、『日本人』、『ロシヤ人』、『支那人』、『朝鮮人』、『アメリカ人』、『イギリス人』……乃至は『東洋人』、『西洋人』……等の、十把一からげ的なる、民族――、國家の差別的概念を滅却して、價値、批判の究極的單位を、一つの個人々々にまで致す可きである。

最近の時事問題から實例を擧げて云ふならば、國としてのアメリカが、『日本人』なるものを十把一、からげ的に考へて、『排日法案』を制定したのは、無論、言語同斷なる非道事であるのだが、然し、さらばと云つてまた、アメリカ人のすべてに其の罪があるもの丶如くに思ひなして、日本在留中のアメリカ人を十把一、からげ的に冷遇したり、或ひは、品質と價格との如何かにゝはらず、アメリカの製品を十把一、からげ的にボイコットする如きは、やはり同じ樣なる過ちであり謬見である。アメリカ人にも惡い人間がをると同時によい人々もゐ、惡くて高い商品があると同時によくて廉い品物も產出されること、恰かも日本人の間にもはなしのわかるよい人間もをれば、まるでわけのわからぬ下らぬ連中もあり、廉くて立派な商品もあれば高いだけで使用にも堪へぬ『喰はせもの』もあると全く同樣である。現に先日、アメリカに歸國せむとする同胞の足許を見拔いて、船室の買ひ〆めをやつてボロイ儲けを貪りたる人間の如きは、たとひ日本人にもせよ、アメリカから排斥さるゝまでもなく、先づ我々が排斥してしまふ可き代物であるだらう。

我々はどこまでも、十把一、からげ的なる價値判斷をやめなければならない。さうして、其れは何も、『國粹主義』、『民族」國家對立主義』等に關して云ふ可きことであるばかりでなく、また實に今日の問題として喧しき『階級對立主義』『階級』、乃至、『經濟鬪爭主義』……等に就ても同樣に考へらる可きことであると信ずる。再び附言するが、我れ等の主張は極めて簡單だ。『希くは、價値批判の究極的單位を、各自の屬する國籍、階級等の如何を超越し、個人そのものに就てやつて行つてくれ』といふことだけである。

『國粹主義』、『軍國主義』、『武斷鬪爭主義』……等の氣分は我れ等もまたよく之れを解す。俊一は、十才前後より二十二才に至るまでの間、完全に此れ等の氣分にひたり、此れ等の氣分に生きてゐたこと、既に上にも述べたるが如くである。然し今は思ふ、それは十二歲の子供、乃至は二十才未滿の子供にのみ恕し得べき、原始人類的なる氣分であると。

會津落城の際、白虎隊の青年武士等が、妙齢青春の花を飯盛山上の露と消してしまつた史實はいつになつても、其のしほらしさと壯烈さとを失はないであらう。然し、それは、どこまでも慶應何年かに起つた史實としてのはなしであつて、徒らに其の物眞似を大正十三年の今日になつてやつて見たとて、決して猿芝居以上の價値はあり得ない。前に述べた俊一の外祖父はその時官軍に加はつて奧州征伐に赴いてゐたのだが、戰亂平定の後、朝敵側だつた二本松藩の家老丹羽家の女を娶つて妻とし、其の間に生れた長女が即ち俊一の母である。もしも門閥、傳統尊重主義的の昔き方をするならば、その外祖父は、何百年か前に、何々天皇の第何皇子として生れられた篤如親王といふのを祖先とする『税所家』の本家の當主だつた。其の親王が、九州は日向、大隅の邊に下降され、霧嶋山の近くに居を定めて、あの地方の國税を取り立てる役を勤められたので『税所様々々々』と稱せられたのが、後に其の一族の家名となつたのだ。税所の一族はあの邊に城を築いて、島津の先祖なんかとも常に戰つたが終ひに利あらずして、其の本家は九州を縱斷して、中國にまで移り、そこでまた城を築いて、一時は相當に威勢を振つてゐたのだが、たしか四國の長曾我部か何かに亡ぼされ、後に武田姓を名乘つて池田藩に仕へ、王政維新となつてから、祖父が再び税所姓に復したのだ。もしも、我々が既往といふものを氣に病んで、「敵だ、味方だ、仇だ、讐だ、……」と一々神經を尖らせるならば、此の小さき日本の島國は如何になほ一層、住み心地惡しく狹苦しき場所となるであらう！　然し今の世界も、幾分かそれに似た樣なことがないだらうか？——僅か六七十年前の昔までは此の小さな島國の日本の中だけでも何十、乃至何百といふ『國』とか『藩』とか云ふものがあつて、それ等の小國家の所屬者は所謂『農、工、商』階級に屬する人々はさうでもなかつたらうけれども、各々生れぬ前からの異人種であり、仇敵であるかの如くに考へては、殆ど笑顔一つ交換せず、日夜虎視眈々と神經を尖らせて互ひに睨め合ひをしてゐたのだ。然し、それが僅か半世紀もたゝざる中に、今はどうであるか？　例へば此の俊

一などの頭の中では、互ひに仇敵關係だつた祖先の出生地であり『祖國』ではあつても、鹿兒島藩や池田藩と二本松藩との差別など、云つて見たつて、殆ど三毛猫と斑猫の差別程にも感じられない。昔は昔である。其の當時のことは其の當時だけで足りる。もしも祖先が首狩りをしてゐた頃のことまでに氣を腐らせてゐたら、自分自身のいのちをどうし得やうか?!　さうして、半野蠻時代に住んでゐた頃の自分らの祖先のやつてゐたことに下らないと思ふことがあつたら、さういふ下らない頭には、今の自分達もならぬ樣に氣をつける事だ!!　我々の祖先の中で、氣のきいた人間達は、恐らく我々が餘りにもグヅ／＼といつまでも昔乍らの舊習や傳統に囚へられてゐることを、もし彼れ等の靈あらば、却つて腑甲斐なく殘念に思つてゐるにちがひない。

全世界の國粹主義者よ!　もういゝ加減に、子供だまし的なる喧ぎはやめやうではないか!地球は大きいと云つても一晝夜の中に一回はグルリと廻轉するのだ。その少しばかり大きな獨樂の如きものゝ上に、お互ひの共同生活を營んでゐ乍ら、我々は何故もつと打ち解けてすべてのはなしが出來ないのであらうか?　地球とは、要するに、我々が宇宙の空間を旅するに當つての乘合ひ船だ!　もしも人々が少しばかりでも、もつと心を大きくして考へたならば、彼れ等は自分らの利害得失、禍福災禍……といふことが、全人類、全地球的に一致、共通してをるものであることを容易に悟り得るだらう。恰かも數十年前まで互ひに相仇敵視して爭つてゐた日本內地の諸領諸藩の利害が、實は、全日本的に共通であり一致してゐたことを、今は明かに悟り得たるが如く。

地上に人類の出現して以來、最早や五十萬年の歲月は經つた。我々はもういゝ加減に、狼の本能と道德から解脫す可きである!　地球をば、我れ等人類の住み心地よき居場所とし、乘り心地よき『乘合ひ船』とする爲めに、爲す可く爲殘されたる仕事はまだ／＼限りもなく多い。我れ等は須らく、先づ我れ等自身をより賢明になす可きである。互ひに他

のものを奴隷とすることをやめ、他のものを殺戮することをやめ、諸共に力を協せて、たゞ自然の同化、征服に努力す可きである。全人類の、而して、民族、國籍、階級……等を超越して一人々々の人間の、向上と幸福とは、唯一つに、此の道によつてのみ求め得られる。——

斯く我れ等は確く心に信ずるが故に、今この東洋の一角より力限りの聲を擧けて叫ぶ、

全世界の國粹主義者よ！　もういゝ加減に子供だまし的なる騒ぎはやめやうではないか！　と。

本文

人類は今まさに一大轉化期にある。

世界大戰爭——それに次ぐ露、獨、墺三大帝國の革命——………——而して終ひに今日に至る其の後の世界的動搖不安狀態は、人々をして否應なく、すべて其れ等の醒怪事の由つて來る所以に就て考へせしめる。

人々は古より今日に至るまでの間に幾多の聖人哲人によつて說かれたる世界平和に關する諸說を、今更らにまた吟味し考慮し直してゐるが、然し、兎にも角にも、其れ等の平和論が今次の世界大戰を豫防し防遏し得なかつたことは事實であり、さうしてまた人類が（然かも其の中の最高文化を誇る部類のもの共が）恰かも互ひに爪牙を鳴し合ふ豺狼の群の

如くに相爭つて殺戮し合ひ、敵も味方も共に、最も强き、最も優秀たる、最もよく自己の個性と意志の力とを發現し得る、選び出されたる人々の數百萬を殺し且つ屠らしめたといふことは殘念乍ら事實である。ドイツ人も死んだ。ロシヤ人も死んだ。フランス人も、イギリス人も、イタリヤ人も、セルビヤ人も、オーストリヤ人も、ボルガリヤ人も、アルメニヤ人も、トルコ人も、日本人も、支那人も、またアメリカ人も、……………何百萬となく殺戮の犧牲となつて仆れた。浮城の如き巨船は種々なる國籍に屬する數萬の人々を乘せて、日々海底に沈められ、都會も田園も、凡そ其の中に滅せらるゝ全人類の合作たる多くの樣々なる勞作と共に、あとから〳〵とおしげもなく無慘に、破壞され滅却せしめられた。

然かも此れ等の大破壞を豫め防遏すべき可能性はなかつたのである。而して之より以後に於ても、また然るであらうか？……………

……………………………

『二羽の雀は一錢にて售るに非ずや、然るに爾らの父の許しなくば其の一羽も地に隕つることあらじ。爾らの頭の髮また皆かぞへらる。故に懼るゝ勿れ爾らは多くの雀よりも優れり』とキリストは言ふ。（馬太傳、十章）――此の表現をもしドクマ的なる言語から、全人類的、超國家的なる言葉に飜譯するとすれば、我々は大體、次ぎの樣な答へを持ち得る。すなはち、人類の或る一定なる社會組織に對しては、恰かも大能者の攝理そのものによつて定められたるが如くにも規則正しき、或る一定なる犧牲的死滅者の數が定まつてゐるのだ。ボツクルは彼れの『英國文化史』の中に、例へば、或る範圍の社會組織内に於ける年々の自殺者の數の如きも、實は自殺者自身の自由意志によつて定まるのではなくて、寧ろ或る歷史的社會的法則の支配によつて定めらるゝものゝ如くであると述べてゐる。

此の事より、疑もなく、次ぎの如く推斷することが出來ると思ふ。則ち、我々の行動なるものは、一つの國家の、而して全人類の、其の時々の社會組織を基礎とする所の歴史的法則によつて支配され、さうして其れ等の基礎となる所のものは、また、其の或る範圍内に限り一般に通有せらる人類の思想である、と。

一つの新しい思想が人類社會に生れ出る毎に、それは人々の間に新しい相互關係をつくり出す。例へは、もし『強食弱肉』を肯定し、『力は權利なり』と斷ずる如き思想が人々の頭を一般に支配したとすれば、それからは、明かに、早晩、人血の海が現ぜらるるであらう。——キリストは之れに反し、愛の教へを說いて、「己れの隣人をも己れ自らの如く愛す可し、否、己れの敵すらをも、己れ以上に愛せよ、」といふ思想を人類に與へたが、其の後約二千年に及ぶ人類鬪爭の歴史は、それがまだ今の人類には力不相應なる要求であつたことを示してをり、さうして其れは終ひに最近の世界大戰をも豫防するだけの力は持たなかつた。實に今次の大戰は、キリスト教國とキリスト教國との間に於て、戰爭が益々、其の虎狼的要素を增大して、實に日露戰爭の時などに比し、幾十倍も惡辣に、無慘に行はれ得るといふことを如實に示したのだ。

然らば『社會主義』の思想の如きはどうであるかと云ふに、これもまた他のあらゆる從來のドグマ的教義と同じく、其れが過去及び現在を通じてあらはれた如何なる形に於ても、不幸にしてなほ未だ全人類に安定を與へるだけの能力を持たぬこと、我れ等が目前に見るが如くである、すなはち、如何にしても否定することの出來ぬ明かなる事實は、我々人類の社會にはまだ、全人類を唯一つの全一なるものとして、結合し、融和せしめ得る樣な思想は唯**一つも**ないといふことである。各個人を、而して全人類を、步調を一つにして共通なる共和的方向に行動せしめ得る樣、一つに結合せしむるセメントはまだないのだ。

然し乍ら、それにも拘らず、人間は創造の一つの典型としては、全て一つにして同じである。さうしてまた彼れ等の各々が、思索の進歩を遂げ得る能力を持つといふことも明かなる事實である。之れによつて之れを見れば、全てを全一なるものとして結び得べき、共通なる連結の端緒が何處かに必ずあるといふことは、も早や疑ひないのだ。

『家庭』、『血族』、『國家』……等は何れも各自それ〴〵に既に一つの全一なる人間の集團を形成してをる様に見えるが、然し此れ等の集團には、其の全一なることの爲めにふさはしき堅實性、耐久性の缺けてゐることが、もう何處ともなくシミ〴〵と感じられてゐる。生活の便宜、經濟の安易、……といふ様な根據はあるが、然し、集團をば構成する各單位の自由意志から湧き出る深き興味の一致合體といふことは見られず、其れ等の殆どすべてが自發的の希望熱求によつてには非ずして、寧ろ或る種の必要條件に迫られて發生したる集團であるのが常である。

何處の國家にも、まだ理想的なる組織などは見られない。ヨーロッパ並びにアメリカをはじめ、多くの國々は、主として黃金の獲得を以て、其の存立の基礎とし目的とし、『富國强兵』てふことを各自の標語としてをるが、然し、これが正しい道ではなく、國家存立の緣起が別のものでなければならぬいふことは、疑ないことの様に思はれる。現代に於ける全人類の進路が誤つてをり、邪道に踏み入つてをるのだといふことを指摘したトルストイの言葉は恐らく正しいであらう。然し、それならばトルストイ自身が敎へた道は正しいかと云へば、それもまた同時に間違つてゐるかも知れないのだ。

我れ等の信念に從へば、生命は日に夜に進展し、向上し、人類は、各種の道の指針としての種々なる天才を生み出す。すなはち、目下當分の間にあつては、所謂『人類の進む可き道』とは、要するにそれをば指し示す天才的指導者の敎への中より、或る一つを選擇するといふことに外ならないのだ。――故に其れ等の善惡正邪はすべて過渡的、相對的のものにすぎず、決して絕對的ではあり得ない。人間の社會組織、其の全人類的なる相互關係といふものは、人間そのもの

が、究極なる完全に近づきたる後に至つて、はじめて完全なるものとなり得るであらう。
完全なる社會組織を建立せむか爲めには、先づ第一に智識（其の言葉の最も廣き意味に於ての）が必要である。自然律と其の秘密とを知ることが必要である。但し此處に云ふ『自然律』とは、單なる所謂『自然科學』上の法則といふのではなくして、例へば人間の歷史、人間の心理……等、所謂『精神科學』の領域に屬する他のあらゆる自然の法則と力とをも、『自然科學』のそれらと同じく、包含させての意である。
自然の力をば人間の自由意志に從はせることが必要なのである！　人間を人間に屈從せしめる型式が必要なのではない!!　然るに從來說かれて來た所の、而してまた新たに提唱されつゝある所の『新しき社會組織』とは、何れもみな、只單に人間を人間に屈從せしめる爲めの、一つの新たなる型式たるに過ぎないではないか！
數千、數萬、乃至數十萬年の間に、人類は自己の智識をばも早や可成りの程度にまで蓄へた。野蠻なる半獸的存在から、彼れ等は既に兎にも角にも全宇宙をば其の梗概に於て、大略、理解し曉察するだけの頭ある現代文化人の域にまで進化向上して來たのである。然し宇宙は依然として、其の現象界の詳細に亘つては、人類に取つてまだ興味ある謎であり、人類今後の幸福と成功と進化とは一つに懸つて此れ等の謎を彼れが如何に解き得るかといふことのみにある。さうして人間の探究心と智能の獨創力、而して其の自然なる發育は、自然律の作用の發現たる全ての此れ等の秘密をば漸次に開發して行くであらう。
我れ等に取つては、他の多くの自然律、（例へば重力の法則の如き）と同樣に、人間の智能が限りもなく自己の發育を遂げて進化する性質を有するといふことは一點の疑ひもないことである。言葉を換へて言へば、人間の智能が、全てのありとあらゆる宇宙の法則を（其の一部は既に含まれてゐるが、一つも餘すことなく殘りの全部をも）其の理解の中に收

收し包含してしまひ、終ひに最高なる全理智の理解の域にまで到るといふこと、則ち、法則の法則を知り、所謂全智全能なる神靈の理智にまで達し得るといふこと、或ひは更らに言葉をトルスイトに借りていへば、我れ等自身の中に生くる神靈の（トルストイば此の言ひ表はし方を只、人間存在の道德的進歩の意味に於てのみ用ひたのであるけれども。）漸進的發現を見るといふことには何等の疑ひもないのだ。

終ひに人類が自由思索的なる存在に到達するといふことには疑ひがない。禁欲主義は其の言葉の最も廣き意味に於て全て放棄しなければならない。凡そ人類の思索の自由をば阻止し、障害し、灰滅せしむる他のすべてのものと共に放擲しなければならない。もしも然かすならば、其の結果として、少數なる個々のではなくて、數百萬の人々が、各自におの〱其の自由なる智能を啓發し、不要なる二次的意義のものゝ全てをすてゝ、たゞ自然律と其のあらゆる種類の發現とを究め學ぶの道にすゝみ、すなはち、我れ等の眼前には忽ちにして數百萬の天才が出現するであらう！

種々なる既存の社會團體の傍らに、數百萬より成る大なる集團が、『究明と獨創』なる旗印の下に現はれ出るであらう。かゝる集團の自然なることの證據は、第一にまづ小兒のすべてが此の集團に屬し、而して大人等は、いはゞ彼れ等がもつて生れたる究明心の繼續としてのみ見らるゝことである。

我れ等は此處に於て、彼のダイナモの發明者たる巴里の一勞働者グラムや、或ひは蒸汽機關の開祖たるジエームス・ワツトの如き人々を想ひ起さゞるを得ない。彼れ等は決して『學者』でも何でもなかつた。然し彼れ等は、己れ等よりもより強力なる學者や哲學者の群れに、彼れ等の業蹟を模倣することによつて進む可き道を見出させ、また世の一般の大衆には、彼れ等の例に從ふことによつて、如何なる生活の狀態の下にあつても、また如何なる社會組織の下にあつても、明確なる觀察と獨創力とを以て生き得るの可能性と理法ありと云ふ確信をば接種した。—

獨創力活用の理法を自覺することによつて、世の一般的大衆は、全人類のあらゆる社會團體（其の時までには既に二次的輕き意義のものとなるだらう所の諸團體）を包含する一大集團を形成し、其の各構成分子をして、恰かも骨肉の兄弟姉妹なるかの如き關係に結び付くるであらう。然し其れと同時に、從來既存の宗教や、社會主義……等は、（たとへ其れ等はすべて、人類が一度は通過しなければならぬものであつたのだが）今は既に最後の宿場として、恐らく否應なしに後方に殘されてしまひ、其の後の人類は己が進む可き道をば、ましぐらに一直線に、向上し進み行くことであらう、いはゞ新しき、自然のまゝなる全人類的宗教が出現するのだ。全宇宙的宗教、智識的宗教、最高なる理智の宗教！

此の宗教の祝祭日としては、人類が自然を征服したる、（或ひはもつと適切に云へば、自然をばより多く自己のものとして同化したる）記念日が選ばれる。此の宗教の爲めの神殿とは、人類天賦の才能（或ひは、人間の心の中なる神聖の發現）と自然力に闘し其れが聚集し蓄積したる智識の結晶、而して其れが贏ち得たる思索の勝利……等をば、表示的に眺め得る樣な場所である。——我れ等は法衣と薰香と、供物と燈明と經文……等によつて祭壇の中なる「御神體」に奉仕するのではなくて、實驗者と試驗管と、顯微鏡、望遠鏡、微動計…………等を以て宇宙の理智なる神に見ゆるのである。

斯かる宗教、斯かる神殿……のみがたゞ、全人類を一つの全一なる協調的なる集團として結合することが出來る。何故なれば、此處に於てのみは、すべての異なりたる國家、異なりたる民族、異なりたる階級に屬する人々の利益も全く一致して相反することがないのであるから。

斯かる神殿の中より、其の中に富と資力との蓄積せらるゝに從ひ、人々は人間生活の新たなる意味を汲み上げては其れを活用するであらう。人間生存の便宜、卽ち眞の文明、（一部の人間が他の人間を奴隷とすることによるのではなく、人類全體が彼れ等の自由意志によつて同化したる自然力を便役して計る所の文明）を築き上げて行くであらう。たゞ此

の時はじめて、人類は、既に自然にして何等の無理もなき道によつて、相互に兄弟姉妹となることが出來るのだ！

最も肝心なのは、自然力を人間の自由意志に從へることであつて、決して〳〵人間を人間に屈從せしむる爲めの型式を編み出すことではない。然るに從來、並びに現代に於ける社會組織は、たとひ其の中の如何に所謂「新しき」ものにしても、それらは只單に、人間を他の人間に屈從せしむる、乃至は、特に深い內的連結なくして人と人とを相互に結び付けむとする新しき樣式であるにすぎない。

諸君よ、試みにはじめて空に飛ばむとする飛行機を見る可く一ヶ所に集合したる群集の心理を想見せよ。小さなる職工も、名聲高き學者も、權勢ある大政治家も、武威赫々たる將軍も、共に肩を並べて只一樣に、恰もみな平等なる兄弟なるかの如く天眞爛漫なる心を以て、彼れ等の他の兄弟の一人が、神秘なる自然の上に贏ち得たる勝利をば聲をあげて心から歡喜するのみである。此の時、彼れ等は共に理智の赤子であり、互ひに理智の兄弟であるのだ！

あゝ我れ等をして最高なる理智の神殿を建てしめよ！　而して數學者、建築者、心理學者……等をして、彼れ等の獨創力により、ある一定の法則に從つて、其の場合々々に適當なる殿堂を建立し、其れに特殊なる形と色彩と思想とを與ふることにより、凡そ其れ等の堂に入るものはすべて、己が利己心を失ふが如くに工夫せしめよ。……恰も、從來の『禮拜と奴隷心』の神殿中に於ても、或る程度まで然るが如く、

凡そ此の神殿に入るや、人々は忽ち己が思索の疲れと病患とを治せられて、其の思慮を健全なる方向に向はしめられ、從來の『奴隷心』的神殿の中に感ぜらるゝ如き、悲觀、憂愁、苦惱、奴隷的なる卑下の念等は全く其の影を消し、

人々は純にして快き自覺、自足、安心、立命の念と、目にて見ることを得、手にて觸るゝことを得、然かもなほ限りもなく崇高偉大なる宇宙の心とによつて各自の心を滿たされる。人々は其處に於て、己れの身の微々として取るにも足らぬことなどを考へて悲觀するの要もなく、また他の世人との苦惱・軋轢に就ても全てを忘れることが出來る。さうして、其れ等の、一點の陰影もなく霽れ渡りたる眞に健全なる心からは、如何なる豫言者も、如何なる妄想者も未だ甞て夢想し得られざりし如き思想と事物の形が生れ來るであらう。　を

大衆の中なる全ての各個人は、各自の獨創、各自の觀察、神秘なる自然の上に贏ち得たる各自の勝利をば、各自おの／＼の獻納物として此の神殿に携へて來る。言葉を換へていへば、自然律研究の結果は此の神殿に全人類のすべてのものとして捧げられるのである。(すなはち、此の時になれば、も早や發明權とか專賣特許とか云ふ樣な下らぬことはなくなつて終ふわけだ。)

此の新たなる神殿に入る時、人々は誰れでも、彼れ自身が實際、最高なる理智に到達するの道を辿りつゝあることを悟り、また實感する。さうして、唯かゝる道のみによつて最高なる理智には達することが出來るのであり、此の外にはたゞ一つの道もなく、而して、決して有り得ないといふことを理解する。

此の新たなる神殿の中に於て、人々は誰れでも、最高なる理智の神の姿を明かに認識し、さうして、彼れが全宇宙を司宰する所の、而して全ての生命と人間の存在とにも適用されつゝある所の、諸法則を究むることによつて、此れ等の宇宙の諸法則の外には、たゞ一つの法則もなく、所謂、人間の世の特別なる法則などゝいふ如きものの決して有り得べからざることを明かに悟る。

從來の神殿は、我れ等人類が更らに一段の向上を遂げて完全に近づく爲めに必要だつた過渡的性質のものであつた。

さうして其の入口には、

「惱み悲しめる者よ來れ、

吾れ爾らを慰めむ！」と記してある。

此れ等の舊き神殿には、自己の身の罪業深きことを感ずる人々、自巳の身の微々たることを感ずる人々、念佛三昧に入り度き人々、……乃至は、割のよき冥加を夢みる他力本願の人々等が參拜す可きである。さうしてまだ相當に長い歲月の間、人類にはかゝる神殿も必要であるだらう。

新たなる時代の爲めに建てられたる、新たなる神殿の扉には、

「天に在す爾らの父の完全きが如く、

爾らも完全かるべし！」と書いてある。

さうして、此れ等の新たなる神殿には、たゞ、最高なる理智の神の容姿に像りて創造られ、さうして今現に、其の神に自ら近づきつゝあることを自覺しつゝある自由人のみが入つて行く。

此の扉の上なる言葉は、人々を全智全能なる神のもとにまで近づく可く招き、神が天地創造に際して知りゐたることの全てを知り、彼れの法則の全部を知り、——而して終ひに、彼れの完全きが如くに、自らも完全くなることをば、勸めてをるのである。

—（終）—

一九二四・六・二二　東京、小石川、雜司ケ谷百十五　日本少年寮內『ルリーロ・デ・ラーモ』に於て、

何を恐るゝか日本

澁川玄耳

米國に報復を企てざれ▲日本は大民族たることを自覺せよ▲自主の精神を振起せよ▲國語を尊重せよ

狼は狽を俟ち狽は狼に倚らなければ歩かれない、日本は左樣な狼狽國では無い、立派に自主特立、濶歩獨行の出來る國である。

▲日本は世界の大民族

堂々六千萬の國民は殆ど純一無雜と謂ふべき一民族の聚合ではないか、形勝の地區を占めて舊い歷史を有し且つ新しい文化の國でもある斯樣な國は世界の何處にも例は無い、如何にも惠まれた誇りある自ら賴むに足る國たることを何故自覺しないのか、結合の堅い一民族の聚團としては英佛獨墺の孰れよりも日本は大きいのである、米露の二國は一國の人口の呼聲こそ幾分我に優つて居るものゝ彼等は幾多民族の聚合に過ぎないのである。支那、印度の如きは民族として我より大きなものがあつても其結合節制能力の點に於て遙かに劣る者は亦た決して我より大きな者として算ふるには足りない。

此の大きな賴みある大きな日本民族が世界に何を恐るべきものがあるか、何を憚つて他國の機嫌取りに汲々としてゐるか、米國の思はくなど何の氣にすることが有らうぞ、また周章しく有色人種の聯合など、今更新たた人賴みを企てることが要らうぞ。

▲亞細亞聯盟は陋說

支那や暹羅や其他の亞細亞人を誘導して日本が其の盟主となつて、白人に當らうといふのは夢中の夢だ、米國の機嫌さへ損ぜねば圓滿な國交が繼續されるものと誤想してゐたのが此度みじなことになつたのは、恰も金、元に對する優柔なる南宋小朝

廷の失敗だ、併し對米外交に於ける柔軟、王倫は歴代の外相や、澁澤、金子の徒のみでは無い、維新以來外國崇拜熱に浸染して來た官民が共に分擔せねばならぬ責任である、國民無自覺の罪である。事大心依賴心が産んだ骨無しの畸兒である。

▲自主心を振ひ起せ

米國の機嫌は取り切れなかつた、さん〴〵取つて見た擧句が今日の樣だとすれば、支那や暹羅や其他の國の機嫌とてさう容易に取り續けられるものでないと思はねばならぬ、國は國毎に事情が異り希望が異る、おの〳〵他國とは一致す可らざる利害關係といふものが自然に生じて來るものである、顏の色が白くないといふ單一の共通點が有つたとて、日本と他の亞細亞人とが結合して白人に當られるものでは無い、日本が之を指導し利用して行かうといふことは亦たやはり憐れな依賴心から起る空想である。

依賴心を有つてはならぬ、日本は自己を頼み自力を以て毅然として立つて行くだけの覺悟を定め、そして總てを準備しなければならぬ時に遭遇したのである。茲に個人がある、其の生活を他の援助や好意、同情や恩惠に依つて支へようとして居たなら、誰も其れは不安だ、不確かだ、意氣地なしだと卑むであらう。之に反して其人が自主の決心を有し勤勉且節儉であつたならば、他の侮を受けぬだけの獨立の生計は營んで行けよう。けば〳〵しい贅澤は出來なくても其人は他から相當の敬意は拂はれるであらう。自主の意志が強固で健康で一家が和合して居れば泰平の國に在つては無論、無政府の一孤島に往つてても、滅多にひけを取るものでは無い。

▲僕妾道と乞食道

自主獨立の覺悟が無くて、他人の援助や同情にすがつて生存しようとするのは人間羞恥の事を知らざる僕隷妾婦の類である、若くは病者不具者が已むを得ずして取る所の乞食道である。亞細亞聯盟說の如きも此の嫌ひがある，排日は米國人多數の意志に非ずして一部野心政治家の利用する政略的現象であると、我國民は隱忍して彼國輿論の定まる日を俟つが好いなどといふことは、多年我が親米論者の唱道し來つて我國民の激昂を緩和せんとしたお題目であつた、而かも今日尙ほ之を繰返して彼の横暴を坐視しつゝもしやの好轉機を僥倖して國民の憤激に砂を覆せようとする無策無膓の徒を絕たないのは實に奇怪千萬、此の手合は何處までも日本人を以て僕妾の道を奉ぜしめようとする無恥無慚の輩である。

▲米國より恐ろしい者

自主の念の乏しい者は依頼心が強い、斯ういふ手合は必ず棚から牡丹餅の落ちるのを夢みつゝ苟安生活を貪るものである。さうして、有れば有るに任せ、無ければ遣繰りをして奢侈をしたがる、きつと又遊惰な無責任な性質を伴うてゐる、此等が興味を有つ所のものは萬事射倖的な事柄であつて、其の手段は必ず欺瞞的なものである。

毎日の新聞に就いて見ると、其證據は甚だ多い、一例を擧ぐれば全然虚僞と解り切つた賣藥の廣告などが盛んに跋扈して紙面を塞いでゐる。騙される者が馬鹿で自業自得だと官憲は思つて居るのか、虚僞の廣告を取締るべき法規は儼存するに拘らず、曾て取締られることとなしに欺瞞は公々然として行はれ益々巧妙な言辭を競ひつゝあるのは一種の奇觀である。凡そ理義を明白にせぬ國の榮えた例は無い此のまゝに拋置しては日本の運命は心細いものである。米國の横暴より尚ほ恐るべきものが我國に瀰滿してゐる。

古來の歴史上、新に興る國、頽勢を挽回する場合、孰れも節儉で勤勉なる國民に限つてゐる。此の二は精神的にも經濟的にも有らゆる窮乏に打勝つ最優の資源である。飛行機よりも殺人光線よりも日本に充實せしめなければならぬものは此の二つの精神的武器である。

▲英語を排斥せよ

自主的でなく且つ浪費されてゐるものゝ内、教育に關して其一例を擧げよう。

中學卒業生を使つて見ると、手紙一本碌に書けない、常識が乏しくて役に立たないとは經驗者の概ね一致する苦情である。滿七歳から十八歳まで十一年間學校教育を繼續して此んな結果しか得られないとすれば、どうしても教育方法に缺陷があると言はれてもしかたが有るまい。

手紙が一本碌に書けない、禮儀作法の一通りの心得さへないので、初めての對面、初めての文通に於て、教養ある青年たることを直に否認せらる、中學卒業生は十一年間の教育に對して怨みを言つて宜しい譯だ、青年を咎めるより教育制度を罪せなければならないのである。昔しの不完全な教育に於ても此等は人間の教養として第一義のものだとして何より先に授けられたものである、つまらぬ形式の端くれだと蔑視するか知れぬが、人間の禽獸と異る所は言語といふ特能が其一である、禮儀作法も亦た一の特有習性である、斯様な特技は日常生活に於て必要な

ものであるだけ之に關する教養は尊重せられなければならないのである。

常識が乏しいといふ非難は、現代の社會に關して其組織及運營に關する智識の缺乏が主なことの樣である、中學教育に於て法制經濟を加へたり或る學校に於ては課外に新聞記事の研究をさせて見たりする所もあるが、兎に角商業學校卒業者より中學卒業者が、卒業後直ぐには役に立たず、常識に乏しいと言はれるのは學課の編制が不適當なのであらう。

誰もが知つてゐる通り今の中學教育五年間を通じて教師も生徒も一番骨を折るのは英語である、(少數の學校では佛、獨語、然るに中學教育を受けた者の中、他日英語が役に立ち若くは役に立ち得る者が、如何程あるであらう、其の十分の一無いのは明かである、恐らく三四十分の一ぐらゐなものでは無からうか、大學卒業者の中ですら卒業後外國語を役に立てる者は多くは無い、大部分は其の學んだ外國語を話す機會も讀む機會も無くて濟む樣である。左すれば大學に進まざる中學卒業者が中學に於て英語に就ての多くの時間を取られ最も苦しい目に會ふといふことは殆ど無用で、精神の浪費ではあるまいか。

英語其ものは役に立たなくても英語を學ぶ中に得た智識が副産物として有益であるかといふに、中學で用ゐる英語用の教科書は大抵外國の小學校程度のものであるから、此點に於てあまり副産物の利益はあるまい。

中學に於ける英語教育は時間と腦力の殆ど浪費といふことが出來れば、英語の時間は他の缺陷に振り向けて中學教育をもつと有効にすることは必要な急務であらう。

現在の如く中學でも英語が重要がられ、其以上の學校に進むに關門通過の爲めには更に重要がられるのでは、英語といふものは日本の學生に取り大なる權力者となる譯である。實際國語よりも遙かに尊ばれ重んぜられ且つ恐がられてゐるのは事實相違ない、外國語が自國語より重大視せられるといふのは本末顛倒な次第である。

でも事實だ、英語が一番重要となつてゐるから英語の出來る者はエラク思はれ、延いて英語國の人も事物も尊ばれ親まれ、あこがられることになるのは勢の已むを得ざる所で、間違つた理窟ではあるが英語國が不當に尊敬を贏ち得てるのも免れがたい成り行きである。

英語が重視せられて國語が輕視せられるから不當は二重になつて來る、英語がエラシとせられる結果、要もないのに看板やレツテルや其他の廣告、宣傳用のものに無暗と英語が使はれる、其を不快とも恥辱とも感ぜぬ者が多いほど英語は當然さうに使

蔑視されてゐる、日本は恰も英語國の植民地たるの觀があると英米以外の外國人からは嗤はれて居る、如何に我國民が自主的觀念に乏しいかの一例證にも爲るので實に耻ぢなければならぬことである。

▲國民を愚にする英語

日本の知識階級には英語の讀める者が他の歐洲語を讀む者より多い、或る國の語で書かれた本は概して其國贔屓である、だから英語の本を讀む。日本の學者は（少數の識見者は別として）自然に英語國贔屓心を養はれ、英語國に對して正當なる批判を爲し得ぬ樣になるのは免れ難いことである。佛、獨、伊、西班牙、和蘭、露西亞等の本が、英語並みに廣く讀まれて居たなら、日本人は今の如くに英語國贔屓にはなつて居なかつたらう　英語國が近世史上如何に不信義不公正な罪惡を重ね來つたかを割合に日本人が感じて居らないのは、日本に於て其等の被害者側の外國語の本が多く讀まれて居ないといふことが一の原因であらう。英語の偏重は日本人を愚昧にしたとも言ふことが出來よう。

▲高等教育にも英語無用

今日は可成り高等な教育を施すにも日本語だけで結構間に合ふ、例へば判檢事辯護士行政官となるに一冊の外國語の本を參考とすることなしに其の主要科目の試驗は通過し得られる。（豫備試驗に外國語があれば其は格別）今日の重要な官吏に外國語を全く知らぬ者又は曾て學んでも今は殆ど忘れて役に立たぬ者は甚だ多い、其で格別の差支へは無い。外國語を知らぬより寧ろ日本の事を知らぬので差支へる事は有る。

今後醫師となるには必ず大學を出なければならぬから外國語を必ず學ばせられるが、醫學其物を學ぶのに必しも外國語が必要不可缺では無いのである、恐らく今後の醫學士中開業後少しも獨逸語で書かれた本を讀まぬ者、讀む必要を感ぜぬ者が澤山あることだらう其んな人が卒業前に獨逸語の爲めに數年の腦漿を絞ることは浪費である。

理工、農科等の大學卒業者にしても、後來曾て外國語を役に立てぬ者は少くあるまい。

廣く智識を求むる少數の學者の爲めには種々の外國語を修得することは必要であり又た奬勵すべきことであるが、普通教育中學教育には外國語は不必要で或る高度の專門教育にも左して必要は無い。自國語の教育を不十分にしておいて外國語の修得に多くの時間と腦力とを浪費するのは甚しい不體裁の事であ

る。此の浪費を避くれば一般教育の程度を高めることが出來、智識普及の爲め餘程の利益を齎すことであらう。

▲教育年限短縮と外國語廢止

大學教育以外には外國語には不用のものとしたなら、中學校は四年卒業としても今よりも學科を高く又は廣くすることが出來る、專門學校程度も一年以上修學年數を少くすることが出來る。若し今の修業年數とすればずつと内容が豐富になつて來る。

大學教育を受ける者の爲には、高等學校に入つてから初めて外國語を授けて宜しい、英語に偏重せず、英、佛、獨、支那語は略ぼ同數の講座を設けるが可い。外國語教育の爲めに一年卒業を延ばしても特殊な向學者の爲めだから差支ない樣なものゝ、さう年數を增さんでも中學で英語を廢した代りに、高等學校で學ぶ科目の若干を一般中學生に學ばせて好いものもあるし、中學の教育が今より充實して居れば高等學校は今の科目を減少して外國語の時間をずつと增加することが出來るから、やはり三年修了にしても、今の卒業生に略ぼ劣らない外國語の力は得させられよう。此れに今の大學生は閑過ぎなまけ過ぎてゐるから、大學生にもつと語學を必修科目として課しても好からう。純學者になる者は自ら進んで必要な丈の外國語はやるに違ひないから、一般大學生の外國語の力の低下することが有つたとしても憂ふるに足りない、繰返していふが、今の制度の下にても大學卒業者中卒業後外國語の必要の無いものが多いのであるから。

▲國語尊重が必要

自國語を尊重せしむることが民族精神の涵養上極めて必要なるは今更申す迄も無い、英、獨、佛人が如何に自國語を尊重し之が整理洗練に勉めて來たかは著しい事迹である。支那は『書かれる國語』即ち文章を如何に尊重したか、總ての時代に文章と文字は官吏登用の重要なる科目としてゐた位である。

然るに不思議なほど日本では國語、文章が尊重せられない、お國自慢に於て滅多に餘所にひけを取らぬ我國が此の點に於て無頓着なのは頗る奇態な現象である。

今日、外國語の綴字や發音やを誤つたなら直に嗤笑せられる、然るに堂々たる學者、有名なる作家の文章に我が國語の語法を誤り文字の濫用が有つても格別人が尤めもせず、有り勝の事として看過してしまふ。更に可笑しいのは、かどある場合儀式張つた文章が入用となると、普通用の文章は斥けられて、

支那の而かも古代の死語を搜し出して來ては列べ立てる、假名交りにして、日本文らしく見せかけはするもの〻漢文でない以上必要も無い樣な對字の詮議立てに骨を折つて、國語の法則などは往々閑却され、つまり擬漢文の直譯の甚だ拙劣なものを揑りあげて、其を莊重だとか高古だとか如何にも有がたいものと自惚れて發表するものらしい。

何處の獨立國に、今日、自國の尊嚴なるべき公式文に、而かも國内的の文書に、自國語を無視して、擬外國文を作つて其の直譯を用ゐる國が有らうぞ、政府は國民教育に於て漢字の制限を爲し勉めて平易な文章を敎へておきながら、政府自らは拮据艱澁な文字を濫用して普通教育を受けた者はおろか中學卒業生にも讀解し得られない樣なものを公文として發布するのである、矛盾と言はうか、無思慮と言はうか。國語に對して定見の無いこと明はかである。

儀式ばつたものには漢文が模倣されるが、文化がつたものには英語の文脈が模倣される、甚しきは英語其のまゝが用ゐられる、國語の爲めに憤られずに居られない、斯ういふ事が積り積つて自國の尊嚴が害せられ、知らず識らず外國模倣が進ん、外國崇拜と爲つて來る、其の崇拜する國の生活を模倣せんが爲め見得と奢侈との不必要な英語國の品、特に米國品の輸入を誘發することにもなる、德川時代の唐物輸入には漢學崇拜支那憧憬が原因と爲つて居たのは爭はれぬ例證である。

▲弊風打破と國策の確立

米國の橫暴なる排日を、我國民は轉禍爲福の好機會とするが宜しい、徒らに悲憤慷慨して米國に敵意を示すのは何の益も無いことである、斯等に侮蔑せられるに至つた原因が我にも亦多少責が無いでもないといふことを反省して、改むべきことは改めねばならぬ、對米關係以外に於ても我國本の培養に大に顧みねばならぬことは多々ある樣である。此際一まとめに反省の大ざらひをして國策の確立を圖るのが一番賢い且つ永遠の謀といふのである。

前に記した通り、何よりも我國民はもつと自主的にならなければならぬ、節儉で勉强で、民族的結合を一層鞏固に爲さなければならぬ。見得を捨てなければならぬ、質樸であらねばならぬ、浮華と奢侈とを深く愼まねばならぬ、遊惰と放恣とを嚴に禁ぜねばならぬ。剛健質朴を以て大正維新鬪士の信條として守らなければならない場合である。

考へ直して見るが好い、亞米利加が日本人の同化し難いのを主なる排斥原因とするのは、日本人に取つて何の愧づるに價ひ

せぬではないか。

吾々とても我が國に同化し難い、我が國の統一を妨ぐる様な他民族の來住增殖は迷惑千萬であらうでは無いか、さういふ來客に對しては玄關拂ひをし居住を禁制する必要も生ようでは無いか。

――

日本人が他國に同化し難い特性は寧ろ我民族の誇りとして保存して置からうでは無いか、日本人がやすやすと支那人になり米國人になり切つて了ふ様では心細からうではあるまいか。

韃靼が侵入すれば甘んじて彼の臣妾と爲り、蒙古が强ければ唯々として其の脚下に拜伏するといふ様な懦弱な漢民族の從順は學びたくないものである。吾々の憂ふる所は、日本人が他國に同化し難きが故に排斥せられることとでは無くて、却つて、動もすると他國の文物を物珍しがつたり不熟な新說に雷同したり、他國を過度に尊崇したり餘計な氣兼ねしたりする點である。日本人はもつと頑固で移り難いものであり强い圖々しい押强い者で有つて欲しいのである。

▲米國に報復せず

米國に對して些々たる宣教師の歸還を求めることなどは急務とも思はない、報復などは爲なくて宜しい、彼等の排日の理由は日本人に取りて不名譽とは考へずにも濟む事である。其よりも之を好機會に從來の弊風たる外國崇拜を除くの一方法として偏重な英語教育を廢止したい、不必要なる英語使用は早速に取止めることを勸告したい。其から嚴重に奢侈の風を一洗したいのである。さうして自主的自覺的な信念を注ぎ込みたいものである。此等の事を勵行する爲めには有志の士は猪つて之が勸告宣傳及び監督の任に當るべく犧牲的精神を發揮して貰ひたい。

個々の在留米國人を迫害するが如きは士人の恥づべき最も卑怯なことで、其は米國模倣の弱い者いぢめといふものであることを牢記して欲しいものである。

総

米國新移民法の批判

目下の日米問題に關して敢て識者の再考を煩はす

高木八尺

○はしがき

米國に最早「デモクラシー」は存せぬ、米國の政治は「デモクラシー」に非ずして「ボスオクラシー」Bossocracy となつたと或人は云ふ。蓋し判斷力ある個人を基礎として立つ「デモクラシー」は既に之を北米の地に求むべからず、彼處に今日存するものは金權政治の傀儡たる「ボス」(Boss 親分)の掌握する政治あるのみ、となす謂である。嗚呼果して然る哉。

私は今茲に米國新移民法事件の解釋を率直に述べて見たい。新移民法を中心とする日米關係の紛糾は、既に少くも二ケ月の間は國民全體の目に曝されて來た。故に私は今改めて長々しい說明的の述說を反覆するの愚は避けんと欲する。

私の今回の事件に對する疑問は、(一)何故に米國議會殊に其上院は立法に依り日本移民の入國を禁止する如き暴擧を敢てしたか、(二)何故大統領は此の如き不正を含む法案を拒否せさしか、此の二點に集注して居た。本文の目的は此の二點を中心とする新移民法事件の解釋にして、併せて、識者の再考を乞はんと欲するにある。

說明の便宜の爲に私は本文を二大部に分つ。第一部には新移民法の米國々民に對して有する意義に就て述べたい。卽ち、一般的に移民を制限することが如何に米國民にとりて緊切の必要なりしかといふ事實を考察し、之に關連して大統領「クーリッヂ」の措置に論及したい。第二部は主として上院に於ける事件の經過の解說としたい。

一、四十年來移民問題が米國に於て最大の重要問題の一となつたこと

移民の制限を目的とする今回の新移民法が米國民にとりて如何に必要なるかを解する爲めには、少しく遡つて米國に於ける移民問題其のものを了解する必要がある。

抑々米國に於ける移民問題が眞に重大の意義を有するに至つたのは千八百八十年以後いことである。元來米國は世界に類例なき移民國であつて、建國當時の三百萬の人口が、百三十年後の今日、三十何倍かに激增して居るのは出生の外に勿論來住民に負ふ所甚大であるが、然し今より四十年前に眞の意味での移民問題が起つたといふ所以は、來住民の素質と數とに其の頃以後激變があつたに因る。

千八百八十年以後歐洲の東方及南方諸國よりの移住民が始めて米國に續々と來住した。其以前の移住民は主として愛蘭土、獨逸、及スカンヂナビア諸國の民であつて、之等は皆來住後幾何もなく米國の言語、習慣、を習得し、社會の制度に適應して、所謂同化をして居た。然るに歐洲東部及南部諸國よりの移民即ち伊太利人、希臘人、波蘭土人、アルメニア人ルーマニア人等は容易に新たる境遇に同化せれらなかつた。蓋し彼等は建國當時の米國民を構成する人種とは全然異れる種族の民であつたが故に、其の性格、思想制度等に於て著しき扞格を存したるが爲め、兩者の融合は極めて困難であつた。然るに此の困難を一層大ならしめたるは、質に於てかくも異る移民の判度が、數於ても莫大の增加を示した事實である。從來移民の數は何れの十ケ年間をとるも二百餘萬を出でなかつたが、一八八〇――九〇の十年間には五百二十萬に上つた。於是乎十九世紀の末年には既に、米國々民中の所謂米國人系統 American or colonial Stock）の人口の漸減を警告し、「人種的自殺」race Suicide の危險を防止すべしとなす論は識者の間に重大視され始めたのであつた。然るに其の後に於ても、主として上述の如き種類より成る移民の每年の到來は夥しき數を示し、每十年間に約三百萬乃至五百六十萬に達した。

移民制限の問題の一面の現象として米國內部の政策としては所謂「アメリカニゼーション」の問題が近年著しく米國輿論の注意を惹いた。

此の傾向を最も有力に助長したのは、云ふ迄もなく過般の歐洲戰爭である。戰爭の經驗は米國民をして國內異分子の統一の困難を如實に感ぜしめた。彼等は所謂「世界の各人種の熔解爐 melting pot」と自らも任じたりし米國の社會が、熔解の作用を十分に行ひ得ずしてあつたことを眼前に認めざるを得なくなつた。蓋歐洲大戰中米國人口の一大要素をなせる獨逸系米國人の間に組織的なる親獨的運動の計畫實行せられたりし周知の事

實の外、密に獨逸政府の命を受けて陰謀の計畫をなせしもの少からず、之等が頻々として暴露に及びたる當時の事情に鑑れば、同化促進を必要とする輿論の興起も怪しむに足りない。所謂「ハイフン附米國人」の問題が喧しかりしも此の理に基くのであつて、即米國人口中「ハイフン」を以て綴らるゝ外來の異分子、例へば German-Americans, Irish-American, Italian-American の如きを眞の米國人に化せしむべしといふ議論が盛に唱へられたるゝに至つた。所謂「アメリカニゼーション」の主張を一言に爲すならば、そは「デモクラシー」の目標は人民の爲めに人民の手に依てなす政治である、然るに此の理想の到達の爲めには、先づ共に考へ共に行動し得る人民 People の存在する事を前提となす、故に米國民を共種の人民となすことが目前の急務であるとなすにある。

二、現在の米國に於ける移民問題の意義。即ち移民制限の必要なる所以

一九二〇年の國勢調査によれば合衆國一億五百萬の人口中約一割は黑人である。「ニグロー」の問題は今日は觸れない。(唯一言附加したいのは黑人問題と支那人問題との關聯である、黑人問題は奴隷問題以來引續き米國の呪である、內亂を以ても之を解決する事は出來なかつた、否內亂後十數年間の「リコンストラクション」時代こそ、米國が黑人問題と、まともに相面して慘憺たる苦心を重ねた時であつた。而して恰も其の頃太平洋岸に起りつゝあつたのが支那人問題である。黑人問題につき具に苦い經驗を嘗めた米國は遂に支那人の入國禁止を條約と法律とを以て定むるに至つたのである。)

却說、黑人を除く米國の人口九千五百萬の白人に就き、其の構成を檢するに、其の中の約一千四百萬、即ち約七分の一は所謂「外國生れ」の白人である。然しながら、更に進で所謂「內地生れ」の白人 Native white の內容を檢すれば米國にとりて事情重大なる事を略了知し得る。何となれば內地出生白人の兩親に關して檢するに、等しく內地生れの兩親より生れしものゝ數は約五千八百萬即總人口の約五割五分に當り、他は外國人なる兩親より生れし者及何れか一方外國人なる兩親より生れしものである、即ち內國生れの兩親を有する內國生れの米人といふは總人口中半數を僅に越ゆるのみなる事を知るのである。

斯の如く一見して直に其の重大を感知し得べき移民問題を更に複雑にしたのは、近年の米國に於ける移民の都會集中の傾向である。

從來米國西部の邊境 Frontier は、米國人をして今日の米人たらしめし米國の「デモクラシー」の搖籃であつた。「フロンティア」に次で米國人の陶冶に力あつたのは米國の田舍に於ける農場の生活であつた。然るに同化困難なる多數の移民の殺到が始まりし頃より米國に於て土地を得ることは最早從來の如く容易でなくなつたのみならず新來移住者は先づ大都會に於て夫々自國の言語を語りて群居せる同國人と共に暮さんとする自然の慾望があつた。加ふるに大都會には不熟練勞働の需要は多い、之等の理由に依りて移民の都市集中が起つたのは寧ろ當然であつて大都會の下層階級の狀況は最も切實に移民過剩を訴へた。所謂「消化されざる移民」の問題は、かくて次第に喧しくなつた、而して、移民の問題は大都會の社會問題、貧困問題、罪惡問題等と紛糾混淆したのであつた。此の事實は紐育、市俄古等の大都會を見れば最も顯著であるが今は論ぜず、二十年前に或人の調査せし所に依れば紐育市にて語らるゝ言語の種類は六十六個なりしといふ。

かゝる狀態に面して「人種的自殺」を阻止すべしとなす說は當然勃興した。一九二〇年の國勢調査の首腦たりし「ロシター」は、米國人口の白人總數の中四割九分九厘が建國當時よりの米國人の系統に屬する者なりと發表した。而して此の如き多數の移民は當然に米國民の性格に變化を起し、米國の文化其もの影響を及ぼすべしと憂慮する者が次第に增した。故に「ブライス」卿の如きも一九二一年此の點を論じて「僅に米國の教育と傳統と文學との力を信じ、英米人系の將來に希望を認めて可ならん」との意見を述べた程である

最近に支那駐在の米國大使「シャーマン」が新移民法に關して發表せる意見を見るに、要するに米國は自己の靈を救はざるべからず America must preserve her own national soul といふ一點に集注された立論である。又最近「アウトルック」誌の企てたる國民の投票の結果によれば移民の制限を更に嚴重にすべしとの主張に於ては米國內地方の別なく、政黨の別なく大多數の贊成あることと明瞭となつた。然らば此の如く移民制限を必要とする事情ありしに對し、之が實行の方法として米國は何をしたか、之次に攻究を要する點である。

三、所謂排日條項を含む新移民法の制定

上述したる如き移民制限の必要が遂に具體化されて一九一八年の頃よりは各種の法案となつて現はれた。一九二一年に所謂「移民三分入國法」が制定せられ、之に依り米國は移民を制限して「一九一〇年の國勢調査に基く米國在留外國人人員の三分

の人數を各國民に對し毎年入國を許可する數とする」となしたことは人の知る如くである。然るに「三分率移住法」の期限の切迫せる關係上、一般的なる移民制限法の制定の必要は過般來米國朝野の議論にして、普く世の注意を惹いて居た。

かゝる一般的移民制限の輿論の潮先に乘り、此の機會を捉へて一氣に排日の目的を遂せんとしたのが加州を中心として太平洋沿岸に蟠居せし排日派であつて、彼等の努力は所謂「ジョンソン」移民法案中の一條項「市民となり得ざる外國人(即ち歸化不能外國人)は所謂「ノン・イミグラント」(即ち官吏商人・旅行者等)と、及び再渡航者、教授、學生を除くの外入國を禁止す」といふ規定に現はれたのである。之移民制限法案中に一項挿入して巧に年來の懸案たりし排日の目的を遂せんとした排日派の成功であつた。尨大なる三十頁に近き法律案中僅に數行を挿入して自家所望の法律制定を確實にしたるは所謂、Pork-barrel の好例にして、狡猾なる政黨屋の所業と云ひ得る。此の規定は其の文面上は「市民となり得ざる外國人の來住」を禁ずるものであるが既に支那人に關しては、入國禁止法あり、印度人に對しては地理的制限による入國禁止の法あるを以て、少くも今日に於ては日本人を目的とする規定なること疑ふべくもない。

されば國務卿「ヒューズ」及大統領は本年匆々既に議會下院の當路者に該法の修正勸告の努力を始めた。二月八日附國務卿の書簡が下院委員長「ジョンソン」に送られたのは今は世の周く知る所である。四月上旬、三日間に亘つて移民法案の討議が下院に於て行はれた。乍然討議の重點は勿論移民の一般的制限の方法に關してゞあつた、即移民の制限を從來の通り三「パーセント」とせんか或は進で二「パーセント」とすべきか、及び標準の年度を一九一〇年とせんか一八九〇年とせんかとの問題が議論の中心であつた。之等が米國民にとりて如何に重大問題なりしかは既に讀者の了解せるゝ如くである。下院議員の中一人も日本の焦眉問題に心附くものなかりしことは寧ろ自然であつたと思ふ。而て下院は「ジョンソン」案の討議を四月八日に終えた。

此時に當り事態傍觀を許さずとして我が駐米大使は國務卿ヒューズに宛て紳士協約の目的と要綱とを陳述し、議會の上記の如き立法を阻止する爲め米國政府の盡力あらんことを求むる書簡を發した、國務卿は埴原大使に對して、快諾を與へ。直に該書簡の寫しを翌十一日上下兩院の移民委員長に送附した。然れども之等の最後の努力も效を奏せず、四月十二日下院は所謂排日條項を含む儘の移民法を三百二十六票對七十一票を以て可決し

た。此の日、下院議員「シオドーア・バートン」(彼はオハイオ州選出共和黨員にして學殖見識を以て下院に頭角を顯はす政治家である)は立つて、所謂排日條項は日本の感情を損ずべきを以て、宜しく日米間の移民問題は外交的手段に依て決定すべしと論じたが、大勢既に挽回し難く、該條項も亦可決せられたのである。「ヒューズ」の措置が聊も下院の行動を改善せしめざりしのみならず、却て其の反感を買ひしことは認むべきが如くである、四月十二日紐育「タイムス」も論じて「ヒューズ」氏が無造作に下院の既定案を否認したる態度は看過されざるべし」となした。(上院の態度に就ては後述)

四、大統領「クーリツヂ」の法案裁可

下院を通過せしと略ぼ同一の移民法案は意外にも上院を通過した、而して幾多の曲折を經たる後遂に五月廿六日に大統領の署名を得て法律となつた。

初め大統領「クーリツヂ」は移民法が議會を通過せしとき、其の中に排日條項を含むを理由とし、之を不當なりとして、議會の再考を求めんとし、又四月下旬には該條項の實施延期を提案して、日本と米國議會と兩者の主張の間に妥協を見出さんと努めた。然れども、兩院協議會は議會の反對激烈なりし爲め大統領の意向を容るゝこと能はず、五月六日協議會は排日條項實施期を本年七月一日となす下院案を採用するに決したりしが再び同日午後此の決定を翻して該條項效力發生期を一九二五年三月一日となすに決定した、然るに九日、下院は委員長「ジョンソン」の報告に基て數時間に亙る論議の後、百九十一票對百七十一票を以て排日條項實施延期に反對すべき旨の訓令を協議會委員に對して發する動議を可決した。協議會の決定は爲めに三度の變化をなしたのであつた。

大統領「クーリツヂ」は此の如き反對に遇ひ、尙其の努力を緩めず、共和民主兩政黨の首領等及當路の諸政治家と協議を重ねた。然るに五月十五日上述の如き所謂排日條項を含む移民法は協議會より報告せられ上程、討議の結果、上院は六十九對九、下院は三〇八對五の多數を以て之を可決し、十七日大統領の許に送附せらるゝに至つた。

人も知る如く、大統領の當時採り得たる態度に三途あつたのである。一は法案に對する拒否權の行使である。二は法律に署名するに依る裁可である。三は拒否せず又署名せずして放置する法である、然れども此第三の處置に出づれば法律を議會より送附されたる日より十日間を經れば該法は署名なくして法律と成るが憲法の規定する所である。故に大統領は優柔不斷の謗を

國の內外に欲せざる以上、一二何れかの途に出づる要があつた。而して彼の拒否は議會の兩院の三分の二の再可決に依て破られ、結局其の實效に於ては無意義に終ることは明瞭であつた。於是「クーリッヂ」は五月廿六日遂に移民法に署名した、と同時に彼は常例を破つて長文の一聲明書を公表し、自己の態度を明にしたのである。蓋し彼の意中を付度するに、上來述べたるが如き一般的移民制度の必要と原案を貫徹せんとの決意確き議會の態度とに鑑み移民問題の紛糾を救ふ唯一の道は新移民法を裁可するにありと爲し、同時に日本の態面を尊重し友邦に對する信義を盡す爲めには鄭重なる「ステートメント」を公表しかくて此の難問題の當面の解決を企てんとしたのであらう。其の聲明書を檢するに現行三分米住法の期限は切迫せるを以て「困難と混雜とを避くる爲め、之に代るべき廣汎なる法案の實施に關する處置をなすことは最重要なり」「故に予は本法案を全體的に考量し、且つ米國が斯かる一般的の立法を緊要とする所以を考慮するの必要あるを以て、本法案を是認す」となし、同時に本法案より「特に日本人に影響を及ぼすべき入國禁止條項を分離し得ざるは予の遺憾とする所なり」といひ、又「日本國民に對する尊敬と深厚なる友誼の情は過去に於けると同様今後も依然十分に披瀝せ　るべく、此の信念は該條項の制定により何等影響せらるゝものに非ることを確認するは予の喜とする所」となす彼の苦心を察するに餘ある。彼は又同書中に紳士協約に基く兩國間の諒解協力の歷史を顧み、「無用の法律制定から生ずる誤解の素因を避けたりしならば更に良好な結果を齎したるならん」と云ひ、又「今次の（立法による禁止）手段は此の際不必要にして且つ悲しむ可きものである、若し排斥條項にして單獨のものなりしならば予は之を否認するに躊躇しなかつたであらう」と言明したのである。

五、米國政治組織に於ける上院對大統領の拮抗關係

次に吾等は如何にして排日條項が米國上院を通過したかの疑問を解釋せねばならぬ。此の問題に關して私は先づ米國政府內部に於て制度上上院と大統領とが相對峙する事情あることを一言述べたい。而して此の目的の爲めには歷史的實例を示すことが便宜と思ふ。

上院對大統領拮抗の事情を最顯著に世界に表明したのは往年ヴエルサイユの平和條約締結の前後に亘れる米國上院の反對的態度である。一九一九年七月大統領「ウイルソン」は正式に條約を上院に送つて憲法の規定に從て上院の批准を要求した、而

して大統領は難攻不落の敵を却て國内に見出したのである、

抑々米國に於ては其の特殊なる建國の歴史に基き、政府の權力増大に對する危惧の念が甚だ強い。而て之がかの三權分立の主義となり、米國政治組織の著しい特色となつて、制度の上に現れた。此の主義は換言すれば Checks and Balances の主義即ち政府内部の各部間の抑制均衡の主義である。されば米國史上議會と大統領の間の軋轢の例は甚だ多い、殊に「ウイルソン」は元來、責任ある指導（リーダーシップ）者の下に行はれる政治を以て、青年時代よりの理想として居た。彼の此の理想は後年彼が大統領として目醒しい活動として將に實現せられんとした所であつたが、米國の立法府は之を袖手傍観するを得なかつた、議會上院の大統領に對する反抗運動は勃然として起つたである國際聯盟に關する論爭の當時、著名の學者中、爭の眞の重點は大統領の高壓的態度に對抗する議會の獨立の主張に在る、と論じた名があつたがよく此の消息を傳ふる觀察である。

米國政府の内部に以上の如き制度上の拮抗の事情があれば、今回の移民法制定に際しても同種の困難が伴つたと解するは理由なき推察ではないと信ずる。

米國憲法の規定に依り「諸外國との通商 Commerce の規律をなすこと」は議會の權限の一である。此の憲法の規定は爾來次第に廣汎なる解釋を與へられたる一項にして、移民に關する規律も亦此の規定により議會の權限に專屬するものとせられて居る。行政部の權力増大に反抗して、少くも近年輿論の要求たる移民制限の問題については、絶對に議會の憲法上の權限を主張せんとするのが今回の議會の態度の重大なる一因を爲したるは疑ふべくもない。「クーリッヂ」が其の聲明書中「本法案は寧ろ議會が移民取締は國際間の協定に委せずして、立法に依て之を定むる權能を實行せんとする決意を表明するものである」と云へるは、此の事實を傳ふる言であつて、米國大統領の地位に一掬の同情を誘ふものがある。（此最後の點は言ふ迄もなく議會の下院の態度の解釋にも適用せられる所である）

六、上院に於ける實際政治上の政略、並に本件に關はる個人的要素

新移民法の上院を通過せし經緯が單に之を制度の上より説明し得べきでないこと言を俟たぬ。實際政治の政略政黨の黨略の方面よりする觀察と、併せて本件に關聯せし主要なる人物、即ち事件に關はる個人的要素の觀測を怠ることを得ない。蓋五年前「ウイルソン」の理想の爲めにする戰を、國內から失敗に了らしめた場合にも等しく之等の原因が發威を逞しうしたのであ

つた。然し今回の紛糾は「ウイルソン」の遭遇せし反抗に比すれば單純であつた、何故とならば二大政黨間の爭が問題の中心からは除かれてゐたから。

乍然今年が四年毎に來る大統領選擧の年に當ることは記憶せねばならぬ。大政黨を率ふる「クーリッヂ」等が太平洋諸州の投票を考慮したことは當然であらう。他方に又「ウイルソン」を一九一九年苦境に陷れ殆ど字義なりに死地に陷れたりしは同じ「ヘンリー・カボット・ロッヂ」「ハイラム・ジョンソン」等の上院議員であつたが、彼等が、大統領の椅子に意ありしことは當時既に周知の事實であつた。「ジョンソン」が今年又共和黨の立候補に「クーリッヂ」と爭つたことは人の知る如くである。

「ロッヂ」は共和黨の元老である、上院「外交事務委員」の長として、政黨の大勢力を背後に有する老練の政治家である。三十何年の公生活に彼は具に政治の機略を修得した。然るにも係らず、彼は未だ大統領の椅子を贏ち得ざるのみか、國務卿の地位すら畀せられたことはない。久しく上院「外交事務委員」を統率して、議會の重鎭を以て自ら任ずる彼の目には國務卿「ヒューズ」は恐らくは偏狹樸訥なる一司法官と映じたらう。況や「クーリッヂ」は未熟なる一若輩と見えたかも知れぬ。何れにせよ、少くとも外交事項に關しては彼の幕下に集る「セネター」こそ眞の權威なりと「ロッヂ」は信じてをる。されば今回の立法が對日本の外交關係上大統領と國務卿とを苦境に立たしむればとて、そは「ロッヂ」の進路を變ぜしむる理由にはならなかつた。否寧彼は却て陰かに快哉を覺えたかも知れぬ、蓋し上院に諮らざる行政府專斷の協定の如きは、由來上院と、而して「ヘンリー・カボット・ロッヂ」彼自身との尊嚴を無視せる處置なりと彼は感じてゐたかと思はれるればである。

加之、日米間の紛糾は近來の米國政界の重大事件なりし油田疑獄事件に因り、共和黨幹部の大腐敗に驚歎の目を睜れる國民の注意を一轉して他に向はしむる間接の利益があつた、所謂「大統領選擧年度」に於て大政黨の元老の目は恐らくはかゝる點にも注がれたのであらう。

七、米國上院氣質(テンパー)と「重大なる結果」の影響

內外人の期待を裹切つて所謂排日條項が上院をも通過した經過を語る爲めに、私は一言米國上院の特殊なる氣質(テンパー)といふことを注意したい。そは何かといふに、外國に對する絕對的なる不干涉の要求である、卽米國の主權の作用を完全に保持して國外より一點一劃の容喙をも許さゞらんとする上院の態度である、

即ち對一關係が一度主權の問題に觸るれば米國上院は殆ど神經的なる反感反動を之に對して示すといふ一種の持病、若くは「コンプレックス」がある。此の事實は上述せる米國上院の國際聯盟規則に對する反對に依て最も顯著に世界に示されたのであつた。而て又今回の事件にも此の上院氣質(テンパー)が害をなしたのである。

既に述べたるが如く四月十日に我が駐米大使の所謂「抗議書」が國務卿に送られ、翌十一日直に之が上院移民委員長「コルト」に轉達された、之に依て上院の形勢一變したることは承認せざるを得ざる事實である。十二日の上院の形勢を當時の新聞記事に徴するに其の朝上院に於ては何事か重大事件の起りたる氣合にて「カピトル」の内にて一員より他員へヒソ〳〵と何事が語り傳へられるたと報じてゐる、其の日正式の討議なく、越えて十四日初めて上院は其の態度を世に示した。形勢惡化の跡は十四日の討議に依て歴然たるものがある。元來上院には所謂「リード」案と稱する排日條項を含まざる移民法が、原案として存せしことは皆人の知れる如くである。勿論加州議員「ショートリッヂ」の如きは修正案を出して極力排日條項挿入を努めたが其の結果、委員會は三月下旬遂に修正案に贊して之を上院に報告した、然れども四月上旬に於ける上院の形勢は排日條項否認に傾き、該條項の上院に於ける削除は我も人も共に期待した所であつた。然るにも拘らず四月十日附我が大使の書簡中若し所謂排日條項を含む法案にして成立せんか「重大なる結果」を日米兩國間の關係に誘致すべしとなす結果の一句が、端なくも上院の氣質(テンパー)を強く刺戟して、急轉直下、上院が該條項を可決通過せしむるに至つたのである。四月十二日朝の形勢を目撃せる者の談によれば「重大なる結果」の二字に對する驚愕と反動とは燎原の火の如くに人より人へと擴がつたと云ふ。而して形勢惡化の中心人物は「ヘンリー・カボット・ロッヂ」なりしこと疑を容れぬ。今少しく十四日の討議については此の事情を詳述させて頂きたい。

其の日「ロッヂ」の主唱したる議論の要旨は「移民の取締は基本的なる國權主權の作用の一である、日本大使が國務卿に宛てたる書翰は大國の代表者が友邦に宛てたるものとしては不穩當なりと思考す、余は該書簡は覆面の威嚇(ヴエールドスレツト)を含むものなりと云ひたい。何となれば「重大なる結果」の二字は外交上の慣用語として國交の斷絶を意味するからである。合衆國は外國の威嚇に依りて立法を左右すべきでない故に、此際米國は全世界に對して、何人に米國入國を許可し市民權を與ふるかは獨り米國のみ之を決定し得る旨を了解せしむる要がある」といふのである。

彼の立論は少くも一見堂々たるものがあつた。而して上に述べ來れる上院の氣質(テンパー)に訴へたる點に於て、問題の死活を制する鍵は老政治家「ロツヂ」の掌握に歸したと云ひ得る。

果せる哉上院議員は皆滔々として國家基本權の擁護を論じ(「ボラ」等)、又「威嚇あるが故に問題の條項削除は最早不可能になつた」と論じた。(恰も五年前に熱上した上院の議論其の儘の觀がある)。排日條項無き原案の提案者「リード」も亦一變して「ロツヂ」の顰に倣ひ、外國の米國内政に對する干渉を攻撃し、「威嚇の故を以て却て該條項削除に贊し難く、深き憂慮を以て反對の一票を投ずるの已むなきに至つた」と論じた。「ペツパー」「ウイリス」の如きは「重大なる結果」なる語が述べられたる瞬間に紳士協約の效力は消滅し米國は何等之に拘束さるゝ所ない」と論じた。由是觀之、其の氣質を激發せられたる上院の民主黨も共和黨も、等しく「ロツヂ」の指示に從て、尊き主權擁護の旗下に馳せ參じ、内政に對する外國の容喙を反撥し威嚇の態度により紳士協約は廢棄せられたりとなし、排日條項削除に反對するの動議を一氣に可決したと察せられる。

民主黨議員「キング」等は「紳士協約を無視せば日本は吾人の行動を目して野蠻且無禮となさん、寧ろ他の常道によりて同目的を達すべし」と論じたが、同じく民主黨の一議員は之に答ふるに行政府に依て爲さるゝ國際協約の攻撃を以てしたのである。「スミス」の如きは「日本に對し公平を保つ爲め、且つは移民制限の必要に鑑み、寧ろ數年の間一切の移民を絶對に禁止すべし」と論じた。乍然當日の討議者中、群鷄一鶴の觀ありしは言ふ迄もなく「スターリング」Thomas Sterling であつて、彼は正々堂々の論陣を張り、大使の書簡に藉口すゝ排日を非とし、法案の修正を必要となし、上院の議論は本末顚倒なることを指摘して日本大使の書簡の正當なるを主張し「大使は移民法を制定する合衆國の主權を承認して居り、只差別的待遇に依て傷けらるべき日本國民の自負心と感情とに言及した迄のことであり、余は大使の言中如何なる箇所も假面の威嚇又は兩國間の戰爭と解釋すべき所を見出し得ず」と論じ、日米兩國間の歴史的親善關係を水泡に歸せしむべき愚擧を難詰し、加州の一小事の爲めに全國の利益を犧牲にするの不得策を力說した。

さはれ、其の日の勝者は所「ロツヂ」であつた。投票の結果は七六對二の壓倒的多數を示したのである、但し投票に加はさりし出席議員も少くなかつた。

翌十五日と十六日に上院は所謂排日條項を移民法案中に挿入する新なる修正案を討議し、遂に七一對四票の大多數を以て可決した。(因に云ふ、十五日の投票の如く、出席議員の點呼

roll-callなくしては行ふことは、投票の方法として、却て一般的のものにして、決して粗略を意味せず、大多數の法案は此の方法にて採票せらるゝ故に之を「投票に依らずして可決し去つた」と譯する時は不要の誤解を招く危險がある。)越えて十八日上院は六十二對六票を以て新移民法を全體として可決した、該法に對して投票せざりしもの十六人、其の中に「ラフォレット」、「スターリング」以下知名の士多きは注目に價する。

斯の如くにして排日條項を含む移民法案の上院をも通過した。米國全土の新聞紙は「ハースト」系を除けば殆ど皆、上院の態度を非なりとなして批難を加へた。雜誌の論調も略亦同樣に上院の措置を嘆いた。然れども大勢既に決し、又回復すべくもなかつた。大使と國務卿と大統領の熱心なる努力も效を奏をすること薄かつたのである。以上が私の所謂「覆面威嚇」事件の解釋である。即ち、一種獨特なる米國上院の性癖が不幸にも「重大なる結果」の二字に激發せられ、上院を驅りて今回の暴擧を敢てせしめたのものと解する。而して此の事件に關連する當面の責任者は「國務卿ヒユーズ、上院議員ロッヂ、及不幸にも埴原大使なり」とは前駐英大使「ハーヴェー」が六月當初に發表した批判の聲であつた。私は不幸にして偶然にも略同樣の批判を下さねばならぬことを感ずる。而して私の更に附言せんとするは、就中最大の責任者はかの老功の「ポリチシヤン」にして「政界の碩學」を以て知らるゝ「ヘンリー・カボット・ロッヂ」なりと斷ずる點である、何故とならば他の二人に對して誰一人彼等の熱誠を疑ふ者なきに反して、「ロッヂ」の行動には不幸にも誠實の欠乏を認むべき理由があるからである。

八　所感一二

以上を以て私の任務は終つた。蓋し本文を草した主要の目的は、事實を事實として明瞭に記述せんとするにあつたからである。然れども私は此の機に於て聊か所感の一端を述べたい。

我が國に於て大統領「クーリッヂ」が拒否權を行使せざり故を以て彼を目するに道德上の臆病者を以てする考が相當强い、實は私も初めは同一の審判を彼に下した者の一人である。又米國の新聞雜誌にも同じ攻擊を大統領に加へたものがあつた。然るに彼の措置を檢するに至つて私は少くも考を一變せざるを得なかつた。否却てかの聲明書の文字に表はれたる彼の道德的勇氣を推賞するに吝ならざる者である。彼の聲明書は日本に對する尊敬と友誼との變ることなきを公言せると同時に繰返して議會の採りし手段が遺憾不必要且つ悲しむべきものなることを言明してゐる。議會と大統領の對峙關係が上述の如く面倒なるこ

とを考ふるとき私は彼が一國の元首として他國の名譽の爲めに採りしかくの如き措置を、寧ろ多とせねばならぬと思ふ。翻て我が國の態度を見るに、私は寡聞不幸にして未だ「重大なる結果」の二字に付て、卒直に非を認めた言を聞かぬ。私は四月十日の所謂「抗議書」が全體としては見事なる公開外交の大文字であることを認むるに於て人後に落ちないつもりである。乍然「重大なる結果」の二字は意思なくして用ひた誤りであつたと思ふ。誤りなりと知つたら卒直に世懐に、間違つたと云つて何が悪いか、殊に況や此の誤たるや天下に示して悔いざる底の堂々たる誤であつたのである。

若し又道徳的勇氣を云々するならば、吾等は米國の輿論の約八割に對し、即米國新聞の大多數に對し、勇者の讃辭を呈せねばならなくなる、蓋彼等は直截に明瞭に自國の議會の非をとがめ、之を非難する勇氣を持つて居たのであつた。

私は殊に日本の基督教會の態度に慊らず思ふ。「クーリツヂ」を卑怯者視し、排米を宣傳する前に、何故彼等は先づ少くも疑はないのだらう。かゝる折にこそ米國の眞髓を世に示して了解の助力を計るべきと思ふが、若しそれが出來ずとならば、何故先づ疑問を懐かないのか、米國々民が一團となつて日本を侮辱する爲めに明々白々の不義を敢てしたと鵜呑みする前に、何故事件の眞相を究めぬか。一億の米國人が結束して理由なきにかゝる暴擧をなしたと解するは、やがては人類其物に對する侮辱であると私は考へざるを得ない。

六月上旬私は國民大會の群集の一人となつて熱心に辯者の發に耳を欹てた、當日の盛況と雰圍氣とは目撃者ならでは解らぬ、二萬の聽衆の心を奪つた二十餘名の演説者の姓名は幾丈かの白紙に大書せられて、二十幾條の白柱は國技館の一方に竪り立つた、其の狀は恰も赳々たる國家の柱石の嚴然と居並ぶが如くであつた。乍然一人又一人演説を聽く間に、私の心は次第に重苦しくなつた、或時は隣席の青年が「宣戰を布告しろ」と怒鳴るのが氣附いた。やがて私は所謂「歐米膺懲國民大會」をすゝむる赤襷の青年の聲を耳にし乍ら會場を出た、……嗚呼白ら社會の木鐸を以て任ずる者にして、眞に名勢と權力とを見ること敝履の如く恬淡なる士は無いのか。

私は私情に於ける多大の苦痛を以て此の稿を草した。蓋個人として尊重する幾多の人に對し批判を下す如き態度を已むなくして採つたからである。國民間に於ける各個人の判斷を尊重し、意見の自由なる交換を信ずるが故に、聊かの參考資料を提供し、又私見を披瀝して教を江湖に乞はんとする微衷に出る外他意ない。

如何なる國家と雖、自覺なき國民の上に立つて安泰なることを得ぬ。社會を構成する各人の尊嚴が强國の根柢である。自覺なく判斷力なき群集を自由に左右する bossocracy は我國に迎ふべきでない、共の所謂「ボス」(親分)が政治界、宗教界、學問界の何れに於ける指導者なるを問はない。如何なる問題についても最後の判斷の責任は自己にある。親分に盲從することは少くも此際心せねばならぬ、然らざれば「米騷ぎ」を叫んで自ら米禍の尤たる「ボスオクラシー」を誘致する所以となるからである。

（一三、六、一四、）

米貨非買運動の經濟的價値

法學博士　堀江歸一

一、國民的感情不穩の原因——一等國から三四等國へ落下——米國人に對する日本人の誤解——將來に對する態度　二、政府外交上の無能——政府の外交に對する國民の外交——國民的外交の手段——自殺は、可なり——米國風俗の排斥、三、米貨非買運動——支那の排貨運動を思ふ——排貨運動成效の條件　四、我國に於ける米貨非買運動——國民の感情白熱化せるや——其白熱化せざる所以——米貨非買は徹底的に行はれず五、日米貿易の關係——米國物資の非買は日本を苦しめる——其割合に米國を苦しめず——米國の報復手段に出でざるか六、非買の條件は日本に備はらず——非買運動と國産獎勵——國産獎勵論者の誤解——支那人を學ぶ日本人七、我國當局者の不用意——他日を待つの外なし——何を以つて新しき國民的目標とする。

一

北米合衆國の排日を目的とする移民法に對しては、始めクーリッヂ大統領が裁可するか、却下するか、態度の不明であつた間に於てこそ、日本人の態度は甚だ冷靜であるを得たが、大統領が愈々之を裁可し、七月一日を以つて、遠慮會釋なく、實施されることに決定して以來、日本人多數の感情は遂に大なる刺戟を受けて、興奮せざる可からざるに至つた。私は日本國民の

與國に對して、道理あることゝ思ふ。

第一、日本國民は我國の國力に對して、從來餘りに强き自信を持つて居り、而して此自信は歐州戰爭に依つて、交戰諸國の國力の衰頽して居つた際に特に高められた。日本が巴里會議に於て世界五大强國の一と爲り、續いて華盛頓會議に於て、世界三大强國の一と爲つたことは、我國民の自尊心を盛ならしめることに與つて力あつたのである。其後國力の伸張には種々の頓挫を來し、殊に講和會議に於て、人種差別撤廢の要求を排斥されたり、第一回國際勞働會議に於て、日本自ら特殊國の烙印を自家の額上に印するやうな失態を演出したりしたには、相違ないが、兎に角五大國の一であり、三大國の一であると稱されたのが數年前の事實であり、今日未だ國民の記憶を去らざる所であるのに、今回突然劣等國並みの待遇の下に、移民入國禁止の制限を蒙るに至つては、事餘りに突然であつて、日本人の憤懣亦故なしとしないのである。

第二、從來日本人は米國人なるものを買被つて居りはしないであらうか。日本人は諸外國人中に於て、特に米國人と接觸し交渉する多くの機會を持つて居つたに相違ないが、日本人の米國人に對する理解力は果して幾何の深きものであつたらうか。祖國獨立の爲めに戰つたワシントン、人間愛の精神を發揮したリンカーンが日本人の眼に映ずる典型的米國人であつて、仁俠博愛、公正と云ふやうな標語こそ、米國の國民的精神を代表するものと考へて居り、是等の特質が自ら米國の國民性を爲し、斯くて米國に對する日本人の信頼を强からしめた事實の掩ふ可からざるものがある。開國の當初英國の全權公使サー・ハリー・パークスの頗る橫暴であつたのに對して、米國の全權公使タウンセンド、ハーリス氏が溫厚の資を以つて、能く我國の外交當局者を指導し、外交上の交渉に將又た通商條約の締結に大過なきを得せしめたことの如き、確に米國に對する日本人の好感を繫がらしめる所以と爲つたのである。然るに近年米國が遂に侵略主義を取つたり帝國主義を奉じたりして、極東方面に於て、日米兩國の利害の衝突する機會を繁多にし、時に全然日本を敵視するやに思はれることさへある其上に、移民問題に對する態度の嚴峻と爲るに隨つて、斯る米國に信頼する我國民の感情に冷却を來したかも知れないが、其れにしても國民の一部に親米的傾向の存することは、爭ふ可からざる事實である。斯く日本國民が進んで親まんとし、又頼らんとする米國が却つて排日計畫の實行に依つて、日本人に一擊を加へたとすれば、日本人の感情を不穩ならしめることの甚だしきは論を俟たない

第三、更に米國の態度の日本人をして怒らしめるものは　其

執拗の度を失することである。即ち今回の排日移民法の成立にした所で、實は往年の桑港學童分離事件以來の問題であつて、枝に葉を生じ、花に實を結んで、遂に日本人既得の權利すら脅かすに至つたものであるとすれば、排日移民法實施の後に、排日を事とする一部の米國人は百尺竿頭一步を進める考の下に、米國出生日本人の市民權を奪ひ、在米の日本人をして眞に天涯の一孤客たらしめざれば、已まざるに至るであらう。然らば通商條約に認められた內外國民平等待遇諸外國民無差別待遇の規定は何れの處に其本旨を見るを得るであらうか。移住民の入國に就ては、往年日本政府自ら條約に於て、除外的規定の設けられることを承認した以上は、入國の否認亦已むを得ない所に屬するとしても、入國後に於て、差別的待遇を蒙るが如き、到底日本人の忍ぶ能はざる所であつて、殊に將來に於ける差別的待遇の如何なる程度まで、發展するかを考へたならば、我國民として事の成行に安んずるを得ないのも、亦敢て怪むに足らないのである。

二

此時局の困難に際して、淸浦內閣は遂に何事をも爲さなかつた。米國駐在の日本大使が曩に國務卿ヒユーズ氏に書面を送り、排日法案成立の曉に、重大なる結果の生ずることを警告したのは、世間公知の事實であり、又所謂重大なる結果なる言葉に對する解釋が上院に於ける排日案の議決を一瀉千里の勢の下に、進行するに至らしめた次第であるが、然らば愈々排日立法の成立した今日、果して重大なる結果が起つたであらうか。日本政府は排日立法に對する抗議を米國政府に致したが、其抗議が容れらなかつた所で何と爲るであらうか。否日本政府の抗議に依つて、排日立法の左右されることは、始めから日本政府自身の豫期せざる所であつて抗議の如きは、寧ろ一場の形式に過ぎない、此事から所謂重大なる結果の生み出されるに至ることは、何人と雖も想像せざる所であらう。斯の如く政府の對米外交上に無能である一方には、國民の間に早くも國民自身の力に依つて、米國民の反省を促さうとする運動の生じ來つたことは、吾人の注目を逸す可からざる所である。此種の運動は果して之を目して國民的外交と稱するを得るか、國民輿論の反映とするを得るかどうかは、遽に判斷するに苦しむ所であるが、兎に角一種の國民的運動の起つたことは爭う可からざる所であつて、而して其重なる方法として外面に現はれたものは、左の如くである。

第一、自殺に依つて、衷情を米國民に訴へ、或は排日立法を不滿とする念を米國民に示すこと、

第二、舞踏、洋裝、婦人の結髪法等所謂亞米利加風として認められるものを排斥する趣意を以つて、時に舞踏場を騷がしたり、又亞米利加風に感染して居る人々に其風の廢棄を警告すること、

第三、米國產貨物を日本の市場から排斥する目的を以つて、米貨非買運動を起すこと、

今日までの處では、米國排斥運動は右の諸點に止まつて居るが此以上に進んだならば、或は米國人を雇傭して居る會社學校等に向つて、其解傭を迫つたり、又は米國人には其日常の生活に於けると、事業の經營に關するとを問はず、一切日本商品を賣却せざることゝするように、小賣商人に運動したり、又は米國人の雇傭される商業上若しくは家庭に於ける使用人に辭職を求めたりするようなことも行はれ、米國人をして居るに所なからしめるに至るやも、測り知るを得ない。然しながら右に揭げた三種の國民的行動の内、第一第二は國民の一時的感情に出るものであつて、其根柢必ずしも深しと見るを得ない。日本人が命を棄てた所で、又其之を棄てることが排日に對する憤慨の餘りに出でたものであるとした所で、爲めに米國人をして排日立法に對する方針を變改せしめるに足らないことは、恰も往年日本が支那に對して所謂二十一個條の要求を爲した當時支那人の内に、時事を憤つて自殺した幾多悲歌慷慨の士はあつたようであつたが其爲めに我國對支外交の根本方針に微動だも來しはしなかつたのと、異なる所なしと考へられる。對米問題に憤慨して、自殺するだけの決心があるならば、何故に死んだ氣に爲つてあらゆる困難に堪へ忍び、少しなりとも我國力の發展に資して以つて我國をして總ての點に於て、米國と對等の地歩に達せしめる努力を致さないのであるか。之を爲さずして、一時の感情に支配され、自殺をすると云ふが如きに至つては、自殺を以つて、一種の道德とする我國民多年の因襲の尚ほ今日に至つて、更まらざるものとして、吾人の不滿足に感ずる所である。

我國民をして此際米國風の生活を脫せしめる爲めに、勸告を試みる時に、暴力の伴ふやに想像される行動に出づるが如きも、排日問題解決の見地から云へば、殆ど重きを置くに足らず唯一部國民の感情を滿足するに止まる。青年士女のダンスに耽ることにして、社會の善良なる風俗と兩立しない嫌があるとすれば、排日問題の如何に拘はらず、何とか處分する必要を生ずるのであつて、處分法の緩慢なるものとしては、ダンス以外に世人の認めて、健全なりとし純潔なりとする娛樂を國民に與へて之を奬勵する方法があるし、處分法の嚴峻なるものとしては、總て營利事業として行はれる舞踏場に向つて、閉鎖を命じ、ダ

ンスは單に家庭内に行はれるものに限る方法もある。然し斯る方法の孰れを用ひた所で、排日問題の解決に何等の關係を有したいことは勿論であつて、單に斯る運動を爲す者に滿足を與へるに止まる。ダンスは歐米諸國到る所に行はれ、耳隱しや七三分け髮の束髮も果して米國から傳はつたか、巴里の流行を模したのか、不明であるのに、一切萬事自分等の氣に入らない事は米國風であるとして、此機會に排斥し去らうと云ふ感情一天張りの行動に對しては、何としても之に與するを得ない。

若し夫れ一時の感情の激する所から、我國に滯在する米國の官民に向つて、其生活上の安全を脅かすが如き所業は幸今日まで之を耳にしないが、若しも將來に起るようであつたならば、沙汰の限りである。排日立法は米國の立法部が之を制定し、大統領が之を裁可して、效力を生ずるに至つたのであつて、之に對して責任を負ふ可きものありとすれば、其れは米國民の全體でなければならない。駐日米國官民の如きは、此點に於ては全然無辜の徒であつて、彼等の利害や立場からすれば、寧ろ排日立法の制定を不可なりとし、日米國交の圓滑を期することに於て、ウッド大使と志を一にしたに相違ない。然らば今、排日立法を制定した米國全體に憎惡を感ずるからと云つて、直に其念を駐日米國人に移して、其生活を脅かすが如き、大國民の襟度に於て、許す可からざる所であり、又我國民の日常口にする武士道の精神にも反すること大なりとしなければならない。私は此點に於て、我國民が國家と國民との差別若しくは兩者の關係を辨知して、事に處するの必要を認めざるを得ない。

三

故に今日對米國民的運動として、私の重きを置くのは旣に掲げた三種の内第三の米貨非買運動であつて、此事が假に成效して、徹底的に行はれた場合に、如何なる結果を齎すものであるかに就ては、自ら愼重の考慮を要する。

本來非買運動の元祖は支那であつて、少しく外交上に不如意の事があれば、直に對手國の貨物にボイコットを行ひ、以つて其反省を求めようとする。英米兩國の如きも、屢此手に依つて苦しめられたし、日本も年來日支間の外交の圓滑を缺く爲めか、往年の辰丸事件以來、支那の爲めに、排貨運動の目標と爲ること少なしとせず、殊に先年大隈内閣の試みた二十一個條の要求に際しては、所謂國恥記念騷ぎを演ずる程の次第であつたから、排貨運動の勢も極めて猛烈であるやに稱された。然しながら斯く支那に於て、排貨運動の行はれること、頻繁であり、又時に其勢の甚だしきを唱へられるに拘はらず、其れが實際に成

效を收め、他國をして排貨の勢盛なるに摺伏して、能く支那の望む所に應ぜしめた事例の認む可きもの なきは、何故であるか。蓋し支那人の排貨運動たる、第一廣く其趣意に就て、國民の間に徹底するに至らない、第二外國貨物の排斥を聲明しても、其貨物が支那人に取つて、廉價であり、優良である以上は他國人を經由し又他國の商標を貼付して、支那內地に輸入される、第三幾ら外國物資を排斥しても、支那內地に於て、之に代る可き物資の產出の行はれない爲め、國民は消費制限の不便に堪へず、不知不識の間に、排貨運動を破らざるを得ざるに至る爲めに、其效果の顯著なるを得ざるものと考へられる。

私は考へる、一國をして排貨運動に着手し、之に成效して、對手國から外交上の關係に於て、讓步を得やうとするには、自ら其間に種々の條件の備はるもののなければならないことを、然らば排貨運動の成效には何を以つて必要條件とするか。其重なるものとしては。

第一、一國の特に排斥しようとする外國貨物は其國に於て、專ら需要されるのであつて、隨つて排貨の爲めに、市場を失うことは、其貨物を製造し、供給する國に取つて、經濟上大打擊であること、

第二、外國貨物を排斥する國に於ては、他の諸國に就て、容易に品質價格の著しく異ならざる物資の供給を受ける望みがあり、隨つて或る一國の物資を排斥する爲めに、國民生活上に大なる頓挫を惹起さゞる得ること、

第三、他の諸外國に就て、斯く容易に代る可き供給が得られないとしても、外國物資の排斥と共に、內國に代用品を生產物する事業が短日月の間に起り、國產品を以つて排貨の目的物に對する代用品たらしめるを得ること

第四、一國が如何に他國の物貨に排斥を加へても、後者は前者の物資に報復的處業に出でず、又時に或る處業を試みても、爲めに實質的損害を前者に加へるに至らざること

の四條件が擧げられる。是等の條件が一國に備はつて、其下に行はれた排貨であつて、始めて之を行う國に大なる損害を與へざると共に、對手國に相當の痛手を負はせ、其屈服を促すことが期待される。唯對手國が如何なる程度まで、痛手を痛手と感ずるかは、其國一般の經濟的實力に依つて、定まることは、論を俟たざる所である。

四

然らば實際問題として、我國に於て米貨排斥運動は現に起つて居るが、何處まで其れが發展し、又其發展した結果として、

能く米國をして屈服せしめるに至るかと云ふことを考へると、
私は恰も日暮れて、前途遠きの嘆を免かれない。第一我國に於て
は、米國の排日立法を遺憾とする國民的感情の起つて居ること
に就て疑を容れる餘地を存しないとしても、其感情が如何なる
邊まで、白熱化し、又高潮したであらうかと云ふ問題に爲ると
私は日清戰爭當時若しくは日露戰爭當時の國民的感情とは、到
底同日にして談ず可からざるものであることを感ずる。日清戰
爭前に於て、支那が朝鮮を自國保護の下に置いて、政令を施さ
うとする、日露戰爭前に於て、露西亞が滿鮮に侵略を試み、其
飽く所を知らざる領土慾を充たさうとする。若しも兩國をして
其爲さんとする所を行はしめたならば、遂に日本の國民的存
在を危うし、又國民的生活を脅すと云ふことが日本國民に諒解
されて、遂に擧國一致の態度を以つて、兩國に戰端を開くに至
つたのである。固より其此所に至るに就ては、當時の政府が國民
的感情を刺戟するに勉めたことは勿論であるが、斯る刺戟を受
けなくとも、當時の國民が自發的に支那に對し露西亞に對して、
敵愾心を懷き、其れが嵩じて、日本をして擧國一致の下に戰爭に
從はしめるに至つたのであるが今日の我國に於て國民の間に、
米國に對して、往年の支那や露西亞に對すると同樣の感情が釀
成されて居るかと云へば、私は決して其然るを認めるを得な
い。其れは第一、日本が米國に依つて、移住民の排斥を受けたゞ
けでは、固より屈辱であり、損害であるとしても尚ほ日本の經濟
的立國を傷けたり、國民的運命を害したりする程の事件とは考
へられて居らない、殊に移民排斥と云ふことが、突如として起つ
た次第でなく、桑港の學童離隔とか布哇移住民の轉航禁止とか、
土地所有權の禁止とか、種々の形態に於て、所謂漸崩しに行はれ
隨つて之に對する國民の感情が餘程慢性的のものと爲つて居
り、第一我國に於ても從來米國の爲した移民排斥政策を甘受し、
殊に紳士協約まで締結して對手國の意を迎へるの處置に出でた
のみならず、人種差別撤廢の要求の如き、一度主張しただけであ
つて、別に之を固執する態度を示さず、第一回國際勞働會議に於
ては自ら特殊國の取扱を受けることを諾し、米國をして日本勞
働者を排斥せしめる恰好の口實を日本自ら作り出した趣きさへ
ありとすれば、愈々米國が排日的立法を制定した所で、已むを
得ざる成行であるとする諦めが國民の間に行はれて居る結果で
あるとなしければならない、現に日清戰爭や、日露戰爭の直前に
於ては、筆を揃へて、淸國を擊つ可しとか、露國を懲す可しとか
絕叫して、國民的感情を刺戟する外、他念なきの趣きを示した都
下大小の新聞紙が今回の米國排日問題に接しては、單に排日立
法の制定を日本の爲めに、時に日米兩國の爲めに、遺憾とする念

けに止まり、此以上に何事をも述べない、述べるものがあつても單に他日の機會を待てと云ふに止まるのに徴して、人心の趨嚮如何を察し得られると思ふ。

斯る國民的感情を控へて、米貨非買運動を行つたとした所で、其徹底的に行はれることの望まれ難きや、論を俟たない。或る者は米國品の自家の嗜好に適する故を以つて、或る者は其價格の低廉である故を以つて、或る者は其品質の優良なる故を以つて、非買運動者の眼を掠めて、米國品の需要を續けるのは勿論であつて、需要の存する限り、供給を謀り、輸入を行ふ商人のあることは、疑を容れない。現に非買運動者が三越、白木高嶋屋等の百貨商店を歴訪して、米國物資の販賣中止を勸告した際、三越呉服店取締役の某なる者は此勸告に應じ難き旨を答へたと云ふことを新聞紙の記事に於て一讀した。私は三越の取締役某を以つて、存外正直者であると認めると共に、營利以外に何ものをも有せざる商人根性を暴露した者であると信ずる。賣つて儲かる以上は賣る、買はうと云ふ顧客のある以上は、之に應ずるだけの物資を備へると云ふのが、百貨商店であらうが九尺二間の小賣店であらうが、店舖を經營する者の商業的精神でなければならない。國民的感情に何等の興奮を來さず、多數國民は依然として米貨を購はんとする場合に、獨り小賣商人をして米貨の仕入れを停止せしめようとするが如き、無理なる要求である。然らば對米問題に就て、國民的精神を興奮せしめるには、如何なる方法を以つてす可きか、此一事こそ非買運動者の畫策す可き所であつて、此點に效を奏し、天下の人心自ら米貨を排斥するに至つたならば、如何に三越と雖も、樓上樓下一の米國品を備へ付けざるに至るであらう。米國品に對する國民の嗜好愛着を今日の儘にして、一方に百貨商店を責めるが如き、其間に大なる矛盾の存することを認めざるを得ない。

五

然らば非買運動者の運動は能く日米貿易の趨勢を一變するまで、米貨排斥の目的を達し、又其目的を達することに依つて、日本の經濟生活に何等の損害なきを得るであらうか。此點に就ては、日米貿易の數字に就いて、立論するの外はない。而して從來多年に亘る事實から云へば、第一日本は米國に向つて、輸出する所甚だ多きに對して、米國から輸入する所は必ずしも多しとするを得ない、第二日本の對米輸出は輸出貿易全體に於いて餘程強い割合を占めてゐるが、米國の對日輸出は輸出貿易全體に於て、重要視す可きものでない、第三日本の對米輸出は多く有用品であり、奢侈品であるが、米國の對日輸出は必要品を以つ

て、重なるものとする三個の事相が觀察される。即ち日本が近年米國から輸入する。物資中、價格の相當の金額に上るものとしては、實綿、繰綿、鐵、木材、革類、苛性曹達及曹達灰、製紙用パルプ、建築材料、石油、紙類、自動車及同部分品、機械及同部分品が擧げられる。而して此の內輸入額の最も多きは實綿繰綿の二億圓に上るものであり、其の少なるものであつても、苛性曹達や製紙用パルプの百數十萬圓に上るを見る。若しも我國が米國物資に非買を行ひ、聊かなりとも米國の對日輸出業者又は輸出物資の生產者に打擊を加へて、排日政策に反省せしめ、斯くて輿論を左右しようとするには、日本は如上の物資に對して、徹底的非買を行ふことを要する。固より上記の諸物資は一の米國が獨り我國に供給する次第ではなく、綿花に就ては印度の競爭あり、木材に就ては亞細亞露西亞の競爭があり、紙や機械に就ては、英吉利も亦日本に供給するもの少なしとしないが、現に右の諸物資に就て、非買を行へば、米國の供給の絕滅したゞけ、他の國に就て補充の道を求めなければならないことゝ爲る結果價格の騰貴は免かれ難き所であつて、其物資の多く必要品であり、原料品であり、補助品であることの關係から、供給の減縮價格の騰貴が內國の製造工業に及ぼす影響は重大であるとしなければならない。我國民にして如何に算數に乏しいとしても、綿花の輸入を排除して、紡績業の經營に困難を及ぼし續いて綿布綿絲の輸出に不振を招いて以つて得たりとするものはないであらう。木材建築材料の輸入を遮斷したならば、昨今米國木材の供給に依つて、低廉なる價格を以つて、家屋を建築しつゝある者は自然今後の木材供給に大なる不便を感じ、自ら復興事業の進行を妨げるに至ることも亦世人の認める所であらうし、機械其他補助品の輸入亦總て同樣の事情に支配されざるを得ない。

若しも米國が日本の非買に依つて、蒙る所の影響の容易ならざることを感じ、之を回避する爲めに、排日立法を緩和するが如き手段に出でたならば、日本の對米非買政策は正に成效を博したものと云へるが、日本の米貨非買は事實に於て、大象の背中に蚊が留まつたと同じものであつて、痛痒を加へる程度極めて微弱であるとすれば、斯る效果を望むが如きは、恰も痴人夢を說くに類する嫌なきを得ない。蓋し千九百二十二年度の統計に據れば、米國の輸出貿易は三十七億六千五百萬弗を數へるが、其內に於て對日輸出は二億一千二百萬弗であつて、全體の十九分の一に當るに止まる。日本の米貨非買政策が徹底的に行はれたとして、尙ほ輸出貿易の十九分の一を失ふに過ぎないとすれば、其の爲めに米國の國論に動搖を來すが如きは、遂に望む可から

さる所である。一方に我國としては斯く米國の物資を排斥することに依つて、他の一方に米國の爲めに報復的處置に遭ひはしないであらりか、之に遭つた場合に、蒙る打撃の如何を考慮することを要する。蓋し日本の對米重要輸出品としては、茶、罐詰食物、屑絲、眞綿、植物性脂肪油、樟腦油、生絲、製帽用眞田、絹織物、綿織物、絹製手巾、陶磁器、ブラッシュ、玩具等が擧げられるが、就中重要なるものは生絲であつて、其米國に輸出される高は輸出總額の五分の二内外に當り、更に生絲の外に絹織物絹手巾屑絲等の輸出價格を加へたならば、其割合の一層強きに至ることは、論を俟たない、斯く米國市場に於て、我國の生絲が如何なる價格を以つて賣買されるか、其輸出額は如何なる高に上るかと云ふことは、啻に我國輸出貿易の消長を左右するのみならず、經濟社會に於ける景氣の良否を支配し更に進んで生絲輸出港に於ける輸出業者生絲工業に關係する農村全體の生活に影響を及ぼすのである。然も生絲なり、生絲を原料として製造される絹織物の類は米國人の生活に取つては、必要品でなくして、有用品であり、奢侈品である。一時歐洲戰爭中、毛織物や、毛織絲に對する需要甚だ盛であつて、其供給に不足を告げるや、米國に於ける絹織物の需要著しく增加し、絹シヤツ、絹靴下の類は廣く社會到る所の方面に需要され、時に其等を目して必要品とするの説もあつたが、戰後毛織物の供給、舊に復する今日に爲つて見れば、絹織物を必要品とする考への間違ひであつたことは、何人にも諒解された。一方に生絲に對しては、支那や伊太利の競爭の行はれるは勿論、人造絹絲の競爭亦等閑に付し難きものありとすれば、或は米國は生絲に對して、非買を行うに、最も適した地位に居ると云へるし、日本は此點に於ても最も不適當の境遇に立つものと考へられる。且つ大體の原則から云へば、一國の貿易は其輸出に依つて、輸入を購ひ、輸入に依つて、輸出の行はれることを常とする。日本の如き原料品を外國から輸入することの多き國に於て、其然るを見るのである。然るに日本自ら米國物資の輸入を排除する、殊に其内には重要なる原料品すらある場合に、一方に如何にて輸出貿易の以前と同一程度に於て行はれることを期し得られるであらうか。排貨は遂に天に向つて、唾するに、異ならないのである。

六

凡そ一國が他國の物資に對して、非買政策を行ひ、他國を壓迫して、能く其目的とする所を達するには、恰も他國と關稅戰爭を行つて、優勝を占めると同一の地位に居ることを必要とす

る。關稅戰爭に依つて、一國が優勝者たらうとするには、其國は他國の物資に對して、最大の需要者であつて、需要の增減は直に物資產出國に於ける產業の運命を制するが、自國は其國から供給を受けることを以て、唯一の源泉とせず、他の諸國から供給を受けることも出來れば、自國內に於て生產することをも亦難しとせざる狀態に居ることの諸條件が備はらなければならない。斯の如くして關稅戰爭が意外の長時日に亙るも、對手國を苦しめるだけで、自國の損害を輕微ならしめるを得る道理であるが、非買運動亦之と趣きを一にし、其成效を期するには關稅戰爭に於けると同一の用意あることを要する。此用意なく、一時の感情に驅られて、濫に非買運動を爲すが如き、經濟上に於て、無價値でありとするの外はない。

由來外國物資の非買運動と國產奬勵論との間には、常に離る可からざる關係がある。支那に於て、日本の物資排斥を唱ふるや、必ず國產奬論を以つて、之を煽揚する一方に、英米兩國の事業家の如き、常に日本の競爭を喜ばざる者は此機會に日本の競爭品を市場から排斥し去らとする考への下に、陰に陽に國產奬勵論を助長し、殆どそれに次いで自家頭上に同樣の災禍の降り來ることを忘るゝの趣きすらある。日本今日の米貨非買運動には斯る外國の煽動の行はれる餘地を認めないが、一方に國產奬勵論の潜在しつゝあることは、疑を容る可からざる事實である。國產奬勵の見地に於て、米貨の非買を行ふ以上は、米貨に代る可き米國以外の外國貨物があつても、國產品を以つて之に充てることを必要とするのであつて、國產品の前には、一切の外國品を排斥することゝ爲る。國產奬勵と云ふことは外國品と內國品と共に一國の市場に供給されつゝある場合に、後者は前者に比較して品質劣等であり、又價格不廉であつても、尙ほ其國產品であるの故を以て之を重用し斯くて外國品を一國の市場から驅逐し去らうと云ふ結果に爲る。國產品が外國品を驅逐した曉に、能く其品質を改善し、又價格を低廉にして、外國品に對して、遜色なきに至るや否やは、最も重要なる問題であるが、斯の如きは國產奬勵論者の意に介する所でなく、唯國產品であるの故を以つて、國民をして之を愛用せしめれば、卽ち足れりとするのであつて、斯の如きは愛國心と經濟論とを混淆した非難を免かれない。今回の米貨非買運動に關聯して、世間には例の國產奬勵論を擔ぎ出した者がある。或は我々に於て從來具體の定まらざる年少子弟の間には、時に物資の品質等を辨へず、唯舶來品であるの故を以つて、之を可なりとするが如き幼稚低級の者も見受けられた。斯る弊を警めるには、國產奬勵論を以つてするのも、一個の政策を以つて、許されるかも知れないが、彼等の如

さは本來一小部分の消費者であつて、他の多數者は思慮分別の下に、米貨の價格に比較して、品質の優良であることを認めて、之を愛用する次第であるから、國産奬勵論を以つて、彼等に臨んだならば、本來の目的とする經濟生活の要旨に反する結果を見ざれば已まざる道理である。國産奬勵論を高唱して、米貨排貨の傍ら、他の外國貨物をも排斥し去らうとするが如き、支那人の排外貨運動に於ける故智に倣はんとするものであつて、日本人の經濟思想が支那人の夫れと異ならざるは、私の驚嘆する所である。

七

要するに米國の排日立法に對する我國の善後策が今日の如くに紛糾し、政府に確乎たる方針なく、徒に民間に於ける米貨排貨運動の如きものを以つて、之に當らなければならないように爲つたのは、歴代内閣の移民問題に處するに無方針であつたことが一の原因であり、更に之を廣い眼で眺めれば、我國民の經濟生活を如何にして安定せしめ可きやに就て、當局者の施設や、用意の足らなかつたことに、之を歸しなければならない。嚢に述べた如く、米國の排日問題は今日に始まつた事でなく、遠き昔に根源の存するを見るのである。其根源から芽を生じ、葉を出し、枝を張るに隨つて、日本は何を爲したであらうか。芽を摘み、葉を捨て、枝を切ることはせず、唯其れを自然の成長に任せ、一歩一歩に退讓することを常とした。其愈々退讓し得ざる今日に至つて、遽に周章した所で、何の用を爲すものであらうか。本來一部の國民を外國に送り、契約勞働者と同様の狀態に置いて、彼等をして力役に就かしめるが如き、一等國の爲す可き所ではない。一等國として今日の國際間に處して、經濟を營む以上は、外國に移住民として自國民を送遣せず、總ての國民を擧げて、自家の領土に豐滿なる生活を遂げしめるだけの經濟的立國策がなければならない。然るに我國に於ては斯る經濟的立國策の未だ攻究され、實行されたことのないのは勿論、却つて下等勞働者や農民を移住民として外國に送遣し、彼等の送還金に依つて、國を富ますことを以つて、經濟政策の要訣とする考へすらあつた。即ち移住民をして勉めて多額の送還金を本國に致さしめる結果は彼等をして移住地に於て、充分に羽翼を張るの力なからしめ、寧ろ彼等の早く本國に歸還することを促す。移住民の子女で、移住國に於て出生した者にも、尙本國の國籍を離れざらしめるが如き、當局者自ら移民問題の解決を困難ならしめたものであり、一方に米國官民は日本人の彼地に於て永住せざること、自己の身邊に資本を貯か

ざること、二重國籍を有することを掲げて、日本人を以つて同化し難き國民であるとする。斯くて日本人排斥の聲を生じ來つた場合に、今日まで日本政府が根本的に排斥論を緩和し、除却する何等かの徹底的政策を講じたかと云へば、私は一として其存するを認めない。移民問題が切迫して、遂に米貨非買を行ふこと、今日の如きに至るものと想像されたならば、何故に我國の行ふ非買政策をして有效のものたらしめるだけの經濟的施設を講じなかつたのであるか。輸出品の大宗たる生絲は米國を殆ど唯一の市場とし、製造工業中其基本とし、關鍵とす可き綿絲紡績業の原料たる棉花は米國に其供給を仰ぐ今日の狀態を以つてして、我國が米貨非買運動を行つた所で、結局我國力を疲弊せしめるだけで、他に得るものゝ少きことは、論を俟たない。非買運動が我國の獨相撲に終る一事は私の想像するに難しとせざる所である。

世間に隱忍自重と云ふ言葉を聞く。此言葉は老人連が一時の氣休めに唱へる所のようであるが、私も今日に於ては、此言葉を以つて、移民問題に臨むの外なきことを遺憾とする。往年の三國干渉、遼東半島還付から日露戰爭に至る十年間は我國民の間には、强露を挫かうと云ふ國民的目標があり、此目標に達するに就て、國民的精神を緊張せしめたもの少なしとしない。然らば何を以つて新しき國民的目標とす可きであらうか。或は一部國民の間には戰爭に依つて對米移民問題の解決を付けようとする者もあるさうであるが、斯る殺伐なる方法ばかりが日本人の腦裡に浮び來ると云ふことは私の甚だ遺憾とする所である。

私は日本人が日本をして外國に一部の同胞を移住民として出稼勞働者として、送遣することを要しない、否彼等にして日本國土に駐まつて生活する希望ある場合には總て其希望に任せて豐滿なる生活を營ましめるを得る經濟狀態を作り出すことを以て國民的新目標とすれば、即ち足れりとするものである。

三派聯立內閣に對する批判と希望

新內閣に對する希望の數々

法學博士 渡邊鐵藏

五月の總選擧の結果として、憲政會が所謂第一黨の地位を占め、政友本黨と政友會は大差なく、結局護憲三派の勝利に歸したやうである。斯くの如く憲政會が第一黨となつた原因は、第一には勿論政友會の分裂に在る。既に改革非改革派の爭ひの際に分裂せんとして居た政友會は山本內閣の倒潰を機會に分裂し、其勢は將に二分されることゝなつた。政友會は膿んだるものゝ潰れるやうに分解したが、時運の然らしむる所とは云へ、憲政會にとつては勿怪の幸であつた。最大の者が崩潰すれば其次位に在つて伸びんと欲して伸びることの出來なかつた者が自ら勃興するのは自然の理である。第二に所謂護憲の旗印は三派の勝利に最も強い援護となつた。貴族內閣と稱し得べきものは、前の加藤友三郎內閣以來既に三回目であるが、從來餘り護憲の聲が擧がらず、今回に限つて其聲の高くなつたことは、勿論研究會の一部の人が積極的に活動したことに對する輿論の反感もあるが、一方政友會の機を見るに敏なる策士が、直覺的に自己の環境と機運を察して、電光石火的に最も好都合な護憲の旗を錦の御旗に倣へて洋騎した目先の早い機敏さが成功の原因となつたと思ふ。既に政權は二度も政友會の前を素通りした。絕對多數黨である政友會が二度も政權を取り得なかつたことは之れを貴族の跋扈とのみ見ることは出來ぬ。政友會自身が全く國民の輿望を失つて居たが爲めである。從來利權黨を以て目せられ、政府、貴族院との妥協苟合の本家本元である政友會が、護憲の旗印を立てるなどは滑稽千萬なことであるが、然し貴族內閣が丁度三度目で、而も研究會の野心運動が國民の感情を害して居た時

機であるので、獨力では政權を取る見込のない政友會が最も發言權のある、國 、同情を寄せて居る憲政會と行動を共にすることは極めて悧巧な遣り方である。政友會の護憲の旗印を立てた動機は如何樣であつても、其の形は丁度時勢に適合して居たので、偶々憲政會と行動を共にして、護憲運動はあのやうた勝利を得ることが出來た。護憲運動は憲政會が獨力で主張すれば最も有意義のものである。曾て數年前政友會と研究會の關係が益々濃厚とならんとした時に、私は貴族院の多數派である研究會が、下院の一大政黨と縱に聯合するに至れば貴族院の機能を失ひ、遂には憲政會の背後に國民が立つて貴族院、殊に研究會と爭ふやうな時機が來はせぬかといふことを述へた說を新聞紙上に述べたことがあるが、今回の護憲運動は將にそれである。或人の云ふやうに曾て議會に於て西にレーニンあり、東に原敬ありと罵倒した永井氏が盛岡市の原敬氏の墓畔に立つて、政友會擁護の演說をする如きは一見矛盾のやうであり、又政黨の歷史、政策、感情等の點から融合し難きものがあるに拘はらず、護憲の旗印の下に憲政、政友の合同したことは、其動機の如何に拘はらず、當面の選擧運動に際して投票者を動かすには最も好い旗印であつた。第三には輿論の援助が大に力があつた。憲政會に對しては、多年一方政友會の黨弊と暴狀とに對する世間の反感と、從つて憲政會に對する同情の爲めに、選擧が有利にたる傾向が現れんとして居たが、殊に憲政會が普通選擧を唱へて以來、青年、勞働者の之れに贊成する者が增加し、此前の總選擧に於ても言論戰、其他の運動に於て、憲政會の爲めに青年の活動した影響が著るしいやうであつたが、今回は護憲の旗印に導かれて其熱が一層加はつたやうである。殊に最も護憲運動を援助し、又一般の輿論を刺戟したものは新聞紙の活動である。從來の總選擧に於ても新聞紙が聯合動作を取つたことは其例を知らないが、今回の護憲運動に對しては、最初より大新聞紙が擧つて熱烈な援助を與へたことは、護憲派の勝利に重大な影響を與へたことゝ思ふ。

兎に角護憲派の勝利、憲政會第一黨の結果となつたので、誰れしも內閣組織の大命の加藤憲政會總裁に下ることは疑はなかつた。然し憲政單獨內閣か、聯立かに就いては疑問を抱く者があり、殊に高橋政友總裁、犬養革新首領の入閣は多くの人が否定して居たやうである。政黨の分合、內閣組織に對する態度とは、我國に於ては悲い哉主義政綱に依るものではなく、政權獲得の便宜、自黨の現在及び將來の利害を基礎とするのであるから、此點から考へれば政友會としては內閣に列せず、閣外に在つて一時憲政會を擁護し、自分の都合に依つて或は政友本黨と

の経を尽す機會を見に居るのではなからうかと思つたが、意外にも內閣に列することゝなつた。或は此機會に大臣になりたい者が入閣したとも惡口を云ひ得るかも知れぬが、然し高橋總裁が入閣したことは護憲運動の責任を明かにしたものと見得る。然し此關係が何時迄續くかは疑問である、憲政會としては狼と一緒に旅をするやうなもので、政友會としては虎の道伴れとなつて居るやうなものである。而も此狼は油斷を見澄して何時喰ひ付くかも知れぬのみならず、今喧嘩をして居る仲間と何時の間にか仲直りをして突然攻勢を取るかも知れぬ。又虎の方でも今は一人では威張れぬから狼と道伴れになつて居るが、機會さへあれば獨り天下を占めやうと窺つて居る次第である。從つて狼が謀反しさうた樣子の現れた時、又虎が自儘にならぬので那癖を起した時には解散の時機である。解散が行はれゝば、在野黨當時でさへ第一黨となつた憲政會は、朝に在つて選擧に臨めば易々として百八十、二百以上の頭數を揃へ得ることゝ思ふ。況んや普通選擧でも實行された後の選擧であれば絕對多數を占めることにもならう。

此內閣の貴族院に對する關係は、研究會に對する行掛り上甚だ困難には相違ないが、護憲三派の聯立の鞏固な間は今迄の總選擧の時の行掛りもあり、新聞紙及び一般の輿論は貴族院殊に研究會と內閣とが衝突するやうなことがあれば、寧ろ內閣を援助するやうな形勢となるであらうから、研究會としてはうつかり內閣に楯を突く譯にも行くまい。幸にして傳統的の是々非々主義の旗幟の下に隱れて居ることであらう。勿論政友と密接の關係のある部分の人は種々策動もしやうが、研究會全體としては努めて正面衝突は避けることであらう。從つて內閣の難關は矢張り三派協調の破れることにある、

今回の內閣は三派聯立とは云へ、總理大臣、大藏、內務の兩大臣は憲政會がこれを占めて居るのであるから、無論其政策は憲政會の政策を行ふものに相違ない。國民も亦それを期待して居る。加藤內閣は其政策として普通選擧の實行、行政、財政の整理、綱紀肅正等を揭げて居るが、普通選擧は憲政會も革新俱樂部も、從來の行掛上當然第一の政策に揭げねばならぬが、其他の政策に至つては出來る丈け具體的な現實に必要な項目を揭げて、只御座なりの政策は拔きにして貰ひ度い。私の揭げて貰ひたい主たる政策は凡そ次のやうたものである。(一)震災地の復興、今回の大震災が困難であること、其損害が戰爭以上の大損害であること、其復興は單に罹災地の爲めのみならず、國家全體の安全、充實の爲めに最も必要であることは屢々其の力說した所であり、殊に其當時に於て最も重大なる問題を第一に政策に揭

ぐべきことが寧ろ内閣としてなすべきことであるに拘らず、此問題が前内閣に於ても第一の政綱として明示されない事を頗る遺憾に思ふ。本誌前號にも述べた如く、帝都復興計畫は數次の政變と解散、總選擧の餘波を受けて甚しく遲滯齟齬し、罹災人民の迷惑困憊其極に達して居る。此際迅速に復興計畫を施行し、且つ出來るだけ之れを完全にすることは、新に國民の期待を以て生れた新内閣としては第一に行はねばならぬ問題である。就中帝都の土地區劃整理の問題は再び得難き此の機會に於て、帝都を近代都市として再興し、帝都の安全と利用の爲めに百年の長計を樹てることであるから、是非共其遂行に援助せねばならぬ。又建築助成の問題に就いても、此際政府が根本的の考慮をなすに非れば、悔を百年に殘すのみならず、數年の後に後悔臍を噬むやうなこともあらう。今回の大災害は火災が最も慘害を生ぜしめたのであつて、東京の如きは地震ではない、火事だと云ふべきであるに拘はらず、道路計畫、其他土地の改良に就いては相當の計畫が出來たに拘はらず、肝心の燒けた建物の復興に就いて政府が何等の方策を講じて居ないことは只其無策呆れるの外はない。東京丈けでも五百萬坪、約十億圓に上る建物が燒失して居るのである。平素でさへも巨額の資金を要する建築に就いて、何等特別の企業組織金融機關なくしては、其供給殊に改良の困難な事は屢々私の述べ來つた處であるが、今回の如く突如として都市の半部を燒失した時に當つて、建築に對して何等の組織援助手段を考慮せずして、帝都の復興、殊に安全な帝都を出現せしむることの不可能なることは云ふまでもない。建築改革、卽ち耐火、耐震の家屋の普及の事は最も重要な、全國的な政治問題として、總理大臣の着目すべき問題である事は、多年私の唱導し來つた處であるが、少くとも今回の大災害を機會として、せめて罹災地なりともそれを實現せしめたい。實狀を考へても、銀座通りの大商人でさへも、獨力で本建築、殊に耐火、耐震建物を建設し得る者は寥々たるものであらう。況んや神田、下谷、淺草其他一般の罹災者に對して何等建築の企業組織、資金の援助等の方法を講ぜずして、眞に安全な帝都の復興が出來るものと考へれば、それは甚しい誤謬である

復興財源に關しては既に屢々本誌上に於いて論じたる事故、これを繰り返さぬが、前内閣の如く一時逃れの全部公債に依るやうな方針に固着せず、必要に應じ、適宜增收を計るも必要があらう。斯くの如き國難に當り、酒、煙草の如き消費税、專賣益金を增加することは理由なきことではない。殊に復興事業の進捗と共に勞働收入の增加は著るしいものがある故、復興期間、譬へば五六年間、酒造税一割、煙草一割値上げを斷行すれば、

之れ丈けでも一年三千萬圓の增收は出來る。猶既定の復興財政の爲めに公債を募集せねばならぬ額も甚だ多いが、他方に於て、震災以來、大藏省方面に於て、芝居の夢の如く、本當か嘘か譯の分らぬやうな形で、此十ヶ月の間消へたり現れたりして居る例の割增付小額債券募集の問題も、どうか早く決定して貰ひたい。此問題に就いても私は屢々論じ盡したのであるが、既に協議を經た復興計畫豫算中の幾分の一、漸次行はれんとする本建築費の十數億圓の約二分の一、其他公共の營造物等の復舊事業費の幾分の一、併せて七億乃至十億の金は、此五年乃至七八年の間に勞働收入として、臨時の增加を見るものと認めることが出來るから、之等の資金の一部分を吸集することは財政の上からのみならず、奢侈の防止、風紀の維持の上からも必要であるから、速かに少額債券發行の方法をとつて貰ひたい。嘗て日比谷公園で地震展覽會を見た際に、元祿十六年、安政二年の大地震に關する多數の陳列せられた繪は、其九割まで花柳界の大繁昌、殊に職人の大散財の模樣のみを現はして居る。此狀況は二三年の後には必ず東京にも起つて來る。此意味に於ても割增付を以て、興味をつけて、遊資を吸集することは最も必要である。(二)預金部運用制度の改革斷行。此問題も私は多年唱へ來つたのであるが、輿論も亦漸次之を高調して居るに拘はらず、何の內閣もこれに手をつけやうとしない。政權を把持する者が、內密で自由に使ひ得る巨額の金を持つて居ることは、其最も好む處であらうが、之れは立憲政治の本旨に反し、國民の最も迷惑する所である。預金部資金 就中郵便貯金が十億圓を越え、將來每年一億圓增加を豫想せらるゝに拘はらず、それが一大藏大臣の任意に運用せらるゝ事は、官僚內閣の場合よりは政黨內閣の場合に、更に一層の弊害を生ずる。官僚は養ふべき多くの乾兒と地盤を持たぬが、政黨は多數の乾兒と地盤を持つて居る。從來政黨は植民地、特殊銀行預金部資金等國民の眼の屆かぬ所を濫用して、其勢力の扶植 利益の吸集に努めたことは、既に國民の飽きる程見た處である。此の特殊銀行の大改革、大整理を行ふと共に、十億の巨資を擁する預金、資金の運用制度を確立すべきである。十億の郵便貯金は今や放資し盡されて殆んど殘りを止めない。然るに一般國民は勿論大藏省の官吏と雖も其運用の實狀を熟知する者は少い。政府は銀行の取締り、貯蓄銀行、保險會社の資金の運用に就いて種々の干涉を試みる。郵便貯金の運用に就いて、亂暴狼藉の限りを盡して、無責任の最も標本を示すことは啻に立憲の本旨に悖るのみならず、金融道德を破壞するものである。新內閣は損な廻り合せではあらうが、どうか是非共此際郵便貯金の運用委員、其

他適當の制度を設けて改革に努められたい。簡易保險に就いて運用委員を設けながら、肝心の郵便貯金に公開な制度を設けないことは輕重を誤つて居る。(三)税制改革、税制改革は彼の財政經濟調査會が設置された以來、絶えず當局は研究調査を續け、輿論は之れを催促して居るに拘はらず實行されない。戰爭の好景氣終了後の恐慌及び不景氣時代を受けて、更に今回の大災害に遭ひ、行詰つた經濟界、金融界は更に行詰り、民力は疲弊の極に達せんとして居るのであるから、行政、財政の整理を計り、出來得る丈け負擔の輕減を計ると共に、負擔の公平を期する必要がある。假令或種の租税總額としては減少せずとも、租税系統の立て方、課税方法等の改良に依つて合理的の課税をすれば、納税者は負擔を輕く感ずるものである。餘裕のある時は無理な税も負擔しやうが、苦くなれば租税が合理的であつて負擔が公平でなければ、諸方に苦情が起り得るものでるる。今税制改革を詳論する時を持たぬが、營業税の地方移讓、特別市街宅地税(地價税)の賦課、都市交通税の移讓等は割合に容易に解決出來る事と思ふ。東京市に例をとつて見ても、之等の租税の移讓又は新設が認められゝば、容易に二千三四百萬圓の增收を得るのであるから、復興財政が樂になるばかりでなく、將來の東京市の財政を助けること少くない。從來我國の租税及び公債政策が余りに中央集權的であつて、地方自治體に對して過度の干渉を與へ、又は之を制肘する傾向があると思ふ故、此意味に於ても、此際中央と地方の財政に關して大改革を加へる必要があらう。然らずんば地方は事業を行はないか、若くは不合理な、又無用な財源を求めて地方民を苦めることになるであらう。從來屢々聞く地方重課の怨聲は、寧ろ税額の重いことより、課税の種類と程度が誤つて居るためであると思ふ。(四)、選擧制度改良。普通選擧は憲政會の近年來の主張であるから、理非を分たず、此内閣は之れに目鼻をつけずばなるまい。之れは憲政會の死活の分れる處である。之れに依つて憲政會は磐石の如き基礎を得るかも知れないが、又蹉跌するかも知れぬ。

此内閣が普通選擧の實施に指を染めんとするに先立つて、よく考へて貰ひたいことがある。普通選擧は新聞紙上に於てかなり強調され、又青年の大部分、一部の勞働者等に依つて要求されて居るやうであるが、選擧權に對して、國民が、否、普通選擧に依り選擧權を與へられんとする國民が、どれ位の理解を持つて居るかといふことは、豫め十分熟慮することを要する。現在に於ても選擧權が眞面目に利用されて居ないことは、選擧の實際に關係したものが最もよく知つて居る處である。選擧に勝利を得るに最も必要な條件は縁故と買收であるとは聞く。言葉

を換へれば地盤と金力といつもよい。個人的に如何なる優秀な候補者であつても、全く縁故をたどらず、買收をしなかつたならば、少くとも大都會以外に於ては、どんな馬鹿や不良の徒と競爭をしても勝利を得ることは困難である。言論戰に壓倒的の勝利を得たやうでも蓋を開ければ大敗北といふ實例は多々のる。如何に政治教育が發達しても、肉親の情誼、深い個人的關係を絶ちきつて、公平に、優秀な候補者に投票せしむるやうにすることは殆んど不可能とも思はれる。英國の如き政治教育の發達した處でもどれ程までに行つてるかは疑問である。古來敵味方に分れて命の取りやりをすることもあるが、矢張例外である。實際問題としては公徳心は矢張深い情誼には負けるのが原則と諦めねばなるまい。然し單純な知己、依賴等に動かされることは選擧權の尊重すべき所以、優秀な候補者を議會に送るべき國民的義務を悟れば改まるやうにならうと思ふ。然し大多數の選擧權者は、勿論候補者にとつては知己でないから、固い政黨の地盤は別として、大部分は買收に依つて動く者である。顔も見ない從來名も聞かない候補者に、一日の暇を潰し、足勞をかけるに就いては、何か報酬がなければ動かないといふのは、選擧權の何者たるかを十分に理解しない者にとつては無理もないことである。假令、かなり名を聞き、多少尊敬し、或は言論に耳を傾けるやうなことがあつても餘程の感動を與へるに非れば矢張金を餘計に貰つた方が有難いことになる。で、買收の効果、實彈の威力は絶大なものがある。我々が候補者、運動者の幾人かゝら聞く話は殆んど買收の巧拙、金力の大小が適當の場合に決勝となるものであるといふ。法律は買收された有權者を罰しても、投票は無効とせず、又候補者に累を及ぼさないのであるから、玆に三千票を全部買收して當選し、二千九百票を清き方法で獲得した者があつたとし、右の買收が發覺しても當選の効力には何等影響せぬ。之れでは買收し得だから、參謀長か運動員が責任さへとれば無限に買收してよい、買收された有權者と、買收しない候補者が馬鹿を見る譯である。悪い事は仕得である。

斯かる狀態であるとすれば、現在の投票でも大部分は眞面目に使用されてゐないのである。此故に先日或實業家と代議士數名の立話の仲間入をして聞くと誰一人選擧を眞面目に考へて居ない。結論は結局選擧權買收株式會社を作つて、一手に買收して、それを最も餘計金を出す候補者に賣却した方が運動費だの手數が省け騷ぎもなく、至極結構であらうといふ話に終つたが、假へ冗談としても、大都會以外に於て、斯程不眞面目に選擧權が行使されるものとすれば、勿論幾つかの頼もしい實例は

あるとしても、一般的に之れを見ればデモクラシーの擴充に當つて餘程の用意をせねばならぬ。普通選擧を實行せんとするに當り、一時に現在より數倍の投票を増すとして、若し有權者の大部分が買收に依つて動くものならば、それはデモクラシーの大失敗となる。選擧制度を多年研究する學者の中にも、普通選擧實行の結果は、各國とも候補者が下落して居ると云ふ者もあり、又昨年來朝した米國のベアード博士の如きも、普通選擧に依つて必しも議會政治が改良せられるとは思はない、然し他人が持つて自分が有たないものは誰も欲しがる、殊に選擧權の如きはさうであるから、結果の如何は別として、欲しがる者に皆之れを與へた方が得心をすることになる。得心さへすれば、假令それに依つて政治がよくならず、或は惡くなつても兎に角諦めがつくから、さういふ意味で普通選擧にして好からうと云はれたが、一寸面白い云ひ方である。私も多年選擧權の擴張を論じて居るが、さてどの邊の人まで與へれば議會政治はよくなるかといふ見當はつかない。寧ろ此階級の人、此程度の人に與へたら好いといふことで、漸次に擴張すれば好いやうに思つて居る。確信を得ない限り、一度に一千萬増加するよりは、二百萬、三百萬と適當な人に與へて行つた方がよいのではなからうか。然し兎に角明白に不安でない限り、出來るだけ多數に選擧權を與へることは當然のことである。婦人選擧權の問題も將來はさういふ時期の來る事を切望するが、現在の日本の婦人の狀態では、全部の婦人に選擧權を與へれば貰つた方で困るであらう。ヨーロッパの議會政治のやうに百數十年の歷史と訓練を經て居るのと異り、數十年前までは御手討ち、土下座、斬捨御免の世の中であつたのであるから憲法政治布かれて僅か數十年の今日、さう早く政治教育が行屆く筈がないと思ふから、選擧權の擴張も足下を固めつゝやるが宜いと思ふ。勿論出し惜みをする譯ではないが、不用意に與へることは與へないより害が生ずる場合があらうと思ふ。或人は政治教育といふが、それは選擧權を與へねば百年を待つても駄目だ、選擧權を與へれば、選擧權を行ずることに依り、政治に注目し、政治教育が行はれるといふ人があるが、一應尤ものやうであるが、私は必しもさうは思はぬ。夢中で受けとつて、貰ふとすぐ惡用する癖がつけばなかなかそれを矯正することは困難である。譬へば現在に於ても、あの選擧區はいゝが、あの選擧區はたちが惡いとか、腐敗して居るとか云はれる。即ち之等は買收金の高に依つて動くことを意味する。一旦惡習に染んだ者はなかなか拔け難い。此故に新に選擧權の大擴張をするとすれば、新投票權者が惡習に染まぬやう、腐敗した選擧區を、又は其一部を形造らぬやう警戒せねばなら

ぬ、急いで選擧權を與へたとて、決して人間が眞面目になるものでもない。而て投票買收の弊害は、勿論些細の金を尊重する方面に多いものと考へねばならぬから、從來の有權者よりは新有權者の方に買收の惡習に染む危險が多いものと一應推定せねばならぬ。斯く云へば有識青年諸君で普通選擧に依り投票權を得べき者は憤慨するだらうが、一般的に見れば此事は恐らく事實とならう。そこで選擧權が正當に行使されることゝなり、殊に易々と僅かな金で買收されるやうな恐れさへなければ、選擧權を出來る丈け擴張し普通選擧まで行つてよいのであるから、選擧制度改良に當つては、先づ何よりも先きに買收を防止する方法を講ずることが必要である。區制の改革、選擧費調達方法の改良、買收取締り、演說會場・印刷物等言論發表の平等機關の提供、其他選擧制度及び方法の改良の方が此際寧ろ最も重大問題であると思ふ。此根本を忘れて數のみを增加する方法をとれば、我國のデモクラシーは最初から渾濁した形で現れて、それを矯正するに困難を感ずるであらう。

加藤内閣に對する批判と希望

杉森孝次郎

意志と實行が充分であるならば、政綱的聲明は或る程度まではは不充分であつても、國民はかならずしも內閣をせむべきでない。しかし、その或る程度は文字通りに或る程度だ。それがあきらかに總選擧當時の政見的聲明に對する無責任を構成する程度のものであつてはならん。

行、財政の整理、綱紀肅正衆議院選擧法、改正といふ「三大政綱」は、これが文字通りに實行されてさへも、新內閣、あるひは現代日本のいかなる內閣もの實質的責任はなほ大いに殘る。政治組織の或る改善と外政改善がすなはちそれだ。いはゆる貴院制度問題は、政治組織の或る改善に屬する一枝葉部問題以上のものではありえない。

萬々一、普選をさへも、政友會との協調の必要上くらゐのと

ところに口實または理由を附して、成るべく長期の未配置約束品於臨時議會からとするやうな政府または黨の決意が、憲政會本位の現　閣にあるとするならば、さうあ　てもかならずしも不思議ではないが、たしかに責任または口約に對する一大不都合だ。

曾て山本内閣は、普選斷行を事實上聲明して置きながら、多少の錯覺的な知識や良心にさまたげられ、自繩自縛して、早く敢然としてこれを議會に主張することをせず、その内に、想ひがけない非變のために總辭職した。聰明と義勇が足りなかつたのだ。

加藤内閣も、どうせ政治組織の根本的改善や、外政上の大改善はおろか恐らくに小改善をすらもなしえないにほぼきまつてゐるから、せめては　選をだけなりとも自内閣の名に於いて物にして、餘命をつなぎうる限りつなぐもよし、優　的新陳代謝の機會を準備する結果的意義を帶んで退場するなりするが賢だ。普選主張のため、普選斷行の結果、内閣の總辭を招くことが萬一あるとしても、それは加藤内閣としてすこしも殘念なことではない。可能的最大の功名といはざるをえない。

もとく、黨勢擴張、民心收攬くらゐの淺い、低い私的功利意識に根柢した普選主張であるとすれば、いま述べただけの行きかたを貫ぬき通すことも、決して容易ではないと觀測される。

政友會系の貴族院にしても、原則意識には頗る縁遠いものとしか、いまのところ、思はれない。それは、污水を保存しながら蚊やり線香を一齋にたく程度の藝ではないか。その程度の藝ではないか。その證據が從來、そして最近まで、この瞬間まで、ありすぎたやうに記憶する。

しかし、貴族院問題をも現内閣は問題とするほどいよく普だ。もしもそのために聯立破綻とか、憲政分裂とか、内閣瓦解とかいふ結果が生ずると　ても、そこまで押し進みうるならば、その主動者が政友會系であらうと、憲、革兩者の少壯氣鋭連であらうと、その人々の私的及び公的一大功名といはねばならん。

現代日本が政治的に最も必要とする、そして最も缺乏してゐるものは内政上の原則的改正と、外政上の大策樹立だ。しかも、その兩者の間には一元兩樣的關係がある。そのうちのいづれたりとものー方だけを持つて他方を持たずに濟ます可能もないが、一方殊に内政上の原則的改正を持たずに他方すなはち外政上の大策樹立だけを持つ可能は取り分け絕對にない。現代日本の國内政治生活の深さと、國際政治生活の廣さとの間には、精確なる函數關係、一致關係がある。これを思へば、たと

ひ落だ部分的、表面的、姑息的ではあつても、小善も無善に比してはまさるがゆゑに、また、蓄積大成といふ、傾向助成といふなし崩し式も無價値ではないから、貴院問題を、この際出來るだけ組織的、徹底的、併行的に取り扱ふことは、現内閣としてもまことになすべき時務の一だ。

現内閣の外政上の實質的功績を、多少いちじるしい程度に於いて、期待することは、さうする人の不明だと考へられる。現代日本の外政的必要は、單なる規則的頭腦や、單なる應用的才能によつて識得も、達成もさるゝ淺い、輕い、平易なものではない。それは實に大品性と大智能を極度に必要とする性質のものだ。勿論、さういふ一人や少數者が政治の當局に假りにたまたまあつたとしてさへも、國民の品性と頭腦が相當に發達しないあひだ、かれらも窮するに相違ない。しかし、當局が有能であれば、當局が無能である現在に比しては善き大差がかならず現はれる。

對支、對露、對米、對英の諸形に於けるわが外政治的必要は、現代に於いて、組織的一全體を構成してゐる。その全體を統一的に明知して善營することが、そのうちのどの一とつだけを經營するためにも必要だ。單なる英國通、米國通といふが如き人物は、單なる事務官級に置かれべき不質物だ。現代日本の内質と外位とを、實質の政治的見地から明確に意識してゐる人でたくては、外政の當局にゐる資格はない。

わが官界一般の積年的氣習は、しかしながら、その種の人物を官界以内に持ち合はせず、官界以内へ取り入れることの出來ない性質を充分に發達させてゐるとやうに觀察される。國家一般、國民一般の積年的氣習というた方が、勿論一層根本的な觀察だ。

往年の二十一個條問題にしても、近年の對支問題にしても、國內的政治 治の不完全に、それの代表的難 を持つたもの、持つものであることは、一部の人々にはかなりによく知られてゐることだらうと想像する。

選擧法改正の一內容的項目は、外政が關する限り、選擧區を絕大區として持つこと、すなはち日本一區として持つことであつて欲しい。それだけで大した結果は現はれないとしても、現在のやうに、外政問題のためにも、顯微鏡的地方分區制にしたがうて議士選擧方法が採用されてゐることは、いかにも國の全的外位をわきまへ い辯態だ。こんな制度が維持される限り、國民の外政的 は不發達だと判斷さかるし、また、それの發達不制度によつて保證され、助成されてゐるとはいへない。

封建的小日本が民族的大日本に成長するためには ベリ來及

びその他のかたちに於ける外壓が必要であつた。外壓は現代日本に、客觀的には、未曾有の大規模に於いて、そして加速度式に加へられつつある。國民がこの客觀的眞實に注意を向けるために必要な制度的設備は、しかしながら、選擧區制の揚合に於いても缺けてゐる。

行、財政の整理は現代日本の政治的一時務であるにはきまつてゐる。しかし、現代日本の行政的整理は、政治組織の根本的改善または改正を第一に意識した性質の實行でなくては、まことに物足らない。徹底的行政整理は、現在の諸大臣自身の國吏的資格をも多少問題とせずには濟むまい性質のものだ。財政整理にしても同樣だ。國際優質品を、しかも成るべく必要的な優質品を多量に生産するかたちの工業立國を準備する意志をそれが缺いたものであるならば、それはほんの淺徹、近達のものだ。

綱紀肅正に至つては、立法や數字のかたちを取らない性質の事柄だけに、責任が不分明だ。眞の政治的、國民的、道徳的理想にもとづいて綱紀肅正を勵行することが最も望まれるが、さうなれば、これも組織及び人物、したがつて現在の諸大臣の位置をも、かれらの人物をも、かなりに問題とする必要は避けがたい。

多少の役人の任免黜陟の如きは、動機次第では、綱紀肅正の客觀價を持たない可能もあるし、黨人の獵官欲と、それを滿たすための官位增設的努力の如きは、それ自身、綱紀肅正にも、行、財政整理にも眞に忠實な現象ではないと正當に判斷される可能もあらう。政治家が直接に國家のためを意志して行動する程度の充分及び不充分は、綱紀のそれだけの健全及び不健全だ。

勿論現内閣が、比較的に天から降つたものでなく、地から湧き上がつたものであるといふ點に於いて、與黨に對する反對黨の勝利を意味したものであるといふ點に於いて、國民の直接のひいきと聲援を基礎としたものであるといふ點に於いて、すなはちそれの成立の形式的事情に於いて、わが從來の内閣に比して時代的進化を多少とも意味するものであることは、それが有するすべての不完全質と共に、それが有する多少の美質のうちの或るものだ。

奮勵せよ新内閣の諸公

文學博士　三宅雪嶺

□

何でも比較的であるけれど、現加藤内閣にそれが最も鮮かに現はれて居り、現金的と稱しても可い。内閣に人氣あるのは、三回も性質明瞭を缺く内閣が出來上り、何とか性質の明かなものが出來まいかと待ち設けられて居つた時、衆議院を基礎に、政黨内閣が出來たといふので、頗る人氣づいて來た。三回も曖昧な内閣が出來、三回目が最も曖昧なので、新に興つた内閣が、際立つて色彩鮮明に見える。政黨の首領が正々堂々たる順序で内閣組織の大命を拜し、世間で三黨首と稱ばれた者が、内閣で列ぶなど、政黨内閣も政黨内閣、政黨内閣に念をかけた形になつて居る。それで眞に政黨内閣と云へるかと問へば、二大政黨が交替すると云ふが如き意味の政黨内閣でなく、閣員の多數が何等か政黨に屬して居ると云ふを意味するに過ぎない。それも、超然内閣、官僚内閣、特權内閣といふに較べて、政黨内閣の名を値するに相違なく、ただ從來政黨内閣と呼んだ所と趣を異にするを承知せずに居れぬ。今は英國でも聯立内閣が珍らしくなく、聯立とて不思議がるに及ばぬが、對立か鼎立か、兎も角も相爭つた政黨の首領が、一つ内閣に顔を揃へる事が聊か面白い例とせねばならぬ。

□

山本内閣は頭株を網羅しようとしたが、今の加藤内閣は、黨首を網羅して居る。若し三黨首が、黨首といふ黨首の凡べてであるならば、之を集めた内閣が、最も有力なるべき筈であつて、事實上にさうであるかが疑はれる。政友會總裁高橋氏は曾て絶對多數黨を率ゐ、内閣を組織して居つたのであり、それのみでも當るべからざる勢力を備へ、それに他の政黨を加へては虎に翼と云ふ状態であつて、實際はさうでなく、高橋氏は依然政友會總裁の名ありながら、もはや多數を制するに足らなくな

つて居る。舊政友會が二分したが爲め、憲政會が第一黨になつたのであつて、憲政會自ら政友會に代つて多數になつたのでない。政友會が二分して、他の半分が何處へ行つたかと云へば、反對黨となるべきを標榜して居る。黨首を山本男にするとか、床次氏にするとかの評議があり、何れにしても黨首が定まるとせば、所謂三黨首以外に新黨首が現はれ、網羅に漏れるのであつて、内閣が悉く黨首を蒐めたと云ふを得なくなる。政友本黨と名づくるのは、今こそ第一黨に屏息するを餘儀なくされて居れ、續きの總選擧で第一黨を夢見るは愚か、絕對多數を制するの意氣込みであつた。鴫の嘴と食ひ違つても、世間の或る部分で、加藤内閣の反對黨が多數を制する可能性を認めて居るを許さずに置けぬ。それでも内閣の與黨が憲政擁護の名において特權内閣に迫り、政友本黨を物の見事に叩きつけたのは、それ相應の理由なくてはならぬ。宣傳上手と云ふもあらう。特殊の群衆心理と云ふもあらう。然し貴族院に横暴の跡あつたのは何よりであつて、關係者自ら横暴に氣づかず、時に取つてもつと好い内閣を組織するを援助するに止まるとしようが、氣づかぬのみで横暴の嫌ひあるを打消す事が出來ぬ。産婆役を以て任じた者も、後になつて氣づいたらう。

□

二回の曖昧なる内閣に次ぎ、貴族院で更に曖昧なる内閣を造らうと思ひ立つたのは、貴族院の制度に缺陷あるが爲めであつて、人を咎めるよりも制度を咎めねばならず、制度から更めねばならぬといふに考へ及んだ。貴族院改革の聲の發したのはその爲めである。憲政擁護は何の爲めに唱へられたか。詮じ詰めれば貴族院に對してであり、延いて問題は貴族院改革と相表裏して居る。元老に對する所もあるとし、老人が貴族院の有力なる派に促がされると知られて居る。華族の數は全國で一千、それに官吏の古手等を加へたもので、衆議院を踏み付けにするなど以ての外の次第とするのであり、其の意見が世間の耳に入り易く、さういふ貴族院で造つた内閣に附き從ふ足輕等を意氣地ない骨頂と嘲いた。加藤内閣が憲政擁護で立つて來た以上、貴族院改革に手をつけねばならぬやうになつて居つて内閣自ら之れを敢てすべく思はれず、世間でも特別に期待しないのは、其の類の事が行り勝ちになつて居るに出る。尊王攘夷で出來上つた新政府が、攘夷を如何にするかが早く忘れられた。歷史上に勝負を先にし、主義政綱を後廻しにする慣しがある。義理と人情に絡み、無理を通して善い事のやうに思はれて居る。憲政擁護

の後始末を如何にするか。眞面目に考へれば、貴族院改革に着手するを要し、不眞面目でもなけれどさういふ事にかかれこれかまけるのは、野暮な沙汰と笑ふやうにならう。

□

貴族院の方は手を着けぬとし、護憲三派の始末をつけねばならぬ。此の三派は曾て犬と猿とになつたのもあり、それが協同一致したのは、種々の事情あるものの、協同の敵に對したのによる所が多い。既に協同の敵を仆し、貴族院改革とまで進行せず、此處で一考しようと云ふ事になつて居る。如何に三派協調が行はれ、決して破れぬにしても、何時までも現狀で續くを思はず、憲政會も政友會も、得べくんば一黨にて多數を制したからう。一黨で多數を制しようとするのは、協調を賴まぬのであつて、何處ぞで破裂するものと見做さねばならぬ。

□

ところで一黨を以つて多數を制するの見込みが立つか何うか。立たぬ事なけれど同じく他の黨派に斬込むならば、護憲三派共の儘合同しては何うかと云ふ考へが出て來る。いくらか異議を唱へるものもあらうが、それを除外して纏り得ないと限らぬ。各々歷史があり、主義政綱があり、無雜作に調和出來るものでないと云ふが、歷史はあらう、如何なる特別の主義政綱があるか。互に相爭つた關係を固執するならば、三派協調の成るべくもない。積極と消極とで屢々爭つた。高橋氏と濱口氏と議論を闘はしたのは、双方共に記憶して居らう。それで今日切つても切れぬ同僚になつて居る所を見れば、行き掛りと云ふが如き、拘泥するに足らぬ。珍品問題の主人公を首相にし、問題に油を注けた者が法相職に居る。それ程ならば一層の事、三派合同に取かゝるべきでないか。主義政綱よりせば、憲政會の財政積極說は、政友本黨の非實的總裁山本男に似て居り、政友に接近するよりも、本黨に接近すべきにも思はれる。そこが何でも一筋繩に行かぬ所であつて、仲の惡るさうな者が善かつたり、善さゝうな者が惡かつたりする。幾年かの間にいろいろ變遷しようか、差當つて護憲三派が分立して通すか、解體して合同するか、急ぐに及ばぬが何とか思慮せねばならぬ。

□

野暮を云ふのでなく、加藤内閣が出來さへすれば細工は粒粒、餘計な心配すべきでないとするが、眞一文字に猛進するのを望でも益なく、本來閣員がさういふ柄でなく、その點で山本

内閣にも譲らうが、世間は不仕鮮でも、思ふた程不仕鮮でなく、政黨内閣が果して力を得るか、再び貴族院内閣の組織するを見ぬか、内閣の成績如何にて決するとして誤らない。政黨内閣は出來るまでが花、出來た後に、云ふを値せぬとあつては、貴族院で邪魔するのも止むを得ぬといふことになる。政府黨が總選擧に勝を得ると定まつた以來、政黨を基礎とする内閣を仆すのは、貴族院で邪魔する外に道がなく、それでもいくらか政弊の増大するのを抑制し得たと云へる。他に毒を生じたにせよ、毒を以て毒を制する所がある、毒は何處までも毒、紊りに使用してならぬとするには、内閣自ら内閣の爲すべきを爲すに如くはない。加藤内閣は其の邊の事を心得、頗る力を注ぎさうに見えるが、畢竟何程の事を成し得るかが疑問に屬する。

□

綱紀肅正を如何にするか。政務次官を置き、他にも政黨員の官吏となる資格を造らうとするのは、事務繼續性を圖る所以とするが、徒らに冗官を設けるのみでは、肅正を求めて却つて之を潰すに終る。公私の差別を明かにしようが、三菱内閣の稱あるをも慮るが可い。餘りに下手な事をすべくもないとし、曾て政友會内閣が三井内閣の實を示した如く、三菱内閣の實を示しては取返しのつかぬ事になる。三菱内閣の惡評を浴びせ懸けやうとする者も、之は案外と思ふやうにするが可い。

□

行政財政の整理は、在野黨として唱へた程立派に行けないでも、せいぜいそれに近づくやうに心懸くべきであり、若し前に唱へたよりも見事に實行するならば、憲政會萬歳、護憲三派萬歳となる。普選案は通常議會に提出するに定まつても、區制を如何にするか、忍んで憲政會に屈し政友會も、區制で何事かを固執しないか。案外小さな事が破綻の基になるので、よくよく要心せねばならぬ。

財政が行き詰り、今の儘で國家の破産を免かれぬと云はれる程であつて、内閣員も之を顧ぬ程鈍感でなく、出來るだけの事をなさうが、内の疲弊する時、外に困難が起り、前に加藤子が外相として支那に取定めて二十一ケ條は、延び延びになり、首相として解決するのを待つの形になつて居る。いよいよ、加藤の手で落着したとなるに至るか、何うか。米國の問題も難かしく、或ひは當局者のみで解決し得る問題でないとするが、行き詰つただけ、解決し易くなつて居るところがあり、紳士協約を造り直し、外面を繕うのは、難しくないかも知れぬ。折角三菱

首が頭を揃へ、有能者を適用したのであつて、成るべく世間の希望に副ふやうにあつてほしい。護憲三派と云ひ、それ見たかと嘲けられるのは、當人の損失になるのみでなく、憲政擁護の語を滑稽に聞えしめる懼れがある。其の邊は篤と心得あらうが、腕に縒をかけて奮發せねばならぬ。

新内閣に對する批判と希望

安部磯雄

今度の内閣の成立の結果は私の嘗て豫想した所とは大分違つてゐるやうである。私はたぶん憲政會が單獨に内閣を組織して政友會及び革新倶樂部が閣外に在つて之れを援助することになるだらうといふことを、本誌六月號に於て私の意見として述べて置いた。然るに結局生れたものは三派聯合の内閣である。私は此度の内閣の成立に對して私の豫想の裏切られたことを決して失望する者ではない。新内閣は實に立派な内閣であつて、殊に私の感激に堪へない心持になつたのは、政友會總裁高橋、革新倶樂部首領犬養の兩氏が平大臣として内閣に列したことである。勿論我國に於て斯くの如き例は以前にもあつたことで、總理大臣であつた者が後の内閣に平大臣として列したことはあるが、只當時に於ては政黨といふはつきりした團體もなく、藩長の勢力が勝手に内閣を組織して居た時代であるから、謂はゞ同じ仲間が時に總理大臣であり、又時に平大臣であつたに過ぎないのに對して、今回のは政黨の首領、或は總裁が、他の政黨の出である總理大臣の下に立つ雅量を犬養氏なり、高橋氏に依つて示されたことは心から、我國の政治の爲めに喜ぶべき現象であると思ふ。此度の内閣は又其人選の上から云つても誰しも滿足を表する所であつて、反對黨でさへも恐らくは其閣員の人選に就いては惡評をする者はあるまい。それにも拘はらず、私は前說を固執する譯ではないが、今日も猶憲政會の單獨内閣の方がよくはなかつたかと考へるのである。といふのは今後の政局の

轉換移動に就いて私は少くとも不安を抱かざるを得ないが故である。一口に云へば此度の聯合内閣が倒れた後の政局の成行が問題であつて、新内閣が今後二年なり三年なり續いて、幸にして普選も通過し、其普選の新規則の下に於て總選擧の行はれるまで生命を保つことが出來れば心配はないが、若し其以前に於て今の内閣が倒れることになる結果を考へると――その倒れるといふことも決して空想ではなく、我國に於ては種々な突發事件といふものがあるから不幸にして其爲めに内閣の倒れることも有り得ることである――寧ろ憲政會の單獨内閣を歡迎すべき理由があるのである。若し憲政會の單獨内閣で、二友黨が之れを援けることであれば、萬一憲政會内閣が倒れたとしても、三派の諒解がある以上は次の内閣は政友が之を組織し、憲政會及び革新倶樂部がそれを援けて行くことの出來る逃れ途があるが、私の心配する點は、假りに何かの理由で今の内閣が倒れることになると護憲三派は共同責任で退くことになり、茲に於て政友本黨が内閣を組織する段取りになる譯であるが、三派が聯合を保つて居る間は政友本黨は小數黨たるを免れないから、政治の安定が得られない憂があるので、茲に又再び變態内閣の出現に機會を與へる危險が伏在することになる。然し今日となつては既に三派の聯合内閣が成立した以上、今更私の云ふやうなことが實現出來る譯ではないが、然らば今後の問題として、差當り何よりも先きに現内閣の取るべき途は政友本黨に十分の渡りをつけることである。即ち私が本誌六月號に於て述べたやうに、三派が政友本黨をも仲間に入れて、政權は如何なる場合にも政黨以外の手に渡さないといふことの固い約束をする必要がある。換言すれば現内閣が倒れることがあつても、其場合には潔く政友本黨に政權を讓ることに依つて、變態内閣の出現を防ぎ、政黨内閣の成立を以て憲政の常道を確立する意味に於て、政友本黨を入れた各政黨の間に誓約を爲さしめることが肝心である。若し此問題が解決することが出來たならば更に着々として護憲三派の唱へる方針に向つて進んで貰ひたい、私は何と云つても護憲内閣のやるべき第一の仕事は普選の即行でなくてはならぬと思ふ。普選問題は既に各黨派の間で十分に調査は出來て居るのであらうが、此度のやうな強い内閣が出來た以上、遠慮なく内容を立派なものとして、少くとも革新倶樂部の理想に近い程度の普選案を提出することを希望する。有權者に對する財産資格などは最早問題ではない。問題は少くとも有權者の年齢位に止めて、それも二十五歳といふのは餘りに保守的であつて、國民の義務に滿二十歳を定年として誰れもが負擔することであり、兵役の義務の如きも定年に於て負擔することであるから、從

つて權利も亦完全に於て生ずることは明かである故に、普選案における年齢の問題も何程度に於て定め、若し年齢を二十歳な不可であるならばせめて二十一二歳位迄に制限を付することにしたい。次は選擧區の問題である。選擧區の問題としては小選擧區、中選擧區、大選擧區等の議論があつてそれぞれ何れにも理窟はあるが、普選を以て選擧の腐敗と、選擧界の革正を圖る立場から云へば、出來るならば選擧區を大にすることが理想である。然らば今日のやうな選擧運動をやることは不可能になり、選擧は一に言論戰に依るの外はない結果となる。而も選擧區が大になれば初めて頭角を現したやうな人が選擧に際して僅かに演説をやつて見た所で、選擧區が廣い爲めに其効果を收めることが出來なくなり、平素自己の意見なり主張なりを發表して其識見や人格を認められて居る立派な人物丈けが候補者に立つことになつて、稍理想に近い候補者を得られる利益がある。此事は代議士などが自己の立場のみを考へないで、選擧界革正の意味から、出來る丈け選擧區を大にして貰ひたいと思ふ。更に選擧法の細則に就いて希望を述べれば、それは革新俱樂部からも案が出て居るやうであるが、英國のやうに選擧費用の制限を附けることが必要であると考へられる。即ち夫れは一人の候補者に就いて印刷費、集會費等の選擧費用に對して一定の制限をなすことであるが、これを行ふには選擧區に依つて有權者の數に相違があるから、候補者一人に對して選擧人一萬を越へた時には、選擧人一人に就いて五錢なりの選擧費用を増加するといふやうな方法を取るのである。かういふ法律を作つても實行出來なければ無駄だといふ者があるかも知れないが、法律といふものはさう輕んずべきものではない。人がそれを惡いと知りつゝやつて居る時に法律を強制することは容易であつて、惡いものを直ちに改善させることは困難であるが、年數をかければ法律の效力は次第に現はれて來るものである。以上述べたやうなことを考慮に容れて立派な普選案を作つて、臨時議會には間にあはずとも冬の通常議會までには提出することの出來るやうに運びたいものである。普選の問題さへ解決がつけば、財政、行政の整理や綱紀肅正の問題等は比較的小問題であつて重大な意味を持たない。何故ならば綱紀肅正の如きは普選が行はれずしては徹底的に其實を擧げることが不可能な理由があるからである、行政、財政の整理は現内閣の力を俟つてやらなければならない仕事であるが、そして或程度までは成功の見込もあるのであるが、綱紀肅正の問題に至つては、之れは既に病膏肓に入つたものであつて、假令今の内閣の力を以てしてもそれを斷行することは困難である。現在の政治の腐敗は政黨

員が特利權を得る爲めに汲々として居るために起る現象であるが、或は又政府自らが富豪と結托して選擧費用を支辨してゐる事實の如きは、其由來する處は現在の選擧の遣り方の誤つて居る根本的な點に存する。所謂選擧の腐敗が原因となつて政治腐敗の傾向を導く。現在の如く選擧に於て候補者が二三萬乃至十數萬の選擧費を使ふやうでは、當選後に於て前に使つた金を取り戻したいといふ考へを持つやうになることは無理もないことである。從つて選擧費用を多く使ふといふことは政黨員を墮落させる大なる原因となる。又政黨としても選擧費用を十分に持たない内黨の有望なる黨員を援助する爲めに、在野黨も政府黨も、百萬なり、二百萬なりの選擧費用を準備することが必要となり、而も其費用は零細なる黨員の寄附金に依つて集ることないはので、誰れか有力な人の手から出ることになる。それは畢竟政治から所謂實業家と政治家との關係の切離すことの出來ないことを意味する。一の政黨が政權を握つた場合に、政黨のために選擧費用を寄附した富豪には利權を與へることが止むを得ない普通のことゝなる。斯くの如き關係を考へると如何なる内閣が出來ても、綱紀肅正の實を擧げることは甚だ困難であつて、それは名のみであつて實行が不可能なのであるから、さういふ無理なことは今の内閣に望まうともしないし、又内閣自身も綱紀肅正を大聲叱呼する必要もないのである。要するに此問題は普選が行はれ、選擧費用なども多く要らないことになれば自ら解決のつく問題であつて、私は寧ろ此意味から現内閣が專ら普選に對して全力を盡すことに依つて其他の問題は自ら後日に解決を期することが望ましい。最後に現内閣に期待することは貴族院の改造問題に關してである。此度の護憲運動の起つた抑の動機は、變態内閣の出生、而もそれが貴族院内閣と云はれ得る位に貴族院の勢力の現れた内閣の成立に對内する國民の反感に由來する。今後貴族院の一部の人が政界に野心を持つことになれば、衆議院の立場が不利益となる事情から、何とかして貴族院を改革しなければならぬといふ考を期せずして皆が抱くやうになつた。貴族院改革問題は無論重要なる問題であるが、私はそれを餘り早急の問題と考へない。何故ならばこれは綱紀肅正の問題の場合と同じ、要するに普選が行はれて、政治が眞に國民の政治となつた時には貴族院の如きは最早恐るゝに足らないからである。衆議院が眞に國民の意志を代表する機關となつた時には、貴族院が野心を出す餘地はなくなる。此意味に於て貴族院改造問題を餘り重要視することが出來ない。又實際根本的に貴族院の改造を企てることになると、憲法上の問題にも觸れることになつて手、續上、直ちに改造を行ふことは困難で

ある。若し強ひてそれをやるにしても、貴族院の改造は表面の修繕を行つたに過ぎない結果に終るであらう。併しながら護憲運動の際には貴族院改造も一の有力な旗印であつたから、今の内閣が其問題に全然觸れないで來てゝ置くことは不面目でもあり、又貴族院もさうなると愈よ高慢な態度を取るに至るかも知れぬ。故に此問題に對しては、今の内閣の力を以てすれば貴族院も恐るゝに足らないのであるから、勅令を以て改造し得べき點は、遠慮なく斷行した方がいゝが、而もそれすら普選問題を方着けた後の問題としても差支ないのである。假りに内閣の生命が二三年も保つて、而も其間内閣が貴族院の問題に全然觸れないといふことならば、それは餘りに臆病であるから、何等かの手段を講ずることが適當であらうが、總ての問題の解決の要點は一に普選の即行に懸る。而して普選の内容は世界の大勢に合致するやうな立派なものを作つて、それを實行することが出來れば現内閣は其時に倒れても、それ丈けで既に内閣の使命を果したと云はれ得ると思ふ。

山師醫者の勝利

室伏高信

一

世の中に若し輿論なるものがあり、そして新聞紙が、若しくは議會がこれを代表するものだとしたら、加藤内閣は萬々歳なのである。今日政治屋階級、そして新聞階級の間では、加藤内閣は輿論を、正義を、民福を代表し、そして憲政擁護のチャムピオンであるかのやうにいはれてゐるのである。何といふ批評精神の欠乏であらう、何といふ虚僞な、低調な、そして濁れた輿論であらう。

加藤高明と彼の引率する憲政會とは抑も憲政の擁護者であるか。憲政擁護とは、彼等の言葉でいへば議會政治の擁護である。從つて政黨政治の擁護である。官僚政治に對する政黨政治

の擁護である。憲政會は政黨政治の擁護者であるか。政友會、革新倶樂部は政黨政治の擁護者であるか。

人々は第一憲政擁護を忘れないであらう。第三次桂内閣のできた時である。新聞輿論なるものがこの内閣に反對すること誠に猛烈を極め、國民もまた頗る動いてゐた。桂太郎は、當時における官僚中の官僚、閥族中の閥族であつた同志會なる政黨はこの桂内閣、官僚内閣、閥族内閣を擁護するために生れたのだ。加藤高明、若槻禮次郎、安達謙藏、某々、今日の憲政會の幹部の諸君は悉く桂太郎の一味である。これが憲政擁護者であるか。

獨り憲政會だけではない。今日の政友會は、第一憲政擁護運動の裏切りものの集團である。革新倶樂部とは、今日では純然たる犬養倶樂部である。その犬養は一昨日まで山本權兵衞の尻尾であつたではないか。

マシユウ・アアノルドを讀む。ある時、ある人が、ナポレオンの面前で山師醫者だといはれたことがある。「だが、山師でないものがどこにゐるのか？」ナポレオンがこういふた。サン・ブウブ卽ち曰く、誠に然り、政治の世界ではと。

加藤高明、犬養毅、高橋是清、この山師醫者等を記憶せよ。昨日は官僚政治、今日は政黨政治、そして人々は憲政の神だといはんとしつゝある。こゝに彼等の山師術の成功を見る。山師、山師、山師、そして何ものが殘されるかを一考せよ。

二

勿論政黨政治もまた一個の官僚政治である。政治は凡て官僚政治である。政治の世界ではデモクラシイは不可能である。政治の存在それ自身がアンチデモクラシイの證明なのだ。政黨政治に至つて益々そうなのだ。政黨政治はデモクラシイではなく、デモクラシイへの一歩でもない。デモクラシイへの反逆なのだ。

政治の世界は階級の世界である。階級なく政治なし。天日のごとくに明らかである。政治は、その誕生から死滅まで一つの階級的存在である。階級對階級の關係において存在するのだ。優越階級が下層階級を壓迫する必要なくば政治なるものは存在しないのだ。プロレタリヤが政權を掌握した場合においても事態は同一である。瞬間にして新優越階級が發生する。そこに經濟的權力と政治的權力とが掌握されるのだ。露西亞を見よ。そこには共產主義が行はれるのでもなく、プロレタリヤが支配するのでもない。農民は勿論支配者ではない。農民には支配することは必要ではないのだ。農民は最後の階級なのだ。農民の支配することは無支配なのだ。農民はアナキストなのだ。

官僚政治の害惡は權力が少數貴族の手に掌握される點にあるといはれる。誠に官僚政治は少數貴族の政治である。だが、少數貴族の政治でないものが、どこの世界に存在するかを一考せよ。

政黨政治は如何、何人が政治するか。政權は何人の手に存在するか。幾百幾十萬の政黨中、果して幾人が政權を握つてゐるか。今日は加藤内閣ができた。憲政擁護の内閣、政黨内閣、國民内閣だといはれる加藤内閣は如何にしてまた何人の手によつて造られたか。上に西園寺公の「英明」があり、下に加藤高明、高橋是清、犬養毅の「總明」があり、内閣は一夜にしてできた。眞に一夜である。飢えたるものが水を飲むがごとくにたゞ一息であつた。何人がこの内閣を製造したか。たゞ加藤、高橋犬養の三人がこれを決した。或はそれ等の人々の取巻連が謀議に與つた。代議士も國民も、如何なる人が内閣に連り、如何なる政綱が決せられるかも知らない。内閣は陰謀でできたのだ。政黨員と國民とはたゞ報告をうけただけである。報告をうけて唯々諾々、拍手と喝采とを送ることが政黨黨員と國民とに與へられたたゞ一つの役割なのだ。シヤアラタンが、これを國民政治だといふのだ。かくのごとき少數貴族の政治がまたと存在するか。加藤、高橋、犬養、みなこれ政黨貴族、政黨大名なのだ。デモクラシイの名においてこれ等の政黨貴族が國民を欺き、無邪氣なる國民はデモクラシイの名においてこの新貴族等を喝采せんとするシヤアラタヌズムは眞に萬々歳である。

權力はしかし加藤、高橋、犬養の三君に分割されてゐるのではない。權力の分割は權力の自殺である。モンテスキユウは權力のいろはにも通じてゐない學者である。權力分割されんか、權力は相戰ふ力である。權力と權力と相爭ひ、權力は相互に死滅する。死滅から權力を救ふの道は權力の統一である、統一が權力の本質である。權力は常に一つの中心を要求する。二つの中心は權力の破壞である。否定である。權力は一つの中心において存在する。

聯立内閣はしば〳〵權力の中心が二つであり、三つであるかかに見える。今日は三派聯立内閣だといふ。眞に三派聯立内閣であるか。果して然らば權力は三つの中心において存在する。三つの權力が同一内閣に存在することは不斷の爭鬪を意味する。一つの統一意思なく、從つて内閣なるものなし。三派聯立内閣とは、眞に三派聯立内閣であるとしたら、最初から内閣なるものは存在しないのだ。かくのごときナンセンスを止めよ。加藤内閣は加藤内閣であるのだ。高橋是清と、犬養毅とは彼等自身一個の首領であり、一個の貴族であり、小なりと雖も一國一城の

主人であり、從つて一個の專制王である。高橋も、犬養も、加藤内閣の一員としてはしかし一個の奴隷である。權力の中心は加藤高明にある。この詭辯なく、この事實なくば今日の加藤内閣は成立することがなかつたのである。

加藤内閣は加藤高明の獨裁政治である。右するも左するもこの獨裁官の自由である。獨裁官が自由であつて高橋是清が、犬養毅が、以下もろ〳〵の山師賢者が不自由であり、そして一般國民は勿論政治的にも經濟的にも立派な奴隷なのだ。シヤアラタン加藤高明が骰子(サイコロ)を振つてもろ〳〵の大小シヤアラタンが喝采する。それが政黨政治であり、議會政治であり、憲政擁護であり、三派聯立内閣である。

高橋も犬養も一國一城の主人であると私はいふた。それゆえに高橋も犬養も、勿論加藤の奴隷たることに滿足してゐるのではない。權力の中心がやがて二つになり、三つになるの時がきたるであらう。その時はしかし三派聯立内閣なるものの崩壞すに時なのだ。加藤内閣の危機はこゝにあるのだ。憲政會單獨内閣の要求は、それゆえに加藤内閣の成立した瞬間から存在するのだ。

三

官僚政治と政黨政治との區別は少數支配と多數支配、アリストクラシイとデモクラシイとの相違ではない。政治の世界ではデモクラシイなるものなしと私はいふた。政治の世界は常にアリストクラシイ、オリガアキイ、モナアキイ、チラニイの世界である。政黨政治とはアリストクラシイ中のアリストクラシイ、チラニイ中のチラニイなのだ。

しかも何ほ時代は政治の形式を變へて行く。今日は官僚政治は時勢後れである。今日は政黨政治の時代である。今日はブルジョア時代であるからである。政黨政治議會政治とは、ブルジョアジイの支配形式であるのだ。官僚政治から政黨政治への推移は、政治的權力が經濟的權力と一致したことを意味するのだ。

官僚政治は封建の遺物である。純正ブルジョアジイはそれ等の封建主義の殘物を一掃せねばならぬ。昨年の大地震が大都會としての東京を破壞せずに、たゞ東京市街から封建の遺物を篩ひ落とし、東京をして純正なるブルジョアの首都、金と機械と權力とそしてやがて沒落の世界都市にと進めたように、憲政擁護運動は、封建の遺物としての清浦奎吾以下某々等を篩ひ落とし、高橋是清から僅殘にも子爵を奪ひ、犬養をして舊主山本權兵衞に背かしめ、加藤高明、若槻禮次郎以下もろ〳〵の舊

官僚等をして救世主桂太郎から絕たしめたのだ。

加藤高明は眞に彼自身に歸つた。彼自身がこれを意識すると否とにかゝわらず、彼は彼自身にと歸つた。彼は彼の家に歸つたのだ。彼は眞に彼自身を意識したのだ。

加藤高明の出現は三菱の勢力のほかの何ものをも意味しない。彼の勝利は彼の知勇才幹の產物ではない。智勇才幹において若槻禮次郎は一層に卓越してゐるであらう。人格と財政上の知識において彼は勿論高橋是清以下である。政治的陰謀術において彼は犬養に及ばず、外交上の知識は今日は最早や時勢後れであり、學問なく、思想なく、辯論と世間的人氣とは一個の永井柳太郎君にすら及ばないのだ。しかも傲慢にして人間味なき彼が何故に今日の政治的地位を占めるに至つたか。

彼は時代の寵兒である。今日はデモクラシイの時代ではない。今日は三菱の時代であるからである。彼の才腕德望ではなく、三菱時代が、彼を宰相にまで押しあげたのだ。否、宰相といふ言葉さへも今日は時勢後れである。英國のプレミヤはアスキスをもつて終つた、ベロツクが嘗つてこう論んじたことがある。日本では、宰相とは、少くとも西園寺公とともに終つたといふべきであらう。加藤高明を宰相だといふべくんば、三菱宰相、町人宰相である。

それゆえに彼は時代の兒である。おお英雄兒！　時代に適した兒である。カアライルの所謂英雄なのだ。おお英雄兒！　時代の兒！

時代の兒！　英雄兒！　時代の兒と英雄兒とが到るところに現はれてきた。加藤高明と有田音松との名は就中顯著である。

人々は尙ほ有田音松を藥屋だとして馬鹿にするかも知れない。藥屋と政治屋としかしどれだけの相違があるか。彼を山師だといふか。彼は山師であらう。賣藥商は山師中の山師であらう。だが政治屋は山師ではないか、政治家はみな山師醫者だとサン・ブウブがいふたことを私は述べた。山師醫者でないものがどこにゐるかとナポレオンがいふた。獨り政治の世界においてだけではない。今日は山師醫者の時代である。自由主義の時代自由商業の時代は、人々が奇蹟を信んぜずして奇蹟を行ふの時代である。學問、藝術、宗教、あらゆる方面において、今日は山師の時代である。もろ〱の山師が跳梁して正直は最早や時勢後れである。成功は名譽であり、成功の秘訣は宣傳、廣告、陰謀、欺瞞、賭博、相場、投機である。今日はシヤアラタンの時代なのだ。

政治時代は大社會時代である。政黨政治の時代は世界都市の時代である。朝甚除、田甚蕪。農村の時代が去つて世界都市の時代がきたのだ。そは一面において金と機械の時代であること

を意味する。他の一面にはしかし傳染病の時代であることを意味する。世界都市は金と機械の中心であるとともにまた傳染病の中心である。就中花柳病の中心である。金と機械と花柳病とはインタナショナルであり、文明である。文明人の特質、文明人の特權である。それゆえに政治の時代は金の時代であり、機械の時代であるとともに傳染病の時代であり、花柳病の時代であり、賣薬の時代である。政治もまた賣薬の一種なのだ。加藤高明が今日は前者を代表し有田音松が後者を代表する。彼も是もともに時代の兒である。英雄を讃美するものは、時代を謳美するものは、この英雄兒等を讃美すべし。

私をもつて殊更に政治家を侮辱するものとなすこと勿れ。賣薬の廣告と政談演説とどれだけの相違のあるかを思へ。賣薬の効能と政治の効能とどれだけの相違のあるかを思へ。

政治家を思ふかぎり侮辱せよ。政治家ほど侮辱に價ひするものはないのだ。「清貧」にして富み、「苦節」を守つて妥協し、「人格高潔」にして陰謀に餘念なし。この潰れたる政治家等を思ふ限り侮辱せよ。如何に罵倒してもいゝ。人間はそれよりもまだ二十倍も惡るいものなのだ。ベザロフがこういふたことを人々は知るであらう。われ／＼が如何に嘲罵するも、政治家の罪惡の二十分の一も盡くすことはできないのだ。政治家と賣薬商とを思ふかぎり嘲罵せよ。これ文明を嘲罵することなのだ。人々よ、一切の文明病から脱却せよ。白山人は政治家と賣薬商との區別を知らないのだ。

代議士とや、國民の代表者とや。公等は公等の代表權を幾何にて國民から買ひとりしや。二萬圓か三萬圓か五萬圓か。公等はこの代表權を今や幾何にて賣らんとするか。

公等は三菱から幾何の分前をえたか。幾何の報いを三菱のために捧げんとするのであるか。

おゝ政治家等よ、政黨政治家等よ、金、金、金、そして公等から何ものが殘されるか。この潰れたる政治家等を思ふかぎり侮辱せよ。このブルジョアの執行委員等の頭目を國民の前に暴露せよ。加藤高明は正にブルジョアの執行委員長なのだ。かの婿たることは成功の秘訣なる哉。

四

政治熱が勃興してきた。プロレタリヤ指導者と稱する大小のシヤアラタンもこの政治熱の前に垂涎三千尺の時代がきた。普通選擧がやがてきたる。ブルジョア政治の形式がこゝに完備する。その時代である　プロレタリヤ政治家が四方に群がり起るであらうのは、勞働總同盟の諸君は既にその準備をなすべく、一方

向轉換」の實を擧げた。露西亞でも方向轉換、日本でも方向轉換。日本のブルジョアが西洋のエピゴオネンであるように、社會主義もまた然らんとす。

政府的階級鬪爭が始まるであらう。三菱内閣を一つのエポック・メエキングとして政治上における一つの階級鬪爭がその最もよき機會を捕えるであらう。加藤高明はこの戰においてブルジョア階級を代表すべく最高最善のチヤムピオンである。社會主義運動がこゝにきた事であらう。加藤高明の下に、社會主義は鐵蹄のもとに蹂躙されるであらう。プロレタリヤ指導者がヒロイズムを發揮するのはこの時なのだ、

農民はプロレタリヤに同情するであらう。けれど、けれど、農民は社會主義者ではないのだ。農民は自由人である。農民のみが自由人である。農民は一切の獨裁政治と戰はねばならぬのだ。

一切の獨裁政治は都會獨裁である。加藤高明の獨裁政治は都會の獨裁政治である。プロレタリヤの獨裁政治なるものもまた然りである。農民はそれ等の一切の獨裁政治と戰はねばならぬ。加藤内閣の成立とでも、獨りプロレタリヤの階級意識が高まるであらうばかりではなく、農民が一つの階級であり、そして最後の階級であることの意識を高めねばならぬ。山師等を一掃することは農民の任務なのだ。

新内閣の財政整理に對する私の希望

法學博士　堀江歸一

一

加藤内閣に對して、私共局外者の希望する所は其在野時代に天下に聲明し、公約した政治上の抱負經綸を實行することである。世間では之を名づけて、憲政會の振出手形と稱する。此手形を空手形に移らしめずして、支拂を決濟することが加藤内閣

の責任であり、又義務であり、此内閣に對する國民の信望は一に此支拂の行はれることの如何に繫る。

憲政會の在野時代に振出した手形の内で、最も重大なるものは、普選の無條件即時斷行であり、財政行政の整理であり、産業の振興であり、經濟の安定であり、種々の方面に亘るが、加藤内閣にして事實憲政會を中心として、組織されたるものであるからには、如何樣にも手形の決濟は之を付け得る道理である。私は右に揭げた諸種の案件中、財政整理の或る方面に於て、卑見を述べたい。

今日の財政問題として、其根幹を爲すものは、何としても公債政策の始末でなければならない。從來多年に亘つて、原内閣や、高橋内閣が我國の政情を壟斷して居つた際には、原の熱烈なる權勢慾と高橋の財政上に於ける無定見とが相重なつて、所謂積極政策の下に、財政を計畫し、公債を財源として、地方に利益を及ぼす諸多の事業を濫行することを能事とした。斯くて年々公債を財源とする事業は膨脹し、財政調達の爲めに、公債の發行されることの多きに隨つて、財政の爲めに、金融市場の壓迫される弊害を現出するの已を得ざるに至つた。我國に於て近年金融が常に梗塞し、金利の高きこと、世界の群を拔く趣きであり、爲めに諸事業の振興を妨害しつゝあるに就ては、諸種の原因が擧げられるが、其一原因として、殊に有力なる原因としては、年々巨額の公債が高利を以つて、市場に發行され、市場の遊資を國庫に吸收し去る一事が認められなければならない。

我國には以前から減債基金の制度があつて、特別會計の下に、年々一般歲計から繰入れられる資金を處理して居る。而して減債基金の趣意を勵行する爲め、我國では年々五千萬圓とか四千三百萬圓とか、一定の金額を投じて、公債の元金を償還する定めと爲つて居るのであるが、何分にも公債政策の濫行に依つて、減債基金の下に、償還されるよりも、遙に多額の公債が發行され、年として減ることのない結果、減債の效果は實際に少しも現はれず、公債元金の年と共に增加するに勿論、市價の低落亦免かれざる所と爲り、斯くて公債の利廻りを高からしめるに至つたのである

斯の如く年々公債發行の必要を生ずるや、到底長期の公債であつては、應募者の意に投ずるを得ない。彼等をして幾分なりとも進んで應募せしめるには、相當の程度まで、割引を以つて發行價格を定める一方に、期限を短かくしなければならない。此事情から近年我國に於て發行される公債は何れも短期のものであるが、其期限到來に際して、國庫に之を償還する資金の存

する道理はないのであつて、斯くて短期公債は期限と共に、借換へられることゝ定例とし、其結果金融市場は公債の新規發行に加ふるに借換の發行を以つてし、兩樣の方面から壓迫を蒙ることゝ爲り、此關係から、金利の上進、金融の梗塞を餘儀なくされるに至つたのである。

二

政友會は黨勢擴張の念に驅られて、其以外の事には全然盲目であり、如何に公債政策に破綻を暴露し來つても、依然たる積極主義を以つて終始し、毫も其非を更めようとしなかつた。高橋内閣の後を繼いだ加藤内閣は政友會に支持されて、辛うじて其命脈を繋いで居つたのであるから、公債政策に手を觸れなかつたのは勿論であり、山本内閣は其短命の爲めに、清浦内閣は其無力の爲めに、同じく此點に見る可きの施政を致さなかつた。然るに今や時勢は一轉して、多年公債政策の非を鳴らし、消極主義の下に、財政を律しなければならないことを揚言して居つた憲政會を中心とする新内閣が組織されたとすれば、此内閣の財政　に於て第一に施設するものゝ、公債政策廢止である可きことは論を俟たない。

然らば加藤内閣は如何なる形に於て、公債政策の跡を絶つこととゝしたか。頃日大藏省の世間に發表した所に據ると、本年度に於ける既定計畫に關聯して、新規募債を必要とする金額は四億三千七百九萬二千餘圓に上る計算であつたが、現内閣は極力新規募債額の減少に勉め、經濟復興資金の調達を公債募集に求める既定の方針を變更し、帝都復興局の經費は之を普通財源の支辨に移し、臨時軍事費公債も亦其發行を見合せ、斯くて新規公債發行要額を先づ二億九千四百九十四萬圓に改定し、此公債も尚郵便局貯金、預金部引受、既發外債充當等の方法に依つて、調達し、一般市場に於て新規募集を爲さざる方針に決定したと云ふことである。新内閣は會計年度の半途に成立したものであり又公債政策が多年に亘つて襲用され、其根柢の深きこと今日の如きに至つた事情を考へたならば、本年度に於て徹底的に公債政策の跡を絶てと云ふことは、要求するのは、註文として甚だ無理であるかと思はれる。随つて本年度に於ては、右の如く公債財源の事業費に削減の加へられたことゝ、一般市場に於ける新規募集の見合せに爲つたことゝを以つて、滿足するの外はない。然しながら此滿足は本來已むを得ざる滿足である。一般市場に於ける新規募集は其跡を絶つに至つたとしても、尚は新規募集が郵便局貯金や、預金部引受けに依つて行はれ、然も其金額が二億圓の近きに上るに於ては、公債政策の繼續として、公債

市價の低落なり、金融市場に對する壓迫なりは、依然として、我國財政に纏綿しなければならない。如何にして此弊害を除却するか。此一事こそ徹底的に公債政策其ものを改新する所以であつて、明年度の豫算案編成に際して、新内閣に與へられた一個重要の問題であると考へられる。

三

公債政策を廢棄し、公債に依る金融上の壓迫を除かうとするには、第一公債財源の事業費に一大節約を施して、之を出來るだけ小なる金額に削減し、第二其上に尙ほ殘つた事業費があれば、之を一般歲計の負擔に移し、第三一般歲計に於て之に應ずる財源の餘裕を得るに足りるまで、經費に節約の行はれることを必要とする。我國財政の信用を鞏固ならしむるには、是等の三點は加藤内閣が明年度の豫算案を編成するに當つて、必ず遂行せざる可からざる所であつて、其一を缺いても年來の財政策に於ける主張に違背するものと云はなければならない。

然しながら實際問題として、新内閣は在野時代に於ては公債政策の非を論じて居つたものゝ、在朝時代の今日に於て、公債政策の撤廢を行ふまでに、徹底的方針に出づるを得るであらうか。何人も此點に就て、相當の疑惑を持つ。疑惑の生ずる第一の原因は現内閣が憲政會單獨の勢力に據つて居るものでなく積極政策の濫行者である政友會に依つて、或る程度の支持を受けて居ることであつて、此關係の存する以上は、幾分政友會の顏を立てる爲めに、積極政策の或るものを殘さなければならないであらうと考へられる。此問題は一に憲政會を代表して、内閣を組織したり、閣僚と爲つたり、財政當局者に舉げられたりした人々の自信に如何に忠であるかと云ふことに依つて、定まる問題であつて、局外からは、遽に判斷を下すに難き所であるが、私は政友會の現狀に於て、往年の如く積極政策を鼓吹し、主張する勇氣を持つて居るものとは考へない。第一積極的政策失敗の事實は如何にも顯著なるものであつて、何人と雖も、今日に至つては、其非を掩ふの言あるを知らない。財政の行詰りも金融の梗塞も總て公債政策の濫行に基くことの明瞭である以上は、如何に厚顏なる政友會であつても、積極政策を可なりとして、之に反對する消極政策の實行を阻止するの勇氣を持たないであらう。第二今日の政友會は是が非でも加藤内閣に割込んで政權の分配に與つて居らなければ會の勢力を續けて行くことの不可能であるが如き、危險なる地位に居るのである。斯くて加藤子から内務大藏の兩椅子を除いて、他地位を選んで、二名の入閣を認めると云ふが如き屈辱的條件を付せられながら、尙ほ

護憲と云ふ美名に隱れて、農商務や、司法の如き所謂伴食を以て目される地位を得て、安んずるの外なき窮態を演出して居るものである以上は、今更ら加藤内閣の行はうとする消極政策に異を立てゝ爭うものとは思はれない。殊に今日は株式市場の如き從來無意味に積極政策を謳歌した者も今日と爲つては、消極政策の下に、一度は緊縮整理が行はれなければならず、其れを經過しない以上は、景氣の恢復を期待するを得ないと信じて居る以上は、加藤内閣が消極政策を行うに就て、誰れに憚り、又何ものをも恐れる理由はない筈である

四

公債政策の徹底的廢止を行うに就て、必要の手段として目されるのは、經費の節減に依つて、國庫の普通財源に餘裕を生ぜしめ、此餘裕を利用して、公債財源の事業費中、已むを得ざるものだけを普通財源の支辨に移すことは、今日の財政策として、最も緊要事と認められる。然らば一般歳計に於て、如何なる程度の經費節約が行はれるであらうか。此點に就ては、一に今後行はれんとする行政整理の如何に依るものである。事務の簡捷を謀り、局課を廢合し、時に行政官廳を廢合し、官吏の數を減ずると共に、其能率を上進せしめることも、無用と思はれる程度まで、膨脹した國家の職務を縮小することも、行政整理の要目であつて、其目的とする所は經費の縮小に置かれなければならず、此點に於ても再び積極政策と消極政策との衝突を見ることを免かれないであらう。然しながら目標は始めから定まつて居る。經費節約に依つて剩した財源を公債財源の事業費に振向けることは、卽ち是れであつて、此程度の節約が行はれて、始めて其意義を爲すのである。

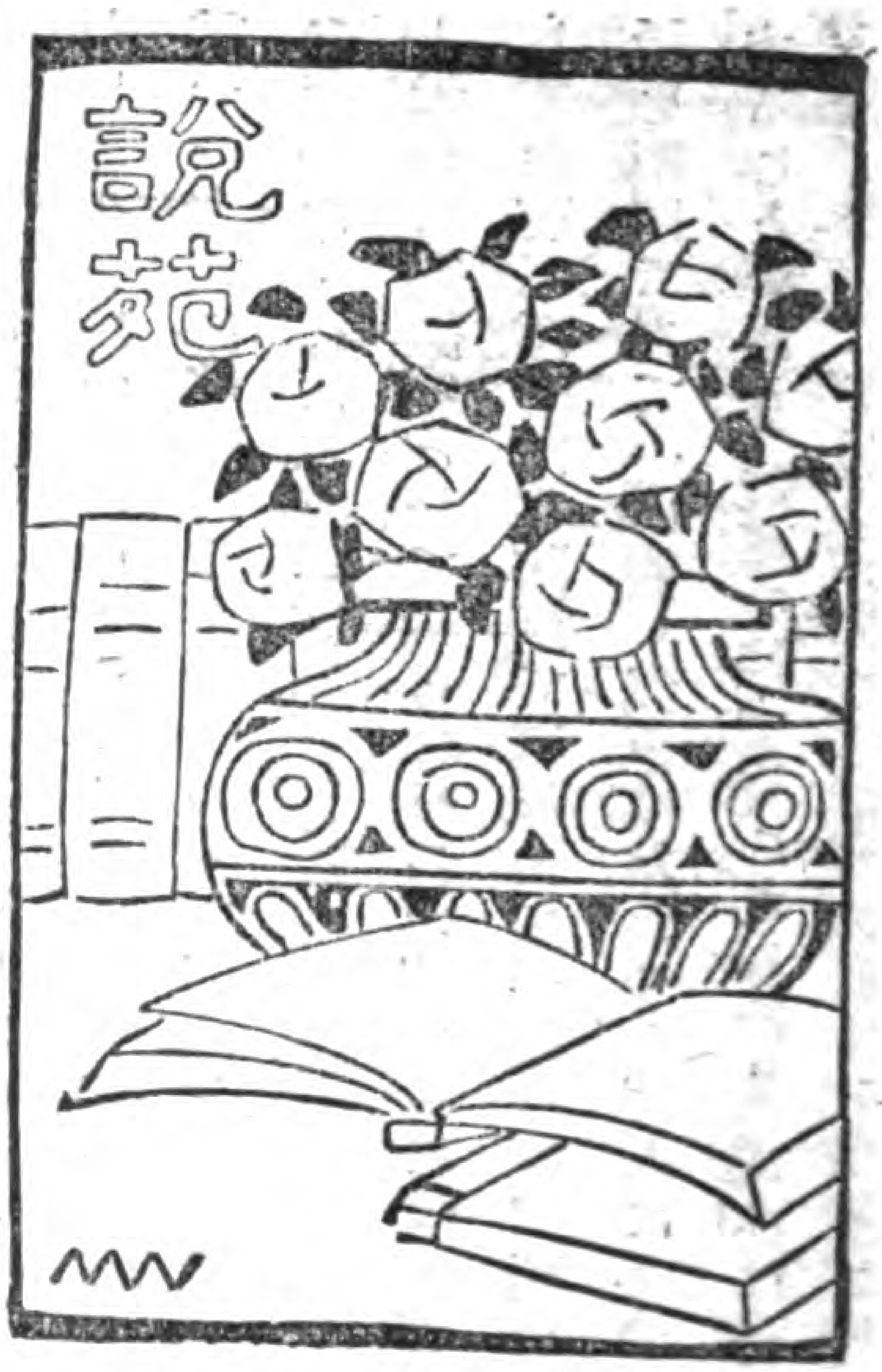
五

最後に公債政策の一要目として、吾人の攻究を必要とするのは、外債の問題である。過般募集された外債に對しては、漸期し償還の行はれる規定であつて其償還に就て、別に憂う可きものなく、明年を以つて償還期限の到來する英貨公債の乘換募集の行はれた爲め、其償還に於ける壓迫を緩和するを得たことは明白の事實であるが、何分にも紐育に於て七分一厘、倫敦に於て六分九厘の利廻りに相當する外債の發行されたことは、我國財政の不信用を現實に裏書したものであつて、今後我國外債の發行される妨碍と爲るのは勿論民間の外資輸入に障害を加へること少なしとしない。故に政府として海外に於ける我國財政の信用程度を上進することに於て、努力をしなければならない。

如何にして其目的を達するかと云へば外債に就ても亦嚴重なる非募債主義を勵行することを以つて、其第一義とする。一般財政策として非募債主義の行はれる以上は、外債も自ら募集の必要なきに至る道理であるが、近年の如く貿易の逆勢甚だしく、一方に國際貸借に於ける貿易以外の受取勘定も亦我國に有利であるとするを得ない場合には國際收入決濟の爲めに、外債募集の必要に接するに至ること既往に於て然りしが如く、將來に於ても亦然るものあるやも測り知るを得ない。然も外國に於て、我國財政の信用程度の低きこと、上述の如くである以上は、將來の外債募集は致命的損害を我國に及ぼすものと見なければならず、隨つて斯る切迫した狀況の到來を避けるには、貿易の逆勢を轉回し、之を有利なる方嚮に就かしめる確乎たる政策がなければならない。

六

私は加藤內閣に對する財政上の希望を述べるに當り、公債政策を中心として、議論を進めた。然しながら是れは單に議論の中心を此所に求めたゞけの話であつて、現內閣の經濟上に、財政上に、爲さゞる可からざる所は略ぼ之を網羅して、論述した考へである。即ち其趣旨を要約すれば、經費の節約、金融に對する財政的壓迫の除却、貿易の逆調匡正等は必ず行はれなければならない所であつて、是等の施設に力を注いだならば、自然物價も調節され物價の調節は更に經費の縮小を容易ならしめ、斯くて貿易の逆勢は自ら緩和され、次いで金輸出禁止の解除を自然に行はれしめる得る等、原因が結果と爲り、結果が原因と爲つて、經濟政策をして一新の緒に就かしめるに至るであらう。唯何分にも積極政策の齎した弊害の山積して居る今日、正反對の消極政策を行ふに就ては、自ら多くの衝突あり、抵抗あることは、豫め覺悟せさる可からざる所であつて、此點に於て、加藤內閣が何處まで、勇氣を發揮して、所信に忠ならんとするか。抑も亦今回の如き寄り合世帶の內閣は斯る勇氣を十二分に發揮するに就て、何等か牽制されゐ弊なきを得ないであらうか。私は事實に就て之を檢せんと欲するものである。



寫山樓文晁

—本朝畫人傳の二—

村松梢風

一

谷文晁が、長崎漫遊を思ひ立ち、江戸を發つて、大阪へ着くと、江戸の先輩の紹介狀を持つて蒹葭堂木村巽齋を訪問したのは、天明八年の秋のことだつた。

蒹葭堂は船場の呉服町といふ處にあつた。其の家には、巽齋の本妻とお妾とが一所に住んでゐた。が、どちらももうい丶齡をした婦人だつた。それに本妻の子の娘が一人、四人家内で下婢一人使つて暮らして居たが、何しろ來客の絶え間がないので何時でも忙しさうだつた。併し、主の巽齋は名代の客好きで、初對面の文晁をも快くもてなして呉れたので、文晁も草鞋を脫いで心置きなく厄介になることが出來た。

巽齋は五十五六といふ年配だつた。文晁のはふは廿六歲だつた。二人の間は、齡が違つてゐるばかりでなく、地位から云つてもまるで比較にならないほど懸隔があつた。文晁はまだ殆んど無名の畫工だつた。だから文晁が蒹葭堂を訪問したと云つても、それは師弟の禮を執つて教へを受けに來たのだ。處が蒹葭堂のはふでも文晁の將來畏るべき人物であることを見拔いたので殊に粗略には扱はなかつた。わけても文晁が嬉しかつたことは、主が秘藏してゐる名公畫譜を見せて貰つたことだつた。

木村巽齋は堀江の酒造家の家に生まれたのだつた。或る時庭に井戸を掘ると地下から古い蘆の根が出て來た。即ち難波の蘆

である。そこで堂號を蒹葭堂と稱へたのだつた。彼は五六歳の頃から畫を學んだ。初めは、父が郡山の柳里恭と友達で、柳里恭が折り／＼其の家へ來て泊つたりするほどの間柄だつたので淇園に手本を畫いて貰つて習つたが、後に京都に行つて大雅堂に就いて山水を學んだ。繪畫のほかに、京都の津島恒之進といふ人の門に入つて物産本草の學問を研究した。蒹葭堂の繪は名聲の高いわりに、それほどうまいわけではなかつた。併し彼は資産があるにまかせて、和漢の書畫典籍をはじめ、山海の名蹟、蠻夷の物産金石の類に至るまでありとあらゆる奇らしい物を蒐めて持つてゐた。從つて其の該博精通は驚くべきものだつた。或る人が黄檗の大成禪師に向つて支那の風俗を尋ねると、禪師は丁度側に居合せた蒹葭堂を指して「支那のことだつたらわしよりも此の人のはふがよく知つてるからお聞きなさい」と言つた。大成禪師はもと支那の人で、投化して黄檗に住されたのだつた。それは當時專ら著名な笑話だつた。が、それ位蒹葭堂と云へば博識家として知られてゐた。同時に彼の客好きなこともまた有名だつた。訪ねて來る人さへあれば、朝から晩まで談話を續けてゐて一向飽く氣色はなかつた。人によつて文學を論ずることもあり、武藝を談ずることもあり、或ひは神佛經典の事でも、物産故事の類でも、雅でも俗でも各その言ふところに答へないといふことはなく、連日連夜談し續けても話題は盡きなかつた。人物は頗る溫厚篤實で、殊に後進の誘掖については至らざるなく親切だつた。さういふ風で、全國の文人墨客と交際を結び、誰れでも大阪へ來れば先づ第一に蒹葭堂を訪ねないものはないといふ有樣だつた。

文晁も數日足を停どめてゐた。家内のものもみんな親切にいたはつて與れた。すると或る日新らしい客が蒹葭堂へやつて來た。で主は文晁を其の客に紹介した。客は釧雲泉であつた。雲泉は肥前島原の人で、其の家は武士の家だつた。彼は子供の時から父に從つて長崎へ出て支那人に就いて學問をしたので、頗るよく華音に通じてゐた。長じてからは繪畫を善くし、元人の趣きを研究して、風韻雅致に富んだ畫を描いた。父が沒すると彼は飄然として故郷を捨てゝ漂泊の旅に出た。文晁が初めて會つた時は、雲泉もまだ三十を越したばかりだつたが、彼は旣に交遊天下に普ねく、夙くも一家の畫名を爲してゐた。文晁は欣んで、雲泉から南宗の畫法を教はつた。

雲泉は旅をするのに何時でも小さな笈を二個、振り分けに肩へ掛けて歩いてゐた、其の一つには繪の道具がはいつてゐた。が、もう一つの方には何がはいつてゐるのかしら、と文晁は思つた。或る日文晁がそれを尋ねると、雲泉は笑ひながら笈を開

いて見せた。すると其の中には釣道具が一杯はいつてゐた。つなぎ竿の太いのと細いの、釣り針、糸、餌入れ、たも、さういつた道具が實に完全にとゝのつてゐた。

「先生は餘程釣りがお好きと見えますね」と文晁が言ふと、

「私は旅行してゐても、一日畫作をすると、一日は釣りをすることにしてゐます。尤も釣りのはうなら毎日でも飽きはしない。處が當家へ來てからは一度も釣りに行かないので少し心持が變になりました。如何です谷先生、あなたも釣りはお好きですか」

文晁は釣りなどは餘りやつたことはないが相手の前へ嫌ひだとも云へないので「少しは好きだ」といつたやうな返事をした。すると雲泉は大變喜んで「では早速今から釣りに出掛けよう」と言つた。二人は餌の支度をして河口の方へ釣りに行つた。雲泉は幾ひきも釣つたけれど、文晁の針には一ぴきの小魚もかゝらなかつた。文晁は、河の水を眺めてはゐたけれど、肝心のうきは彼の眼に映じてはゐなかつた。

雲泉は釣りのほかに酒と茶が好きだつた。酒のはふなら文晁も敢て人後に落ちないので、ふたりは朝から呑んだ。處が、主の養豉堂は、賣茶翁と親友で茶は非常に好きだつたが、酒は一向不得手だつた。で二人の客は主人をそつち除けにして旺んに飲んでは氣焔を吐いた。

雲泉のはふが先きに其の家を辭去した。が是れが緣になつて、後年雲泉は江戸へ來れば必ず文晁の宅を訪れた。其の後も久しく雲泉は放浪の旅を續けてゐた。例の二個の笈は依然として彼の肩に掛つてゐた。彼は或る年奥州白河を過つて、一士人の家に宿つた。士人が禮を厚くして遇するので、數日滯留したが、彼は毎日釣りにばかり出てゐて、一向繪筆を把らなかつた。すると士人が雲泉に向つて「私が先生をお泊めしてゐるのは、先生に繪を書いて戴かうと思ふからです、どういふわけでさう毎日釣りばかりなさるのですか」と言つた。「あゝ左樣ですか」と雲泉は答へた。翌日彼は衣を拂つて其の家を去つた。中山道の本庄驛に假寓してゐたことがあつた。其處は利根川を距ること十丁餘りの地だつた。すると雲泉は毎朝利根川へ行つて顔を洗つて、歸りに其處から茶の水を汲んでは持つて來た。それを一日も懈らなかつた。晩年雲泉は越後の新潟へ行つて落ちついた。其の時分から益々畫名が高くなつた。そして文化八年出雲崎で病を得て沒した。

二

文晁は九月七日の朝養豉堂一家の者に暇を告げた。其の間は

殊に美しい秋晴れだつた。親切にして呉れた此家の人々に對する淡い別離の哀愁をおぼへると同時に、又もや未知の土地へ旅立つのだと思へば心が勇み立つた。別れに臨んで文晁は一詩を賦して主に示した。

一時書談荻蘆前
負笈素秋向海天
偽是丹青情未盡
遠隨異客問雲烟

大阪渡海場兵庫屋から乘船した。船は順風に帆を上げて走つた。八日の朝八時頃には兵庫湊に安着した、人々は其處で船を降りた。其の日は須磨明石等の名所を見乍ら歩いて、夜は播州加古川で泊つた。九日の朝、冷たい秋雨のそぼ降る中を加古川を出て、姫路を經て三石まで行つて宿を取つた。すると旅芝居がかゝつてゐたので夕飯を食べてから其の小屋掛けの芝居を見に行つた。奥州秀衡の狂言をやつてゐて大變面白かつた。

十二日の午後には岡山へ着いた。此の土地の豪家である浦上兵右衛門といふ人が、文晁の父の谷麓谷の友人だつたので、彼は其の家を訪ねて行つた。浦上は非常に喜んで文晁を迎へた。妻子をも座敷へ呼んで文晁に引き合はせた。文晁は久しぶりで心から打ち寛ろいだ氣持になつた。主は客への御馳走に娘の琴を聽かせたりした。其の娘は妙齢で頗る美人だつた。文晁は其の琴で旅情を慰められた代りに、青春の身で一人旅をしてゐる淋しさをも同時に味はゝなければならなかつた。

十三日には、浦上に伴れられて同じ土地の備中屋安之助といふ豪家へ行つて席上揮毫をした。其の晩は名月だつた。備中屋では良夜の宴を催して文晁を歡待した。

浦上は、文晁に緩り遊んで行けと云つたが、何となく先きに心が急がれるので、歸途の再訪を約して十四日の朝岡山を立つた。吉備津宮に參拜して、それから備前備中の境の三軒茶屋で休息し、矢掛に泊つた。十五日は矢掛を立つて、辰時頃にかんなべといふ驛に着いた。小さな町だつた。文晁は何處かで中食をしやうと思ひ乍ら歩いて行くと、

「もし〳〵、あなたは文晁さんぢやないか」と呼び留める者があつた。

文晁が振り返つて見ると、それは江戸の司馬江漢だつた。文晁は餘り意外で喫驚りしてしまつた。

「司馬さんでしたか、どうも不思議な所でお目に掛りましたね」

「私もね、人違ひかしらと思つたが、餘りよく似てゐるので聲を掛けて見たんです。あなたが旅に出なすつたといふことはち

つとも知らなかつたが、是れこそ神の引き合せといふのでせう」

「ほんとにうまい具合にぶつかつたもんですね。時に司馬さん、あなたは何處迄行くんです」

「何處と云つて、はつきり極めて來たわけでもないが、とにかく西の方へ行つて見る積りでね」

「それはいゝ。私は長崎が目當てなんだから、同じ方向です。是非御一緒に道中をお願申し度いものですが」

「それは私の方からお賴みすることです。長崎は私が永くゐた土地だから、あなたに御紹介する人もあります。私は今度は旅で畫作をして見やうと思つて出て來たんですから、何處で引つ掛つてしまふか分らないんですが」

二人は江戶に居た時は、畫家仲間の交際の席で顏を合はせる位のことで、格別親しくしたわけでもなかつたが、かうして遠國の旅先でゆくりなくも邂逅して見ると、兄弟にでも逢つたやうに懷かしく感じるのだつた。

二人は一緒に晝飯を食べ、それから駕を雇つて先きへ進んだ。大渡り川といふ川があつたが、二十間ばかりの流れの上に一枚板の橋が架つてゐた。其處は駕を降りて渡つた。山手といふ所からは彼方に福山城が見えた。備中と備後の國境あたりの海邊に松永といふ湊があつた。漁師の家が並んでゐたが、其の日は祭禮で大變賑はつてゐた。二人は駕を返して、鎭守の社の奉納角力を見物したりして呑氣に歩いた。日暮れ前に備後の今津へ着いた。藤屋源助といふ旅籠へ二人は泊つた。

司馬江漢は文晁より十六歲上の四十二歲で、彼は其の頃全く獨技の西洋の油繪を描いて世間の評判になつてゐた。司馬江漢といふ名は、若い時漢學を修めたので支那の風に倣つたのだつた。通稱は安藤吉次郎、不言道人、春波樓等の號があつた。最初畫を狩野古信(ヒサノブ)に學び、更に宋紫石に就いて漢畫の法を問ひ、後に浮世繪に轉じて鈴木春信の門人となつた。江漢は非常な好學の士で、天文曆數等にも深い興味を有つてゐたので、西洋の學風を慕つて、長崎へ行つて蘭語を研究する傍ら、油繪といふ物の描き方を習得して江戶へ歸つて來た。さういふ彼の傾向は、先輩平賀鳩溪の影響を多分に受けてゐるのだつた。江戶へ歸ると江漢は油繪を畫き、また銅版を製造して、銅版畫を印刷して世間を驚かせた。それは天明三年のことで、西洋の銅版術がはじめて日本で行はれたのが其の時だつた。

文晁は、其の人は知つてはゐたが、江漢と膝を交へて談しをするのは今日が初めてだつた。江漢は頻りに西洋の畫の特色を說いてきかせた。何物でも求めてやまない文晁の心は、江漢の

説明する西洋畫の理論をも忽ち理解することが出來た。江漢は頻りに眞を寫すといふことを言つた。

「例へば富士山の繪だが、土佐家でも狩野家でも、また唐畫の畑の人でも、一人として眞の富士を描いた人は無い。探幽の富士と云つた處で、あれも只筆意筆勢を見せるだけの物で、富士山の實景とは大違ひだ。唐畫も矢張りそんな物で、彼等は見たこともない支那の風景を筆にまかせて只好い加減に畫くだけで、それが何の山とも何の川とも分らない、是れぢやあまるで夢を描くやうなものだ、見る人は勿論のことだが、描く當人だつて一向わけが分つてゐない、そこへいくと西洋の繪は」

といつた調子で江漢は氣焔を上げた。文晁は直ちに其の説に贊成しちまふことはできなかつたが、そこにも確かに一箇の眞理が存在してゐることだけは認めないわけにはいかなかつた。併し、畫の生命は何にあるかといふことを彼は考へた。それが果して江漢の言ふやうに、ありの儘に物の象を寫すことにあるだらうか。彼には左うは思へなかつた。自己の創意になる畫圖の中にも、人間が天然の山水を見て感じるやうな幽遠な精神が漾つてゐる場合がある、それが畫の生命ではないかと考へた。

二人は床へ這入つてからもまだ繪畫の議論をたゝかわしてゐた。

翌日二人は今津を出て、ほうし山を越え、藝州へはいつた。それから尾の道へ出て船へ乘つた。船は九ツ頃出帆した。尾の道から廣島へ行く迄の海上は、小島大島は次ぎ／＼に現はれ、島には松が生へてゐて、何とも云へない眺めだつた。文晁も江漢も畫帖を出して寫生をしたりした。島の山の腹に處々穴があつた。「何んの穴か」と船頭に尋ねて見ると。「盜人が棲んでゐるのだ」と船頭は答へた。風が出たので船は宇島といふ處へ掛つた。

十七日の朝早く廣島へ着いた。船はねこや橋の下迄行つた。其處で船を下りた。二人は城下を見物して歩いた。何處へ行つても繁華で奇麗だつた。それからいの日から再び船へ乘つて宮島へ行つた。てうど日暮時に嚴島へ着いた。二人は先づ明神へ禮拜した。文晁は紙合羽を着てゐたので鹿が側へ寄つて來てそれを食はふとした。

其の夜は折よく廻櫻燈明があつた。其の眺めは誠に日本無双だつた。

「何んといふ絶景だらう」

さう言ひ合つて、文晁も江漢も全く感激してしまつた。其の夜は宮島の伊勢屋久兵衞といふ旅籠へ泊つた。

翌十八日は朝から雨が降つてゐた。江漢は宮島の風景を寫す

と云つて後へ殘ることになつた。

「それでは又江戸でお目に掛りませう」

江漢は宿の傘をさして船の乘場迄送つて來て別れ際にさう言つた。文晁は船の上から島の方を見た。秋雨が寂しく降つてゐて、鹿が一疋浪打際で遊んでゐた。

其の日から文晁は又もや獨り旅を續けた。そして天明八年九月廿八日の暮れ方に長崎へ到着した。

三

文晁は、寶暦十三年に下谷二長町で生れた。父は谷文十郎といふ田安家の士だつた。文十郎は麓谷と號し、漢學の素養が深く、詩文を善くし、山本北山などと親交があつて、當時有名な詩人だつた。文晁は通稱文五郎と云つた。彼は幼少の時から繪畫に天禀の才を有てゐたので、父の麓谷は近邊に住んでゐた加藤文麗の許へ悴を入門させて繪を習はせた。文麗は狩野派の畫家だが、生れは大洲加藤家の末子で、畫工とは云へ元來大名藝で繪は餘り達者ではなかつた。文五郎は其の弟子になつて初めは文朝と名乘つたが、廿歳過ぎ頃から文晁と改めた。文晁は專心繪畫の修業に沒頭してゐたが、熱心な彼はいつ迄も師匠の文麗の杓子定規の教へばかりに甘んじてはゐられなかつたので、世間の評判を聞いたり、自分が見て信ずることの出來る畫家の所へは、何處でも構はず出掛けて行つて、いろ／＼な議論を聞き、また門人同樣になつて描き方の指南をも受けた。

鈴木芙蓉に就いて山水を學ぶやうになつてから彼の技倆はメキ／＼上達した。芙蓉は信濃の人で、江戸に住み、阿波侯に事へた。山水人物に長じ、當時名聲が高かつた。門人もなか／＼多かつた。會日には門人がめい／＼習作を持つて來て師匠に直して貰ふのが例になつてゐたが、大抵の門人が一枚の繪を畫いて持つて來るのは漸うだつた。處が文晁だけはいつでも三枚も五枚も一度に畫いて持つて來た。

彼は毎朝未明に起きて仕事を始めた。それでも時によると寢過ごしてしまふことがあつた。すると彼の家の附近へ能樂の笛を吹く人が越して來たが、其の人は越して來た翌朝から必ず未明に起きて笛を吹き澄ますのだつた。一日でもそれを缺かすといふことはなかつた。文晁は其の人の熱心に感心して、それから自分も必ず笛の音の聞こえぬうちに床を出て勉強した。

其の頃櫻井雪館といふ雪舟派の畫家があつた。元來水戸の人だが、江戸へ出て、汎く雪舟の圖跡及び古名畫を蒐めて臨模して、粉本が筐笥に充つるに至つた。ついに一家を成して、名聲都下に嘖々として喧傳された。其の門下からは月遷と恢應の如

き名手を出した

雪館は餘程變り者だつた。大家になつた後、江戸橋の橋際にお堂のやうなものを建てゝ、そこで繪畫に關する講釋をした。天氣さへよければ毎日自宅から出掛けて來た。假令自分の門人でなくとも、誰れでも來て討論したいと思ふ者は討論をするがよい、また揮毫をするならば批評もして遣らうといふ風であつた。

彼は一段高い處に座を構へ、紫の道服を着け、袴のやうな腰衣を穿いて、講釋をするのが常だつた。

其の娘を秋山と云つた、秋山は名代の醜婦だつたけれども、父に學んで山水人物を描くに長じ、殊に大作を得意として筆力雄勁、男子をしのぐ氣概があつた。秋山も常にかいどり姿で講堂へ現はれた。氣位の高い女だつたので、或る時も宴會の席で、

「日本中にわたしの夫にするやうな男はありませんよ」と秋山は言つた。

すると誰かゞ後の方で

「心配なさいますな、貴女のやうなお多福を貰ふ男は日本中には居ないから」

と言つたのでみんなどつと笑つた。流石の秋山も二の句がつげなかつた、彼女は學問もあつたので、父の畫談を筆記して出版したりした。雪館の門人は一時江戸中で二百人近くもあつた

文晁も雪館の處へ、其の說を聽きに行つた。其の時半截に竹を描いて持つて行つて

「どうか御覽下さいまし、御批評を願ひたうございます」と言つた。

雪館はそれを壁に掛けて熟々視て、

「どうも誠に感服です、どうしても梅道人とか、東坡とか、其の邊の法を習ひなすつて描かれたものと見える、まだ貴君はお歳も若いことだから、撓まず修業をなすつたら立派な畫家になれませう」と言つて大變褒めた

すると側に居た娘の秋山が、

「此處へおいでになる方であなたのやうに褒められた方は御座いませぬ、誠にどうも御名譽なことで御座います」

と言つて丁寧に挨拶をした。文晁は褒められたことは嬉しかつたが、秋山といふ此の娘がもう少し美人ならいゝがと思つた。

文晁はあらゆる流派の畫を研究した。土佐繪は狩野光定に就いて古法の傳を受けた。また英一蝶をも模した。

長崎では、清人張秋谷の門に入つて、南竹花鳥を學んだのだつた。

文晁は、あらゆる流派の特徴を拾つてそれを自己の物としなければやまなかつた。彼は、宗元明の諸家を參酌し、南北を混じ、和漢を統一して、別に一大旗幟を建てることを以て抱負としてゐた。

彼はすでに十分一家を成すに足りる技倆を持つてゐたが、併し世間はまだそれを認めて呉れなかつた。當時畫壇の覇權は依然として狩野家の掌中にあつて、武家正式の用には其の派以外の者は斥けられて顧みられなかつた。併し、積年の因習でこり固まつてゐる其の派からは、眞の名手は現はれさうもなかつた。京都では、呉春に次いで岸駒が賣り出してゐた。文人畫も到る處に擡頭しつゝあつた。さうして世人の嗜好は著しく新畫に傾いて來た。其の群雄割據の時勢に於て、畫壇全部を統一するやうな巨匠の出現することを世人は久しく渇望してゐた。文晁は、自分こそ其の覇者たるべく志してゐるのだつた。

文晁には唯一人眞の知己があつた。それは松平定信であつた。二人の間には父祖の代からの深い縁故もあつた。

文晁の祖父は、谷傳右衛門と云つて、江州大津の代官手代といふ役を勤めてゐた。傳右衛門は、さういふ低い役柄ではあつたが學問があつて、殊に民政の事に通じてゐたので、畿内地方の代官に任命されて行く人は、先づ大津へ行つて傳右衛門の處を訪問して、其の說を聽て參考にするといふ有樣だつた。彼には「田園類說」「聽訟須知」「地方一様記」等の著述があつた。それらの著書は、江戸の郡代屋敷でも悉く謄寫して備へて置くほど有名の書だつた。其の頃、三卿の一家田安家の財政が逼迫して非常な困難に陷つてゐた。幕府では評議の結果、谷傳右衛門を田安家に附けて財政の整理をさせることになつた。傳右衛門は俸米百俵を貰つて田安家の人となつた。彼は就任匆々内政を整理し、また領地を巡回して年貢其の他種々の弊習を改め、耕作の實績を擧げさせる工夫をした。其の經營宜しきを得て、田安家の財政は年々回復し、數年ならずして勝手方の富裕なること三卿のうち第一と云はれる程になつた。傳右衛門の忰が麓谷であつた。上野の麓下谷に住んでゐるといふところから麓谷といふ名を附けたのだつた。麓谷は父とは正反對の性格で、全然詩人肌の人物で理財の道は頗る不得手だつたので、殆んど不勤も同様で過ごした。文晁は天明八年四月父の跡目を相續して、部屋住みから勤めに出た。奧詰め見習ひを命ぜられて高五人扶持を貰つた。さういふ縁故で文晁は田安家から重んじられてゐた。殊に定信は文晁の畫才を愛した。定信は、奧州白河松平定邦の養子

となつて其の封を繼いだので、田安家では文晁を附き人として松平家へ遣つた。天命六年將軍家治が薨じて、家齊が一橋家から入つて大統を繼いだ。翌七年六月、松平定信が老中に任ぜられた。定信は年三十歳だつた。彼は老中上座として幼少の將軍を補佐し、宛として副將軍のやうであつた。

定信は、田沼の弊政を改革して、奢侈を禁じ、文弱を戒め、政令の振肅に專ら力を盡したのであつたけれど、彼は元來好學の人で、殊に好古趣味を有してゐたので、文藝美術の如きはむしろ奬勵した。彼は頗る博學多聞で、書道に達し、畫は十二三歳の頃から狩野を學び、後に沈南蘋の筆法をも學んで一種の風格を有つてゐた。文學美術の徒で定信の庇護を受けた者は少なくなかつた。柴野栗山を拔擢して幕府の儒官となしたのも彼であつた。賴山陽が、拮居二十餘年、心血を灑いで成つた日本外史を刊行することが出來たのも、定信の後援があつたからであつた。

定信は、海防の事について房總地方を巡檢する時、文晁を從へて行つて海岸の見取り圖を描かせた。それが『公餘探勝』となつて現はれた。築地に下屋敷があつた。其處には汐入りの池があつて、庭園の風致が頗るよかつた。定信はみづから記文を書いて、庭の景色を文晁に寫させた。それから奥州白河へ下る時なども文晁を伴れて行つて、名所々々の風景を寫させたりた。

併し、美術に對する定信の一番大きな功績は、江州石山寺の什物になつてゐる『石山寺緣起』といふ繪卷が一卷缺けてゐたのを、文晁に命じて補缺させた事と、『集古十種』の編纂をさせた事とであつた。

石山寺緣起は、全部で七卷にわかれ、隆光、光信、光持等の古土佐の名匠が數人で筆を執つたと傳へられてゐるが、其のうち一卷缺けてゐたのを、元祿の頃飛鳥井雅章が詞書だけ書いて、畫は成らずにゐたのだつた。文晁は石山寺へ行つて逗留してゐて畫いた。夏から籠つて畫いてゐたが秋になつてもまだ出來なかつた。定信は「追ひ〳〵寒くなるから」と言つて文晁の處へ夜具蒲團を拵らへて送つて遣つたりした。畫が完成すると定信が卷末へ跋文を書いた。其の繪卷は文晁の傑作の一つとなつた。古土佐の筆法を用ゐて畫いたのだけれど、あくまでも文晁自家の特色を失はず、それで古代の名匠に伍して些かも遜色がなかつた。

集古十種は、定信の好古趣味の結晶とも云ふべきものだつた。それは天下の古器古畫の類を悉く網羅して、これを模寫して一纒めにしたものであつた。全部で八十五冊になつた。定信

は此の仕事を主として文晁に命じてさせた。文晁の外に、白雲上人と巨野文選が、矢張り定信の命によつて其の蒐集に力を盡した。

白雲上人は、逸髯と號した。生地は詳かでないが、後に白河へ行つて松平家の菩提寺東林寺の住職となつた。彼は非常に樂翁公の信任を得て屢々政治上の樞機にも與かつてゐた。畫は勿論餘技であるが、筆法が正確で、特に寫生に長けてゐた。

集古十種は寛政十二年に刊行された。

四

白河樂翁公は、或る時文晁を側へ召し出して

「お前の名前を一度に江戸中に廣める工夫があるがどうだ」と言つた。

「さういふ工夫が御座いますならば、是非御傳授に預り度う存じます」と文晁は答へた。

すると樂翁公は笑ひ乍ら其の方法を文晁に授けた。其の年の暮れに文晁は千本からの白扇を買ひ集めて、それへ得意の富士の圖を一筆書きにして、大きく文晁と落款を入れた。大晦日の夜中過ぎに、人を雇つて其の千本の扇を江戸の街々へ捨てさせた。明くれば元日の朝、年始の廻禮に出た人々は、門先きや往來の角々で新らしい扇を拾つた。開いて見ると美事な筆勢で富士が畫いてあつて、文晁といふ名がはいつてゐる。「元日早々富士山の扇を拾ふとは緣起がいゝ」と拾つた人は大層喜んだ。文晁の名前は一度に江戸中へ廣まつた。——といふ話が傳はつてゐる。

遂に文晁は一代の大家となつた。彼は好んで富士を描いた。で自から寫山樓と號した。其の家の二階からはよく富士が見えた。最も得意の畫題は人物で、山水花鳥がそれに次ぐのだつた。が、彼の青綠山水の密畫に至つては殆んど獨得の技で、和漢古今を通じて追隨するものが見出されないのであつた。彼は探幽以來の畫家であると云はれた。

文晁も若い頃は貧乏であつた。年始の發會をするのに費用がないので伯母の處から借金をして來て漸う間に合はせたりしたこともあつた位だが、大名を成して後は畫の依賴者が門前に市をなす有樣なので、收入も莫大だつた。年收は千兩に上つた。彼は豪奢な生活をした。二長町の其の家はもとは小さかつたのを改築して、長屋門總二階の立派な家に直した。二階の畫室は二十疊敷だつた。詩會はいつも下座敷で開いた。門人は江戸中で三百人に餘る程あつた。二七の日が面會日になつてゐた。其の日は澤山の來客に一人々々酒食をとゝのへて饗應するのが例

だつた。書の依頼に來る者は、王侯貴人から、田夫野人、俳優、妓樓の主人、と常に千差萬別で殆んど應接に暇が無かつた。平常家に料理人が置いてあつて、其の臺所はてうど料理屋のやうだつた。魚は直接魚河岸から運ばせた。酒は文晁と銘をうつて、自分の口に合ふやうな酒を醸造させた。吉原の藝者が年中きまつて出入りをしてゐて、陽氣な笑聲が朝から戸外へ漏れた。門前には屋臺店が出て、文晁の宅へ來る客の供の者などを相手にしてそれで商賣になつてゐた。文晁は出仕から歸つて來ると直ちに客に接して、倦まず屈せず、酒を被つて虹のやうな氣を吐いた。興がのつて來ると彼は墨をすらせて、誰にまかせて揮毫した。

文晁の家から一軒置いて隣りに中島一鳳といふ畫家が住んでゐた。中島も元は武家の出で、伊勢の小藤堂の家臣の次男だつた。相應の腕はあつたけれど、世間に知られる程の畫家ではなかつた。だから其の門前は常に雀羅を張つてゐた。直ぐ側なので、文晁の家の景氣のよいのが手に取るやうに知れた。一鳳の細君は、自分の家が何時でも寂しくて暮しも貧乏なのに引きかへて、文晁家の豪儀な有様を朝夕見てゐるにつけ女心にうらやましく思つた。

「ねえ貴郎、どうしてお隣りはあんなにお客があるんでせう、たまにお客が切れたかと思へば、先生が何處かのお邸へ呼ばれて外へお出掛けになるんです、歸つて入らしやればまた多勢のお客樣でせう、ほんとうに御盛んですわ。それ程繪が上手なんでせうか。處が貴郎、うちへは何時が日だつて繪を頼みに來る人なぞはないでせう、そのうちに貴郎は田舍へお出掛けになるし、さうすると門を出這入る者は妾だけなんさやありませんか、ほんとに心細いつてありませんわ、おなじ繪かきでもかうまで違ふもんかと思ふと、妾は情なくなりますわ」

と、或る時細君は夫に向つて愚痴を言つた。女房からさう云はれると、一鳳も少し癪に障つた。

「いや、そんなに氣を落すものぢやあない、俺だつて文晁だつて腕前はさう違やしない、あれあ只から人氣なんだよ、生きてるうちにあんなに莫迦に盛んな客に限つて、死んで見ろ、火が消えたやうになるから。あゝいふ有象無象の客共といふものは、其の畫繪を賞玩するものでも何でもない、直きに忘れてしまふものだ。すべて此の繪なんていふものは、死んで見なければ本當の價値は分るもんぢやない、生きてるうちにどんなに盛んだつて、そんな事を氣にして彼れ是れ云ふ奴があるものかお前も繪かきの女房だ。それ位の事は心得て置け」

するど細君は一寸考へてゐたが

「では、貴郎は何時頃お亡りになりますの」

或る日文晁の處へ一人の田舍者らしい人物がやつて來て、「是非先生の繪を一枚頂き度い」と言つた。紹介も何も無いので、門人は執り次ぐことは執り次いだが、好い加減なあしらひをして置いた。文晁も面倒臭いので、そこらに放つてあつた繪を書いた半截を渡してやつた。すると客は喜んで、繪を貰つて、口錄包をさし置いて歸つて行つた。後でそれを開封して見ると金五兩あつた、五兩といふ金は當時畫料としては莫大なものであつた。文晁も驚いて後から人を遣つて尋ねて見ると、それは伊勢の四日市の富豪で、大傳馬町へ出店を持つてゐる紙問屋の主であることが判明つた。そこで文晁は改めて絹本へ密畫を畫いて其の人に贈つた。それはまだよかつたけれども、其の後のこと、或る時矢張り田舍者の客が玄關へやつて來た。襤褸着物を纏つて草鞋ばきのいで立ちで、平身低頭して

「私には七十にもなる老父が御座いますが、老父が申しますには、老後の思ひ出に是非文晁先生の畫を一枚頂いて、神佛の御符にも代へ度いとから申しまする。何卒、先生のお筆なれば、どんな紙切れでも墨さへ付いてゐれば宜しう御座いますから、是非頂けまするやう、近頃御面倒の事乍ら、何分宜しくお取り次ぎのほどをお願ひ仕ります」

と式臺に手を突いて言ふのだつた。門人は、圖々しい田舍者が繪を強請りにやつて來やがつたと考へた。

「折角だが、今日は御來客で先生は御多忙だから、お取り次ぎをすることはなりません」

「左樣でも御座いませうが、そこを何卒お取り次ぎを――」

「いや成りません、全體うちの先生は、紹介が無くては揮毫をなさらぬことになつてゐるのです」

「それも承はつては居りますが、生憎知り合ひに紹介して頂く人も御座いませんので、ぶし付けにお願ひに上りましたやうなわけで、是非ともお取り次ぎを――」

「成らんと云つたら成りません、早くお歸りなさい」

それでも田舍者はなか〳〵歸らなかつた。やかましく言ひあらそふ聲が畫室に居る文晁の耳に這入つた。

「これ〳〵、玄關で何を騒いでゐるのだ」

一人の門人がやつて來てかく〳〵の次第だと言つた。

「うむ、それほどまでに欲しがるなら何か呉れて遣れよ。是れではどうだ」と文晁は、側にあつた左り馬の下圖を取り出して言つた。

「結構で御座います、ちや是れをやつて追ひ返すことに致しませう」

門人は下へ降りて來て

「只今先生に申し上げた處が、お前さんの熱心に免じて此の畫を下さるといふことです、有難く心得てお歸んなさい」

田舍者は其の畫を展げて見て、

「是れは美事な御作で御座ります、突然お願ひに上つて斯樣な結構な畫を頂戴致しまして何んとも御禮の申し上げやうも御座いません」と幾度びも押し戴いて「とてもの序でに落款もお願ひ致し度う御座ります、ついては、是れは甚だ輕少で失禮では御座いますが、御禮のしるしに差し上げて頂き度う存じます」

と言つて、門人の見て居る前で、十兩小判を取り出して紙に包んで差し出した。門人は喫驚して早速其の由を文晁に傳へた。文晁も驚いて之れは必ず由ある人であらうと思つたので自身で玄關へ出て來た。

「これは〳〵、何れのお方かは存じませんが只今は門人共が失禮を致しました。其のやうに多額の畫料を申し受けるなれば、また畫の畫き樣もあります、只今直ぐと申されても困るが、今晩中には必ず畫いて差し上げますから、今夜は一と晩私の處へ御逗留になつては如何です」

すると其の田舍者は屹と立ち上つて、

「是れは近頃奇怪な事を承はるものです、謝儀の爲めに畫いて果れるやうな繪なれば、神佛の守符は愚か、鼻紙にもならぬから、その樣なものは欲しう御座いません、是れは誠に失禮致した」

と言つて、左り馬の下圖だけを持つてサッサと行つてしまつた。文晁は呆氣にとられてしまつた。

それから五年後ちのことだつた。或る時文晁は仙臺侯の邸へ招かれて行つたが、其の日のお客は名だたる大名ばかりで、文晁は其の前で仙臺侯の需めに依つて得意の左り馬の圖を揮毫した。すると、其の繪を描き了つた時、

「成る程是れは下圖よりもよい、十兩の値打は充分ある」

と言つた人があつた。文晁は驚いて其の客の顏を見た。それは先年自分の家の玄關へ來た田舍者だつた。剛氣な文晁も其の時は少し色を失つた。

さういふ事が幾度びかあつた。

文晁は、謝儀の厚薄に依つて畫を上下すると云つて一部の人からは批難された。それに對して文晁は「人が自分の畫を信ずるのに厚薄がある以上は、酬ゆる處も同じ樣にはいかないのだ」と言つてゐた。

文晁の名聲は隆々として昇つて、狩野家も爲めに威壓されてしまつた。江戸市中の酒屋は、「文蝶」を置かなければ恥のやう

に考へて、何處へ行つても其の酒を賣つてゐるやうになつた。處が其の頃のこと、ある通客が吉原の青樓へ行つて遊ぶと、床の間に鶴の畫幅が掛つてゐた。

「實にうまい、此の文晁は」と客は言つた。

すると側に居た藝者が笑つて

「貴郞、是れは文鳥ではありませんよ、鶴です」

と言つたのでさすがの通客も索然としてしまつた。其の後客は他の樓へ遊びに行つて、酒宴なかばに偶々此の話しが出た。

「あんな藝者は吉原の恥だね、いまどき文晁を知らないなんて馬鹿にも程がある」

と言つて客は罵倒した。すると其の席に一人の老妓が居たが其の話を聞くと得意な顔付きをして、かう言つた。

「まあ何といふ馬鹿な妓でせう。文鳥は小鳥ぢやありませんか、大體鶴とは羽色だつてまるで違つてるのに」

通客は呆然として言葉が出なかつた。

五

或る時文晁の處へ、年齡四十ばかりの比丘尼が一人、黑羽二重の小袖の下へ白無垢を着て、侍を召しつれて訪れて來て、文晁に繪を畫いて貰ひ度いと言つた。文晁は丁度外出しやうとしてゐた處でもあつたし、殊に一面識もないのに何處の者とも名乘らずに只賴むのだから、面倒臭く思つて、

「貴の御依賴でしたら、悴の文一にお賴み下さい、當節は大抵の事は悴に委せてありますから」と言つてことわつた。すると尼は

「わたくしは先生の御高名を承はつたればこそ、かうして態々參りましたのです、何故さうまで情なく遊ばすので御坐いますか」

と言つて頻りに望むでやまないので、

「では、一體どういふ繪をお望みなのですか」と文晁は言つた。

「白拍子の舞を畫いて戴き度う存じます」と尼は答へた。

「はあ成る程、では靜御前が鎌倉八幡の廻廊で舞ふ處でも畫くのですな」

「いゝえ左樣では御坐いません。わたくし事は、むかしから此の舞が大層好きで自分も舞つたことが御坐いますから、其のわたくしの舞つてゐる處を描いて戴き度いので御座います」

と尼は眞面目な顏をして言つた。

「はゝア、こいつは氣ちがいだな」

と文晁は氣が付いた。見れば頭をまるめて齡こそ取つてゐる

けれど、むかしが偲ばれるやうな縹緻である。けれどもいま時白拍子の舞をまふ者なぞがあるわけはない、「どうして氣が違つたんだらう」と文鼎は思つた。門人達や家内の者も、餘り變つた容なので隙き見をしてゐたけれども、此の主人との應答を聞いて矢張り狂人に違ひないと思つた。でみんな面白がつて益々覗きに行つた。それでも尼はちつとも恥ぢる風はなく、泰然としてゐた。其の樣子が猶更おかしいといふので、愈々以て氣違ひときめてしまつた。

文鼎はからかひ半分

「お身樣が舞をお好みになると云はれても、其の舞ふ處を見ないことには繪に描くことは出來ません、只今爰で、一曲お舞ひになりますか」と笑ひ乍ら言つた。

尼は

「では、舞ふことに致しませう。が、久しく舞ひませんから、どうでお目に掛ける程のことは御座いませんけれど、舞はねば望みが叶はず――したが比丘尼の圓い頭でもおかしう御座いますから、手拭で包むことに致しませう、それから、扇を一本借して下さいませ」

と直ぐ樣身支度をして、頭を手拭で包み、扇を借りて、床の間の正面に居直つて、扇をば右の脇に置いた。新しい扇を出してやつたが、扇の方は見もせず衣紋をかひつくろひ、身がためをするやら、其の仰山な樣子を見て人々は袖を口に當てゝ笑ひを堪へてゐた。やがて尼は一曲の唄をうたひ出した。處が其の聲は何んとも云はれぬ妙音だつたので、人々は意外に感じて驚いた。「これあ氣違ひぢやあないわい」と、一同は耳をそば立て、片唾を呑んで見詰めてゐた。

程なく尼は扇を取つてすつくと立ち、颯と扇を開いた。扇は十分にひらけた。ことに颯と鳴つた其の扇の音は、普通の人がいかに上手に開いたところで、到底及ばない趣きがあつた。一同は感心してしまつた。さて立上つて、唄ひ乍ら舞ひ始めた。扇の手と云ひ聲と云ひ、節と云ひ舞と云ひ、何一つ喫驚りしないものはなかつたくらゐ美事だつた。しばらくして舞ひ終つた。文鼎はほとほと感服してしまつた。彼は即座に筆を取つて、尼の顏を若くしただけの白拍子の舞の圖を描いて與へた。すると尼は非常に喜んで、白銀數枚を謝禮に置いた。住所や名を訊いても明かさず厚く禮を述べて歸つて行つた。

「一體どういふ人だらう」

と後で人々は噂をし合つたが、それは九州四國邊には近く迄白拍子が殘つてゐたといふから、多分西國の諸侯の妾などの館取つた人であらうと言つた人があつた。いづれにしても、白拍

子の舞の樣子を初めて見たと云つて人々は喜んだ。

門人の稽古日は五の日と十の日だつた。其の日になると、文晁は座敷の中央に座して畫を作つた。いつでも百人二百人の門人が師匠の周りを取り圍んで、首を伸ばしてそれを熟視してゐた。其の有樣は實に壯觀だつた。文晁はさうして弟子の前で畫を作つて見せる時は、必ず古人の粉本を見て描いた。彼は非常に澤山の粉本を藏してゐた。其の粉本は南部行李の中に入れて、一々番號を附けて、畫室の棚の上に列べてあつた。其の中から取り出して、一輪の月、一羽の鳥を寫すにも必ず粉本を眺めてから筆を下した。或人がそれについて尋ねた。

「先生ほどになられたら、旣に胸中に幾多の畫本があることゝ思ふ。それだのに一々古人の粉本に依られるのはどういふわけですか」

文晁は答へた。

「いかにも私は粉本はなくても畫を作ることは出來る。然し乍ら、今の若い者は、やゝともすると師とすべきものを離れ、自分の氣持にまかせて勝手に描かうとする風がある。此の師とすべきものを離れて自分の氣持にまかせて描く者は、つひに師に及ぶことは出來ない。師とすべき物は飽くまでもこれを視て、そしてよく心に入れて筆を把る者は、遂ひに師に勝ることがある。私が畫を作る時一々粉本を出して見るのは、門人等に此の理を示さうと思ふからばかりです、私としては、何も必ずしも粉本が必要なわけではない、私の畫の方が粉本よりもよく出來ることも度び〳〵ある」

或る時彼は大小二個の的を畫いて、それを門人等に見せ乍らかう言つて教へた。

「大小の的がある場合には、先づ大きな的を射て、後に小さな的を射るのが弓術家の秘訣である。畫を學ぶ者も同じ理屈である。先づ現在生きて居る人を摸し、後ちに古人を摸し、漸く進んで漢人を學ぶのである。私が今日の力を得たのも其の順序に隨つて研究したからだ。若し是をあべこべに始めたならば、ねらひも定まらぬうちに手が亂れてしまふ、滿足な畫は何一つ描ける道理はない」

稽古日には雜閙が劇しいので、門人達は上等の履き物を履いて來ると忽ち人に替へられてしまふので、雪駄などは懷ろへ入れて座敷へ上つた。座敷の中も混雜してゐるので、中には自分の描いた畫を持つて來て、陰の方で、勝手に師匠の印を捺してゐる者などもあつた。文晁はさういふ事には一向無頓着だつた。門人が自作の畫を持つて來て師匠に落款を入れて戴き度いと言ふと

「宜ろしい」

と言つて彼は殊に其の絵を見もせずに文晁と署名して遣つた。

時にはさういふ畫を書畫屋が持つて來て

「是は先生の御自心の筆ですかどうですか」と尋ねたりすることがあつた。

すると文晁は畫を展げて見て、

「私が畫いたかどうかはつきりは記憶しないが、文晁と落款がしてあるところを見ると、多分私が畫いたのでせう」と答へるのが常だつた。

自分の畫ばかりではなく、古畫の鑑定を乞はれた場合でも矢張り左うだつた、探幽と落款があれば「是れは探幽でせう」と答へるし一蝶としてあれば「是れは一蝶でせう」と言つた。そこで畫の善し惡しを尋ねると「先づ善い方でせう」と答へた。

或る人がそれに就いて文晁の眞意をたゞすと、

「畫の値打ちは落款にあるわけではない、誰れの描いた畫だつて、善く描けてゐれば値打ちがあるし、どんな名手の名がはいつてゐようと、不出來な絵は値打ちがない。畫だけの値打ちが後世に殘るのだから、たとひ千萬の僞せの文晁が出來た處で、本物の私の價値が下るわけはない、況んや其の中に傑れた作があつて文晁として賞玩された處で一向差しつかいはない」

と言つた。

文晁の處へは到頭鑑定を乞ふものが來なくなつてしまつた。

奥州白河に常磐彦右衛門といふ人があつて、年來文晁と親交があつた。文晁が曾て富士越えの龍を描いて彦右衛門に贈つたが、筆力雄健、躍然生けるが如く眞に古今の絶筆であつた。彦右衛門は珍愛措かなかつた。彦右衛門が沒して其の子の彦之助が相續した。彦之助は一日文晁を訪ねて

「もう一幅富士の絵を欲しいから、父に畫いて下すつたやうな富士の絵を私の爲めに揮毫して戴きたい」と頼んだ。

「宜ろしい、承知致した」と文晁は答へた。

それから久しく經つたけれど、約束の畫が出來なかつた。翌年の元日彦之助は再び文晁を訪ねて、是非早く畫いて貰ひ度いと言つて頼んだ。元日のことだから年始の客が多數詰め掛けてゐて、酒宴の眞最中だつた。

「では、今直ぐ畫いて上げよう」

文晁は直ぐ樣門人に墨をすらせて、絹を展べて、八面玲瓏の富士を描いた。すると彦之助は何故だか餘り悦ばない樣子で、

「先生、此の富士も結構は結構ですが、私は成る可くなら、父に畫いて下すつたやうなあゝいふ壯絶な富士の圖を畫いて戴き度いのです」

すると文晁は俄かに氣色を變へて、刷毛を把つて其の繪を塗り潰してしまふとしたので、彦之助も駭いて押し止どめた。

「そんな心掛けでは駄目だぞ。お前と彦右衛門殿とは境遇が異つてゐる、お前の父は創業の人だから、龍の富士を越えるやうな氣勢がなくてはいけなかつた。が、お前は守成の人だ、八面玲瓏の富士のやうな心を持たなければいけないから私は此の富士を描いたのだ。どうだ、解つたか」

「恐れ入りました、よく解りました」

「解ればそれでいゝ」

文晁は手に持つた刷毛で、愼獨の二字を其の畫幅に書いて與へた。

或る時文晁が某諸侯に招かれて揮毫をした。すると侯が曰ふのに

「富士越しの龍は珍らしくない、先生富士越しの虎を描いて貰ひたい」

文晁は畏まつて、童子が虎の字を書いた凧を揚げてる圖を畫いて、中間へ富所を遠く添へて描いた。

六

文化九年四月、松平定信は病に托して隱居した。致仕の後は樂翁と號して専ら風月を友として過ごした。定信が隱居した後は、文晁は從前通り田安家へ戻されて、奥の番頭といふ役柄で、百五十俵の扶持を貰つてゐた。

定信の隱退後は將軍家齊が親政を行つた。さうして所謂文化文政の爛熟時代が來た。文化文政は江戸の最も華やかな時代であつた。將軍家齊は太政大臣に任官し、世子家慶を從一位内大臣に陞せ、位人臣を極めて奢侈逸樂を旨としたので、政道は頓みに弛緩して、有司は互に權力を爭ひ、賄賂公行して人心は頗る廢頽して來た。併し乍ら、江戸の繁昌は空前であつた。將軍家齊には五十一人の子があつた。それらの子女を緣付ける支度だけでも、幕府の用達町人は目の廻る程忙がしかつた。將軍家と緣組をする諸侯は、無上の光榮に醉ひ互ひに華美驕奢を競ふので、それが爲めに江戸の市中に消えて行く費額は莫大なものだつた。上下を通じて所謂錢廻りがよく、江戸の市民は只々泰平を謳歌するに餘念はなかつた。

何れの國に於ても、文藝美術の類は、さういふ爛熟時代に遇つて始めて百花燎爛の態を現出するのである。化政時代に至つて、我が國の美術鑑賞の嗜好は社會一般に廣く行きわたつて來た。今迄は狩野、住吉の外に絢爛の趣味を求めやうとはしなかつた上流社會の人々が漢畫や町繪の範圍迄嗜好の手を擴めて來

ると共に、一方では浮世繪ばかりをよろこんでゐた中流以下の階級の趣味が向上して、上下が融通し、好向が進歩して、益々美術の發展を促がすやうになつた。諸侯の家では、客のある時は必ず高名の書家を聘して席上揮毫を命ずるのが常であつた。さういふ風尙であつたから、大名の中からも書畫を善くする人が現はれた。

伊勢長島の領主增山雪齋、備後福山の領主阿部棕軒の如きは、いづれも玄人の域に達してゐた。就中增山雪齋は大名の中での第一人者で、風流拔群の人だつた。雪齋は名は正賢、從五位下河內守に任じ、文學に長じ、書畫ともに工みで、好んで沈南蘋の風を描いた。其の邸には常に文雅風流の士が集まつた。雪齋は長島に文禮書院といふ學校を建て、十時梅崖を其の學長とした。梅崖と雪齋との間には恁んな話がある。

或る年、雪齋が參勤交代で東海道を下る時、家老の某の駕をかついでゐた雲助が餘程變り者で、途々家老に向つて

「あなたの殿樣は大層文學がお好きだといふことを承はつて居りますが、どうか私に拜謁をお許しなされて戴き度う存じます」と言つて頻りに賴んだ。

家老も「變な男だ」と思つたので

「よし〳〵、本陣へ御到着になつたらさう申し上げて遣らう」と言つた。

旅館へ着いてから家老は主君の御機嫌伺ひに出た序でに笑ひ乍ら其の話をすると、雪齋も興味をもつて「どんな奴だか伴れて來て見ろ」と命じた。家老は早速彼の雲助を御前へ召し連れて來た。そこで雪齋が種々問ひ尋ねて見ると、中々學問があつて、見識もなみ〳〵ではなかつた。雪齋は其の儘此の男を江戶の邸へ隨へて來て、祿を與へて召し抱へた。

其の雲助が十時梅崖であつた。梅崖は大阪の人で、經義を伊藤東所に受け、書法を趙陶齋に學び、また皆川淇園地大雅等と交はつて文人畫を描き、篆刻も工みだつた。併し生れつき磊落粗狂の性質だつたので、放蕩に身を持ち崩して祇園の妓樓の幇間となり、更に落魄して東海道の雲助の仲間にはいつてゐたのであつた。

大名ばかりでなく、町人社會でも、俳優、妓樓の主までが風流文事を口にするやうになつた。文人墨客は極度に社會から持て囃された。かゝる時代は從つて各方面の大家を輩出せしめた、漢學者に龜田鵬齋、大窪詩佛、菊池五山、書家に市川米庵、國學者に加藤千蔭、村田春海、淸水濱臣、狂歌に四方赤良、手柄岡持、宿屋飯盛、戲作には山東京傳、十返舍一九、式亭三馬、やゝ下つて瀧澤馬琴等の大家が續出した。彼等は皆一

般市民とひとしく、泰平に陶醉し、酒色に耽溺して、放縦の生活を事としてゐた。其の時にあたつて、江戸の畫壇の牛耳を執り、一代の名手として最も他人に敬重されたのが文晁であつた。そして文晁の次ぐ者は、酒井抱一であつた。

抱一は播州姫路城主酒井忠以の弟で小石川の邸に生れた。彼は性甚だ穎敏で、武藝に達し、併せて文事に通じてゐた。然し、豪放の資は武門の禮式の煩はしさに堪へなかつたので、年三十七の時病と稱して髪を剃り、西本願寺文如上人の弟子となつた。そして一時京都へ上つて文如の准連枝の待遇を受け、法名を等覺院と云つて、權大僧都となつた。しかし、彼が僧侶となつたのも、もと〳〵氣隨氣儘の生活がしたかつたからであつた。抱一は間もなく江戸へ來て、下谷根岸に住んで、靜寂なる草廬を營み、雨華庵と稱した。雨華庵は、以前から其處にあつたさゝやかな農家を買ひ取つたもので、其の儘改築もせず、僅かに茶室を一つ建て增したばかりだつた。彼は、僧にあらず、俗にあらず、畫事風流に身を委ねて、遊興三昧に日を送つた。そして吉原の花魁を身請けして、妾として雨華庵に同棲してゐたが、花魁のほかに新造や禿まで一緒につれて來て住まはせ、廓に居る時と同じやうに廓言葉（さとことば）を使はせゐた。

抱一は、最初畫を狩野高信に學び、後に歌川豐春に就いて浮世繪を研究し、更に宋紫石を師として沈南蘋の法を習得した。一と頃彼は文晁にも師事した。すると文晁が、

「私は、尾形光琳の畫こそ實に崇仰すべきものだと思ふのですが、悲しいかな今其の遺法を繼ぐ者がない、私も其の復興を思はないではありませんが、尾形流の畫を描かうとするには、繪の具を撰んで價を問はない人でなければ出來ぬことなので、手が出ません。あなたのやうに富貴で其の上お閑のある方がなされば、一番適任なのですが」

と言つたので、それ以來抱一は尾形流を學び始めた。そして遂に光琳以後の作家となつた。抱一が繪の具の善悪を擇んだことは名高い話だが、或る時姫路藩の家老某が抱一を訪ねて、

「私は此の度びお上の御用で京都へ參りますが、何か御用があれば調へて參ります」と言ふと、

「では某といふ店で胡粉を二兩目ばかり買つて來て貰ひ度い」と抱一が言つた。

家老は、些少のものだから別段價も聞かずに行つて、さて其の店へ行つて買はうとすると「上人のお用ゐになるのは特別の製品だから直ぐは出來ません」と云はれて、數日待たされ、漸く品物が出來たので代金を拂ふ段になると、二兩目の胡粉が三十兩といふ高價だつたので、驚いてしまつた。

抱一の畫は繪の具に多額の金が掛る處へもつて來て、依頼する人が金錢で謝禮するのは失禮だと考へて多くは物品で持つて來るので、雨華庵の生活は可成り餘裕が無かつた。其の頃深川冬木町の豪商冬木某といふ人は抱一の崇拜者で、毎度畫を依賴しては物品を贈つてゐたが、或る時八つ橋の屛風の揮毫を乞うて、それとなく謝儀をどうしたら宜からうかと尋ねると、上人は微笑し乍ら、

「庵の費用も年々嵩んで不足を告げることもあるから、報酬は遠慮無く金で贈られたい」と言つた。

某は重荷を卸したやうな氣持がして

「それは誠に心易い事で御在います、が、此の度の屛風は金地着色で普通の幅類とも違ひますので、差し上げる金額を何程と定めて宜しう御在いますか、尊慮の程を承はり度う存じます」

と言ふと、

「左樣さな、では杜若の花一輪について大小の差別なく金百匹と定めて贈られ度い」

「橋や杜若の葉などは如何樣に計算致しませうか」

「否々、一輪百匹で十分であるから、他の物は計算するには及ばない」

と言つて後は何も云はなかつた。日數を經て其の屛風が完成した。某は謝禮をする爲めに花の數をかぞへて見ると、六曲一双の中に花が三百餘りあつたので、其の報酬は七十五兩といふ額に上つた。

けれども抱一も後にはどん／＼畫料を取つた。畫料幾々らと言つて、それ丈持つて來なければ筆を把らなかつたので、さすがの文晁ですら「根岸のお上人が欲張る」と言つて餘りよく言はなかつた。

或る時大雅詩佛の處へ、日頃じつこんな老畫工がやつて來て、

「どうも貧乏で困つたが、何かうまい工夫はありますまいか」

と言つた。

詩佛は手を拱いて考へてゐたが、やがてにつこり笑つて、

「安心し玉へ、僕が名案を思ひ付いたから」

それから詩佛は直ぐ樣文晁の處へ出掛けて行つた。

「お大事なものだが、尊公の其の羽織を一寸拜借願ひ度い」

「どうするんです」

「いや、實は一寸餘所へ參らねばならんのだが、先達て羽織を呑んでしまつたので、急に差し支へて困つてゐる、尊公のを借りて一時間に合せやうといふわけさ」

文晁は笑ひ乍ら着てゐた羽織を脫いで遣つた。それは田安家

から拜領の黑紗二重の紋付だつた。

詩佛は大喜びで羽織を持つて自分の家へ歸つて來た。すると老畫工が首を長くして待つてゐた。

「さあ〳〵、貴公は此の羽織を着て出掛けるんだ」

「何處へ行くのです」

「先づ上州邊へ行かう」

「上州へ行つて何をするんです」

「そんな事は僕に委せて置き玉へ、兎に角直ぐに出掛けやう」

詩佛は呆氣に取られてゐる老畫工をうながし立てゝ上州へ旅立ちをした。さて上州へ着くと、

「此の度び谷文晁先生と、大窪詩佛先生とが同道して、當地へ漫遊に及んだ」

と振れ込んだ。當時文晁の名聲は遠近に轟いてゐて其の畫は容易に手に入らなかつたので、上州の素封家は爭つて揮毫を賴んで來た。詩佛は彼の老畫工に例の羽織を着せて、すつかり文晁に仕立てゝ繪を描かせた。人々はこれまで文晁の顏こそ知らないが、見れば立派な老畫師で殊に葵の紋の付いた羽織は着てゐるし、また有名な大窪詩佛先生が附いて來てゐることだから、誰れ一人として疑ふ者はなかつた。かうして僞文晁は各所々々を廻つたので、江戸へ歸つて來た時には行李の中が重い程金が溜まつてゐた。

それから暫らく經つてから、詩佛は此の事を文晁に語つた。

「ひどい事をしたものだね」と言つて文晁は笑つてゐた。

詩佛は上州の知人達の許へも書面を送つて

「いつぞやの老畫師は實は文晁にあらず、近頃生活困難にして米鹽に窮す、僕深く之を憐む、因つて計を授け詐つて文晁と稱し、姑らく人氣を引き立てゝ其の急を救ひしなり、お陰を以て彼が家道も頗る興復せり、盲言多謝」

詩佛は文化文政の間詩を以て江戸騷壇の牛耳を執つた人であつた。神田お玉ケ池に棲み、其の家を詩聖堂と云ひ、盛んの頃は門人來客常に堂に滿つる有樣で、收入も頗る多く豪奢な生活をしたが、晩年火災に遇ひ、其の頃から家道が頓みに衰へ始めた。それとゝもに精神も衰弱し、中風を發して昔日の面影は更らになく、齡六十餘で練塀小路の僑居に於て終焉を告げた。

七

文晁は、葛飾北齋の門人で浮世繪を描いてゐる蹄齋北馬といふ者の處へ使を遣つて「少々お話しゝたい事があるから私の宅まで來て貰ひ度い」と言つて遣つた。北馬は、文晁とはまだ一回も會つたこともないので、どういふ話しだらうと思つたが、

兎も角も直ぐやつて來た。

「さて、お前さんをお招き申したのは外のことでもない、折り入つて私からお前さんにお頼み申し度い事があるのだが、就いては其の前にお尋ねしたいことは、今まで北齋先生の描かれた繪本、草双紙、其の他いろ〱の物をよく拜見してゐるが、なか〱どうも、着物の模様、景色、風俗等も行き渡つてよく描けてゐる。が、聞けば其の細かな處は大概お前さんがお描きなさるといふことだが、實際のことですか」

と、文晁は北馬に向つて尋ねた。

「左樣で御座います、實はもう地本や何かの事は私も大概心得て居りますから、師匠が怠けて出版の間が缺けさうな時などは私にやつてくれと云ふやうなこともあつて、まるつきり私が描いちまつたこともあります。師匠はあゝいふ人で、それで宜からうと申して居りますので、其の儘で濟んで居ります。全く細かな處などはみんな私が受け持つて描いて居りますのです」

「それはどうも感心なことだ。私はお前さんがあゝいふ精緻な物をお描きになるので感服して、急にお頼み申し度い事があるのだが、何んと北馬さん、私の處へ來て、私の片腕になつて手傳つて貰ひ度いのだがどうでせう――突然恁う言つても返事は出來まいが、私の處にも門人が三百人位はある、また伜共も一と通りの仕事は出來るやうになつてゐる、がさて、多數の門人の中でも是れならば大丈夫私の助手になると思ふ者が無い、伜共はまだ〱自分の研究の方が忙がしくて私の手傳ひをさせてゐるわけにいかない。そこで廣く世間を見渡したところが、緻密な仕事が出來る上に彩色も上手だといふ人では、先づお前さん位確かな腕を持つてゐる人は少ない、で是非お前さんに私の助手になつて貰ひ度いと思ふのです。北齋先生は立派な方だ、恐ろしい位の腕前を持つてゐる、あゝいふ偉い人を師匠に持つたのはお前さんの幸せだ、が、惜しいことに浮世繪といふものは中以下の社會にしか持て囃されないから、浮世繪ばかり描いてゐたのでは本當の出世は出來ない、お前さんが私の處へ來て片腕になつて呉れる氣があるなら、私の方でも其の積りで一肩入れて、お前さんの名前の擧がるやうな工夫をしてあげやうと思ふのだが、何んと承知しては貰へないだらうか」

北馬は其の言葉をつく〲聞いてゐたが、

「誠に意外なお話しで、私如き者をさうまで仰しやつて下さる御親切は何ん共御禮の申し樣も御座いません。併し、お話しを致さねば分りませんが、私は山の手の同心の子で、有阪五郎八といふのが本名で御座います、同心の勤めが厭ですから、早く弟に世を讓つて只今は隱居の身であります。然し乍ら弟に食は

して貰ふのも殘念ですから、早く其の厄介をのがれて、幾らか弟を助けてやるやうになりたいと考へまして、それに就いて私は繪が好きで少しは習つて居りましたが、大體繪本や何かを見て寫した位のことで我流でやつて居たゞけで、何も知りませんでした、が、其の道で少しも早く錢の取れるのは浮世繪に限ると考へまして、北齋先生の處へ參りましたのです。處が、幸ひ永い年數も掛らず、師匠の見出しに預かつて懇ろに敎へて戴いたお蔭で、只今ではどうやら繪も描けるやうになり、幾分か師匠の手助けもして居ります、全く北齋先生は私にとつては恩師で御座います。それに私の師匠も變つた人でして、御自分は食べる物も着る物も無くても、私にはいつも報酬を下さるのです、他から畫料を持つて來ると、『是れを持つて行きな』と言つて封目も切らずに私に下さるといふ風で、お蔭で私も今日弟の世話にもならず、幾らか家政を助けてゐるといふわけで御座いますが、是れも一重に師匠の御恩で御座います。只今の段々のお話しは誠に御尤もで有難いことでは御座いますが、私が北齋先生の處へ行つたのは左ういふ次第ですから、今日北齋先生を捨てゝこちらへ參るといふことはどうしても出來ません」

と言つた。文晁は益々感心して、

「よく分りました、實にお前さんは見上げた人だ、しかし師匠と弟子の仲は左うなくちやあ不可ない。では恁うしやう、私から直かに北齋先生に賴んで見やう、左ういふわけだつたら何も私の處へ來ながし來なくても宜しい、あちらが閑な時だけ手傳つて貰へばいゝ、其の事を詳しく云つて賴んで見やうが、それで若し北齋先生が承諾して下すつたら、お前さんも私の處へ來て呉れるだらうね」

「それはもう、師匠が承知の上の事でしたら、私に取つてもよい修業になることですから、喜んでお手傳ひを致します」

「では左ういふことにしよう」

と言つて其の日は別れた。

葛飾北齋は其の頃向島小梅に住つてゐた。北齋は、文晁より四つ年長の寶暦九年の生れだつた。本姓は中島、通稱は八右衛門と云つて、父は中島伊勢といふ幕府の用達鏡師で、母は吉良上野介の家臣小林平八郎の孫だつた。北齋は幼時狩野融川に就いて畫を學んだが、或る時師の怒りを買つて門下を放逐されたので、其の後しばらく住吉內記廣行に從ひ、また西洋畫の方を司馬江漢に學んだが、最後に勝川春章に就いて浮世繪の中へはいつて行つた。然るに又もや師匠と不和の事が生じて春章の門下をも脫してしまつた。其の後天明七年廿八歲の時、俵屋宗理の遺跡を繼いで、二世菱川宗理と稱したこともあつたが、更ら

に其の名を門人宗二に讓つて三世宗理と呼ばせ、自分は北齋辰政と改稱した、葛飾と稱したのは、江戸の本所に生れたところからさう名乘つたのだつた。彼は生れ付きの奇人だつた。家の表札には「百姓八衛門」としるし、壁に「おじぎ無用、みやげ無用」と書いて貼つてあつた。引つ越しをする癖があつて、生涯に八十七度び家を替へた。一日のうちに三度引つ越したことがあつた。そのくせ彼は非常な無精者で、何處へ移つても決して家を掃除するといふことはなかつた。年中寢床は敷きつ放しで、夜る寢床の上に居て、眠たくなれば衾をひつかついで臥し、醒めれば筆を把つて繪を描いた。常に垢だらけの破れ衣を着て、虱をつぶし乍ら人と對談してゐた。鮮魚など買ふと料理が面倒だと云つて近所の貧乏人に與れてしまつた、調度器財は何一つなく、佛壇すらもなかつたけれど、或る人から佛像を貰ひ受けて喜ぶことは喜んだが、安置する處がないので、春慶塗の重箱を横に立てゝ釘付けにして、其の中へ安置した。北齋はさういふ生活をしてゐた

　北齋は、文晁からの書面を見て、北馬を呼んで、

「わしの處へ斯ういふ書面が來たが、何かお前に話しがあつたのか」と訊いた。

「それは御座ました。が私は先生のお許しが無ければ行くことは出來ないと答へて置きました」

「さうか、それは感心だ、しかし何んだ、己れの處でも何も三百六十五日用があるわけでもないから、こつちの閑な時は文晁さんの處へ行つて手傳つて遣るがいゝ。折角さう親切に云つて與れるのだから有り難いわけだ、己れの方から承諾の返事を出して置くから、お前も先方へ行つたら其の積りで出來るだけ骨を折つて助けて上げるがいゝ」

「宜ろしう御座います、それぢやあ彼方へも參ることに致しませう」

　それから北馬は文晁の處へも始終出入りをすることになつた。北馬の家は四谷にあつた。文晁は、

「四谷から小梅迄通ふのは大變だ、第一往復の時間が潰れて詰らないから、此の近所へ家を探して遣らう」

　と言つて、同じ二長町の裏家だが、小ざつぱりした家を一軒北馬の爲めに借りてやつて、臺所道具から一切萬端文晁のはふで買ひ調へ、女中一人附けて其處へ住まはせた。北馬も其の厚意に感じて一生懸命仕事をしてゐた。

　丁度其の頃、文晁は、或る諸侯から婚禮道具の御用を吩付かつてゐた。それは極めて緻密な源氏繪で、本間の大屛風に源氏五十四帖を悉く畫くといふわけだつた。非常に緻密で大作だつ

た。

「何しろ此の忙がしい中では遣り切れない、下圖は無論出來てゐるし、大略は私が描くが、彩色から裝束の模樣などは、私が指圖をするからお前にやつて貰ひ度い。何分大物なのと、先きの日が迫つてゐることだから、餘程骨を折つて貰はないと間に合はない」

「宜ろしう御座います」

それから北馬は其の仕事に掛つた。裝束の模樣だとか几帳の模樣だとかに就いて北馬は朝に晩に聞きに來る。文晁は一々粉本を出しては「此處は恁うして、此處はあゝして」と細かに指圖をした。

或る日文晁は宗對馬守の邸へ席畫で聘ばれて行つた。宗家は同じ二長町のうちだつた。用事が濟んでから文晁はお邸へ暇を告げて、近い處なので迎ひも呼ばず一人でブラ／＼歩いて歸つて來た。三味線堀へ出て二長町へ曲つて來たが、ふと北馬の事を思ひ出したので、何をしてゐるか見て遣らうと考へて、だしぬけに北馬の宅へ這入り込んだ。

夏のことで、表にはすだれが掛つてゐた。しかしもう夜なので、外からは反つて家の中が透けて見えた。文晁は案内もなく上へあがつて行つた。北馬は蠟燭をつけて大肌ぬぎでゼツセと仕事をしてゐた。が、見ると、北馬は左の手で繪を描いてゐるのだつた。

「大分精が出るね」

「これは、先生ですか、存じませんで失禮致しました。

北馬は急いで肌をいれた。

「私は今初めて知つたが、お前は左利きなのか」と文晁はけゞんな顔をして言つた。

「へえ……」北馬はひどく恐縮した様子で「突然のお出でゞ御座いましたので、どうも飛んだ處を御覧に入れて何んとも相濟みませんで御座います」

「何、そんな事は構はないが、お前はほんとうに左利きなのか」

「いえ、さうでは御座いませぬ。實は恁ういふわけで御座います。先達てもお話し致しました通り、私は大變困窮の中に北齋先生の處へ參りまして、今日どうやらかうやら困らないまでになりましたのですから、この右の腕は全く北齋先生に賣つてしまつたやうなものです。師匠はあゝいふ人だから、悪い顔もせず文晁先生の處へ行けば貴様の身の爲めにもなることだから行つてお手傳ひをするがよいと云つて喜んで私を寄越して下さるのですが、私としては一旦師匠に捧げた此の腕を、他の人の爲めに使つたのでは心に濟みませぬ。ですから、右の腕は使へま

せぬが、左の腕はあいて居りますから、左を先生に捧げる覺悟を致しました。——實はさういふわけで左で描いて居ります、是れ程御親切を蒙つて居り乍ら誠に水臭い奴と思召すかも知れませんが、どうか御勘辨なすつて戴き度う存じます」

と北馬は兩手を突いて言つた。文晁は思はず兩眼に涙を浮かべた。

「お前は何んといふ立派な心掛けだ、北齋先生はいゝ弟子を持つて羨ましい。なに、私の仕事は左で澤山だ、決して右を使ふには及ばない」

「有り難う存じます、此の頃は慣れましたので、左でも格別不自由は無くなりました」

「さうだらう、筆勢と云ひ何と云ひ、私もお前が左で描いてゐやうとは思はなかつた、結構々々」

文晁はそれ以來一層北馬に目を掛けてやつた。文晁の歿後は、北馬は書畫會などへ出て左書きをやつたりして人を驚かせたが、文晁が生きてゐる間は決して人前で左書きはしなかつた。彼は只左で描くばかりでなく、左右へ紙を置き、兩方の手に筆を持つて、全く異つた繪を同時に畫いて見せたりした。

八

北齋の繪は、江戸では喧ましく持て囃されたが、上方では一向名が賣れてゐなかつた。文晁は或る時北馬が來ると、二尺幅の絹と十分な謝禮を添へて、

「是れを北齋先生の處へ持つて行つて、昇身龍を描いて戴くやうに頼んで貰ひ度い、私が自分で掛けて樂むのだから急ぎはしない、氣の向いた時、描いて貰ひ度い。それから之れは甚だ輕微だが、是れだけの御挨拶だからと宜しく申して貰ひ度い」

と言つて北馬にそれを持たせて遣つた。すると北齋から「誠に御鄭重な御挨拶で恐れ入ります、氣分の好い時に認めますから、暫時御猶豫を願ひます」といふ返事があつた。間もなく龍の畫が出來て來た。早速出入りの經師屋へやつて立派に表裝させ、箱に入れて、京都へ行く時文晁はそれを持つて出掛けた。

上方へ行つて、宿屋へ着くと、文晁は自分の部屋の床に前から掛つてゐた掛物を取り外して、持つて行つた北齋の龍の畫を掛けてさうして頻りに眺めてゐた。すると訪問の來客が必ず、

「これは誰れの畫で御座います」と言つて尋ねる。

「是れは江戸で今有名な畫師北齋の筆です、一體此の先生は浮世繪が看板だから餘り肉筆の方は世間の人が知らないが、是れ程の手腕といふものは容易なものではない、實に大したものです、私は特に頼んで畫いて貰つたが、今度は旅行中ゆつくり眺

めて來しまうと思つて態々拵つて來たのです、お前さん達もよく見て置きなさるがよい」

と、何處へ行つても、行つたさき〳〵でさういふ具合にやつて行つた。そこで上方の人々は「文晁先生ともある人がそれほど感服する繪なら全く大したものに相違無い」といふやうなわけで、今迄全然知らなかつた人も、或ひは版畫でわずかに名前だけも知つてゐたぐらゐの人達が、急に北齋を口にするやうになつて爭つて畫を依賴して來た。

文化十四年、北齋は名古屋へ漫遊して、西掛所境内で、紙百二十疊敷の紙へ一杯の大達磨を描いて都下の人々を驚倒させた。更らに京都に歷遊すると、京都でも大變な人氣で、到る處で引つ張り凧になつた。

其の頃京都で最も名の高い畫家は岸駒であつた。岸駒は元加州金澤の上繪かきの職人岸某の子で乙次郎と云つて、廿歲過ぎ迄金澤に居たが、淨瑠璃が好きで、本職の方はそつちのけで彼方此方淨瑠璃を語つて步いてゐたが、或人に勸められて、大阪へ出て修業して立派な太夫になりたいと考へ、大阪へ行つて其の道の人に尋ねると當時ならびなき上手と云へば竹本駒太夫だが、今京都四條の芝居へ行つて居て留守だと云はれたので、又もや京都へ行つて駒太夫の旅館を訪ね、遙々金澤から入門しようと思つて來た由を語つた處が、駒太夫は入門を謝絕した上「淨瑠璃の太夫にならうなどといふ不量見は止して、家職の上繪を描いて世を渡る方がよい」と頻りに異見を加へた。仕方なく「金澤へ歸りませう」と言つて其處を出たが、其の時はもう旅費が一文も無しになつてゐた。乙次郎は窮迫して幾日か京都で過ごすうち、或る人の世話で上繪の職人に住み込み、其の後佛光寺の經師屋へ雇はれて仕込の佛畫を描いたりしてゐた。處が、其の筆意が尋常の職人とは異つてゐる處から、或る時有栖川宮家から特に指名されて佛畫を描かせられた。するとそれが御意に叶つて、遂ひに宮家の御内人に加へられて雅樂頭と稱した。それから世間の信用も加はり、自身も日夜畫の研究に心を致したので、後には禁裏の繪師となつて越前介に任官し、大名を成すに至つた。岸駒といふ名前は、初めて宮家へ召された時「畫名は何と申す」と訊かれて、畫名が無いと答へるのも殘念だと考へ、ふと思ひ出したのは竹本駒太夫の名で、其の駒を取つて自分の苗字の岸と結び付けて「岸駒」と答へたのが抑頭生涯の名前になつたのだつた。彼の畫は、沈南蘋の寫生から出て、後に宋人諸家の法を折衷し、別に一格を立てたものだつた。

岸駒は非常に狡智に富んでゐて、常に賣名に汲々として、俗

眼を驚かす工夫ばかりしてゐるといふので、識者の間では以ての外評判が悪るかつた。頼山陽が曾て恁う云つて評した。
「岸駒は天下の人を殘らず盲目だと思つてゐる、竹堂は天下の人が皆目明きだと思つてゐる」
だから岸駒の畫はおもに田舍へばかり賣れた。彼は頗る立派な家に住み、白羽二重の衣服を着し、厚い褥の上に座して、傲然として人に接した。田舍漢が畫を頼みに來ると、一段高い處から簾をキリ／＼と捲き上げて對面するといふやり方をした。
或る年、某寺の食堂の天井の修復が出來上つたので、誰れかに龍を畫かせやうと評議をしたが、兎に角京都では岸駒が一番高名なので彼に依頼することになつた。が、もと／＼寺のことで大した報酬も出せない、それでもどうかと思つて話しをすると、「外ならぬ貴寺の御依頼と云ひ、殊に天井の畫龍を揮毫するは之れが初めてゞはあり、諸國の人の眼にも觸れ自分の名前も後々に傳はることであるから、報酬の如きは論ずる處でない」と言つて快く引き受けたので寺のはふでも大いに喜んだ。日數を經て畫が出來上つた。寺では報酬の事で評議をしたが、最初の言葉もあり、廿兩の謝儀を贈ることにして持つて行つた處が、畫稿に思ひの外の日を費したとか何んとか云つて大變不足らしい口ぶりを示したので、寺でも案に相違したけれど、今更增額することも出來ず迷惑してゐた。するとそこへ岸駒の門人がやつて來て「先き頃贈られた廿兩は正に受納致しました、就いては、初めから何程か畫に添へて寄附をも致す考へでありました故、改めて百兩御修復料の内へ寄附致します、是れは當座の納金で御座いますから御受納願ひ度い」といふ口上で、前日寺から贈つた僅の謝金を持つて來た。即答もならず、一時其の金を預かつて置いたが、寺でも少なからず弱つた。で度び／＼交渉した結果が、廿兩は元々通り岸駒に納めさせ、金百兩の空らの寄進札を寺の堂内へ掲げることにして、此の紛紜は落着した。

寄進金壹百兩　　越前介岸駒

と書いた札を見て諸國の見物人は「岸駒先生は偉いものだ」と言つて驚ろいた。すると誰かゞ落首を作つて堂の柱へ貼つた。それは

百兩が岸か寄進か知らねども當時畫龍（畫料）の高い天井

文晁の悴の文二が、或る年京都へ行くことになると
「京都へ行つたら一度は岸駒に會つて見るがいゝ」
と文晁は悴に向つて言つた。訪ねて行けば、自分の前へ對しても悴を粗略には扱ふまいと文晁は思つたからだつた。
京都へ着くと、文二は父の言葉もあるので岸駒の家を訪問し

た。すると執事のやうな男が出て「何卒此方へ」と言ふので案内されて行くと、立派な廣い座敷へ通された。正面には御簾が垂れてゐて、白木造りの物々しい有樣だ。暫時それで扣へてゐると、突然

「シーッ」

と警蹕の聲が掛つたので、文二はびつくりして、思はず「はッ」と頭を下げると、

「文二か、よう參つた、緩る〳〵休息致せ」

と岸駒が高い處から聲を掛けた。文二が再びはッと思つて頭を上げた時には、もう御簾はスル〳〵と下つてしまつた。

江戸へ歸つて來て此の話をすると、文晁は齒嚙をして口惜しがつた。

九

文晁には八人の子があつた。其のうち三人が男で、文二は長男だつた。併し文晁は　長女の於宣に養子を迎へて文一と名乘らせ、自己の後繼者たらしめんとした。文一は宮津侯の侍醫利光氏の第二子であつたが、畫を養父に學んで痴齋と號し、山水花鳥を描くに工みで、文晁も大いに望みを囑して ゐたが、性來多病で、文政元年三月齡卅三で病沒した。文晁は片腕をもがれたやうな氣がした。立派な葬式を行つて、淺草源空寺に碑を建て、碑文は龜田鵬齋が書いた。三男は早世し、二男は他家を繼ぎ、長男の文二が相續人になつた。文二は森所と號して畫も描いたが、繪はまことに下手だつた。併し、懷ろッ子にしては大變才氣があつたので、文晁は非常に文二を可愛がつた。

文晁は、體は鶴のやうに痩せた人であつたが、それでゐて精悍强力で、屢々遊園に杖を飛ばした。齡を取つてもよく大酒をした。殊に晩年の性格は曠達不羈に走り、寧ろ傍若無人だつた。杯を啣んで陶然として醉ふと、即ち筆を把つて縱横に畫いた。だから初老以後の作には、壯年時代のやうな精畫が少なく、筆致は北宗に傾き、滿幅覇氣が漲つてゐた。鹽田士鄂は文晁とは莫逆の交りがあつた。文晁が老年に及んで畫名は益々世に喧がれてゐた頃、士鄂が畫を乞ふと、文晁は「私が廿年前に作つた畫には確かに觀る可き物があるが、今は齡も古稀に餘つて、精衰して目が昏むでしまつたから本當の畫は出來ない。已むを得ず描く畫ばかりで、到底知己の爲めに揮毫するには勝へない」と言つてどうしても應じなかつた

壯年時代迄の文晁は非常に研究心が強く、細心綿密で、しかも極めて博採主義だつたので、目に觸れる物は何んでも取り込んだ。彼は司馬江漢の影響を受けて西洋畫も一と通り研究し

た。或る年和蘭の甲比丹が八代將軍に西洋の花鳥畫を獻納すると、將軍は是れを嘉納して後に本所の羅漢寺に下賜された。寛政の頃、文晁は是れを見て模寫を試みた。それは長さ九尺幅四尺の絹へ、日本繪具を以て油繪の色彩を出さうとしたのであつて、ほゞ成功の域に達したのだつた。集古十種の編纂は、樂翁公の趣味であると同時に、文晁の旺盛な研究心の發露でもあつたのだ。市井の一畫家で文晁ほど澤山の粉本を所藏してゐた人は古來てなかつた。渡邊玄對が歿した時文晁が十兩の香奠を贈ると、玄對の遺族の者は香奠返しをどうしたらいゝか分らぬので文晁の所へ相談に來た。すると文晁は「私の欲しい物は粉本のほかには何んにもない」と答へたので、渡邊家では玄對の秘藏してゐた粉本の全部を文晁に贈つた。

文晁は、和漢のあらゆる流派を統一して別に一家を成した巨匠であつた。彼は綜合的の畫家だつた。だから、其の門下からは種々の傾向の畫家が輩出した。門人數百人のうち最も有名なのが、渡邊崋山、田能村竹田、立原杏所、高久靄厓の四人で、是れを文晁門の四哲といふべく、次いで佐竹永海、鈴木雲潭、喜田武清、依田竹谷、遠坂文雍、岡田閑林、相澤石湖、江川坦庵等もそれ〳〵當時名のある畫家であつた。

天保十年九月一日、文晁は七十七歳の壽延を兩國の萬八で開いた。其の日の來會者は、當代の名流、文人墨客の名のある者は悉く網羅されてゐたので、會場が狹隘を來し、近隣の紺淸樓を借りて支會場とした程の盛會だつた。

それが文晁の最後の活動であつた。

其の頃文晁は中風を發して思ふやうに筆が執れなかつた。妻は數年前に世を去つてゐた。妻は阿佐子と云つて、後妻だつたが、文晁に嫁いで文二を始めおほぜいの子を生んだ。阿佐子は賢婦人で、豪放磊落な文晁を助けてよく内助の功績をあげた。畫料を受け取るのは勿論彼女の役だつた。文晁が揮毫をする側に附いてゐて「それは少し丁寧に」とか「これは極くざつと」とかいふ具合に指圖をするのも彼女だつた。そんな風だつたから彼女の在世中は家政も豐かだつたが、歿して後は亂れてしまつた。文二は不肖の子だつた。渡邊崋山は彼を評して「文二不肖探信の如し」と言つた。探信は探幽の男である。其の上、母が歿して監督者を失つた後は娘達までが放恣に陷つて兎角失行があつたりした。家道は次第に衰へて來た。其の中で文晁は老病の床についてゐた。

翌天保十一年十二月十四日、文晁の病勢は俄かに重つて、

　　ながき世を化けおほせたる古狸尾さきな見せそ山の端の月

といふ辭世を殘して永眠した。淺草五台山源空寺に葬られ、

諡名を本立院生譽一如法眼文阿彌居士とおくられた。

文二の代になつてからは家道が全く衰ろへてしまつた。源空寺の墓地に文晁の墓は建つたけれども、さゝやかなたゞの墓で、龜田鵬齋の碑文を載せた養子の文一の立派な墓とは比ぶべくもなかつた。

アメリカにゐながら神道的氣分になつて

佐々木指月

○

道ばたに立ちどまつて太陽を拜む。

少し芝居がゝつてゐる。おい、氣はたしかかえと、自分で自分にきいて見る。

さア、少し感激した氣分ではあるが、悪い氣持ではないね。

考へて見ると、昔の日本人は、始終この感激した氣持で暮してゐたものらしい。

日本人ばかりでなく昔の人間の持つてゐた心持で、今の人間の持つてゐないものは、この、拜むといふ心持だ。今の世の中には人間が、拜むに足るやうなものは一つもなく、また、物を拜むやうな、可愛らしい心を持つてゐる人間は、一人もなくなつた。

左様、西洋人は自分の戀を叶へて貰はんために、女を拜むやうではあるが、さア、眞心から拜むでゐるかどうか、そこは分つたものではない。

日本人に至つては、女をすら拜まない。鰯の頭を拜んだと云ふやうな、さうした人間が今時生きてゐやうものなら、それはたしかに、東京ならば、巣鴨か松澤あたりへでも、送られなければならない代物だ。

ところが、私は道ばたに立ちどまつて、太陽を拝む気になつた。たしかゝねと、自分で自分が思ふのも無理はない。

私の足には重いラバーブーツが、ぶらさがつてゐる、大きい奴が、ぶかぶかして、歩く度にぬげさうになる。しかし何だな、履物は大きいのに限るやうだな。大きい履物を穿いて、一と足おろす度毎に揺すりをつけて、前へすぱりと踏み出すと、何んだか自分が大人物にでもなつたやうな気がする。小型な靴を穿いて、小指へ出来した豆の痛さにふるへながら、ちよこまか歩いてゐる感じは、あれはどうしても小人だ。孔子の云つた、小人長しへに戚々たり、と云ふのはあれだなア。

ところでその、大きなラバーブーツを、かはるがはる、すばりすぱりと踏み卸しながら、それは朝の九時頃だつた、いつものやうに自分の家をはなれた私は、丁度そろそろとけはじめた雪の往来を一二丁やつて来た。例になく、今年は雪が少ないのではあるが、それでもこの二三日は降りつゞいて、深いところでは、四五寸も積つてゐる。サイドヲークの上は凍てついて、つるつるになつてゐる。馴れてゐるとは云ふものゝ、その上を大股に歩くのには、一寸した膽力がゐるわけだ。

こゝはワシントン、スコエヤといふところで、横に四丁、竪に二丁の公園があつて、それを囲んで赤い煉瓦の古風な家が並んでゐる。以前はこゝに、美術家や文士などが多く住んでゐたものであつたが、その後、ニューヨルクが禁酒の都會になつてから、酒の密賣をする曖昧屋がこの界隈にのみ集まつて来たために、美人連も追々住むやうになり、續いて家賃があがつて来たので、貧乏な美術家たちはとても居たまらず、逃げ出して、今ではこゝの空氣ももとは變つて來た。變らないのは、角園のなかにある樹木である。

左樣さなア、私は何度こゝの樹の葉の落ちるのを眺め、また芽ぐむのを見たことだらう。前に四年、今度は二年合せて六年の春秋を、この角園の樹を眺めながら送つて来たが、生れ落ちてから、既に不惑の年齢に達するこの長い間に、六年の歳月を一つところで送つたと云ふことは、私にとつては空前な記録である。

だからこの角園の樹は、今迄に見た樹のなかで、一番親しみが深いわけだ。いづれも優れた形をしてゐて、秋は遅くまで葉を落し、春は早くから芽をつのぐむ。殊にこの都會では青い樹の葉は滅多に見られないのだから、家の出這入に樹の姿を見ると云ふことは、私にとつてはどのくらゐ楽しいことだか知れない。この都會も毎年陽氣が後れて来て、日本では櫻の咲く三月も、こゝでは寒いさなかだから、まだ樹の芽ぐむわけはないが、雪のすつかり晴れ上つた朝、その枝の曲線の影を濃くしてつかねたのか

ら垂れさがつた氷柱は、まるで支那から渡つた珊瑚樹に水晶の葉をつけたやうである。太陽を眺めると、眩しいなかから温かい愛情がながれて、地はいまだ冬ながら、今朝からは春の懐に抱かれてゐるのだと云ふことが知れる。昔の日本人は太陽は女神であると感じた。私も同じくさう感ずる。あすこから、地も人も人の心も産れて來た。天照大神と云ふ女神の御名を、誦へ得る日本人は世にも尊い宗教をもつてゐる民族である。私の足は今異國の土を踏んでゐるけれども、太陽の照らすを見れば、そこに故郷の日本がある。私は道ばたに立ちどまつて、それに默禱をさゝげる氣になつた。

往來の人は驚いたらうと思ふ。いや、丁度人も通らなかつたので、私が立ちどまつて、へんてこなことをしてゐたのには、誰も氣がつかなかつたらうが、若し氣がついたとしたら、あの日本人は錢でも拾はうとしてゐるのではないかと思つたに違ひない。しかしこちらの心になれば、そんなさもしいことではない。萬物の産みの母、太陽を拝んでゐるのだ。かう、目をつぶつて、胸の上に片手を當てゝこゞみ加減に立ちどまつて、心を一つにあつめてゐると、額の上に射す日がぱつと赤らんで、私はその温もりのなかに柔かく包まれてしまふ。

そこには天も地もあらばこそ、たゞ一面に温かさがたゞよつてゐるばかり。さうしてそれが血汐となつて、私の體がそこにうまれる。

ものを内觀すると云ふ言葉があるが、たしかにこれが内觀に違ひない。私はいゝことを覺えた。かうすれば何も七面倒な哲學を考へるには及ばない。また顯微鏡をのぞき込んで、原子や電子をさがすにも及ばない。まことにはや、手ッとり早く、私の父親がやつてゐたやうに、しばらく太陽に向つて默禱すればそれでいゝのだ。

目をひらくと、天は高く、地は低く、今迄は自身に傳はる血汐の源泉として感ぜられた、宇宙に一つの心臓が、碧空の彼方に圓く輝いてゐる太陽となつて見える。

若しこれが、往來の眞ん中でなかつたら、私は父親のやつた通りに手を拍つたに違ひない。朝は太陽の昇るのを見て拍手をうつ。宵は月の出るのを待つて、あれは月讀の神の所知する夜之食國と父は教へた。目に見える限りのものには、皆それぞれの神がゐた。八百萬の神々の國日本は、その頃はまだ子供だつた私には、どんなに尊く、どんなに厳かな國だつたらう。

然し、あゝした感じと云ふものは、世界のどこの人間でも、持ち得ると云ふものではないかも知れない。たとへて見れば、こゝに一人のアメリカの子供がゐて、私に向つて、なぜおまへ

は月の出を拜むかと尋ねたとすれば、私はどうして、その月を拜む心持をこれに傳へたものだらう。

凡て、物の道理は說き易いが、その心持を味はせると云ふことは容易ではない。ましてそれをその人に信ぜさせるといふことは、實は人間に屬した技巧ではないのである。なる程、月を拜むのは、その圓い形を尊むので、佛道ではこれを人間の本覺にたとへてゐるくらゐだ。だが、それは理智の上から見た話で心持の上からでは、十五夜の月を祭る東洋人の感じは、とても西洋人には分りさうもないのである。先づそこらにごろついてゐる西洋人たちには、月を見ると女でも戀しくなるぐらゐなところが上々だ。うつかり月を眺めてぼんやりでもしてゐやうものなら、どうした、戀ひ病ひか、なぞと冷かされる。とてもこれに向つて海の花を供へたり、お團子を上げたりして、合掌するあの心を合點させるわけには行かない。

夜も深々と更け渡つて、蚯蚓の聲のきこえるなかに、まんまると草の穗を昇る月を見るときは、夜の世界の神秘をそこに感じないものはない。人は知らず私自身は月を見れば自ら心が靜まる。さうしていくら眺めても眺めてもはてしなく、私の心はその圓い姿のなかに吸ひ込まれる。

尤もこのニューヨルクで見る月は、日本で見る月のやうな趣さは缺けてゐる。それは、この都會の月の出はあまり形が大きすぎる。氣ぜはしい街の口をバスに乘つて家に急いで來る時なぞに、どうかすると建物の屋根の上の貯水槽の傍から、出てくる大きな月を見付けることがあるが、狹い街の幅一ぱいにふさがりさうな大きさなので、ほんとに吃驚させられる。

この都會の人たちは、恐らくは日の出なぞは見たことはあるまいと思ふ。朝は寢床で近所の工場の汽笛がいやな音をたてゝ鳴るのを呪ひ、晩は暗い裏通りをこそ〳〵とガールの腕でも抱へこんで、ジャズでも踏みに行くのが關の山だ。月を見て宗教心を起すやうなさうした一刻は、ガーゼのなかへおぎやアと產れ落ちてから、最後の枕に石炭酸をふりかけられる時まで、夢にも味ふやうなことは先づあるまい。

○

さて、私は太陽に默禱をさゝげ終つて、また、すばりすばりと歩き出した。何とも云へないいゝ氣持だ。賢なるかな回や、か！　一簞の食、一瓢の飮、陋巷に在り。人はその憂ひに堪へず、回やその樂を改めず。

ぼか〳〵暖かくなつてくると、コートの垢が目立つてとてもやり切れない。顏回は支那人だつたから穢ないことは平氣で通

したか知らないが、私は日本人だから、奴の向ふは張りにくい。

だが、綺麗好きも日本人ぐらゐになると、あれで立派に生活が出來るから妙だ。日本にゐる人に聞かしたら落膽するに違ひないと思ふが、實は、在米二十萬の同胞のうち、その半分以上は、おさんどんをしてゐるものと考へられてゐる。このニューヨルクには三千人の日本人がゐるさうだが、毎日の新聞の求職欄のジェー部に出て來る活字を見ると、ジヤツプと云ふ見出しが、いや、あるのないのつて、時には二欄にも亘つてゐることもあるが、それが皆、日本人おさん諸君の廣告であるに至つては、全く考へさせられてしまふ。尤も私もその昔は、スクールボーイと云ふ名のもとに、隨分ミセス連の臺所も手傳つて、ある時はハンケチで皿を洗つて叱られたり、またある時は猫の子をアイスボツクスのなかへ締め込んで叱られたり、辛苦艱難をしたものだが、いくらデモクラシーのアメリカでも、おさんどんだけは紳士あつかいをしないのみならず、あるものは日本といふ國は、このアメリカへ、おさんどんを供給する國だぐらゐに考へてゐるらしい。

このワシントンスコエヤ界隈にしたところで、前に、美術家連の住んでゐた頃はさうでもなかつたが、近頃、金持が住むやうになつてからといふものは、私なぞが、まご／＼この邊を歩いてゐやうものなら、おさんどんだと思はれる。さうだ、この家賃の高いところに、日本人なぞの住んでゐやうはずはないのだから、いづれどこぞで奉公でもしてゐるものと見られるのは無理はないが、間違ひられて、國の名譽を感ずるわけでは決してない。

いや、これはつまらない事を考へ出した。折角のいゝ氣持がどこかへ飛んで行つてしまつた。西洋にゐる日本人といへば、皆御洋行遊ばしてゐるものとのみ思つてゐる日本の人が聞いたならば、あまり聞きよくはないだらう。だが、おさんどんをアメリカへ供給しなければならないやうな、日本は貧弱な國なのだから、事實致し方がないではないか。

あゝ、忘れろ忘れろ、凡ていやな心持は吹き棄てゝしまうのが一番だ。吹き棄つる氣吹の狹霧と神代の人も云つたやうに、日本人は古代から、嫌なことは吹き飛ばしてしまつて、腹に殘さないのが、彼等の宗教心にかなつてゐたらしい。私がまだ子供の頃、病ふと、父親は禁厭をしてくれた。冷たい水を額につけて、何んとか云ふ呪文をとなへたつけなア。いく魂、たる魂、まかるかへしの魂、ちかへしの魂。おろちの鰭、はちの鰭、くさぐさもの、鰭、ふるべゆらゆらと、ふるべとふるべと云ひ終つて、ふうツと息を吹きかける。さアもう直つたと云はれる

と、少しぐらゐな病氣は直つたことになつてしまつたものだつた。

母親も禁厭をした。ちちんぷいぷい、ごよのおんたからとか何んとかいひながら、私のあたまに唾をつけてくれた。その度に私は吹いてくれろと云ふと、母親は吹いた。だが、吹き方が父親よりまづいので、私の病氣は直るどころか、もつと痛くなつた。同じ吹くにも吹き方があつた。はじめはそろそろ吹いて、だんだん強く吹いて、吹きの終りに舌が齒の裏へ當つて、ぷつと息が吹き切れる。何か、かう、くしやくしや思つてゐたことが、そこで、ぷつつり切れ離れて、心が暫時、からツぽになつたやうな氣がする。あしたの深霧、夕べの深霧を朝風夕風の吹き拂ふことの如く、しな戸の風の天の八重雲を吹きはなつことの如くとは、うまいことを云つたものである。かくして、神代からの日本人は自分の心身の苦惱を忘れやうとしたものである。

私は今でもそれをやる。何か心の悩むことがあると、胸に一ぱい息を吸ひ込んで、それをすつかり吹き出して、吹き切つてしまう。さうすると胸も腦もせいせいする。私は、ふうツと息を吹いた。一度で足りないからもう一度ふうツと吹いた。長い年月を外國にゐて、その間に、日本人として受けて來た侮辱をこれで忘れやうと云ふのだ。空には太陽が輝いてゐる。地、世界となつてゐる。樹は溶ける氷柱に濡れてきらきら光つてゐる。淡青い大理石の凱旋門に、眞ツ赤な煉瓦の家並、私はジヤドソンホテルと云ふホテルの前を通り過ぎて、羅馬教の會堂の前を通つて、街角のオアシスと云ふ、ソフトドリンクを賣る家の前へ來た。

ミスタア、靴を磨かしてくれないかと、ちつぽけな子供が云ふ。靴を磨く！雪のとけてゐるなかでか。見ろ！おれはラバブーツを穿いてゐるではないかと私は答へた。子供はこれには返事にこまつた。肩から小さい箱をかけて、手に靴を磨くブラシを持つて、毛糸の赤いスエターの腐つたやうなのを上に着て、腐つたやうなキヤツプの下から、茶色の目で私の顔をだまつて見上げてゐる。雪の日や、あれも人の子樽拾ひ、か！ して見ると其角は日本最初の社會主義者だつたんだな。かく云ふ私は主義者じやないが日本人だ。まだ幾分同情と云ふ古めかしい道徳を持つてゐる。雪の日や、これはこの裏町の貧民窟から出て來た伊太公の餓鬼靴磨き。どんな句になつてゐるだらう。少し字あまりのやうだが、ものごとは、さう完璧には行かないさ。

どこで磨くんだと私はその小僧に聞いた。小僧は急にうれしさうな顔になつて、濡れてゐるサイドウオークの上へ、その箱を

おろすではないか。左様、いつもならば、立ちながら片足づゝその箱へ踏みかけて磨かせるのだが、今日は、靴の上にラバブーツはかゝつてゐるし、往來の眞ん中ではどうすることも出來はしない。

ついて來い、厄介な小兒だと云ひながら、私はそこのオアシスの戸を押して、なかへ這入つた。小倅はあとからついて來た。

カウンタアへ身をもたせて、スウイートキアツプを買ひながら、穿いてゐる靴を磨かせる。一擧兩得、アメリカは時間の高價な國だから、物事を一つゞつ片づけて行くわけには行かない。二つも三つも一度に片づける。朝は便所のなかで手紙を讀んで、珈琲をわかしながら原稿を書いて、歩きながら哲學を考へて、電車に乘りながら新聞を見ながら隣の女の腋臭のにほひを研究する。私もなかなかいそがしい。

スウイートキアツプと云ふのは、卷煙草の名なることは勿論だ。アメリカで一番安い卷煙草で、原料が日本から來ると云ふので、私はそれを吸ふことにきめてゐる。廿本入十五仙だ。

小倅はフロアへ坐り込んで、私の足を抱くやうにして、ラバブーツをぐいと引つ張る。ブーツは脱げた。奴さん手のひらへ靴墨をつけては、それを箱の上の私の靴へなすりつける。私は兩草を一本くはへて、オアシスのおかみさんが持つてくれたマツチの火へ顔ごと出して吸ひつけて、白い煙をほつと吐く。

また降りましたなアと、おかみさんが云ふ。さうですな降りましたなアと返事をする。日本でも雪は降りますかと、おかみさんが聞く。降りますよと私が答へる。へえさうですか私はまた日本はバナナの出來る國で雪なぞは降らないと思つてゐましたよ。と、このおかみさん日本を黑ん坊の國だと思つてゐるらしい。

小倅が足をとんと突く。これは片方磨けたといふ合圖である。私は足を踏みかへた。磨けた方の靴を見ると、その先の方だけいやにてかてか光つてゐる。綺麗にはなつたがどうもさつぱりしないな。すべて西洋での、ものを綺麗にする方法は、上からべたべた塗りつけることにきまつてゐる。家を建てればペンキを塗る、家具にはヴアニシを塗る、女のお白粉を塗ることは、これは日本と變りはないが、社會が人道の假面をかぶることは、はるかに日本人より上手である。たとへば酒は禁じてはしまひ、瓶子の水を商ふ女は片つぱしから追ひ立てる。それでこの國の人は酒も呑まず女も買はぬ聖人のお振ひかと思ふと、なかなかさうではない。ところが、神道の目には、ものを綺麗にすると云ふことは、上に塗つてあるものを剝がして生地を

川すのをもつて尊しとしてゐる。家を建てれば素木の家、素木の三方に素燒の瓦器。お神器はあらゆる神々をはじめとして、どんな貧乏人の末に至るまで、これを吞まずと云ふことなしだ。しかも傾城傾國に至つては、都の詐所に不夜城を築いて絃歌の響を斷たず、おまけに今度はその傾城が費用も勝手に廓の外へ出て歩けるといふのだから、その邊の、そば屋やカフェーでお目にかゝれることになる。有り難い日は日本にもめぐつて來た。さんげさんげ六根清淨お山は晴天の富士詣りが佛教の云ひ草を借用してゐることは勿論だが、しかし胸のいさくさをお山の威光で拂ひのけて、さつぱりした心にならうとするところに、日本民族固有の宗教心があらはれてゐる。

人の脊中の垢を取る湯屋の三助が、日本固有のものならば、人の靴へ脂を塗る靴磨きは、西洋固有のものでなければならない。小倅は磨いた靴の上へ、ラバブーツを嵌めて、そのパックルをかけてゐる。いくらだと私は聞いた。五仙だと小倅がいふ。おまへの學校は、幾からかと尋ねると、小倅はなさけなささうな顔をして、學校へ近頃は行けないんだ。おれのパップが病氣だからと、目に芥子水を寄せやがる。胸にぐつとくるやつを、腹で耐へて、さうか、おまへのパップは酒のんで寢てるんだらう、えゝ！と私はポケットから十仙をさぐつてぽんと放げた。

サンキューと、フロアに跪づいたまゝで、小倅はそれを受けとめる。私はそこの見世を出た。

ほつと深い溜息を外の冷たい風に吐く。日本にあのくらひな悴がゐて、自分のやうなものをすら、父とたのんでゐるわけだがと、思つた。

○

電話をかけなければならないことがここにある。それは今夜、カーネギーホールで、グチーフと云ふ露西亜の佛教僧が、佛教のデモンステレーションと、シューパーフエノメナ、所謂奇蹟をやるといふので、そこへ行くことに誘はれてゐるのであるが、どうにも行きたくないから、今のうちに斷つて置かうと思ふのである。莫迦々々しい奇蹟なぞを見せられてたまつたものぢやないと云ふのが腹にある。

尤も、このグチーフの、フイロソヒカル、デスカッションと云ふのは、この頃、マデソンアヴェニユウの、スチユーデオ、オーネイルで、毎晩八時から始まるので、私も一度誘はれて聞きに行つた。

なる程、佛教の坊さんといふふれ込みだけに、グチーフ先生、サックコートこそは着てゐたが、あたまはくりくり坊主だつ

た。日本で多くの坊さんの青いあたまは見たけれども、露西亞の坊さんのくりくりあたまは初つ物だから、私は尊敬して拜見した。坊さんと云ふから、幽靈のやうに消えてなくなりさうな人物かと思つてゐたが、見るに及んでまさしくそれとは反對で、昨日までは鐵道工夫でもしてゐたらうと思はれるやうな大の男だ。さうさなア、年齢は五十の上を二つ三つも出てゐやうか、英語の下手さ加減と來たら、私も英語は上手ぢやないが、グヂーフ先生のにくらべると、まだ意を強ふするに足りると思ふ程だつた。

坊さんは一人ぢやなかつた。もう一人、昨日髮を剃つたやうに、剃つたあとの目立つて青い今道心らしいのがゐた。その外に、アメリカ人の、さうさなア、學者にしては、威嚴が足らす、商人にしては間の抜けた顔をしてゐるこれも五十代の男が一人、これはグヂーフ先生の英語がつかへた時に、傍でそれを通譯する役に當つてゐたが、他に若い男と女の速記者もゐて、世話人らしいのが五六人。聽衆は、左様、私の行つた晩は、二百人あまりもゐたかなア、一弗宛の席料だ。坊さん大分儲かるなアとびつくり仰天する程だつた。

質問は御隨意と云ふので、色々奇抜な質問が飛び出す。佛教音樂と耶蘇教音樂とどれだけ違ふかなぞと云ふ質問を食つて、可愛さうに坊さん、へどもどしてゐた。その質問を出した男は、若い女と仲よささうに並んで席をしめた、髮の毛を長くした音樂家らしい若者だつた。莫迦だなアあいつ、あんな事を尋ねて何にするのだらう。何か質問しないと隣席のスイートハートに相濟まないから、それで質問するのだなアと、私は思つて見てゐた。

なかにはダヂーフ先生に幾何の質問を發する奴がある。グヂーフさんこれにははたと當惑した。坊さん幾何は御存知なかつたと見える。質問を發した奴は大得意だ。自己の存在を皆に印象させることが出來たのだ。尤もそれはコロンビヤあたりの大學生らしかつたが、前の方にづらりと席を占めた窈窕たる女學生たちは、却つて答に窮した坊さんの方に同情をよせてゐた。

一人きかない婆さんがゐて、耶蘇教の見地から頻りに難問を發する。すると聽衆はその婆さんを冷笑した。またそこに一人、爺さんがゐて、丁度グヂーフ先生が答へるのに都合のよささうな問を發しては、先生に自己の意見を述べる機會を與えてゐた。その度にデスカツションははかどつた。この爺さん八百長だなと私は思つた。

すると、私の次にゐて、さも自分は哲學的の頭惱をもつてゐますよと、皆に見せびらかさんばかりの質問を先程から發して

ゐた一人の高慢ちきな女が――實はこれが私を今夜ここへ誘つた女であるが、それが私に何か質問をしろと云ふ。莫迦だなアこいつは、さもなくてさへ會衆の中にたつた一人顏色の變つたのがまざつてゐるので、先程から坊さんが折々こわい顏をして私を睨め、てゐるところだ。さうですねエ質問ですか、だつて私は何んにも疑問はないんですものと答へてやつた。

だが私はさう思つた、若しこの坊さんをへこませるつもりなら、いゝきつかけはないではない、グヂーフ先生の說によると、空氣は陽、水は陰、火は陰陽の合體したものだと云ふ。なる程一寸聞こえてゐるが、そんならその理にあて嵌めて、生は陽、死は陰、生死の外に別に何か陰陽合體した世界でもありますかと尋ねたら、坊さん何と答へるだらう。幽靈の世界がそこに出現しなけりやならないわけだ。

私はさうは思つてゐない。陰陽はそれこそ無始の始めから無終の終りまで、いつでも合體してゐるものでなければならない。空氣も陰陽の合體、水も陰陽の合體火も陰陽の合體、陰陽合體してゐないものは、この宇宙にはないわけだ。なる程、ぴんからきりまであつて、賽の目は丁と半とに分れるが、賽はいつでも丁半の合體だ。合體でないものなぞはこの世の中にありはしない。男にも女のやうな優しさがあれば、女にも男のやうな強さがある。ぴんと出たか、きりと出たか出方が違つたばかりであると、かう考へなくちやア、グヂーフ先生の當夜のデスカションの最初に當つて唱へ出した、宇宙間のものは凡て一より發すると云ふ前提がなんだかあやしくなりはしないか。しかも佛道の眞諦から眺めればそんな一などと云ふものもありはしない。露西亞の佛教は駄目だなア、グヂーフ先生はハンブクだなアと私は思つた。

イサアに、ヲータアに、フアイア。エテリツクに、アストラルに、ヒイジカル。サーンに、ムーンに、サタンと三つに分けて、ソーヲシステムから人間を割り出さうとした、古めかしいオツカルト、サイエンスを今時分擔ぎ出して、佛教のデモンステレーションで御座いが聞いてあきれる。そにれしてもこれにはなるほど一弗の入場料を拂つてタイムをつぶす。ニユーヨルタには閑人もあつたものだと私は感心してしまつた。だが、これが露西亞の佛教で、同じ西半球の人間が說くのだから、かうして人がつめかけるのだが、これが若し、ジヤツプが佛教を傳へるとしたら、頭から莫迦にして、一人ツ子一人來はしまい。宗教を傳へるのは智慧ばかりの仕事でないと云ふことを悟らなければならない。

インターリユードの後――もう十一時頃で、聽衆は半分以上

歸つてゐた。グヂーフ先生また語をついで、私をして水素に就いて語らしめよと來たものだ。私はもうがつかりした。佛教と水素と何の關係があるか知らないが、夜の夜中までこのブラブラを聞かされては、翌日の自分の仕事にさしさはると思つたから、連れの女に、もう歸りますよと云ふと女は怒つた。それはそのはず、アメリカの禮式には女に誘はれて外出して、女を殘して先へ歸ると云ふ法はない。しかし私は別にその女に借りたお金もなかつたから、少々の無禮は御免蒙つてとうとうそこを逃げ出した。

戸を押して出ると、そこに五六人の女たちが立つてゐて、何かしきりにしやべつてゐる。なかの一人はかう云つた。ヱニハウ、彼の云ふことは分らないにしても、われ／＼はイングリッシを話し得るといふことで滿足しなければならない、と。まことに御尤千萬であると思つた。

その晩の外の空氣は全くよかつた。私はバスに乘つて歸らうと思つて、セントラルパークに面したフヰフスアヴェニユーに出て來た。少し〲霧を含んだ空に、月は昇つてゐたし、街燈は夢のやうに暗い彼方につらなつてゐるし、あんなところに人間同志あつまつて、植木鉢にも足りない程な、小さな頭を絞つたとて、宇宙の秘密を手に入れる、そんなことが出來てたまつたものではない。百の哲理を考へるより、心を自然のなかへ投げ出して、その感じを味はう方が早手廻しだ。だから感じから這入らうとする宗教には、皆それ〲の儀式があつて、それを行ふことによつて、人間は自然にあるものを感得する。

若し私に云はせれば、日本の神道なぞも、感じから這入る宗教で、これは理窟で手のつけられる宗教ではない。夙に起きて身を清めて、東に向つて拍手を打つ。さうした時に、神道の心持は感じられる。恐らく日本人ならばこれを感じないと云ふことはない。それは全く神道は、日本人のもつてゐる感じそのものに外ならないからである。それだけこれを言葉にしては、說き難く、またこれを血脈のかよはない外國人に感得させやうもないのである。

一つの宗教の儀式を味ふことの出來ない人は、その宗教には入り難い。その晩のグヂーフ先生のデスカッションにしても、あれはたしかに、日本にもその形式を傳へてゐる禪家あたりの上堂なぞと、その趣きを同じうしてゐるやうではあるが、禪家の上堂となると、問ふにしても答へるにしても、スチューデヨ、オーネイルに集まつた當夜の會衆なぞの行ひ知ることの出來ないところのものがある。

一朶雲片々、雙淵水瀉々、是れ二千年前の消息なること爽し

や。と、かうした質問が出て來る。認著せば却つて不是。と、これがそれに對する答へだ。澄月映徹して衆星燦朗たり、箇中悟處無し、世尊何をか悟道す。と、これは臘月八日曉天の上堂に當つて、僧の起した問ひである。拄杖を卓して一下して師はこれに答へた。二千年前二千年後。と、かういふ工合だ。その態度がなんだかかう大きな極印でも捺すやうに、どつかりとしてゐる。

勿論グチーフ先生とニューヨルカーとの押問答をこれに比べるのは無理ではあるが、しかし私をして水薬に就いて語らしめよなんかんと、そんなへどろいことでは、佛道の正脈を傳へてゐる日本で生れた私には、歯が浮いてやりきれない。子供が飴を手につけたのを見てゐるやうで、あつちへひつつき、こつちへひつつき、却つてこちらが氣が揉めてくる。と云つて佛教そのものを、まるごと人に分らせやうとする日には、これはまた大仕事だ。

元來が佛教と云ふ宗教は熱帶地の印度のやうなところで產れたものだから、日本のやうな火山の灰と海の砂とで出來上つた土地に適した神道のやうに、清淨專一のものではない。佛教には實は淨も不淨もありはしない。あらゆるものゝ饐え腐る印度では、清淨なぞと云ふことに執着してはゐられないところから、あゝした宗教が產れたのに違ひない。だから佛教を自分のものにすると云ふことは、日本人が神道を自分で感得するやうに、さうわけなく行くものではないので、ましてこれを愛と慾との二つに世界をちよんぎつて、愛は神、慾は惡魔と定めてゐる西洋人にわからせる。この仕事を完成しなけりやならないとしたら、私は眞つ先に御免を蒙る一人だ。

さうさうグチーフ先生は、今頃カーネギーホールでのデモンステレーションに續いて、奇蹟のほかに、暹西亞の佛教寺院のダンスをやつて見せると云つたな。日本の春日明神の巫女でもこの國へ連れて來て舞はしたら、金が儲かるかもしれない。

私は、ドラグストアのなかにある自働電話のスラットに五仙入れて、チエルシヤの二〇三二を呼び出した。

○

バスに乘つてフエフスアヴエニユーを上る。

丁度、例のラッシアワアの過ぎたあとだから、さう雜閙はしてゐないやうなものゝ、七百萬からの人口をもつてゐる大都市の贅前である。しかもこゝがこの都會の目貫きの通りであつて見れば通る人の少なからうはずはない。

雪もこゝにはもう一と掬ひも殘つてゐない。鏡のやうな往還

をバスは流れるやうに走つて、マヂソンスコエヤを右に見て上つてゆく。灯は灯を照らし、人は人を見るといふ句があるが、晝間のことであるからして、灯は照つてゐないにしても、人の方は、この句の意味をなる程なアとうなづかせる。

左様さ、人間も、かう、うぢやうぢやとかたまつてゐると、貴いものとは思へない。モンタナ州あたりの山のなかで、十里行つても二十里行つても草茫々としたところで、たまさか人の住んでゐる家を見つけると、それが自分には緣もゆかりもない家でも、うれしさに胸の踊るものであるが、さうしてそこの道ばたに、子供たちなぞの遊んでゐるのを見出すと、天地の精が自から魂といふものになつて、子供たちの眸のなかに宿つてゐる、それが如何にも有り難く、ただもう自然の不思議さに驚かされるばかりであるが、その同じ魂を持つた人間をこゝで見ると、十把ひとからげ、アラスカの海でとれる鮭の命の、どつちを活かし、どつちを殺して見たところで、全く變りはないやうなもので、澤山あれば安くなるのは、人間もポテートも道理は同じだ。それはなる程、自分自分になつて見れば、天地の間に我れより豪いものはないと、自惚れてゐるのにちがひなからうが、しかし、こちらから向ふを見れば、向ふは只の飯袋だ。いや、西洋人のことだからパン袋だ。そのかはり、こちらも向ふから、さう見られてゐるのは勿論承知の上だ。こちらは日本人のことだもの、何袋と見られてゐるかわかつたものではない。

さうと知つたらてんでんが、自惚根性をさらりと棄てゝしまへばよささうなものを、さうはいかない。若しそれが女だつたら、自分こそはこの都で第一番の美人であるといはぬばかりに、すましかへつて歩いてゐる。男だと威張つて傍若無人に歩く。どう見ても正氣の沙汰とは思へない。

ことに女はすさまじい。今ここでは女の毛皮の外套が流行であるが、往來でそれを着てゐなければ女ぢやないと思はれるくらいである。一週間にやつと十五弗か廿弗とる女工さんが二百弗もしやうといふ黑の海豹の毛皮を着て歩いてゐる。と云ふわけであつて見れば、一週間三十五弗のオヒスガールは、麝香鼠の毛皮を着なけりや歩けない。その價は三百弗から四百弗。豹の毛皮の外套は、日本の金につもつて見たら千圓の上にもならうが、そこいらのキアンデー屋のキアンデーを賣る姉さんたちが、一寸ひつかけてランチをたべに行くといふ有様だ。アラスカの海豹の黑い毛皮の外套の柔かい襟の下から、肉色の絹の靴下にくるんだ脛を長々と出して、大きな銀のバックルのついてゐる小さい靴に身をのせて、爪立つて歩いてゐるそ

の姿は、さア何んと形容したものだらうか。撫子色の口紅で、ぬりくつた唇だけが、異性のキッスをインヴアイトしてゐるやうに見えてはゐるが、顔は帽子にすつぼりとかくれて見えない。洛陽の女兒顔色を惜むと云ふのはこのことか。私をして形容させれば、柏餅の巻いた葉の、へりのところに、白い餅がはみ出してゐて、その先に鼠の糞が二つばかりついてゐて、それがちよこ／＼サイドヲークの上を歩いてゐるとでも云はうか。中のあんこは甘いか酸いか知らないが、どうせ饐えずにゐるはずはなからうて。

話にきくところによると、この娘たちは、着て歩く毛皮の代を月々拂ひ込んでゆくために、三度の食事もろく／＼せず、飴ちよこばかりしやぶつてゐるのだと云ふ話しだ。さうだらう飴ちこでもしやぶらなきア、毛皮の代の拂ひとめやうはずはない。

だが、女といふものゝ心理は男にアわからない。それ程にしてまでも毛皮の外套を背負つて歩いて、自分一人が他の女より美しいといふことを見せびらかしたいものかしら。しかもそれが猫も杓子も眞似することになつては、全くつまらない滑稽だ。

私は猫を飼つてゐるが、頸に何か巻いてやると、得意になつて外へ出て行く。南洋の土人は貝殻へありつたけを身のまはりに引つ掛けて、歩いてゐると云ふことだ。帽子なぞは五つも六つも、ありつたけ重ねて被つて、豪がつてゐるといふではないか。凡て動物といふやつは、何かから自分の體にひらひらしたものが付いてゐると、嬉しいものであると見える。文明人になつてくると、體のまはりに色々なトリンケッツをぶらさげるばかりでなく、心のまはりにも色々なトリンケッツをぶらさげる。智識と云ふやつがそれだ。あれやこれやと入りもしない智識を貯へて、それを心のまはりにかけて騒いでゐる。丁度、へぼくた詩人が詩を作る時に、自分の知つてゐるだけの形容詞を指名詞のあとさきへひつつけるやうなものだ。その一つでも削らうものなら怒ること夥しい。しかも近世の日本人は舶來の智識を心のまはりにひつかけるのをもつて修しとしてゐる。七つも八つも學んだだけひつかけて、人を驚かさうとする。丁度、誰かの書いた文章のやうなもので、やア、英語が出てくる出てくる。しかもそれが皆、片假名で書いてあるのだから讀みにくいつたらありはしない。

無駄話はさて置いて、さういふ工合に心のまはりや身のまはりに、ものを引つかけることに反對したのが、日本の宗教である。虚心になると云ふことは、何んぞと云ふと日本人の口から

出る言葉であるが、さてそれでは、どんな心の持方が虚心かと聞かれて見ると、さアわからない。私は朝起きるといきなり、頭を洗つて顔を剃る。髭は元來生えないたちだから髭を剃るとはいへないが、それでも氣持がわるいから毎朝剃刀を當るには當てゝゐる。頭は石鹸をしこたまつけて櫛の歯でがり／＼引つ掻く。口を嗽ぐ時にはわざ／＼咽を大きく鳴らす。椅子の上にゐる猫が吃驚して逃げ出すくらゐなものである。大きく咽を鳴らしながら含嗽をすると、心のまはりにかゝつてゐた暗い氣分が、一時に破れて落ちるやうな心知がする。ところがこれが西洋の都會にゐて部屋借りをしてゐては、なか／＼出來ないことである。西洋人は口を嗽ぐのにそんな音は立てないで至極靜かにやる。ところが私ばかりぢやない、大抵の日本人は家鳴り震動するやうな音を立てるから、同じ家に住んでゐるものは何事が初まつたかと仰天する。そこを私はかまはずやる。尤も私の住んでゐる家には、そんな事に驚くやうな人間は一人もゐない。私は含嗽をしてしまふと、二三度深い呼吸をやつて、肺の底からその息を、ふうーツと吹き出す。すつかりと目が覺め面つて、それはまさに神道的氣分がする。シントイステツク、フイリングと云ふ言葉を私は同じ家に住んでゐる人たちに敎えた。女が髪を洗つてもシントイステツク、フイリングだ。男が足を洗つてもシントイステツク、フイリングだ。くしやみをしたあとでも同じくシントイステツク、フイリングがすると云ふほどに、その言葉が用ひられるやうになつた。

伊邪那岐の神が、黄泉國を逃げ出して、筑紫の日向の阿波岐原で、禊ぎ祓ひをしたときに、吾が心、すがすがしと云つたとかいふことであるが、要するにそれもこのシントイスチック、フイリングを味つたものに違ひあるまい。體や心にくつついてゐるものを皆放げ出して、はじめて味ふ心持。またさうした赤裸裸な心になつての生活。そこに所謂日本の神道、即ち神ながらの道と云ふものがあるのではあるまいか。尤も、いくら裸になつて暮すのがいゝとは云へ、船頭さんや、相撲取りのやうに、いつも褌一つでゐられちやこまる。だが、着衣着帯と一分とを間違へてはどうもなるまい。ニユーヨルクのフエフスアヴエユウを練り歩く女たちが、豹の毛を着たさに、人間としての心を賣つてしまうのと、大昔、宇受賣命が胸乳を番登に押し垂れて、八百萬の神の腹の皮を撚つたのとを比べて見ると、その心の單純さに大分ちがひがあるやうである。

なぞと考へてゐるうちに、バスは四十二丁目の角でとまつた。私は降りて右へ曲つて、一の通りがマヂソンアヴエニユー、二の通りがフオースアヴエニユー、その次のレキシントン

アヴェニューを少し下ると、そこに私の舊友のやつてゐる彫刻の工場がある。私はそこへ急いだ。目貫きの通りには、もう雪はなかつたが、レキシントンアヴェニューへ來ると雪は積つたまゝでゐた。

舊友の前島交吉が、小さい體に大きなシャブルを持ちそへて、工場の前のサイドオークの雪をしきりに掻いてゐる。鑿を持つては、本場の巴里で鍛え上げた藝術家も、シャブルをふりまはす段になると、その恰好と云つたらない。私は見ながら笑つた。

何だい榮の字、何を見て笑つてゐるんだい、早く手傳はないかと前島が云ふ。二人とも子供のときに團子坂上の高村光雲先生の工場で仕事を稽古した仲間なので、彼はいまだにその頃の私の名を呼ぶ。

さうだなア、俺が手傳ふ日になると、オレゴンの山のなかで、スタンプおこしをやつた時に、持つたシャブルの使ひ方を見せることになるのだが、もつと一杯に柄を掴つて、つゝこむ時には體ごとつツこまなけりやいけねい。まア待ちねえ、俺がす、外套を脱いで來るからと、私は工場のなかへ這入つた。

その晩は兒玉さんとネワークへ行くことになつた。兒玉さんといふと、陸軍大將か、或は正金銀行の頭取か何かのやうにきこへるが、決してさう云ふ人物ぢやない。この人はニューヨルクでの親分だ。何の親分だといふことは說明出來ないか、子分を澤山持つてゐるところを見ると、親分にちがひない。

私は晝のランチをたべに、四十二丁目のサードアヴェニューに近い、ある伊太利人のコーヒーショツプで、高椅子の上へ尻の半分を引つかけて、色の黑いそこの娘がついで出すカツプを片手にもつて、ハツトドツグを喰べてゐると、――ハツトドツクと云ふのは、フランクフオートに、マスタドをこて〳〵塗つて、サワクラートと一緒に、ハツトロールにはさんであるサンドイツチのたぐひであるが、輕便なところから、ランチなぞには持つてこいのたべものである。尤もこのハツトドツグと云ふ名まへは、娘たちの間に、間投詞としてつかわれるやうにさへなつて來た。日本語にこれを譯すと、ちよいと素的ねエーといふところへ、こちらの娘は、ジー、ハツトドツグーと云ふ。あなた、ナジモヴアのサロメを見たことゝ一人がきくと、ジー、ハツトドツグあたい見たわよと、かういふ工合につかふ。直譯して見ると、ジー、はジーザスのジーで、ハツトドツグは熱い犬といふことだ。キリストよ熱い犬。何のことだかわからな

い。

で、そのハツトドツグを喰べてゐると、私の背中をたゝいた人がある。ふりかへつて見ると兒玉さんだ。五十近い、でつくりとした、愛嬌のある人で、どうしたい近頃はと云ふ。近頃かい駄目だねエ、日本の地震が私にも祟つてねエ、ひどいことになつたよ。時に兒玉さんいつか一度、例のネワークへ連れて行つて貰はうぢやないか、と私が切り出すと、あゝ、いつでもいゝよ、今夜ぢやどうだい、と兒玉さんが云ふ。なに、今夜連れて行つてくれる。そいつはハツトグツクだと、私はすつかり喜んだ。

日が暮れると、私たちは、ハドソン河の河底のチューブをくぐる地下線で、對岸の都會ネワークへ向つた。ネワークはニューヨルクからあらまし三十分ぐらゐ。品川から神奈川へ行くよりは少しばかり近からうか。向ふへ着くと、街の有様はニューヨルクよりは、ずつと田舍じみてゐて、明りもなんだか暗いやうだ。だがなかなか賑はつてゐる。どことなくかうミツドルウエストの趣があつて、シカゴの街を思ひ出させる。ニューヨルクでは禁されてゐないことが、こゝでは秘密に禁されてゐて、從つてニューヨルクのお金が穎瞭こゝへも落ちる。

兒玉さんは肥つてゐる割合に足の早いことゝいつたらない。通りすがりの婀娜者を振り向いて見るひまもなく、往來の人を縫つて私は兒玉さんのあとに續いた。

電車はあるが、乘るほどのこともあるまいといふので、街から街へと金釘なりに幾つ曲つたか知れなかつた。土地に不案内な私はまるで八幡知らずのなかを回るやうな氣持で歩いたが、とうとう漢字を紙に書いて矢鱈にそこらへはりつけてある支那町へ出て來た。文字といふものは妙なものだ。漢字を見ると私の心はくつろいだ。なんだか故郷の町へでも辿りついたやうな氣がした。

食べるものを先にしやうぢやないかと兒玉さんがいふ。それもよからうと私は答へた。私たちの上つたのは一軒のチヤプスイ屋で、こゝの支那料理はその鹽梅を西洋人の口に合せてゐないところに特長があるのだといふ。なる程來てゐるお客を見ると、西洋人は一人もゐない。いやゐないぢやないが、恐縮して隅の方で、幽靈がお化粧して出て來たやうな青い女と二人でこつそり食べてゐる。そこへ來るとこちらは日本人であれば、支那人とは人種上の兄弟だ。兄の家へでも來たつもりで、西洋人そこのけとばかりにまん中の大テーブルに兒玉さんと私とは差し向ひに陣取つた。たべるものは兒玉さんの注文で、私の今迄見たこともない料理が並べられた。長い大きな箸をとつて食べ

て見るとなる程これは、東洋の風味がするので莫迦に私はうれしくなつた。

食事がなかば終つた頃、一人の大きな黑ん坊の女が私の隣りへ來てかけた。髮の毛は鐵縮のやうにもぢやもぢやになつて、唇は夜具の袖のやうで、お鍋の尻のやうなまつ黑な顏のなかに、目だけがぎよろりと光つてゐる。だが私は自若として驚かない。支那人が日本人の兄弟なら、黑ん坊は從兄弟ぐらゐに當るわけだ。さう嫌つたものでもないとかう考へて、時々その顏を眺めたり、また兒玉さんと話をしながら食べてゐると、どこをどうしたはづみだか、その黑ん坊の大女が、まつ白な齒をむき出して、にたにたと笑つた。と思ふと、不意に私の口の上へキッスした。驚いたね。その夜具の袖やうな唇がふはりつと私の顏一ぱいに當つたのだからたまらない。ネワーク中の灯が一時に消えでもしたやうに感じた。後できくと私は目をまはしてゐたさうである。兒玉さんも冷かさないことはない。

日夜開皮と記してある東京廠と云ふ家へ私たちは這入つて行つた。物騷な顏をしてゐる支那人が二三人、なかには長い烟管をくはへた老人も立ちまさつて、入口のところにゐたが、兒玉さんの顏を見ると、日本なんとかが來たと高聲に云つてゐた。私は支那語は知らないが、話してゐることを聞いてゐると、何だか意味が通じて來るやうな氣がする。

廠内は黑山のやうに人がゐて、大きな勝負でもはじまつてゐるやうな樣子だつた。烟草の烟と人の山を掻きわけて、私たちは大きな卓子の据えてある中央へ出て行つた。周圍はすつかり支那人だが、日本人もゐるらしかつた。卓子の上には白い瀬戸物の扣鈕をざくざくと積み上げて、それを眞鍮の蓋のやうなもので、がちやりとふせて、ふせた回りの扣鈕は皆、棒の先で掻き取つて、それから蓋を明けてから、そこに殘つた扣鈕を棒で四つづゝ數へ取つて、殘りの數で勝負がきまる。だからこれを四以交といつてゐる。目は一から四まで、つまり四つあつて、當れば張つた金が四倍になつて歸つてくる。外れゝばそれまでだ。支那人なぞは長年の間勞働して貯へた五千弗六千弗といふ金を、こゝへ持つて來て一度に一點へ張る。當つても外れてもそれで一生の運命がきまらうといふものだ。虛無恬淡を宗とした老子の子孫は、やつぱり違つたところがある。

その晩は、そんな大きな勝負はなかつたけれども、卓子の上にはそれを圍んでゐる人々の張つた金が、廿弗、十弗、五弗のお札をまとめて、どうかぞへても四五百弗はあつたらうか、卓子の向ふに當つて一段高く腰を据えてゐる支那人が、うんともすんとも何とも云はずに扣鈕の上にふせてあつた眞鍮の蓋をと

つた。あたりは水を打つてゐた。いやそれよりか、皆寢てでもゐるやうだ。力のぬけた、氣合のぬけたやうな顔をした人々が、ぼんやりそこに立つてゐる。何百弗といふ金のやりとりが、これから始らうとしてゐるやうには思へない。長い細い棒は扣鈕を四つづゝ、まとめては除いて行く。それは丁度あの易者が天地人の三つに象つたその筮竹から、春夏秋冬と四つづゝ揲けては除いて行くやうな有様である。

皆まだ數へきらないうちに、私はこれは二つ殘るなと感づいたので、兒玉さん、これは二つですね、といつた。云つてゐるうちに、案にたがはず二つの扣鈕は光つてでもゐるやうにそこへ殘つた。私は一文も張つてはゐないが、胸がどき／＼した程であつた。惜いことをしたねえ、金のせめて三千弗も持つてゐて、これがかう受からうものなら、村松梢風でも米國へ呼んで、腰のぬける程、ブロードウエイの女でも抱かせるものを。と思つてゐるとそこに張つてあつたお札は、長い棒でかき寄せられて、なかに當つたものが一人二人あつたやうだが、拂ひ渡された幾らかの金を懷中して、丁度亡者が地獄の道を辿りでもするやうに、すうつと消えて行つてしまつた。

いやに澁つた暗い氣持の空氣がそこに漂つてゐる。人間の精神の力がすべて呑まれて、たゞ自然の力ばかりが、立ち集まつてゐる人を、その淀んだ水のやうな沈默のうちに、ぐつたりと溺らしてゐる。これは支那の空氣だなあと私は思つた。いやこれは、何んでも神明に幽贊して吉凶禍福を決さうとした昔の支那人の、その幽贊の有様が今に傳はつてゐるのだなと私は考へた。

二度目の勝負ははじまつた。三百と六十、——これはあとで兒玉さんから聞いて知つた。——一年の日數に當るだけの扣鈕は、さくさくと積まれて、そのうちの幾つかゞまた眞鍮の蓋で蔽はれた。私は、また二つですねえと兒玉さんに云つた。人々はまた張つた。なかに一人の支那人は四つの一點へ卄弗の札を三枚張つた。棒を持つてゐる支那人の腕は、生き殺しの蛇がのたうつやうに、のろ／＼と動いて、扣鈕は四つづゝ除かれた。そらね！と私は兒玉さんに云つた。やつぱり二つだつた。今度は張り當てたものもなく、たゞ二十五仙の銀貨を張つた子供が一人、一枚のお札を貰つた。六十弗とられた支那人は顔色も變へなかつた。私はその時さう思つた。たとへば六千弗一時に張つた支那人が負けたとしても、恐らくは、この男のやうに顔色も變へないだらう。太極は無極なりと悟つてゐる支那人は恐い度胸を持つてゐるなあと私は全く感心した。

二度目の勝負には兒玉さんがポケットを傾けて九弗なにが

し、ぽんとまた二、の一點へ押し張りした。私の胸はもう熱くなつた。今度は何が出るかさあ分らなかつた。このくらゐなことで慢心を失つてしまうやうなことでは、私の神道もまだ駄目だなあと悲觀した。出た目は一だつた。兒玉さんは何も云はずに、くるりと後ろを向いて歩き出した。

ニーヨルクへ歸る長い電車のなかで、何かそれに就いて一と言でも云ふかと思つたら、それについては兒玉さんは、とうとう何も云はなかつた。

親分なぞと云ふものは、金については大川で尻を洗つたやうに、さつぱりしてゐるものだと、私はすつかり敬服した。

支那人も慾いが日本人も慾い、慾いところがつきりその國民の特徵で、そこが即ちその民族の宗教なんだと私は思つた。

――了――

森林美の中をゆく

松川二郎

虐げられた「森林美」

風景を形づくるいろ／＼の要素の中で、兎角無視され勝なものは「森林美」である、但それは我が日本國に於てはである、もう一つ、「世界の森林國」たる我が日本國に於てゞある。大に認めらるべきものが無視されることは、即ち間接に虐げられることに外ならない。我が「森林」くらゐ不幸なやつはない。

いつか一度、我が有らゆる風景の中から、悉皆森林を拔き去つてしまつて『さあ何うだ』とでもやつて見せなければ、ほんとうに森林美の難有味が諒解されることは、無さゝうである。

この事に就てはすでに山岳旅行家の小島烏水氏が「日本山水論」（大正五年出版）に於て痛嘆の聲を放つてゐる。曰く、「日本は海國なるが故に浦島太郎の如き傳說を有し、今日はすでに露伴翁の「新浦島」、鷗外、逍遙二氏（「新曲浦島」の如き傑作を系

統的に有するに至つた。然るに又「山岳國」なる日本が、森林に就ては支那小說「搜神記」の翻案ものらしき三保松原の羽衣傳說以外に、何物をも有せざるは甚だ遺憾である。曰二、日本人は古來木に倚り生活をした、王笏が一位（水松）によりて造られたるを始め、衣、住、交通、等、殆んど其の資を森林に求めて來た、「千早ふる香椎の宮のあや杉は神のみそぎに立てるなりけり」の古歌のごとき、單純なる木材以上の觀念を以て敬仰し、『三十三間堂棟木之由來』は大木を以て神通力あるものとし、有情の眷屬となして面白く脚色したものである、此外田舍を旅行すれば「神木」と稱せられて、注連を張られ、村醪を獻ぜられあるは往々に見る處であつて、こゝには已に一種の宗教があつた。曰三——、

色彩の潤澤、色彩の變化、皆かしこに兼ね備はる、蟲に鳥に自然の樂音は、皆この幽邃にして底を見はさず奥を示さざる森嚴の境地に、悠々自適するにあらずや、水はその源にて酌めば最清しといふにあらずや、水が呱々として生るゝはかしこの庇の下よりならずや、左手に「宗教」あり、右手に「美」あり、隻手の音聲もし聽く可らずんば、趣味の源泉、この二手の一時に一拍するを見て漲らむ。まことに宗教心と審美心と相距ること僅に一歩のみ、その宗教心はいかなれば神話を孕まざりける、その審美心は何故に詩歌となりて煥發させりしぞ

これが其結論であつて、要するに、森林國たる我國に森林美を歌ふた詩歌のないのは、不都合だと云ふにあるらしい。全く不都合な話で「古今集」一千一百餘首中、ほんとうに森林美の歌として許さるべきものは、僅に四五首である、其も一首を除いて、他は悉くモミヂの歌だ。「萬葉」となると流石に、森林に「親しみ」を有つた歌が多少は出てくる、題材たる樹種も可なり廣く亘つてゐるのがうれしい。が、それとても數にしたら漸く二十首ぐらゐのもので、三十首は六ヶ敷い、全體の四千四百九十六首に對して餘りに貧弱な數字だ、何も數の多いことを喜ぶ譯ではないが……。古今集以後のものなどは、わざ〳〵讀んで見る迄もない樣な氣がする。「森林國」たる日本國に於て、古來我が歌人の題材となり得た樹種は、たゞマツとサクラとモミジの三種にすぎなかつたのである。

然し乍ら、歌人ばかりを酷く責むる譯にはゆかない。森林美を無視することは、我國文人には全く傳統的の習性であるらしく、小島烏水氏のごときも、森林美の無視されて來たことを痛嘆するのみで、特に自ら進んで森林美を說かれたのを、私は見たことがない。今日は山岳旅行全盛ともいふべき時代でありな

から、山岳美の大半を占めてゐるであらう筈の森林美は、一齣に高調せられない。僅かにカラマツ、シラカンバ、ハイマツ、などの美が、斷片的に叙述せられ、嘆賞せらるゝの外は……。そして我國には、いつ迄たつても林學者の著した一冊の「森林美學」があるのみである。

西行、芭蕉、南谿など古い時代のツーリストに就ては論ずる必要はない。明治時代に入つて、逸早くカメラを提げて、「千山萬水」を踏破し、我が紀行界に新時代を劃した大橋乙羽生も、森林美を無視することに於ては、立派に遺傳を受けてゐたらしく思はれる、氏の著書全部を讀んだ譯ではないから、斷言はできないけれど、彼の杉、檜の美しい林相をもつて蔽はれてゐる羽後と陸奥の國境「矢立峠」をば、一言の挨拶なしに通過してゐるところから考へて、他は推して知るべきのみである。紀行家としての田山花袋氏に、私の敬服するところは、その趣味の廣い點であつて、氏は森林に對してもつねに相當の注意を拂ふことを怠つてゐない、簡單ではあるが奥・羽國境の美林も説き、天城を越えれば又そこの林相の美しさも説いてゐる。然し、惜むらくは花袋氏は餘り多く山に登らない、從つて充分我が森林美を説くべき機會が與へられてゐない。

桂月氏の紀行は、本誌四月號に出た「奥吉野の山水」を久しぶりで面白く讀んだが、多少の不平無き能はずである「瀧」に對して人並はづれた強きインテレストを有つてゐる此ツーリストは、相變らず、彼の大臺ケ原山の雨中の險阻を上下して、熱心に觀賞してゐるに拘らず、森林美に對しては實に冷々淡々、「彌山の最高處に至る。……四面唐檜の林にて、眺望なし」「凡そ二十分にして佛經岳の頂にたつ、うれしや頂尖れり、……こゝに始めて四方の眺望を得たり」森林はむしろ眺望を妨ぐる邪魔もの扱ひ、恰も嚙んで吐出すが如しである。

大峰連峰より大臺ケ原山に至る所謂「大和アルプス」――此の秩父古生層より成る一大褶曲山脈は、その地相頗ぶる險峻にして、さながら鬼手怪腕の巨人が恣にその神鑿を揮ひたるが如き荒ぼり彫刻は、到處に大岩壁と大深谷、及び無數の瀑布と奔湍を展開し、而も此の怪地相を蔽ふに、恐らく地球創成以來未だ曾て斧鉞の入らざるべき重厚な原生深林を以てしてゐる、この山群の興味は即ちこゝにあるので、俳人碧梧桐氏の左の叙述こそ、大峰山脈踏破者の誰もが懷く、第一印象で無ければならない。

（八經岳頂上の大觀）――峰頭は釋迦・彌勒・行者還を除いて、何れも鈍平な圓味をもつてゐる。その他名も知らぬ小圓丘は各峰々の間に介在する。それすら何れ楕圓な卵形をなさ

ぬはない。白井植物博士さへ、この一帯の山地が悉く針葉闊葉の雑樹で覆はれてをるのに一驚を喫してをるが、其尖れると否らざるとに拘らず、殆ど一様に蒼青緑紫をとき交ぜた強い青さで塗りこくられてをる。千古不磨の水深?)成岩で築き上げられた褶曲の各皺襞には、天柱地軸を欺く大岩塊が到處に其巨臂を突張つてをるであらうとも想像して來た目には、その卵形の峰々が、さも脚下に屈從する如き和らぎを示すコントラストに聊か戸惑ひせざるを得ない。」

碧梧桐氏の「八經岳」とは「佛經ケ岳」のことであるらしい

磊塊たるべき山肌、尖兀たるべき山頂、其等を蔽ふて滑らかた卵形と變じ、恰も「布團着て寢たる姿」の優しさを以て、登踏者を意外な感に打たれしむるものは、即ち此の山群を埋むる深林なのである。樹種の豊富なることに於て、日光と併び稱せらるゝその森林である。秩父古生層の突屹たる巉岩地帶でありながら、海拔六千尺を出入するその山巓までも、鬱蒼たる緑樹を以て蔽はれてゐる所以は、この山中が世にも稀な多濕帶であるからである。殊にブナ、タウヒ、コメツガ、カウヤマキ等針濶葉樹の原生林を以て蔽はれてゐる四五千尺の地帶は、南方紀州沖から殆ど定期的に襲來する「沖上げ」なる暖風は、常に濃厚な雲霧を載せ來たつて山腹を鬱閉するが故に、喬木の成育旺盛である。この大峰(おほみね)群峰に於ける一箇年の降水量は、無慮四五○○粍と計算されてゐることに依ても、全山いかに水濕の豊富なるかを察すべく、桂月氏の熱愛する無數の瀑布も、要するにこの豊富な水濕と、大森林との生む所に外ならないのである。この山中に瀧の多いことは實に驚くばかりで、三百尺以上のもののみでも十四五を算へてゐる。八百十尺の中の瀧は無論その白眉であるが、十津川方面の七色村無絡山の谷には、一千尺のがある相だ(幅は三十尺)、多分高さに於ては之が日本一であらう。

◇

碧梧桐氏は最もよく「森林美」を説く、或は現代ツーリスト中の、第一人者であるかも知れない。氏の登山記には、この點に於て確に一種の生彩を帶びてゐる。乃、前掲のつゞきに曰く、

「……八經岳附近の樅林の密集に接した時、その面目の信州八ケ岳に彷彿たるを思はざるを得なかつた。固と偶然のことではあるが、八經岳と八ケ岳の名の相似たのも亦一の奇縁あつた。(中略)蓋し樅は高山喬木帶中の指爪なのだ。風致の上にも、色彩の上にも、この爪のなき十指は其强味と力とを失ふのだ。形は備つてをつても、遂に拔殼なのだ。その生きた硬葉の紫色と黒色とを加味した緑色の沈重なのに比例して、其の風雨に晒された根幹の蒼白さは、更に地上の物なら

ざる崇高の意味を示す。殊に暮色すでに眉宇を掠めて、四方漸く暗澹たるの時、その崇高と沈重に對する、鬼氣人を襲ふといふにあらず、森嚴の氣先づ我が九竅を壓縮して、毛髮頓に逆立つを覺えしむ。山中の異觀とする所以である。」

ツガには實際仙骨稜々の風格がある。ツガの美は主として其の形態にあるので、幹は矗々として地平と直角に立ち、太く堅い枝は、又幹とは直角に勢强く伸びてゐる、そして、小枝と葉とは其の先に密生して、鈍い砲彈型の比較的穩かな樹冠を形作つてゐるけれども、鐵針の如き細かい葉と其の濃い深綠の色とは、赤褐色を帶びた堅いこまい鱗片から成る樹皮と相照映して、飽迄もその形容を壯重に保つてゐる。そしてその枝からば長い綠々としたサルヲガセを垂れて、高山上の澄切つた碧空に向つてそゝり立てる姿は、實際何ともいへない崇高さである。但、それはコメツガ（Tsuga diversifolia, Max）のことであて、ツガ（Tsuga sieboldi, Carr.）のことではない。元來溫帶植物であるツガは、彼の山中では四千尺あたり迄は生育してゐるが、それ以上の高地に於てはその姿を見かけることが出來ない。碧梧桐氏の所謂栂も、無論コメツガのことであらうが、佛經岳の九合目あたりにコメツガの純林があつたか何うかは、些か疑なきを得ない。私の通過したのは四五年以前で、氏の登山は何年頃の事であつたか判然せぬ爲、斷言はできないが、大峰連嶺の八九合目あたりには、往々タウヒ及びシラベの純林を見受けたけれども、コメツガの純林は遂に見なかつたやうに私は記憶する。この點は却つて、森林には無頓着な桂月氏の記述の方が、確かであるやうだ。タウヒは葉の裏面に白色の蠟被がある爲に、遠くその樹冠を望めば、美しい藍色を帶びて見える、コメツガとは容易に區別せられる筈なのだが……

尤も、碧梧桐氏はツガとコメツガとを、常に區別してゐないやうだ。八ケ岳登山記の中にも「栂の密林が直に偃松帶に迫つて、壯烈な生存戰をやつてゐる」と云ふやうなことが書いてあつたが、ツガとハヒマツとが交植したり、或は隣接して生育してゐるやうな事は、先づ以て絶無と斷言して好いと思ふ。

私が日本海中の一孤島「飛島」の調査を思ひ立つた動機も、實は碧梧桐氏の鳥海登山記中――、

由利郡の海上に浮ぶ孤島「飛島」は、別名「わかれの島」とも云つて、鳥海山の一角が、いつの噴火の時にか割け飛んだ、といふ口碑を存する。飛島探檢をした人の説によると、殆ど全島爼板のやうな平べたいものであるけれども、其林の中に生ずる草菌の類には、不思議にも鳥海山で見る高山植物を發見するとの事である。空邈な口碑も穴勝太古の詩人的思想の

表現とのみ見ることは出來ない」といふ一節からであつた。あの飛島の林中に、もし野生の高山植物があつたら、それこそ一の奇蹟的事件で、正に「天然記念物」ものだと思つたからである。處が、實地調査の結果は、そこには何等の奇蹟も發見せられず、飛嶋に特殊の植物は、俗にイヌグスといふタブの木であつた。タブは高山植物どころか、暖帶性の喬木であつて、此タブの木は鳥海山の西麓を成せる女鹿山を覆ふて繁茂してゐる。即ち高山植物は暖帶植物の誤りだつたと云ふ、皮肉な結論に陷つたのであつた。——私は決して碧梧桐氏の紀行のあら探しをやつて居る譯ではない、御迷惑かも知れないが、實は下の如き結論を導きたい爲である、「最も熱心な森林美の讃美者でさへも、森林に對して往々無理解なことがある。況や一般世人に於てをや。森林美に對して殆んど無頓着なのも、また已むを得ない次第であるかも知れない」と。眞實に森林美を味ふ爲には、もつと皆が森林に親しまなければいけない、次に森林について知らなければいけない。そして森林美を宣傳する者なども、もつと深山出て來なければいけない。請ふ隗よりはじめん。

杉・杉林・杉並木

杉は日本の特産樹であると同時に、その分布も極めて普遍的で、南は大隅の屋久島から北は津輕海峽附近まで、宅地に、山林に、都市に、村落に、到る處その姿を見はしてゐないところはない。分布の弘いだけに、我が風景との交渉も甚だ深いが、どつちかと云へば、じみな平凡な木である。然しこの平凡な感じは、日常餘りに眼に觸れ易く、我々の感覺が麻痺してゐるが爲であつて、我國に來て始めて「杉」を見る外國人は、決して杉を平凡とは觀てゐない。杉の形態、色彩は決して平凡ではない。——私たちは今、恰も始めて「杉」を見て驚喜する外國人のやうな心持で、此の平凡な樹木の形と色とを、靜かに見つめてみたい。

杉樹の形態は、針葉樹の中でも一番典型的、標準的なものではなからうか。樅の尖鋭、公孫樹の圓滿（御承知ではあらうがイテフは針葉樹に屬してゐる）、松の奔放、是等の中間に位して最も質實、穩健、崇高の趣を呈してゐるのが杉である。而も杉は、尖銳から圓滿へ、針葉樹の兩極の代表者である樅と公孫樹との特色を、その一生の中に經過するのである。杉は、その幼年時代は樅の如く尖鋭であるが、老年に至れば假令公孫樹ほどではなくとも、餘程圓滿な樹冠を形づくつてくる。然しそれは共に杉のほんとうの形態でないことは勿論で、杉の特色は矢張

り其の中間「壯年時代」に於て發揮せられる。

鉾杉！それが實にかれの壯年時代を飾る男性的な美しい容姿である。眞直な一本の幹を主軸として拋物線狀に輪生する枝には、略ぼ長圓錐形の外圍線をつくるが、而も鉾のごとく鋭からず、幾分の圓味をもち殊に樹冠の尖端は著しく圓形をなしてゐる。その緩かな曲線を傳つて、滑らかにすべつてゆく眼の筋肉運動は、「快い安定」といふやうな感じを私達に與へる。三輪の神の歌つたといふ

　吾庵は三輪の山もと戀しくば、とぶらひ來ませ杉立てるかど

「古今集」第十九卷の中の旋頭歌、

　はつせ川古川のへにふた本ある杉、年を經て又もあひ見むふた本ある杉

等を讀んで、私たちの先づ想ひ見るものは此鉾杉のかたちである。

杉の葉の色は、深綠又は濃綠など名づけらるべき色である(時季に依て多少に濃淡はあるが)、決して黑ではない。然し少しく離れて眺めた樹冠の色は、綠の系統ではなくて、著しく黑ずんだものである。私は杉に獨得なこの色を現すのに、假に「暗綠」なる語を以てする。此の暗綠の色は、一面に於て暗欝の感を伴ふことを免れないけれども、然も全體としての感じを幽玄崇高ならしむる點に於て成功してゐるし、縱に細い條をもつた赤褐色の樹皮との調和も、落付があつて大變いゝと思ふ。あの暖か味に富んだ樹皮の色は、樹冠の寒色を補ひ和らげてゐる。

形から云ても、色からいつても、杉は飽迄眞摯、典雅であつて、その美は餘程高級的の美である。「崇高」といふ形容詞は、異國ではいさしらず、我國の樹種の中では杉以外に冠せらるべきではない。古來、神殿や佛堂が多く杉の森林を選んで造營せられ、然らざれば其の周圍に、新しく此の植林が行はれたのは當然の歸結であつた。よく引合に出される「何ごとのおはしますかは知らねどもかたじけなさに淚こぼるゝ」の歌は、どこにも杉の語は現はれて居ないけれども、私達はその神殿の周圍に老杉の密林を想像せずには居られない。よし其祭神が何人であらうとも、楢やクヌギの雜木林の中の神社は、ちと例が極端すぎるが、松の林や櫻の林の中の神殿に於ては、迚も是だけ緊張した森厳な感じを、味ふことは不可能である。少くも私には、その經驗がない。

「此神殿(伊勢内宮及外宮)は大なる森林の中にあり、材料は常にこの森林より供給せらる。……若し周圍の森林なくして、かゝる建築を想像すれば、誰か其の神聖なるを想はむや、實に

此の如き古朴の神殿が神聖化せらるゝは、全く周圍の太古の森林に基く。これ歐洲の建築と大に趣を異にす、蓋希臘の神殿又は中世紀の殿堂は、常に獨立す、周圍と何等の關聯なし、日本古代の神聖建築は、全く自然と密接の關係を有す（獨人ヤンソン氏）

これも神殿と森林の關係を論ずる場合には、定つて引かるゝ一節である。この森林（神苑）を構成する樹木は、スギ、カウヤマキ、ツガ、クス等であるが、その主木は「杉」である。（材料は常に此森林中よりと云へるは、外國人のことで一寸勘違ひをしたので、神宮造營の材は木曾御料林から伐出される）。「神のみそぎ」として立てる杉は、一歩進んでかれ自身神として尊敬せらるゝに至つた。神木として、注連を張り神酒を供して崇敬せらるゝ老木には、クス、イテフ、マツ等もあるけれども、其はむしろ例外的で、神木の九〇%までは杉であると云てよい。是等の神杉は、いづれも幹の周圍二丈三丈四丈……、樹高は二十間三十間……、齡は七百年八百年或は一千年を經たものがある。福井縣大野郡石徹白村淸水神社の「十二抱杉」は、幹の周圍根元八丈四尺、同眼通六丈二尺、樹高二十五間、樹齡大凡一千二百年と稱せられ、これぞ日本一――即て世界一の大杉である。イテフ、シヒは幹の大きさに於ては殆ど同一程度に達するが、樹高杉に及ばず、松は太さ高さに於て略ぼ杉と伯仲の間にあるも、年齡に於て到底杉の敵でなく、クスは年齡杉と伯仲し幹の太さは却て之を凌ぐものがあるけれども、高さに於て杉に及ばない。

矗々天を摩して立つその剛强な姿は、「質量の大」と「時間の悠久」と相俟つて、いよ〳〵神秘幽玄の感を深からしめ、小さな人間は、この老木の下に立つとき、往々にして一種の壓迫をさへ感ずる。壓迫感は一轉して、恐怖感となつた。「天狗杉」は即ちこの恐怖感の所産でなくて何であらう。神杉に次で多いものは、この天狗杉である。天狗の棲處は杉の老木に限るらしく、決して天狗椎・天狗樅などいふのを、私はまだ旅行中に見たことがない（松には、稀に「天狗松」といふのがある、桑名の町でそれを見た。他にも二三あるといふ話である）。老齡に達した杉は、最早壯年時代のやうに美しい姿ではない、樹冠に大きな缺潰を生じ、その均勢は損はれてくる。美觀が失はれて、質量の大と時間の悠久とから來る「壓付けらるゝやうな感じ」のみが殘つたとき、杉はしばしば天狗の棲處とるやうである。これも杉の一特色と云へる。

杉の天然林として有名なるは、秋田の長木澤、大隅の屋久島、相州の丹澤山及び黑部溪谷の猫又谷などである。屋久島の

杉に就ては、私は全然知らないけれども、他の三箇所は幸にして一見してゐる、殊に長木澤の杉は、木曾の檜、青森のヒバと併せて我國三大美林と稱せらるゝもので、杉の天然林の中で一番有名なものであつた。然し長木澤に對する私の印象は、實際は餘りいゝものではなかつた、其は一は時期が非常に惡かつたのと、一つは、丁度その時（大正六年の夏）私は青森の碇ケ關に一箇月ばかり滯在した後で、その滯在中私は幾度か、溫泉場から國境の矢立峠を越えて、秋田領の陣場驛へ出て、汽車で碇ケ關へと歸つた、恰もそれは半日の散歩には最適の行程であつたからである、――何故ならば、矢立峠から陣場に至る一里の間は、左右兩側ともに老齡の杉の單純林で、その美觀は長木澤に優るとも、決して劣らないものであつたからである。

矢立峠附近の杉林（矢立村大字陣場字下内澤國有林）は、その後、大正九、十年頃に至つて保護林に編入せられたことを、官報で知つた。以前は北秋田の山地帶の殆ど全部を蔽ふてゐたと云てもいゝ杉の天然林も、施業案實施の進捗に伴れて、今やどし／＼人工林と變じて行くに鑑みて、特に林相の立派な此一區域を選んで禁伐を命じ、學術上及び施業上の參考品として保存せらるゝに至つたものと思はれる。矢立峠は、峠とは云ふものゝ高距は僅に海拔八百五十尺で、奥州街道（國道）が坦々として通じてゐる、それでも分水嶺にはなつてゐるのらしく、こゝで水は南北へ分れ、平川は津輕平野を指して落ちゆき、一は下内川となつて秋田縣へ流れてゐる。その山中には赤湯といふ淋しい溫泉があつて道路よりは遙か深くなつた谷の底に、一軒の浴舍があつた、赤い裏をつけた布團などの乾してあるのが、太い杉の木の間から眺められるのが、ひどく懐かしい氣がした。小さな溪流に沿ふて、深林の間を七八町分けてゆくと、更に大澤溫泉といふのがあつた、高溫の鹽性硫黄泉で、きゝ目は迚も大鰐や碇ケ關などの及ぶ所でない、と云ふやうな話を、その林の中で樵夫から聽いたりなどした。

彼の山中には、私が或る名も知らぬ美しい小鳥の爲に徒てた、巣がある筈だ。セキレイほどの大きさで、或る部分に孔雀の尾のやうな美しい羽毛を有つた小鳥であつた、私はもちろん、此の愛らしいものゝ命を絶たうなどとは夢にも考へはしなかつた、唯だかれが私の行く先々の道に降りて、四五間の距離に近づくと、人を小馬鹿にした樣な態度でばツと飛立つて又先へ行つて待つてゐる、長い間そんな事を續けられた爲に、不圖『一つをどかしてやらう』といふ氣になつて、手に持つてゐた桑樹のステツキを、かれの頭上を越えて投げた。ステツキがぶーんと音を立てゝ飛んだ爲にかれは驚いて眞直に舞上つた、そして

ステツキと共に地上に墜ちたのであつた。直ぐ駈寄つて拾ひ上げて掌に置いたが、ピクピクと二三度柔かい胸毛に波打たせた後、息氣絶へてしまつた。誰も、私のこの無意義な慘忍な行爲を觀たものは無く、たゞ杉の老木のみが、森々と頭上に茂つてゐた。熱い涙が、止め度なくはふり落ちた。私はすでに冷たくなつた小さな屍を、路傍の林中に埋めて、墓標としてそのステツキを上に立てた。——細い金の環のはまつた紫檀のステツキは、間もなく何人かの爲に持去らるゝに相違なく、墓標として決して適當のものでないことはわかつてゐたのだが、私は再びそのステツキを振廻して歩く氣にはなれなかつたのである。

餘談に亘つて相濟まぬが、圖らず此山林中に於ける小さな悲劇を想起すると、知らぬ顔で峠を越えることは、出來なかつたのである。陣場から碇ケ關迄は二里半であるが、この下内澤の杉の美林は、汽車の中からも望むことができる、左右の窓を壓するやうに、聳いてゐる暗綠色は即悉くそれである。鈍い砲彈型の樹冠を、隙間もなく密集して、と云ふよりも寧ろ盛上るやうに相重り合つて、峰から谷へ、谷から峰へ、山を覆ひ谷を埋めて連なつてゐる光景は、杉の純林が有つ獨特の美觀であつて、私たちの視線は、その深綠の鮮苔を厚々積み重ねたやうな樹冠の上を、快いスピードを以て走つてゆくであらう。

汽車を降りてその林緣を、或は深林の中を、行くことは更に愉快である。然しそれは頗ぶる神祕的な愉快さで、主として、杉の林中にはつねに多量に含まるゝ濕氣と、香氣とから來る感じであらうと思ふ。「見あぐれば千丈にあまる大杉の暗きこずゑゆ雨垂り來たる」(若山牧水)とは、蓋し杉の深林の中では誰も體驗する處の實感で、萬葉の「彌彦のおのれ神さび青雲の棚引く日すら小雨そぼふる」に至ては、その表現が更に率直で力強く感ぜられる、雨垂は實際に落ちてくることもあり、落ちて來ないこともある「感じ」であるから其は問題ではない。

若山牧水氏は現代の歌人中では、最もよく森林を歌ふ人である。杉の歌がある。

なだらかに大き尾引きてこの谷のくだれるかぎり杉ならび立てり

そば路を行きて見おろす杉の木立はあなみづみづし限りなく立つ

見廻せば杉の太幹たちならび淋しきものかわれがこゝろは

うちならび晝のひかりに立つ杉の鉾杉がくりほとゝぎす啼く

ほとゝぎす身ぢかく啼くに見あぐれば鉾杉叢に日は雨と降る

尤、これは比叡山に於ての詠で、場處はまるでちがつてゐるけれども、森林情景に變りはない。「定規で引いた直線には何の趣もないが、人の手で描いた直線には、言知れぬ爽かさがある」と云つたコールの言は、一見無趣味なやうな、單純なやうな、直線の併立である杉の林の中に於て、完全に裏書されてゐる。

◇

長木澤は長木川の水源地で、その山谷一面を埋めて、九千町歩にわたる杉の單純林があつた、純林であると同時に、悉く百五六十年の樹齢に達し、幹の太さも殆ど一定した美事な一齊林であつた。この點は下内澤の國有林でも、略ぼ同じことで、譯をきかない間は、『これが天然林だとは』、一寸うなづきがたい程のものであつた。何故ならば杉は陽樹であつて、斯く二百年近い老齢の天然林の中には、若い濶葉樹の雜木を混淆してあるべきのが、普通である。林學者は私たちに斯う教へてゐるし、實際に於て、各地で觀た杉の天然林に、「純林」は殆んど無かつた。即ち杉の純林といふのは、其自然の姿ではないので、何程か人工が加はつてをる。舊秋田藩の林制は、杉の伐採を嚴禁し、その中に混ぜる雜木の伐採のみを許して居つた爲に、人民は杉と雜木の天然混交林から雜木ばかりを伐採つた、その結果今日北秋田地方には、到處に大規模の杉の純林が見らるゝに至つたのであると。

しかし私は、矢立峠附近のものに比して更に一層美しい林相を豫期して、長木澤國有林の入口に立つた私は、「驚喜」の代りに意外の「驚愕」を摑まされて、全く失望してしまつた。蓋し私の眼前に展開されたものは、褐色、黒褐色等の不愉快な色を以て蔽はれた大枯林と、甚しい空疎な亂伐の跡とであつたからである。

『天下の美林も、かうなつちや形なしです。』

案内して呉れた林業技師が、實際「血を絞るやうな」聲を放つて浩嘆した。振返つて、小坂鑛山の彼の毒々しい煤煙を望むとき、此の美林の破壊者の何者であるかは、容易に諒解することができた。「本國有林では毎年十一萬石づつの輪伐を行ふて更新してゆく計劃を立てゝゐたのですが、煙害激甚の爲に、近年は全く豫定の輪伐施業を中止し、煙害木のみを伐出してゐますが、それが年々五六十萬石の多額に上るといふ。悲しむべき狀態です』と、彼は附加へた。その後、煙害の程度は著く緩和されたやうに聞いた、が兎に角今日では、長木澤には三千町歩の純林と、千五百町歩の杉雜混交林とがあるにすぎなかつた。

長木澤はほろびても、秋田縣は依然として杉の美林國である。下内川の二千五百町歩を始め西岩瀨・早口・藤琴諸川の流

域には素晴らしいスギ・ヒバの純林があり、小阿仁川と仁鮒川（内川とも云ふ）とに狭まれた一帶の山地にも、一萬町歩に餘る杉の單純林があるといふことである。私は未だ其處には行て見ないけれども、五萬分地形圖をひろげて見ると、成る程東西三四里南北五六里に亘つて、除川もなく針葉樹の記號が配列されてをる。地形圖を前にして、ジツと見入つて居ると、宛ら北海の波の色そのものゝ樣な、藍碧色をした杉の林が、峰から谷へ谷から峰へ、波濤のごとく起伏してゐる美觀と、壯觀とが私の眼には歴々と描き出されてくる。

男鹿半島を踏破して、本山（もとやま）々上の赤神神社を訪ふた旅行者に取つては、その東側斜面一帶に聯いてゐる男鹿山國有林（矢張り杉の純林である）の美觀は、忘れ難い印象であり、又思設けぬ拾ひ物でもあつたであらう。殊に大代附近に於ける老幹鑽立の狀は、凄いばかりのものである。あれほどの密林は、長木澤でも矢立峠附近でも觀ることは出來なかつた。本山は半島の西端に位置し、而も高距は男鹿の名山「寒風山」に二倍し、滿山杉に覆はれて、眞黑く半空に聳えてゐるので近海航路船の爲に好目標となつてゐるといふことである。

◇

單に林相の美しさから云たら、天然林は人造林に及ばないやうである。人造林の、野趣に乏しいことは勿論だが、そこにはリファインされた美しさがある。それに、我々をして美しいと思はせる杉の純林は、何れも相當人工の加はつたものであることをも、考へなければならぬのである。カラマツの如きは、人造林は到底天然林の美に及ばざること遠しである、是は樹性、形態、環境などの然らしむる所　敢て私の眼だけが然う見るのでは無いらしい。

杉の人造林で有名なのは吉野で、吉野の林業といふのは九割迄が杉である。材質の優良なことも、日本一と云はれてゐる。吉野川上流地方が、吉野林業の中心地であることは勿論だが北山川の流域、十津川の流域、天の川の流域、吉野山群の中は到處として杉林ならぬ處はなく、どの街道を取る旅行者も、數日間は其の單純林の間を通過しなければならぬ。然し最も林相の美しく　模範的なのは、吉野川流域の川上村上多古、柏木附近で、各縣の林業家や學生の見學にやつて來る者は、悉く此地を訪ふのである。上市町からは六里ほどある。それは東熊野街道で　縣道だから道は好い。柏木の先きで此の街道と分れ、吉野の本流に沿ふて入之波、奥入之波を經て又六里、大臺ヶ原に達する。連日杉の林から杉の林へと移りゆく、啄木鳥のやうな旅は、いかに森林美を愛する者に取ても、多少の倦怠を免れま

い、と想像する人もあり又實際倦怠を訴へた旅行者もあつたやうだが、そんな筈はない、北秋田地方に較べると山も谷も川もぐつと規模が大きく、凡てが深山性を帯び、到處に好風景を展開してゐる。加ふるに道路は迂曲蛇行し、寧ろ一景を送つて一景を迎ふる應接に遑あらずの概がある。

それに、此沿道には、杉の幼年時代から老年時代に至る一切の林相が、標本的に配列されてゐるのも、一の特色であつた。杉の幼年時代は、殆どヒノキと異る所はない、その樹冠は鋭い尖圓錐形を成して、眞に英姿颯爽としてゐる、葉の色も亦明るい鮮緑色だ。然しその樹林の色は頗ぶる暗い、殆ど一點の光線をも地上には漏らさぬ、林内は黒白もわからぬぬは玉の闇である。蜩が啼く、はらわたに泌入るやうな、冷たい聲で蜩が啼いてゐる。

かうした極端な密林で育てられた杉は、枝下が非常に長い、樹冠は文字通り冠の如く、ずつと上部の方だけに附いゐる。人造杉林の相は、それが特色の一になつてゐる。斯くして、適當の間伐の行はれた青年林には、快い明るさがある、生々した光線が流れこんでゐる。光線の投入する所には、必ず陰影がある。杉の林は、單純な直線の併列で、その陰影も亦、本幹と如何なる角度を取るにしたところで、地上に一定の併行線を描くに止まる。直線だけを用ゐて、何うして彼んなに複雜な、多趣なおもしろい繪が描けるのか、それは全く一の不思議である。之と稍や似た畫面は、眞竹又は孟宗の竹林で見出されるけれどもその光線なり陰影なりは、兎角冷たく硬いもので、杉林に見るやうな柔かみと、暖味とに缺けてゐる。

杉林の美觀は、單純林に限られるとおもふ。松は櫻、又はコナラ、クヌギ等の濶葉樹と混交林をつくる時、單一林よりも却つて趣ある風景を成すことが多い、而もかれは常に主木たる位置を失はないが、杉はどうも左様ゆかないやうである。吉野山公園では櫻のバックとなつて、素晴らしく引立てゝゐるが、要するに櫻がシテでかれはワキ役を勤めてゐるのにすぎない。他の雜木と混交する場合には、杉の特色たる幽玄、崇高の觀は、多く失はれ勝であるし、生存上に於ても著しい脅迫を受け、終には雜木の爲に、根據地までも奪はれるに至るらしい。

◇

日光の杉並木は「世界の誇り」だと云はれてゐる、觀光の外人は東照宮の華麗な殿堂よりも、寧ろ此の並木に驚嘆するさうである。しかもそれが日本特産の杉であることに……然し日本人は、却て少しもあの並木を喜んでゐる風には見えない、それが證據には、外國人の如くわざわざ文挾驛に下車して、その並

木の中を通過して日光に行く者は、極めて稀である。「杉」の美觀を、いつも外國人から教へられてゐるやうなかたちにあることを、私は遺憾におもふ。

日光の第一印象は杉並木、第二が神橋、而して第三が陽明門である。汽車が鹿沼を出て文挾に近くなると、左窓に例幣使街道の杉並木が見えてくる、汽車は殆ど其並木道と併つて駛つてゆく、文挾驛を出てからも相變らず其黑い並木はつゞいてゐる。今市驛に近くなると、右の方に日光街道の杉並木が見え初めて、二條の並木は今市驛の入口で相會し、汽車は其並木の一つを拔けて、今市の停車場に入つてゆく。こゝらの氣分は實際何とも云へない。日光街道の方から行ても、例幣使街道の方から行ても、數里の間つゞく森厳崇高な彼の暗い杉並木を出放れて、そこに忽然として幻出する美しい山水と、絢爛たる建築美とに、餘所では迚も見られない日光の特色があるのである。初めて日光にゆく人が、先づ此並木を通らないのは嘘だ。並木は文挾驛附近が一番すぐれてゐるけれども、遠すぎるといふならば、今市から日光迄の間一里半でもよい。

日光の杉並木といふのは、鹿沼町の北端御成橋々畔から文挾今市を經て日光町に至る五里、日光街道なる大澤今市間の二里、會津街道なる大桑今市間の二里、（此方は一番貧弱である）、合せて九里の間である。四間道路を挾んで左右にならぶ杉樹は、太さ直徑四尺より六七尺、樹高は十九間乃至二十間、巨幹矗々として雲に聳えて、一樹の列を亂すものなく、一枝の下垂するものなく、宛として黑綠色の一大アーチを延べて連らねた概がある。本多林學博士の計算に由れば總樹數二萬一千五百五十七本、一本の時價千圓を越ゆるものが少くないといふことである。此世界的並木の創設者は、日光廟造營奉行たりし松平正綱であつた、正綱、降綱父子志を相繼ぎ、前後二十年の長歲月を費し、私費を投じて植栽したものである。諸侯が競つて花崗岩の華表や南蠻鐵の燈籠を奉獻した間に、正綱は獨り超然として、此並木を東照神君に獻じたのであつた。諸道に並木を栽えること位は、造營奉行として當然採るべき措置であつたとしても、我國の特産物で而も最森厳崇高な風致を有する「杉」を選んだことは、彼の卓見と云はねばならぬ。

日光名物の鼯鼠（ムササビ）は、多く此並木に棲む。夜間闃々たる樹下を往けば、颯然として空中に翺翔あり、忽ち提灯の灯は奪ひ去られるといふことである。並木の夜趣亦棄てがたい哉である。誰か私と一緒に、今時大時代な小田原提灯をぶらさげて、一夜この風流を試みんとする人はないか。

熊本市から阿蘇に至る阿蘇街道にも此の杉の並木がある。厂

隣奥社詣道の杉並木も、著名なるものゝ一である。林學者の説く行道樹資格論からすると、杉は普通の場合行道樹としては適者でない、成る程銀座へ杉を栽えたら、滑稽でもあらう。然し神社、佛閣の詣道並木としては、杉は文字通りの適材適所である。

落葉松林の美觀

杉林の美を探ねて、すでに日光の入口まで來た、此儘に引返すは惜しい、一歩を其山中に踏入れて、戰場ケ原の森林美觀を探らう。日光山中は、我國でも特に「植物の寶庫」と稱せらるゝ札附のところである。合衆國の林學者ウイルソンなる人の調査する所によれば、歐洲に在る樹木の屬は僅に三十六屬で、北米には百六十五屬、日本は二百屬とある。その二百屬の中百五屬までは日光山中で觀ることができると、是は松村任三博士の調査で、即ち日光山中だけでも、歐洲に三倍する樹木の屬がある。殊に針葉樹にかけては、日本は針葉樹分布の中心地と云はれてゐるだけに、歐洲の六屬、北米の十二屬、支那の十三屬に對して、日本は十六屬五十種の最高位を占めてゐる、而して其中十二屬までは日光山中で發見せらる、況アメリカの針葉樹と日光山中だけの針葉樹とが、丁度匹敵してをる譯で、此外草本類や蘚苔・地衣・菌・藻に至る雜草まで加へて比較する日には、とても煩さいことになる「植物の寶庫」としての、日光の難有味がわかつたら、さあそろそろ出かけよう。——方等、般若兩瀑布附近のモミヂや、大平臺のブナ、シラカンバなどに見惚れて、立留まつちやいけない、日光の森林美觀は、其處らでは、未だ未だ庶境に入つてゐないのである。

湖岸から八合目邊までの斜面を、針・濶葉の二樹帶で黑緑と淡緑の二色に塗分けられた男體山と、對岸の半月山、阿世潟峠一帶の山腹の針・濶葉樹の混交林とを、左右に眺めつつ、湖沿ひの道は一里半、龍頭の瀧から一町すれば已に身は戰場ケ原の南端に立つてをる。海拔四千六百尺、廣袤一平方里、ひろびろとした素晴らしい高原である。右に男體、左に白根、前面には太郎山、大眞名子・小眞名子の連峰を控えたる、雄偉な自然の形勢は、まことに戰場ケ原の名にふさはしく、昔男體の神使たる蛇と、赤城の神使たる百足蟲とが、こゝに鎬を削つたといふ神話的口碑をのこしてゐる。

一名赤沼ケ原とも呼ばれるのは、この一大濕原が往古の大中禪寺湖の湖底であつて、今も尚ほ中央部の大部分を占むる沮洳の地と、「赤沼」の小湖とは、明かに死滅湖の遺骸たることを示してゐる。かうした高山の濕原はつねに「お花畑」をつくるもの

で、日光石楠、ツルコケモモ、マウセンゴケ、ミヅオトギリ、ミヅギク、カセンソウ、ウメバチソウ等が叢生して、原頭一面を花で埋め、眞に百花撩亂の美觀を呈し、此の自然の大花苑をつゝむに、高山性喬木の森林を以てしてゐるのである。

先づ、原の入口には、殆んど純林に近いミヅナラの森生がある。原の東端から黒髪山麓かけて、一帶の高地には、カラマツの原生純林がある。北端、光德原に入らんとする高地にはシラカンバの純林がある。西端から湯瀧に至る一帶は、再びミヅナラの純林で、それより湯の湖畔を經て湯本澤、白根澤と奥深く進んでゆけば、コメツガを主木としてアスナロ、ダケモミ、タウヒ、カラマツ等の松柏科の混交林が眞黒く山谷を被へる間に、ミネカヘデ、トキワカヘデ、ミヤマナヽカマド、ウダイカンバ等の紅葉性の濶葉樹が、ところどころに小群落を成して、介在してをるのを視る。斯く樹名を列擧しただけでも、戰場ケ原附近の森林景觀が、いかに壯美を極めてゐるか、保つとゝもに、樹冠全體の形をば興味を帶びた廣円錐形に作り上げてゐる。かう云ふ形は、下枝の低くて長い程が、より立派に見えるものだから、個體の形態を打こわすことの多い密林は、元來カラマツには不向なのだ。言換えれば、カラマツの形態美は戰場ケ原のやうな疎林に於て、始めて發揮せられるのである。

今一つは、背景となつてゐる黒髪山である。立木觀音丈は阿世潟あたりから、湖水を隔てゝ望んだ男體山は、美しい円錐形の女性的な山であるが、これを戰場ケ原から望むと、峰頭一變して歪形の黒髪山となり、極めて男性的な、強い線で空をかぎり、綠苔滑らかな峰腹には、赤禿のナギをさへ見せてゐる。

『バックがいゝからな。このバックが無ければ、此のカラマツ林だつて、矢張り普通のカラマツ林だよ。』

私はさう云つて感歎した。實際背景として此位力強い働きをしてゐるのはすくない。此のカラマツ林の黄葉のすぐれて鮮かなのも、黒髪山中腹の黒綠色（針葉樹林）が、矢張其のバックとなつてゐるからである。然し黒髪山が、背景として斯く偉大な働きをするのは、林の前面に廣い平地がひらけてゐて、五町十町、十五町、旅客はいくらでも、欲するだけの距離を取て眺め得るからだといふことも、忘れてはならぬ事であつた。

カラマツ林の美を語らんとする者は、戰場ケ原を觀てからにして貰ひたい。

カラマツの黄葉美に就ては、已に定評がある。世の中が一時に明るく輝き渡るやうな、鮮かな黄葉を着けるものは、カラマツの外には唯イテフがあるばかりである。紅葉美よりも黄葉美に對して、多くの興味を有つてゐたらしい萬葉歌人が、イテフ

やカラマツの黄葉を眺めながら、一首の歌も作らないで、何うしてあゝも平然と済しこんで居られたかと、私は不思議に感ずる。古今集以後のことは云ふ必要はないが。

カラマツは元来非常に黄色素に富んだ植物らしい。落葉の新緑も、著しく黄色を帯びて、他の針葉樹の青葉の間に生彩を放つてゐるし、幹も少年時代には黄褐色を呈してゐる。それが壮年時代には赤褐色となり、老齢期に入ると暗褐色に変じてくるが、褐色は黄色を基調とした色ではないか。枝も矢張り若い今年のは黄褐色をしてをる。従つてカラマツは、落葉後の木肌の美しいことシラカンバと好一対で、彼れの寒色に対して此は暖色。雪中に立つカラマツ林の美しさは、冬季信越線を旅するものゝつねに浅間山麓に於て目撃する所である。四辺をつゝむ雪の白と照応して、特異の色彩を発揮する。即ち太陽の光線の直射を受けた新枝からは、赤味を帯びた金色を放ち、陰影のおほい樹冠の暗部は紫色を反射してゐる。それが衣を脱ぎすてた裸樹のことであるから筋骨隆々たる趣は白髪の剣客を偲ばせ、満目の寒天に一脈の暖気を漲らせてゐるところは、年老いた名僧の風格を備ふとでも云はふか。

◇

カラマツ属の一種で、カラマツの美性を最もよく発揮したものに、グイマツといふのがある、色丹松、樺太落葉松などとも呼ばれてゐる。私はたゞ一冬を樺太に過ごしたのみであつたから、此樹の黄色や夏の姿は知らないが、樹形はカラマツよりも一層優く豊かさと膨みとをもつて、寧ろ心臓型に近いものであつたと云ふと大層温かさうであるけれども、樹幹の色は全く黄葉をふくまぬ濃い黒紫色で、落莫たる北地の雪中に、之が純林を成して密生してゐる様は、宛ら鉄林を植ゑたやうに見えた。

エゾマツやトドマツは概ね山の中腹を占めて群生し、樺太の平地を占領してゐるのは、概ね此グイマツ林とシラカンバ林とであつた。豊原から西海岸の真岡へ馬橇で出る数日の旅中、私の眸は幾度か其のグイマツの単純林を送迎したが、大抵は同齢の美しい一斉林をつくツてゐるやうに見えた。

「是くらひの太さのは、内地の松か何ぞだと、たかゞ百年内外のものですけれど、是で此木などは皆三百年以上も経てゐるのだ相ですよ」

「左様でせうね、寒い土地ですからね。一部長は樺太の林木は無尽蔵だなんて自慢してゐたけれども、私は信を置いてゐないのですよ。」

『そりや左様ですとも。現在こそ此辺り密林で被はれて居ますけれども、一度伐つたが最後、元通りの森林となる迄に

は、數百年といふ長い歳月を經なければならないのですからね。』
『こんな密林の中を、天幕でも持て二日も三日も旅行をつゞけたら、愉快でせうね』
『お好きならやつて御覽なさい。熊が出て來ますぜ、熊の出て來る前凍え死んじまひますね、あは丶丶』
そんな他愛のない話をしながら、退屈な橇の上の旅を、私たちは續けたのであつた。紺碧の空に、太陽がわなゝなと震へてゐる、樺太の冬の密林！それは多くの私の旅行記錄のうちでも、特に印象深いもの丶一つであつた。

新聞時代相

――私の持つてゐる明治初年の新聞から――

櫻井忠溫

「新しいもの」と「舊いもの」との戰爭であつた明治初年の世の種々相が其の頃の新聞記事から如何にも面白く窺はれるのである。

今日、新聞は之を輿論の代表機關と見ることは出來ないと思ふ。たゞ一二の記者の頭から捻り出したものが輿論として大勢を代表するものだといふことになればこれ程危險なことはない。新聞記者がある一事を論ぜんがために一々代表的人物を訪ねて、それから材料を取つたにしたところが、それすらなほ輿論といふわけには行かぬ。今日の代表的人物なるものが甚だ怪しい者であつて、多數を代表してゐるものでは無いのである。

さればといつて一々門並みに聞いて廻るといふわけにも行かず、結局は記者の頭から捻出したものが何等かの形式を取つて發表されることになるのであらう。

明治初年の新聞は一つの教科書の如きものであつたが、又一面輿論の代表たる價値は可なり豐富であつた。其の頃の新聞には大に寄稿、投書を歡迎し、新聞を讀者に開放したといふ形で

あつた。新聞種が少なかつたゝめでもあるか新聞の大部分は讀者が作つてゐたといつてもいゝものすらあつた。斯うなつてこそ幾分か新聞が輿論の機關であるといふことにもなるのであつて、「言ひたいことを言ふ」といふ一つの機關になるわけである。

明治初年の新聞はニユースとしての値は極めて少なかつたのは時世としては止むを得ぬことでもあつたらうと思ふ。通信機關の發達しない、電信棒が立つても騷動が起きたといふ時代だから、ニユースとしての記事も一局部に限られてあつたやうである。「あけぼの」新聞の如きは特に新報なる一欄を設けて時事を報道したものであつた。ある二階に寄宿せる書生が近所の娘と關係したゞの、火事があつたゞのといふ、つまらぬ社會種に過ぎなかつた。其他は殆んど議論づくめで讀者の領分が大部分を占めてゐたといつても差支がないくらゐであつた。

又社會種にしてもきわものでないだけ比較的正確な記事が載せられ、今日のやうに大に割引して見なければならぬやうなことはなかつたらしい。新聞が嘘を書くといふことも一つの眞理であつて大部分は事實であるが又大部分は嘘である、といふことも言へると思ふが、其のころの新聞はニユース、バリユーの少いだけ、先づ正確な記事と見て差支がなかつたやうである。

當時の新聞は頑迷な田舍者を開發するといふのが新聞發行の主義であつて「遠近新聞」の發行趣意書にも次のやうに書いてある。

「見聞の狹き田舍人は心頭に、知暗く、疑ひ怪しむこと多く、我を是とし人を非とするの風あり。今日斯かる辱なき御代に逢ひても遠境の人大政の様を知らで、却て疑ひ誹る者もあるべし。斯くては逢ひがたき世に生れし甲斐なし。今官許を受け新聞私局を開き大政を始め諸府藩縣の變革又は里巷の瑣事外國の異聞まで見聞に隨ひ刊行するは我日本國中の人々に新知を開き樂を同くし心僻める事を棄てしめんとてなり……」

尤も其の頃の新聞記者には末廣鐵腸だの、成島柳北だの、栗本鋤雲だのといふ名士も居て社會の木鐸を以て人も許し自れも社會の高きにゐて一世を指導したものであつた。併し都鄙新聞の記事に、支那の使節に鯉の活け作りを出したるに、活きながら肉を喰ふに忍びずとて大に恐みて手にも取らざりし、これ等を以て見るに我が國の開化に進みしこと質に驚くべきことなり、などゝあつて、どちらが開化か、吹き出さずに居れぬやうなこともある。

電信柱が立つたり、汽車が通るといふので百姓一揆を起した

やうな時代でもあつた。明治五年のある新聞には「百姓共の疑ひを晴らすため申渡候書付」といふものが其筋から發表されてゐる。

「一傳信機の儀も下々に於て種々疑惑致候趣に候得へども、一體今日世界の模様昔と替り蒸汽船と申すもの出來し、百里の海も一日に往返し、傳信機と申すもの有之、千里の音信も暫時の間に相分り、此上もなき調法なる道具にて、下々の便利を思召されて此度御扱ひに相成候儀に付追々下々にも有難御趣旨相分り申すべく候間色々の風說に迷はず安心致すべき事、傳信機は全く道具仕掛の譯にて能々其の道理を推し究め候へば不思議の事も之れなく候間此旨得心致すべく、其仕掛の大意は追々何れも納得に相成るやう敎へ遣はすべく……」

十三年間女と牛を異國へ引渡すといふ風說が起きて、これ又百姓共が亂暴に及んだといふこともあり、日本國は異人の手に渡るのだといつて騷ぎ、其筋より「日本國中の者は天子樣の御子なり、御父樣たる御方を置いて、政事を頼むなどと申すも恐れ入りたることにて左樣心得違ひの役人は一人も無之候間安心致すべき事」といふ告示も新聞に載せられてある。まことに世話の燒けたことであつた「新しきもの」と「舊きもの」との渦に卷かれ、言ひやうのない不安な有樣であつたといふことが、このころの新聞を透して覗かれるのである。

一つの服裝にしても明治四年五月發行「新聞雜誌」第二號には「裝束、直垂、上下、羽織袴、十得、腹掛股引、トンビ、ブランケツトを着る者、履物は下駄、雪駄、草履西洋沓……」といふ記事があつて、目まぐるしい程雜多な世の中だつたことが面白く讀まれるのである。

服裝で、當時のある新聞に、西洋人の禮服を着てゐる有樣を「男は襷を掛け、女は腕まくりをしてゐる」と書いたものがある。男が胸に勳章の大綬を掛け、女が兩腕をあらはに出してゐる風を言つたものである。當時出來の洋服なるものの縫締も、少しも洋服らしいところがなくて、法被股引のやうな物であるのも面白い。

……………………

當時の新聞は新聞といふよりも雜誌に近いといつてもいゝくらゐであつた。慶應年間に出來た中外新聞、明治に入つて出來た、遠近新聞、都鄙新聞、東京新報、新聞雜誌などはいづれも菊版大の小雜誌風であつて、今日の新聞紙風の體裁をなしてゐたものは、東京日々くらゐでなかつたかと思ふ。新聞雜誌、後に「あけぼの」と改題した新聞は四六倍版くらゐで一段組であ

つたが、其の他のものは段無しで書き流したものである。今日は、の「綜合編輯」となれば社會種でも重要なものは第一面にも載せるのであるが、當時の新聞は「あけぼの」は論說、雜報、投書といふ風に劃然と領分を極めて一歩も侵入することを許さなかつたが、其他はたゞ社會種も政治種もゴジヤ〳〵に早いもの勝といつた式に並べたに過ぎなかつた。

新聞雜誌第二號の記事を借りて見れば、「合衆國海軍大將ローシルスへ朝鮮人より送りたる書信」といふ記事がある。これは米艦の朝鮮海に來りたるを詰つたものであつて、

「當國は自分開化して四千年の永久を續き、人民泰山の如く晏然たれば他を望むこと曾てなし、當國よりして他國を侵擾せしことなきに何故他邦は我國を騷すや、我國は東隅、其國は西邊なるに何等の企あつて此の如く數千里の海上を來航するや……汝我土地を懇望するとも能はざることとなり、汝我國と交りを通ぜんと欲するとも能はざるべし」

といふ抗議である。これは明治四年四月六日のことであつて、ひどく威張つたものである。「自分開化」は笑はせる。鯉の活け作りを食はぬ支那人を未開人と笑つた程、日本人も「自分開化」を極め込んで目糞が鼻糞を笑つてゐたのだ。

斯ういふやかましい記事があるかと思へば、其の次ぎに

「或茶屋に兩三名の客藝者を呼び遊び居しが、一人の曰く、近日官より藝者の税を召上られ路普請の料に用ひらるゝよしの風說あり、路普請ならば馬車や人力車こそ税を取るべきに其故如何にと云ひければ、一人微笑して云ふ、近來は藝者がよく轢びますからさ、と、滿坐大に笑を發せり」

といふ記事もある。其次には伊藤大藏少輔米利堅より歸國の件、招魂社にて邦人外國人と競馬して勝を得たる件、角力の興行ありし件、支那への正使伊達大藏卿、副使、柳原外務大丞等橫濱出帆の件、細川熊本藩知事辭職、士族に歸せんことを願ひ出たる件、といふ風に陳列してある。

新聞の文章は所謂桔掘傲牙たるもので、我史を讀み古今を通觀するに……」といつた調子であつた。某大官日夜多忙の狀を說くにも、

「未だ朝より歸らざるに早くも賓客門に滿ち、夜深ふして去る。晨には柱頭の時鐘方に六時を報せんとする既に數客の來て刺を投し謁を請ふあり、暮に朝に來往踵を接し、甲は經濟を議して未た去らさるに乙は政治を叩き、丙は婚を献して選擢を懇求せんとする際、丁あり眉を竪めて不平を訴ふ…………」

といふ風であつて、同じ社會記事でも、

「一昨九日午前二時淺草瓦町湯屋渡世須川某方板敷に差置きたる箱火鉢より出火し、已に大事に及はんとせしを同勤の遊佐之を認め打消したる由、實に危かりしことならずや」

ある書生が、ある娘に關係をつけて後、行衛を晦ました、

「……彼の書生は何れへ去りしか行衛知れざれば此頃專ら捜索中のよし、嗚呼世の駸々乎として開化に進むや、百般の學術漸く開け、紅袖翠袂も皆學に就くの日なれば、中には種々の怪しき稽古もあるべし。父兄たる者豈警戒せざらんや」

といつた固いものであつた。

訪問記者も矢立を腰に差し、上下でも着て行かうかといふ風の調子だから、書くことが又恐ろしく固い、門前拂を喰つても「三度門に及んで未だ謁を得ざるものあり」といつた式に書く。

社會記事は、ニュースとしての価はなく又「時」にも「所」にも無頓着な記事が少くなかつた。たゞ文章で讀ませようといふ風であつた。ジアナリスト先生も一世の名文を書いて喝采を得やうといふ野心が先で「新聞の眼」を光らしてゐる必要もないのであつた。

一時は次のやうな調子の美文が流行して社會記事として持て囃された時代もあつた。

ある醫者夫婦喧嘩の一節

「某醫師修業の旅枕夜半の假寢の一時雨、ぬるゝ赤繩も萬代か千代の松脂ぬりこめて色も香詰めし寄藥の離れぬ中となりにしは、げに神技の結びたる例すくなき奇應丸、妙振出しの初めより萬金丹の末かけて契るもいつか吹風の……
……時しも去年の末なりき（この記事は去年の夫婦喧嘩を書いてゐるのである）何か口舌を煎じ出し、果てはいつもの癇癪を起すや否や藥切る庖丁をもて立ちかゝる。妻は狼狽眼眩し、辛くも避くる人の家に、頼むは之ぞ救命丸、……巡査戸長の兩先生立合診察、其の投劑は開明湯、忽ち雜治平癒して治る夫婦併今日出度春を迎えたり」

呑氣な新聞である。

當時論說には最も力を入れ、志を當世に得ざるの士が諤々たる意見を發表して大に政府を攻撃し人心を刺戟したものであつた。言論は自由とあつて鐵火を飛ばすが如き勢で時事を激論し禁獄に處せられたものも續出した。當時は編輯長公けに名を署したため、入獄後假編輯長亦刑に觸れるやうなことがあつて、新聞は一時休刊の止むなきに至つたが如き珍事さへもあつた。

論說は今日から見ても過激すぎる程過激なものもあつて「政

府は壓制なり、官吏は殘酷なり、之を顚覆し、之を誅戮せざるべからず」だのといふ暴論を掲げて、禁獄一年に處せられたりした。すると一方では「匙を以て人を醫すれば禁獄を科せらる。」と論じて禁獄一ケ月に處せられたものもあつた。併し處刑さるればされる程益々火の手が盛んになり危險亂暴論で一時は手もつけられぬやうな始末であつたこともある。

投書欄は新聞の大部分といつてもいゝ時代があつた。所謂讀者の作る新聞であつて、新聞價値は十分にあつた。時代が時代なので、今まで何事も壓制されてゐたものが、急に「言ひたいことを言ふ」機關が出來たので、おれも〳〵と押し掛けて來た形があつた。

丁寧な投書家もあつて、「恐れながら、御維新の今日につき恐れを顧みず寄場小屋番日傭稼鈴木泰藏建言奉り候誠惶誠恐謹言」などゝ馬鹿丁寧な出方のものもある。そして、

「方今市中寄場興行の形勢狂談奇言を專一にして雜話嘲笑の際終に淫房戀着の情態を細說す、少年の人之を好み巳に毎夜一錢五厘或は二錢を投じて群集す、此席の如きは男女雜坐す……少年等且に學校に進むとも夕べに雜談の寄場に歩すれば學課計り難かるべし謹て照察を請ふ」

といふやうな恐れながら建言奉るといつた風の投書が少くなかつた。

「西洋の國々には市街に並木を植えあり、暑熱を避け、健康を養ふためなり、又汽車の部屋に綱の棚ありて便利なり。西洋諸國の風に倣ふやうにしたきものなり」

などゝいふもあつて、明るい世界へ出やういふ努力が、紙の上に躍動してゐるやうに思ふ。

投書中には或は男女同權を論じ、或は人種平等を論じ、或は世界共通語を論ずるもの等、當時としては奇矯急進の論者も少からずあつた。

小說は明治九年平假名繪入新聞が「金之助話」といふものを書いたのが始まりのやうに思ふ。讀者は金之助の哀れな物語を讀んで、大に同情を寄せ、之を救濟せんとして、新聞社に住所を問ひ合せるものや、面會を申込むものなどがあつて作者もこれには大に弱つたといふことである、

……………………

當時の新聞はいづれも木版刷であつた。活版印刷は明治三年橫濱每日新聞が日本紙よりも高價な洋紙に印刷したのが始まりださうである。

ルビは殆んどなかつた。却つて木版物にルビのあるのも面白

い。今日の新聞からルビを取るといふことは大問題だが、恐らく十年二十年の後でも全くルビ無しになることはなからう。いつまででも所謂「悪魔の文字」を日本の新聞から取ることは出來ないほど低い調子のものである。却つて明治初年の新聞にルビの無いといふのは一つの皮肉だと思ふ。

廣告は、家傳秘法勇力丸ひゐの藥、養脾散たんせきの藥、化毒丸かさの藥、とかいふやうな藥の廣告のみといつてもよいのは面白いことである。

廣告を新聞紙に掲載を希望するものは「二十字につき二匁の彫刻料を出すべし」といふ規定のものもあつた。

新聞社が新聞縦覽所を設けてゐるのもあつた。「些少の見料を出さば東京の諸新聞を隨意覽讀に備ふ」と明治六年三月靜岡新聞に書いてある。

投書に就ては次のやうな規定が都鄙新聞に載せてある。

「新聞十行二十三字の一片紙を投じ玉はば製本三冊を呈す。同十行二十三字の半片紙を投じ玉はば製本二冊を呈す。同二十三字の三行以上は製本一冊を呈す。然し無名の書は編入すること能はず、浮言造説を恐るるが故なり。願くは開化君子紙傍に姓名を記し本局に投じ玉はんことを願ふ」

新聞の價は明治二年遠近新聞が價一匁とあり、明治四年都鄙新聞が二匁、「あけぼの」が一錢七厘といふ相場であつた。當時新聞一枚（一冊といふ方が當つてゐるかも知れぬ）一錢七厘は可なり高いものであつた。三ヶ月極讀者には一割半引、六ヶ月極には二割引といふ新聞もあつた。

新聞を戸別毎に配達するといふことは餘程後のことであつたらしい。配達するやうになつても配達人は黒の打割羽織を着、悠々として顧客の玄關より上り込み、煙草を吹かし、茶を頂戴して浮世話をして歩いたといふことである。後には小さい挟箱の先に鈴を附けて配達したが、やはりノンキにブラ／＼と歩いてゐたといふことである。

…………

古い新聞の記事から「時代」を覗いてみれば、まことに隔世の感がある。斯かることも舊い殻から抜け出やうとした一つの世相であつたことが、まさ／＼と目に見えるやうである。

東京の三十年

生方敏郎

一

早いものだ。もう東京へ來て彼是三十年になる。自分はちつとも變らないつもりだけれども、世間を見るとあんまり變つてゐるのに驚く。もう地震以前でも私が初めて見た東京の俤はほとんど無くなつてゐたのだ、それが又大地震大火災に遭つて、もう根こそぎ古い記憶は無くなつてしまつた。だが無くなつたのは建築物や町の樣子ばかりではない、食べ物から人間から風俗から、何から何まで三十年前の東京に在つたものはまるで變つてしまつた。だんだん少しづゝ變つて行く間は變る變ると思ひつゝもさう東京のことばかりに氣が取られはしなかつたが、まるで無くなつて半年も經つて見ると、いろ〳〵と昔の事が憶ひ出されて懷しい。

二

その時分學生は天下注視の標的になつてゐた。「書生々々と輕蔑するな大臣參議ももと書生、ヨサコイ〳〵」と云ふ俗謡もあつたくらゐで、大手を振つて都大路を濶歩するものは書生であつた。その數に於ても、町を歩いて特に目につく者は書生と車夫であるやうに、車夫と書生は多かつた。書生即ち學生と云へば何處へ行つても受けがよかつた。大正になつては天下は成金の天下だけれども、其頃の天下は實に書生の天下だつた。多いと云つても數に於て今ほど多いわけではなかつたらう、併し社會主義もなく勞働問題もなく、女優もなければ女給もなく、成金も出しやばらなかつた其頃に於ては、書生が社會注視の焦點でもあり、社會の寵兒でもあつた。

書生の本場と云へば何と云つても神田と本郷で、神田本郷を

歩いてゐれば、突當るほど書生に出會つた。書生の中でもまだその時分は私立學校の書生の方が目立ちもしたし勢ひも好かつた。本郷の書生を代表する者は一高の生徒よりもむしろ濟生學舍の學生だつた、濟生學舍と云つても今の人には分るまいが、醫學界の奇傑長谷川泰を校長とする醫學校で、千人以上の學生を持ち、從つてバンカラなゴロツキ書生もずゐぶん其中にはゐた。これに對抗する私立學校は神田に於ける法學院であつた。法學院は即ち今の法政大學の前身であつて、此處にも千人内外のゴロツキを包擁して居つた。本鄕の學生を代表する者が濟生學舍の學生である如くに、神田でもまた神田の學生を代表する者は一ツ橋の高等商業でなくして、むしろこの法學院の學生であつた。芝へ行つて慶應義塾がまだ福澤諭吉翁の生きてゐた頃の事であるから、これが又なかなか意氣熾んであつた。私は國を出るときにどの學校へ入らうかと思つて考へた。その頃まで天下の學生の間に喧傳せられてゐた新島讓は既に故人となつた。私も新島さんが生きてゐたならば京都へ行つて同志社の學生となつたであらう、けれども新島さんが亡くなつたとすれば京都へ行くことはない、やはり東京で修業しようと思つた。その頃府立の中學もあつたのだけれど、それはとても今のやうに權威あるものでなかつた。中學でも私立學校の方が評判が高かつた。杉浦重剛の日本中學、神田西小川町にあつた獨逸協會の中學部など評判がよかつた。今泉定介の城北中學(今の國學院)それから早稻田中學も出會まで其名が通つてゐた。けれども私立の中でも殊にミッションスクールが評判が高かつた。本多庸一の青山學院、井深梶之助の明治學院、それ等は出會まで聞えて評判が高かつた。私は最初青山學院に親戚の者が教師をしてゐる縁故があるので、そこへ入るつもりであつたが、かれが札幌へ轉任してしまつたので明治學院へ入ることにした。

併しこの外にも中學は可なり澤山あつた。そして生徒の數は少なかつたと見えて、何處でも入らうと思へば容易に入れた。それゆゑ僅かな事に不平を持つて、學校から學校へと轉校して歩く學生がずゐぶんあつた。今思へば實に贅澤の骨頂と云ふの外はない。

その頃の學生はそれだけに客氣でもあれば我儘でもあり、又空想的でもあつた。望が高いといへばいへるが、一般に考へ方が粗大でもあつた。卒業して何になると云へば、まことに漠然たる考を持つて居つた。もう其頃でも工學士の賣口がよいからと云つて工科を望んだり、軍人が出世が早いからと云つて士官學校の入學を志願する者も無いではなかつたが、併し賣口より何よりたゞ漠然と天下とか國家とか云ふ觀念を持ち、ナポレオ

ンだのワシントンだのを理想とする空想家が多かつた。一口に言へば今の書生に比べて遙かに蠻殼だつた。そして頭は單純だつた。

風俗は學生ばかりでなく一般社會の人も今と較べて可なり相違が有る。その時分には糸織や銘仙はよそ行だつた。男の羽織は紳士でも羽二重又は鹽瀬、少し落ちて斜子と云ふところで、お召だの高貴だの云ふものは明治の末年になつてからの事だ。まして學生の風俗と來たら蠻殼も甚しかつた。私は平常着としては勿論手織木綿の縞物を持つて來たが、紋付はそれでも青梅の紋付を持つて來た。ところが東京へ來て見ると多くの學生が黑木綿の紋付を着てゐた。今頃紋付を着ることはお葬式にでも行く時でなければ滅多にないが、その時分の學生は普段に紋付を着てゐた。それも大きな五ツ紋が流行つた。紋付でないものは紺飛白の羽織を着てゐた。着物も同じく紺飛白と云ふところが學生の中の伊達者の服裝であつた。紡績飛白を着る者も極めて稀にはあつたが、それは恐らく贅澤の方だつたらう。羽織の紐は指のやうに太く、そして長かつた。短かい所でも二尺位、長いのは四尺も五尺もあるのを結んで首に引懸けてゐた。そんな長い紐をどうするのかと云へば、喧嘩の時に襷にするのだと云ふ話であつた。現に角長い紐を殿様の丁髷のやうに結んでゐた。兵兒帶は今のやうに錦紗だの紬だのなど云ふものではなくして、誰も皆な天竺木綿の大幅のものを醬油樽のタガのやうに太くぐる／＼と捲き付けてゐた。メリンスを用ゐる樣になつたのは、それよりも亦四五年の後、日露戰爭の前後のことだと思ふ。下駄は皆一樣に書生とあるからには薩摩下駄を穿いてゐた。これを薩下駄とも云つて女の穿くポツクリに似て餘り穿きいいものではなかつた。鼻緒は白の小倉の非常に太いもので、その太い程が自慢だつた。私は東京へ出てかういふ學生の風俗を見て可なり異樣に感じたが、自分も忽ちそれに倣つた。だがかういふ風俗は薩摩出身の學生から始まつたものらしい。

その頃薩摩の學生と云へば實に幅が利いてゐた。そして亂暴で通つてゐた。彼奴は薩摩だと云へば誰も皆一目置いた。

薩摩は西鄕南洲城山に斃れ、大久保利通紀尾坂に刺され、この二大巨頭を失つたもの丶尚その餘力が天下を壓して、當時薩長政府と一口に言つたが、學生の間に於てまで薩摩の勢力は盛んであつた。勢力と云ふよりも寧ろ暴力と云つた方が當つてゐるかも知れない。薩摩の學生が秀才であるとは誰も許さないが、彼等の暴力に對しては殆ど壓倒されてゐた。今の不良少年といふ團體が丁度その時分の薩に相當するのであるが、これを取締るべき警官が悉く薩摩人で、「オイコソ／＼」と云ふ調子だ

から、謂はゞ官許不良少年の形で、彼等は悉く短刀を懐にし、命知らずであることゝ、その一人を敵とすれば悉く團結して來て復讐すると云ふことは皆の間に了解されてゐた。勇者と云ふ點から云へば私達の同級生には横濱ッ子の山ちゃんなんどが錚中の錚々たる者であつたが、併し山ちゃんなぞは寧ろ運動のチャンピオンとして敬意を表され、薩のやうに恐れらるゝ事はなかつた。當時明治學院にゐた薩には豪傑らしい者は一人も無かつた。個人對個人ならば何も恐れるに足りなかつたが、彼等の背後に薩の團結があると云ふことを知つてゐるので、誰も薩には當らず觸らずにしてゐた。薩の多くは學問が出來なかつたのを見て、私達は反感と輕蔑と恐怖の錯綜した感情を以て彼等と當らず觸らずにしてゐたが、彼等は又學問の出來ない事なぞは何とも思つてゐなかつた。そして私は特にその中の二三の薩と交際つて見ると、意外に大人しく、意外に眞面目である事をも知つた。

併し薩摩人の當時に於ける勢力は天下の學生が相率ゐて薩摩カブレをしたのを見ても察せられる。東京の學生の全部の風俗が悉く薩摩の學生の風俗ではなかつたか？蓬髪汚面、短褐弊袴、醤油で煮〆めたやうな手拭を腰にブラ下げ右か左の肩を怒らせ頸藏と云ふものを拵へて懐におさめ、目を怒らして歩き、友達に會へば「貴様何處へ行く」君とは云はずして貴様と云つたものだ。これ悉く薩摩學生の模倣であつたのだ。薩摩琵琶や劍舞詩吟と云ふものが、殊に學生の中に行はれた。たゞそれ許りではない。やはり薩摩人を眞似て學生の間には鶏姦と云ふことが可なり盛んに流行した。その時分流行つた歌と云へば

思ひ起せば忘れもやらぬ
補仁會のレースの其折に
船の中には櫻か桃か
二人の稚兒さんが一挺艪押せば

などであつた。

無理はない、日清戰爭で青少年の間に軍人崇拜熱を極度にまで高からしめた後であるから、陸軍を希望する者も可なりあつたが、それよりも海軍希望者は殊に多かつた。秀才と云ふ秀才は誰も皆海軍を志した。海軍豫備校だの攻玉社などが繁昌した。攻玉社の學生と云へばなかなか外から恐れられた。ボートをお臺場あたりに漕ぎ廻つてゐる時に、攻玉社のボートを見れば必ず避ける樣にした。

私は上京するまで田舎の學生は武骨で頑强であるけれども、それに比べて東京の學生は定めし文弱で雅びた所謂都の手振を心得えて居るものと期待して來た。然るにその粗暴さ加減は右

の通りであつた。最も私が驚いた事には殆んど何の學生もが白鞘の短刀とか大和杖とか、又は大きなジヤクナイフなどを本箱の抽出に藏してゐたことだ。それにも拘らず其頃學生の決鬪と云ふものは滅多にないどころか殆んど絶對に見られなかつた。日比谷も今ではあんな繁華な所になつたけれども、當時は見渡す限り草蓬々たる原ツぱであつた。その原ツぱで或日の夕方丸善の小僧が一人掛金を集めて歸る道を、泥棒のために殺された事があつたがその事件は實に滿都を震駭させた。新聞は數日に亘つてその記事を盛んに書いた。そして丸善の小僧殺しの話は人々の間に一年も二年も話題に上つた。更に角二十何年か經つた今日に及んでも、私が記憶してゐる位なのだから、如何に其の頃の都人士を畏怖させ驚愕させたかを察するに難くないであらう。それほど東京に殺人犯と云ふものは少かつた。それより數年前にお茶の水事件と云ふのがあつた。それは松平某と云ふ男がその妻を慘殺してお茶の水橋下へ遺棄した事件であるが隨分喧傳されたもので、私は田舍に居て新聞でその記事を讀み、上京するに及び偶々駿河臺の方からあの橋を渡る時、親族の者から『敏ちやん、此處がお茶の水事件のあつた處だよ』と說明された。このお茶の水事件の如き、又は丸善の小僧殺しの如き、今日ならば一枚の夕刊に二つ位は必ずある程の平々凡々たる殺人事件だ。が其頃は實に珍らしかつた。横濱でミラーと云ふ外國人が、やはりその時分殺された。それなぞは外國人の事であるからいよいよ以て世間の注意を引き、芝居にまでも仕組まれた。われわれも寄宿舍のミーチングの時に、ミラー殺しの公判の場を餘興にやつた位だ。

學生の風俗は如何にも殺伐であつたに似合はず、殺傷事件が殆ど見られなかつたのは、啻に學生ばかりでなく、周圍の社會がこの通り平和であつた反映だとも思はれる。これを以て今日の學生と比較すると、如何に善良で如何に平和であつたか、まつたく同じ日本人の學生とは思はれぬ程であるが、これで見ても學生の不良なのは學生ばかりが不良なためではなくしてその周圍の社會全體が不良であるか否かの反映に過ぎない事を察するに難くない。

それは扨措き、命知らずを以て當時の學生の間に一大權威であつた所の薩摩の學生と云へども、とても今日の不良少年の如くにナイフや短刀を振廻したわけではない。如何に當時の學生が氣が弱かつたかは、あの頃最も流行した書物の一つに「膽力養成法」と云ふ如き種類の題目の書物が有つたのを見ても分る。膽小なればこそ膽力養成法の書物が賣れたのだ。今日の學生のやうに何かと云ふとぢきに血を流すことを何とも思はれぬ殺伐た

人達とは、まつたく比べ物にならぬ。

明治三十四年頃かと思ふ。日比谷の原で例の法學院の學生と、濟生學舍の學生とが、双方百人位づゝも入亂れて決鬪しようとし、警察もこれには大分手こずつたやうな騒ぎがあつたが、此時にもあまり怪我人が無かつたやうに思ふ。兎に角死人は一人も無かつた。ちようど日清戰役と日露戰役との間に挾まるこの時代の學生は、義勇公に奉ずるの國家的觀念の强かつたことは、今の學生と比べて雲泥の差であるけれども、私學に於ては度胸がなく、初心ではにかみやで涙脆かつた。一ツにはまだ活動寫眞と云ふやうなものもなく、不良を働く實物教授が無かつた爲めでもあらう。われわれはハンニバルたらうと夢想した。ネルソンたらんと夢想した。ナポレオン又はワシントンたらんと夢想した。成吉汗たらんとも夢想した。けれども恐らく一人だつて悪漢たらんと夢想し、探偵と鬪はうと夢想した者は一人もあるまい。かう云ふ事から考へても、如何に今の活動寫眞だの帝國議會だのと云ふものが、青年の風教の上に害毒を及ぼしてゐるかに驚かされるのである。

私が東京へ來た翌年の春の事と思ふ。學生の不良な者の中にアップすると云ふことが流行り出した。つまり掻浚ひの事だ。併しそれも文房具屋から鉛筆を一本アップするとか、古本屋の店から古本を一冊失敬するとか云ふに過ぎなかつた。學院の幹事が譯讀を教へながら「此頃學生の中にオップすることが（この先生は古い慶應義塾流の發音法でかう云ふ場合のアをオと發音するのが常であつた）流行ると云ふが、さう云ふ事は善くない」と訓戒したのを覺へてゐる。併しわれわれのクラスメートの中には、一人も他人の物をアップするやうな不良少年は無かつた。

私が東京へ來て八年間ばかりの學生生活の中で、近代的不良少年に似た者を見ることの出來たのは、後にも先にも只一人しかない。それは學院へ明治三十二年の六月頃岡山中學から校長服部綾雄氏の紹介を持つて轉校して來た一學生であつた。彼は池田侯爵の分家の子息であると云ふので、もう彼が入塾する前から今度華族の息子が來るとて評判であつた。私も華族の子供を見るのはこれが生れて初めてであるから、どんな品のいゝお坊ちやんかと思つていろいろ空想してゐた。ところがいよいよ入舍して來たのを見ると顔立は成程色白でお坊ちやんらしかつたが、例に依り短褐弊袴、筒ツぽうの單衣を腕捲りなぞして肩を怒らせ、白ツぽい瀧縞の袴の紐に型の如く手拭をダラリと下げてゐた。顔をつくづく見ると、人形のやうな大人しい目の底に、險しい光を放ち、頬は心持こけて鋭い氣質を表はしてゐ

た。彼の話は慷慨激越で文章も旨く、演説は殊に巧みだつた。巧みと云つても決して内容のあるものではなく、丁度今の方々の學校にある雄辯會の諸君の演説のやうな形式一點張のものだつた。彼は決してお坊ちやんではなく、隨分の摺れつからしだつた。隨分も隨分、煮ても燒いても喰へない程の摺れつからしだつた。彼は私に白鞘の短刀などを拔いて見せた。又絹ハンカチだのナイフだの、そんな物を氣前よく私に呉れやうとも言つた。併し私は薄氣味惡いのでそれを手にしなかつた。と云ふのは彼がその時私に「自分は岡山中學を退校されたのは人殺しをした爲めである、なあに人の一人や二人殺したつて我々に對して警察などが何をするものか」と豪語してゐたのを怖れたからだ。そしてその時分の社會狀態としては實際藩閥長閥系統の有力な子弟や、華族の子弟などは、彼の言ふ如く、田舍の警察などの齒が立つものではなかつたと信ぜられたからだ。

彼れは果して一月と經たない間に學院を退校された。來た時分には猫を被つてゐたのだが、そろそろ本音を出したからだ。彼が退校した後で幹事は私達に「池田はどうもひどいことをしたものだ、彼は短刀を以て脅迫して少年を鷄姦した」と憤慨してゐた。鷄姦は此頃の流行り物で、それも勿論薩摩の學生を模倣した結果であるが、彼れの外にも鷄姦を實際犯しつゝあつたものは幾らもあつたので、よく昔が稚兒だとか念者だとか話してゐたものだが、池田の如く短刀を以て脅迫して鷄姦したものは外になかつた。彼は其後壯士役者の群に入り、轉々して歩いた末に、郷里へ歸つて鐵道往生を遂げたと後に岡山の人から聞いた。彼などはその當時では珍らしい不良少年だつたが、今日ならば何處のカフエーへ行つても容易に見られる大正型の不良少年だつたのだ。彼は不良少年の先驅者だつたのだ。

三

運動は甚だその時分振はなかつた。地方の學校で運動と云へば、擊劍と柔道に限られてゐた。擊劍ばかりはどんな田舍でも盛んで、竹刀の音はどの中學でも聞かれたが、柔道は嘉納治五郎さんの宣傳に依つて漸く其頃全國的に擴がりつゝあつた。嘉納さんが洋行の航海中船の中で西洋人を手玉に取つて投げたと云ふ逸話は、ひどく日本人と云ふものを倭小に微力に、又日本國といふものを和蘭か瑞西か又は葡萄牙と同等程度の弱國と意識してゐた日本人に取つて、大變な慰安となり、自負ともなつた。そして柔道の有難味は青少年の間に宣傳された。けれども野球だのテニスだの云ふ西洋風の競技は、まだ學校の門を潜つてゐなかつた。地方には殆ど絶對に無かつた。私は東京へ來て

初めて野球と云ふものを見たが、東京でも野球をやる學校は一高と慶應と青山と明治學院の如き極く少數の學校の學生に限られてゐた。ベースボールのやり方の本などが出版されて、田舍の學生がその本を見て眞似始めたのは此頃の事だ。テニスと云ふものは東京にさへもなかつた。明治學院の學生、私達の友人は時々地方の學校から招かれてベースボールの敎授に赴いたものだ。私の次のクラスからは野球界で鳴らした河野安通志、庭球で氏家と共に謳はれた山住長平、學生相撲の大關となつた大村一藏の如き、錚々たる運動家が輩出した。この連中が早稻田大學へ行き 帝國大學へ行つた頃から西洋風のスポーツが隆盛に赴き初めた。それは三十六七年頃だ。

學生はまだ音樂や美術を解するものは殆ど無かつた。小學校でこそ軍歌や唱歌と云ふものはあるが、中學に音樂と云ふ科目は無く、音樂の話すらも聽く機會がなかつた。大正の兒童こそ小學校からド、レ、ミだの何だのと云ふことを知り中學生になれば、バスだのテノールだの言ふ言葉は勿論知つてゐるし、殊に最近は西洋音樂大流行で 中學以上の學校の學生の中にはジンバリストを聽いた者もあらうし、クライスラーを聽いた者もあらう。又は蓄音器からでも西洋の大音樂家の名曲を聽いて、それを樂しむ學生は極めて多からう。パン屋の小僧でも夏は夕涼みしながらハーモニカでローレライ位は吹いてゐる。大正はさう云ふ時代になつたけれども、日露戰爭前の學生は四部合唱と云ふ事すら知つてゐる者は稀だつた。學院は每朝三十分づゝ聖書の講義や祈禱や讃美歌を西洋人が敎へる所から、また時々慈善音樂會などが催されて、學生は三十錢も出せば赤いチケツトが買へる所から、他の東京の學校の學生とは違ひ 其頃から西洋音樂に親しむ機會が多かつた。私の次のクラスからは現に東京音樂學校の敎授を二人までも出した。さうは云ふものゝ一般學生は私を初め西洋音樂は皆目わからなかつた。繪に對する學生の趣味も同樣だ。文展と云ふものが始まつて以來、繪畫は通俗的のものになり、一般の人々が兎に角一年に一度は油繪の前に立つやうになり、自由畫と云ふことが叫ばれてから、繪畫は小學兒童にまでも親しまれる樣になつたけれども、この時分には繪畫はたゞ中學の一つの學科目として、數學や英語と同じやうに考へられてゐた。たゞ厄介な重荷に過ぎなかつたのだそれでも私のクラスメートの中には既に西洋美術に理解を持つ者が一二人はあつたので、私は彼等に誘はれて秋の上野に開かれる白馬會の展覽會を辨當持參で觀に來たことも三四度ある。白馬會は黑田淸輝氏等の牛耳つてゐた洋畫の會で、この外に滿谷國四郎氏等の太平洋畫會と云ふのが白馬會と對抗してゐたので、そ

れをも私は觀に行つたことがある。(是は少し後の事かと思ふ)

四

學生の快樂の第一は勿論食ふだ事つた。それは今の學生も同じ事であらうが、今の學生の眼中には恐らく食物の外に酒もあり、又女もあるだらう。我々の學生時代とても決して木石と云ふ譯ではないから、婦人が目に映らないではなかつた。たゞ今のやうに女子と交際する機會が全く與へられなかつた。稀には女學生に友達を持つ者もあつたであらうが、女學生以外の女性を對象とする機會は全く無かつた。學生が美しい少女を見てシヤンだの何のと公然騷ぐことの味を覺えたのは、餘程近代の事に屬するのだ。カフエーと云ふものは一つも無いから、女給と云ふ者も無かつた。女店員だの女事務員だの、さう云ふ職業婦人も無かつた。芝居も女の子が席へ案內して吳れるやうになつたのは帝劇が出來てからの事だ。それ以前は芝居の案內人は不格好な顏付をした出方と云ふ男衆だつた。西洋料理店は一區の中に數軒あつただらうが、給仕人は勿論ボーイだつた。ミルクホールと云ふものが出來たのさへも、日露戰爭前後の事だ。バーも無つた。醫學生や法學生には大人並に吉原や品川へ遊ぶ者もあつたらうが、一般の學生はそんな事はしなかつた。酒飲む機會や女に近づく機會は殆ど無かつた。會をすると云つても五錢の會費で木村屋のパンの一袋をあてがわれて滿足してゐた。五錢の袋の中にはワフル一つ、束髮パン一つ、餡パン二つ、それから木の葉パンなぞ澤山あつた。それを喰べながら一夜を樂しく語り明かすことが出來た。

併し食慾は今の學生と變りはない。なかなか盛んに强かつた。たゞ外へ出ても喰べに行く所と云つては汁粉屋と蕎麥屋位のものだつた。蕎麥も安いし汁粉も安かつた。もりかけは一錢五厘、二錢の家もあつた。たゞ蕎麥屋にうどんと云ふものは無かつた。種物はあまり喰べたことがないから値は忘れた。五六人の友達と麻布長坂の更科へ喰べに行くこともあつたが、彼處ですらも隨分安かつた。汁粉は御膳汁粉が二錢で駄汁粉ならば一錢だつた。甘藷は俗に書生の羊羹と呼ばれてゐた程で、冬になると燒藷を盛んに喰べた。併し安かつたから一人で二錢喰べる者は豪傑だつたらう。夏になると氷水をよく飲んだ。殊にあの時分は電車と云ふものが無く、何處へ行くにもテク〳〵歩くのだから、咽喉を干して路傍の氷屋へ何度も入つたが、アイスクリームと云ふやうなものは殆ど學生の目には止まらなかつた。極く上流社會の間には既にアイスクリームは紹介されてゐたゞらうが、一般の人は知らなかつた。大橋乙羽と云ふ文學者で博

文館のお婿さんだつた人が、紅葉館で催された宴會の席で、アイスクリームを出されてソースを掛けて喰べたと云ふ失敗談は今聞けば笑話だが、あの時分乙羽氏でなくとも誰でもあの位の失策はしただらう。私達平民の學生は氷小豆や氷汁粉を以て此上もない贅澤と心得てゐたものだ、雀百まで踊を忘れずと云ふが、學生時代を食氣で養成された私なんぞは今以て途で友達と會ふと直ぐ何か喰ひたくなつて、カフエーでも料理屋でも又は繩暖簾でも入り込まねば話がし難いし、どんな眞面目な研究會でも、何か御馳走がないと据りが悪い様な氣がしてならぬ。

あの頃春は御殿山へ花見に行き、夏は青葉の下蔭に涼み、秋から冬は枯野の日向へ寝轉んで文學雑誌などを讀むやら、ワーズワースやバイロンの詩集を迭み代りに朗讀したりしたものだが。さう云ふ時も落花生の三角の袋を各自懐に忍ばせることを忘れなかつた。ボートを品川沖から大森の方へ漕ぎ出た時でも鈴ケ森へ上陸して彼處の懸茶屋で葛餅や鹽豆を喰べないでは納りが悪かつた。春は大崎村へ苺を喰べに行き、秋は目黒村へ梨と栗とを喰べに行つた、クリスマスの晩に西洋人の先生から招れて、珈琲や西洋菓子の御馳走になることは實に一年中での樂みの一つだつた。どの先生もよく御馳走して呉れた。監事からは寄宿生一同へ毎年の夏自分の畑に出來たと云ふ苺を振舞はれ、校長さんからは卒業前に必ず招かれて腹一杯御馳走になるのが學院の年中行事になつてゐた。私は今でもその御馳走になつた喰物を喰べる毎にワイコフさんや、ランヂスさんや、井深先生や、熊野先生の俤を憶出す。

げに私などは食に遊び食に活きる者と云ふべきであらうか。將た又食に依つて仁を得たりと云ふべきであらうか。いやこれは私許りの事ではない。誰に取つても人生は色氣と食氣の世の中なのである。けれども私許りでなくあの頃の學生には、別けても食氣が盛んだつたやうに私には思はれる。そして明治三十二三年頃までの學生風俗誌を語らうと思へば、勢ひその當時の學生間に最も目覺しく行はれた所の賄征伐の歴史から筆を付けねばなるまい。

明治學院の寄宿舎で用ゐてゐた飯茶碗は俗に五郎八茶碗と呼ぶ頗る偉大なるものであつたが、私達はそれに飯を山盛にして四五杯づゝも喰べた。食堂の長い卓子には四人毎に一ツづゝのお櫃が置かれてあつたが、豪傑連が集ると忽ちそれを平げて、お代りを命ずるのであつた。茶碗でお代りをすると云ふなら居候ではあるまいし、何杯代へても恐るゝに足りないが、お櫃のお代りと云ふのだから驚く。中には喰べ過ぎて自分の部屋へと導く梯子段を登るのが懶く、段の下に胡座を掻いてシヤツクリ

をしてゐたと云ふ先生もあつた。多勢一緒に食堂で食事すると、群集心理で、即ち模倣作用雷同作用であの樣に澤山食べるものかも知れぬが、兎に角實によく食べた。それで一ケ月四圓といふのだからうまい物の提供される道理がない。でも今の下宿屋のものよりは遙に好いのだが、誰かが「この頃の食物はまづくなつた、一つ懲戒を加へ樣ぢやないか」と發議すれば、食料の高い安いは一考するまでもなく、大抵面白半分で之に賛成し、そこで賄賂征伐がはじまる。その時刻の多くは午飯の時で、その瞬間まで一切秘密にして置き、リングリーダアから「さあ、やれ」と聲がかかると、誰も皆一齊に能ふ限りのベストを盡して大食する。茶目や腕白な者共が騷ぎ立てるばかりでなく、平生は至極大人しい勉强をよくする生徒までが、默々として大食する。六十人乃至八十人もゐる寄宿生が揃ひも揃つて二三杯づつ餘分に食べるのであるから、豫定通りの分量の飯で足りる筈がない。賄ひ方は大まごつきで、お代りのお鉢へは底の方へ少しづつ飯を入れて運んで來る。

「まかない飯！飯を持つて來い」

と空に成りかけたお鉢を（まだ六七杯は殘つてゐるのに）板敷の床へ投り出す。ガタ〳〵足ぶみをする。猛者は膳を床へ投げる。賄ひは慌てて一方假に米を研ぎはじめつつも弱味を見せまいとして、お鉢にいつぱい入れたのをも運んで來たりする。それをば騷ぎにまぎれて窓から外へ投げだす。喧々囂々。

もうさうなると、誰々が食事がすんで誰々がまだすまなかつたのだか分らなく成る。要するに誰も皆食事は未完成だ。もう一度食べなほす事に成る。賄ひはさま〳〵に詫びて大急ぎで炊きにかかる。猛者連は互ひに角力をとり又はグラウンドを驅け廻り又はボールを投げたりして更に食ひ直さんが爲めの腹減らしに努力する。

右は明治の中頃までの間、東京の學生間に行はれた賄賂征伐のスケッチであつて、目下、勅任官と成り又は銀行會社の重役と成り博士と成り大學教授と成つて、鹿爪らしく治まつて御座るお歷々の大多數は、其昔寄宿舍の此賄ひ征伐に於いて、眞劍にして滑稽なる茶目振りを大に發揮した歷史を持つてゐるのである。

實際あの頃の學生生活から食氣の話を除いたら、後に何が殘るだらう。友人たちの逸話として傳へられるほどのものは、一つとして食氣に關係のないものはなかつた。三度の食事を五郎八茶碗にこて盛りで五六杯も平げて置き乍ら、學校が退けておやつ頃に成れば、はや口元淋しく、常にコムパニーといふことをした。皆でくじを引いて錢を出し合ひ錢を免れた者にはお使

ひのくじが當る。そして餡パンだの餅菓子だの焼芋だのを買つて食べる。夕食後、食べ過ぎたからとて腹ごなしの散歩に出で、しばらくする中に腹がこなれ過ぎてしまひ、歸り路にはそば屋へ寄る。そば屋を出て又汁粉屋へ入る。芝の二本榎にはルビコンと呼ぶ細暖簾があつて明治學院の學生の常に行く所となつてゐた。名前からいふと大にハイカラだが、實は俥夫の内儀さんが内職にしてゐる駄汁粉屋で、きたなくもありまづくもあつた。私があすこへ入學して間もなく友人の一人が「ルビを食ひに行かうや」といふ。ついて行つてみると駄汁粉だ。友人は何故この汁粉屋をルビコンと云ひ汁粉をルビといふかの由來に就いて私に語つていふには

「君、ローマのジュリアス・シーザーがルビコン河を渡つた時のことを讀んだらう。ゴールの征戰から引き返してローマへ攻め登る時、流石のシーザーも前に大敵を控へてこのルビコンを渡らうか渡るまいかと躊躇したんだ。けれども一旦決心して The die is cast! と叫んで此河を渡り敵軍を一蹴してローマに入つた。所謂 I saw. I came. I conquered. さ。」

「それがこの汚い汁粉屋と何の連絡があるのだい」

「まあ、聞け、そこでこの汁粉屋はだな、あんまり汚いからシーザアでも入るには躊躇するよ。だが食べずに歸るわけには行かず、思ひ切つて飛び込むんだ。よくルビコン河と似てゐるぢやないか」

今尚ほ二本榎にあのルビコンは存在するや否や。兎も角も當時あの學院の學生にしてルビコン河を渡らぬ者は一人も無かつたであらう。

料理屋で上野山下の雁鍋など繁昌し田舎まで其名が聞こえてゐたから、上京すると間も無く花見に出た歸りに兄や親戚の人たちと共に寄つて見た。花見時のせいも有らうが、成程評判に違はず立て混んでゐた。しかしこの雁鍋も最早その頃盛りを過ぎてやゝ下り坂に成つてゐるとか、同席の客が語つてゐた。

一般の人々、わけても學生がよく行つた食物屋は牛屋であらう。いろはといふのが殊に名高く、到るところに支店を持つてゐた。いろはに肖せていろけといふのが有つた。或は私の見損ないかも知れないが兎に角いろけと記した招牌をかゝげた牛屋が有つた。牛込神樂坂の今の二等郵便局のあたりにも二階建のいろけが日露戰爭後まであつたと記憶する。

前よりは高く成つたと人々は言つてゐたけれども、それでも食盛りの學生が三人で行つて酒を少々飲んでも一圓五十錢もあれば拂ひに差支へることはなかつた。

西洋料理は牛屋と較べて数も遙かに少し、また繁昌しなかつ

た。一品料理屋といふものもなく、たま／＼洋食店があればまづ堂々としたもので、また私達、客は自分の好きな物だけ二三品取つて食事するといふやうな事も知らず、萬事不馴れで、少さく大人しくしてゐて、ボーイの運ぶまゝに必ず定食を食べねばならぬやうに思つてゐたから、その上エチケツトを無視するほど大膽でもなかつたので、誰も洋食の卓に向ふ事を多少億劫がる傾があつた。定食は一圓か一圓二十錢位で幾皿も運ばれ、私などには何うしても一人前の定食は食べきれなかつた。近年萬事氣が利いて來て、胃袋の小さい日本人に對し西洋人並みの分量を供給して困らせるといふ事がなく成つた。家に依つては氣が利きすぎて定食だけではとても腹に足らず、出てから又何か食べ直すことが珍らしく無いが、以前には多量のために困惑させられたものなのだつた。時代と共に何も賍もちがふ。面白いものではないか。

酒を飲む學生は可也有つたらう。若い學生はさうでも有るまいが、當時は大人のやうな老學生が多かつたから彼等は多分飲んだにちがひない。酒を飲んで東洋風の豪傑を氣取る。さういふ學生は殊に多かつたらう。併し學院はミツシヨンスクールであるところから、酒と煙草と小説とは絕對に禁じられてゐた。それでも小説くらゐはこそ／＼讀む分には問題にされるやうなことはなかつたし、又小説でも西洋の小説ならば大びらで讀めた。酒は寄宿舍の中に二三人をのぞいて殆んど飲まうとする學生はなかつたし、又會は多かつたが酒をのまずに菓子パンと紅茶くらゐですませた。會は一週に一度づつきまつて金曜日にある文學會、火曜日にある青年會の他に、クラス／＼のクラッスミーテイングもあれば寄宿舍の親睦會もあり友人の送迎會もあり、新入生の歡迎會もあつた。併しいつもドライだつた。恁ふいふ乾いた會に、他校から四年五年に轉じて來た學生は不滿をいだき、彼等ばかりでアメヌキ會と云ふのを開き、學校の問題になつたことがある。アメヌキとは會の始めに聖書を讀んだり禱りをしたりして、しまひにアーメンと云ふのを拔きにすると云ふ意味で、ミツシヨンスクールとしては反逆の徒を以て見られて居るわけだ。

煙草は喫つてはならぬ事になつてゐたが、公然喫ひさへしなければお咎はないので、散歩にでも出れば卷莨を吹かしながら歩いた。又は便所へ入つて喫ふ者もあり、便所の窓から煙がフワ／＼出ると云ふやうな滑稽も珍らしくなかつた。それはいゝが、學科をエスケープして來て、ベツドルームへ隱れて喫ふ煙草が一番危檢だつた。私のゐる間に三度まで寢室から火事が出たが、これは皆な煙草の火だつた。幸にして大事に到らず消し

止めたが、併し最後に明治四十五年の夏、たうとうやはり煙草から出た火事で、その寄宿舎は全燒した。ドクトルヘボンが初めて英和辭書を編纂し、その原稿料金三萬圓を寄附して來たので、その金を全部投じて明治初年に建てた大建築で、五階に物見の塔があり、大小二十八室にそれぞれ別に一室づつベッドルームを持ち、地下室も相應に廣いものだつた。寄附者の名を記念するために名づけてヘボン館と云つた。不思儀な事にはこのヘボン館が燒け落ちたと同時に、亞米利加でヘボン老人が病死した事だ。

それはさて措き煙草の事だが、當時まだ官營にはならなかつた時代で、岩谷天狗だの村井兄弟商社だのが雄飛してゐた。岩谷は銀座二丁目あたりに表を赤く塗つた建築物の高いところに驚く勿れ稅金十萬圓と書いて通行人を威嚇し、その後三十萬圓と書換へ更に五十萬圓と書換へなどして、人々を驚かした。その岩谷の悴も學院の學生でわれわれと同級生だつた。だが私達の友達に岩谷の天狗煙草を喫つてる者は殆ど見掛けなかつた。皆がよく喫つてゐた煙草はピンヘッド、オールドゴールド、ヒーロー、などの兩切煙草で、價は三四錢のところ、又ホークは僅かに二錢で、中に奇麗な繪が一枚づつ入つてゐた。それを澤山集めてるうちにトランプのカードが揃ふと云ふやうになつてゐた。三四年程經て日露戰爭に近い頃口附が流行し出した。中でも菊世界は最も多くの顧客を持つてゐた。其他常盤だの、又岩谷から新に出した日の出だのも可なり喫まれた。價は四錢五厘だつたと思ふ。それが戰爭中に官營になると丁度菊世界くらゐにしか喫めぬ敷島が八錢、その下の大和が七錢、朝日が六錢、山櫻が五錢と云ふやうな値上になり、山櫻などいふくさくつて迚も喫めなかつた。

煙草は此頃長きせるで刻みを喫つてる人々など都會では殆ど見掛けないが、以前には學生でも豆煙管と莨入を學校へ携へて來て、休時間にスパ〳〵やつてるものが幾らもあつた。町の人など專ら刻みを喫ふのが多く、朱羅宇の長煙管は何處の家庭にも有つた。脂下るとか、雁首を挿げ換へるとか、云ふやうな煙管から出た言葉は今も尙ほ殘つてゐるが、もう少し時代が經つたらさう云ふ言葉の意味は分らなくなりはしまいか。と思ふほど、近頃きざみを吸はなく成つた。

水戶の花魁が初めて賣り出したとか、揚子の先で細い字を雲井とその源氏名を書いたとか言ひ傳へた「雲井」といふきざみは、隨分私の子供の時から見馴れた品だが、東京の赤い暖簾の煙草屋でも、之を賣つてゐた。小さい一袋が二三錢のものだつた。

五

學生の樂みは食物の外には讀書だつた。その頃の學生は今の學生程に社會の事情には通じなかつたけれども、本だけはよく讀んだ。本を讀むのゝ嫌ひな學生も、演說位は眞面目で聽いた。本屋の數も今よりは遙に少なかつたし、本も今と比べると樣な本が無かつた。實に下らない本が大部分を占めてゐた。洋書は勿論讀む者も少なく、賣る店も少なかつた。今だと洋書を輸入する店は丸善を外にして何軒あるだらう。歐洲大戰爭の結果としてフランス語が可なり盛んになつたので、三才社佛蘭西書院等の輸入書肆が人に知られて來た。だがその時分には本郷へ行つて南江堂と呼ぶ獨逸本の輸入書肆があつた外に、日露戰爭頃から駿河臺下の中西屋が洋書の取次店を始めた。それは人も知る通り今の丸善支店と成つたが、あの頃には中西屋はやつとウエブスターのポケツトデイクショナリーを翻刻した位の程度で、目に立つやうな書店ではなかつた。丸善も震災前の丸善とは似ても似つかぬ舊式の店で、勿論日本風の店だつた。疊が敷いてあつて番頭さんが火鉢を抱えて坐つて居つた。私はそこへゲテーの「ウエテルの悲しみ」の英譯などを買ひに行つた覺えがある。それから震災前の建築になるまでは、何度か改築されたのだ。

神田の小川町から神保町へ掛けては、今と同じ樣に古本屋が軒を並べてゐた。電車は無く道幅は極めて狭い通りで、日曜に其處を通ると兵隊さんと學生とより外には、人の姿は見られぬ位だつた。更に古本屋の前には兵隊さんの讀む程度の書物が多かつたので見ても、書物の內容が略々推定出來よう。和綴の本と洋綴の本とが半分々々位に何處の店にも置かれてあつた。その洋綴の本即ち新刊書が私のいふ內容貧弱なものを以て滿たされてゐたのだ。と云つても私は文學書の外は知らない。當時の文學書の文章は主に漢文直譯體のものが多く、言文一致のものなど極めて僅かな小說の外には殆ど見られなかつた。

その時分の學生の間に最も廣く讀まれた本は志賀重昂氏の「日本風景論」などであつたらう。殆ど何處の古本屋を見てもそれがあつた。東海散史の「佳人の奇遇」は何の彼のと評判はされてゐたが、本屋の店頭に見ることはもう無かつた。經國美譚や雪中梅などの時代はもう一昔以前の事であつたのだらう。さう云ふものは學生は知らなかつた。德富蘆花氏の不如歸が書物として店頭に現はれたのが多分三十二年の夏頃であつたらうか。私はそれに付て一つの縮尻話を持つてゐる。

私は豫て友人達が不如歸を激賞し合ふのを聞いてゐた。そし

て暑中休暇に歸省するに際し一寸本屋の店頭に立つた時その事を憶出して、不如歸はないかと聞くと、ありますと云つて渡された。それは薄いけれども潇洒な意匠の菊判の本だつた。急いでゐたので能くも見ず其儘停車場へ携へて行き、汽車が動き出してから開いて見ると、それは正岡子規の編輯してゐた俳句雜誌のホトトギスで虚子だの鳴雪だの碧梧桐、鼠骨などが執筆してゐた。私は其中から友人達が激賞するやうな面白い小說を發見する事が出來なかつたので、さうかと云つて間違つた本を買つたのも知らず、變に戸惑ひしたやうな感じがしたが、併しそれを讀んでしまふまでにすつかり其人達に引付けられてしまつた。これが緣になつて翌年歸省するときには、間違でなしに子規の「墨汁一滴」だの、「病床六尺」だの云ふ隨筆集を求め、熱心な愛讀者になつた。又その人達の蕪村講義なども發行される度に求めた。そしてホトトギスも飛々ながら購讀したので、夏目漱石の「我輩は猫」でも、鈴木三重吉の「山彦」でも虚子の小說、野上八重子の小說などでも皆其中から讀むことが出來た、併しそれは七年も八年も後の話だ。

秋になつて再び上京してから私は德富蘆花の不如歸と間違つてゐたことを知り、それをも購讀した。それは二十六版だつた。一夏の間にそれだけの版を重ねたので其の評判は素晴しく、徹夜して私も、又私がそれを貸した友人も、涙ながらにそれを讀了した。

その後蘆花の「思出の記」「自然と人生」「黑潮」などが次々に出版せられたが、學生達のそれに對する歡迎は殆ど狂熱的だつた。「思出の記」は學生が買ふ小說としては可なり高價なものだつたが、本屋の店頭に現はれるのを待兼ねて、買つて來ると直ぐ讀み出して、一氣に讀了した。

けれどもミツションスクールであつた爲か、私の教師や先輩は、私が小說を耽讀するのを好きなかつた。「もつと有益な本を讀み給へ、圖書館に幾らもあるから」と上級生から屢々忠告された。學院の圖書館には當時一萬冊ばかりの藏書があつた。神學などの宗教書が多く、私達の學力では分らなくもあるし、又は讀んでも詰らないものが大部分を占めてゐたが、それでもスタンレーの Dark Afurica だの、リヴイングストンの傳記だの、その當時評判されてゐた著述は可なりあつた。又はマクミラン會社出版の English men of letters のシリースや、ロビンソンクルーソー、アラビヤンナイト、バンヤンの天路歷程など、われわれに讀めるものもあつたから、それ等を引出して來て讀むこともあつた。

だがその時分公然と讀むことを許され、又皆が爭つて購讀し

た書物は内村鑑三の著述だつた。曰く小憤慨錄、曰く求安錄、曰く警世雜著、曰く「予は如何にしてクリスチヤンとなりしや」其他彼が主幹であつた獨立評論と云ふ雜誌は、毎號その發行を待兼ねて書店へ催促に行つたものだ。その興亡史論又は感想などは、私達の血を湧かせ、眠ることも出來ない程昂奮させた。寄宿舍の内にも内村崇拜の連中は隨分あつた。内村鑑三氏が演說すると云へば辨當をブラ下げて、神田までテク／＼歩きで行く連中が一團體を成してゐた。私達の文學會では、内村氏に乞うて講演に來て戴いた事もあり、又内村氏の推薦で當時亞米利加から歸朝した新渡戸稻造氏に講演を願つた事もある。その前にした内村氏の講演の中に新渡戸は僕の友人だが、僕よりも偉い男だ。と云ふ意味の言葉があつたので、私達の新渡戸氏に對する憧憬は狂熱的のものだつた。だが講演そのものは左までゞもなかつたが、新渡戸氏の坐談は確かに私達をして崇拜者とするに十分だつた。其内に新渡戸氏の英文武士道が出た。是が又世間一般に狂熱的の歡迎を受けた。私達のクラスではこれを譯讀の教科書にさへも用ゐた。

松村介石と云ふ人の「立志の礎」と云ふ書物が隨分世に歡迎されたが、それは私の上京以前の事であるらしい。私は又彼れの保羅傳をも讀んだが、もう彼れの著述は私達を引付けるだけの力は無かつた。たゞあの人の雄辯と熱誠とはまだその時分でも聽衆を甚しく感激させた。私は松村氏が美土代町の神田教會でナポレオン傳を講演するのを聽いたことがある。聽講料は僅に五錢だつたが、聽衆は堂に溢れてゐた。連夜續いて二時間位づつ講演したので、私が聽いた所はナポレオンがエルバ島から逃れて再び巴里に旗上をする、ネー將軍が共和政府の命令を受けてナポレオンを途に於て捕縛しようとして、僅か三人のナポレオンの一行に對して十二萬人の大兵を擁して出掛けたにも拘らず、あべこべにナポレオンに威服され懷柔されて、十二萬人の兵は悉く皇帝萬歲を叫び、ナポレオンの麾下に屬して再び巴里に乘込むと云ふ一節だつた。松村氏の舌端から描かれるこの英雄の面影が、恰も名優が劇場でそれを演ずる如く、まざ／＼と私達の胸に訴へて來て、今尙ほ記憶に新である。雄辯の力も亦偉いものだと思ふ。

これで見ても人生はたゞ感激だ。感激は何時までしても心に消えることは無いけれども、一度物質の形を執つた書物と云ふものと成ればその運命の如何に儚ないものであるかは既に震災前に神田の何處の古本屋の店頭を見ても、「立志の礎」も「日本風景論」も、英文武士道も、内村鑑三氏の多くの著書も、殆ど見ることが出來なかつたのを見ても分る。あれ程までに擴がつ

てゐた武士道が、まだ大正五年頃までは稀に見ることが出來たのだが、もう震災前には殆ど見當らなかつた。人に死んでも書物ばかりは永久的のやうに考へて居たが、書物の生命も案外短かいものである。

六

その當時でもやはり文學書生は學校から嫌はれてゐた。一般の學生が内村鑑三氏や新渡戸稻造氏に隨喜渇仰してゐる時に、一方に文學書生と云ふものがあつた。寄宿舍の中で文學書生は幾人も無かつた。一方には幼年學校へ轉じたい希望を持つて居る者や、海軍兵學校濟陽學校等を望んで居る即ち硬派が少數あつたと同樣に、文學雜誌を購讀したり、舍監の目を掠めて、貸本屋から紅葉露伴の小說を借りて來る軟派もあつた。硬派が野球の試合やら端艇やらに夢中になつてゐる間に、軟派はロングフェローやテニスンの詩集の翻譯などを試みてゐた。又は讀めもしないのにラスキンの近世畫家傳を圖書館から引張り出して來て机の上に積んで置いたりした。文學青年は其頃でも蘆花の小說などは通俗とけなしてゐた。彼等が頻りに紅葉一派の小說を推薦して、金色夜叉なら君等にも分るだらうと云ふので、私はその時分既に本になつてゐた二冊ばかりを貸本屋から借りて來て讀んだ。けれども左程私達には伽羅枕だの三人妻だの大江丸だのと云ふ小說の味ひは全く分らなかつた。拈華微笑だの、安知戀武林だの云ふものゝ味さへ、又は多情多恨、不言不語の味さへもまだ若い私達には分らなかつた。それに比べれば樋口一葉の一葉全集は文章はあの通りの源氏系統であつても、その意味は單純なわれわれに理解も出來れば、共鳴も出來た。文壇の最高權威者坪内博士の桐一葉、文學その折々は購讀した。森鷗外の水沫集は西洋文學の翻譯であり、あゝ云ふ硬い文章でありながら それもわれわれに理解出來た。幸田露伴の二日物語、五重塔、髭男などは當時 の文壇に評判の高かつたものだけれども、學生などの間には讀まれては居なかつた。風流佛、大詩人、いさな捕りなど一般學生の間にその名さへも知られたかどうか。たゞ露伴と云ふ人の評判のみは高かつた。誰も其名は知つて居ただらうが、それは寧ろ山田美妙などの評論に依つて其名を知られた位のものだらう。

一部の學生の間に與謝野鐵幹の明星と云ふ歌の雜誌は引張凧にして讀まれてゐた。その挿繪が又新味に富んで若い學生を引付けた。その當今のやうに學生を引付ける雜誌は獨立評論などを措いて餘りなかつた。文學雜誌は微々として振はなかつた。雜誌と云へば博文館の雜誌が全盛時代であつたであらうが、學

院の寄宿舍に博文館の雜誌をひねくる學生を見なかつた。その位ならレビユー、オブ、レビユー！ス又はアウトルツクでも擴げてゐた。泉鏡花は一時代新らしく、その小說など學生の間に三十四五年頃からそろそろ讀まれ始めてゐた。そして日露戰爭前後に掛けては、文學書生の間に鏡花熱を作るまでになつた。私など明治作家の創作を讀んでさう惑溺した事もなかつたが、鏡花のものばかりはどんな小さい雜誌にある短篇でも、田舍新聞に載つたものでも、悉く見脫すまいと努めた位だ。だが私は決して文學青年ではなかつた。たとへ文學青年であつても、それは硬派に屬してゐたが、同じ寄宿舍の中には私と同樣、硬派に屬する者のみが多く、軟派即ち純文學派の學生は極めて少なかつた。そして彼等は鼻つまみにされた。

多數の學生はその以前から精神的の洗禮を受け始めた。聖書の言葉で云へば「聖靈鴿の如く降り」とある如く、學生殊に宗教學校にゐた我々の間にリバイバルが起つた。教師も學生も狂熱的に信仰に導かれて行つた。サンダム館の裏の谷の熊笹の中へ潜り込んで、溜息を吐いてアー！メンと獨語してゐる青年を見ることも珍しくなかつた。夜半に起上つて五階の物見へ登つて祈をしたり、寢室のベツトの上にゝづくまつて、薄暗い窓の明りに聖書を讀んだりした。こんな事が一年程續いてから東京市內の教會に大學傳道と云ふことが始まつた。何處の教會でも表に高張提灯を點け、高張提灯を持ち、又或者はサンドウイツチマンになつたりして、通行人を呼止め教會へ引張込んで無理矢理に說教を聽かせ、その信仰を追窮して無理往生に洗禮を授けた。さう云ふ事のために働いた人々の多くは學生だつた。これより十年程後に自然主義と云ふものが文壇を風靡した時分に、その自然主義派の文士の大多數は、これより以前か又はこの時代に一度は耶蘇教の洗禮を受けた人々であつたのも、又一個の奇觀であつた。

東京で上げたリバイバルの火の手は地方にまでも波及して、どんな田舍にも大學傳道が行はれ、東京から各教會派の名士、海老名彈正、植村正久、江原素六、留岡幸助、安藤太郎と云ふ如き人々が派遣せられて、多くの青年に洗禮を授けた。基督教もあの勢ひでズンズン進んだならば、もう今頃は疾の昔に日本は西洋以上の基督教國になつてゐたであらうが、日露戰爭に遭つてピシヤンコと潰れてしまつた。基督教も社會主義も、すべてさう云ふ思想上の運動は、日露戰爭に遭つて悉く破滅した。

七

新聞はまだ夕刊と云ふものは無く、種類も少なかつた。書生

の讀む新聞は讀賣新聞、東京毎日新聞、國民新聞などで、それらに次いでは朝日と時事と日本新聞も讀まれた。東京毎日は島田三郎が社長兼主筆で社は銀座尾張町の交叉點にあつて、報知新聞と對ひ合つてゐた。島田三郎の書く論說は漢文くづしの硬い文章であつたけれども、學生の間によく讀まれ、隨分人氣があつた。日清戰爭頃までは論說は雜報以上に讀まれたものださうだけれども、明治三十年代に入つては青年は誰も新聞の論說など目を通さなかつた。たゞ日本新聞の論說と東京毎日の論說だけは權威があつた。東京毎日には城北隱士と云ふ人が長い續き物で人物評論を書いてゐたが、これ等もよく受けた。萬朝報はまだ赤新聞だつた。これには黑岩淚香の探偵小說、例へば「幽靈塔」の如き、又はエッチ・ヂー・ウェルスの科學小說の抄譯「二十萬年後の世界」だの「月の旅行」だの云ふ構想奇拔なものや、又は三十六年頃からユーゴーのミゼラブルを噫無情と題して連載した。これ等はなかなか學生の間に受けたもので、その時分から萬朝報は急に發行部數を增し、日露戰爭頃には模範新聞と云はるゝまでに編輯振がしつかりして來た。ハイカラと云ふ言葉などの始りは多分萬朝報だつたと思ふ。勿論それは今のやうに淸新を意味する趣味の形容詞として使はれたのでなく、新しがりの生意氣の西洋カブれをした者を攻擊する意味で使はれたのであつた。松本君平、望月小太郎、竹越三叉などがその代表的氣障男としてよくやッつけられたものだ。萬朝には又幸德秋水、內村鑑三、境枯川、其他青年の間に人氣のあつた人々が入社し後に淚香自身も小說以外に人生問題を論ずるやうになり、萬朝報は一個の精神的團體と化した。これも學生新聞となつた理由の一つだらう。二六新聞もいつの間にやら萬朝報と對抗する帝都の二大新聞の一つとなり、明治三十六年頃の文壇唯一の流行兒泉鏡花の小說「[illegible]」が載せられたり、又齋藤綠雨も入社して例の辛辣な警句が毎日少しづつ現はれた。佐々木信綱も毎日二首位づつ和歌を投稿した。廉いことも廉かつた。一ケ月の購讀代が僅かに十五六錢だつた。この二六新報は日露戰爭の最中に社長秋山定輔が露探の嫌疑を買ひ、露探事件として、可成り有名だつたが、新聞はその爲に一大頓挫を來した。讀賣新聞は紅葉の金色夜叉や小杉天外の小說に梶田半古の挿繪を入れて學生にひどく受けた。中にも魔風戀風の如きは若い學生を心醉させるに十分だつた。それは日露戰爭の前後かと思ふ。恰も早稻田が初めて大學の看板を掲げて世間の注意を引き、それと同時に、女子大學も初めて目白へ出來た時分で、何かと云ふと問題にされてゐた時分だつたので、

早稻田田圃を目白へかけて

飄風戀風そよそよと

と云ふ俗謡さへ出來たくらひだ。幸田露伴の「天打つ波」と云ふ長篇小說、これは尻切れ蜻蛉で終つたが、大變な人氣だつた。又露伴の出廬と呼ぶ長詩も隨分長く連載された。坪内博士が匿名で高山樗牛のニイチエ主義を揶揄した馬骨人言も多分讀賣に出た。から云ふことで讀賣新聞は學生、殊に文學學生の中に深く根柢を据えた。時事新報は福澤諭吉翁が三十四年の春頃長逝してからも、やはりその上品な編輯振と正確な記事との爲に上流社會に信用を得てゐた。報知新聞も日露戰爭頃には本所新聞として多くの家庭に入つてゐたが、これ等は何れも學生には緣が遠かつた。村井弦齋の食道樂と云ふ讀物は何處の家庭でも大受だつた。

東京パックと呼ぶ漫畫雜誌が日露戰爭頃から世に現はれて、素ばらしく歡迎された。北澤樂天氏が主幹であつたが、その時分の人氣政治家後藤新平、桂太郎、などは殆ど毎號出て來てその和製ルーズの鼻眼鏡と、ニコポンの才槌頭とで紙面を賑はした。社會漫畫としてはハイカラ木戸郎だの、金輪梨郎だの、角帽太郎、海老茶式部など毎號出て人の頤を解いた。三十五六年頃からミルクホールと云ふものが廣く流行り物になつて、何處にも出來たが、別けても學校の周圍には澤山出來た。牛乳の外にジャム附パン、又はバタ附、バタと云つてもそれはマーガリンで迚も鼻持ならぬ程臭く、今の學生なら一口も喰べることが出來ないものであらうが、其頃の學生はよくミルクホールへ入つた。そのミルクホールにはいつも官報と東京パックとが必ず附物であつた。

八

日露戰爭の後には人々の考が個人主義的に目覺め、進んで歐洲大戰頃からは社會的に目覺めて經濟問題を惹き起して來たのに對して、日清戰後には世間一帶の考へが精神的に趨り、宗教道德問題が世に喧しかつた。教會の中に起つたリヴイヷルは、三十六七年日露戰爭が突發するまで。月々に盛んになり、遂には教會の外まで出て今の救世軍のやうに信者は男女共街頭に立つて讚美歌を唱ふやら、說教するやらした。出版物にも精神修養的のものが最も多かつた。前にも言つたやうに新聞でも萬朝報の如きは、宗教倫理問題を說くことが盛んであつたし、又方々に開かれる演說會講演會の如きも宗教問題を說くものが最も多かつた。社會主義と云ふものも三十五六年頃に一時熾んだつたが、これを宣傳した連中も、ユニテリアン教會に集る人々で、木下尚江の如き、安部磯雄の如き、純然たる宗教界の人だつ

た。高山樗牛が平清盛論を草し、「姉崎嘲風に與ふるの書」を書き、ニイチェ風の本能滿足論を主張すれば、これに對して坪内博士は通俗倫理を著はし、公徳を宣傳し、遂には姑く筆を文學に絶つて倫理の講義に沒頭したものだ。姉崎嘲風は獨逸より歸つて「復活の曙光」を著はし、綱島梁川は病床に在つて「見神の實驗」を叫んだ。丁度今日の學生が社會問題、經濟問題に耳を傾けるのを喜ぶが如くに、その時分の學生は宗教問題倫理問題に沒頭してゐた。そんな事の嫌ひな學生でも、又は宗教など柄にない人間でも、教會によく出入した。時代精神と云はうか兎に角其頃の流行り物だつた。

之より先き一高の秀才藤村操が失戀の結果、木を削つて巖頭の感なる辭世の一文を草し、日光の華嚴の瀧へ投身した。これは隨分學生ばかりでなく、社會一般のセンセイションを刺戟した。ホレーシオの哲學も何等のオーソリテイーに値するものぞ、などと彼れの巖頭の感を暗誦してゐた人々は幾らもあつた。從來人々の自殺の方法は縊死投身に次では鐵道往生、又學生はモルヒネ自殺などが多つたが（猫入らずはまだ其頃賣出されてゐなかつた）此時から自殺の方法に一新機軸を開いた。華嚴の瀧へ行つて投身自殺する青年學生はあれ以來殆ど毎月のやうにあつた。あまりにさう云ふことが續いたので、日光の警察署はその死體を引揚げる費用の莫大なのに惱まされ、私が見物に行つた時分には瀑布の岸に柵を設け、容易に近づけぬやうにしてあつた。又少しく素振の怪しい者には警官が尾行して注意したとも聞いた。その投身自殺も年經て稍々月並だと人々の冷笑を買ふ頃になると、今度は方角を變へて淺間の噴火口へ投身するものが出來た，それも可なり模倣者が續いた，だが要するに彼等は恐く藤村操の弟子と云つて差支あるまい。藤村操は一高の秀才であり、眉目清秀の美少年であり、殊にその巖頭の感が美文であり、良家の子弟であり、死の原因がプラトーニツクラブの破綻であつたので、一世の同情を引いたのだ。

私が東京へ出て來た明治三十二三年頃の學生の風俗は前に言つた通り短褐弊袴式であり、その趣味は腹一杯喰べる事にあつたが、それから三四年後の日露戰爭前迄には、この通り學生の氣風はローマンチツクになり、センチメンタルになつてゐた。

煩悶と云ふことが青年學生の間に非常に流行した。皆がよく煩悶してゐた。神經衰弱と云ふやうな事も、學生の中にこの時分から流行り始めた。男色の如きは廢れた。薩摩の學生を模倣することも忘れた。下駄の鼻緒はレザーとなり、又小倉にしてもズツと細くなつた。紋附は廢れて兵兒帯は幅廣のモスリンと

なつた。メンネルの襯衣はメリヤスと變つた。髮を分けてコスメチツクをこすりつけブリランチンを注ぐことなども始まつた。

女學生は女子大學の出來た頃から世間の表面に現はれて來た。海老茶の行燈袴を穿き、前髮をズツと前に突出した所謂庇髮に結つて三々五々道を行く女學生の姿は人々の注意を引いた。その後漸く髮の樣式に幾分の變化を加へ、庇髮を高くしたので、世人これを順旅口の難攻不落の砲臺に譬へて二百三高地と呼ぶに至つた。リボンを髮へ結び付けることも此頃の大流行だつた。そして其言葉はてよ、だわ式、彼等の中に同性の戀おめごつこと云ふものさへも始まつた。暁堂流の文字で繪葉書を遣つたり取つたりすることが、彼等の學課外の學課となつた。

女學生の中に編物なども流行り出した。絹糸でいろいろの形の抜折（しをり）を編んでそれを人に贈るとか、又は肱附などを編みもした。カタン糸と云ふ安ツぽい絹糸まがひの糸が出來たのもその結果だらう。女學校の中に割烹と云ふ一科も入れられて、西洋菓子の造り方から御料理の事まで教へる樣になつたが、どの程度まで實用化されたか、恐らく編物と同樣、式部たちの遊戲の一つであつたらうと思ふ。

九

日露戰爭前後までの學生は今日の學生のやうにカフエーの樂みも、銀ブラの味ひも知らなかつたけれども、又音樂、美術、演劇等に今程惠まれてゐなかつたけれども、住居と云ふものは樂々と得られた。下宿料も無論安かつた、下宿屋では歡迎して呉れた。そして其上に素人下宿と云つて、普通の家庭で學生を下宿させることが此頃の流行になつてゐた。たまたま道を歩いてゐると貸間ありと張札をしてゐる家は何軒も目に着いた。又は大學生なら間貸をしたいと云ふやうな廣告が新聞の人事欄に毎日のやうに出てゐた。その頃の川柳に「貸間あり賄附娘附」などゝあつた位で、阿母さんと娘くらゐの寂しい家庭で、誰も男がなく、淋しいから學生でも置いたらばと云つて置くやうなのも定めし多かつたらう。下宿屋で出すお膳のやうに見て呉ればかりで內容貧弱の品數をゴタ／＼附けることはないけれども娘さんの誠意の籠つた御馳走は又格別で、否、そんな娘さんなど無い家であつても、無論下宿屋よりはいゝ物を喰べさせて、感じが好くて、そして宿料も安く、下宿屋が九圓十圓する所は素人屋ならば五六圓だつた。數多くの中であるから、その家の娘と學生と末は夫婦になつた者も亦可也あつたらう。さてこそ

こんな川柳も出來たのである。

十

學生生活に就いて語るところは先づ此位で一切りつけて、私が學生時代に少し許り見て歩いた東京に就いて語らう。電車がまだ無く鐵道馬車が北品川八ツ山下から新橋まで、此間が二區で四錢、それから更に新橋から上野まで三區六錢、上野から淺草を廻り、雷門前から駒形淺草橋を經て本石町まで迂回する線もあつた。それより外の乘物と云へば人力車の外にはなかつた。それにも拘らず馬車は今の電車のやうに混雜する事なく、乘れば大抵腰掛けることが出來た。花見時には滿員だつた。其他の時でも何事かお祭でもあつて混雜すると、婦人の髮から發する臭氣がとても堪らなかつた。女學生だけは束髮が多かつたが、其他の婦人は丸髷、桃割、銀杏返し、島田、と云ふやうな日本髮を結つてゐて、油で固めた髮を長く洗はないと見えて、臭い人が多かつた。一緒に馬車に乘合せても着物から云つても化粧から云つても、とても今の婦人のやうに美しくはなかつた。兩國から須田町まで、又お茶の水から本郷の方へ、圓太郎馬車と云ふガタ馬車が走つてゐた。飯田橋の下から兩國の方へ小さな船が出た。又川蒸氣が永代から吾妻橋まで、吾妻橋から千住まで通つてゐた。當時の人はそれを一錢蒸氣と呼んでゐたが、私が來た時分には既に値上をして一區二錢になつてゐた。そして一錢蒸氣と云ふ名だけまだ殘つてゐた。人力車の數は無數に多かつた。自轉車もなければオートバイもなく、自動車も電車も無いのであるから、交通機關としては人力車に依るより外はなかつたのだ。けれども車代は非常に安かつたもので、尤も學生はどんな遠くへ行くにもテク／＼歩きで、さう乘物には乘らなかつた。私は殊に覺える程わづかしか乘つた經驗を持たないが、神田の三崎町から荷物と一緒に乘込んで芝の白金まで五十錢、或時は上野から友人と二人で合乘と云ふ幅の廣い二人乘の車に乘り、荷物をどつさり附けて、夜、牛込の赤城下まで參十五錢、一人前がわづかに十七錢五厘の割前だ。矢來から神田まで三錢か五錢で乘れた。まつたく嘘のやうに安かつた。

要するに是等が平民の乘り物であるが、貴族ブルジョアは多く馬車に乘つた。ボク／＼と快よく響く蹄の音が聞えると思ふと、黑鴨仕立の別當が馬車より一二間先を走つて人拂ひをして過ぎた。まつたく下にゐろ／＼と云つた舊幕時代を離れることが遠くなかつた心地がする。前には綱を附けて、曳き、後押までも附けて走る車はなかなか威勢が好かつた。日露戰爭時分でもまだ大隈伯の邸内に祝事でもあると、貴顯紳士が招かれて集つて

來たが、彼等は大抵この綱ツ曳俥だつた。そして車は恰も百足の足のやうに道の兩側に屋敷を取り巻いて無數に並んでゐた。自動車と云ふものは日本では大隈伯などが（足が惡かつた爲でもあらうが）一番先鞭を附けた方だと聞いてゐるが、まつたく其町を走るのを見るのが稀だつた。自動車が來ると云へばミルクホールで新聞を讀んでゐた者が、新聞を投げ出してわざわざ表まで馳け出し、その走り過ぎた後姿の中に立つて自動車の後姿を物珍らしげに見送る位のものだつた。

私は鐵道馬車に乘るのが樂しみの一ツだつた。それは私ばかりでなく若い學生の多くがさうであたらう。寄宿舍にゐた一人の學生が泉岳寺へ遊びに行つて、前の通りを走る鐵道馬車を見ると急に乘りたくなり、用もないのに馬車を呼び止めたが、嚢中わづか一錢五厘しか持つてゐなかつたので、それでは一區乘るにまだ不足だつたものだから、「どうか一錢五厘だけ馬車に乘せて呉れ」と別當に頼んだと云ふ珍談さへもあつた位だ。

勸業場といふものが丁度活動寫眞のやうに市内の賑やかな町の彼方此方に在つた。今新橋際にある博品館などその遺物の一ツであるが、上野にもあれば神田にも牛込にもあつて、散歩に出た人たちは買物は有つても無くつても其處へ入つた。三越や白木がデパートメントストーアを始める以前の事であつたからかも知れないが、兎に角あゝ云ふ雜貨店を見ると云ふ欲望は人々の心にあるものと見えて、勸業場は安ツぽい品を一口に勸業場物と云はれた位粗惡な品物ばかりを並べてあるに拘ず、日夜多くの客を引付けた。中でも神田の南明館東明館などが最も學生の行く勸業場で、五十稻荷の縁日の夜などは肩と肩で押合ひ、陳列棚を見ながら歩くと足を踏まれるくらゐ雜沓した。私なども神田の親戚へ行つて泊つた晩には、必ず小川町を散歩してそして必ず勸業場へ入つたものだが、何を買ふかと云へば鋏齒磨とナイフを一挺求める位のものだつた。

東京の町は暗かつた。東京の中心たる神田でさへ明るいのは猿樂町（今電車の通つてゐない細い道で人から忘れられ様としてゐる）から小川町あたりまで、其外の町は裏通りは勿論表通りも眞暗だつた。道の幅は何處も此處も極めて狹く、小川町も神保町も勿論裏通りと同樣に狹く、賑やかな明るい町とても商店の店頭を照す電氣の光は今よりもズツと少なく、瓦斯を點した家もあり、中には裸の瓦斯の火が燃えてる店もあつた。薄暗いところに人を集めて、尺八を吹く男、又は破れ三味線を彈く老婆もあり、小さな木魚の樣なものをカチ〳〵叩いて阿呆陀羅經やらない〳〵づくしなどに當時の政治や社會を諷刺嘲弄して、群衆から錢を投げて貰ふチヨボクレの男もあつた。例に依

り植木屋が縁日の端には幾町も長く並んで、素見の客を相手に高い値を吹掛けて安く賣つてゐた。芝へ來て三田の通りは三田の銀座と云はれた位だから夜も明るかつたが、ちよつと横へ入るともう眞暗で、フレンド女學校のある聖坂も眞暗、それから長い宮様の屋敷の邊りが又眞暗で、伊皿子へ出てちよつとの間明るいが、再び眞暗になり、二本榎へ行つて又ちよつと明るい所があつて、それから先は東西南北、どつちを向いても眞暗だつた。

私は東京へ來たとき、東京に寺のあまりに多いのと烏の多いのとに一驚を喫した。道を歩いてゐると直ぐ頭の上で木の枝に止まつて烏がガア〳〵啼いてゐる。後には何とも思はなくなつたが、初めは烏啼が惡いと凶變があると云ふやうな迷信が私の子供の時分には一般に信ぜられてゐたものだから、あまり烏が啼くので國に變つた事でもあるのではないか、などゝ氣に懸けたものだ。併し毎日何處を歩いても烏が啼いてゐるので、一月と經たない間にそれを氣に懸けないやうになつた。それだのにいつの頃からか烏は殆ど東京で見られなくなつてしまつた。田甫が無くなつて蛙が喰べられなくなつた爲か、それとも掃除が行屆いて烏の食物が無くなつた爲か、あの時分は山の手のどの邊を歩いても、思懸けない所によく田圃があつた。それに夏の夜など蛙が啼いてゐた。

一時パノラマと云ふものが大分流行つた。上野、淺草、九段の牛ケ淵、そんな所に大きなパノラマ館があつて、日蓮上人利生記だの、川中島合戰だの、さう云ふものを見せてゐた。日露戰爭時分、もう活動寫眞が淺草へは來てゐたけれども、上野にはまだパノラマ館が殘つてゐて、日露戰爭の光景を見せてゐた。前の方に本物の石や木や藁小屋などが置いてあり、又人形の兵隊が鐵砲を持つて立つてゐたりするが、段々遠くなると平面の繪になつてゐるのだが、ボンヤリした光線のために目が胡麻化されて遠近あるやうに見える。私が見たのは旅順であつたか何處であつたかハツキリ覺えてゐないが、何でも戰場の光景だ、戰場と云つた所で大砲が發せられる譯ではなく、人が動く譯ではなし、たゞ似てゐるとか、生きてゐる樣だとか云つて見物人がはやすだけの話で、今の人が見れば實に馬鹿げたものなのだが、そんな物でも絶え間なく縱覽の客があつた。

上野では西郷の銅像がまだ出來てから間もなかつた時なので、見に行く人が多かつた。銅像と云ふものは其後流行り物になつて、猫も杓子も銅像を立てられる樣になつたが、この時代には九段の大村益次郎の銅像と、西郷の銅像の外にはもう一つ向島に櫻組の御大のそれがある位に過ぎなかつたので、人々は

銅像を珍らしがつて見に行つた。

向島も震災前は殺風景な所になり、土堤を行けば砂塵を浴びるばかりだし、船で行けば富豪の邸宅と、バラツク式の工場とを見るばかりで、恰も勞資二階級爭鬪の縮圖であるかの觀がある。があの頃は水戸樣のお屋敷から三めぐり、白鬚、梅若塚まで、花にもよければ青葉にもよく、土堤下は田甫でなければ青毛氈を敷いたやうな草原であり、所々に森もあり、其處まで行くと全く塵の都をはなれた心地がした。今でいふと武藏野鐵道に乘つて飯能あたりまで行つた感じがした。まことにこれ風流隱逸の士、文人墨客の閑居にふさはしく思はれた所だつた。饗庭篁村、幸田露伴、淡島寒月、等の諸氏がその住民であるのも偶然でなかつた。成島柳北の墓も向島にあつた。青い四角な柱型の小さな墓だつた。萩の家主人落合直文が其庭の萩を賞して、永眠の後も墳墓をそこに擇んだと云ふ萩寺も向島にあつた。

船で更に千住大橋近くまで行けば、水は洋々として流るゝが如く止まるが如く、實に平野を行く大河の悠然たる趣を具へてゐた。私はボートを漕いで、芝浦から大川を溯り、向島まで遊んだことも度々あつた。河口のあたりには帆檣林立、大舟小舟が行交ひしてゐるので、其中を漕ぎ拔けるのになかなか氣骨が折れたが、もう兩國から先は氣樂なものだつた。又和船を雇ひ、船頭に漕がせて教會の人たちと船遊をした事もあつた。日暮に鐘ケ淵あたりに漂へば、上汐と流れの水とで押しも押されもせず、船は水面に張り付けられたやうにヂツと動かなかつた。水鳥のたまたま翔ぶ外には四邊りに音もなく、何といふ落ついた境地であつたらう。震災前の向島は東京の中では最もいやな所の一つになつてしまつたが、あの時分には東京の中での仙境であつた

吾妻橋は既に吊橋となつてゐたけれども、その他の四大橋はいづれもまだ昔ながらの木の橋だつた。橋の上には乞食がゐた。張子でこしらへた箱などをそばへ引つけ、又は汚ない子供と一しよに莚の上に坐つて、人さへ見れば憐れげな聲でお辭儀をし「どうぞや一文下さいませ、通りすがりのお旦那樣」と節づけにして、唄ふが如く愬ふるが如く、物乞をする乞食の群があつた。橋の近所に荷揚人足船頭相手の居酒屋や、駄汁粉屋などが、何軒か必ずあることは、今も昔も變りはない。

橋で思ひ出したが、大川の橋さへまだ木の橋であつた位だから、市内のどこの橋も木造だつた。たゞ萬世橋だけは石を眼鏡の形に積んで、二ツの穹窿があるために人呼んでめがね橋と云ひ、田舍からの見物客など、物珍らしさうに覗くのであつた。

十一

明治三十二年の春四月、私は東京へ來て間もなく、親類の人達から歌舞伎座行を誘はれた。團十郎が今度は一世一代ださうだから觀に行きませんか、さう言はれたので今見なければ再び見ることは出來ないと思つて行くことにした。何でも今度は見物料が馬鹿に高いのだと云ふので、一層評判だつた。僕等の學資が一ヶ月八圓の送金を受けるならば、可なりゆつくりしてゐられた時代であるのに、歌舞伎座の此日の上等棧敷は八圓五十錢と云ふ高値で、平土間五圓八十錢、外に敷物代金五十錢と云ふ、その時分としては目玉の飛出るやうな高値だつた。高値で生意氣だと云ふ惡評も可なりあつた。併しこの時代の市川團十郎の噴々たる名聲は、田舍の隅までも高く聞えて、殆ど優仙として一般社會の崇拜的人物となつてゐた。當時はまだ俳優を河原乞食として頭から輕蔑してゐた時代だけれども、團十郎ばかりは眞面目に尊敬されてゐた。名人と云ふ事からいへば、五代目菊五郎も居たし、中村芝翫も生きてゐたし、市川左團次もまだ健在だつた。けれども團洲は獨特の社會的地位を占めてゐた。この時分か、或はこれより少し後かに、既に伊原青々園氏の筆に殘る市川團十郎の傳記が出版された位だ。伊藤博文や山縣有朋の如き大政治家でも、生きてゐる内から眞面目な著者に依つて傳記を物されはしなかつた。ひとり團十郎のみは伊原氏の如き劇團のオーソリテイーに依つて、在世中に傳記を書かれた。社會の尊敬推して知るべしだ。それ故私は一世一代と聞いて見に行くつもりになつた。その日の狂言は初めが妹背山で、中幕が勸進帳、そして二番目は新版歌祭文、即ちお染久松で、團十郎の役は大判事清澄、次の幕で蘇我入鹿、早變りしてお三輪と成る、勸進帳へ來ては無論武藏坊辨慶だつた。この妹背山といふ芝居は田舍でもよくするが、大抵入鹿の館お三輪殺しの場ばかりをやつて、吉野川の幕は殆どやらない。私は先づこの舞臺が眞中へ吉野川を流し、その兩岸に家があり、そして右手の家には雛鳥といふお姫樣（福助今の歌右エ門）が白は聞えないが、立つて柱に身を寄せ、身體をもぢ〳〵させてゐる、多分男をでも戀してゐる形なのだらう、すると左岸の家には若い武士久我之助（家橘即ち今の羽左衞門）が坐つてゐた。この邊何か白があつたらしいが記憶しない。暫くすると右と左と兩花道で五代目菊五郎の後室と、市川團十郎の大判事清澄とが舞臺へ出て來る「成田屋ア」「音羽屋ア」と呼ぶ聲が三階の後ろから盛んに始まつた。土間にもそんなことを言つて怒鳴る男が少しはあつた。これも大體私の度膽を拔いた。併し私は勸進帳を見るに

及んで實際團十郎の眞價を知つた。團十郎ばかりではなく菊五郎の富樫の左衛門も詰寄つて問答をするあたりが、何とも知れずよかつた。それでも私の側に見てゐた人は『音羽屋は何をしても器用だが、富樫はやつぱり高島屋の方がいゝ』などと通らしいことを並べてゐたのが私は心憎かつた。だが一般の見物はやはり歌祭文になつて、菊五郎が油屋の番頭善六として舞臺に現はれた時に、みんな大變滿足したやうだつた。義經はいふまでもなく福助即ち今の歌右衛門で、龜井、片岡、伊勢、駿河は猿藏、家橘、染五郎（後の高麗藏今の松本幸四郎）松助等であつたらう。長唄連中の出語りは更に更にこの田舍漢に一驚を喫せしめた。團洲の延年の舞もよかつたには違ひなからう。併し感心するよりも寧ろ私は只々驚かされた。

三崎町にゐた從姉妹が三度の飯より芝居が好きだと云ふ人だつたので、あの邊の安芝居へもあちこちお供をした。三崎町には東京座と川上座とが相對峙してゐた。川上座は名の示す如く川上音二郎が建てたもので、いつも壯士芝居をやつてゐた。こで私は風葉の「戀慕流し」を一幕覗いたことがあるが、役者など殆ど記憶に殘つてゐない。

三崎町の寄席に當時ステヽコ踊で有名な圓遊が出るから行かないかと誘はれて、土曜日の晩に從姉妹たちと見に行つた。圓遊は手拭一枚をいろいろに使ひ分けたりしながら坐り踊といふものをやつて見せた。又その時分のはやりなつてゐたすゐれう節と云ふのを唄つた。圓遊が唄つてはアラスイリヨウ〳〵と兩手を擴げて妙な格好をすると、樂屋で大勢聲を揃へてこれに和し、同じくアラスイリヨウ〳〵と賑やかに囃し立てた。圓遊は鼻の大きい男だつた。隨分當時有名だつたが、それから間もなく死んだやうに思ふ。寄席の木戸錢は六錢位だつたと記憶する。

その翌年に外國語學校へ來てゐた子供の時からの友人に誘はれて、神田の川竹へ圓右を聽きに行つた。何でも火事の大變好きな息子が勘當されて、到頭鳶の者となつてゐたが 數年の後或冬の晩、自分の家の近所に火事があつて、家が危險に臨んだ時に駈付けて、藏の戸前に目塗をするやら何やら働振が鮮かであつたが、後でそれが息子と知れて父母は腹が立つやら嬉しいやら、笑ひながら泣かせると云つたやうな筋の話だつた。この時分には寄席で三題話と云ふものが流行つてゐた。客の方から何に依らず三ツの題を出す。例へば處方と玉子と煙草入、なんでも勝手に三ツづゝ品物の名前を客から注文すると、それに連絡をつけ、即席に小噺をする所に面白味があるのだが、どうもこれは客と高座と馴れ合つて、八百長的に題を出すらしかつた。又

問答と云ふことも流行つてゐた、『一杯の[illegible]を租とはこれ如何に』と云へば『一ッ盗んでも萬引と云ふが如し』と高座は答へる。すべてその調子だつた。學院でも食堂で食事しながら、みんなが盛んにこの問答をやつたものだ。支那人の手品、百面相と言ふやうなものもあつたやうに覺える。

十二

支那人で思ひ出したが　その頃から支那人が大分日本へ入つて來てゐた。瀬戸物の壞れを繕したり、六神丸を賣つたりして廻る支那人はあまり見なかつたが、學生は一年々々殖えて來たやうに思ふ。神田には殊に支那人が澤山ゐた。私たちの明治學院の寄宿舍にも、少數の支那人と大勢の朝鮮人が來てゐた。支那人と日本人々の間、又朝鮮人と日本人との關係は、今と違つて可なりよかつた。尤も支那人に對する敬意の度合は日清戰争以前とはすつかり變つてゐた。あれ前の支那人は日本人と同等、若くはそれ以上にも考へられてゐたが、戰後の支那人は陰ではチャンコロなどゝ呼ばれ、前ほどの敬意をみんなが拂はなかつたが、併し相互の間に同人種同文といふ特殊の親しみを持ち、好意を持つてゐた。支那の留學生と同時に、南京蟲と云ふものも神田には可なり殖え、南京蟲に喰はれたと云ふことをよく聞いた。

勸工場の通りには二軒までも支那料理が出來た。私たちもよくワンタンやシウマイを喰べに行つた。

現代では勞働者と云へば何かにつけて問題となり、世の注意を引く程に數も殖えたが、その時分の職工で誰も知つてゐるのは砲兵工廠の職工位だつた。夕方退ける時になると、薄汚ない身なりの、そして思ひ〳〵の身なりの、洋服を着て下駄を穿いた者や、洋服を着て帽子を冠らない者や、又は書生風の服裝で氣の利いた、職工には勿體ないやうな好男子や、それこそさま〴〵の人達があの界隈を殆ど列を作らんばかりに、陸續として家路を急ぐのに會ふのであつた。

當時砲兵工廠は失業者の收容所だつた。田舍で財産を失ひ、土地を失つた百姓の子弟が今日東京へ出て電車の車掌となるやうに、當時の失業者は大部分砲兵工廠に身を寄せた。賃銀は相變らず安いもので、初めは日給二十五錢、よくなつて三十五錢位のものだつた。私の郷里の人々も幾人か造兵の職工になつてゐた。律義の人はその給料の中から相當に貯金して資本を造つた者もあつた。何と云つても今よりは生活が樂だつたのだ。

又官吏は官吏で、退廳時間になると南は霞ケ關のあたり、北は内務大藏兩省から、文務省あたりまでの濠端道を、官吏たちの匆忙としててく〳〵行くのが見られた。こゝいらの道を

當時の人呼んで腰辨街道と云つた。それも電車が出來ると共に見られぬものとなつた。

砲兵工廠で朝の六時を知らせる汽笛、それを人々はピーと云つた。晝になるとドンが打つ。それが田舍から來た私には大變印象の深いものの一つだつた。夕方は又ニコライで夜の祈禱の鐘が鳴つた。そのやかましいことは殆ど猛獸が嚙付くやうで、とても宗教の神聖な集りに信徒を集めるベルの音とは聞取れない位だつた。この鐘の音ばかりでなく、ニコライの教會堂はあの駿河臺の上にいや高く、四隣を睥睨して立つ如くに見えた。震災前こそ第一生命の八階だの、三越の物見の塔だの、そこゝに高い建物が出來、又は丸ビル初め横にも竪にも大きい建築物が盛んに出來て、われわれはそれを見馴れた爲めにニコライなどさまで目立たなくなつたが、當時の東京ではニコライがたゞ一つの巨大なる山男の如くに、市民を威壓して見えた。

これは一つはわれわれ見る人々の思做しであつたかも知れぬ。奈何せん當時の日本の人々は、殆ど誰も皆一樣に恐露病に罹つてゐた。イギリスとロシヤ、この二大强國に前と後ろから常に隙を狙はれてゐるかの如くに誰も考へてゐた。階級爭鬪どころの話ではない。われ等は强大なる外敵のために、海のまはり中から、その時分の言葉でいへば、英獅露鷲、虎視眈々としこれが後へを窺ふ如くに、誰も皆ピクついてゐた。日淸戰爭に勝つて以來、東洋唯一の强國とは意識したけれども、西洋と太刀打出來るとは誰しも考へなかつた。否、西洋と對等に交際し得るとさへも考へなかつた。内地雜居と云ふことがどれほど人々を恐れさせた事だらう。内地雜居になつた曉には、日本は印度と同じやうな運命に落ち、西洋人のためにだんだん土地を侵略されて、イギリスか露國の屬國になるより外あるまい、などと云ふ議論を聞くことさへも珍らしくはなかつた。

學校の教科書では三韓征伐を教へ、蒙古襲來の神風を教へ太閤の朝鮮征伐を教へて、皇國の神威を少年の頭腦に說き込んでゐたけれども、識者の議論や、新聞に現はれる外國電報等は、文字ある人々を威嚇して外國を怖れさせた。英國公使ツイリアム、パークスに脅め付けられてゐた時代から、まだあんまり遠くもないし、日淸戰爭中に英國の日本に對する威嚇的態度から一層イギリスを怖れさせた。そこへ持つて來て三國干渉の意外なる痛棒は、またわれわれの背中にその感覺を强く印してゐた。英ばかりでなく露も、佛も、獨も、西洋は悉く恐ろしいものとつくづくわれわれに思はせた。支那分割と云ふことが日々の新聞に揭げられたのもこの時分の事だ。當時李鴻章はまだ生きてゐた。それにも拘らず西洋各國は寄つてたかつて支那

を分割して統治しやうと云ふ相談が持上つてゐる。東洋諸國は山賊共の晩餐の爼上の魚にも似てゐた。累卵の危きと云ふやうな言葉が、よく雜誌や新聞で見られた。われわれは學生が悲壯なる聲で唱ふノルマントンの歌を今なほ記憶してゐる。日本の旅客が旅路を急ぐ一すぢに、外國船と知りつゝも、つひうかうかと乘せられて、遠州灘を過ぎ、紀伊の熊野浦に掛つたときに、暴風雨に出遭ひ、その英國船ノルマントン號は暗礁に觸れて沈沒した。その時船員等はボートを降ろして、外國人の旅客のみを避難させ、日本人の旅客はことごとく見殺しにされたと云ふ事件があつた。その怨綿々、盡くることなきノルマントンの歌となつて、人々の口の端に乘つたのだ。當時の青年、外國の事を論ずれば、實に慷慨淋漓たるものであつた

アメリカは日清戰爭以後少しづゝ日本に對し氣まづい態度を示して來た。それ以前のアメリカは親切な小父さんが、子供をいたはる樣な態度であつたが、マツキンレーが大統領になつて以來、帝國主義の野心を少しづゝ日本に向つて露はし始めた。だがマツキンレーは無政府主義者の一婦人のために、千九百一年明治三十四年の春脆くも暗殺されたので、アメリカの態度は又昔に復るだらうと云ふやうな希望をわれわれに與へた。

私たちはアメリカに對して自由の國土、ピルグリムス、フアーザアスの國として、恰もカナンの樂土の如くに憧憬れてゐたものだ。學校の卒業生にして洋行する者は、殆ど皆アメリカを志し、プリンストンやエールや、シカゴその他、有名な大學を卒業して歸朝すると、何れも母校を訪れて私たちにアメリカ文明を讃美して聞かせた。それは實に物質文明ばかりでなく、又精神的文明だつた。何だかアメリカの人はみんな詩人であり、みんな信仰の人であるやうに、私たちには思はれた。まさか彼等が皿洗ひをしたり、薪割きをしたり、學僕をしたりして、可なり輕蔑された生活を送つて來たものとは夢にも知らず、理想國への賓客として迎へられ、待遇されて來たやうに考へた。學校を卒業したら何處へ行くと云へば、誰も皆アメリカへ行くと即答した。そして月の東から出るのを見て、その空に憬がれながら、友達同士一夜をお互の未來記を語ることに明かしたことが珍しくない。そして實際卒業生はどんどんアメリカへ渡つた。氣早な男は、まだ卒業しない内にアメリカへ渡つた。月々米國から歸る卒業生と、米國へ行く學生との送迎會のない月は無かつた。

十三

千八百九十九年即ち明治三十二年の春頃から、南阿戰爭が突發した。アウトルツクや、レビュー、オフ、レビュースなどに、

毎號南阿の大統領クリユーゲルの肖像や、英國の殖民大臣チエンバーレンの諷刺畫や、金剛石王セシル、ローズの評判記などが掲げられた。それは人も知る如く、和蘭種の南阿の植民トランスバールの人民と、セシル、ローズの如き大資本家の利益のために、戰ふ英國との戰爭だ。和蘭人は自由のために英吉利人は强慾のために、和蘭人は極めて少數で、英吉利人は十五萬の大軍を擁し、而もその百分の一に近き和蘭兵のために、英軍は戰ふ毎に敗を取つた。惜さも惜き英國である。それが斯くの如く敗北するのだ。誰か痛快を叫ばずにゐられやう。トランスバールの人々は實に日本人のために敵を取つて呉れたやうな氣がするのだ。けれども多勢に無勢、よく半歳を支へたが、終ひにはやみやみと征服されてしまつた。出來ることなら我々は義勇軍を組織してトランスバールへ行き度かつた。學院の教授水芦幾次郎先生は悲憤慷慨、學科をそつち除けにして、毎日のやうに我々に南阿戰爭の模様を語つた。南阿の將軍クロンジエなどは、隨分人氣のあつたものだ。

此の後數年經つてから米西戰爭の結果、米國の版圖に歸した比律賓群島の中に叛徒が起つた。その主將をアギナルドと呼び、一世の英雄兒として、乳虎嵎を負うて嘯くの慨ある如くに傳へられ、大分新聞で人氣があつた。詩人平木白星などは、このアギナルドを當時流行の新體詩と云ふものに詠ひ込んで、その壯烈を讚美した。併しこれは直き退治されてしまつた。

十四

二十世紀が來ると云ふことが其頃人々の心を可なり支配した。丁度年末にお正月を迎へる支度をするやうに、人々は二十世紀を迎へる心構へを怠らなかつた。明治三十三年の春私は旅行して或る地方の豪家に投宿した時に、そこの主人（土地での有力家だつたが）から

「二十世紀は今年からと云ふ者もありますし、來年から二十世紀と云ふ者もありますがどちらでせうな」

と問ひかけられた。私は東京の學生であつて新知識の所有者であるから、定めしさう云ふことは知つてるだらうと思うて問はれたのだ。私は一夜の宿を借りたお禮として、この問題に對し間違のない所を答へてやりたかつたが、實は全くそれに對して不用意だつた。東京にゐる時それと氣がついたなら、先生に聞いても宜し、又西洋人の先生に聞けば、屹度正確に分る事だつたのだが、その問題に迂濶だつたのを衷心から耻ぢた。

兎に角地方の人々さへもさう云ふ質問を發する程までに、皆が二十世紀を迎へることに興味を有つて居つた。文章の中に

も演說の中にも、二十世紀の文明國に左樣な事があるべき事かと云つて人を責める時に用ゐたり、われわれ二十世紀の人間は這般の覺悟がなくてはならぬと、青年學生を奬勵したり、隨分いろいろにこの言葉が用ゐられた。商人は抜からず廣告にも招牌にも二十世紀を賣物にした。

二十世紀といふ言葉はその頃殆ど濫用されたものだが、それはその後十年間くらゐ響のいゝ言葉として、恰も新知識のシンボルとして用ゐられた。大正六七年頃から新に改造だの文化だの、赤化だの、と云ふ言葉が出來て二十世紀はその流行をこれ等の言葉に讓つたが、明治末年までは二十世紀といふ言葉には相當に權威があつた。老人を凹ませ、青年を煽動するには持つて來いの標語だつた。

明治四十年の夏、私は向島の屋敷に饗庭篁村氏を訪問した事がある。篁村翁は大變喜ばれて、いろいろ自慢の料理などを出して饗應され、夜に入るまでさまざま奇拔な面白い話をして與れたが、その時、翁は御自分のことを常に十七世紀と呼び、又私と友人とに對しては初めから終ひまで姓名を呼ばずに洒落れて二十世紀とのみ呼び掛けられた。

『オイ二十世紀、』

と云つて盃を獻された。

大正になつてもまだ二十世紀と題する雜誌が、カフエー・パウリスタから機關雜誌として發行されたことがある。

金貨本位になる前には、金貨本位の世の中となつたらどんなものだらうと、いろいろ期待されたり心配されたりしたし、又內地雜居になつたらどんな結果に了るだらうと、それも隨分世間の問題になつたが、その時になつて見ると常に馬鹿々々しい程何でもない。やつぱり日は東から出て、西に入つた。雨の降る日は天氣が惡く、親父は忰より年が上だつた。二十世紀も丁度今の普選問題のやうに、喧々囂々と問題にされたものだが、さていよいよ二十世紀になつて見ると、何の變つた事もなかつた。

とは云ふものゝ矢ツ張り心持に於て幾分變らない事はない。貧乏は相變らず貧乏でも、お正月を迎へて氣分が改まるやうに、二十世紀を迎へると矢張り何だか日本が文明に進み、自分たちも幾らか偉くなつたやな氣がした。實際自分たちの身も魂も、一日々々一月々々とムク〳〵と成長する時代だつた。日本もやはり月々年々前へ前へと進んでゐた。二十世紀になつて確かに偉くなつたに違ひない。

さう云ふ曙光を浴びるやうな希望に滿たされつゝ、二十世紀に一年二年と入つて行つた。千九百年、即ち明治三十三年に今上皇帝陛下當時の東宮殿下の御成婚式が擧げられた。時は左

十日、日は麗らかに、風はそよ〳〵と若葉の柳の枝を動かし、燕は愉快げに宙返りをして飛んでゐる。

私たちは朝から身じたくして友達同士誘ひ合ひ、仲のいゝ者ばかり十人程で、寄宿舍を出て、櫻田門から入つて丁度二重橋前の木柵の前に立ち、兩殿下のお召馬車が御通過になるのを拜觀しようとして待つてゐた。行つた時にすでに可なり群集がゐたが、後から後から私たちのやうな目的で來る人々が殖えて來た。騎馬巡査が彼方へ行つたり此方へ行つたり、又たゞの巡査も群集の無暗と前へ進むのを制してゐた。木柵へ上つて腰を掛ける者、又中には木柵の前の柳の並木によぢ登る者もあつた。一人登ると幾人か眞似をして登つた。巡査が廻つて來て木柵から人々を下ろした。柳の木にゐる者は足を引張つてずりドろしなどした。巡査が行つてしまふと直ぐ又前のやうによぢ登つたり腰掛けたりした。私はこのときキリストの一行を見ようとしてザアカイといふ身丈低き男が、桑の木に登つて待つたと聖書にあるのを思ひ出した「ホザナよ〳〵、主の名によつて來る者は幸なり」とエルサレムの人々が道に衣を敷いて人の子の王者として來る者を親迎する心にも似たものの如くに今日の群集を見渡した。

やがてかつかつと蹄の音と共に、殿下の御馬車か間近く見えて來た。そして私たちの目送する間に二重橋を渡つて宮城へ入られた。

私たちは日比谷ケ原を拔けて、あたらし橋を渡り、神明前の大黒汁粉で空腹を滿して、そして町の祝賀の催しをも見ずに寄宿舍へ歸つた。其日に何か不穩の文章を印刷したビラを撒いて捕られた者があつた。内容は不敬に亘るものだつたと記憶する。それが内村鑑三氏の門人だと云ふやうな噂もあつた。

十五

三十三年の夏支那に義和團の所謂北清事件の變あり、日本の軍隊は此時を以て内外にその實力を認められ始めた。のは宜かつたが、山口斌などの所謂馬蹄銀事件が起つたのは此時ではないかと思ふ。山口は何でも陸軍少將か中將位の所で、日本派遣軍の大將株だつた。それが支那の金を分捕して、二三萬兩(テール)も胡麻化ししたのが曝露した事件である。

三十四年の二月に三田の聖人と呼ばれた福澤諭吉翁が死んだ。福澤翁が生きてゐられるならば、私は慶應義塾の大學部に行くつもりであつたが、こゝに至つてその方向を轉じなければならなくなつた。翁の墓地は學院の近くの小高い、靜かな所にあつたので、皆と一緒にお墓詣りをしたこともある。

夏の初めの事だと思ふ、月曜日であつたか日曜日であつたか、正午少し過ぎて、日本橋の方の自分の家へその前日から泊りがけで歸つてゐた生徒の一人が、息を切つて寄宿舍へ歸つて來た。そして汗を拭き〳〵何より先に「たつた今星亨が殺された」と叫んだ。窓から首を出して、青草に覆はれた廣い庭の周圍に立つ西洋館やら、夏の雲やらを眺めてゐた連中は、この聲を聞いて皆下へ降りた。運動場にゐた連中もバツトをぶらさげたまゝそこへ寄つて來た。

『どうして殺された。』

『誰に殺された』

と周圍から詰め寄つた。

『誰だか知らない、兎に角市會で演說中に横つ腹を刺されたんだ、今僕は市役所の前を通つて來たが、大騷ぎだつたよ』

と叫んだ。そして直ぐに飯喰ひにだか水飲みにだか、その少年は行つてしまつた。

伊庭想太郞に殺されたのだ。その伊庭想太郞の息子が、大正の初に當つて新劇團の勃興に伴れ、俳優伊庭孝として評判男にならうとは、誰かこの時思ひもうけよう、そして私は敎文館に番頭さんをしてゐた伊庭孝君が役者になつたのを見て驚いたが、更にその後伊庭想太郞の息子さんと聞いて、何だか不思議な様な氣がした。

星亨を殺した伊庭の動機は、敎育家としての私憤にあつたとも云はれるが、併し彼をしてその決心を附けさせる迄にしたのは、島田三郞の筆の力である。當時政友會の中心人物であつた政界の巨魁星亨に對して加へた島田三郞の筆誅は、遂に本當の誅戮となつてしまつた。春秋の筆法に依れば伊庭想太郞星亨を殺すではなくして、島田三郞星亨を屠るであろ。ペンの力が劍の力よりも弱くないことは、この一事がよく明かに物語る。星亨が偉い男だつたと云ふ世評は、星が死んでから後一種のはやり物になつた。存命中政權を私して、散々惡い事を働いた彼は、偶像的に祭り上げられた。

明治三十五年二十世紀の第一頁は始まる。この年の一月、日英同盟が成立した。日本の軍隊の力が北淸事變に依つて英國に認められた爲だと取沙汰された。兎に角提灯に吊鐘、お月様とすつぽんの縁組が出來たやうなもので、すつぽんに取つては嬉しい事に違ひない。誰も皆淚をこぼすほど歡んだ。昨日の仇敵は今日の友、日の丸の旗とユニオンジヤクのフラツグとを、ぶつ交ひに何處の家でも門口に立てゝ祝つた。何だか二十世紀になる刻々夜が明けたやうな氣がした。これから益々日本はよくなるだらう。一年々々長足の進歩をしつゝあると云ふやうな樂

天的の考が、この時から强くなつて、歐洲大戰に參加する頃まで私の心に續いた。あれから此方は内憂外患、まことに忌やな事續きで、こんな忌やな國情にならうとはあの當時全く思ひも寄らなかつた。

その三月に私たちのクラスの卒業式があつた。經國美談の著者にして當時支那公使であつた矢野文雄氏が一場の演説を私たちの爲めにして呉れた。最早や可なり老ぼれてゐて、私が經國美談を讀んで想像してゐたやうな人ではなかつた。この前年の卒業式だかには、時の衆議院議長片岡健吉氏が短い訓話をした。矢野片岡兩氏とも話は平凡な、不得要領な、つまらぬ話であつたので、私が從來政治家に對して持つてゐた幻想は、可なり破壞された。とても新渡戸氏や内村氏の講演とは比較にも何もならなかつた。

十六

明治三十四年に早稻田専門學校が大學になる、日本に初めて私立大學が出來るといふのが、大部學生間に刺戟を與へた。私立大學と云へば私たちは直ぐにエールやプリンストーンのやうな所と空想した。この年樺山資紀伯が文部大臣となり、宗教學校は極端に壓迫された。それはその時分フランスに教會から學校を引離す運動が猛烈に起つて、輿論となつてゐたのを、そのまゝ滑稽にも全く國情の違ふ日本へ持つて來て、基督教を虐める道具に使つた。その頃の耶蘇教は政府からも社會からも虐められるだけの活氣と、眞面目と、誠意を持つてゐたのだ。リヴアイバルは其年から初まつた。

三十五年に牛込のエール大學へ私も遠大の希望を懷いてやつて來た。こゝの學生は前の學院のそれと比べれば、年取つてゐて大人に近いやうな青年が多かつた。このエール大學は私が空想してゐた自由の天地とは全く違ひ、たゞ亂雜と、懶惰と、彌次馬氣分との横溢する大きな集團であつた。それにも拘らず、そのごたごたした中に、何處か知ら清新の氣分が動いてゐる樣にも見えた。方々の地方の田舍中學の卒業生が、田舍臭い樣子をして草履下駄と稱する臺の裏へ板を打つけた物を引摺つて、喜久井町あたりをぞろぞろ歩いてゐた。丁度その學生たちに相當するやうなミルクホールと云ふものが、埋め立てられたばかりの田圃の上の彼方此方に出來た。そしてマーガリンを附けたバタ附パンと、豆の黒燒を煎じた珈琲と稱する飲物を飲ませた。

早稻田が大學になつたお祝のために、提灯行列と云ふことをやつた。これ等が多分提灯行列と云ふもの丶濫觴であつたかと

思ふ。五千餘の學生がそれぞれ手に鬼灯提灯を掲げ、「都の西北」と云ふ歌を唱ひわめきつゝ、校門を出て神樂坂を下り、牛込見附から入つて九段坂を下り、小川町を迂廻して日比谷公園に入り、馬場先門へ戻つて宮城前の廣場で天皇陛下萬歳を三唱して解散した。これが病付きとなつて何かと云ふと提灯行列が催され、學生は引摺り出された。

三十六年に最も世間にやかましい問題とされて、何ケ月も續けて新聞を賑はしたものは教科書事件であらう。書肆に自由に教科書を發行販賣させた所から、教育界の上層にも下層にも賄賂の毒藥が行亘つた。今日とても教育と黄金とは決して離れない關係にあり、昔は地獄の沙汰も金次第であつたらうが、今では全く學校沙汰も金次第と云ふ世の中となつた。此頃流行るメンタルテストとは恐らくキンタルテストの誤りで、漢字に書けば金足テストと云ふことであらう。中學校や女學校へ入學する資格は就學兒童のメンタルテストよりも、父兄の金足テストが必要を認められて來た。卒業してから若くは在學中から、寄附金の出來ぬやうな學生は、女學校や中學校に歡迎されぬ。それと比べれば教科書事件などは罪の輕いものだつたが、但し、知事だの、代議士だの、視學官だの、いゝ子の假面を冠る教育家共が、珠數繋ぎにふん縛られて、日なたへ引出された土龍のやうに往生したのは不愉快ながら痛快だつた。

十七

丁度學校の周圍にミルクホールといふ新しいものが出來たやうに、どの方面にも新しいものが開拓されつゝあつた。川上音二郎等が創めた壯士芝居に目鼻が附いて、新派劇と稱するものが前から出來掛つてゐたが、音二郎の死後ますます盛んになり、この明治三十六年を以て彼等は最も雄飛した。その理由の一つは舊劇界の人々か、團菊、左團次、芝翫等の名優を失ひ、その上社會は新規々々と新しいものを求めるので、途方に暮れて間誤ついてゐたからだ。家橘を羽左衛門と改名し、福助を芝翫とし、染五郎を高麗藏に、榮三郎を梅幸に、かやうに歴史あるいゝ名前を繼がせてそれで景氣を挽回しやうと試みたが、無學の社會は舊い時代のいゝ名前などは知らないから、殆どそんな事の利目はなかつた。芝翫と高麗藏は歌舞伎座を脱黨して東京座に走り、露營の夢やら金色夜叉やらを演じて、精々新しがつて見せたが、やはり人氣は引立たなかつた。この隙間に新派かあの非藝術的な芝居を勢力づけた。たゞ彼等の趣味は新しい通俗に向きさうな脚本の選定にあつた。彼等はそれを當時の新しい小説の中から拾ひ上げた。蘆花の不如歸を本郷座で演じて

味を占め、續いてハムレツトを演じて又好評で、だんだん金色夜叉をやり、中村春雨の無果花を板にかけ、田舍出の若い男女の學生からやんやの喝采を博した。伊井蓉峰、藤澤淺次郎、高田實、中野信近、佐藤歲三、河合武雄、木下吉之助、少し遲れて喜多村綠郎など、評判のいゝ役者が輩出した。兎も角も小說から芝居の種を取出したと云ふことが彼等の新しい試だつた。さう云ふ時代で何でも新しくさへあれば新時代から歡迎された。新時代の人々はたゞ〳〵新しいものに飢ゑ渴いてゐた。それだのにこの新しい文化の曙光が、わづかに射し始めるか始めないに日露戰爭が始まつて、何も彼も滅茶にしてしまつた。そして再び軍人崇拜、軍人萬能の世の中が來た。

十八

日露役すぐ前の數年間、學生の間には小說よりも寧ろ詩の方が一層熱心に讀まれた。所謂新體詩と云ふものが今日の小說の如き位置を文壇に占めてゐた。小說の方が一般の人からは勿論重く見られ、又詩の方は識者からも、一般社會からも輕蔑されてゐたのであらうが、青年學生には熱心に迎へられた。島崎藤村、薄田泣菫等は新體詩人の人氣者で、和歌の方は佐々木信綱、與謝野鐵幹が崇拜されてゐた。又土井晩翠の天地有情と呼ぶ漢文口調の詩集も、廣く讀まれた。わけても歌壇に於ける與謝野鐵幹の人氣は實に素晴しいものだつた。後にはその夫人晶子氏の方があんまり偉くなつてしまつて、鐵幹氏は其陰に伜はれ、名まで寬と改めなければならなくなつたが、當時の文學青年の間では、彼は恰も明星の如くに輝いてゐた。

明治三十五年の夏の事と思ふ。神田の青年會館に新體詩朗讀會と云ふものが催された。その出席者の顏觸の中に、與謝野鐵幹、島崎藤村、の名があつたので、私たちは文科の生徒も政治科の生徒も一緒になつて、早稻田からまだその時分は早稻田江戶川線の電車がなかつたので、又外濠線も駿河臺下を通るやうなことはなかつたので、わざわざ步いて青年會館まで聽きに行つた。若干の入場料を拂つて、入つて見ると、驚くべし階上階下共に滿員で、椅子のない所に立たねばならぬ位だつた。後年になつて話合つて見ると、その晩には相馬御風君も、水野葉舟君も、また生田長江君なども聽きに行つてゐたと云ふ、その他にも今の文壇の中にはまだ行つた人があつたかも知れぬ。兎に角非常な人氣で、與謝野氏等の登壇するのを待つてゐた。一二三人ばかり當時の新體詩人の挨拶やら朗讀やらが濟んだ後で、生田葵山君が島崎藤村氏の「小諸なる古城の畔」を代讀するや、聽衆承知せず「馬鹿野郎引込め」と盛んに怒鳴り立てた。藤村

氏の顔が見えないので、遠くからわざわざ來たのを裏切られたやうな氣がした。而も其次には岩野泡鳴君が新體詩の何切り法に就て長い講演を試みた。後に泡鳴君も自然主義の風潮に乘つて評論家となり、更に小説家として、又詩人として文壇に特有の地歩を占めたけれども、その時分ではさつぱり人氣の無い屁ツぽこ新體詩人だつた。のみならず、その講演が少しも面白くないのでこれ又大向ふから「馬鹿野郎引込め」を喰はされた。所が彼は强情でなかなか引込まない。それが更に反感を買つて、階上からも階下からも、殆ど全員總立でワア／＼騷ぎ立てた。それで這々の體で壇を降つた。さうしてゐる所へ與謝野鐵幹氏が登壇したので、拍手喝采割るゝばかりで、中には足踏をし口笛を吹く者もあり、シツ／＼とそれを制する者もあり、又喧々囂々を極めた。鐵幹氏はチョツピリと近什の短歌を二首ばかり聲高らかに朗讀して、更に起る急霰の如き拍手の音の中に、要領よく壇を降つた。當夜この人の得意眞に思ふべしである。私たちも一度でも此樣な場合があつたら、實に幸福な人間と云はねばならぬなどゝ語り合ひ、物足らぬ乍らに先づ／＼鐵幹氏を見たのでたんのうして歸宅した。

新體詩を滿載する文學雜誌は幾種類も發行されてゐた。無論これ等はニキビ青年の玩具物に過ぎなかつたのだが、又盛んなりと云ふべしであつた。

この三十五六年頃から「明星」と並んで「新聲」といふ文學雜誌も現はれ、やはりニキビ青年の間に人氣があつた。中村春雨の女學生小説は殆ど狂熱的に男女學生の間に愛讀されてゐた。所謂ローマンチツク、エージ、この風潮は日露戰爭までも續いた。西洋でも、そんな調子であつたものか、圖書館へ來るイギリスの新刊書にもローマンチシズムの研究とか、ローマンチシズムとクラシシズムと云つたやうな題目の書物が多かつた。

ローマンチシズムは如何に叫ばれても、ローマンチシズムと名宣つて發表された創作も詩も、こと〴〵く安つぽいものなのにはほとほと閉口させられた。

ただ一人、この安つぽいローマンチスト等が安つぽい作品を山の樣に産出してゐた時代に、眞に群鷄中の一鶴のごとく屹然として高いローマンチシズムの作家だつたものには、唯一人小泉八雲があつた。彼は米國の歸化人で元の名をラフカデイオ・ハーンと呼んだ。ハーンを當時の日本の文學者の中に數へるのは如何にも妙なものである。彼のことはすでに彼の生前から收めて米國文學史の中にあつた。併し彼は日本を愛し日本に住み日本を書いたのだ。

彼は東京帝國大學を馘られて早稲田へ來たが、居ること一歳ならずして心臓病のために急死した。丈短く横に肥り赤ら顔で毛髪は白つぽかつた。常に細い格子縞の洋服を着、强度の近眼鏡をかけてゐたが、黒板へ字を書く時は誠に細かい字を書いた。

筋の有るやうな聲で、一つも無駄を言はず冗談を言はず、講義しつゞけて講義がおはればサツサと歸つた。それ故私たちは明治學院にゐた西洋人の先生のやうに彼に親しむの機會を得なかつた。

三十六年の九月、夏期休暇が終り授業が開始されて間も無い頃のことだつた。土曜に私達のために古代英文學を講じた時には、何の變つた様子もなかつたのに、日曜をおいて月曜の受持時間には姿が見えなかつた。その朝？心臓麻痺で死んだのだ。年齢は五十歳くらゐだつたらう。

越へて一二日してから牛込富久町のこぶ寺に彼の葬式があつた。佛式でやつた。法學博士梅謙次郎氏がハーン先生の遺族の世話をして親族席にゐた。五十歳前後に見える白むくを着た日本婦人、それはハーン先生の夫人であらう。十二三歳位とそれよりも少し小さい二人の男児は坊ちやんであらう。

遺族の燒香がすむとさつきからしびれを切らして座つてゐた學生たちが起つて行つて燒香した。學生の數は三四十名くらゐだつたらう。

世界的文豪の葬式は四五十分で滯りなくすんだ。

歩くとだく／＼汗が止めどなく流れる暑い日だつた。

十九

流行唄は明治三十一年の秋頃からシノノメノストライキ、サリトハツライネと云ふのが流行り始めて以來、何處へ行つても、いつまでしてもシノノメノストライキで、日露戰役中に喇叭節が始まるまで、その流行を恣にした。サノサ節も戰争少し前から始まつた。唱歌では「煙も見えず雲もなく」が日清役以來、隨分長く學生の間に唱はれたが、大和田建樹の鐵道唱歌「汽笛一聲新橋を」と云ふのが、これ又廣く長く流行して、その唱歌を出版した書肆を富ましめた。

陸奥の海岸線

大町桂月

一　鷗の生産地

鷗の異名を海猫といふ。その啼聲猫に似たればなり。到る處の海に之を見るが、その生産地は多からず。陸奥の蕪島は鷗族の保護地となり居れり。鮫港に在り。陸を離るゝこと、ほんの一二町、周回七八町の小島なるが、野生の蕪、島に滿ちて、その花開く頃、鷗群り來りて子を生む。蕪の花や黃、海水や碧、その間に白色の鷗、幾萬羽となく亂飛す。天下の美觀なり。

東北本線の尻內驛にて乘換へれば、次の驛は八戶、羽仁もと子女史と云ひ、原信子女史と云ひ、こゝは女の名流の出生地也。汽車はその次の湊驛にて終る。ここは名僧西有穆山和尙の出生地也。湊より海岸を傳ふこと一里にして鮫に達す。捕鯨會社あり。旅館もありて、夏は海水浴に賑ほふ處也。余の鮫港に遊びたるは、冬の初めにて、鷗の子を產む時期にはあらざりしかど、朝早く旅館の窓より、數十の鷗の、朝日を受けて、波上に翱翔せるを見て面白く感じたること、今もなほ忘れず。歸るさ、湊に立寄りて、穆山和尙の生家を訪へり。穆山の作に、

九年面壁何のその
私しや十年愛き勤め
煩惱菩提の二筋に
私しやまことの一筋を
くはへて三筋で日を暮らし
糸が切れたら成佛と
お客の相手に南無阿彌陀佛
濟度なさろとなさらぬと
それは貴方のどれろけん
私しや餘念は無いわいな

歌を賣る女に托して、頑冥不靈の衆生を諭せり。さても禪界

の達人は、奇拔なることを云ふもの哉。穆山和尚は總持寺に法燈を輝かしたるが、明治四十三年に、九十歳を以て示寂し、直心淨國禪師と勅賜あらせられたり。その生家を笹本氏といふ。穆山の母の十三回忌に際し、穆山の書きて贈りたる屏風一雙、今なほ同家に存す。天下の珍品也。一枚四行づゝにて、

一

古人いはわく、孝は百行の本也と。佛のたまはく、孝を名て戒となすと。誠なるかな、この言や。人として孝心あるものは、君に仕て必ず忠心あり。他家に婚嫁して、父母の名を辱るに至らず。又孝心深き者は、暴飲暴食を好まず。

二

喧嘩口論鬪爭等のすべて危き場所にはちかづかず。父母の遺體を重んずるが故也。これおのづから衞生の道にもかなふべき也。況んや父母より讓られし家を亡して顧みざる無慚の品行あるべからず。孝心を本として、專ら家業を勵

三

み、天下の法律をおかさず。常に孝心に住して品行を正ふすれば、おのづから家庭教育の道にもかなひ、不義の富貴を願はず、我に具有する所の智力體力の分に安んじて、純善の經營をなすときは、受恩報本の意にもかなふべき也。天理人道をくらまさゞれば、おのづから

四

子孫永續の多福をも得べき也。我少年にして出家するに臨て、母のいはく、嘗て聞く、一子出家すれば、九族天に生ずると。若汝破戒無慚の惰僧となるときは、これに反して、父母を煩はし、九族墮獄の先達となるべし。つとめて好出家となれと。此一言、骨髓に徹して忘れず。

五

學文、修業、遍歴、住山、化導、百事に就て、この言を思ひ、決して不良の念をおこさず。兩親の爲に、西國順禮して、三十三所靈場の土を持來りて三分となし、一分は兩親の墓地に投じ、一分は本師の塔下に納め、一分は法光寺山內三十三觀音建立の所々

六

に布置す。又能本山及三所に兩親の祠堂料を納め、且毎朝諷經回向怠らざれども、父母の生前に、些少の土産或は輕微の音物をつかはして、纔に其心を慰のみ。漫りに金錢を賜らざることは、三寶物俗用の罪によりて、墮獄の因緣となることを恐れてなり。我も

七

亦一切受る所の法財は、すべて佛法の爲に消費して、更に蓄財せざる也。今年七十四齢に至りて、甚だ未熟なれども、今日まで、僧道を全ふすることは、辨道修業と智識の慈訓に依ると雖も、母の一言を忘れざるに基く所以なり。人々一身を全ふして、天然の

八

壽を遂るは、孝の一分なれば、常に身口意三業を愼むべし。三業とは、先身に三あり。無益の殺生をなすことなかれ。人の妻に手を掛るを邪婬といふ。人の物を取るを偷盗といふ。是皆愼むべし。口に四あり。人の悪口をいひ、妄語を

九

以て人を欺き、兩舌を以て人の不和を醸し、綺語の益なき輕口等をば、これ皆愼むべき也。意に三とは、仁義人情を捨て唯慾心のみなるを貪慾といふ。自分の氣に叶はさるとて怒りやまざるを瞋恚といふ。人の好き事を妬み、智人の言を用ず、

一〇

自分の非を飾りて、恥を顧みざるを愚痴といふ。是等の道理、よく／＼辨へて、愼むべきなり。此十善業は、凡夫地より佛地に至るまで守るべき道なれば、其理深くして説き盡しがたしといへども、たとへ淺くも、此十善道を守れば、一生惡事災難を免れ、

一一

未來は三悪道に落ることなし。必ず人間天上に生るべし。而して常に三寶を信じて、口に任せて、南無歸依佛と唱ふべし。若臨終の時に至らば、息の絶ゆるまで、口に唱へ、心に念ずべし。其念力によりて、佛の加被力を蒙り、

一二

おのづから淨土にも生ずべきなり。

明治二十七年六月、實母の十三回忌に當り、屏風一雙かき遺れといふ。故に拙き俗文を綴りて、普く親族後生の者にしめさんと欲して、つかはしぬ。西有穆山

都合十二枚、平易にして眞摯、誠意人を動かす。亦名文たるを失はず、引用には長きに過ぐるを以て、幾度か引用するを止めむかと思ひ、又摘採せむかとも思ひたるが、天下の珍品なればと思返し、全文を錄して、名僧の眞面目を天下に傳へむとす。身延に詣でたる者は、何人も日蓮の孝に感泣すべし。今穆山の生家を訪ひて、穆山の孝に涙を墮しぬ。穆山の孝と云ひ、その十戒と云ひ、殊に邪婬戒と云ひ、九年面壁の談と共に、拙いて、煎じて、今の世の新らしき人達に飲ませたきもの也。

二 白鳥の保護地

日本武尊の御墓より白鳥飛び出せりとは、書物の上に知れるのみにて、今の世、内地にては、實地に白鳥を見るに由なきが、唯一個所あり、陸奥の小湊これ也。

東北本線を取りて野邊地驛を過ぐれば、右に野邊地灣を見る。小湊驛に下り、小湊の小市街を過ぎて、驛より凡そ一里ばかりの處に、雷電橋かゝる。こゝは汐立川の野邊地灣に入らむとする處也。橋を渡れば、川に接して、雷電の祠、杉林に圍まる。田村將軍の勸請に係ると云ひ傳ふ。昔、津輕の七戸修理、こゝにて南部勢と戰ひしに、白鳥祠に向ひて群飛す。敵は大勢到ると思ひて敗走せり。これより白鳥を雷電神社の神鳥として尊重し、之を捕ふることを嚴禁したりければ、今日もなほこゝに白鳥を見るを得る也。大正十一年に至りて、史蹟名勝天然記念物保存地となりたれば、白鳥はいよ／＼以て安全也。

祠より川に沿ふて下れば、間もなく野邊地灣に出づ。このあたりは、一帶に遠淺にして、岸に近く、三洲あり。三橋かゝる。洲には松生ひたり。松島と稱す。白鳥は十一月よりこの遠淺に來り、三四月の交に至りて去る也。余の遊びたるは、十月の半頃にて、白鳥は未だ來り居らざりしかど、小湊小學校にて、其剝製を見たり。幼時故郷にて鶴群の田間に飛べるを見しことより聯想して、數千萬羽の白鳥の天を掩うて殺到するの壯觀、目前に彷彿たるを覺えぬ。

白鳥を見て直に引返しては、恐らくは山水の靈に笑はれむ。左して海に沿ひ、淺所、間木、東瀧、辨慶内、白砂などの小部落を經て、凡そ三里にして、東田澤といふ小市街に達す。こゝより十町にして椿山に至る。これ陸奥の一名所なり。二十町歩の小山の全山すべてこれ椿の純林也。花の色眞赤にして、純粹の日本産なりと聞く。昔越前の賈人横峰嘉平といふもの、此地に來りてお玉といふ美人と契り、來年は椿油を土産に持ち來らむとて、約の如くしたりしに、美人は死して世に在らず。哀悼の餘記念として椿を植ゑたりと云ひ傳ふ。二つの小山の間、細長き平地ありて、小川流れ、田開けたり。海に接して、二山の裾相連りて、芝生を成す。岩菊の花多し。放牧の馬、その花を踏んで、海風に嘶く。椿山神社よりなほ海に沿うて行けば、山と海との間に、松の並木長く續く。四五里の澄波を隔てゝ、恐山一帶の連山、我に揖す。須磨明石の風光をなほ一層精錬したるやう也。

椿山より引返しては、山水の靈なほ其不徹底を笑はむ。椿山より海に沿ひて行くこと一里にして、夏泊崎に達す。これ夏泊

半島の最端也。岸に近く、大島立つ。周回一里、島これ山、山これ草、最高峯に辨天祠を安置す。こゝより望めば、右は野邊地灣、左は青森灣、前は平舘海峽を以て津輕海峽に連る。陸奥灣の全體一目に見ゆ。海のみならず。前には恐山一帶の連山、後には左に八甲田山、右に岩木山、陸奥の名山、悉く見ゆ。なほ津輕海峽の彼方に北海道の山嶽も見ゆる也。

これまでは夏泊半島の東岸を廻りたるが、これよりは西岸を廻らんとす。西岸は島多く、斷崖絶壁の奇を連ねて、東岸よりも風致遙に優れり。西岸を廻りて、いよ〳〵夏泊半島に徹底する也。されど舟行するに非ずんば、その風致を味ふ能はず。余は東田澤の有志畑井佐吉氏と中平內村役場の東木村金作氏とに導かれ、更に夏泊崎より西平內村助役逢坂清吉に迎へられて西岸を味はむとせしが、生憎風浪荒くして、舟を出すこと能はざりき。

三　淺蟲溫泉

鷗の無島、白島の小湊のみを以てしても、陸奥の海岸は奇拔なるが、試に地圖を展べて見よ。陸奥の國を譬ふれば、右手を頭よりも上に伸ばし、左手を頭の上に曲げたるが如し。頭は夏泊半島也。右肩は青森市也。右手は津輕半島也。右手と頭との間は青森灣也。右手の端より頭の先までは、『陸奥の奥ゆかしくぞおもほゆる壺の石碑外の濱風』と西行法師の歌ひたる外ヶ濱也。壺の石碑のありたりし處は、矢張陸奥にて、七戸在の壺村なりと聞く。左手は斗南半島也。左肩は野邊地町也。左手と頭との間は野邊地灣也。曲げたる左手は恐山半島也。頭の上の左右兩手の間は、平舘海峽也。兩手の上は津輕海峽也。右手の外側は日本海也。左手の外側は太平洋也。なほ右手は內に缺けて、周回十里の十三潟となり、左手も內に缺けて、周回二十里に餘れる小河原沼となる。無島は小河原沼の下の方にあり。斯く陸奥は海岸線の長きこと天下一也。平砂あり、斷崖あり、島あり、入江あり、恐島半島の大湊の如きは、灣の內更に灣ありて、海岸線の變化に富めることも天下一也。海岸美は陸奥の一國に鍾れりといふも、不可なかるべき也。

余は夏泊半島に一遊して、所謂陸奥の頭の左側を窮めたり。再遊して、右側を窮めむとす。前遊よりは、一箇月半も後れて、十一月の末也。小笠原臥雲と共に、淺蟲溫泉に投ず。驛の外は直に旅館相並ぶ。旅館の外は直に青森灣也。後は山聳え、前は全山樹を帶びたる湯野島坐し、裸島名の如く裸にて立ち、その先に鷗島橫臥す。三層の高樓水に俯して、絃歌波に響く。辻村善雄氏の周旋にて、淺蟲茂浦の青年兩舟を以て迎ふるを

るが、明くれば生憎雨也。横内義悍氏野内より來り、その兄にて淺蟲に溫泉宿を營める蝦名美木之助氏も來りたるが、雨霽れず。西平内村の助役逢坂淸吉、中平内村の獸醫小形傳吉の二氏も來りしが、雨晴れたれど、茂浦よりの舟は來らず。相携へて馬場山に上る。三十三觀音の石立ち、黑松赤松相まじり、櫻樹多くして、公園的也。頂上を窮めて、淺蟲の全體を見下し、靑森灣を隔てゝ津輕半島の連山を見渡し、中腹に下りて茶亭に小酌するほどに、茂浦よりの舟來れり。蝦名、横内二氏は留まりて、他はみな舟に上る。湯野島を左にし、裸島を右にし、鷗島を左にして、茂浦島に上陸し、館石吉三郎氏の營める養狐場を見物す。この島周囘十數町、傾斜の急なる島山にして、樹木を帶びたるが、西方に少しの平地ありて、水も出づ。當時飼養せる狐六十五匹、その毛色すべてみな淡黑、牝牡二匹づゝ、鐵網の中に入れ、箱の如き小屋を置く。館石氏に就いて、狐の習性を問ひしに、食を與ふる時は喇叭を吹くことにしたる以て、喇叭を聞けば、狐みな小屋を出でゝ待つ。飼主の顏を見分くること能はず。唯鼻にて嗅ぎて之を知る。洋袴を變へて行けば、別人來れるかと思ひて、初めは不安の顏付を爲すが、間もなく鼻にて嗅ぎて、始めて安心す。牡同志は敵視の念熾也。鐵網を二重にして間隔を置くも、互に鐵網を攀ぢて挑み會ふ。時に網の目に引掛けて、睾丸をつぶすもあり。交尾期や出産の際は、人近づくべからず。出産の時に人近づけば、母狐生みたる子を喰ひ殺す。少なきは五兒多きは九兒を生むと云へり。島に唯一戸、館石氏は狐の王なると共に、島の王也。

舟に戻りて、ゆく／＼小酌す、舟にて海鼠を漁するものあり。呼びとめて、長さ四五寸の海鼠三つを十錢にて買ふ。廉なる哉。直に腸を去り、小刀にて切り、海水に洗ひて食ふに、少しも臭味なし。一同舌鼓うつ。されどあまりに硬くして、惜しや余は齒が立たざりき。微雨至り、雲烟浮動す。風なくして波起たず、島の影水に映ず。灣入せる奧に茂浦の部落を見て、舟近く絶壁に沿ふ。見る限り三四百尺内外の低き山也。ほづ／＼赤松立てるが、多くは楢の林にて滿山赭黃色を呈す。進むに從ひて絶壁益奇也。小島、黑岩などいふ巖の島もあり。山裂けて、半町歩ばかりの水田もあり。漁舟を見る。魚ありやと問へば、無しといふ。山脈巖となりて海に突出し、松のみを帶びたり。その岬角より少し離れて、巨巖海中に立つ。二子島と稱す。島と岬との間は、ほんの十數間に過ぎざるが、非常に深し。そこを過ぎて、鷹岩と指すを見れば、なるほど鷹の如き石一つ、巖峯の上に突起せり。このあたりは北に突出する夏泊半島の中央部の更に西に突出せる處にて、巖壁の出入多く、屈曲も多く、中

には幅二三尺、高さ三四丈、長さ七八丈の突出もありて、巖頭に波の花咲き、白鷗飛びかふ。なほ巖壁に沿うて大島までも進みたかりしが、惜しや日暮れむとす。雨は止みたるが、風起りて波高し。急ぎて舟を返す。波ます／＼高く、淺蟲までは行く能はずして、一里ばかり手前の浪打といふ處に上陸したり。それも其筈、陸奥の漁舟は、關東あたりの漁舟よりは、ずつと小さく、且つ底も淺くして、風浪に堪へざる也。淺蟲溫泉にはモーターあり。モーターならば、大抵の風浪は大丈夫なるが、夏期のみ用ゐて、冬期は用ゐず。余は冬期に遊びたれば、目前にモーターの浮べるを見たるのみにて、之を用ゐること能はざりき。されど二回遊びて、ほゞ夏泊半島の勝を探りたり。白鷗の小湊や、椿の山や、天下の珍也。大島や、二子島や、一遊するに足る。いづれも皆淺蟲溫泉の自然を飾りて、絃歌の外に、淺蟲溫泉の價値を發揮するもの也。

四　龍飛岬

青森にては、桂井旅館を定宿としたるが、大町といふ處にあり。その町名屋號は、余の姓名雅號と下の一字が異なるだけ也。一配達夫余に宛てたる郵便をもち來り、小首かたむけて、こんな人が本當にあるのかと問へりとて、宿の番頭笑へり。

北海道の宿屋にて皆然るが如く、桂井旅館にても、晩方のみならず、朝も風呂沸く。或晩方風呂に入らむとせしに、青森に面白き風呂屋あり。中央が風呂場にて、右が玉突、左が洋食、三つ合して一棟になり居れり。試に往いて浴せずやと臥雲云ふ。遠いかと問へば、四五軒さきなりといふ。さらばとて、往いて浴し、洋食に入りて牛鍋を注文す。女中二人の手拭の濡れたるを見て、先きにこゝへ來られたら、無一文にて風呂へ入られざるものをとて笑へり。

臥雲も余も一日中歩かずに、じつとして居れば、腹の具合悪く、氣分も好からず。一日風強く、雨強く、寒さも強し。合浦公園を見に行かずやとて、宿を出でむとす。何處へと女中問ふ。合浦公園を見に行くと云へば、このお天氣にとて笑へり。

青森にては、以上の三笑を博して、余は臥雲と共に、青森を發し、津輕半島の最端、即ち外ケ濱の最端、即ち本州の最北端、即ち龍飛岬の勝を探らむとす。船は八十七噸の小蒸汽船也。午前九時發が延びて十時となり、寄航する毎に荷物の上げおろしに手間どり、夜に入りて、三廐に上陸せり。今や青森は北海道通ひの要津なるが、これ明治以後の事也。その前函館開くるに及びて、恐山半島の大間崎が北海道通ひの一要津なりしが、それよりもずつと古く、三廐は北海道通ひ唯一の要津なり

き。吉田松陰はこゝまで來り、北海道へ渡らずに引返したり。當時三廐人士は松陰の名を知らざりしを以て、その筆跡を傳へずと聞く。若しも源義經が北海道に渡りたりとせば、必ずやこゝより船出せしならむ。ゆかしき土地かな。松前氏の城下にて、明治以前北海道唯一の都會なりし福山は、海上五六里の對岸にあり。この地にありたる松前氏の本陣の跡、今は郵便局となれり。廐屋石とて、奇拔なる巨巖、一半は海に接し、一半は陸に接し、上は樹を帶び、下は穴明きて石門を成す。その廐石より石磴を攀づれば、義經寺あり。立連れる老樹に、寺の由來の古きを知る。峯稜に三十三觀音の石立てり。嘉永年間の建立に係る。多くは大阪の人々の寄進なるが、第十一より第二十までは、江戸の上田屋忠兵衛の寄進也。この觀音を順拜するにつれて、當年の三廐の繁華を推し、近く北海道の山嶽を望みては、間宮、近藤の壯圖を偲ばずんばあらず。

三廐人士の優遇を受けて、工藤此吉翁の別家に滯留すること三日、晝は義經寺に醉ひ、夜は工藤氏の家に醉ふ。三廐のみならず、隣れる宇鐵より有志來り、增川よりも有志來り、凡そ四十人一堂に會し、風浪叫ぶ北陲の冬の空、こゝのみは春の心地して、打解けたる酒宴の裡、可憐なる娘子數人の盆踊を始め、いろ／＼の隱し藝を見もしたり。聞きもしたり。臥雲と余とは無藝にて、唯にやく／＼笑へり。一座の中に目立てるは此吉翁年を問へば八十五歲、齒も丈夫にて、視力も衰へず。去年半島第一の高山なる增川岳に登りたりとは、さても老いて益壯なる哉。北海道の鰊に成功して、家を興し、今は三廐第一の富豪なりと聞く。一言すれば、短小精悍、剛氣眉宇の間に迸る。その孫の靜一氏は、風采美なる青年にて、太田水穗の『湖音』の歌人也。

區長の齋藤孝太郎、村役場の工藤賢藏、小山淸造三氏に導かれて、三廐を發し、津輕海峽の海岸を西へ行く。風强くして舟行すべからず。筧の水、風の爲めに落ちず。落口より捲き上げられ、碎かれ、霧雨となつて飛散す。海も荒れて、萬龍躍れるが中に、兜島、藤島、蠟燭岩などの奇巖我を送迎す。空は物凄きまでにかきくもりて、風の音惡魔の叫ぶかと思はる。宇鐵に至り、牧野逸藏氏の家に迎へられて、ほつと一と息つく。この夜もこの地の有志來り會して、共に飲む。牧野氏よく飲み、よく歌ふ。津輕名物のネブタ踊とて、少女十數人相對して列を成し、扇を翻し、入り亂れて舞へり。

明くれば、風稍收まれり。小舟二艘、一は少し大きくして、一は少し小也。小なる方には工藤賢藏、牧野貞吉、牧野三郞の三氏、櫂を操る者三人、檣を操る者一人、都合七人、大なる方に

は小山清造氏、對島伺治氏、臥雲、余の四人、櫂を操るもの三人、櫓を操る者二人、都合九人、いづれも、これより以上、人を容るべき餘地なし。同時に宇鐵を發す。浪なほ高く、舟の動搖甚だしく、浮沈も甚しく、時々横波を被る。一度は余の頭までも及べり。余等四人毛布を被りて、浪を拒ぐ。されど目は掩はず、膝下濡れて寒きをも忍びて、奇巖を眺め、絶壁を眺め、巖と浪との爭闘を眺む。形は屈すれども、心は屈せず。一身を舟夫に一任し、一舟を天與に一任したる也。小なる舟は、中途に閉口して、兵路といふ部落に上陸したり。誰か神經家が居りしなるべし。我が舟には神經家なくして、目ざす龍飛まで漕ぎつけたり。この部落にても歡迎を受けて、三浦忠一氏の家に滯留すること三日に及べり。

概して我國の太平洋に面する海岸は砂濱の連續なるが、日本海に面する海岸は斷崖の連續也。その日本海に面する本州の海岸の北に盡きむとする處、小泊岬よりその特徴を發揮して、その全く盡くる處、玆に龍飛岬となりて、北に突出す。頂上は草の山にて、望樓の跡あり、手を伸ばさば、北海道の山も攫み得られむとす。福山の市街も判然と見ゆ。後を見れば、高原的の低山波濤の如くに連り、右に小泊岬、左に恐山半島、四方の眺望開けたり。見下す千仞の斷崖の下、一大盤石横はり、中間に一條の吉井水道ありて、偉大なる巖の帶島に連る。西風強き日とて、巨濤日本海より押寄せ、怒つて龍飛岬を打ち、帶島を打ち、幾個の小岩島を一と呑みにす。餘波大盤石の上に躍る。津輕海峽の方よりも小波押寄せて、日本海の波と鬪ふ。龍飛岬下の大盤石は、唯西波と東波との戰場也。龍飛岬は常に波高きが、最も高き時は四五丈に及ぶと聞く。余が遊びし時は一二丈の高さなりしが、それにしても壯觀也。殊に大盤石の上の波と波との戰闘は、天下無双の奇觀也。

土地の有志來り會しての酒宴に、美音にて追分を歌ふものあり。珍らしくも義太夫を語るものあり。ぢよんがら節とて、三味線入りにて、青年二人女裝して、盛んに手を動かして踊れり。龍飛の戸數凡そ七十、井戸は唯一つ、斷崖と海との間に相並ぶ。龍飛と三厩との間は四里内外、十數の小部落あり、斷崖巖島の奇この間に多し。生業は漁業一方にて、鮑の收獲最も多く、柔魚の收獲も多し。牛の角にて鰤を釣るといふに、覺えず好奇心起りて、見せて貰ひたるが、牛の角を削りて鰯の形にし、その一端に釣針を付けたるもの也。鰤は今は釣れざれど、釣る具合を御目に掛けむとて、一老人巖頭に立ち、長き釣棹の先きに釣棹の二三倍の長さの釣糸をつけ、その端に牛の角を結びて、牛の角が殆んど水上に現はれむとするやうにして、横に引く。巧

みなる哉、人間の目にも、鮒としか見えざる也。

歸路は龍飛より小蒸氣船に乘りて青森に向ひたるが、知らぬ事とて、用意を忘れて、午食を得る能はず、酒を得る能はず、煙草を得る能はず。されど船長と語りて、得る所あり。一體船暈は如何にして起るぞと問ひしに、大部分は神經の作用也。その證據は、婦人は夫に伴はるゝ場合は多く船に醉へども、一人立ちになりて、二三人の子供を伴へば、概して船に醉はざる也。いつも船に醉ふ常客あり。或る時その未だ醉はざるに先だつて、海大に荒れたり。顔を青くして大丈夫かと問ふ。今日は受け合ひ難し。覺悟して居られよと、わざと威して見たるに、身をふるはして驚き、手を合せて天を拜し、悄然として船室に入りしも、じつとしては居れず、幾度となくボーイを呼びて、大聲にわめき、どたばたして居たりしが、この時だけは上陸するまで、少しも醉はざりき。船の沈沒を恐るゝの一念、一身に滿ちて、船に醉ふだけの隙間もなかりし也。

五　大戸瀨の奇勝

陸奧の右手の外側、即ち西津輕郡の日本海に面する處に、大戸瀨の奇勝を見る。世に盤石少なしとせざれども、大戸瀨は幅七八十間、長さ五六町、天下無類の大盤石に非ずや。

青森よりすれば、弘前の一つ手前の川部にて、五所川原行の汽車に乘換へ、鶴田に下車して、西方五里、自動車にて鰺ケ澤に達す。大戸瀨は鰺ケ澤を距ること凡そ三里也。元來日本海は冬は大に荒るれど夏は極めて穩か也。太平洋は喜怒一定せざるが、日本海は一定す。冬は必ず怒り、夏は必ず笑ふ也。笑ふ日本海を航海するは、世にも安全なる航海也。されば、鎌倉時代以後は、上方の文化、陸より奧羽に入るやうになりたるが、それよりもずつと早く、日本海より入り居りたりき。明治以前、青森は一漁村に過ぎざりしに、鰺ケ澤は津輕唯一の港なりき。津輕の產物はこゝより出でたりき。津輕の富も文化もこゝより入りたりき。この地に高澤寺とて、青森縣第一の大伽藍あるを見ても、昔の鰺ケ澤の繁華が思ひやらるゝ也。

余は小笠原臥雲と共に鰺ケ澤を根據地として、陸奧西海岸の勝を探らむとす。郡視學の佐藤佐一氏自轉車にて先發し、郡長の熊谷綱介氏東道の主人となり、郡書記の羽賀靜三氏隨行し、余等二人の外に、縣會議員の長谷川義氏も加はりて、五人の身を自動車に托す。關といふ部落にて停車すれば、小學校長の田浦安次郎氏待ち受け、導いて小山の腰に至る。一大老杉群小木を壓し、特立し、雄視す。周り三丈、枝葉殆んど地に達す。千年以外のもの也。龜杉と稱す。側に六七百年前の墓石四五十相並

びて、益古色を添ふ。校長も乗り、村の助役の京谷倫平氏も乗り、小學校の前に停車す。車を出づれば、教員生徒一同門内に整列して余に敬す。校長を顧みて、何か一寸講演すべきかと云へば、それには及ばず。唯お顔を見せて下されたるだけにて十分なりといふ。人に見するに足るべき顔付にあらざれど、見たしとあらば辭せず。人に聞かすに足るべき辯舌もなけれど、噫にては面白くなしと思ひ、「皆様は大に身體を丈夫にして、大に勉强して、大に働いて、日本帝國に盡して下され」とのみ一言して車に上りしが、間もなく北金澤といふ部落に又も停車し、導かるゝ儘に、人家の裏に行けば、偉大なる銀杏我を迎ふ。樹の乳房多く地に入り、幹に合して、凡そ十抱へもあり。げにや老木故國を知る。關を中心として、凡そ一里ばかりの間は、西海岸中最も廣き平地を有する處にて、水田もあり。最も古く開けて、豪族の割據せし處なるべし。北金澤を過ぐれば、山脚直に海に接するやうになりて、懐しや、目ざしたる大戸瀬に達せり。

幅の八七十間は海に突出したる方面の長さ也。長さの五六町は海に横はりて、陸に接する方面の長さ也。唯これ一個の磐石、數萬人を立たしむるに足れり。二三つ幅一間ばかりの割れ目ありて深く入り、怒濤白龍となつて躍り込む。一體に平らかにして、海面よりほんの二三尺も高し、世にも斯ばかり偉大なる磐石あるかと驚く。この大磐石の中に、杯池とて二三尺四方の水溜りあるかと思へば、兜岩、鎧岩、惠比須岩など、小岩峯も屹立す。少し離れて、海中に獅子立てり、後の草の平丘に巖角露はれて、南岩人を見下す。さても造化は大戸瀬に奇工を盡しけるもの哉。前は渺々たる日本海、怒濤怒濤を追ふ。後は唯一面の草の平丘、東西南北どちら向いても山を見ず。背景が物足らぬやうなれども、それが却つて大戸瀬の偉大を擅にする所以也。我れ巖を叩いて、天地の間唯汝と我とあるのみと云へば、怒濤脚下に押寄せて、我狂を笑ふに似たり。

六 松神の百沼

大戸瀬を見れば、西海岸の要領を得たるかと思ひしに、森山のガンガラ穴を見ざるべからず。松神の百沼をも見ざるべからずとて、自動車はなほ進む。海に接せる孤亭に小憩して、田浦京谷二氏と別れ、自動車は號聲を擧げつゝ部落毎に男女老幼を戸外に惹き出して走りゆく。深浦の見物は戻りにして、岩崎に至り、こゝにて長谷川氏下れり。ガンガラ穴の見物も戻にして、濁川の海に注ぐ處に至り、こゝにて郡長下れり。殘れる連中に嚮導者加はりて、濁川を溯る。間もなく二巨巖並立して、水を挾

む。關門の如し。この關門を過ぐれば、山壁と山壁との間、一町若しくは二町、平らかにして、而かも一面の砂原也。小さき流れの一筋白蛇となりて、思ふまゝにのたくる。規模は小なれども、山中に斯く平らかなる川原あるは、天下の一珍たらずんばあらず。山壁時に骨を露はして、奇巖迫り、奇巖迎ふ。色は衰へたれど、紅葉なほ存せり。凡そ二十町にして川原盡きて、崩れたる山の側面につき當らむとす。路を左に取りて、山坂を少し登れば、一沼露はる。少し行けば又一沼、又少し行けば又々一沼、いづれも樹林に圍まれて、背景なかりしが、第五沼に至れば、黒森山近く屹立して、背景こゝに始めて壯觀を呈す。沼の大さはいづれも周圍五六町若しくは十町、小なれども、念珠繋ぎに連續せるは、天下の一奇觀たらずんばあらず。

　引返して關門に來れば、大屋重兵衛氏待ちうけて、日暮し山に登りたるかと問ふ。登らずと導者答ふれば、こゝに遊びて、日暮し山に登らずんば、遊びたる甲斐なしとて、大に不平也。されど、日は暮れむとす。今日は仕方なしとて、相伴ひて森山に來れば、日全く暮れたり。松明に點火して、小舟に乘る。巨巖に圍まれて、自然に小さき港を成せるが、港の一半を占むるばかりの大さの一船碇泊し居りたり。港を出づれば、左の陸つゞきの巨巖の上、平らかにして廣し。左衛門館と稱す。左衛門といふ強盗の住みたる處にて、今もなほ燒米出づといふ。右の海中にも三つ四つの巨巖を見て、左の巖の穴に入る。これガンガラ穴也。入口は幅二間、高さ一間ばかりなるが、中は更に廣く、更に高し。水も深きが、松明の火に底までも見ゆ。舷を叩く者ありたれど、唯寂として靜に反響するのみなるに、いつも蝙蝠多く棲み居るがと訝れば、夜も穴に籠りては、蝙蝠も口も干上る筈なりといふものありて、一同相笑ふ。凡そ四十間にして海水盡くると共に、穴も盡く。されど、十數人は坐するに足るべき傾斜面を存す。人間炎熱に苦しむの際、こゝに來らば夏を知らざるべし。多謝す、造化はこの穴を穿ちて、西海岸の景致を豐富にせる也。

　この夜、岩崎の旅館に有志者歡迎會を開きたるが、宴未だ酣ならざるに、大屋氏起立して、日暮し山の眺望の優れたることを詳說し、是非とも明日引返して日暮し山に登らざるべからずとて、斷定的に大聲疾呼し、口角沫を飛ばして熱誠面に溢る。我意を得たりと、ひそかに喜ぶ。東道の主人の郡長は、明日歸途深浦を見物して、午食に深浦人士の歡迎を受け、日のあるうちに鰺ケ澤に歸る積なりしが、意少しく動く。余之に乘じて、松神白沼の中、唯五沼を見たるだけ也。參謀本部の五萬部の地圖にのれる沼のみにても、僅々十町四方の間に、十五もあり、

昨日見たる念珠繋ぎの五沼の奥にも、なほ二沼あり。殊に大沼は最も大にして、百沼を代表す。日暮し山に登るのみならず、大沼始め、見られるだけの沼を見て、百沼の要領を得たきものなり。余は山水に忠實ならむことを期す。願くは我意を諒とせられよと云へば、郡長終に意を決せり。宿屋に朝食しては時間おくるべきを以て、朝食せずに、早く發し、朝食は握飯にして、途中に食することゝなれり。

明くれば、自動車を走らせて、松神に至り、大屋氏の家に休息す。大屋氏古硯を取り出して示す。その中の端溪の一硯は、明治の初、津輕侯に三十二町歩の地を獻上しけるに、その禮として、賜はりたるものなりといふ。郡長は長谷川氏と共に宿屋に居殘りたるが、大屋氏を始め、同行するもの多く、總勢十四人也。その中に目立ちて老いたる人あるが、健脚青年を凌ぐ。年は七十歳、もと餡賣りて廻りしが、今は村中第三の財産家なりと聞く。先づ不動瀧を見る。高さ四五丈、小さき瀑布なれども百沼見物中の一景たるに足れり。引返して、少し進みて山に登る。上るに從つて、後に日本海開けたり。上り切れば、前に横倉、黒森、大峯小峯の諸峯聳立して、天を摩せむとす。昨日展望を得ざりし遺憾、今日に至りて霽れたり。諸峯林外に沒して、大沼に達す。ほゞ瓢箪の形を成す。今面するは瓢箪の下部なるが、これだけにても周囲二十町あるべし。之を見て、始めて甘心す。池畔に團欒して朝食す。酒もあり。すき腹にこの大沼まで入りて、腹の蟲も躍れり。

大沼の瓢箪の上部をも見物し、なほ濁沼、金山沼、糸畑沼、中水沼をも見物して、日暮し山に至る。後に仰ぐ黒森や、横倉や、大峯や小峯や、高くして雄也。前に見下す日本海や、廣くして壯也。濁川の全溪も脚下に開け、紅葉の殘粧なほ大地を飾る。大屋氏の希望、茲に遂げたり。百沼の要領を得て、余も心躍る。導者の言に據れば、沼は大小三十二ありと云へり。嗚呼多い哉。而かもそれが十町四方の裡に集まれり。噴火の跡か、陷沒の跡か、沼は小なれども、數でこなして、天下の珍たらずんばあらず。大戸瀬は世に知られたるが、百沼は、未だ世に知られず。余茲に百沼探勝の陳呉となる。劉項はやがて出づべき也。

深浦にても有志者歡迎會を開けり。鰺ケ澤以南第一に位する小市街也。奇巖に擁せられて、海水深く灣入す。鰺ケ澤よりも前に開けたる港なるべしと思はる。老樹深き處、圓覺寺に詣でたるが、仁王門さへありて、思ひの外に觀音堂の大なるに驚く。先の住持の遺作を見て、更に驚く。八萬四千人の髮を集めて刺繍したる涅槃像、さても非凡の精力なる哉。明治天皇崩御の際、祈願の爲めに、金泥にて經文を寫したるに、こは金を溶

かすことに失敗したり。今上陛下御病氣と聞きて、又も祈願の爲めに、このたびは金の溶し方に工夫を凝らして、見事に成功したる金泥の經文もあり。その成功したる金泥にて描きたる金剛胎藏兩界の曼陀羅もあり。梵字を集めて描きたる五輪塔もあり。いづれも非凡の精力を發揮せり。萬古永遠、根氣の標本たるに足れり。海浦義觀と稱す。手先の根氣のみならず、學殖深くして、識見もあり。修驗道を獨立せる一宗となさむとて、大に盡力せしが、空しく志を齎らして、去年示寂せりといふ。山林叢澤の身、師を叩かば、益を得ること多かりしなるべし。年齡を問へば六十八歲、病氣を問へば卒中、酒はと問へば、酒も烟草ものまざりきを云へり。大戸瀨の大弊岩、松神の百沼、森山のガンガラ穴に、圓覺寺の古刹を點じ、なほ義觀師の遺作を點じて、陸奥の西海岸も亦一遊すべき處也。余は陸奥第一の大伽藍なる高澤寺に、鰺ケ澤俳人の歡迎を受けて、陸奥の西海岸を去れり。

七　野邊地灣の水族

曾て東京灣に舟を浮べし時、漁夫に灣内の水族の種類を問ひたりしに、『いな』、『ぼら』、『黑鯛』、『せいご』、『鱸』、『蝦』、蝦に『しばえび』と『車蝦』との二種あり、『かれひ』、『こち』、『こはだ』、『しこ』『このしろ』、『あいなめ』、『もよ』、『はせ』、『きす』、『河豚』、『さより』、『だつ』、これは『さより』に似て長し、『たち』、『鯵』、『あなご』、『ぎんぽう』、十月頃『鰯』の來ることありと云へり。野邊地灣の漁夫に灣内の水族を問ひしに、曰く『かれひ』、曰く『そい』、頭大にして長さ一二尺、曰く『あぶらめ』、身に赤味ありて長さ一二尺、曰く『鯛』、曰く『鱸』、曰く『金がしら』、曰く『鮫』、鮫には『かどざめ』、『かのこざめ』、『もさめ』あり、『かのこざめ』は長さ三尺ぐらゐなるが、『もざめ』は一丈もありて、口の長さ四尺、人を食ふ、曰く『帆立貝』、動き行くなり、曰く『赤皿貝』、岩に附着して動かず、野邊地灣内にても、唯横濱にのみ棲む、曰く『ほや』、殼なし、大さ兩手を合せたるくらゐなり。曰く『鮃』、曰く『かぜ』、二種ありて、『くろかぜ』は刺ありて、味旨く、『ほだかぜ』は刺なくして旨からず、製造したるを『雲丹』といふ、曰く『鮑』、曰く『鰯』、これに、『せぐろ鰯』、『七つ星鰯』、『中ば鰯』、『大ば鰯』の四種ありて、『大ば鰯』最も旨し、曰く『ちか』、鰯に似て、色黄なり、脂肪なければ、脂肪を嫌ふ人の食ふに適す、曰く『にしん』、曰く『鱈』、曰く『鮭』、漁極少なし、曰く『さば』、大と小とありて、大なるは脂肪あり、曰く『河豚』、大なるは二尺もありて、その皮を玩具の太鼓に製す、曰く『松魚』、小松魚にて、長さ一尺五

すぐらゐなり、曰く『いるか』、大なるは七八間、小なるは四尺、腹白くして透き通る、鮫は然らず、『いるか』は二三里の間列を成す、鯨と同じく潮を噴く、曰く『いか』、これに『眞いか』、『耳いか』、『豆いか』、『ごいか』あり、『豆いか』は小にして二寸ぐらゐなり、『するめ』にするは『眞いか』なり、『ごいか』は舟の如き骨あり、この『いか』のみは墨を吐かず、曰く『章魚』、『いひだこ』のみ居りて、大なるは居らず、曰く『鯵』、曰く『鯨』、大なるは十間もあり、三年前に餘り多く來りて、舟を出すこと能はざりき、曰く『かみきり』、長さ十間もあらむ、他の魚類の脊鰭は傾斜せるが、『かみきり』のは直立す、鯨は舟を避くれど、『かみきり』は避けず、最も大にして、最も恐しきものなり、曰く『うごひ』、曰く『はも』、曰く あさり』、『はまぐり』は居らず、曰く『とど』、形、馬の如し、『あざらし』も、『おつとせい』も居らず、曰く『そうびよう』、上顎三寸、下顎一寸、曰く『こなご』、『あなご』に似て小なり、曰く『まんばう』、圓くして盆の如く、四五尺四方もあり、海月のみを食ふ、曰く『黒鯛』、四五尺のものあり、曰く『龜』、先年長さ三尺、體量四五十貫の大龜を捕へ、酒を與へたるに、五升飲めり。曰く『なよ』、『そひ』に似たり、長さ四五尺、體量四五十貫、之を食へば長命なりと云ひ傳ふ、曰く『ぼら』、曰く『飛魚』、曰く『蟹』、二種ありて、『もう蟹』といふは、松葉蟹に似て、足短く、且つ大なり、毛も生ひたり、『ひら蟹』といふは、親指だけ大にして、他は小なり、『もうがに』より少し大なるが、味は劣れり、曰く『蝦』、『がさえび』といふは鎌倉蝦に似て、手なく、唯人間の如く二本の大手のみあり、うつかり捕ふれば、尾を曲げて人を刺し、血を出す、蝦の中の豪傑なり、曰く『かます』、曰く『海月』、三尋ぐらゐのものもあり。先づこれ也。一言すれば、東京灣の水族は内海的にして、野邊地灣の水族は外海的也。

漁夫なほ語をそへて曰く、野邊地灣にて鮹をとりだしたるは、二十年來の事也。又曰く、章魚人に吸ひ付けば、三四人かかりても離す能はざるが、頭をひつくりかへせば、造作もなく離るゝ也。又曰く、恐山半島の海岸にて、猿と章魚と相闘ふ。章魚、猿を海に引入るゝかと思へば、猿、章魚を陸に引上ぐ。一進一退、勝負容易に決せざりしが、猿は終に同類の援兵を得て、章魚を斃せり。これ我祖父の實見せる所也。

八 恐山

東北本線の野邊地驛より右に分岐すれば、汽車は絶えず野邊地灣に沿ふ。横濱を始め、部落いくつもあるが、概して濱生えたる砂原、一望十里、放牧の馬散在して嘶きあふ。内地に珍ら

しき光景也。田名部を經て、大湊に果つ。田名部よりするも三里、大湊よりするも三里、恐山は陸奥海岸線の山也。

小笠原臥雲、太田吉司二氏と共に田名部に至りしに、菊地門五郎氏、河野榮藏氏を始め、田名部人士の好遇を受け、殊に下北郡役所の好遇を受けて、郡書記の山本角次郎氏に案内せられ、自動車を驅つて恐山半島の北岸に出で、硫黄泉の下風呂溫泉に浴し、大間崎を經て、恐山半島の西岸を回り、五日目の午頃、脇野澤に上陸し、有志の歡迎を受け、徒歩して川內に至りしに、菊地與太郎氏に迎へられて、其家に宿る。その家壯麗にして、宮殿の如し。夫人に京音ありて、料理も上方風也。氏は材木に成功せる富豪なるが、祖父は錢屋五兵衛の舟夫にして、加賀より移住せりと聞く。折りしも八幡宮の祭禮の日也。夜、主人に導かれて、八幡宮に詣で、神前に神酒を拜受し、大和扇をも拜受す。祠前に二組の盆踊あり。市街は神燈に輝き、道路は人の山を成す。往復ともに山車を見る。一は惠比須、一は大黑、一は布袋、一は辨天、今一つ『海の山』の山車ありと聞く。山車の東京に廢れたること久し。四十年の昔を思ひ出して、夢かとばかり思はるゝ也。

川內より大湊まで、自動車を走らす。こゝは要港部となり居るを以て、我等は參謀本部五萬分の恐山半島の地圖を得る能はず。盲人の杖を失ひたらむ心地して、緩き傾斜面を登る。太田氏は耳痛甚しきを以て、休養せむとて、直に田名部に向へり。少し上りて見返れば、あら見事や、大小數十の軍艦、大湊灣の內外に浮べり。一艦より繫留飛行船上り居れり。無數の短艇、往くもあり、還るもあり。飛行機一つ我頭上を飛べり。

一里半にして、田名部よりの路と合す。いづれの路も距離は同じけれども、大湊よりの路は小也。田名部よりの路は大にして、自動車を通ず。茶店に休息して居りしに、水兵幾組となく走り行く。自分勝手の遊覽に非ずして、競走の樣子也。中には落伍して、茶店に休息するもあり。一天急にかきくもりて、驟雨盆を覆す。初茸採りに行き居りし主人公びしよ濡れになりて、戾り來る。隨行の犬もびしよ濡れ也。身をふるひても水殘る。首を回らして舐めたるが、舌の屆かぬ部分あり。留守居の犬つと來りて、代り舐む。嗚呼澆季の世、人間は同情を失へるもの多きも、犬は失はずと感歎す。

雨霽るゝを待つて發足す。茶屋あたりまでが登りにて、茶屋よりは前の半分が平地にして、後の半分が下り也。その代り茶屋までは展望あれど、茶屋よりは全く深林の中に沒す。脚下に恐山湖見ゆるに及びて、覺えず心踊る。三途川を渡る頃、水兵走り來りて、恐山は何處なるかと問ふ。三四町先きの寺のある處

なりと答ふ。身既に恐山の山上にありながら、恐山の何處なるかを問ふは、迂濶なるに似たれど、無理もなし。元來恐山とは原名の宇曾利山より轉じたるものなるが、恐山湖を中心としたる朝奈嶽、圓山、大盡山、北國山、釜伏山、針の山、劍の山、屏風山などの群峯を總稱す。別に恐山として孤立せる峯あるに非ず。然るに水兵は軍艦より近く仰ぎたる釜伏山を恐山中の一峯とは氣付かず、恐山といふからには、釜伏山ぐらゐの高き山なるべく、茶屋より下る一方にては達せられざるべしと思ひ込みしならむ。湖畔の寺のある處を恐山といふも可笑しきやうなれど、山中これより外には宿る處なく、地藏堂こゝにあり、納骨堂こゝにあり、溫泉の浴場もこゝにあり、いろ〳〵の地獄こゝにありて、恐山に登るものは、こゝまで來りてこゝより歸りければ、恐山といふ總稱が中心の一點地に通用せらるゝやうになりたる也。

噴火の餘勢硫烟を吐き、熱湯を湛ふる處は、我國何處にても、地獄の稱あり。而して地獄のある箱根山にしても、立山にしても、この恐山にしても、人の死後行く處なりと信ぜられたり。今やその信仰は殆んど絕えたり。存すとも、薄らぎたり。恐山の地獄その物も昔の勢を失へり。されど偉大なる地藏堂あり、靈泉あり、湖山の美景あり。恐山は今もなほ死者の冥福を祈らむとて參詣するもの多く、湯治の客も多く、觀光の客も漸く多からむとす。

寺に請ぜらる。横内義輝氏前日より登りて、余を待ち居りたり。氏はこの恐山湖に魚を養はむと志して、その弟の殿名安五郎氏をして直接事に當らしむること十年、未だ成功せざれども、毫も屈する色なし。世にも堅忍不拔なる哉。對岸に殿名氏の住める家一つあるのみにて、今もなほ寺の外には住家なし。門より本堂まで三町もあらむ。左に僧房客室長き一棟をなし、右に自炊の客室連れり。浴場は地藏堂のすぐ前に二つ、少し離れて三つあり。客房と自炊室とを合すれば、數百千人を收容するに足るべき設備也。地藏菩薩は多く路傍に立ち、往々にして悪戯小僧に首をもがれ給ふ。堂あるは稀也。殊に恐山の如き偉大なる本堂は、天下の珍也。その本堂のすぐ前に浴場ありて、佛德に心を清むると同時に、靈泉に身を清むるは、恐山を措いては、他に其比を見ざる所也。寺は圓通寺と稱して、山下の田名部の圓通寺に附隨す。恐山湖の東岸にあるが、水際よりは二三町隔れり。

箱根山の大涌谷と蘆の湯とを箱根町にもち行けば、それがそつくり恐山也。箱根の蘆の湖は南北二十町東西一里なるが、恐山湖は周回二里、ほゞ圓形をなす。四面山に圍まる。その群山、

東の一半は短く且つ小にして、西の一半は高く且つ大也。最北に朝比奈嶽、次に圓山、次に大盡山、次に北國山、次に釜伏山、五峯順次相並ぶ。高さは朝比奈嶽が第一、釜伏山が第二、大盡山が第三、北國山が第四、圓山が第五といふ順なるが、さばかりの差はあらず。最高の朝比奈嶽が三千尺内外かと思はれる。五峯の中にて、大盡山が、中央に在り。側に小盡山を控へて、恐山湖の西岸に君臨す。而して四面どちらより見ても富士形を成す。恐山湖の美の一半は、この大盡山に在り、路ありやと問へば無し。古來少數の樵夫の外には、誰も登りたるものなしといふ。登らむ哉、山嶽黨の身、豈に空しく大盡山を下より眺めて去るべけむや。

寺男の吉野種次といふ老人が大盡山に登りたることあるのみにて、住持も登らず、多くの徒弟も登らず、多くの世話役も登らず、多くの寺男も登らず、吉野老人を先に立てゝ登らむと云へば、いづれもみな勇み立ちたるが、寺を空しうべくもあらず、寺よりは世話役の川村德三郎氏、寺男五人、客は蓑魚の蝦名安五郎氏、山本角次郎氏、戸來健次郎氏、余を加へて、總勢十人、舟にて發す。小笠原臥雲は用事ありとて、舟まで見送りて、その足にて下り行けり。西岸は直に岸かと思ひの外、入江となりて蘆生ひたり、その入江小川となりて、蘆と蘆と相接す。恐山湖もこのあたりは、山湖にして平湖の趣を兼ねたり。舟を[illegible]て陸に上れば、路なきかと思ひの外、川内へ通ずる路ありて山に導く。木立清蔭を布き、溪水我を迎へて語る。峠の少し下より路と別れて、急なる傾斜面を攀づ。木の大なるは山毛欅、雜木、小なるは黒もじ、『せん』の若木、この若木は刺ありて人を刺す。長ずれば、刺なし。少年時代の腕白、却つて壯年以後に温厚となるの類にや。辛うじて、根曲竹の藪をくゞりて、うれしや頂上に立てり。而かも巖にて尖れり。九月の中頃の上日和也。恐山湖の明鏡に峯巒の倒影を見下し、轉じて陸奥灣を望み、八甲田山を望み、岩木山を望み、陸奥の全體を望み、津輕海峽の彼方に、北海道の惠山を望み、駒ヶ嶽を望み、太平洋をさへ望みて、心神飛揚す。巖頭に團欒し、先づ一杯を山神に捧げて、酒宴を開く。登りたる甲斐ありとて、一同大に喜ぶ。天地開闢以來この峯頭に立ちたる人はあれど、酒宴を開くは、我一行に始まる。今日の喜びを後來の遊者にも分たずやと云へば、然り／＼、明年は路を開かむと川村氏云ふ。吉野老人も云ふ。樂しき一時間を峯頭に送りて、舟に上りし時、明星一つ見えたりき。

朝比奈嶽は、下北郡第一の高山にして、恐山の盟主なるのみならず。恐山半島の盟主也。この山を閑却しては、恐山の山水

に徹底せざるなりと、山嶽黨の本色を發揮すれば、一同賛成したるが、日歸りが出來ぬかも知れざれば、野宿の覺悟して行かざるべからず。と、いよ〳〵出でゝ、いよ〳〵山嶽黨の本色を發揮すれば、これには驚く。同行は寺より川村世話役、案内役として吉野老人、人夫として若き寺男、客よりは余一人、いづれも野宿を厭はざるもの也。養魚の鍜名氏は野宿に辟易せざれど、義弟の結婚式に臨まざるべからずとて加はらず。遺憾千萬なりといふ。こちらから云へば、御尤も千萬也。

鍋、米、副食物を用意したり。雨具は用意せず。寺を出でゝ間もなく、三四町歩もある平地、雜草生ひたるが、畑を作りたる跡見え、本大きく末小さくして、乙字形に曲れる胡瓜一つ地に萎す。如何なれば荒蕪に付するぞと問ひたるに、折角耕作しても、兎に食はれて仕舞ふを以て、斷念したるなりといふ。權兵衛が種まきや鳥がほじくるといふ俗謠、つく〳〵身にしむ。平地の農夫は鳥雀と闘はざるを得ず。山中の農夫は猛獸毒蛇と闘はざるを得ず。愛國の士は輕佻浮薄の徒の軟化し、惡化し、赤化して國を毒する者と闘はざるを得ざる也。

二里半の路、前半は林樹を穿ち、後半は溪流に沿ひて、午前十一時、藥研溫泉に達す。一町ばかり下の一屋を加へて、山中の二軒屋也。主人は獵夫にて、年々必ず四五頭の熊を獲るといふ。如何にして熊を獲るぞと問へば、銃をも用ゐれど、多くは犬に追はせて、出て來るを手槍にて突くとて、手槍を示す。巨獸咆哮して、鮮血白雪を染むる光景も眼前に見えて、凄氣鋒先に迸る。山中には剛の者も居るもの哉。

午食して、大畑川の右岸を上る。左より支溪來り會して、五六間ばかりの橋の高く架れる處より左折して、數町行きしに、路盡きたり。吉野老人小首を傾く。これより溪谷を縫うて行くかと思ひしに、待つて居れとて、獨り戻り行く。待てど〳〵來らず。川村氏は晝睡を始む。若き寺男は巖頭に踞して默々たり。少し上つてくるとて、余はぶら〳〵溪谷を溯る。溫泉附近より上の大畑川は、幾十町となく、一枚岩の連續也。その一枚岩一傾して瀧となり、深く陷りて數十尋の淵となる。恐山の風光に異彩を放ちて、內地に稀なる風景也。支溪も一枚岩也。先を急がぬ散歩とて、歩々巖を味ひ、樹木を味ひ、水の流を味ふ。色まだ淺けれども、紅葉したる樹もあり。一鳥啼かず。溪流微吟す。上體にシャツ一枚、歩けば暖かなれど、休めば冷か也。日當りよき岩の上に踞して日向ぼつこしながら、流るゝ水に心を遣る。烟草に火を點じたるマッチを足の前に落せば、足の前は一尺以方の小渦を爲し居りて、マッチくる〳〵とまはる。渦外に出でず。敷島一つ吸ひ終へても、マッチなほ渦内をまはる。

頭上より一葉ひら〳〵落ちて、マッチの上に重るよと見る間もなく、相共に溝外に出づ。出づるよと見る間もなく、溪風一陣木の葉は空に捲き上げられて、マッチ獨り流れゆく。

又も烟草を吸ふと共に、マッチを落して、まはらせ居りしに、若き寺男來りて戻れといふ。戻りて橋に至れば、吉野老人待ちうけ、溫泉に戻りて、聞き直して、やつと見當つきたるが、時すでにおそし。一時間も歩けば、露宿の用意せざるべからずといふ。さらば今夜は溫泉へとて引返す。余ひとり露天の岩風呂に入りて、溪魚の游ぐを見る。あとの三人は釣竿を肩にして出で行きしが、五尾の岩魚を釣り得て、晩食の膳にのぼす。魚腥を好まざる余にとりては、さまでの事もなけれど、寺の三人は大に喜んで食ふ。寺は精進を嚴守して、客饌が詰の肉を食ふことをも許さゞる也。

吉野老人一人にては覺束なしとて、一人の杣頭、自ら進んで一行に加はる。猿や、犬や、日本一の黍團子に釣られて桃太郎に隨ひたるが、この杣頭は、全くの義俠心に動けり。名を問へば、加中榮三郎と云へり。昨日の橋を渡り、大畑川と別れて登るに、なほ路あり。この路は湯川溫泉に通ずる也。いつ路と別るゝか、まだか〳〵と思ひつゝ行きしに、左の支路に入れり。まだ路あるかと喜ぶ間もなく、根曲り竹の藪の中に盡きたり。傾斜は急ならざれども、根曲り竹簇生して、進むに、足よりもずつと手を勞す。十分かゝりても一町とは歩けず、而かも其竹人よりも高くして、方向を辨ずること能はず。濃霧の中を行くが如く、又暗中に模索するが如し。時々山毛欅の林あり。その林、殊に老木の林に入れば、根曲り竹あるにはあるが、いくらか短小にして、且ついくらか疎也。大木より大木へと目ざして登る。杣頭の心中には、自から進んで案内せむと廣言したる以上は、どうしても峯頭を探し當てざるべからずといふ責任觀念あるべし。吉野老人の心中には、外來の案内者にすがりては、客に對しても面目なしといふ懊悔の念あるべし。相競うて先登す。孰れが佐々木高綱となり、いづれが梶原景季となるか。二人離れては合し、合しては離る。あちらにて『おうい』といへば、こちらにても『おうい』、『おうい〳〵』の聲絕えず木魂にひゞく。

余はこの場合、吉野老人も來客に一歩を讓り、杣頭に先登させて、廣言の手前、その顏を立てさせたきものなりと思ひしが、果して一と足早く絕頂を發見せり。余その勞を謝して顧眄す。朝比奈嶽は、このあたりにて、啻に最も高きのみならず、最大也。頂上も廣し。且つ樹木に掩はれたり。折角絕頂に立ちても、果して展望を得るや否やと氣遣ひしが、うれしや、廣き頂上の中にて、絕頂だけ少し高し。樹木もこゝのみは缺けた

り。根曲り竹あれども、短小也。今日も天氣よし。四方を見渡して心伸ぶ。殊に登攀の勞昨日に數倍せるを以て、目的を達したる後の愉快さは昨日よりも多し。函館の臥牛山さへ見えて、恐山湖の展望は大盡山に少し劣る代りに、四方の展望に於て勝を制せり。野宿に用意せし鍋こゝに役たち、酒さへありて腹の蟲も喜べり。

歸りは南をさし、根曲り竹を押分くること三十分にして、恐山より湯川へ通ふ路に出でたり。時に四時半也。つるべ落しといふ秋の日、間もなく落ちむ。恐山へは三里、湯川へは二里、いづれにしても途中にて夜に入るべけれども、湯川ならば夜路短くしてすむといふに、さらば湯川へとて、西に下る。夜路は三十分ぐらゐにて盡きて、湯川の燈火笑つて我を迎へぬ。

恐山溫泉は硫黄泉也。藥研溫泉は明礬泉也。湯川溫泉も明礬泉也。戸數七軒、山中の別天地也。東すれば恐山へ五里、南すれば川内へ四里、北すれば佐井へ六里、西すれば牛瀧へ五里、東北すれば藥研溫泉へ四里、更に二里すれば、津輕海峽の大畑に達す。一泊して杣頭と別れ、二時間にして昨日朝比奈嶽より下りたる處に至り、更に三時にして恐山へ戻れり。湖岸に出でし時、蝦名氏の家に立寄りしに、戸閉ぢたり。結婚式よりまだ歸らざるならむとて、湖岸をたどりしに、一艘の恐山方面より出づ。湖心に來りて人の形を辨ず。男一人舟を漕ぐ。婦人一人、小兒三人、外に一匹の犬、顔はわからざれども、それと知る。

蝦名氏の一家眷族擧つて一舟の中にある也。こちらよりも萬歳、舟の中よりも萬歳、こちらの萬歳は結婚式の首尾よく終りしを祝する也。あちらの萬歳は朝比奈登山の成功を祝するならむ。

藥研溫泉に一泊、湯川溫泉に一泊、恐山溫泉に三泊して、恐山を下らんとす。それも直ちには下らず、釜伏山を經て下らむとす。同行は唯川村氏一人のみ也。連日の好天氣一變して、微雨至れり。されど釜伏山は恐山の奥院とて、夙に開け、頂上に祠もありて、路は恐山よりも通じ、大湊よりも通ず。三日の登山の中にて、今日が最も平易也。湖東より湖南へまはり、一の澤に沿うて深林の中を登ると思ふ間もなく、林盡きたり。見上ぐる釜伏の一山、骨を露はして、天半に雄視す。こゝの巖壁には高山植物もあり。雨も霽れて、絶頂に展望を得たり。恐山湖の展望は大盡山に讓り、津輕海峽の展望は朝比奈嶽に讓るが、その代り野邊地灣の展望にて優れり。恐山半島の山はみな木の山なるに、この山ひとり岩の山也。山相が奇拔也。男性的也。而してこの山にのみ高山植物を見る。釜伏、大盡、朝比奈の三山に登りたらば、恐山に登りたりと云ひて可也。好しや湯川は閑却すとも、藥研は閑却すべからざる也。

大湊に下れば、山本氏自動車にて迎へに來る。案内役を寺に讓つて、一と足先に山を下りしが、今來つて最終の美を濟せる也。太田氏も來りしが、その耳の病は癒えたり。田名部に至りて圓通寺に迎へられ、一泊して、太田氏と共に恐山半島を去れり。

九　恐山半島の長大絶壁

鴎の蕪島や、白鳥の小湊や、椿山や、大島や、二子島や、龍飛岬や、大戸瀬や、森山のガンガラ穴や、松岬の百沼や、恐山や、青森灣の淺蟲温泉や、津輕海峡の下風呂温泉や、世にも長き陸奥の海岸線を飾る花なるが、花の中の花にて、天下無類の壯觀といふべきは、恐山半島の長大絶壁也。

余は曾て紀行文を作つて、世に公にしたることあるを以て、玆には單に大要を紹介するに止めむ。その天下無類の長大絶壁といふは、恐山半島の西海岸の福浦より九艘泊まで、凡そ五六里の間也。その間、牛瀧といふ小部落ある處と武士泊といふ名あつて人家なき處とに寸隙あるのみにて、他はすべて絶壁の連續也。臺灣の東海岸は知らず。日本中他には斯くまで高く、斯くまで長き絶壁なし。十和田湖には千丈幕とて、凡そ一里に亘れる大絶壁あるが、十和田湖を我庭の如くに思へる小笠原太田二氏も、さすがに舌を捲いて、とても千丈幕などの及ぶ所に非ずと斷けり。絶壁は高低參差たるが、最も高きは二千尺もあるかと思はる。巖の色は黒きあり、赤きあり、青きあり、黄きあり、白きありて、五彩燦爛たり。出入あり、彎曲ありて、絶壁に變化を加へ、瀑布懸りて、一層の趣を添ふ。巨巖水際に羅列し、海中に散布す。絶壁の上は古來交通なく、樹木斧斤を免れて、山猿今もなほ棲む。背景には津輕半島の連山あり、北海道の連山あり、八甲田山あり、岩木山あり、特に勝れたる場所を大崎となし、佛濱となす。佛濱は巖質軟にして、白く若しくは黄ろく、波濤の齧るが如きあり、鳥の翼を張れるが如きあり、獣の踞るが如きあり、仙人の行列の如きあり、塔の如きあり、門の如きあり、凡そ一里の間に奇を盡し、怪を極む。大崎は絶壁中最も雄大を極め、堂々として人を壓す。佛濱は福浦と牛瀧との間にあり。大崎は牛瀧と武士泊との間にあり。佛濱の奇拔と大崎の雄大と相待つて、恐山半島を代表せり。

斯ばかりの勝景も古來唯附近の漁夫が知れるのみにて、恐山半島の人士には知れ渡らず。我縣下に斯る壯觀あらむとは陸奥人士だに夢にも思はず。況んや天下の風騷の客をや。名玉空しく山に埋れ、遺賢徒に野に老ゆ。嗚呼惜しい哉。この壯觀を遊覽したるは、我一行に始まれるが、一行中の先達は太田吉司氏也。氏は青森佐井間の舟中より遠望したることありて、必ず壯觀なるべしとて、我等を導きたる也。

（完）

新内閣閣僚人物評論

新内閣と其閣僚

石川半山

加藤内閣が出來た、私は此の内閣の成立せんことを望んで、聊かながら努力もした一人で有るから、新内閣の成立は、大多數の國民と共に、大に喜ぶ所で有る、それに付て、加藤首相を始め、各大臣の人物評論をと云ふことだが、彼等は何れも天下の名士で、これ迄既に世間定評の有る人々で有る、私が特に此等の人々に關して、世人の知らない様なことを知つて居るわけもないから、飛び離れて奇拔な批評が出來るとは思はない。

首相加藤高明子

新内閣の總理大臣加藤高明子は、識見の卓越せる人で有る、私は多くの政治家を知つて居るが、其の識見の一點に於ては、當代加藤子に及ぶ者は有るまい、前駐露大使加藤恒忠氏の談に、陸奥伯の外務大臣の下に、加藤子が政務局長、原敬氏が商務局長、小村壽太郎侯が飜譯局長で、能く議論を戰はしたが、其の討論に於て、加藤子と原氏とは相當り、双方一歩も屈しなかつたと云ふことだ、小村侯は多く沈默して居たが、時々雄大なる發言をするので、侮られない人物と思はれたさうだ、原氏は詭辯を弄して、人をやり込める力は、常人の當る可らざる者が有つたが、加藤子の意見は、いつも正々堂々たる者で、敵の突入すべき間隙がない、伊藤博文公は一代の論客で、雄辯宏辭傾聽すべき者が有つたが、之に匹敵する者は、大隈重信侯の外になかつた、加藤子はどちらかと云へば、大隈侯よりも伊藤公に近い、伊藤公は人と談論する時、對手の發言に對して、多くノーを以て始めた、同じ様な意見でも、少しの差異が有ると、

『イヤさうではない』と打ち消してかゝつた、大隈侯は大布呂敷で、對手の發言に、多くエースで始められた、何でも『ウムさうだ』と言て、大體の所は、贊成して、自分の意見を吐かれた、時として全く反對の意見でも、發言はエースで始め、『君の意見は尤もだ、然し』といつの間にやら一轉して、反對となつて居ることが有つた、加藤子は久しい間、伊藤式で有つたが、それは永い間責任ある地位に居た爲めで有る、然るに最近數年間は、民間政黨の首領で、多くの人に調子を合する樣になり、大分大隈式になり、本來の伊藤式と平均して、最も良好なる程度となつて居る、恐らくは當代に於て、政治上の問題に付て、議論をして、加藤子に打ち勝ち得る者は有るまい、頭腦明晰で有て何の問題でも能く分かる。知識が該博で、內外の事情に精通して居る、外交は勿論、當代の第一人者で有るが、財政の事も、曾て大藏省の局長を務めたことが有て、十分に分かる人だ。

加藤子の資性は正直で、嘘をつくことが出來ない、原敬氏は嘘を くことが上手で、鐵面厚顏で有つたから、政友系の人々には、 く嘘をつくことを、政治家の資格の如くに考へて居る者も有るけれど、それは誤りで有る、眞の大政治家の資格は正直で信義を守る人でなくてはならぬ、無責任は政治家の禁物で、無責任の政治家が、政權の地位に在て、嘘八百で其の目前の難關を切り拔けて往く時、國家の綱紀は紊亂せざるを得ない、或る人は加藤子を以て、融通のきかない人と云ふが、必ずしもさうではない、相當に寬大なる胸襟を有し、相當に包容力も有るが、唯當世流行の僞豪傑や自稱天狗や、虛僞と詐瞞とを以て向ふ者に對しては、斷然之を排斥する勇氣を持つて居るのだ。

彼れが元老に阿諛せず、西園寺公や松方公をも、餘り訪問しない事を以て、如何にも傲慢なる態度の如くに言ふ者も有るが、それは國士として當然の事で有る、全體一國の大政治家にして、常に元老の門を叩くと云ふのは、不見識の至りで有る。加藤子が總選擧に、大多數を制し得て、堂々として內閣組織の大命を拜したのは、其の力を以て、天下を取り得たので有る、清浦子などの如く、元老の幇間の如き態度で、僅かに數月間內閣首相の地位に就き得たのとは、其の趣が違ふ、此の容易に元老の門を叩かざる強項に對して、國民は寧ろ多大の敬意を拂ふべきではないか。

組閣の大命を拜受して後、直ちに高橋、犬養兩氏を訪問したのは、彼れが正直な所で有る、彼れは護憲運動を共にしたる政友に對して、かくして敬意を拂うたので有る、それから兩氏に

對して、先づ新内閣の執るべき政綱を示して、賛同を求めた所は、眞に立憲政治家の道を盡した者だ、苟くも政綱に不同意ならば、共に往く可らず、之に同意するならば、相提携して進むが本筋で有る。其の椅子の如きは、抑も末節で有る、そこで兩氏も忽ち入閣を承諾するに至つた、兩氏共に護憲運動を起して清浦内閣を倒した以上は、進んで入閣するの外ないのだが、加藤子が此の如くにして、其の道を開かなくては、組閣はあんなにスラ〳〵と速かに運ばれる者ではない、兩氏も立派な者だが、加藤子の信義を尊重して、兩氏を訪問した所が、彼れの組閣に成功した所以で有て、彼れの美しい性格の現はれた所だ。

農相高橋是清氏

政友會總裁高橋是清氏は心の良好なる人で有る、原敬氏が殺されて後、高橋氏が總裁に推され、首相の任に就いた時、或る人が『高橋氏も亦殺されはせぬか』と危んだが、私は之を打ち消して、彼れは決して殺されないと言つた、星亨や原敬は、殺される資格が有るが、高橋氏は愛嬌が有て、人から殺される資格を缺いて居る、楠本正隆、川口卯吉、松田正久諸氏は如何に激烈なる政爭の渦中に投じて居りても、何れも春風駘蕩の徳が有て、人が彼等を殺す氣にならなかつたが、高橋氏も亦其の類の一人で有る、彼れは少しも意地の悪るい所がない、小供が頭を叩いても、それで怒る氣にはなれない如く、高橋氏は至て無邪氣で有るから、人には憎まれない。

高橋氏が原氏の後繼者となつたのは、彼れに取て、決して幸福ではなかつた、現代政黨の首領は、子分を養ふに少からぬ金が入る、原氏は八方から金を奪ひ取て、能く之を散じて、二百八十餘の代議士を、其の手に押さへて居たが、高橋氏は八方から金を集める力が足らない、政治上の道樂に費やす金は、[illegible]や邸宅を賣つた位の事で足るわけの者ではない、そこで隨分からぬ借金をして、其の日を立てて居る樣だが、人に金を與へる方法も、原氏の如く上手でない。原氏は金を活して用ふる道を知て居たが、高橋氏の使ふ所の金は、多く死金で有る、是れ政友會が分裂して、半分以上政友本黨に走しつた所以で有る。

加藤首相が彼れに入閣を勸めた時、高橋氏が之を快諾したのは、單に彼れが無邪氣で有るばかりではない、政友會の實情を透見する者は、彼れが進むべき道へ進んだことを知るで有らう、彼れのお尻には、既に火が燃え附いて居る、彼れは動かざるを得ないのだ、若しも其の内閣の役割などを云々して、護憲三派聯盟を破ぶつて、彼れが局外黨たることを續けんとしたなら、政友本黨が彼れの政友會を切り崩すかも知れない。それよ

りも農商務大臣の椅子に憑て、政友本黨を切り崩して、其の大を成す方が、彼れの立場から考へて、大に悧巧なる道だ、之れは岡崎邦輔氏や横田千之助氏の如き、智謀の士が附いて居るから、それ等の人の考へたことかも知れぬが、高橋氏自身も此の道に出づるの外、彼れの生きて往く道はなかつたので有る、政黨の首領と云ふことは、決して難有い者ではない、井上馨侯は自治黨に指を染めて、忽ち之を捨て、西郷從道侯は國民協會を創立して、暫時にして海軍大臣に逆戻りをなし、品川彌二郎子は根氣良く國民協會を守り、別莊を賣り、財寶を賣り、借金をなし、九段坂頭の邸宅の地所を半分賣つた所で、國民協會を解散して、樞密顧問に復歸したが、それから半年にして永眠した、伊藤公の政友會を創立するや、一生の大業の如くに見えたが、急ち之を脱退して樞密院議長に逃げ込み、其の後繼者となつた西園寺公も、永くは續かなかつた、政黨の中から生れた人なら、犬養毅氏でも尾崎行雄氏でも、不死身で一生押して廻はることが出來るが、官僚出身の人では、政黨道樂は兎ても永く續き得る者ではない、高橋氏も此の道樂の爲めに、資材を蕩盡し、子爵を棒に振て所だ尙頗る苦しい所、此の際農相の地位に就いたのは、そこで一寸一息入れる所だ。

遞相犬養毅氏

犬養毅氏が加藤子の懇說に應じて、一議もなく入閣の肚を定めたのも、其の立場が彼れをして然らざるを得ざらしめたので有る、何しろ同志が三十名に足らなくては、如何なる智者が居ても、如何ともなし難い『犬養氏は何故に關直彥氏か古島一雄氏かを入れて、自分は閣外に居らなかつたか』と云ふ者が有るが、其の兩氏の何れを推すにしても、他の一派の不平を免かれない、それに犬養氏自身も尙大臣慾を滿足して居らない、第一次大隈內閣の時は、至て短かく、山本內閣の時も、四箇月に過ぎなかつた、未だ帝國議會の壇上に立つて『本大臣が』と言つたことはないのだ、機會が有れば、進んで國務大臣に就任するのは、彼れとしては當然のことだ。

或る人は、犬養氏の入閣を評し『加藤內閣が犬養氏を入れたのは、爆彈を抱いて眠むる樣な者だ、必ず此の一角から崩れる』と言つたが、私は之に反對した、犬養氏や尾崎氏は、或る方面からは、非常に恐ろしい人の如くに誤解されて居るが、然かし彼等は決して爆彈ではない、昔から虎を野に放つと云ふことが有る。犬養氏も尾崎氏も、野に放つて置くと、其の荒れ廻はる力は、相當に强大で有る、其の咆哮力は一代を動かすに足る者

が有るが、一たび彼等を捕へて、檻に入れて、食物を與へて置くと、猫く如く柔順で有る、犬養氏は外交調査會に入て、寺内、原、高橋、加藤(友三郎)の四内閣、四年以上其の任に在る間、復た一言の激語を發したることなく、能く調和して居た、會員中の有力者伊東伯と握手し、後藤子と提携し、何れにも嚙み附く様な牙を向けなかつた、山本内閣の遞信大臣たりし四箇月間も、孜々營々として省務に勵精し、省内の評判は至て良好で有つた、想ふに加藤内閣に於ても、若し彼れに對する待遇宜しきを得て居たならば、彼れは決して爆發せず、案外閣内の調和者となるかも知れぬ、或る事件が起て、無邪氣なる高橋氏がムキになつて怒り出す時に、彼れは、能く之を宥めて、其の怒を解くに努力する様なことが有るかも知れぬ、凡そ一代の英雄の心は、決して一様ではない、山に千年、海に千年、河に千年の彼れの如きは、果ても凡人の想像の如くに、輕擧妄動をする者ではない。

内相若槻禮次郎氏

若槻氏は溫厚の君子人で有るが、頭腦透明で、何事も能く分かる、官僚の出身で有る故かも知れぬが、元老にも、樞密院にも貴族院にも、評判が良い、松方公は其の藏相の時に、若槻氏を大藏省の屬僚として用ひ、大に引き立てた者で有る、其の關係で公の信任は厚い、西園寺公とは公が滿洲を巡歴された時に、隨員の一人となりて以來、信任を得て居る、山本伯も若槻氏に對して、多大の信用を置き、一昨年の冬、私が高輪に、老伯を訪問した時も、頗る若槻氏の財政意見を褒めて居られた、研究會でも、樞密院でも、此人を惡む者は無い、官僚の全體を通じて信望の高い人で有る、加藤氏が傲然として、四方を睥睨して居るばかりでは、政務の圓滑を缺く虞れが有るので、此の人を内務大臣に据えて、其の八面玲瓏振を、官僚の方面に發揮せしむることになつたので有らう、彼れは大酒家で有る、あの大酒を飲んで、尚あの通りに良い頭腦を維持し、詳細なる數字上の事が、ハツキリと分かるのだから、誠に非凡なる頭腦と言はなくてならぬ、十年政黨員として、足迹日本全國に遍ねく、往かざる所もない位だから、國内の隅々迄、能く分かつて居る、想ふに諸種の積弊を改めて、能く治績を擧げ得ることで有らう。

藏相濱口雄幸氏

濱口雄幸氏は國士で有る、官僚出身では有るが、珍らしい大人物で有る、將來日本帝國の首相として、國務を其の雙肩に荷ひ得る人で有る、由來土佐からは多くの大人物が現はれたが、

然かし一長あれば一短有り、濱口氏に至ては、人格の上に、殆んど缺點を見ざる人で有る、後藤象次郎伯の豪放なる意氣が有つて　板垣伯の飽く迄も清廉なる所を兼備して居る、誠に當代稀れに見るの人材で有る、是れ迄大藏大臣の任に就いた人で、人格の優秀なりしは、武富時敏氏と松田正久氏で有つたが、濱口氏は此等の諸先輩と比して、少しも遜色を見ない。

法相横田千之助氏

横田氏は星亭氏の門下生で、原敬氏の知遇を得、此の一派を代表せる有力者で有る、機略も有り、膽力も有り、鬪士としては如何にも強い、其の部下に多くの士を養ふて、天下を取るべき野心を有し、鋒鋩鋭利、向ふ所を打ち碎いて進む勇氣は、恐るべき勢ひだ、山本達雄、床次竹次郎、中橋徳五郎、元田肇の諸豪傑が、彼れの鋭刃に切り捲くられて、辟易逡巡して居る所は、人をして痛快を感ぜしむる所だ。

陸相と海相

陸軍大臣宇垣一成氏は私と同郷の先輩で有る、陸軍部内に於て、何等の閥がなくて、あれだけの盛なる信望を得て居るのは其の人物が極めて良いからだ、海軍大臣財部彪氏は海軍兵學校の生徒の時からの秀才で、人物は申分がない、彼れが山本伯の女婿なるが故に、早く出世したと思ふて居る者が有るが、それは誤解で有る。あれだけの立派な人物は、山本伯と何等の姻戚關係がなくても、海軍の全權を委托するに足る者で有る、如何に軍閥に反對する人々でも、海軍の財部、陸軍の宇垣兩氏の個人の人格に對しては、十分の敬意を拂はなくてはなるまい。

外相幣原喜重郎氏

幣原喜重郎氏は加藤首相夫人の妹婿で有るが、其の關係がなくても、外務大臣となるべき人だ、外交の事務を處理することに付ては、此上もない適材で有る、彼れは外務次官として五代に歴任した、五代とは大隈内閣の石井、寺内首相兼任時代、それから本野、後藤、内田の五相に歴任して、滯りなく其の事務を執り、次官としては何等の過失のなかつた人で有る。

英語で公文を草する技倆は、當代に於て、稀れに見る所で、英語の公文は、なか／＼六ケしい者で、加藤首相はそれが得意で有る、珍田伯も亦小村外相の次官として、其の才能を發揮したが、幣原氏は加藤、珍田兩氏に劣らぬ公文家で有る、今回外相となりては、大小の英語の公文は、必ず自ら見て、筆を入れずには濟まさない事と考へる、米國大使となり、華府會議にも列

じ、對米外交に付ては、相當の抱負を持つて居る筈だから、現に紛糾せる對米問題に付ては何とか良い分別を出して呉れることと思ふ。

文相と鐵相

岡田良平氏が文部大臣に任ぜられた、同氏は多分加藤内閣の成立に、多大の盡力を拂はれた事と思ふ、文相としては經驗も有り、適任で有る、少くとも二枚舌は使はない人だ、仙石鐵相も大隈内閣時代の鐵道院總裁で、何人が見ても適任で有る、少くも鐵道を政黨擴張に利用する樣な怪事は、此人の居る間に起るまい、

續くや否や

新内閣の顏觸れを見ると、先づ是れ迄に見ざる良い内閣で有る、どうか此の内閣が永く續いて、十分に國政の改革を行はんことは、國民大多數の期望する所で有る、然るに聯立内閣は互に永く續かない者だ、文部省に何か事が起ると、岡田氏を叩き出して、誰れか自派から大臣一名出したいとする運動が始まらぬとも限らぬ。外交も文部と同じ鬼門の一だ、何か、外交上の失態が起て、それを幣原氏が彌縫し切れなくなると、勢ひ内閣の動搖を免れない、農務省が獨立して、高橋氏所管の事務が半分になる時、その大臣を憲政會から出す乎、政友會から出す乎が、喧嘩の基とならぬとも限らぬ、明治三十一年の憲政黨内閣の時には、何でもない尾崎氏の共和演說さへ、内閣動搖の原因となつた、それに一番警戒すべきは、加藤首相の淡泊なことだ、彼れは内閣首相の地位を得たことを、世間で羨望する程、喜んで居らない、彼れは面倒臭くなれば、何時でも之を投げ出す覺悟を持つて居る、原敬の如く殺される迄、かぢり附く者ではない、責任の觀念が強いから、歐米文明國の政治家の如く、何か事が起つて、自家の責任を感ずる時、直ゝに投げ出すことは、是れ迄彼れが外務大臣として度々其の冠を挂けた經歷に徵して之を證することが出來る、先づ第一に各省相戒しめて、過失なき樣にし、第二に三派相協調して、離間中傷の乘ずべき隙のない樣にし、第三には成るべく爭ひの原因を少くし、第四には首相をして此細い事に、逃げ出すことのない樣にすることが簡要だ、我が帝國の憲法政治の基礎が鞏固にし、百年の長計を樹立し、外は外交を刷新し、内は綱紀を振起し、百政の改革を成功して、民心を安定せしむるには、相當の歲月が入用で有る、佛國の如く、半年か一年で、頻々と内閣の更迭するは、決して學ぶ可きことでない、十年同一内閣にやらせれば、相當の成績

は擧がる、少くも五年は、同じ内閣にやらせなくては、良い政治は出來ない。どうか新内閣を出來るだけ永く續かせたい者だ。

新内閣の閣員

文學博士　三宅雪嶺

政治家の志は權力を握るにあるか、政務を擧げるにあるか、權力を握つて政務を擧げるにあると云はうが、兎に角何れかに偏し易く、政黨が勢力を得るに從ひ、いよいよ其の傾向が甚しくなる。權力は動力であり、政務は機關であつて、互に相待たねばならぬ、政黨を統率するの力を以て事務に從事すれば、着着政務を擧げ得るにせよ、幾許か其の類の人を求め得るとし、何時でも求める譯に行かぬ。或る政黨が多數を制し、内閣を組織すれば、適材を適所に配置しようとし、いろいろ思案しながら思はしく行かず、政務官と事務官とを分け、權力爭奪に有能なのを政務官にしたりする。政務は大局より見、事務は杓子定規を免かれぬとするけれど、大局を見るとて頗る覺束なく、矢張平素勉强して居るのに及ばぬことがある。ただ臨機應變と云ふに至り、權力爭奪迹が往々手際を顯はす。先づ權力爭奪に長ずる者が動力を供給し、機關をして適當に運轉せしめる狀態になつてゐる。

大臣で擔任政務を知るのがあり、知らぬのがあり、知つたとて細かい事を知らぬのが幾許もある。何でも知つて居るに越したゝないとし、さういふのが得られねば、何處かに動力を据えつけ、何とかして機關の運轉をするやうに取計らうとする。西郷は大久保より動力があつてそれ程事務に通ぜず、大久保は伊藤大隈より動力あつてそれ程事務に通じなかつた。弟西郷も動力側であつて、官職を選ばず、文部卿になり自ら文盲卿と稱した。加藤内閣は護憲三派内閣の名あることとて、三黨首が中心を形造つて居る。勢力に差別あつても、各、黨首の名だけで重

きをなす。即ち他の閣員に比べて勁力を備へて居る。其の勁力を以て何を爲すかと云へば、一定した所がない。

加藤子は外交家であり、財政家であると云ふけれど、外交に一層精通したのがあり、財政に一層精通したのがある。總括りの首相に適すると云ふので其の職に就いた。他の黨首なる高橋氏及び犬養氏は何うか。首相級と看做しても、三人も首相を置く事が出來ず、無任所大臣にしてはとの說があつたが、先例が無く、先づ普通に面倒のないとする職に置くが可い。何の椅子も難しいと云へば難しいけれど 以前から農相と遞相とが割合に面倒が無く、首相級でも勤まり、伴食でも勤まる。司法及文部も其の跡形あつたが、幾許か色がつき 氣儘にして居れぬ。日本で農相及び遞相が何をして居つてもよいかに思はれるのは、農工及び遞信事業の發達せぬのに基くにせよ、今日の所、誰にでも勤まり、首相の控へ席と看做しても差支へない。高橋及び犬養は事務の分らぬ方でなく、分らうとすれば分るにしても、盲目判を捺して居つて事が濟む。幾許か農相向きな所あるとか、遞信向きな所あるとかで選擇した點もあるが 何れも特別に何を爲さうと力氣む程の事もなからう。せいぜい勉強して與れ給へ、宜しく賴むと云ふ位で事が搬んで行かう。議會の形勢如何で三黨首が熟議を凝らすべきであり、その外は加藤を當面の主任者とし、內閣の取締めを任かす事になつて居る。

加藤は首相として何程の事を爲すか、今後に徵して知るの外ない。首相として惡い方でないと思はれる。寺內伯に優り、高橋氏にも優るらしい。加藤友子は案外出來榮え好く、高子の之れに優るかが決し難い。才智あり、膽力あり、責任を重んずるけれど、前に四度び外相となり、見るべき成績なく、あつたとして十分に始末がついて居らぬ。公使として日英同盟の基礎を造つたと云ふけれど、同盟を締結したのは、小村・林等の手に於いてして居る。相當の思慮があり、相當の用意がありながら、今一息と云ふ所まで踏み込まぬ嫌ひがある。首相として自分で思ひ切つて奮發したと思ふ程にせねば、爲し得る事も中途半端にならう。割合に煮え切らぬといふのが缺點で、それを取除けば立派な首相にならう。外交ならば加藤の畑となつて居つたが、首相の片手間にする譯に行かず、時代も變つて居り、義弟の幣原男を外相にした。霞ケ關に人が無いのでなくて、人が無いと見られる中、幣原は一二の指を折られるのであり、前に外相職を勤めた者に劣るまい。陸奥、小村の後に誰れをと問ふた時、幣原といふやうになるか、之れも今後に知るべきである。

首相が政務上に最も重きを置いたのは、外務と內務と大藏とであつて、內務に若槻氏、大藏に濱口氏を据ゑつけた所、近頃

の出來と稱せられる。護憲三派と言ひ條、誰か行政財政の整理に堪へるかとなれば、差當り此の邊を押さずに居られない。若槻が濱口程苦勞したならば一段と男を上げようと云はれるが、今更らそれを望んでも效なく、本來物分りが能く、自分で其の邊を承知し、餘り下手な事をせぬであらう。岡田氏が文相として政黨內閣に入つたのは、前の來歷に照して異樣に見えるが、案外融通が利く方であつて、今少しく慣れれば相應しく思はれやう。澤柳氏が本黨側と見られたのは、聊か打算を過まつたのであらう。政黨內閣に入りさうなものが入らず、入りさうにないものが入るなど、世間はいろいろになる。

加藤內閣は三黨首を主とし、政務を擧げるが爲めに、官僚的人物を並べ、政黨員にて政務を擧げるに難いと云ふを示したが、生粹の政黨員橫田氏を法相にしたのは、やや異彩を放つて居る。法相として全く素人側でなく、過去の幾多の法相中、玄人側として可いが、司法事務に何事を爲すか、特に期待する程でもなく、それよりも二黨首の下、中にも高橋農相を扶け、樹力の維持に勉める所があらう。濫りに三派の協調を破るやうなことなく、出來るだけ協調に努めようが、機會を見て何とか一芝居打たずに居れまい。三黨首は最早や老成人であり、實際の動力よりも看板になつて居り、其の下に切つて廻すは橫田其人であり、政界に注目する者は、三黨首を見るよりも橫田を見ようとする。見榮えのない小さな身體が、買ひ被ふられたか、買ぶられないか、大きなものに取扱はれて居る。

仙石鐵相は技術家として政治家肌なるが、內閣が三菱閥と見られるに與つて居る。しまりみせでなければ更に發達し得たらと思はれるが、何う云ふものか。陸相は居据り、海相は前へ戻つたが、財部氏は今少しく悧巧味を削つたならば、薩派に於ける有數の政治家とならう。軍人として立ち、餘計な功名心あると疑はれるのを氣遣ひ、政治家と云はれぬやうになつて居る。今から政治家になつても遲いが、純粹の軍人肌でないだけ、疑が殘つて居る。內閣以外なれど、牧野宮相は如何にするか。曾つて首相候補者と見られたが、既に之れを斷念したが。松方公が老い、山本伯が花咲かず、床次氏が政友本黨の總裁になるかならぬかと言ふ所である。財部氏に幾分の蠻勇を加へれば、一旗上げさうに思はれるが、さう思はれる間が花であらう。

政務で注意を拂はれるのは幣原・若槻・濱口であり、權力爭奪で注意せられるのは橫田であり、特別議會に特別の事なく、通常議會までに何か見るべき事があらう。

首相及閣僚

前田蓮山

加藤首相

一昨年だつたか、私は議會の食堂で關和知君と落合つた時、期う話したことがある。憲政會では加藤總裁に對する不平の聲が大分高いようだが、憲政會から加藤總裁を引くと後に何が殘るかね。憲政會が僅々百人になつても、尚ほ將來を囑望させるのは、一人の加藤總裁があるばかりだ。總裁が憲政會唯一の資だよ。大いに大切にし玉へと言つたら、關君は然うかねと苦笑ひして居た。

故原氏は加藤子に對して、天下使君と我とのみと云ふ態度だつた。『何んと言つても政友會の向ふを張る者は加藤さ。官僚にも人がないからね』と原氏は度々私に話したことがある。

原氏が死んだ後は、首相適任者としては、識見と云ひ、經歷と云ひ、貫目と云ひ、其の平均點は何んと言つても加藤子が一番だ。唯だ黨派の勢力が弱いために、元老も彼を推薦する理由が立たなかつたのである。

黨爭に目がくらんで居る者の外は、彼が殆んど偶然と言つてもよい廻り合はせで、小黨の首領となり、總理大臣になる機會を取り逃しつゝあつたことを、誰れでも氣の毒と思はぬ者はなかつたであらう。所が意外にも政友會が自ら分裂して、彼のために道を開いた形となり、彼は棚からボタ餅で首相となつた。私は天の配劑だなアと思つたことだ。

政友會が分裂しなければ、如何に彼が第一等の首相適任者であるとしても、彼に順番は廻はつて來なかつたであらう。彼が如何に奮鬪力戰した所で、總選擧で政友會を打負かすことは出來ないことだ。

今回の總選擧は所謂護憲主張が勝つたのではない。矢張り傳統的の黨派心の爭ひに過ぎなかつたのである。政友會と本黨とを合して貳百貳十名當選して居るが、元來原總裁を失つた政友會は分裂しなくても、三十名位は減ずる筈であつた。卽ち六十

名滅じた內の三十名が分裂のために憲政會から漁夫の利を占められたわけだ。政友會は分裂さへしなければ、護憲に廻はつても清浦內閣支持に廻はつても、二百四五十名は當選したに違ひないのである。

斯くては人物としては第一等の首相適任者たる加藤子も、到底出る幕がないと云ふので、神樣が政友會を分裂せしめたのだ。全く政友會には魔がさしたのである。其の魔がさしたのは神樣の仕業だ。それで彼は將來神樣の御心に背いてはならぬぞよ。やがて政友會と本黨から魔が離れた時、其れは神樣が彼を必要となさらぬ證據であるから、素直に辭職しなければならぬぞよ。

所が彼は神を知らぬ男だ。彼は人間の理論を尊しとして、神の支配があることを解しないのである。彼は人間生活の一切を人間の理論で支配しようとするのだ。

過日或新聞に、某樞密顧問の談として、斯う云ふことが書いてあつた。加藤は道理の前には從順である。大隈內閣の時、樞密院に、諮詢された或法案が、餘りにヅサンだと云ふので、通過困難に陷つたことがある。其の時加藤は吾輩に諒解を求むるつもりで訪ねて來たらしかつたが、加藤が口を切らぬ間に、吾輩が機先を制して、其のヅサンな理由を詳はしく述べた所が、加藤は默々として吾輩の意見を聽いたゞけで、さよならと歸つてしまつた。先生何うするのかと思つて居たら、間もなく該法案を撤回したものだ。死んだ原なら例の『さりながら』と來る所だが、加藤にはそんなことがないといふのであつた。

如何にも加藤子は道理を重んずる人である。彼は驚くべき理屈屋だ。彼の生活は、日常の些事に至るまで、理屈で固められて居る。是れが彼の長所でもあれば缺點でもあるのだ。

缺點と見る方から云へば、彼は理屈以上のことを斷行することが出來ないのである。法に入つて法を出ると云ふことがあるが、彼は法に入つては居るけれども法を出ることは出來ぬ。原氏は『さりながら』で法を出た。理屈以上のことを斷行した。

彼が法を出で得ないのは、神を信じ得ないからだ。原氏が法を出で得るのは、神を信じ得るからだ。原氏は八九分まで人間の理論で見込みが付けば、後の一二分は之を神の意に任かせてやつ付けようと云ふ調子だつたが、彼は飽くまでも人間の理論に賴り、神に賴ることを知らぬ。故に人間の理論で充分見込みが付かなければ手を下さないのである。

法は說明であり法を出づることは直觀である。說明は形骸で、直觀は生命だ。理論は何物をも創造することは出來ぬ。獨り全人格の力たる直觀のみが創造をなし得るのである。

政治家の仕事は、政治的創造であらねばならぬ。政治は議論

でもなければ説明でもないのである。新内閣の如き、如何にも見た所は立派である。併しながら、生命が何處にあるか。是れは加藤子の創造物ではなく、環境に支配されて寄り集まつた數人の人々に過ぎないではないか。

彼は立派な紳士であるが、何うも人生の第一義に觸れないような遺憾がある。彼が眞に生き、眞に自己の政治を創造せんとならば、安價な信義や安價な協調を放棄しなければならなかつた。そして末梢的形式に拘泥せずして、乾坤一擲の快擧に出てなければならなかつた。乾坤一擲とは單獨内閣を作り若し反對に會はゞ議會を解散することだ。

彼が必ずしも協調を尊しとせずと云ふ最初の聲明はよかつた。彼は成るべく單獨内閣を作りたいと工夫したであらう。或は一時其の決心が付いて居たかも知れぬ。而かも周圍の事情が之を許さなかつたであらう。或は黨の幹部中にも事勿れ主義の者が居たかも知れぬ。要するに高橋、犬養兩氏が入閣を承諾すれば其れでもよし、承諾しなければ更によいと云ふ位の所であつたらう。今日の場合、それ以上を彼に望むのは無理かも知れぬ。

何れにしても、立派な輪廓が出來上つた。其れに彼の生命を吹き込むことが出來れば、彼は明治以來稀に見る大作を創造するわけだ。彼が憲政會の黨情に超然として渾身の赤誠を發揮するならば、或は生命あるものとなるかも知れぬ。

高橋農相

政黨には二つの任務がある。一は政策の主張であり、他は内閣組織の準備である。併し戰前のドイツに於ける如く、議會はあつても政黨内閣制を採用しない國では、政黨の任務は政策の主張だけでよろしく、内閣組織の準備を必要としない。故に斯ような國に於ては政策によりて小黨分立の狀態となり、黨首の任務は比較的輕いのみならず、必ずしも黨首を必要としないのである。

然るに政黨内閣制の國では、政黨は政策の主張と共に、内閣組織の機關として、常に準備を整へなければならぬ。故に斯ような國では、政黨は大同團結の傾向を有し二大黨對立の形勢を作るものであつて、必ず黨首を必要とし、其の任務も甚だ重いのである。佛國の議會政治が圓滑を缺ぐのは、政黨が内閣組織機關として完全でないからである。

政黨は常に分裂の傾向を有するものである。何となれば政策は殆んど限りなく、極言すれば四百六十の議員が悉く各自異れる政策を主張する場合も想像し得られぬことはないからである。併し是れでは内閣組織の機關たる資格がない。故に政黨内

閣制の國に於ては、黨首及び黨幹部の任務は、分裂せんとする多數を一黨の下に引き纒めることである。即ち各自の主張する政策を調和し、一大團體として之を組織することであらねばならぬ。

高橋氏は財政家としては第一流であり、内外政治に對しても、常に一家の識見を有し、性來純眞な人であるから、主義政策の主張には忠實であるが、内閣組織の機關としての政黨の首領たるべく適任であるか何うか、私は之を疑問とするよりも寧ろ悲觀せざるを得ないのである。現に政友會分裂の事實が之を證明して居るのだ。脫黨者と殘留者と、孰れが善いにせよ惡いにせよ、原總裁時代には纒まつて居たものを纒めて行くことが出來なかつたのは、彼に手腕が足らぬからである。

彼は政策の調査研究には深き興味を有して居るが、政黨首領としては大なる興味は持つて居ないようである。彼は第一次山本權兵衞內閣の大藏大臣となつた結果、殆んど强制的に政友會に入黨させられ、偶然の機會で政友會總裁となり、遂に平民となり代議士とまで成るには成つたが、眞に政黨に對する理解があるか何うかは疑はしい。

彼は久しく銀行家として、二二天作の五で結果をはぢき出して來たのである。數理の前に絕對服從する金錢を相手に仕事をして來たのである。思想感情の千變萬化する多數の人間を包容し、之を一團として組織調和する仕事は、彼の性に合はぬのではなからうか。

彼が總理大臣當時、中橋文相進退問題に關し貴族院で脫線した時、臼井哲夫君の評に曰く『高橋君は汽車で世の中を渡つて來た人で、五十三次の胡麻の蠅から財布をすられたり、雲助から酒代をねだられたりした經驗を持たぬのだ。今の政界にはまだ汽車は通じて居ない。まだやつぱり五十三次の徒步旅行時代で、胡麻の蠅や雲助がウヨ〳〵と立廻はつて居るのだから、高橋君のような正直な人を今の政界に置くのは氣の毒だ』と。

彼が生活の旅行は、決して坦々たる平地ばかりではなかつた。少年時代には米國で人に瞞されて奴隷に賣られたりなどもしたが、彼は英語教師を踏み出しに、教育界から銀行界へと進んだので、胡麻の蠅や雲助に出會ふことが少かつた。即ち彼は鞭の先き一つで生徒を自由に扱ひ、算盤の上に結果をはぢき出しつゝ生活したのである。變化極まりなき人間の心理を解すべく、彼の經驗は餘りに科學的であつた。

世人は彼を物に拘泥せざる、言はゞ禪的色彩を存する人のように思つて居る者もあるであらうが、彼は凡ての事物に對して常に科學的に考へる人で、頗る主張に强い人である。其の大藏

大臣當時は、山縣公にも屈せず、松方公にも屈せず、原首相をも随分手古摺らしたものだ。山縣公の如き『高橋と議論するには準備が要る』と言つて會見前に充分調査を盡したそうである。

併しながら彼は人情を解せぬ人ではない。唯だ彼の感情は頗る純眞であるが單調であるから、表を見て裏を見ず、自己を標準にして他を律する缺點がある。

茲に彼の性格の一面を窺ふべき二三の逸話がある。彼が米國に奴隷奉公中、同じ奉公人仲間の支那人が、先輩顔して威張りちらし、度々彼に侮辱を加ふるので、彼は日本人の一分相立たずとなし、日本出發の際、祖母から贈られた短刀を按一按した次第で、其れで其の支那人を殺してやらうと決心した。

一度は決心したものゝ、併し待てよ、支那人を殺すのは易いが、殺した結果、自分も死罪になるようでは割に合はぬと思ひ返し、主人に向つて、米國の法律では支那人を殺せば何うなるのかと質問した。すると主人は目を丸くして、支那人だつて、人を殺した者は勿論死罪だと云ふ答へだつたので、遂に支那人殺しを斷念に及んだとは彼自身の語る實話だ。彼は斯ように打算を忘れぬ人であるが、一面頗る感情家で、クワッとする人である。少々の懲役で濟むのだつたら或は彼は支那人を殺したかも知れぬ。

彼は先輩に依頼されて特許局長を辭職し、ペルー銀山事業に關係したことがあつたが、其れが技師の不正のため失敗に終つたので、直接彼の責任ではなつたけれども、彼は先輩の損失を傍觀する能はず、日常の家具類に至るまで、財產全部を投げ出して裏長屋に引き込んだものだ。そして其の裏長屋時代に日銀總裁の川田小一郎氏が山陽鐵道の社長に推擧しようと言つたけれども、無經驗の身でそんな重任を御受けするわけには行かぬと言つて、微々たる日銀建築掛を擇んだ。又た其の微々たる建築掛時代に、農相後藤象二郎伯が、又た元の特許長にと懇望したが、自分の一身は川田氏に差上げてあるからとて辭退した。彼は呑氣者のようであるが、なか〳〵義理堅い一面を有する。

見にも何にも、彼は立派な紳士であり、超然内閣の總理大臣としてならば、申分はないかも知れぬ。唯だ政黨首領としてはトテモ不向である。

犬養遞相

私は是れで碁を稽古したことがある。初めの二三ヶ月は師匠も私の熱心に驚いた位であつたが、私は段々興味がなくなつて止めてしまつた。

其の時師匠の言ふことには、中年からの稽古ごとは蛇度永續きしませんね。其れは其の人の頭ばかりが先きに進んで居て、手が之に伴はないので、ヂレッたくなるからですよ。自分の書いた書の出來不出來が、自分で判からぬ時代に、無我夢中に稽古しなければ結局物になりませんね。

犬養氏は政治家として頭ばかり先に進み過ぎて、手は之に伴はなかつたのである。普通ならば私の書の稽古のように、ヂレツたくなつて政治を思ひ切る所であるが、彼は思ひ切る代りにヤブレカブレとなつた

やつと封建政治が廢せられて二十年や三十年の間に、本式の憲政が行はれよう筈はない。若し彼が初めから本式の憲政と云ふものを知らず、代議士生活其のものが名譽だ位に考へて、無我夢中に其の日其の日の最善を盡したならば、今頃は疾っに總理大臣になつて居たかも知れぬ。彼の素質は加藤首相よりも確かに上等だ。

而かも彼は英國風の憲政を、取り急いで日本の上に描かうと努力し、今年は出來る、明年は出來ようで、何時の間にか所謂苦節の三十年を經過した。元々是れは書畫紙の上に油繪を描かうとするような無理もあり、そう手早く出來上るわけはなかつたので、遂に彼は手習ひ小僧がヤケになつて双紙を塗抹するように無茶を始めた。斯くして彼は自分で自分を笑ひ、自分で自分を欺き、また人をも欺かうとしたのだ。

彼は寺内々閣を彈劾して議會を解散に導きながら、總選擧後には平然として同内閣の外交調査會に入り、同内閣を支持すること、政友會よりも更に熱心だつた。

彼が山本内閣に入つた時には、既成政黨は悉く腐黨である。彼等が無視されるのは當然であつて、超然内閣こそ却つて時勢に適應して居ると放言したが、爾來四ケ月、清浦内閣の出現するや、政黨を無視するのは不都合であると主張し、今や無視するのが當然であるとなした既成政黨と手を握り、護憲内閣などと納まつて居るのは何うしたものか。何が何やらサツパリ判らぬ。蓋し彼は思ふように書が書けぬ口惜しまぎれに、目茶苦茶に墨汁を塗抹した姿である。

彼口を開けば則ち主義と云ひ、理想と云ひ、憲政の常道と云ひ、兎も角、其の政治的生涯の前半を藩閥打破、政黨内閣制の確立のために捧げたと云ふことは、何人も之を否認する者なく、又た敬意を拂はぬ者もないであらう。

十年許り前に、彼が青年連から崇拜されて居た頃、古島一雄君などが、今の青年が政界に活動する時代になれば、蛇度犬養の天下になると話して居たので、私は其れは船に印して劍を求

むるの類だと笑つたことがある。

昔或人が船から劍を落し、後で探しに來るのだと言つて、船のブチに此處で落したと云ふ印を附けたと云ふ話がある。青年は此の船だ。犬養氏が青年に目星を付けて置いた所で、船が先きに行くように、青年は段々年を取る。年を取るに從つて思想も變化し環境も異つて來る。青年期の人間が彼を崇拜するとしても、壯年期になつてからも、必ず彼を崇拜するとは限らぬ。

青年期に於ては、まだ經驗を積まず、現實に基礎を有せず、歷史から引つぱられることが少ないから、其の思想は比較的自由で、殆んど空想の世界に住んで居る有樣なので、犬養氏の理想論に共鳴したであらうが、年を取つて經驗を積むに從ひ、歷史の力が強くなり、空想は次第に現實を以て塗り潰ぶされる。

斯うなると犬養崇拜は過去の夢となるのだ。高等學校時代から大學時代、よく私の所にやつて來た男が、今は立派な紳士になつて、今度の總選擧に政友本黨から候補に立ちたいと私に相談に來たから、君は木堂會の一人だつたねと言つたら、そう〳〵そんな時代もありましたねと笑つた。

人生は創造的進化であると云ふ說に私は賛成する。理想とか主義とか云へば、さも尊嚴なるものゝように思ふものもあるけれども、理想とか主義とか、絕對的の標準はないものだ。若し其れがありとすれば、やがて完成と云ふことがあらねばならぬ。完成があれば人生は其處に行詰まるのである。

政治も其の通りで、憲政の常道とか政黨主義とか、絕對的の標準がありとすれば、政治は其處に行詰つて、進步はないわけである。併し政治は永遠の進步であらねばならぬ。憲政とか政黨主義とか云ふものは、政治が永遠に進步し行く間に現はれる一の過程に過ぎないのである。私共は憲政とか政黨主義とか云ふものよりも、モット善い政治を創造し得ないとは限らぬ。

やつぱり彼は理想などゝ大きなことを言はぬ方がよかつた。自分の畫の出來不出來が判からず、無我夢中に稽古する者のように、一日一日の最善を盡せばよかつた。今日の最善を盡すことは、やがて我々を永遠に繫ぐことゝである。

併しながら彼はよくも辛抱した。苦節三十年、私は彼の氣魄に對して敬意を拂はずには居られない。苟くも正義なりと信ずれば、千萬人と雖も我れ行かんと云つた調子の彼の氣魄に至りては、現在の政治家中、恐らく彼に及ぶものなく、加藤高明子の如きは、彼の靴の紐だも結ぶ資格はあるまい。

間違つて居たにもせよ居なかつたにもせよ、兎も角、彼が一個の理想を奉じて、藩閥と戰ひ、官僚と戰ひ、反對黨と戰ひ、果ては同僚友人と喧嘩した彼の氣魄は、決して彼が凡人でない

ことを證するに足るであらう。

唯だ彼が最近十年間のヤブレカブレの態度を惜しむ。其れもまた同情すべき點があるにはある。元來彼は理想家にしてローマンチストである。其の藩閥打破、憲政確立運動、寺内々閣支持、山本内閣入閣など、ローマン氣分（情熱的空想）の發現とも見られるのであるか、實は悲しく苦しき事情もあつた。

今一戰だ、今一息だ、あれ開け國民の我黨を迎ふる聲は野に山に滿ちて居るではないか、さア進めと疲れ果てた黨員に鞭打つて、選擧に臨めば、其の國民の聲なるものは、彼が空想の山彦に過ぎないで、一戰は一戰と黨勢は衰へるばかり、是にはさすが氣魄其のもの丶ような彼も困つた。

例へば彼は地所を調査しないで建築の設計を立て、三角い地所に四角の家を建てようとしたのだ。トテモ建て得らる丶筈はないが、彼は建てられ得ると頑張つた。そして家族を雨中にさらして、あ丶でもない斯うでもないと、測量繩を持つて地所内を走り廻はつた。

幾度測量して見ても、三角の地形はやつぱり三角だつた。設計通りの家を建てようには、先づ地所を四角にすることから始めなければならぬ。雨中の家族は風を引きそうになつて、或は恨み或は怒り、遂に一人去り、二人去り、雨をしのぐ場所を求めて其處に入つた。そして彼は逃げて行く家族を意氣地なしと罵つて怒つた。

而も彼を信じて雨中に踏み止まつた殘りの家族は、いよ／＼半病人になつてしまつた。そこで彼は遂に最初の設計を目茶苦茶に變更し、兎も角雨露をしのぐだけの家でも建てなければならなくなつたのである。彼が最近十年間の行動は、ヤケでもあつたらうが、兎も角其の黨員を救はなければならなかつたのだ。氣の毒と思はずには居られぬ。

今度こそ彼の志は酬ひられたようではあるが、彼の理想は決して斯ような内閣ではない筈。彼は政友會の急變に目をパチクリしながら、護憲運動に付いて行つたと云ふまでの話で、何もかも意外であつたり不滿足であつたりに違ひない。

他の關係の評も書くつもりであつたが、玆まで書いたら豫定の紙數が一杯になつた。

加藤首相論

――腰は强いが出足は遲い――

五絃彈人

總選擧も無事に濟んで、淸浦首相も愈々辭職の腹を固めたと傳へられ、完全に第一黨の位置を占め得た憲政會總裁加藤高明子は、今度こそ間違なく、後繼內閣組織の大命を拜するに相違ないとの評判が、誰れいふとなく、國民一般の期待として現はるゝに至りし、四月下旬のことである。一夕赤坂のさる旗亭に、政友會某と知名の二三氏と、新聞記者數名との小宴が催された。無論意味のない會合であるから、談話の中心問題などあらう筈なく、自然夫れから夫れと、全くの雜談會に過ぎなかつたが、集るものが集るもの丈に、話題は自然と、眼前に展開さるべき政局の未來譚で持ち切つた。時恰も大相撲の開場中であつた爲め、政客の關取見立評なども話題に上る一政客から『加藤子は、腰は强いが、出足は遲いと思ふがドウか』との質問、平素から加藤子に最も近いと目さるゝ一記者は、如何にも我が意を得た適評だと云はぬ許りの態度で『全く其通り、土俵上の堅實味は我黨保障するが、自ら仕掛けて敵の虛に乘じ、其處に奇捷を博するような放れ業は、先づ生れ代はつて來ぬと望はないネ』。すると他の一記者は其放れ業になると、誰れが何と云つても、犬養老は政界の第一人者だ、組んでも離れても、殊に土俵際の打棄りなどゝ來ては、全く天下一品の術師だヨ』と、話を承けついだ。余は終始默々として此話を聞いて居たが、如何にも先輩連中の批評通り。夫で其儘標題に借用すること、依而如件。

一

今度の政變程、滯りなしに軌道を順當に走つた事は、茲十數年間の我政治史上に、曾てない現象である。伊藤と山縣、桂と

西園寺の更代當時は暫らく別として、第一次山本内閣の出現當時から、ソロ〳〵政界の調子が亂れ足になりかけて來た。シーメンス事件で脆くも倒壊した後に、淸浦の流産内閣、更らに大隈内閣と、其間政權の授受に、可なり内部に面倒な經緯のあつたことは、今更ら繰返す迄もない。内田内閣の出現に際しては、元老山縣公の政黨無視主義が露骨に發揮せられた。殊に原首相の横死後、高橋内閣が内部の破綻によりて崩壊するや、政權の行くべき軌道は、全く撤去されて了つた。單に無軌道たるに止ならず、規則違反などは、少しも意に介せざるものゝ如く、オートバイを人道に走らし、自働車を九尺足らずの横路にドシ〳〵乘り入れて平氣である。其度毎に元老と稱する運轉手の不法我儘を攻撃する輿論の勃興は、頗る熾烈を極めたのだが、何處を風が吹くかと云はぬ許りの態度で、暫らくの間、身邊住宅の護衛警戒に警官憲兵の煩勞を増すが關の山、其内に世間が騷ぎ草臥れの時期に入るので、内心は初めから多寡を括つて居るのである。斯て加藤友三郎子、山本權兵衛伯、淸浦奎吾子と、僅か二年の間に三代の内閣が、走馬燈の如く去來し、政局は益々不安の程度を濃厚ならしむることとなつたが、今度は夫れに懲りてか、夫とも大勢に逆行するの勇氣を失つたか、兎に角改めて軌道を布敷し、車を其上に走らせることとなつた。元老の反省か、輿論の勝利か、何れにしても、國家國民としては、同慶の次第といはねばならぬ。

淸浦首相の退却振りも、今度は可なり鮮かであつた。某々閣僚は最後迄執着心强く、何とか特別議會迄の延命をと策したが、自ら稱する光風霽月首相は、頗る恬淡で少しも其策に乘らず、終に其決意を一片の七言絶句に寄せて、之を閣僚の面前に突きつけるといふ時代離れの遣方、之には流石の執念深い某々氏等も、二の句がつげずに一齊に辭表提出。『流石年の功には一籌を輸する』と、某閣僚が昵近の下僚に苦笑を禁じ得なかつたとの挿話も傳つたが、恐らく事實であらう。

前首相の退却振りも此通り、元老の後繼者奏薦振りも、前に述べた通り。勿論其間には陰謀陽謀、例によつて例の如く行はれ、西園寺公の靜臥する京都興津の間には、大小策士の出沒去來、之を活動寫眞に撮りて、蓄音器入れの興行でもやらうものなら、大入大儲け請合の場面が、幾十卷も出來た程、内部には、もづれ〳〵た經緯があつた。殊に四月廿二三日頃には、一度其腦中に布敷した。西園寺公の政權軌道を、或ひは撤去さるゝにあらずやと危ぶまるゝ程の場面もあつたらしい。源三位頼政の古歌を偲ぶ『あやめ』『さつき』の會合などは、京都附近に於ける此暗き場面と策應して、鵺の古事さへ思ひ出づるに適應し

き、中央政界に於ける有力な陰謀であつたと云ふ迄もない。併し之も一夢、彼も一場の夢幻劇。今や季節梅雨に入らぬ以前、早くも政界に一道の光明輝き、護憲三派の結束固き新内閣が組織されたのである。霖雨頻りに至り、天は密雲に鎖されて、各自の頭上一種の重き抑壓氣分を感ずる季節となつても、政界の一方に見ゆる明る味は、久し振りに一種の晴れやかな氣分と感じを與へる。此一般的の感じと氣分が、詰まり輿論の現内閣を歡迎して、近來になき好評判の因て生れ來る所以であらう。余は斯く觀じ又斯く信ずるものである。

二

斯くて此内閣の首相となつた加藤子の履歴、夫は極めて長々しいが、其間何等の波瀾曲折たき官場生活に、其九分通りを費して居る爲め、一向に興味もたければ、面目を躍如たらしめるものも少ない。勿論外交官として、樽俎折衝の間に行はれた秘事、國策の遂行等に關しては、世間之をしらさる未聞の事實、問題等が、累々として山を爲し居るに相違なく、其間子が手腕技倆によりて成功せる事、また力量及ばず、觀測を誤りて失敗に了れる事等、擧げて數ふるに遑ないこと云ふ迄もないが、之は寧ろ一身の秘事と云はんよりは、國家の秘密に屬し、問題としては多く語るべき性質のものでないと思ふ。彼の所謂對支廿一ヶ條問題の如きも、若し子自身の口から當時の内情を赤裸々に白狀する自由を許すなら、政權爭奪の意味から、常に子の對支外交振りを誹議して措かざる、某々大政治家の如き、恐らく國民の前に、其面皮を剝がるゝの事件も續出するであらう。余は此際敢て子を辯護するものでないが、一例を擧げると斯様な内部の經緯にあるのだから、外交關係の問題、其物の眞相に至りては、其一切の内情を明白にさらけ出さぬ以上は、世論の毀譽褒貶、其何れか正當にして、又何れか不當なるか。誰れか烏の雌雄を知らんとは、眞に此事であらうと思ふ。從つて子の成功と認めらるゝ事件も、或ひは案外内部に非常の失敗を包藏されて居るかも知れぬ。

伊藤、大隈の秘書官時代の子、また大藏省の局長時代の子は、餘り若過ぎる時分の事で、今叙述するには頗る縁遠い感じがする。代議士にも一度當選して居るが、別段特記すべき事物もない。殊に時代もあまりに經過して居る。貴族院議員となつてからも、相當の年數を經て居るが議場に花を咲かしたのは原内閣時代に、只一度首相原氏と一騎打ちの大相撲を見せた丈に止まる。併し政黨首領としては、寺内内閣以來、所謂苦節十年で、寒風に吹き曝らされ通しの辛い經驗を味ひて來た。子自身

に云はせると『十年節を屈せずと云はるゝとは、當然と思ふが、苦の一字は少々迷惑を感ずる、自分は別に此十年間苦痛とも何とも思はぬ、只朝に立つ機會がなかつたので、抱負經綸を行ふことの出來なんだ、遺憾はあるが、在野黨として常に監視督勵の位置に立ち來たのだから、國家に盡した一事に至りては、何等徑庭ないと思ふ』予は平氣で斯樣な理窟をいふ、誰れが聞いても、負け惜みとしか聞へぬが、予自身は、之れ僞りなき眞心の告白で、別段負け惜みでも何でもない。

一事は萬事で、凡て此調子だから、政黨首領としての予の素質は、日本の現在に於ては、可なり不適任者といふを至當とする。『加藤商店の商品は、正札掛値なしで、其上に皆安心して買へる物許りだが、如何にも店飾りが下手で、客の眼を引きつけることが出來ない。夫に主人は不愛嬌、番頭共は、皆客引の下手連中と來て居るから、ドウしても店が繁昌せずに困るヨ。我輩はモウ隱居の身分だから、干渉がましいことは云ひ度ない。お前共店の小僧連は、一生懸命で主人や番頭共の尻をたゝきつけねと駄目だヨ』。之は逝ける大隈老侯の、時折陣笠共を激勵する言葉であつたが、如何にも其の通りで、予夫れ自身が如何にも人氣取りが下手だ。單に下手な許りなら、自ら修養の途もあるが、空人氣取りは罪惡であるとの固き信念を持して居る。從つて大隈老侯が何といはふが、友人同僚が如何に諫めようが、少しも改宗の意志を動かさない、況んや陣笠連が如何に切諫苦言しても、厭なら脫黨するがよい、若しも黨の大勢が夫であるなら、何時でも辭職する迄だと云はぬ許りの態度で挺でも動かぬ强情不屈なものである。

斯て黨内には大小苦情の絕え間なく、然らば思ひ切つて結束して立つかと云へば、此堅牢拔くべからざる城砦に、銃劍丈で突擊する、暗黙な勇氣の所有者もなく、しかも二度の解散で所屬代議士は僅々百餘名に叩きつけられ、一方政友會は二百八十餘名の絕對多數に、意氣揚々と國内を我物顏に振舞はるゝ無念さ。我と我が指を嚙み切つても尙ほ諦め切れぬ無慘の境遇には、全く同情の淚を濺ぐに足るものがあつた。之は憲政會立黨十年の惡戰苦鬪史である。幾度か合同運動の起され、其度每に脫黨者の數人を出したのも、所謂此苦境から脫出する工夫もがなと焦るに焦つた、黨員生活の眞の悶へに外ならぬ。併し總裁としての予は、内心夫程に焦りもせず、悶へもせず、『常に政權は必ず落ちつく處に落ちつく』を繰返し、案外平氣で過ごして來た。只其圍繞者たる領袖連に至りては、總裁の此信念態度と、黨員間に蟠屈する、不平不穩の空氣との間に板挾みとなり、全く外間の想像し得られぬ苦境に一身を處して來たことと疑

ひもない。

三

予は所謂英國張りの政治家であるから、苟くも其出處進退に就ては、他に一本の指さへもさゝないとの固き信念を有して居る。西園寺内閣に外相として居ながら、鐵道國有に反對して直ちに辭職せるが如き、また大隈内閣の大浦事件に際會して、即座に他の二三閣僚と、連袂閣外に辭去せるが如き、誰れも知る其實例であるが、此連袂辭職當時、予の心中期する處は、必ずや公明正大なる此進退振りに對し、黨員の多數は心から歡迎して、其意氣を壯とし、政治道徳の維持者として謳歌するに相違ないと云ふにあつた。焉んぞ知らん、歸り來つて黨内の一般空氣を視るに、餘りに清廉潔白に過ぐとの囁き到る處に耳朶を打ち、加ふるに多數黨員の之を迎ふる態度、極めて冷々淡々たるには、全く失望と驚嘆を禁じ得なかつたとの話がある。英國の政黨や政客の心理作用を、其儘日本に行はふとして、其出發點に一大失望の淵に投げ入れられた予は、其後大隈老侯の所謂練達堪能の士としての推薦上書を、何の苦もなく山縣老公に引き裂かれて了つた。日本の政界は益々英國流に行かぬ實情を、斯して予はシミ〴〵と感得したに相違ない。

政黨生活十年間の辛酸苦勞は、斯々之から出發して居るのだが、當時の予を知れるものから見ると、昨今の予は全く別人の觀がある十年。前本部に來つて、所謂院外團のゴロ〴〵して居る有樣を見るや、一幹部を捕へて『彼等は何者だ』との質問、其答を承けて『英國の政黨にはそんな連中は一人も居ない、アンな無爲無職の徒を置くことは、第一國家の爲めにならぬ、本人共の爲にも、其前途を誤らしむるものだ、君等先輩の義務として、早く一定の職業につかしむる樣、訓戒するなり斡旋するなり、早く片づける方法を講じ玉へ』と、ヒドく不機嫌であつたもんだが、此二三年來は、運轉手臺に此青年連が、自働車の同乘を演じても、不機嫌處か却つて護衛者が居る樣に、幾分安心の氣分を見せる樣に進歩？した。陣笠連の云分ぢやないが、人間には苦勞をさせるもので、予は近時漸く日本政黨の實在なるものを理解する樣になつた。

所謂民衆運動も大嫌ひ、暗中飛躍も大反對で、政變のある度に、黨の爲め總裁の爲め、延ては各自の爲めにと、各黨員其向々に得意の活動を開始するのが例になつて居るが、此有樣を見ると、御機嫌は却つて斜めになる場合が多い。『政權はスリや強盜の眞似して取るべきものでない、如何に權道と云つても、其處には自ら則がある』と、無理にも政權を横取りしようとは絶

へて無らぬ。『總裁は夫でも我慢も出來ようが、我々をドウして呉れる。假りに百歩を譲りて、我々も我慢するとして、地方黨員のアノ悲慘な有様をドウ見て居るか、義理も人情もなさ過ぎる』とは、其度毎に起る黨員間の不平であつた。又『民衆の力を背景とせずに、眞の立憲政治がドウして行はれると思ふ、民衆運動といへば、直ちにモツブでゞもあるかの様に解釋するのが抑々の間違ひだ。一度街頭に立つて民衆に其口を開いて見よ、如何に冷靜水の如き總裁の頭腦でも忽ち熱し來つて、民衆の眞の力なるものが、其處に會得さるゝに極つて居る』と、不平タラ〳〵、或る時はテント演説會に迄引き出し、其處に一種の洗禮を受けさせようと、熱心努力した代議士連もあつた程である。されど予は舊態依然、少しも其信念を枉げず、又態度も變じなかつた。而して元老連の意のマニ〳〵、政權は變な横丁に許り外れることになつた。强いて元老連の意を迎ふる行動にも出でず、さればとて又民衆の力を背景に、之を捥り取らうとも奮發せぬ處、之が所謂熟柿主義の世評ある所以であらう。

併し環境の事情と、世間の空氣に對しては、如何に鋭角式の予と雖も、何時迄も頑强な抵抗が出來ぬものと見へ、處々に自然と鈍角式の個所が出來て來た、青年會館や劇場に、民衆を相手として其口を開く様にもなつた。殊に今回の選擧などには、其足跡全國に洽く、中には町村の寺院、部落の私邸にさへ、一個の應援辯士として、自黨候補者の爲に遊説これ力めたのである。一ケ月に渉る全國の遊説を了へて、番町の私邸に歸り來つた予は『一日に三四ケ所もやらされたが、體の勞苦は別として、心の疲勞は案外少ないものだ、前二回の選擧當時に比して、非常の勉强たなど、世間では評判好い様だが、東京に居て候補者其他の應援に忙殺される事を思ふと、遊説の方が何程氣樂だか判らんヨ』と云つて居た。餘人ならば此言何の不思議もないが、夫が予である丈けに、政黨首領としての進境が、如何に著しいものであるかゞ窺れる。

確か松田源治君の言と記憶するが、故原氏の首相時代に、『總理は如何にも偉い、其頭腦、手腕、力量、殊に力强い信念を獨斷專行する決心と實行力に至りては、近代多く其例を見ざるの大政治家である。況して其包容力の大と、忍耐心の强さに至つては、迚も眞似て模すべからず、學んで得べからざるものがある。只一つ惜むべきは、好漢理想に乏しく、常に其立脚地點を、一般國民と同一水平線上に置くことである、國民を指導するには、今一段高い階上に登るの必要を感知して欲しい』と云つた人がある。之を或る人が通ずると、原氏の答へが頗る振つて居る。『我輩とて理想はない譯ではない、併し政治は現實だ、

即ち俗中の俗事だ、一段高い處に立てば、成る程國民の頭上は悉く見へるが、其代り脚下は見へぬ。日本國民の多數を基準として政治を行ふには、今我輩のやつて居る程度が、丁度適當の政治振りぢやないか、智識階級とか、言論機關とか物の判つた方面から批難攻撃さるゝのは、之は觀念して居る。國民多數が夫で滿足して居れば、其時代の善政といふもんだ。國民多數の滿足して居る證據は、我黨の勢力全國に隆々たる現狀で、何人も否定は出來まい』と云つたそうだが、原一流のこの堅白異同の辯の裡には、確かに一の眞理が含まれて居ると思ふ。事大思想の盛んな現代の我國民に對しては、其弱點につけこんで、思ひ切り壓迫し愚弄し、或る一面に於て國民的反撥心を激成するの原因を作るとも、或ひは政治家として、其考慮の中に置くべき一ツかも知れぬ。但し原氏には、斯樣な深い考のなかつた事丈は疑ふの餘地がない。飽迄も現實主義政治家の雄者として、其手腕抱負を實行せんと期して居た丈の事に過ぎぬ。

原氏が現實主義の政治家であるに對して、子は理想主義の政治家である。子は二タ言目には、『ソンな不眞面目な事が出來るか』といふ、「國情之を許さぬから……』といふと、『夫では其國民的傾向から、改めてかゝらなければ駄目ぢやないか、政治家の本分は、國家の堅實なる隆盛と、國民の向上進歩を念とするにある、時代が惡るいから、夫れ相當の政治振りが、一番國民に喜ばれるでは、何處に向上進歩の前途があるか、政治家の第一に考ふべきことは、國民生活の安定と其指導とにある』と反駁する。即ち原氏は同一水平線上に立つて、國民を率ひんとするに對し、子は、二三段も高い階上から、之を指導せんとするものである。原氏は、綱紀弛廢を攻撃さるゝ毎に、『これ現代國民性の一端を發露し居るものに過ぎぬ』と、深く意に留めざる風を裝ふて居たが、子は三大政綱の眞先に綱紀肅正を掲げて、爾も、『綱紀の肅正は庶政の根本である』と喝破した。以て其施政の根本方針に、大なる距離あることが窺知される。

四

『政治は協調である』との英國の金言を引例して、『協調主義は何處迄も尊重するが、併し之が爲に從來の主義主張は枉げる譯に行かぬ』と、子は憲政會の議員總會に演説した。而して此方針に立脚して政革兩派に臨んだ。最初から黨の對等地位を高調し、飽迄も三派聯立内閣たるべしと主張して居た兩派は、此鮮明態度に對し、頗る感情を尖からしたのである。されど一般國民に對する公約の手前、左樣な感情問題は、此際顧みるに遑ない。との大襟度を發揮した高橋犬養兩頭首の連名聲明書となり、護

憲内閣は、大命拜受後、僅々三十五時間で成立した。此新内閣が國民の期待に、ドの程度迄背かざるの成績を擧げ得るか、これは首相始め、閣僚全部の努力精勵に待つ外、別に途はないが、子は若槻、濱口の二大臣を兩翼に控へて、鋭意行政財政の整理と綱紀の肅正に死力を盡さんとの決心固く、普選の斷行に對しては高橋、横田の兩大臣、また從來の行掛りを捨てゝ、其意見を一にするとの誓約あり。加ふるに永年破壞居士の別名で通して來た犬養大臣、今度は宗旨を代へて、組閣の最初から、建設居士になり濟したことでもあるから、よく世間の問題になる、隈板内閣の昔を其儘の内閣會議、一名内輪喧嘩會などは、茲暫らくはあるまいと考へられる、イヤあられては國民はたまつたものでない。されば此内閣は、或る程度迄の永續性を有し、同時に或る程度迄國民の期待に副ふ處の施設は、之を實現し得ることと思はれる。

子の出所進退に關しては、餘りに潔過ぎる程の高明さを示した歴史ある處から案外退却の早きやを案ずる黨員もある由。夫に相手が高橋氏といふ、恬淡過ぎる程の好々爺であるから、出來た匆々短命を危ぶむものもある樣だが、少なくも子としては、十年間振り出した手形の切替丈でも、二年半や三年はかゝるであらうから、少しは腰を落ちつけてやつて貰ひたい。之は國民に對する公約履行の義務であり、又政治家として、當然國家に盡すべき奉公であらねばならぬ。過日首相官邸に貴族院各派の代表者を招じ、組閣の披露宴を張つた時の事である。首相と農相は主人役として食卓の中央に向ひ合つた、而して首相の兩側には、德川議長と近衛公が着席した。談偶々歴代内閣の命數論べに移ると、首相は淡白に高橋農相を顧み『お互の性分では、ソウ永續しないかも知らんネ』と笑つた。すると農相も亦例のニコ〲顏で、直ちに肯定したとかいふ話がある。ソコで貴族院内部では、呑氣な人々だとの評判、一時高かつた程であるから、憲政會員等の今から案ずるのも無理からぬ話だ。

併し子は執着力がないといつても、其腰の强さは昔の太刀山に比すべきものがある。他の攻撃を受ける場合には、夫は屁一層强くなつて來る。我も强いが、信念も强い。殊に議論となつては、一騎打ちで勝てるものは先づ少なからう。大石氏の往年憲政會を飛び出したのは、歸する處、大風呂敷を擴げる虎錄に、物の見事に滅茶々々に切り破らるゝのが癪の種であつた。犬養老と仲の惡るいのも、主とする處は之で、後藤子の憲政會脱黨も、動機たる當の相手は大石氏であつたが、總括的に幾多の原因を合せると、此議論でやりこめられるのが、最大の部分を占むると云ふて然るべしであらう。其他子の不人氣男として、

一般に評判の高まつた原因は、剛當の雄辯を其儘に剛岸不屈であること、是非善惡の觀念が餘りに強過ぎて、包容力の極めて狹いこと、率直正直過ぎる性格は、多少邪念あるものをして、自ら接近し難き感じを起さしむること。聰明過ぎる人の、他の人が馬鹿に見へるのは致方ないとして、動もすれば其心中を態度に現はすことがある。子もまた其缺點の所有者で、近頃は餘程修業を積んだが、まだ〳〵顏に出ることがチョイ〳〵ある。

斯樣な缺點は、原氏にも初めは多分にあつた。從つて大隈内閣時代の政友會逆境當時には、總裁放逐論迄持ち上つた事もあるが、併し其間に苦勞を積んだ氏は、アレ程迄に大成〻した。子も苦勞十年のお蔭で、全く別人に接する感あるに至つたが、其理想主義が邪魔〻して、原氏の如く俗論黨の雄者たり得ない處に、大きな違ひがある。腰力が強く、信念に向つて邁進する勇氣と決斷は、原氏と酷似する點があるから、之を國政を用ふる處、必ずや相當の新面目を發揮し得べく、原の黨勢擴張に成功した程度の實收は、迚も憲政會として望み得られぬ他の半面に於て、綱紀の肅正と人心の緊張は、確かに相當の功果を擧げ得られることゝ思ふ。

五

個人としても公人としても、子は極めて親切な正直者である。最初のつきは頗る惡るいが、交際するに從つて、其甘味が段々と增し來る人である、子の懇親者は、位置の上下、年齡の多少を問はず、皆一樣に斯く云つて居る。殊に個人としては情誼に厚く、人に差別待遇を與へず、洵に好いお爺さんである。夫は世評の惡るいのと、正反對の好紳士で、公私共に一切嘘は云はず約束は重んずる。條理は立てる、同情心はある。殆んど缺點はないと云つて好い程信用すべき人だが、惜むらくは理屈は多い、皮肉が出る、謹嚴剛岸、一寸近かづくことが出來ぬ、邪を挾ち非を責むるには、寸毫も假借する處なく追窮する、而して愛嬌といふものは毫厘もない。此點に於て高橋首相の爪の垢でも煎じて呑ましたい氣がする。

現代の日本政界には、少し眞面目過ぎる性格の所有者であり、俗論を顧みるには、餘りに自信力の强過ぎるやに感ぜらるゝ加藤子、其首相としての前途や如何。余は此弛み切つた現代に於て、又不眞面目が普通である今日の風潮に對して、頗る面白き興味深い對照だと思ふ。子の實力、能く此大勢を幾分なりとも指導するに足り、以て頹勢挽回の方向に轉ぜしめ得るか。夫と

また力及ばず、終に俗流に降伏して、退却の餘儀なき敗慘振りを見するに至るか。之は子自身としての大なる試金石であるが、同時に國家としても、眞に時局重大の時機であることを斷言する。

子は臆病者は大嫌ひだ。氣の弱い腰の低い阿附の徒を非常に輕蔑する。世の輕薄者流と附和雷同的の言動は、最も厭ふ處であるから、夫につけても現代潮流の薄ぺらな享樂氣分、鬼面人を驚かすことのみ專業とする臆病者共の群れ、無自覺無反省な雷同的傾向、殊にお髯の塵を拂ふて、一資半級これ獲るに汲々たる奴輩の心膽を寒からしめて、セメては社會風教の上に、今少しく實のある堅さ強さの、何等か或る反影を印する丈でもやつて貰ひたい。如何に無力な內閣でも、之れ位の功果は豫期して、萬更ら無理な注文でもあるまい。



想華

川魚の記

室生犀星

ここに書きあつめたのは、予が故郷の犀川にゐる魚ばかりである。予性來奇癖あるが故か魚が好きである。魚のいのちを思ふのは予の心の幽遠を思ふと同樣である。こんど十年振りで郷里の川べりに住んで見て、魚のうつりかはりや生活を眺めてゐるうち、ノオトに書きあつめたのが川魚の記となつたのである。これらの川魚は國々によつて名前が違ふから、思ひ當たる讀者が、あれば一興である。もとより予はフアブルのやうな昆蟲研學の徒ではない。かかる徒爾にして閑散な文字をつらねることの物好きから、益なき雜文をつづつたのである。記して予が滯郷を紀念するなどといふものではないが、他日の思ひを充たすこともあるだらうと考へたからである。

うぐひ

冬のあひだに、川料理をする家へ石斑魚(うぐひ)をとりにやつたら、三尾とも尾や鰭のところに二寸くらゐの蛭が吸ひついてゐた。海苔のやうにひらひらしてゐる。なかにはあぎとにまで吸ひついてゐて、哀れに思ふた。蛭落し、——といふの

はこれかと思つた。冬の間に川下のゴミゴミした粗朶や蛇籠や亂杭のなかにかがみこんでゐて、春になり雪解けを待つてゐるうぐひに、田圃川から流れた泥まみれの蛭が、泳ぎ澄んで物凄さうにしてゐる肌に素早く吸ひついてしまふ。肉を裂いて食ひ入るこの蛭ときては中々離れない、うぐひにもそんな潑剌たる勢ひがなく、冬のあひだは、水のくらみにかがみ込んで、やはり春を待つてゐるのだ。それゆゑ蛭に吸ひつかれたまま、永い冬越しをするのだ。

「かあいさうに。」

女どもは左う言つて蛭をとるが、肉が破れてゐる。大きいうぐひは一尺もある。利根川地方でくきだつたか、ぎんぎうだつたか能くおぼえないが、その一つの方の名前だ。鮎に似てゐるが顏付は下卑で、田圃川にゐる魚類に肖てゐる。肌は白くうろこは鮎よりも荒い、そして鮎よりもうとい、鮎よりも暗い氣もちだ。ことに冬のあひだの、蛭に吸ひつかれたままで生簀にゐる間は。——

が、犀川の上手の大日山脈の雪がとけはじめるころに、海ざかひにゐるうぐひの腹に、いつの間にか朝燒けいろの朱いすぢが二本、稻妻のやうに駛つて、尾の尖端にまで閃めいてゐる。そのころになると埃ぽいうす暗い魚洞から出て、瀨すぢに向ふ。雪とけのささ濁りしたどうだうたる川すぢの冷たい荒砥の上で、ごりごりと肌をとぐのだ。蛭はすぐ落ちてしまふ。そして一日に一里くらゐ、ずんずん登るのだ。肌の朱い線はいよいよ濃く、ときには凄艶なほど美しくなる。あんなに野卑な顏付きの中に勇ましい色がただよふ。——市中は李の花や櫻や梅や早咲きの桃などで飾られ、一時に春がやつてくるころである。橋の上にゆききする人もきのふの煤ばんだ着付ではない、やさしい素足のかげさへ流れが早いために映りはせぬが、なまめかしい。

そのころをさくら石斑魚といふ。一番うまい季節である。さしみは鯉のあらひのやうにしぼる。ちぢれた肌身は冷た

くあまい、しやりしやりする。輪に切つてみそじる、味噌付て燒いてみそ燒、唐辛をちらつかせることは川合の優しい風情、箸立てて思ふは山々の殘雪でなければ、桃李を雜へた川ぶちの景色もその一つである。が、お腹のお子さんの朱いのに、何か哀れをさそはれる。子供はお子さんといふのだが……そのお子さんはほろほろと優しく箸のさきにこぼれて美味い。——たつた一軒、犀川には鮴屋といふ川料理屋がさびしく橋の袂に川魚をひさいでゐる。冬は川千鳥に、夏は河鹿といふきまり文句の、そこの料理も一寸惡くはない。——釣り人はたいがいみみづか、川原の砂にゐる黄ろいととこと蟲で釣る。竿のさきには餌をぐいと引くと合圖の鈴がつき、糸がぐるぐる圓をゑがいたら、ぐいぐいあげろ、——それも瀬の荒い深みの溜つたところに。——やはり川柳の芽ぐむころである。わたしは釣つたことはないが、まづ一日に三四本ぐらゐに過ぎないが、大きいので一尺、あるひは七八寸くらゐあつて樂しいさうだ。ただわたしの好むのは、肌にある朝燒けのいろが燒いてもおつゆにしても剝げないで、こつくりといい色をしてゐるところ、そして肌は女性的で、鮎のやうな少女少女しないで思ひ切つて肥つたところがさうわるくはない。鯉のからだはむつと來るが、鮎はすうとする。このうぐひはそのどちらでもなく、しつかりと撥ろからだができてゐるやうなところにある。それでゐて細身で、川魚らしい內氣さがある。

蛭の吸ひついてゐるのを落して登るのは、小氣味よくていい、春さきの小鳥が海べりの松林へ群れ、あぶらがかかり過ぎると砂を食ふ。そして痩せてからだを輕くする。それとどこか似てゐるやうな氣がする。——うぐひはいぐひの轉訛だと言海にかいてある。

はりうを

海濱の俳友をたづねたら、膳の上の物の中に、二寸くらゐの雑魚が揃いてゐた。ひと目にすぐ見たことのある魚だと思つたが、どうも思ひ出せない。――肌は鯖のやうに青い光つた深海色で、どこか瘠せてゐるが鋭敏な尾鰭をしてゐる。ことに尾が鰹のやうに股裂けが小氣味よく割れ、緊つた刎ねたかたちをしてゐる。

「見たことのある魚ですが、どうも思ひ出せませんが何といふ魚です。川魚は川魚のやうですが、ね。」

「これは二疋と食べては胃を不良くしますよ、はりうをといふのです。鯖魚ともいふさうですが、こちらでははりうをと言つてゐるんです。」

「はりうを、――。」

わたしはそのとき直ぐその正體を思ひ出した。夏のころ椅子の覗きで、瀬すぢの裏などをのぞいてゐると、ピリピリと震へるやうに神經的に泳いでゐる雑魚で、もの音がすると水馬のやうに水の中を駛つて消えてしまふはりうをだつたのだ。指さきに觸れるとちくつと刺す、――蜂のやうに鋭角な針を尾と鰭にもつてゐる。三疋か五疋くらゐづつ聯んで、やさしい雁行をつづけてゐるものだが、もの音に驚きやすい神經質なひりひりした魚である。

「はりうをでしたか、長く見なかつたものですから……。」

「いまでは犀川にも少數なくなりましてね、去年なぞ子供らに言つても、誰一人はりうをを知つてゐるものがゐないくらゐでしたが、唯一人見たことがあると言つた子供がゐましたがね。川下の子供でした。魚などといふものもだんだん數少なくなりさうですね。ことに種類のちがつた珍らしいのと來ては、ゐなくなる一方です。」

夕方の猫のためによくこのはりうををなまのままで食はした。眼の光をよくすると言はれてゐる。

「町はづれの尼寺にゐる猫は、いまでも能く小鮒などを自分でつかまへては食べてゐるさうです。尼寺では魚類をや

らないものですから、猫もなかなか考へたものですね。毎朝あそこを通りますが、氣のせいか、猫がよく田圃川を覗き込んでゐるのを見るとやつてゐるなと思ひますよ」

箸のさきでは、一疋ひと口だ。あぶらが濃くてこれでは二疋食べてしまつたら胃をわるくするかも知れない。味ひは濃い、舌端に溜つてならぬ。はりうを、はりうを、と左う腹の中でつぶやいてゐると、夏の日の何か悲しい自分のそのころの家庭のありさまが偲ばれてくる。――茶摘みの遅れたころに、それを手傳はないで裏の磧であそび草臥れ、息も絶え絶えなはりうを川原の小流れに弄くつてゐたことが、俳友と膳を狭んだ今ごろに思ひ出される……。

「川幅がせまくなつたり、流れが淺くなつたりしてゐるうちに、こんな雑魚が二三十年も經つたら全然ゐなくなるかも知れませんね。」

「あと四五年もしたら一疋だつてゐはしません。いまだつて見たことがないと皆言つてゐるんですもの。けふのはりうをは珍らしく鮴の中に雑つてゐたのです。」

俳友はさういふと、「はりうを消ゆるいのちや芹の角、はいかがです。」と言つて微笑つた。さういふあとかたもなくなりさうな魚界の消息は、もう一疋のはりうをに箸をつけた予の心に遠隔の寂寞をあたへた。種族の消えることは人の世ばかりではなく、小さびしい氣もちではないか。

「鴉はまだゐますが、鳶ときては、ほとんど數少なくなりましたよ。市中に圓を描いて悠々たる春日の永きを練る舊のくそ鳶さへ見かけなくなりました。」

鳶の輪の迴けき姿日永かな、こんな平凡な俳句をかいたのは、何時のころだつたらうか？――屋根石の上に落花が風のないのに舞ふてゐるやうな遠隔な思ひが、けふも濱が凪いだために吹く法螺貝の長閑な音色をきいてゐると、暖かく

日和にこもつてゐるやうに思ひ出される……。

かはえび

予はいつも川原へ顔を洗ひに、朝早くと言つても、日が昇つたくらゐに出た。冷たいが肌のこまかい川水は、指の股から爽乎として流れるので、顔を洗ふ氣もちは、腹の中までいさぎよい。水はどんどん流れて行つて、新しいのが殺う手の上に來てゐる。肌をふいてタオルで顔をもう一ぺんこすりながら、山を見ると、まだ睡つてゐるやうに靜かで落着いてゆつたりと、田舍はいいな、と左う思はれるのだ。――そこにある小さい石を拾ふて川原の遠くへ投げて見る、二三度してゐると寂しくなる。石と石とが遠くで落ちて音を立てる。石投げ遊び、――所在ない朝の、こんな仕草にも己れの閑散にして且つ止むを得ない小寂しさをあぢはふのだ。あちこちの蓬が伸びながら、そのしげみに土筆の族生を聞ふて居るあたりをながめ、いつもながら石垣の、すこし深くなつた瀬の小波のこないあたりを覗くのだ。

急流にも、きつと靜かな瀬溜りの、一點のにごりさへないところがある。そこで予はさし覗いて、友だちの、川蝦が朝早くから、篩ふて行列をつくつてゐるのを見るのだ。毎朝のことだから石垣の穴の工合や、その大きさ深さなどが分つてゐる。大きい穴のへりには十五六疋ゐる。小さいのには五六疋ゐる。大きさは一寸五分くらゐあらう、ひげは水の目にも冴えて白い。つんと伸びながら動いてゐる。錆つた水晶の肌身で、節がすこし黑ずんで、物音には用心ぶかく穴へかくれる身がまへをする。

「かはえび、――わたしの古い友だち。」

が、水が靜かなせいか、予が痩せた顔がちよつと映る。予はすぐ不愉快になる。こんなところで自分の顔は見たくない。さてわたしの古い友だち、——が、どれだけ朝起きをするか能く分らないが、日の昇らぬ、夜明けごろには穴の外へ出るらしい。何か餌にありつくためだらう。あるひは水垢をたべるのかも知れないが、あまり穴のそばを離れるものではない。その證據には潮や平地の水の中にはあまり出ない。內氣な、子供らしいくせにおぢむさいところがある。たまに蝦釣りのみみづにさわつてくることはあるが、針がうごいたら、三尺くらゐは水中で弓なりに飛ぶ。飛ぶとき水垢を立てるくせは、いかの墨をこぼして行くやうなものだ。尾が強い。柊の葉のやうにぴしつと刎ねる。川蝦を呑んでゐる川魚はすくない。海蝦は呑まれるらしい。

ひるまは石垣か蛇籠の奥へ這入つて出ない。どういふ川魚でもひるまはひつそりしてゐるものだが、川えびは、もうとう出て這ひはせぬ。——夕がた、れいの穴のまわりにその日の水をもう一ぺん百合のやうに飾り花をつける。景色のある百合の花たば、水中の軽業師、そして世にすねた風流めかしい行列、——が、どういふものか夕がたの行列は朝とちがつて何か寂しい。鐙ふたかたちではない。

手網のまはり七八寸くらゐあるやつで、鳥の羽根をつかつて穴の中から探ぐり出し、そしてすくひ上げるのだが、夏のおしまひころには大きい、しかし一寸くらゐのも些つとうまい。どうかすると死んだまねをする。朝には一合半くらゐすくへば捕れた方だ。夕がたは水がくらくなりかけるまでには一合くらゐだらう。いのちは弱い、水には川水以外にはもたない。いつそ水を切つた尾籠なら二時間くらゐ生きてゐる。

いつか疊の上に、這ひ出してゐるのを川べりの 手前の、古い家の中に見た。あのときはかはえびであるよりも、何か這ふものの一種のやうな氣がした。しづかな音を立てて、水のないからからの疊の上を這ふてゐるではないか？——

つまんで尾籠に入やうと思つたが、あまり珍らしいので暫らく眺めてゐるうちに、きうに世の中が變つてしまつたやうに寂しくなつてしまつた。水中の生きものであるせいばかりではない、自分がそれを眺めてゐることが、たまらなくなつたからだ。その川べりの古い家もいつの間にか賣られて了つた。だから故郷へきても貸家住ひをしてゐるのでないか、——その古い家にはいろいろな樹や春咲くものがあつたが、いまでは人の家だから見にゆくこともできない。

扨て、顔を洗つてしまふて道草をしたせいか、石垣の上からうちのねえやが手招きをしてゐる。あさめしが出來たといふのであらう。門のところに朝日が當つてゐる。

みづすまし と まひまひ

まひまひは田舍の占師、

それに脚が迅い。ふるさとの方言では、すいてもすいてもすツけん子、——水馬といふのだ。

蛇籠や川水がごぼごぼ落ちるところに、黒い甲鞘をした小豆くらゐの大きさの蟲が、殆ど終日同じい圓をえがいて舞つてゐる。疲れるとちよつと停るが、たいがいの時はくるくる廻つてゐる。まいまいと云ふ。何か悲しい占ひをしてゐるやうな氣で、予はよく炎天の下でこのまひまひの姿を寂しく眺めた。——指先きで小突くとすぐ水の中へもぐつて、消えてしまふ。甲鞘は黒い艶のいゝ底光りが、ときをり虹のやうな輝きを蔵つてゐる。

も一つの水すまし、これも脚が迅く、すうゐと水の上を辷つたら、一間くらゐ最う前きの方へ行つてしまふ。必らず二疋づつ重なり合ふてゐる。苛立たしかつた氣もちで或るときその一疋づつを引つぺがしたら、悲さうに泳いで行つた。そんないたづらをすると雨がふるとさへ言はれてゐる。すいてもすいてもすツけん子と言ふのは、掬うとしても仲々つ

かまへられない子といふ意味である。

　すッけん子、すッけん子、
　すいてもすいてもすッけん子。

　まぶしい白日の下で北國の童子らうたふのである。あるひは水を引つかけ、石を投げ、棒の先きで叩いて見ても、やはり平氣で泳いでゐるつらにくき水の上の道化者である。長い脚は六本くらゐあるが灰色をしてゐて鷹揚である。背中は鉛筆の芯くらゐで同じい色をしてゐる。不吉な蟲のやうな氣がする。へいぜいは物陰にかくれてゐる。晴れた日の水の中まで陰影を落して泳いでゐるとき、陰影はうつくしい。八ツ手の花の、あれを灰色にした陰影である。深い淵などにゐるのを見ると、こちらの心までしんとさせる、獨逸のふいるむに出てくる奴だ。まひまひは悲しいが、水すましは少々凄い。――水すましは羽根があつて駛つたやうな覺えがあるが、あれは太鼓打かも知れない。水中の鎌切、ぞくに太鼓打といふ。前足の長い奴で水の中を叩いてあるくからだ。これは池とか沼とかの古い水の動かぬところに、陰氣な泥をあびてゐる。あんまり陰氣くさくていけない。それより水すましの方がまだ快活であらう。

みみぢやこ

　みみぢや子、――これは目高の二分の一くらゐしかない。蓄音機の針、水中の遊雁、いつも五六十尾ほど行列をつくつて雁行してゐるが、實は石斑魚の子である。

　ふしぎに出水のあとに、石垣のへりから登つてくるらしい。あさぎ色の肌をして、きれいに列んでゐるさまは、全く美しい。石垣の上から手を叩くと、花のやうに散つて又あつまる。二分くらゐしかないからだに尾もひれもあるし、鱗

きやすい纖細な心も持つてゐる。予らは唯みみぢやこ、と言つてゐる。せんだく女らを遠退いたこの行列は、東京の容でしばしば眺める遊雁のやうにきれいに見える。初夏にこれを青磁の平鉢に泳がして眺めたら、全くその水色の肌が溶けてしまふかも知れない、――それほど消ぬがな風情である。眼を病むとこれを生きたままで水と一しよに、よく子供のときに呑まされた。

「目のくすりだ。」と言はれてゐる。

予はよく染附の古い魚手のものに、この優しいみみぢや子の姿の描かれたのを見た。稚氣のある縞柄はあつさりとして好ましい。全くこれは染附ものの、うすい藍手のなかから拔け出した晩春の優しい姿、――そして肥つて一寸くらゐになると石垣のへりには居らぬ。瀨すぢへ出て行く、一と月も經つと中學生のやうに强健になる。瀨の上に刎ねて出て、夕がたに立ちやすい蚊のやうな蟲をあさるのだ。そんな姿より此のみみぢや子の小さい姿を予はなかなかに忘れられない。その稚ない泳ぎやうに何とも言へぬ可愛らしさがあるのだ。

ごり

鮴屋といふ川料理屋で、見たことのある女中だなと思ふと、向ふでも暫らくでございましたと言つた。同じ川下の料理屋にゐたことがあつたが、間もなく丸髷に結ひ、豆腐買ひにわたしの家の前へ通つて行つたりした。あれから十二三年は經つてゐた。それだのに、こんな溫順な田舍の町にまだ女中をしてゐる。この女はさう思ふとすこしおばかさんでなければ、おとなし過ぎるのだと思つた。やはり氣になつた。

「ごり汁をさきにたのむ。」

ごりは一寸から二寸くらゐしかない。あたまの大きい肌のくろい奴ほどうまい。かじかと言ふのが、一番いい。これからあぶらかぢもよい。何しろ種類が非常に多い、姉さんごり、いもごり、うらじろ、ぐず、などある。いもごりはすぐ釣れる根性のいやしいごりで、ぐずはのろい性格をもつてゐて、瀞川にでもゐないことはない。姉さんごりは水の上へつウと辷り出て餌をひろふ水色の肌をしてゐる奴で、これも大してよくない。俗にかぢかが一番よいとしてある。これは餌ではなかなか釣れない。編み竹の三角笊を下流に置いて、上手から瀬すぢの石を動かしてゆくと、笊へ這入るのだ。あぶらかぢはお腹が茜いろをしてゐるし、うらじろは腹が白い。これは鰭のところに針をもつてゐてちくりと螫す。つかまへて耳のそばへ持つてゆくと、くくくと啼いてゐるやうな氣がする。

「ほら見ろ、鳴いてゐる。」

さう言つて予は幼ないころに、はねてゐる生きたままのうらじろのからだを、自分の耳に能くくッつけた。いまから考へるとあれは鳴くのではなく、口のなかが空氣に合ふと呼吸をするたびに鳴るのだらうと思つた。石と石との間にかがんで、瀬の迅いところでないとゐない。五六寸づゝ走るものだ。走るといふより石の陰から陰へ隠れて歩いてゐるもので、ふだんは砂地の人目に立つところにゐることは滅多にない。

「川上や川霧の中の鮴屋の灯」かうして來てみると、ごり汁といふものは淡さりとしてなかなかよい。牛蒡をすだれに裂いたのをあしらひ、れいの一寸くらゐの、肌のくろいかぢかが琥珀色のおみをつけの中を泳いでゐるではないか？――舌の上では小骨は立つが、それも困難をしなくとも、ほろほろと噛み分けられる、あつさりと、これは俳味であるかも知れない。あぶらはすくない。牛蒡の這入つてゐるところを見ると、ちよつとあぶら濃さうだが決してさうではない。

「寒 といふのもございますけれども、それは寒い内ですから。」
「雪の時分によく瀬で捕ですくつてゐたのが、ありや寒□かい」
「ええ。しかし子をもつてゐません。」
と言へば、この女もいままでに子がなかつたと笑つて言つた。「夏鯎」といふのもありさうではないかと言ふと。
「春、いま自分が、一番いいんださうでございます。水もよし、子ももつてゐるやうですから。」
鯎のうちでうらじろは六すくらひの大きいのがゐる。竿のさきに釘を三本食つつけたやすといふもので、予はよく水の中を覗いては、うらじろの頭をねらつては刺した。がつちりと刺し透しても、尾ではねる力があるため、竿はしつかりと持つてゐなければならなかつた。見付けたら大概刺せるものだ。のろい。しかし些つとでも動いたら石と石との間に隠れ終せてしまふ。大方陰から陰へ消えて行つてしまふのだらう。
手網でもよくすくへた。覗き硝子で、水の中へ這入つて、足の指先きで石を少しづつ動かすと、ごりが居ればきつと飛び出す。それが石のかげか、砂の上かに止まつてゐるのを見澄してすくふのだ、礫なればそれも一しよにすくツてしまふ。ぴちぴち跳ねた何處か蟲に似てゐるやうな風流な魚――硝子の覗きでそれを最初に見付けたときに感じる、驚きやすい些つと昂奮したやうな新しい氣もち。――それをバケツに入れてをくと、可哀くも、ち、ち、と小走りに泳いでゐるありさまは。何か水中の生きものにも話しかけたいやうな親密さが、感じられないではない。姿はどういふ魚でもさびしいものであるが。朴訥枯淡な川の瀬の子供の。 に至つては、やはり地の上の這ふもののやうな氣を起させるのである。予は魚といふものは一たいに木の葉の變化したやうなものだと思つてゐた幼少の心が、まだ失せきらないでゐるせいか、わけても形から言つても醜いごりは、どうやら古い古いむかしの魚の姿を今へ受

け繼いでゐるやうに思はれるのである。

山椒魚ほどみにくくはない、しかしあれをずつと少さくしたものと言つても、間ちがひなからう。姿は古く色も垢拔けがして、心はにぶいやうである。しんとした白日の下にこれの泳ぎ止つてゐるのを見ると、予の心はいちはやく欄干に手を置き、小さい生きもののいみぢい命と姿と、わが生ひ立の古くなつた今とくらべて物思ひするが常である。川べりにそだつたものは水の色やその動き、あるひは川下から吹く風に起る鱗波の工合でその日の釣がわかるやうに、予にもまた魚の姿をみてゐると長い己れの春夏の、さまざまの日の遊び心の、ときには樂しく亦悲しかつたころを思ひ出すのである。

あゆ

蕗の葉で桶の上に蓋をした。でないと若鮎といふ細身のナイフは、よく飛び出すからである。

予の心は若鮎の姿を愛するばかりでなく、水の上を愛するばかりでなく、水の上をさしのぞくと、その肌の匂ひがしてならぬ。まだ少女少女してゐるが、肌身はおとなの人差指くらゐあるだらう、雁行して人語がすると花のやうに散つてしまふ。びつくりすること、この鮎より外に甚だしきはなからう。そしてその優しい細面はいつも清らかに痩せ、黒い瞳はぱつちりと悧巧げにまたたいてゐる。よく嗅いでみると、若鮎は芽生えの匂ひがする。山ざくら、片栗の花、晩い蕗の薹などがそれと同時にかんじられる。

予の心は少年の心以外ではない。三竿の日の表に立ちながら、やはり糸を垂れてゐるのである。母兄姉への、取り立ての自慢話も手傳つて數釣れる樂しみにわないてゐる心は、全く善良といふべきであらう、五六十くらゐはわけな

ない。毛針には小鳥の毛をあしらつて、ひと目には美しい羽蟲に肖させてある。虹のやうな毛針である。この美しさと纖緻な工(たくみ)は實際よく編みこんである。鮎がこれに飛びつくのも無理ではない。曇天の日は紅毛針、晴れた朝はカナリヤ色の黄ろい針、ひるまは大きい方の毛蟲色。――

若鮎はあどけない。水の中の若々しい王さまである。水を離したらすぐに死ぬ。處女の死である。蕗の葉で、蓋をした桶のなかでは一時間はむづかしからう。水さへかへたらいいのだ。生簀なら一ト月くらゐ活きてゐる。若鮎は花屑をたべてゐるのか、又草の葉の露川(つゆかは)にこだつたせいか、びつくりしやすく、神經ぶかいところがある。稲垣足穂なら水の上ではツと氣合をかけると、あんな弱々しいからだをしてゐるゆゑ、鮎はすぐ浮いてしまふだらう。女性的ではあるが鮎はどこか美少年らしいところがあるではないか。――そして若鮎は淺い瀬ながれが好きで深いところを好まない。小波の鱗のやうな水の機嫌のよい合間を泳いでゐるものである。泳いでゐるといふより遊んでゐると言つた方がよいかも知れない。小學生の行列!

夏晩く予は犀川の上流の、岩礁のひだの上に立つて糸を垂れたことがあつた。淵をつくつてゐるゆゑか、水は動いてゐるやうで又じつとしてゐるやうでもある。底は見えない靜かさである。ナイフはここではずつと大きく言はば短刀くらゐになつてゐたらうか。――をりをり底石に肌をこすつてゐる物憂い夏の日のふとり過ぎた鮎の姿が、ぎらりと淺黄色の水をひらめいてくる。予はそんな時は一味の清艶を感じた。露(あら)はしがたい色氣であつた。予は予の心に山氣の清朗と嵐碧とを感じてゐたにかかわらず、なほ且つ細面が身をよこたへる色氣を感じずにはゐられなかつた。ぐいと來ると、巴なりに水の中をぐるぐる廻るのだ。それを水の上から離して釣り上げるときは、自分の重さでたらりと、竿を切り、山澗の緑つぽい空氣をよぎつて、これは鮮やかなさやを拂つた刄ものの美しい感じである。瞳は大きくなり、肌艶

もなめらかにあぶらはうつすりと掌にも感じられた。と、その心臓までがぴくぴく手のうちに感じられる。優しい山澗のまはし者、水苔の砥の上でみがいた肌身、夜の水の幽暗をも知らぬげな快活な顔付き、——

一たい釣人の心は悠々たるものであるが、いつも一味の寂莫と隣合せてゐるものである。かれは己れの生きてゐることを忘れたときは釣れない。おたがひ生きてゐるが故の、哀憐を持ち合せてこそ釣人の正體である。予の心もつねに左うであつた。釣れても釣れなくとも、予に取つては糸を垂れ、一日の清閑を塵外に踞するだけでこと足りた。倦けば岩壁の穴に座つて以つて更らに俗務を考へてもかまはないし、又、煙を吸ふて世上の遊妓に思ひを及ばしてもいい。とにかく釣人といふものはうら悲しげな、人にはわからぬ心をもつてゐるものである。若し釣れないと言つてそれきり釣りを罵るものがゐたら俗人であらう。釣りの中にゐて讀書するのもいいものである。その釣りの空氣の中にさへ居ればいいのである。

予の知人で泥くさい鮒を釣る人があつた。しかし泥くささが故に予は鮒釣りを責めない。唯その人が話すには關東地方地震のさへにも彼は悠然と釣を垂れてゐたが、かれの外のもう一人の釣人が、どうしたことか、川の中に百姓體の男につき落された。對岸であるためにその仔細を確めることができなかつたのである。——あとで端なくも世に地震があつて困つてゐる人があるのに、己れ釣りをしてゐて自適してゐる法はないと言つて、若い百姓がその釣人を水の中に突き落した。——これも一理はある話だと思つた。しかし彼は何も知らなかつたのである。かれはかれの風流が時勢に適しなかつただけで、又、めぐり合せの惡い百姓に遭つたのが不仕合せだつたのであつた。

この挿話はよく予の心を寒うした。

予は落鮎を見ることは、あまり好まなかつた。加賀手取川の落鮎は尺餘をかぞへるが、しかし尾の方から黄味がかつ

てくるのを見ることは、寂しい氣がした。これ以上かれは生きることが、できないばかりか、もはやお婆さんであるからである。一片の落葉。味も盛夏のそれより劣る。眞夏の鮎の香は遠くからも猫が騒いで鳴くが、十月のそれには猫さへあまり寄りつかぬ。――瀨にながれ、下り梁にかかるのも、うたた身すぎのわれわれ風情のやうで、また風流であるかも知れない。

こめす

十月の終りころに、まだ若々しい鮎がゐる。肌は固く緊つて七月の鮎のやうにすらりとしてゐる。それが十二月ころまで生きてゐる。どうかすると冬越をすると言はれてゐるが、實際予は鮎の冬越しを幼少の折に見たことがあつた。肌は「黒佛」になつて、黝ずんで瘠せて鮒のやうな色をしてゐる。迅いことは迅いが、どこか肝心の鮎らしさを失つてゐるやうである。細づくりだ。こめすと言ふのはこれだ。

六七月頃に產卵するものらしく、川の上流から一番あとに落ちてくる奴である。決して肥らない。どこか悲しげな不具魚のやうに見えた。――四山ことごとく落葉してゐるときに、この若々しいこめすを川の瀨で眺めると若葉ころの鮎の姿が偲ばれて懷しい。一味の哀愁があつて箸把る前に蹈み込んで眺めるのが常である。その腹には發育のよくないちよんびりした子を持つてゐるのも、季節のいたづらばかりではなく、魚介の幽遠な掟をそむいてゐない譯である。――ふしぎに大川から引いた用水などに、よく此のこめすがまぎれ込んでゐるものである。だから七八月ころに、こめすだけが、普通の鮎なら七八寸にも肥つてゐるのに、まだ二三寸にしか肥つてない。その肌もはつらつとしてゐるのは、若鮎と少しも變つてゐない。予と雖もこめすであるかないか位は、その見た感じで分る。――。

予の郷里では鮎の大きさは、凡て疊の目で計るのだ。疊の目が八ツくらゐから、鮎の味が、よくなると言はれてゐる。こめすはせいぜい十くらゐの目數が普通であらう。やはり毛鉤とか水垢とかを食べてゐる。ただ予の記憶するところによると、こめすは普通の鮎の仲間はづれになつて、泳いでゐるやうに思はれる。こめすが勢ぞろひをしてゐるのを見たことがない。これは一つには非常に數尠ないせいもあらうが、鮎の仲間としては矢張り遲れて生れてゐるので、群れを隔れてゐるのかも知れぬ。そんな氣もちも考へられないではない。左ういへばこめすは寂しい魚である。春生れの鮎の行列をはなれて、四五尾づつ凝然と泳いでゐるやうに思はれる。そして決して仲間へ投じないところにもこめすの哀しい生ひ立ちが窺はれるではないか？――それゆえこめすはあまり釣れない。たいがい網で捕るのである。

ひがひ

ひがひ、――鰉（ひがひ）と書く。

鯉のやうな鱗をしてゐるが、脊中のひれに斑點があり腹にもうすい斑點がある。あぎとは鮭のやうな紫色をしてゐる。三四寸くらゐである。鯉にくらべてはすんなりとしてゐるし、鮒よりは上品で、口つきが尖つてゐる。越中の神通川にたくさんゐるさうだが、犀川には極めて稀れである。ゐない事はない。――先帝陛下がおこのみになつたさうである。名前もあとで本字を作つたものではなからうか。しかし蝗（いなご）といふのもあるから左うでないかも知れない。

うなぎ

夕方でなければならない、晩でもいい、うなぎの穴釣り。うすぐらい夕方に予はたつた二三度こころみたが、滅多に

かからぬ。二尺くらゐの細い竿のしなしなしたさきに、みみず一匹を捺刺しにした針を、穴のなかへなるべく深さうな石垣へそつと入れるのだ。こちらは水に腰まで浸つて息もつけない靜かさでゐる。聞えるものは水の音ばかり、ときをり目のさきをにぎるものは、目の青い、大きい大馬蜻蛉といふとんぼの王さまが、掠めてゆくほかは、さう、たまには河鹿のこゑくらゐ、それでも穴に入れた針はぴりつともせぬ。うなぎは針を呑むものだ。そのときにぐいと遣るのだが、蛇をつかまへたといふのはありや嘘だ。蛇なら釣れぬ。あるひは魚洞に手を入れ、からだを冷しに下りた奴を暗さで知らずに握つたのであらう。——

若しぐいと來たら、ずるずると引き摺り出し、手網で受けるのだ。でないと、生の肌身で人さし指が利いても、ぬらりと辷つてしまへば、水の中ではないか?——大きな奴で二尺くらゐ、肌身は水が清いのでうまい。あたまは三角、尾は小さい扇のやうに棚が利いてゐると言はれてゐるが、とても釣れさうもない。穴釣りはくろうとの隱し藝、ときどき川蟹に餌針を狹み取られてしまふこともないでもない。川蟹ときたら石垣のそとへは三年も出ないさうだ。毛が生えコオヒ皿くらゐの甲羅をしてゐるから、ほそ腕一本くらゐ、わけなくぶつつりと遣つて了ふ。……

つちくじり

出水のあとに砂ばかりの洲ができる。美しいひわいろの玉砂には小さい礫さへも雜つてゐない。手觸りの柔らかな眞砂子の洲ながれ、——その砂の中からどうかすると、四五寸くらゐの、水色のうなぎに能く似た長いやつが、するりと砂を弄くつてゐる手さきを辷つて、水の中でも、砂の上にでも、よろよろと泳いで行く、つちくじりといふのだ。うなぎの子ではなくて、つちくじりはつちくじりで一生を送ると言はれてゐるが、どうだか知らない、——。

しかし砂の中の外にはゐない。あぶらがからだにあるために、水氣さへあれば砂の中へもぐることが巧みだ。くぢり込んだら、どこへ拔るのか分らないくらゐの迅さで隠れてしまふ。八ツ目うなぎのやうに、頭のさきから編み上げの靴のやうな穴が七八ツくらゐ開いてゐて呼吸をしてゐる。砂の中で何か水垢を養つてゐるのか、ともかく不思議な魚である。或ひは八ツ目うなぎの子かも知れない。

去夏相州湯ケ原へ行つたときに、瀧壺へそそぐ岩間をながれるじくじくした苔の上にまで、這ふてゐるものがこのつちくじりだつたのに驚いた。しかもその岩壁は立つてゐて少しも斜面になつてゐなかつた。どうして登つたものか、わづかな水の滴たりを手頼つたものらしい。――しかもつちくじりは海の捌け口で生れるものとすると、よく登つてくるものだと思つた。――予はこころみに此のつちくじりを流れに投げて見たら、泳げなくて弱々しく瀨の勢ひに流されるのを見た。が、かれは三間くらゐも流されてゐて、最後に岸の方へ泳ぎついて、そこから上流に向つて漸つと登るやうな姿勢を取つた。そして一尺か二尺くらゐづつ登つては傍見(わきみ)をし、そして又一二尺くらゐ登つて行つた。ちやうど蟬が木の幹を登つてゆくのによく似てゐた。それにうなぎが海から登つてくるときは、やはり砂底のある深い瀨でないと捕れない。砂地をこくやうにして三角笊をあてがひ、上手から砂を播り立てるのである。つちくじりが砂中にゐるのと能く似てゐる。この點から見ると矢張りうなぎの一族であらう。古老は別の生涯を送るものだと言つてゐる。予もつちくじりはつちくじりだけの生涯を送るものだと考へてゐる。何一つ樂しみのなささうな水中のみず、――の上にも、驚きや怖れが一さう強いのを見ると、生きものの世界のひろいのに驚く。

ふな

ふなには、きん鮒、ぎん鮒、べんぺこ等がある。一寸くらゐのを鮒子、ふなこといふのだ。ふな子、ちよつと田舍じみた女の子の名前のやうぢやないか、——。

ふなの子の一寸くらゐのは可哀らしいものである。予はよくこの鮒の泳ぎ澄んでゐるを見た。物音がすると鉢形の線をえがいて、もの陰へ匿れてしまふ。小ざかしい群に臆病でおどおどしてゐる。小さいほど鋭敏で小さいほど物優しいふぜいである。もの陰が好きで、それも石のかげより、古く蝕れた藁とか埃ばんだ水草のかげなどに、靜かに尾をうごかしてゐる。眼は金色をしてゐる。鱗も金色めいてゐる。手網ですくふとぴちぴち跳ねて赤ん坊の指さきのやうである。

鮒の子をすくふ遊びは、少し淸冽すぎるが、川の瀨にもされるのだ。鮒の子をすくふ遊びは淋しいまひるの、こども心にも物佗しい陰影が落ちてくるやうな氣がした。これは春おそくか秋口のあそびである。

予はべんぺこといふ、同じい子鮒でもうすあかい肌をしてゐるのを小寂しく思ふのである。非常に弱々しい。そしてお腹がふくれてゐて、きりつとしてゐないところが、愚鈍さうであるが實直さうに見えない。水からすくひ上げると、すぐ危なさうな生命をかんじる。同じ水に放しても、直ぐ生き返へらなくつて、すぢかひにつつつと走つて、何かに鼻を打つけるとそれきり死んでしまふ。はかない蟬のやうないのちである。これも群をつくらないでひとりで泳いでゐる。

先年予は伊豆伊東の溫泉で毒魚といふ大きさ一尺くらゐの、べんぺこと少しも變化らない肌のうすあかい魚を見た。そのとき予の心に浮んだのは、このべんぺこであつた。肌や鱗が同じかつた。たゞべんぺこには一尺くらゐな大きいのがゐないだけが違つてゐた。二三寸くらゐまでの大きさである。その浮が池の制札に毒魚であつて食へないと書いてあつた。我がべんぺこも鮒のやうには食へない。食ふと中毒すると言はれてるところが能く似てゐる。

も一つの感じは奈何にも毒魚らしい食へない陰氣さと、肌があまり白つぽいうすい桃色してゐるのが、いかにも毒魚

のやうに思へたのである。子供らは小鮒の中にぺんぺこを見付けたら、たいがい川原へ投げつけてころして了ふ。毒であるばかりでなく、哀憐を感じさせないからであつた。しかし予はこの魚を哀憐の心とともに味ふことが、尠なからぬ予の毒魚らしい氣もちを增長させるが故に、好ましい氣がした。

きん鮒はうろこに黄色ある金色のひらめきがあつた。しかしぎん鮒にはなかつた。ぎん鮒は腹がふくれて蛔蟲などを持つてゐる。白い日の當つた瓦屋根のやうな鱗をしてゐて弱々しい。金鮒はしつかりしてゐる。眼にも金色の輪が黒い瞳にある。

予が故鄕の川尻に、冬の日に安火を抱いて糸を垂れてゐるのは、鮒釣る人々である。竿のさきに霰や雪をかんじながら、用意して行つた安火に膝を入れ、外套や風呂敷でからだをつつんで、そして枯れた川楊のかげに蹲んでゐる冬の日の仙俗人は、市中の恩給者のともがらである。かれらの世界は、安火一つで冬と隣りしてゐるが故に、古めかしい物語りになるのである。――又、冬の日の寒鮒は市中の魚屋にみな頭を空へ向け、冷たい氷の張つた桶水に神經衰弱にかかつてゐるのを見たら、いかにこの國の冬が深々しく重々しく冷たいかが分るだらう。東京の金魚屋の店さきに佇んだ寂情そのものである。金魚と鮒との異ひはあつても、いづれも半分病氣してゐて、自分が生きてゐるのか、死んでゐるのかさへ分らない境致である。予はこれを見るたびに、鮒を食ふことの、いと大儀な、いと果敢ないことを感じた。

小鮒を生き身のまゝすで和え大根おろしに交ぜたのを、鮒のそろばんと云ふのだ。そろばんのやうに小鮒を刻み込むから、その名前があるのだらう。往昔のそろばん責めを思ひ出して仕方がない。――しかし大鮒のさしみは鯉のあらひより甘美い。ごりごりした味は水つぽいより氷の味がして、あまく、舌の上にちぢれてうまい。――そして燒鮒の串を農家の軒に眺めるのといふものは、まだ梅に早いころの俳句であらう。鮒の雀燒きといふのは東京根岸の里に、やや

風流めいた手みやげではあるが、予が故郷にはそれほどまでに小鮒を珍重しない。田舍には雀焼きに思ひを遣ることが少ないのであらう。その名前から考へて見ても、予が小鮒をもつて、田舍の川べりの友としての述說もあながち理由なしとは言へない。「鮒賣の姿は見えず寒かな。」――全く晴れた日にも寒の日も、鮒賣りは潟べりの女が、やさしい盥のやうな小判形の桶を頭に乘せ、そして、紅い手がらを着け、「ふな、いらんきイ――。」と呼び歩るくのである。そのこゑは晴天にも雪の日にもふさはしい。潟は河北潟、錢五が埋めやうとした潟に多い。「ふな、いらんきイ――。」と呼び歩くのは、漁家のおかみさんでなければ子娘である。予が故郷の大原女。

ます

むかし加賀侯のお川師で堀武三郎といふ男がゐた。この男は膳部寮からの用命で、ますや鮎や石斑魚などは殆んど事缺かさずにおさめた。亂暴者で山では醫王山の大池や鞍ケ嶽の池、手取川の淵々、犀川の淵など至るところ堀がその底を研めたと言はれてゐる。慶長以前は荒閑地であつたこれらの山々の池は、傳說と口碑の池だつたので誰も潜り込むものがゐなかつた。醫王山の大池では、堀は腹の朱いゐもりを一疋つかんで浮き上り、このゐもりの外に何もゐないことや、池底が古い雜木の腐れた泥と岩とかり固まつてゐることを言つて、古い口碑の妄をひらいた。鞍ケ嶽でも何一つ怪しいことがないと告げ、富樫政親が馬に乘つたまま入水した故、その鞍が盆十六日に浮き上ることなども、全くの嘘であることをも告げた。

犀川大橋で或時子供が取られたと言つたものがあるので、堀はさつそく水底をくぐつて調べたが、三尺くらゐのひらめが蹲んでゐた外に、何も恐れるものが、ゐないことを言ふた。堀はかはうその類であつた。かれがどうして鱒を捕る

ことに妙を得てゐるかが、かれ自身の口からは洩れなかつた。手網一本を携つて上流へでかける時は、そのかへりには三四本くらゐの鱒を捕つてかへつた。鱒には傷一つついてゐなかつた。人人は堀にその鱒のことを尋ねても言はなかつた。——堀は犀川上流の、岩からなつてゐる傘のやうな淵の穴へもぐり込んで、鱒を捉むのである。淵の入口はやつと人間が一人しか這入れないくらゐになり、そこには山龜がよく蓋をしてゐたさうである。それを探ぐつて置いて潜り込むのであるが、中は五疊敷くらゐあつて、鱒や鮎が登つて溜つてゐた。それを必要なだけを汲み取ると、又、山龜を探ぐつてその蓋を閉け、淵を出るのださうである。堀はしまひに帯刀を許されたが、ふしぎに入浴のときは必らず猿のやうな聲をして、子供などにからかつたさうである。ききき…と啼いて見せ、わけても暗い北國の錢湯に好んで沈み込んでは子供らをびつくりさせた。しまひに、ききおぢさん、といふ別名が子供の間に呼ばれた。實際かれはそれほど水の中では呼吸をつめることが長かつたさうである。子供らは晩食後の錢湯に假令へ堀がゐなくとも、その不思議なききき…といふ逆猿のこゑを聞くやうな思ひがしたさうだ。

その鱒もいまでは非常にすくなくなつた。市中にある瀬には見られない。ずつと上流にゐることがあるが、それさへ珍らしい方である。それ故犀川の鱒を地鱒と言ひ、この町の人は珍重してゐる。予の幼少の折は、それでも能く磧に鱒網を曳く大勢の人の群れを見たが、いまでは上流以外にはこれらの人を見かけない。現に幼少の折に、鱒小屋といふものが河原に建てられ、そこに暗いカンテラを點しながら、鱒の瀬登りを見つめてゐる張番を、雪解けごろによく見たものであるが、このごろではその藁づくりの小屋がけさへなかつた。そんな暢氣な張り番をするには、人々の心はもつと功利的になつてゐるらしい。——又、鱒がそれほど數少なくなつたことも實際らしいのである。が、上流の、川幅が三間くらゐに詰つた岩壁の間には、まだ鱒のかげが靜かな日の波紋をつくることがあるさうである。岩の上を這ふ蛇を尼

で叩いて殺してから、さて、餌食にすると言はれてゐる鱒の逸話は、ありさうな事ではあるが、あれは山鳥の間違ひではないかしらと思つてゐる。しかし鱒の尾で叩かれたら實際あざのやうに痕が赤く腫れあがるさうである。

どうぢやこ

どうぢやこ、——鰭に似てゐるが、もつと頭が三角に鋭どくなつてゐて、あぎとに針がある。川漁師さへ三年に一度くらゐしか見ないと言つてゐるが、それほど數すくないものである　東京のしやこのやうな肌のいろをしてゐる。近年あまり見かけぬが、ゐない事はなからうと川近の人は言つてゐる。

これも凡ての川魚のやうにびつくりしやすい。びつくりすると尾と頭とを丸くまるめ、それをぴつしりと跳ねる　跳ねる拍子に敵を撲つらしい。そのたびに水底を一と濁りさせて、姿を消してしまふ。怠けもので一ところを動かぬものらしく、いつも水底に蹲んで、老ひぼれて刺々しくなつたやうな風致である。泥鰌の逃げるときも一と濁りさせるものであるが、これは鰭に類してゐるかも知れない。顏はとかげのやうないやな顏をしてゐる。これなども古くから殘りかけてゐる魚で、次第に亡びてゆく魚であらう。姿もみにくく頑固で、プリミチブなところがあるから、研究したら面白からう。上代にはもつと大きかつたものに違ひなからう。すくなくとも今のうなぎくらゐはあつたものだらうと思つてゐる。これに似てゐるものは川どじやうがゐる。どじやうは泥沼にゐるものだが、からだに黒い縞のあるやつは清冽な水をこのんでゐるらしい。瀬の石うらなどにもかがんでゐる。

あまど

あまごは冬から春のものである。流し網で獲る。岩魚に似てゐるが又異ふ。からだに斑點がある すこし頭が大きい。――。

川料理屋で予はあまごのみそ燒といふものを食べ、風味ゆたかなものだと思つた。そんなにあぶらがなく川魚らしく淡白(あつさり)としてゐる。やはり川魚らしい寂しい味ひを持つてゐて、舌には媚びぬ。大きくないのでむしつて食べるのが、七月の鮎のやうに樂しいものである。――わけて犀川は千鳥が多いからその啼くこゑをきいて、あまごをむしるのは冬の夕がたらしい景色である。千鳥といふものは啼かない日には一羽もこない。啼く日には朝から夜おそくまでも川原へ來てゐる。氣をつけてゐても晴雨にかかはらないやうで啼く日と啼かない日とある。あまごも捕れないと何度電話をかけても、まだ來ませんと料理屋の返辭である。それゆえ予の偏狹な考へからあまごと川千鳥とを結び合せて考へるやうになつたのである。瀨の淺いところに三尺裾のあまご網を流して捕るのであるが、極めて目がこまかい。冬の吹雪に打つのである。――川料理屋といふものは藝者が裾を引きたがらぬ汚れがあるものである。何故だか知らないが、古めかしく砂礫をまじへてゐるやうで予はちよつと愉快に思ふのである。

あまごは淺瀨の石と石との間で、肌をこすつては登るらしい。そのため肌が強い張りを持つてゐる。だが鮎のやうに胃に苦みはないが、砂をふくんでゐる。

いわな

これは上流でないとゐない。清洌と寂寞の魚である。からだに黑い斑點がある。大きいので六七寸くらゐ。――岩照しや齒朶や龍のひげなどの生えてゐる岩淵にかがんでゐる。川の隱仙。――白山のふもと川にたくさんゐるさうだが、

犀川でも川はばが一間くらゐに詰つた深いところでないとゐない。
予はこのいわなを見るごとに、山川の深いところに觸れた思ひがした。なぜか殘月と白露とを想起する。燒いてみそつけて食つてもいい、酢であえてもいい。一種の、花のやうな味ひである。白百合のお祖父さん。そして山椒魚の孫。

さけ

冬の間にはますと同じやうに、川原に藁小屋が建てられ、なるべく廣い瀬に向つて入口がつけられる。そして晝も晩もその瀬すぢを見てゐる人がある。鮭が登るのをやすといふ銛でねらひ突きするのだ。鮭が登ると、二尺くらゐの瀬でも水面が隆起するらしい。どんなに靜かでも漁師は瀬なみに異常な音をきくのだ。そんなときに二尺に近い鮭が深々(しんしん)と登つてくる。ひとすぢに、泳ぎ澄んで頭一つ動かさない。泳いでゐるのか、居ないのか分らない程度の、大振りな泳ぎ方である。物音がしたら直ぐ下流へおりてしまふ。頭が少し横へ向いたなと思ふと、まるで一瞬のうちに淵へ這入つてしまふ。そんなときに瀬づらが動き、淵に波紋が立つことは言ふまでもない。――そして一日でも二日でも隱れて出て來ないのである。たいがいは鮭網を張つてをいて上流から下がる時に捕る。鮭網は六尺裾で長さは十間くらゐある。網の目は予らの手首くらゐある。予は鮭が瀬を越るのを見たときには、一種の雄大を感じたくらゐである。あんな大きなからだが目高より迅く走るからだ。兩側の岸に漁師のゐる場合は、鮭がしまひには慌てて了つて、川原へ飛び上つたりする。「鮭の洲走り」といふ奴である。實際かれが川原へ乘り上るときは、たくみに乾いた石の間を二間くらゐは、やはり習慣的に泳ぐやうな調子で走る。それは直ぐ捕れるが、さういふ光景は皚々たる四山の雪景を交へ、何かしら雄大以上である。かれが川原を刎ねて走るくありさまは、全く立派な、魂消た面白さだ。

ますと同じく極めて少數ないので珍重がられてゐる。肌には虹のやうな紅みと紫色とを持つてゐて、捕れただけの肌に平手をつけて見ると、べつとりした觸りの大きさがある。少女の大腿くらゐあらう。尾は脳のやうなねばりを帶び、扇のやうにひらいてゐる。その活々した張り工合は時に漁師の手を叩くさうである。だが予は何故かこの鮭がからだの大きい割合に女性的な氣がしてならない。肌の工合であらうが、生きた姿はやさしいものである。

東京では鮭は下品な魚としてある。しかし予らが町では、地鮭は高價で叮重な吸ものに用ゐられてゐる。味なども北海道のものなどと同一ではない。もつと小味で、あぶらが少なく、肉が小ぢんまりしてゐる。水の清洌なのと、淺瀬にもまれてゐるためであらう。

かはがに

川蟹は石垣の奥にゐる。大きさは手の甲くらゐある。みみずや川蟲やえびなどを食つてゐる。石の裏にゐてそばへ來て泳ぐ鮒などでも素早く鋏ではさんでしまふ。鋏の動かし方が愚直さうだがその愚直さうなところに、あいつの鋭い素早さがあるらしい。一度鋏んだらその指が折れても、まだ鋏んでゐる。ぎざぎざした鋏に茶褐の毛が纏ふてゐるところを見ると、古い時代のものであゝいふ双物があつたやうな氣がする。しかも白い晒されたやうな鋏の齒はしやりかうべのやうな一種の表情があるではないか？……

川蟹はやはり予が古い友だちの一人で、ときどき忘られてゐる仲間である。予らはよく石垣の石と石との間に兩手を入れ、魚洞にゐる魚をつかんだものである。さういふ時の魚は追ひつめられて石の天井裏にくツつき、その魚の肌に指がすれすれになつてゐても、手がとどかないときがある。さういふ時には何か固いものに指がふれる。石でも魚でもな

いと考へてゐるうちに、いきなり鋏まれてしまふ。そんなときには指にふれる蟹の足を一本づつ千切つてしまふのであるが、十本のうち五本まで千切られてしまつてもかれは降參をしないものである。かれは依然その鋏で最後までたたかふ。かれの降參したころはその鋏をもがれてしまふ時より外にはない。このやうな慘酷な遊びに夏の日の永さを知らなかつた予は、いまかれの身の上を錄するに當つて何か濟まないやうな氣がするのである。おどけもので姿は悲しく心はやさしい生きものであるのに、あの鋏があるだけに憎まれもするし抵抗もするのである。龜のごときは滅多に殺されないものである。姿が悲しくないためである。愚直をよそほふ横着ものは龜である。わが川蟹は天眞にして且つ爛漫である。糸引いて夏の日に予はその天壽を縮めたことを思へば、予の心に不安めいたものが彷徨することを感じるのである。

川蟹にみそがにと云ふのがある。これは食へない。からだがぐにやぐにやで熟柿のやうに柔らかい。色は青ぐろい。蟲のやうな氣がする。――清水蟹(しやうづがに)といふのは東京の爪くれなゐの小蟹で、大川には餘りゐなくて崖や岩、石垣などの海近いところに穴を掘つて群生してゐるものである。足が迅い。穴は蜂の巢のやうに縱横に掘られてあるために、そこへ這入つたらとうてい捕まへられない。擣いて蟹味噌にするさうではあるが、北國地方は海からも大蟹が捕れるために、こんな清水蟹は食はないやうである。しかし先刻の川がには湯煮して食べるさうであるが、まだ一度も口にしたことがない。子供のときに些つと生(なま)のままで舐めたことがあつたが、塩氣まじりの、川えびの肌のやうな味がした。あれなら、そんなに不味くはなからうと今でも考へてゐる。

田用水などの石垣にも住んでゐる。それに蟹の住んでゐる穴はすぐわかる。第一深くて奥へまで手のとどかないところや、苔の生えた石の古い穴にきまつてゐる。もう一つ、前の年にゐた穴には決つてあとの年の夏にもゐることだ。これは

他の魚の例にもなるが、かれらも住みよいところがちやんと定つてゐるらしいのである。おもにうなぎやなまづなどもみな穴が決つてゐる。そんな穴には又決つて逃げ口がついてゐるのも、考へたものであると首肯かれる……。

べんどうじ

べんどうじは小さい筆の穗くらゐある川貝である。石にへばりついてゐる。清冽な水にも好んで生きてゐる。物音がしたり觸つたりするとほろりと石から落ちて了つて、貝の中に身をちぢめる。水垢色をしてゐるので砂利のやうに見えるから再び見られない。

たはいない幼年のときには、この貝が五つ六つならんで吸ひついてゐる石を川原に搬んで、日和へ出しておく。すると何時の間にか水を吹いて、その水が乾くのにつれだんだん水氣がなくなつて死んでしまふ。——そんな詰らないことが面白くて無益の殺生をしたものである。

べんどうじには、小さい觸り角のやうなものがあつて、それを動かしながら、石の上を這ふてゐる。この姿は長閑げに見える。そして例の、ころりと落ちてしまつて死んだ眞似をする。

予はその殼を破つてよく鯽を釣るときの、餌にしたりした。何のために生きてゐるのか分らないやうな貝である。せきれいの好物らしく、石を叩きながらせきれいがよく銜へてゐるのを見た。それ以外に川には貝がゐない。蜆は满川の海の近くにゐるが、淸い水には住まない。——べんどうじは俗語であるが、學名は知らない。



亡き妻を哭く

（一幕）

長田秀雄

人物

彼
友人
女中
彼の亡妻の母

高等な旅館の一室、二階、二間つゞきになつてゐる。正面、欄干のついた縁がは、障子はすつかり開け放してある。室の隅に机、大がたの書棚二つ、中央には、紫檀の大卓、その上に卓上電話。壁上には大きく引伸した亡妻の寫眞がかけてある。初夏の午後――やゝ曇つた日の出來事である。彼と亡妻の母とが紅茶をすゝつてゐる。

彼。どうも少しこの紅茶は出すぎて苦いやうだ。
亡妻の母。やつぱり宿屋の女中の仕事ぢや、思ふやうには行きませんよ。
彼。（母の心持を感じて、拒否するやうに）いや、何時も、なか〳〵うまく入れてくれるんです。
亡妻の母。こんな處ぢや、ちやんとあなたの御世話をする女中はきまつてゐますの。
彼。（凝乎つと母を見る。）いや、一週間替りになる規定のやうです。（間を置いて）だが、僕だけは特別にして貰つてゐるのです。
亡妻の母。特別とは……
彼。どうもこれ迄、家庭を持つてゐただけ、定まつた奴でないと不自由のやうな氣がするんでね。
亡妻の母。ぢや、あなただけはずうつと定めたのを使つてゐらつしやるのね。
彼。さうです。その方が世話がよく屆くやうです。（間。）どうです。お母さん。牛乳をお入れなさいな。
亡妻の母。はあ、頂戴しますよ。（凝乎つと考へてゐる。）
彼。牛乳はお嫌ですか。
亡妻の母。いゝえ、結構です。（飲む。）
彼。（母の口元を見てゐる。微笑）でも、この頃はやつとかう云ふ生活に馴れましたよ。
亡妻の母。（何か云はふとする。）……

女中が出てくる。

女中。お手紙が參りました。（二三通の郵便と雜誌とを差出す。）

彼。（無造作に受取つて讀む。）

亡妻の母。（女中の姿をまじ〳〵と何か發見しやうとするやうな眼付で見つめる。女中が退場すると彼に向つて）なかなか氣の利いた女ですね。

彼。駄目です。いくら氣が利いてゐても、やはり他人ではね。

亡妻の母。そりやさうですよ。（間。思切つて云ふ。）ねえ、健さん。どうです。本統に後をお貰ひなすつちや……

彼。（苦笑する。）また始まりましたね。

亡妻の母。何時も申上げるとほり、そりやあなたがさうやつて、あの子の事を忘れずにゐて下さるのは私どもとしては大へん嬉しい事なんですけれども、あなただつて、まだ、お若いんですから、このまゝ一生男やもめで御暮らしなさる事も出來ませんしね。

彼。（笑ふ。）けふは正面攻擊ですね。

亡妻の母。駄目ですよ。もう、けふは誤魔化されませんよ。

彼。弱るなあ、どうも……

亡妻の母。實はけふ參りましたのは、一人いゝ人が見付かつたもんですから、主人とも相談しましてね、一つ否應なしに、あなたを說落さうと思つて、それで出かけて來たんですよ。

彼。お母さん。あなたとお父さんの御心持は充分僕にも分つてゐるんです。が、その話だけは、もう少し待つてくれませんか。

亡妻の母。だから、結婚は後になすつたつて、兎に角、定めてだけお置なすつたら、どうです。

彼。（間を置いて）その定めると云ふのが厭なのです。今の僕の心持では……

亡妻の母。でも、先方があんまりよささうな人ですから、惜しいと思ひましてね。

彼。（不快らしく）何しろ、まだ、倅子が亡なつて、六ヶ月にしきやならないんですからね……

亡妻の母。（涙ぐむ。）健さん。悪くお取りなすつちや困りますよ。あの子が生きてゐる間は、あの通り、よくして頂きましたし、また、亡なるときだつて、親身も及ばないやうな介抱をして頂いたんですから、私どもは、どうかして、あの子の御恩返しを、あなたにしなくちや、ならないんです。主人とも、いつもさう申しくらしてゐるんで御座いますよ。でね、かうして御不自由な宿屋住ひをしてゐらつしやるのを見ますと、どうしても、私どもの手でいい奥さんをお世話しないぢや、氣が濟みませんの。

彼。……そりや、もう、いつでも申上げるとほりよく分つてゐます。だが、何と云つても、まだ、六ヶ月しきや經たないので、僕は、そんな氣になれないのです。

亡妻の母。でも、あんな人はまた捜さうつたつて見付かりやしませんよ。ねえ。健さん。まあ、話だけでもお聽きなさいな。

彼。（面倒臭さうに）えゝ、お話くらい聽いてもよう御座んす。

亡妻の母。（笑ふ。）何だか、あなたが冷淡なのに、私どもがはたから夢中になつてゐて、少し變ですね。でも、まあ、お話しませう。先方のお父さんは、京都の方なんですがね。

彼。（冷かすやうに）ぢや京美人ですな。

亡妻の母。（本氣で）えゝ、あんなのが京美人と云ふんでせうね。そりや奇麗な人ですよ。そのお嬢さんは。

彼。そんな美人か、わざわざ前科一犯の僕のところへ來やうと云ふのは、何だか腑に落ちませんね。

亡妻の母。（笑ふ。）前科一犯はよう御座んすね。でも、是非來たいと云ふんだからいいぢやありませんか。

彼。ぢや、その人も再婚か何かぢやないんですか。

亡妻の母。滅相な――それこそ初婚も初婚、まだ、學校を出たばかりなんですよ。

彼。年はいくつです。

亡妻の母。廿三ですの。女子大學をこの春卒業した方ですわ。

彼。（間を置いて）どうも可笑しいな。

亡妻の母。（懐中から一葉の寫眞を出す。）此處に寫眞があります。置いてゆきますから、まあ、よく考へて御覧なさい。

彼。（手に取つて一寸、見る。）ふむ。

亡妻の母。どうです。美人でせう。

彼。さうですね。こんなのを、まあ、美人と云ふのでせうね。（裏をかへして見る。）柳田みつゑ……廿三歳……

亡妻の母。女子大學を出ただけあつて、字なんかもうまいぢやありませんか。

彼。僕より餘程、上手だ……少くとも。

女中登場

女中。只今、創作社の小僧さんが、この校正ズリを明朝までに見て置いて頂きたいつて持つて參りました。

彼。（校正ズリを受取る。）よし、ぢや明朝取りに來て下さいつてさう云つてくれ。

女中。はい

彼。（封筒の表書をみる。）おい。こりや違ふぜ。僕のところに來たんぢやないぜ。

女中。（赤くなる。）おや、さやうで御座いますか。

彼。武田靜水樣と書いてあるぜ。

女中。ぢや十三番で御座います。まあ、どういたしませう。丁度、あちらが御留守だつたもんで御座いますから、此方の御手紙を、つい、上書もみずに十三番のお机の上に置いてまゐりました――どうぞ御勘免遊ばしまして……只今、すぐ、取換えて參りますから……

彼。十三番にこの人が居るんだね。

女中。はい、昨日引越してお出でなさいました。

彼。武田がこの家に引越して來るとは不思議だな。

女中。（彼の放出した校正ズリの袋を受取つて會釋をして去る。）

亡妻の母。知合のお方ですか。

彼。えゝ、昔大へん仲よしだつた男です。

亡妻の母。やつぱり小說家のお方。

彼。えゝ、……奴、きつと、僕が此處にゐる事を知らないで引越して來たんだな。

亡妻の母。あの女中も隨分粗々つかしい女ぢやありませんか。

彼。宿屋の女中なんて、みんな、あんなものですよ。

女中登場

女中。これが此方様のでご座いますか。

彼。（受取る。）うん。これだ。ぢや、明朝(あした)使をよこしてくれつてさう云つてくれ。

女中。はい。（退場。）

亡妻の母。（その後姿を見送つて）いやにお洒落(しやれ)をして、何だか厭(いや)らしい女中ですね。

彼。あの女の家(うち)は、もと、料理屋か何かしてゐたんださうですよ。

亡妻の母。どうりで、何處かに阿婆ずれたところが見えますね。

彼。（笑ふ。）お母さんは、また、馬鹿にあの女中が癪にさわると見えますね。

亡妻の母。別に癪にさわるといふ譯もありませんがね……そりやさうと、その寫眞はどうです。氣に入りませんか。

彼。困るなあ……何もさう急がなくたつていいぢやありませんか。

亡妻の母。えゝ、そりやさうです。でもね、私どもの者はかうなんです。御存じのとほり、長男はあゝやつて支那へ行つてゐますので、私ども夫婦は、倅子ばつかりが手よりだつたのですの。ところがあゝ云ふ風で、亡なつてしまひましたので、二人ともすつかり力を落としてしまひましてね、せめて、これからも、あなただけには親身のお付合して頂きたいとかう思ひましたの……それには、奥さんを私どもから御世話をして置くのが一番都合がよかないかと、主人も云ひますので、これで一生懸命に捜したんですの。

彼。お母さん。大丈夫ですよ、僕は。――そんな事をなさらなくつたつて、あなた方御夫婦は一生、親(おや)だと思つてお仕へしますから……

亡妻の母。ええ。そりやもう、あなたのお心はよく分つてゐますの。でもね、やつはり知らない處から、奥さんでもゐらつしやると、何だか改たまつてしまつて、これ迄のやうに氣樂には上れませんからねえ……

彼。だから、當分妻帶しないからいいぢやありませんか、

亡妻の母。そりやさうですけれど……でもね、何時、何處でお氣に入つた人が見付かるか知れませんからねえ。

彼。(苦笑。)どうも神經質ですね、お母さんは。

沈默

亡妻の母。(思切り惡く)主人もさう申すんですが、どうです。一つこのお娘さんをそれとなく見て御覧なすつちや……

彼。(少し强く)お母さん。もう、その話はよしませう。あんまり愉快でないですから……(寫眞を返す。)

亡妻の母。(寫眞を受取る 健さんも相かはらず强情ですね。

彼。それよりか、どうです。今日は僕も暇ですから、久振で、ゆつくりしてゐらつしやい。何處かに飯でも喰べに行かうぢやありませんか。

亡妻の母。えゝ、有難う……でも、主人が一人で留守番をしてゐますから、あんまりゆつくりもしてゐられませんの。

彼。いいぢやないですか。どうせ、お父さんだつて、あなたがゐらつしやらなければ、何か取つてお喰べなさるでせうから……他の處ではなし、久振に僕のところへ入らしつたんだから……

亡妻の母。えゝ、でもねえ……

彼。丁度、僕も、宿屋の飯にはうんざりしてゐるんですから、それに一人で喰べに行つても、うまくありませんからね。

亡妻の母。それにこれから一寸寄つて行く處もありますのでね、やつぱり主人と二人きりですと、何やかや家の内がい

……そがしくて、なかなか用達にも出られませんでね、かうして出かけると一度に二つも三つも用を達して來るんですよ。

彼。何處へ寄るんです。

亡妻の母。つひ、そこなんですの——あなたは御存じぢやありませんでしたかね、興津さんは。

彼。興津さんと云ふと、俊子のピアノの先生ぢやあませんか。

亡妻の母。え丶、さうです。こつちが段々落ぶれてくるので、つひ、お遠々しくなつてしまひましたが、あれが女學校へ行つてゐる時分までは、かなりに御懇意に願つてゐましたんですよ。

彼。この邊にゐらつしやるんですか。

亡妻の母。え丶、電車通りのつひ向ふです。あの子の亡なる前にわざわざ何度か病院に見舞つて頂いたさうですから、一度御禮かたがた伺ひたいと思つてゐましたのでね。

彼。ぢや、かうしたらどうですか。兎に角、まだ早いんですから、興津さんに行つてゐらつしやい。そして、歸りに此處へ寄つて頂いて飯を喰べに行きませう。

亡妻の母。でも、それぢやあんまり……

彼　何です。遠慮なんかするんですか。

亡妻の母。でもね……

彼。あなたは僕のお母さんぢやありませんか。

亡妻の母。（眼をおさへる。）俊子は本統に幸福です。あんなに若死はしましたが……

入口の唐紙が突然開く。十三番に引越してきた彼の舊友が現はれる。

友人。やあ、

彼。おゝ、武川君か、珍らしいぢやないか。

友人。實は昨日、君が此處にゐるとは知らずに引越してきたんだよ。（入つてくる。）

彼。不思議な事があるもんだね。

友人。うん。（坐る。）隨分久しく會はなかつたね。

彼。さう――もう、かれこれ、四年位會はないね。

友人。御邪魔ぢやないかね、もし、何なら、僕は、また後（あと）でやつてきてもいいんだが……

彼。（母の方を見て）いや、別に……これは僕の亡なつた妻（ワイフ）の母なんだ。お母さん。こりや僕の古い友人で武川と云ふ男です。

友人。あゝ、俊子さんの……

亡妻の母。初めまして。――私（わたくし）は俊子の母で御座います。どうも失禮いたしました。

友人。いや、お見それしました。俊子さんのお母さんなら、何時かお眼にかゝつた事がある譯なのです、もつとも、その時は紹介はして頂きませんでしたが、……

亡妻の母。さやうで御座いましたか。ではね、健さん、私はとに角、興津さんのお宅に伺つてきませう。

彼。さうですか、ぢや、歸りになるつしやい。お待ちしてゐますよ。

亡妻の母。えゝ、ぢや、お言葉に甘えてやつてきますよ。（友人に）では、どうぞごゆつくり……

友人。や、失禮いたしました。

亡妻の母退場

彼。一寸失敬するぜ。（見送りに退場。）

友人は彼の言葉に、たゞ、表情だけで答へる、空室に坐して、あたりの樣子を見廻す。壁上間にかけた亡妻の大形の寫眞に瞳をこらす――苦笑。彼歸つてくる。

友人。（眼はやく彼の姿を認めて）君、この俊子さんの寫眞は、最近のかね。

彼。さうだ…まあ、最近のだね。

友人。ふうん…俊子さんは死ぬまで若かつたんだね。

彼。さうかね。

友人。僕らが疎遠になる前とちつとも變らないぢやないか。

彼。さうかしら。

友人。うん。變らないよ。（間。瞳を彼の上に轉じる。）時に、君はまたどうして宿屋の生活なんか始めたんだい。

彼。どうしてつて云ふ事もないが、何だか家を持つてゐるのが面倒くさくなつたんだよ。

友人。ふうん。でも、不自由だらう、こんな他人まかせの生活は。

彼。これや不自由にや不自由だが……また、呑氣な處もあるからね。

友人。君みたいな文壇の大家が、自分の家を持たないで宿屋生活をしてゐるなんて、少くとも今の日本の社會ぢや、不思議がられるね。

彼。冷かしてやいけない――相かはらず君は口が惡いね。

友人。（校正ズリを見て）何だい。校正かい。

彼。あゝ。

友人。創造社から君の本が出るんだね。

彼。君のも出るんだらう。

友人。（吐出すやうに）何、下らない物さ。安い原稿料で、あすこの飜譯をやつてゐるのさ。

彼。さつき女中が間違へて、君のところの校正ズリを此處へ持つてきたよ。それで僕は君が十三番に引越してきた事を知つたんだ。

友人。（校正ズリを見てゐる。）短篇集かね。

彼。さうだ。

友人。さぞ賣れるだらうね。

彼。いや、此頃はだめだね。

友人。（悪意を露骨に現はす。）君の物は女學生や若い職業婦人の間にすばらしい勢力があるから羨ましいよ。

彼。…………

友人。「亡き妻を哭く。」が卷頭に出てるね。

彼。……兎に角、あれは僕の最近の氣持を僞らずに書いたものだから、全篇の序と云ふつもりで卷頭にしたのだよ。

友人。この小説は珍らしく雑誌に出た時に僕も讀んだよ。

彼。讀んでくれたのは有難いね。君の讀後の感想をきかして貰ひたいな。

友人。僕の感想なんて、君にやつまるまいよ。

彼。そんな事はないさ。それに、君は俊子をよく知つてゐるだけ、僕は君の感想がきゝたいんだ。

友人。(眼を光らす。)僕が俊子さんを知つてゐただけ……ふむ。(意地惡るく)僕は君は厭だよ。

彼。僕が厭だ……

友人。さうだ、有體に云へば、昔、君と懇意にしてゐた時分は、僕は君を輕蔑しきつてゐた――ところが、君と會はなくなつてから、大分、君も變つたやうだ。今では僕は君が厭だ。誤解しちや困るよ。君が厭だと云つたつて、何も君の文壇的盛名を嫉んでゐるんぢやないからね。

彼。君はどうかしてゐやしないか。

友人。いや、どうもしちやゐない。僕は君の陰險な根性が大厭なんだ。

彼。(憤然とする。)君、いゝ加減にし給へ。僕が何時、陰險な事をしたい。

友人。陰險ぢやないか。ぢや君はさつき何と云つたい。この「亡き妻を哭く」で、最近の氣持を僞らずに書いたつて云つたらう。

彼。事實、僕は僞らずに書いたんだ。

友人。(冷笑。)ふざけちやいけない。僞らずに書いた者が、何も意味ありげに僕の讀後の感想をきくがものはないだらう。

彼。(短き間。)どうして

友人。(横を向いて)君は何もかもちやんと知りぬいてゐるんだ。そして白を切つてゐるんだ。

彼。(笑ふ。)變だね、君が一人で興奮してゐるのがおかしいよ、僕は。

友人。そりや可笑しい筈さ。君の皮肉な復讐にうまく僕が乘つた譯だからね。

彼。復讐――何の事だい、君、それは。

友人。(憎むやうに善良な彼の顏を見つめてゐる。やがて顏色が和らぐ)ぢや、實際あれが君の僞らざる氣持なのかい。

彼。無論さうだとも。

友人。ふうん……ははは……こいつは大笑ひだ。

彼。(てれる。)昔君がよく冷かしたとほり、僕はやはりセンチメンタリストだね。(間。)死んだ妻の事をあんな風に考へるなんて、自分でも恥かしい位だ。然し、事實、あれが僕の氣持ちなのだから、たとへ君に笑はれても、こればつかりはどうも仕方がない譯だ――さういふ風な人間はその氣持を充分に生かして行くより外に途がないからね。

友人。(間を置く。)やつぱり君は變つたよ。昔の君はお坊ちやんで氣の弱いはにかみ屋さんだつた。が、さう云ふ風に自分の氣持をあけすけに云へるやうになつたんだから、兎に角、年は取りたいものさね。ふむ、段々君が分つてくる。

彼。あの小說が書けたのは、つまりさう云ふ心の覺悟が出來たからだ。

友人。僕は「亡き妻を哭く。」と云ふ標題を雜誌屋の店先で見たとき 正直な話、非常な興味を感じたよ。だから、すぐ、無けなしの財布をはたいてその雜誌を買つたんだ。全たく雜誌を買ふなんてこの四五年の僕にしちや珍らしい事なんだぜ。

彼。で、すぐ讀んだのかい。

友人。無論さ、電車の內で讀んでしまつたよ。(間。まじ〳〵と狡さうな眼付で彼を見る。)だが、僕はあゝ云ふ內容は全

然し期待してゐなかつたよ。

彼。（少し急きこんで）おや、どんな内容を君は期待してゐたんだい。

友人。僕は（から云ひかけて、一且口をつぐむ。）いや、そんな事はどうでもいゝ。それよりか、あの作の批評と云ふ程の事でもないが、兎に角讀後の印象を話したいね。

彼。結構だね。きかせ給へ。

友人。ぢや忌憚なく云ふよ。あの小說は、どうしても僕には小說とは思へなかつたよ。

彼。小說とは思へない……と云ふと。

友人。まあ、一種の童話だね。

彼。童話。

友人。さうだ。成程、形式から見れば立派な小說になつてゐる。が然し、あの内に描いてある人間は――俊子さんにしろ、君にしろだ――どうも成熟した人間と云ふ氣がしない。小供の世界だね、僕の考へでは。

彼。（怒りを抑えて）さうかなあ。

友人。くどいやうだが、實際あれが君の僞らざる氣持なのかい。

彼。少し僭越かも知れないが、俊子をあれ程深かく書く事は、僕以外の人には出來まいと信じてゐる。俊子はあゝ云ふ人間だ――だから死別れて半年も經つたのに、まだ忘れられないんだ。

友人。君は氣の毒な男だね。

彼。君は僕の甘さを笑つてゐるね。だが、そんな事なんか、もう、僕はどうでもいいんだ。

友人。俊子さんは、實際、そんなに君を愛してゐたかね。

彼。もし、愛してゐなかつたら、僕は家を疊んで宿屋住ひをしたりしやしないよ。

友人。成程ね。君があゝ云ふ小説を書いた氣持が、やうやくハッキリしてきたやうだ。

彼。俊子の居ない生活は、僕には、もう生活ぢやないんだ……俊子の母を僕は本統の母のやうに敬愛してゐる。ところが俊子の母がさつきもやつてきて、僕に再婚をすゝめるんだ。君、今の僕に再婚なんか出來ると思ふかね。

友人。（押えてゐる惡意がハッキリ現はれる。）耐らないね。どうも君は少し馬鹿ぢやないかと思ふよ。

彼。（憮然として友人を見つめてゐる。）……馬鹿……僕がかい。

友人。さうだ。君は實際の人生を見てゐない。何時も童話の世界に住んでゐる氣の毒な男だ……いや、幸福な男と思ふから、僕は充分我慢をして、謹しんで君の話をきいてゐたんだ。

彼。（泣くやうた笑ふやうな不思議な表情で友人を見つめてゐる。）……

友人。（その顔をみると思返して）だが馬鹿だと云つたのは、僕の言ひすごしだ。勘免してくれ玉へ。（彼點頭く。）だがね、さうさ、何と云つたらいいかな、兎に角、君があんまりお人好しなので、僕は、もう腹が立つてきたのだ。

彼。……ぢや、君は俊子の僕に對する愛を信じないのかい。

友人。無論だとも。

彼。（憤然として）無論だと……君、暴言を吐くのはよし玉へ。さつきから、僕は隨分我慢をしてゐるんだよ、それとも君は僕を辱かしめるつもりでやつてきたのか。

友人。いや、僕は偶然、君と同じ宿屋に引越したんだ。そこで久振で君と愉快に話さうと思つて、やつてきただけなん

だ。

彼。それなら、そんな漫罵はよして貰ひたいもんだな。

友人。これを君は漫罵だと思つてゐるのかね。ふむ。いよいよ救はれないな……僕は、もう、君の顔をみてゐると、ムズムズしてくる。仕方がない。餘程隠してゐやうと思つたが、もう我慢が出來なくなつた。一つ俊子さんの正體を見せてやらうか。

彼。……

友人。君、君がこれ迄の生涯をかけて愛してゐた俊子さんは、要するに只の若い女なんだぜ。

彼。そりや分りきつた事ぢやないか。誰も俊子を神樣だとは思つちやゐないよ。

友人。（もどかしげに）さうぢやないんだ。只の女と云ふ意味はね、よく新聞の三面に出てゐる淫奔な女と同じだと云ふ事だよ。

彼。（血相が變る。）もう一度、云つて見給へ。君、そのまゝぢや歸さないよ。

友人。（冷然と）あゝ何度でも云ふよ。僕は君の前でだら、何んな事でも平氣で云へるからね。

彼。歸つてくれ給へ。君、僕はもう君とは會ひたくないんだ。

友人。無論歸るよ。だが、これ迄の友情に免じて、僕はすつかり云つてしまはう。（厭な笑方をして）生殺しは罪だからね。

彼。……

友人。健君。俊子さんは君と夫婦になつてから、男を持つてゐたんだよ。

彼。……そんな馬鹿な……

友人。まあ、興奮しないで、もう少しきゝ玉へ。しかもその男は僕なんだよ。

彼。そんな馬鹿な……君はあくまで僕を嘲弄するんだな。

友人。（いかつい表情で）まだ、信じないかね。

彼。（チラリと壁上の俊子の寫眞を見る。つぶやくやうに。そんな事が信じられるもんか。

友人。（唇を強く結んでゐる。痙攣的な微笑。）君は信じたくないんだな。（間。）ぢや、きかう。あれ程往來してゐた僕が君と急に疎遠になつた譯が君に分るかね。

彼。（凄い眼で默つて友人を見てゐる。）……

友人。（間を置いて）あの時、僕と俊子さんとは、始めて親密な仲になつたんだよ。

彼。（蒼くなる。）……

友人。うむ丁度、いい物がある。これを君に返さう。（懷中から、一葉の寫眞を出す。）見玉へ。君が大きく引伸して額にしてゐる寫眞と同じだから（彼受取つてみる。）裏を見玉へ。その手跡をよもや君は見忘れはしまいね。（彼默つて頷く。）「二人の戀の形見として。」と書いてあるだらう。丁度、僕に他の女が出來て、俊子さんと別れた時に貰つたんだ。その時、俊子さんは大へん泣いたよ……

彼。……僕は馬鹿だつた。愚かしい事だ。

友人。君の「亡き妻を哭く。」が、雜誌に出たときは、無論、君はもうこの事を知つてゐるもんだと思つたんだ。だから、無けなしの財布をはたいて貰つたんだ——分つたかね。俊子さんの正體が。

彼。（兩手で顏を掩ふ。）……

友人。（彼を長い間見つめてゐる。）もう、僕は君を輕蔑する氣もなくなつてしまつた。が　然し、僕を恨んでは困るぜ。大きな赤ん坊だつた君もこの事件で大人になれるかも知れないからね、ぢや、僕は失敬するよ。（立上る。）

彼。……僕の心は煮えかへるやうだ。

友人。實は今日此處に君がゐる事を知つたとき、もう、俊子さんも亡なつてしまつたんだから　君の僕に對する感情も餘程和まつてゐるだらうと思つて、和解のつもりでやつてきたんだよ。だから抽出の隅にころがつてゐた俊子さんの寫眞なんか持つてきたんだ。ところがすべては僕の思過しだつた――君はこれから苦しむんだ。

彼。もうこの屈辱にはとても耐えられない……

友人去る。

沈默

彼は兩手で顏を覆つたまゝ嗚咽をしはじめる。

卓上電話がけたゝましくなる。

彼。（淚にぬれた顏で受話器を耳にあてゝる。）もし、もし、はあ、僕です。どなた、どなた、あゝ、お母さんですか。えゝ、先刻は失禮しました。あゝ、さうですか。一旦家へお歸りなすつたんですか。これからお出で下さる……。お父さんも……、一寸お待ち下さい。（受話器を耳からはづす。沈默。少時）さうだ。考へてみりや、俊子だつて人間だ。（間壁上の寫眞を見つめる。）やつぱり可愛い女だ……（また、受話器に耳をあてゝる。）もしもし、お待せしました。ぢや、お二人でゐらしつて下さい。え、何ですつて、さつきの寫眞の姉さんも……あゝさうですか。えゝ、氣に入つ

たら買ひませう。では三人でゐらつしやるのですね。そんなら洋食の方がいいかも知れない。銀座の風月にでも行きませう。お待ちしてゐます。さよなら……

電話を切る。呼鈴を押す

女中現はれる。

女中。何か御用で御座いますか。

彼。おい、僕の羽織を出してくれないか。

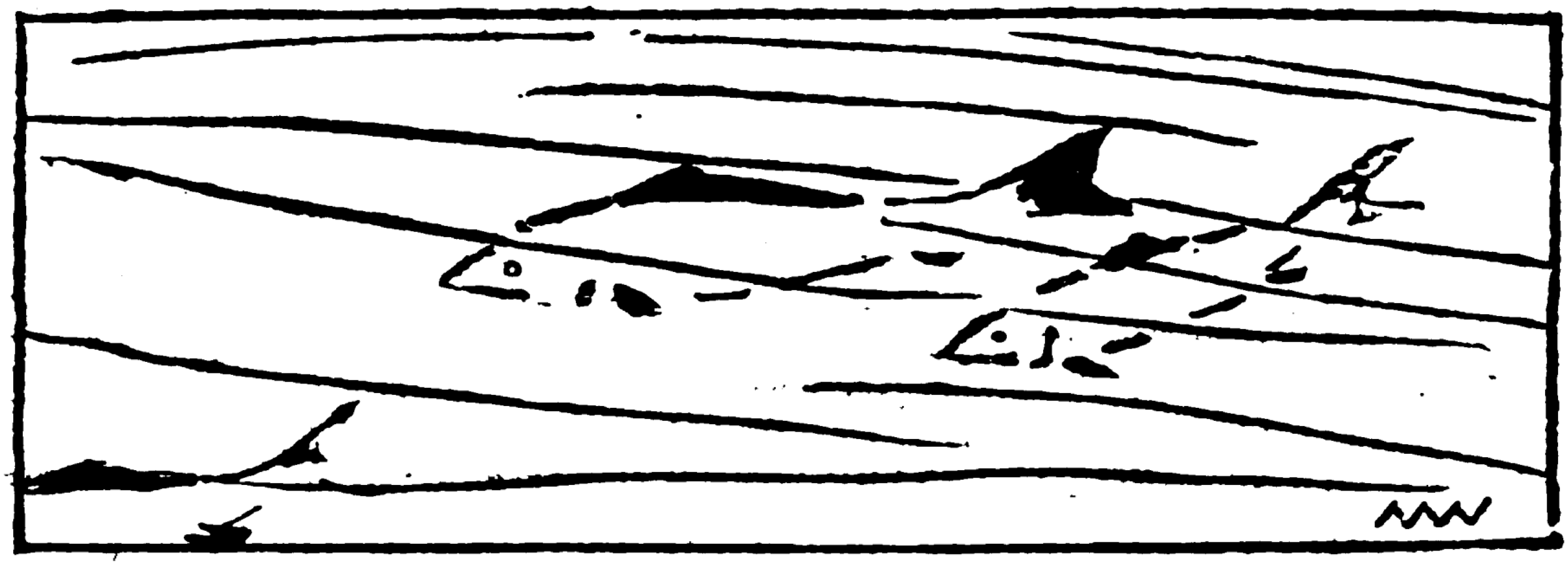
女中。はい。(羽織を出す)。

彼。それから、十三番にこれを返してきてくれ。(俊子の寫眞を紙に包んで出す。)

女中。はい。畏こまりました。(去る。)

彼。(校正ズリを手に取つて讀みふける。)

―(幕)―



恥辱

徳田秋聲

小木はその日も埃ぶかい編輯室で、次の月の雜誌の原稿を整理してゐた。彼は元來文學者であつたけれど、米國から歸つて來てからは、大分頭腦が變つてゐた。劇や小說を讀むとか作るとかいふよりも、寧ろ社會問題や政治に興味を感じてゐた。そんな傾向は洋行する前からあつたので――寧ろそれが洋行の一つの動機であつたとも言へるくらゐで、こゝの編輯へ入つたのも實はその方面で働きたかつたからであつた。それゆゑ彼は普通にいへば硬派の記者だつたけれど、やつぱり文學者として、世間から記憶されてもゐたし、期待されてもゐた。それに日本へ歸つてみると、あちらで考へてゐたとは、雰圍氣が大分違ふやうで、自分の態度について、この頃考へさせられることも多いのであつた。

しかしそんな事はこゝでは何うでもいゝ。社會問題や藝術が、深淺の差こそあれ、現代人の一般的生活意識である以上、劇や小說を書くと書かないとに拘はらず、彼はやつぱり文學者であり、社會人であつた。

それはとにかく小木は歸朝後、まだ何にも發表してはゐなかつた。そして其の點では、聊か心寂しさを感じたけれど、その代りに新たに作つた家庭の幸福が、久しく情味に餓えてゐた彼の生活に、編輯同人の誰もが羨むほど甘美な歡樂と浪漫的な色彩を與へてゐた。それは相手の女が、曾ては新劇の舞臺を踏んだといふことも、彼の新らしい結婚生活に、或る華々しい影を投げかけてゐたには違ひないが、今一つ友人たちの目を竦たせたのは、その女がこの頃女流作家として、特異な創作的天分を認められて遙かに大家の仲間入りをしたことも期待以上に彼を悅ばせた。

小木が社會的生活の方嚮を轉換するつもりで、亞米利加へ行つたことは、今言つたとほりだが、それは寧ろ表面的の事實で、それよりももつと緊要な動機は、その頃すつかり厭氣がさしてゐた、今までの家庭を破壞して、その頃戀におちてゐた其の女と同棲するためであつた。社會的にも家庭的にも、生活の廻轉期が、ちやうど彼に來てゐたのであつた。彼は暗い放縱な過去の生活を咀ふと同時に、今迄の仕事のうへにも或る不滿を感じてゐた。洋行は二樣の意味で、彼の生活に一新時期をはつきり劃してゐた。

小木はさうやつて、人の書いた原稿を調べてゐるあひだも、妻の愛子の幻影が、時々目先を往來した。何彼といらいらさせられがちな長い外遊の旅につかれた彼の神經も、やつと此の頃落着くことができた。愛子は長いあひだ彼の歸朝を待ちこがれてゐた。彼女が小木と戀に陷ちたのは、彼が米國へわたる一年ばかり前のことで、その頃はまだ舞臺に立つてゐた。その劇團の創始者であり指導者である中野とは、無論師弟の關係で、何彼と世話を燒かれてゐたが、何故か舞臺へ立つと硬くなる方なので、有りあまる情熱が科や白を妙に調子はづれなものにしてしまふのであつた。で、評判は惡くはなかつたけれど、好くもなかつた。少數の贔負もあつたが、困りものだと言つて非難する人も多かつた。負け

ず嫌いの愛子は舞臺に立つまでにも相當苦しみもしたし、舞臺へ立つてからも、人の知らない苦勞をしたのであつたが、いつも其の劇壇のスタアといはれる他の一人の女優の蔭にまはるやうな立場で、人氣は餘り立たなかつた。愛子に言はせれば、藝のうまい拙いは、左に右、俳優としての本質的の價値などは、一般の見物は勿論、長年其の道で飯を食つてゐる遊人にだつて、容易に解る譯のものではなかつた。見物に目がないのは仕方がないとしても、相當に頭腦の利く筈の劇評家たちにまで冷笑されるのは、何と言つても人氣商賣に必要な愛嬌のないのが損なのである。愛子は終ひに氣を腐らしてしまつた。そして其の結果、もつと自由に個性を發揮することのできる創作に傾いて行つた。

中野はそれについて、格別引留策を講じようともしなかつたが、二年ばかり面倒を見てゐた愛子が、自分の手から離れて行くとなると、餘り好い氣持はしなかつた、勿論小木との關係を薄々かぎつけてからは、師弟のあひだについとはなし溝が掘られてゐたところなので、愈々劇壇を退くといふ愛子の申出は、一層二人の氣持を拙くした。さうなると、愛子は益、感情的に中野が嫌ひになつて、憎惡の目を以つて彼を見るやうにすらなつた。愛子のさうした氣持が小木に賴り縋る氣持を強くしたのも事實で、公然中野に挑戰的な態度を示した頃が、また小木との戀愛の最も高潮に達した時であつた。

愛子の言ふところでは、彼女と中野との間には、たしかに師弟關係以上の親しみはあつたけれど、愛子の方からは、普通弟子が異性の先生に對する甘やかしい敬愛に似たやうなものはあつたけれど、戀を感じたことは曾てなかつた。そして或る時舞臺裏で、それは英國の劇作家の或る作品の上演された時であつたが、愛子がふとその時彼女の出場になつてゐた或る場合の自分の持役についての仕草を、ちやうど其處に居合せた中野に訊ねると、彼は二度ばかり繰返して優しく自分でして見せてゐるあひだに、ふと衝動的に薄い洋服の胸から、其の手が彼女の肌に觸れて行つたことがあつた

けれど、その時も愛子は喋舗ねて、兩手で乳のところを抑へたくらゐのことであつた。[illegible]
「先生だつて、別にそれ以上深い意味はなかつたんだらうと思ふけれど、それ以來あの[illegible]と考[illegible]でゐると、何となし脅迫を感じるのが、堪らなく厭だつたの」

愛子は小木の問ひに對して、一度さう言つて答へたゞけであつた。小木もそれを信ずる理由があると思つた。

或る時また愛子が病氣にかこつけて、地方巡業を斷つて、小木と一緒に伊豆の溫泉へ行つたとき、中野があわてゝ後を追つかけて來たことがあつたが、その時の愛子の態度は、それまで其となく女を追ひ廻はしてゐた中野を怒らせるに十分であつた。それは誰よりも、小木自身が確かな證據人であつた。

しかし小木はそれ以外のことは、餘り知らなかつた。知る必要もないと思つてゐた。いくらか荒んだところがあるにしても、彼が今まで愛されてゐた半黄色あがりの無智な女とは、迚も比べものではなかつた。勿論女商賣をしてゐたものとしては、その女が誰よりも純眞な愛を捧げてゐることは、小木もよく知つてゐたけれど、たゞ色氣なしにかひ〴〵しく立働くとか、他の何の男よりも、小木を自分に過ぎた所天として、何んな厭な顏を見せらるゝ場合にも、何んなに手荒なことをされる場合にも、曾つて一度も反抗したことがなかつたやうな、さうした屈從的な愛し方だけでは、彼の興味をみたすことは出來ないのであつた。妻が忍從的であればあるだけ、小木は彼女を憐みこそすれ、愛する氣にはなれないのであつた。愛子はちやうど、其の反對だと言つても可いくらゐであつた。少くとも彼女には個性があつた。近代人らしい官能や、藝術家らしい趣味性があつた。蠱惑的な表情だけでも、彼の享樂的興味を唆るに十分であつた。

妻――戸籍上の妻ではなかつたし、小木もそれを躊躇してゐたけれど、とにかく一緒に最初の家庭を作つた彼女は、小木のところへ遊びに來た愛子と連れだつて、どこかへ出て行つたあとで、いつも愛子の坐つてゐた座蒲團に面を伏せ

て泣き沈んでゐた。小木はどんな不機嫌なときでも、愛子が訪ねて來ると、悦んで迎へた。そして如何にも興味ありさうに、米國の土産話や、藝術上の話に熱中した。產れかはつてでもこなければ、迚も解りさうもない話ばかりであつた。愛子の彼女に對する調子にも、どこか取澄したところがあつた。到底自分の相手ではないと言ふ風であつた。偶に優しい言葉をかけられることがあつても、それは輕蔑と哀憐より外の何ものでもなかつた。

「いらつしやるの。」訪問ごとに愛子はそんな風に、押しつけるやうな口をきいた。

「は、をります。」彼女は答へた。

「私が來たと言つて下さいな。」愛子は召使にでも命ずるやうに言つた。

妻はそれも當然だと自分で卑下してゐたが、やつぱり腹が立つた。たとひそんな關係があるにしても無いにしても、現在の家庭の主婦である自分の存在を、まるで無視したやうな振舞は、階級や教養がちがふにしたところで、女同士である以上、ずゐぶん不思議な態度だと云ふよりも、寧ろ可怕いやうな氣がした。そして恐る〱それを小木に訴へると彼は素氣もなく答へるのであつた。

「お前は古いんだよ。あの女は新らしいんだよ。」

「あの女が變つてゐるんぢやないんだ。よく物のわかる――お前なんかにもなか〱理解があるんだよ。高慢だと思ふのはお前の僻みだよ。」小木は更に說明を加へた。

彼女は返す言葉を知らなかつた。

けれど何よりも不安に思はれるのは、二人の關係であつた。勿論前身が前身だけに、そんな事には、殊にも神經が過敏に働きがちであつた。良人が外で何う云ふ仕方で、愛子を愛してゐるかと思ふと、色々の場面が目にあり〱浮ぶと

同時に、小木に甘へてゐる愛子の魅惑的な表情や、總てを彼女の前に捧げ切つてゐる良人の樣子までが、はつきり想像されるのであつた。彼女は體の遣場がないくらゐ悶え苦しんだ。

小木はいつも二人の關係の潔白を主張して、彼女の嫉妬を和らげようと試みたけれど、何の効もなかつた。そしてさうなると、小木は態度をかへて、逆襲的に妻を責めるより外なかつた。

「おれを詰問する資格が、お前にあると思つてゐるのか。勿論そんな事のありやうはないけれど、そこまで行つてゐるとすれば、お前と同棲生活をつゞけてゐられる譯もないんだし、お前を愛してもゐられないことになるんだ。しかし萬一さうなつたとしたところで、それが何うだと言ふんだ。」小木はさう言つて撃退するより外なかつた。

しかし言葉だけでは、矢張り駄目であつた。劇しい爭鬪が始まらないではゐなかつた。そしてさうなると、言葉のうへで怯みがちな彼女も、初めて生き效のある快感に蘇るのであつた。肉體に加へられる熱狂的な打擲が、有らゆる筋肉と神經に、不思議な生氣と抵抗力を與へた。

結局彼女は棄てられた。色々の理由づきで、別れ話を持出してから間もなく、小木は船房のドアに取りついたまゝ、論しても肯かない彼女を追立てるやうにして、船が動きだすと共に、漸と吻とした。

新婚生活に充ち足つたやうな小木は、何となし慵い疲を感じてゐた。馴れない異國の生活が、餘り強くはなかつた體に影響してゐたのは、言ふまでもなかつたけれど、たゞ其れだけではなかつた。それに自分よりも、愛子の社會的存在を、もつとはつきり大きくしてやりたい希望が、自然自己を忘れさせがちであつた。小木はそれ程にも、愛子の才分を信じてゐた。さうした愛を感ずるにつけ、彼は限りない幸福に浸るのであつた。

晝飯がすんでから、皆なが他哩のない世間話に耽つてゐた時であつた。編輯の子供が、一枚の名刺をもつて來て、彼に面會人のあることを知らせた。取つて見ると、それは××新聞の社會面の記者であつた。

小木は理由もなしに、微かな不安を感じながら、應接室へ通すやうに命じた。

「何だらう。」小木は考へた。洋行中も歸朝後も、彼は前の女には居所も知らさないやうにしてゐた。時々何うしてゐるだらうと思ふことはあつたが、それを思ひ出すと氣分が塞つた。で、出來るだけ忘れようとしてゐたのであつたが、歸朝後は自分の名前や噂さがつひ新聞に出たりするので、ひよつと訪ねてでも來るやうな氣が、絶へずしてゐた。自分の方では、奇麗に片がついたつもりでゐても、女の方では双方の事情が、たとひ何んな風にかはるにしても、いつまでも彼の歸朝を待つてゐるやうに明言してゐたのであつた。いつ歸るとも決まつてゐないことだし――事によると五年も十年も、或ひは一生歸へらないかも知れないから、早く頼みになる人を求めて、片着いてくれ。小木はさう言つて、繰返し諭したけれど、女は應じなかつた。

若しかすると、その女のことではないかと、小木はさう云ふ豫感もあつたけれど、自分の態度が決まつてゐるので、さう恐れる理由もないのであつた。

しかし應接室へ行つて、その記者に逢つてみると、豫想がすつかり脱れたので、可笑しく思つた。

「御歸朝後お忙しいでせう。」どこか粗野な處のある、三十からみの其の記者は、善良さうな表情をしてお愛相を言つた。

「いや、別に……。」小木は無愛相に答へて、

「御用は」と促した。

「御新婚早々、餘り縁起でもないたことで實は申しかねますが、貴方の奥さんのことで、少しお伺ひしたいことがあつ

てお邪魔に出た譯ですが。」

「妻！　愛子ですか。」

「さうです。」記者はまじ／＼彼の顔を見た。その目には、いくらか嘲笑的な色も浮んでゐるのであつた。

「どんな事だか、言つて見たまへ。」

「實はお話しにくいことなので、お氣を惡くなさると僕が困るんですが。」

「いや、そんな事はない。一つ聞いて見ようぢやないか。」

「ぢや言ひますが、貴方の夫人のことについて、少し新聞に書きたい事實があるんださうです。どうせ好いことぢやないんで、果してさう云ふ事實をお認めになるか何うか、又載せても差閊がないか、何うか判斷していたゞきたいんださうです。」

小木はちよつとまごついたが、躊躇なく答へた。

「さう。僕が知つてゐることなら、無論承認するが、知らない事だつたら、知らないと答へるより外ないだらうと思ふね。」小木は少し反身になつて、記者を見下すやうにしながら、はつきり答へた。

「内容をお話しすると、實はかうなんです。貴方の新夫人の愛子さんが、中野さんの劇壇にをられる頃に、劇評家の曾田さんが、關係してをつたと言ふんです。曾田さんは多分今度の御結婚の媒介者だつた筈ですから、過去にそんな事があつたとするとちよつと變なものぢやないかと思ふんです。」彼は少し赤面しながら言つた。

小木は足もとを掬はれたやうに感じて表情が硬張つて來た。

「それは一體何處から出たことですか。」

「出所ですか。それもはつきり判つてゐるんです。實はかういふ事があるんださうです。この間中野さんの劇場で、「人形の家」の稽古をしてゐたんですね。その席上で、中野さんが何かの機會に、さういふ事を此頃耳にしたが事實さういふ事があつたのかと言つて確か山田君でしたか、曾田さんと懇意なところから、確められたんださうです、ところで、實はそれが山田君の口から出たことなので、山田君は當の本人の曾田さん自身の口から聞いたんだから、本人が言つたのなら確實だらうといふことになつて、大分問題になつたんださうです。たゞ一人、座頭の紺子だけが、ひどく女の評判が悪いので「男はとかくそんな事を言ひたがるものですよ」と混返(まぜかへ)してしまつたとか言ふ話ですがね。」記者は調子づいて饒舌(しやべ)つた。

小木は可笑しくもなかつた。

「それで、僕に判斷しろと言ふんですか。」

「まあ、願へることでしたら。判斷と言つちや、何だか皮肉のやうですが、それに就いて何かお感じになつた事でもあれば結構です。それを打消すだけの、何か有力な反證とか、夫人の人格についての貴方の御批判なんかも伺つておきたいんですが……。」

「いや、僕は自分の妻のことについて何にも言ひたいとは思はない。そんな事があつたか、無いか、それも僕には判斷しかねる。」

「それでは甚だ御迷惑でせうが、そのまゝ載せることにしましても……。」

「載せていゝとか、悪いとか、それを僕が言つてみたところで、君の方で載せようと思へば、何うしても載せるだらうから、僕は傍觀してゐるより外ないことだと思ふが、かう云ふことだけは言つておかう、どんせ僕なんかは、地位も名

面もない一介の書生に過ぎんのだから、そんな記事が出たところで、少し極りが惡いくらゐで、大した痛痒は感じない。僕が筆誅されるやうな不徳を働いた譯でもないんで、愛子の過去の行爲に連帶責任をもたされる理由もないから、介意はんやうなもの丶、たゞ迷惑するのは曾田さんなんだ。僕がそれを耳にした以上、曾田さんに對して、知らない顏をしてゐることは出來ない。又僕が意見を聞かれるとなれば新聞の立場としても、そんな事を載せるのは、まあ止した方がいゝだらうと言ひたいんだね。」

「は。」

「しかし僕がさう言つて君に賴んでみたところで、惜しい種子だと思へば、やつぱり出さない譯に行かないんだらう。」

「職業の悲哀とでも言ふんですか、惡いと思ひながらも、つひ……。」記者は頭を掻いてゐた。

「だから僕は別に可けないとも言はんけれど、人の厭がることを强ひて出すなら、僕にも少し覺悟があるんだ。」小木は昂然として言つた。

「覺悟と仰やると。」

「僕はこんな瘦せつぽちだけれど、腕節は强いんだ。君は知つてゐるか何うかわからんが氣にくはんとなればづゐぶん亂暴もしかねない男なんだ。君にこれだけの話をして、その上で其れが新聞に出れば、僕は何をするか知れない。事によると君の頭が割れないとも限らない。それだけの用心はしてゐてくれたまへ。」小木はにや〳〵しながら脅かしつけた。

結局記者は悄れて引退つた。

その日も愛子は停留所まで犬をつれて、散歩がてら迎ひに來てゐた。彼女は朝も大抵そこまで一緒に來て、小木の乘つた電車が、歸路についた自分の目の前を通つて行くのを見て、キッスを送るのが毎日の例になつてゐた。

二人は少しじめつくやうな郊外の徑を、話しながら歩いてゐた。大陸の冷たい空地などを、わざと犬に引かれながら逍遙したりした。森には夕靄がまつはつて、日脚が大分短かくなつてゐた。小木は記者から聞かされたことがあるにも拘はらず、愛子を咎める氣にはなれなかつた。寧ろ過去の暗い影を、相當苦勞の多かつた愛子の生活から拭取つてやらなければならないと思つてゐたが、ちよつと惡戯なやうな興味も起つて、到頭聞いてみた。

「今日は實に妙なことを聞いた。」小木はさう言つて、人事のやうにふゝんと獨りで笑つてゐた。

「どんな事？」愛子は少し薄氣味わるく感じて問ひ返した。

「君のことだ。」小木はさう言つて又同じやうに笑つた。

「私の事？　何だか聞かして頂戴。」

「別段君の耳へ入れる必要もない事だと思ふけれど、まあ話してもいゝ。」

小木はさう言つて事實を話して聞かせた。

「ずゐぶん酷いわ。曾田さんがそんな事を言つたんですて。」愛子は驚いたやうに言つた。

「さあ、曾田君が本統にそんな事を言つたか何うか。それも聞いて見なければ判らないことだし、言つたにしても、それが眞實だか笑談だか。事實があるとすれば、人に吹聽するのはをかしいと思ふけれど、丸きり根のないことを言つたとすれば、隨分不眞面目な話だね。しかし孰でも可いぢやないか。己は格別氣にしてもゐないんだし、君を詰問しようと思つて言つたことでもないんだ。」

「いゝえ可けません。貴方が氣にするとかしないとかいふ問題ぢやないわ。貴方がどんなに私を信じると言つても、私の氣が濟まないんです。」

「君はきつとさう言ふだらうと思つたんだ。君としてはさう出るのが當然だ。しかし過去を掘返してみたつて初まらんぢやないか。」

「いゝえ、貴方は恐れる必要はないのよ。私これから曾田さんのところへ行きます。貴方にも一緒に行つて聞いていたゞきます。」

「まあいゝさ。曾田君が迷惑する。」

「それぢや曾田さんの言つたことを是認することになりやしない？　私そんな不徹底なこと大嫌い。」

「うむ、ぢや行つてもいゝが、しかし何だか變なものぢやないか。」小木は煮切らなかつた。

「貴方は私を疑つてゐるんです。私が虚勢を張つてゞもゐると思つて、危ぶんでゐるに違ひないわ。」

「さうも思はんが、君にだつて稍腹的な影のするのは、全然認めない譯にも行かないと思ふね。たゞそれにしては相手が少し滑稽なんだ。曾田君が滑稽といふ意味ぢやない。曾田君は立派――ともいへんが、まあ善良な紳士だ。今では一廉の洿證家として存在を認められてゐる。それだけに君との對照が何となく愛嬌があるぢやないか。」

「それは眞面目な戀愛ぢやないからだわ。だから貴方は平氣でゐられる。」

「むしろ苦笑したんだ。」

「だから厭なの。堪へられない辱なんです。」

「それなら行かう。君に行く勇氣があるだけでも十分だと思ふけれど……。」

小木は餘り進まなかつたけれど、どこか傳法肌なところのある愛子の意地を通させるために、とにかく同行することにした。

で、二人は家へ歸つて、犬を入口のところに繋いで、食ひものを與へるやうに、若い女中に吩咐けて、愛子自身はちよつと着物を着かへると、晩飯も食べずに出かけて行つた。さういふ問題を前において、差向ひで食事をするなどは、何だか間がぬけてゐるやうに思つた。

停留場へ來た時には、もう電燈がついてゐた。秋ともつかず冬ともつかない、薄冷いやうな寂しい晩であつた。

曾田はちやうど家にゐた。そして二人を八疊の書齋へ引見した。彼は酒氣をおびてゐたが、微醺といふ程度で、善良さうな血色のいゝ顔が、いかにも和樂な家庭の主と云ふ好い感じを與へた。小木から見ると、一時代以上も古かつたけれど、髪などもつや／＼してゐた。

「お揃ひで、ようこそ。どこかの歸りかね。」曾田は挨拶がすむと、二人の態度が何處か更まつてゐるのを感じでもしたらしく、彼等の顔を見た。

「いや、わざ／＼伺つたんです。」小木は答へた。愛子が少し硬くなつてゐると思つたが、澄してゐるやうにも思へた。彼自身は來て見ると、反つて氣分が緊張してくるのを感じた。

「何か用件で？」曾田はさう言つて齒をほじくつてゐた楊枝を火鉢のなかへ棄てた。

すると小木は愛子を振りかへつて、

「僕から話してもいゝか。」と微聲で、きいた。

「え。」愛子はやつぱり澄ました態度で、にやりともしないで、

「あなたが聞いて來たことだから、貴方が話した方がいゝわ。」

「それぢや僕から一應お話しますが……。」小木は切出した。そして簡明直截に今日の出來事の內容を說明した。

「成程。それでわざ〳〵同道で來た譯だね。」曾田は探つたいやうな表情をしながら言つた。

「こんな事は、貴方には御迷惑だらうと思つて、實は聞流しておく積りでしたが、愛子がそれでは困るさうですから、果して貴方の口から出たことか何うかを確めておきたいと思つて……。」小木は卒直に言つた。

　曾田は立ろに否定した。

「笑談ぢやないよ。僕がそんな事を言ふ筈がないぢやないか。」

「さうですか、それなら可んですが……。」

「斷じて言ふ筈はないよ。又そんな事實も全然無根ですよ。そんな事があつて堪るものかね。僕はかまはないとしても、愛子さんが可哀さうだ。それあ芝居の關係や何かで、樂屋で始終顏を合せてもゐるし、偶には一緒にカフエ入りくらゐやつたことがないとは言はない。愛子さんの不平を聽いたこともあるし、及ばずながら藝道のことについて、お話したこともあつたね。」彼は愛子の方を向いた。

「え。」愛子は頷いた。

「よくは覺えんが、何でも自動車で一度お母さんのお宅まで送つたことがありましたつけね。あの時はたしか△△座の招待日だつたと思ふ。そんな事から風說が出たのぢやないかと思ふが、飛んでもない寃罪さ。」

「多分そんな事だらうとは思つたんですが……孰にしても僕は別に深く氣にもしてゐないんです。愛子、君は何うだ、それで滿足なのか。」

「えゝ、私も被告の一人ですから、私からお伺ひする資格はなさゝうだわ。貴方こそ十分お話したらいゝでせう。」

「いや、僕はそれ以上何も言ふ必要はないんだ。君さへ満足なら。」

「ぢや可いんです。」愛子は澄して言ふのであつた。

するとちやうど其の時三人の言葉が途切れたところで、今まで靜まりかへつてゐた次ぎの部屋で、遽かにひい、ひいと云ふ女の忍び泣く聲がした。何だらうと思つて、小木も愛子も耳を欹てたが、それは確かに細君の泣聲らしいのであつた。曾田は遽かに顏を顰めて、「おい、靜かにしろ」と聲かけた。

「いゝえ〳〵。靜かになんぞしてゐられるものですか。貴方はよくも今まで私を瞞してゐましたね。愛子さんのづうづうしいにも呆れましたね。」細君は泣きながら言つた。

「莫迦、靜かにしろ。何といふ醜態だ。」曾田はたまらなくなつて、一層顏を顰めながら、ふいと起ちあがつて、次ぎの部屋へ行つた。そして低い聲で彼女をすかし宥めようとした。

しかし細君のヒステレイは一層募つて來るばかりであつた。ひい〳〵泣きながら、曾田に武者振りついた。

「こら、見つともないから止せ。恥かしいとは思はんのか。」曾田は仕方なし彼女に小突きまはされながら、咽喉を絞るやうな聲を出した。そして暫らく靜かに、どたばたと悶掻きあつてゐたが、終ひに怒りだした。そして打つたり蹴つたりした。

「口惜しい……口惜しい。」細君はさう言つて、死ぬやうな悲鳴をあげた。

小木も傍觀してはゐられなくなつた。そして中へ割つて入つて、曾田を宥めると同時に細君を劬はつた。

「君達には甚だ面目ないが、これが彼奴の病氣なんでね、時々氣違ひをやられるには閉口なんだ。」曾田はさう言つて、

袖を掻き合せながら、座敷へ戻つて來た。

細君はいくらか落着いたが、まだ全く泣き止まなかつた。

愛子は小木を促して、そこ〱に暇を告げた。

翌日の晩、曾田は細君の箏子と同道で、氣のきいた菓子の折などもつて、わざ〱謝罪にやつて來た。あれほど猛烈に狂ひたつた彼女も、その時はもうすつかり不斷の柔順に還つてゐた。曾田がうまく宥めたのであつた。

「私の淺果敢から、飛んだ感違ひをいたしまして、誠に相濟みませんでございました。奥さんも何うぞお氣を惡くなさいませんやうに。」細君も曾田の言葉について、さう言つて詫びた。

小木は曾田の家庭を騒したことを、ひどく氣の毒に思つたが、愛子の所謂「辱」は其のために少しでも痕を消した譯ではなかつた。



二つの事件

宮島資夫

二月の末の寒い晩だつた。M新聞の通信員山根健次は、冷たい風の吹く町を一人しててて〳〵と歩いてゐた。どこの店ももうすでに戸を閉めてしまつて、軒燈の光ばかりが凍てついた町の上を照してゐる。眞直にどこまでも通つた町が、恐ろしく廣々として、歸りを急ぐ電車が凄じい音を立てゝ走つてゐるだけである。凡てがもう睡らうとしてゐるのだ。が然し、彼の仕事は、漸くこれから始まらうとしてゐる所である。

通信員と云つても、山の手のだゝつ廣い二つの區にある四つの警察へ、夜の十時頃から一時位まで、種を拾ひに歩くのが今の彼の仕事である。

『何でも好いから、毎晩丹念に愛嬌よく、さうして機敏に相手を觀察して』就職したとき主任の老人から、彼はそんなことを云ひ渡された。然も彼の得る所の手當と云ふのは月に漸く八圓である、

けれども健次は失望もしなければ、不平も云はなかつた。それはその老人が、その事を云つたあとで、

『まあうんと辛抱し給へ。君なんかまだ若いのだからな、半年もして、社の方に明きさへ出來れば、本社員になれるやうにしてあげるよ、それから先は、腕次第でどうにもなる』と附け足したからである。彼は自分を信じてゐた。取り分け年の若いことが、去年檢査を濟ませたばかりだと云ふことが、彼に强い自信を持たせた。

『本社員になれば』と彼は初めて警察廻りに出る日の晝、考へながら歩いてゐた。靑山墓地を拔ける時に、三聯隊の赤煉瓦に、秋雨がしと〳〵と降つてゐた。『それから先は全く自分の腕次第だ』彼は自分の心にしつかりと云ひ渡した。社會部長も政治部長も、主筆でも、主幹でも、さうしてそれから先は代議士にだつて何だつて、――初めて職業を得た人間にあり勝ちな、若々しい幻想は限りなく續いて行つた。

月八圓の手當で暮すことは、彼にとつても中々苦しいことだつた。だから彼は、晝間の中は方々の先輩の許を歩き廻つて、寫字の仕事や、安原稿の下受を貰つて來た。夜になると警察を次ぎから次ぎと歩き廻つた。

『何か變つたことはありませんか』强て笑顏を作りながら、受附の巡査の前に立つ。

『さあ、君に話すやうな事がなくてね』眠さうな顏をした夜勤巡査の答へはいつもきまつてゐた。

『何でも好いですよ、餘り何もないと困るからな』健次はそんなことを云ひながら、巡査の整理してゐる電報の文句をちらりと盜み讀をする。どれもこれも、家出人の搜索願の通知である。彼はそれでも、近所の店に寄つて社に電話をかけた。

『家出人があるのですがな、十七の娘です』

『そんなものは、記事に必要がありません』

宿直の社員の答へは冷たかつた。次ぎの警察では醉どれが、土間に倒れて寢てゐるのを發見した。

『あれは何です。何か惡いことでもしたのですか』
『はゝ、無錢飮食の常習犯だよ。大して惡いことをするのぢやない。苦しくなると、無理にあんな風に酒を飮んで、警察に引張られてくるだけだ。拘留をすれば、喜んでとまつてゐる。警察にゐれば、働かずに喰つてゐられるからね。拘留をしても何にもならないのだ。だからあゝして冷たい所に寢かしておく。さうして醉がさめてから、うんと脅しつけて歸してやるのだが、それでも中々やめないのだ。困つたものだ』巡査は何の興味もない厄介物らしく話して、『ふゝん』と笑つた。健次はそれでも、その醉どれのそばに寄つて、眠つてゐる顏をのぞき込んで見た。頬と鼻の邊を擦りむいて、赤黑い血が、泥だらけの顏にこびりついてゐる。燒酎臭い息と、むれるような垢の臭が、むつと彼の鼻を襲つた。
『全くひどく醉つてゐるようですね、よくあゝして寢てられる』彼は巡査の前に戻つて來て、改めて感心した顏をした。
『そりや君、あんなものは人間ぢやないからね、犬のようなものだもの』巡査はまた冷かに『ふゝん』と笑つた、
『犬の倒れてゐるのでは、やつぱり記事に必要はないのだらう』彼はさう考へて、今度は電話もかけなかつた。
同じ町を、同じ家の前を、彼は毎晩同じように歩いてゐた。夜の風はだん〳〵に冷たくなつて行つた。大地は凍てた。秋雨の降つてゐた、青山墓地を拔ける時には、墓の水の凍るのが、みし、みしと暗い大氣の中に響いて、下駄は凍りかけた地面に、吸ひついた。けれども何にも事件は起らなかつた。初めての日に描いたような華かな幻想は、だんだんに色があせはじめた。本社員になる望みが、少しづつ薄れて來たからである。
その晩も彼は寒い町を、外套も着ずに、冷たい風に吹かれながら、ぼんやりと歩いてゐた。
『恐らく今夜も何もないのだらう』と考へると、寒い町を長く歩くのがいやになつた。
『大事件さへなければ、それで好いのだ。この警察で電話をかりて、責任免れの報告さへしておけば、それで好い』彼

はそんな事を考へて、警察の中に入つて、

『今晩は』と受附の巡査に禮をした。

『どうしたんだ君今夜は、まだあの事件を知らないのか』巡査はいつもと違つて、活氣のある口調で云つた

『え、何かあつたのですか、どこにです』健次は規定の時間より、遲れて出て來てゐる事を考へるとはつとして『さうしていつごろあつたんです、もうよつぽど前ですか』と訊き足した。

『さあ、一時間半位前だらう。』巡査は後ろの柱時計を振り向いて、『何しろこゝの管内ではない。O署の方だよ、事件の内容は僕からはつきり云へないから、ともかくすぐに行つて見るさ、もうきつと、方々からやつて來てゐる』

健次はそれを聞くと、

『有難う』と簡單に答へたまゝ、すぐにそこを飛び出した。初めて出會ふ異常な事件に對する好奇心と、いつも強て無關心らしい態度に出る、社員に報告をして驚かすことの喜びが、彼の心で渦卷いてゐた。寒い風の吹く町を、彼は夢中で走り通した。

O署の中は思つたよりも靜かだつた。中にゐる人々の數も平素より尠ない位ではあつたけれど、緊張した氣勢が、どの人の顏の上にもはつきりと漂つてゐた。私服を着た刑事達が、一人二人こつそりと眼に立たないように出入りする。署長室の中からも、何か協議をするらしいざわめきが洩れて來てゐた。

健次は警察の中に飛び込むと少時あたりを眺めてゐたが、やがて受附の所に進んで行つて、

『いまT署から聞いて來たのですが、何か事件があつたと云ふのはどこですか』と訊ねて見た。

『ふゝ、もう聞いて來たのか、どうも君達がやつて來ると、何か仕事の邪魔になつて困るのでね』と四十恰好の人の

好い巡査は、髯をひねりながら笑つたが『然しもう、隠したつて仕方がないから教へて上げよう。犯罪のあつたのは、坂の下の薬屋だ。何があつたか、どんな事件か、それから先は、君の腕一つで聞き出すさ。僕は話をすることが出來ないからね、まあ早く行つて見給へ』巡査はそれだけを語り終ると、にこりと笑つて、眼の前にある帳面をいぢりはじめた。

『有難う、ではすぐに行つて見ませう』健治は巡査に禮を云つてすぐにまたそこを出た。

十二時近くなつた冬の町は、暗く寂しくなつてゐた。ずつと下の堀の方からは、寒い風が無暗に烈しく吹いて來る。彼は急いで坂を下つて行つた。がもの二三丁とも行かない中に、小さな薬屋のそこだけは、店の中もまだ明るく輝いて、表に五六人の人達が、風に吹かれてうそ寒さうに立つてゐるのを發見した。

『何かあつたのですか』と健次はその人達に近づくと、何氣なく尋ねてみた。

『えゝ、人殺しがあつたんですよ』その中の一人の男は、聲をひそめて彼に答へた。

『人殺し、どんな人が、殺されたのです』

『殺されたのはこの店の主人の婆さんと、女中ですよ

『それで殺したのは』

『何でも兵隊　つて云ふことです』健次がやつとここまで聞き出したとき、和服を着た刑事が先に立つて、警部と巡査を連れてやつて來ると、巡査はすぐに、

『さ、君達はこゝに立たんでくれ給へ。邪魔になつて困るから』と手を振つて人々を追ひ拂ふと、店の硝子戸の前に立つてしまつた。

はじめてこんな事件に出會つた健次はちよつと間誤ついた。これから先をどんな風にして聞き出したら、事件の内容が判るのか、このまゝでは、社に報告することも出來ないのだ。彼がうろ〳〵としはじめたとき、洋服を着て話を聞いてた一人の男が、ポケツトから名刺を出して、

『僕はY社の者ですが、一寸中に入らせて貰ひたいのですが。』と云ふのを彼は耳にした。

そこで彼も懐ろの奥の方からM社の名前の入つてゐる名刺を出して、その男のあとに進んで行つて、

『僕もどうか』と巡査の前に突き出した。

『さあ主任が何と云ふか。』巡査は一寸ためらつたが、

『いや、別にその委しく内部の事を訊くのではないのです。たゞ一寸、その店の模様を、どんな人間が殺されたのか、それだけ訊けば好いのですから』Y社の男は如才なく云ひくるめた。

『まあ、中に入つて訊いて見給へ』巡査がやつと、入口から身をのけたので、洋服の男が中に入るあとについて、健次も一緒に入らうとした時に、

『何だ君もか、君は何だ』と巡査は健次の腕を押へた。

『え、僕は今、名刺を上げたM社の者です』

おどおどしながら健次は答へた。巡査は彼の名刺を、硝子戸の中から射す、電氣の光にすかして見た。そして

『君が本當にM社の記者か』と云ひながらじろ〳〵と彼の姿を見廻した。健次はそのときはつと顔の赤くなるのを自分で感じた。彼はこの寒い冬の夜に、一着の外套も着てゐないばかりでなく、洗ひさらした布子の上に、裾の裂けた、小倉の袴をはいてゐるだけである。

それでも記者か――と云ふやうな、蔑みの色を帶びた巡査の眼つきが、彼の勇氣をくじきかけた、が、いまはそんなことにこだはつてはゐられない時だと思ふと、

『え丶さうです』と、思ひ切つてはつきりした口調で云つてから『毎晩○署へも行つてゐるから、大抵僕の顔を知つてゐます』とつけ足した。

『そんならまあ入つて見給へ』巡査は不承無精に彼を通した。

店の中は明るかつた。眞中に立てた飾棚には、化粧品や香水や、香油の壜が明るい電氣の光を受けて艶かしく輝いてゐる。その下の硝子箱には齒磨や石鹸が、そして周圍の棚の中には藥の壜が行儀よく並んでゐる。何も彼もつや／＼として、恐しい殺人事件などとはまるで別に、きちんと片付いてゐたのであつた。

健次は隅の方の腰かけに、そつと腰を下して、一二度逢つた事のある、警部に向つて目禮した。警部は如何にも迷惑らしく苦笑してから、

『は丶、とう／＼やつて來たな』と云つてうそぶいた。そのとき、奥の方から私服の刑事が出て來たので、彼はそのま丶默つて隅につぐみながら、ぢつと二人の話に聞き入つた。

『どうした番頭は』と警部が訊ねた。

『いや、もうすつかり恢復したやうです』

『よつぽどひどくやられたいかな』

『なあに、首を絞められて、一時氣絶したらしいのですが、もう少し遲れたら或ひは危險だつたかも知れません』刑事がそこまで説明したときに、頸に白い布を卷いた、蒼ざめた顔色をした若い男が、奥の方から、のつそりと店に出て

來た。

『君かね、こゝの番頭さんは、どうも飛んだ事だつたが、どんなだね身體の工合は』幹部は如何にも打ち解けた調子で訊ねた。

『有難うございます』と番頭はかすれた聲で答へた。彼はまだ、如何にも落ちつかない、おど〳〵とした調子で、頸に卷いた濡れ手拭をそつとほどいた。ぶる〳〵ふるえる手先でやつと手拭がとかれると、その下から、赤く二た筋にはれ上つた、繩のあとがまだまざ〳〵と成つてゐる太い線が現はれた。

『どうした、君もしめられたのか』幹部は男に訊ねはじめた。

『へえ』と云つて彼はその時のことを語りはじめた。

その日は日曜であつた爲に、日曜下宿に二階の間を借りてゐる、志願兵の中村が晝間から來てゐたゝである。夕飯には何かの丼を取りよせて、主人の婆さんや女中や自分にも御馳走した。それから彼は活動寫眞を見物に行くと云つてゐた。が、晩飯が終つてからも、彼は中々出て行かなかつた。

番頭はたつた一人で店番をしてゐたが、八時半頃になつたとき、何か二階で云ひ爭ふような音がしたので、奥から女中が上つて行つたが、がた〳〵した物音は、それからまたしばらく續いた。重たいものを運ぶようなみし〳〵とした音や、襖を荒く開ける響きがそれに續いた。番頭は、それでも餘り不思議には思はなかつた。町にはまだ人通りも烈しいし、どこの店からも、明るい光の射してゐる時刻である。けれども彼は、たゞ何となく氣になるので、何と云ふ豫感もなく、たゞ一寸様子を見ると云ふような心持で、二階に上つて行つて見たのである。

彼は二階に上つて行くと、何氣なく、いつもの調子で襖を明けて、ひよつくりと座敷に入つた。が不思議な事に、そこ

には、ゐなければならない筈の、婆さんも女中の姿も見えなかつた。そして、いつも無口で穏和な顏をしてゐる中村が、形相をかへて、左の手に鞄を、右の手に細引を持つて、押入の前に立つてゐた。

凡てが思ひもかけない形勢だつた。番頭ははつと驚きながら、默つて立つてゐる中村を再び見返したとき、彼の後ろの押入の襖が少し開いてゐて、その隙間から、若々しい女の足が、にょきりと二本現れてゐるのを見附けたのだ。ぶるつとした戰慄が電氣のやうに身體中を貫いた。聲をあげるひまもなかつた。彼はあはてゝ階段の方へ向つて逃げようとしたのであつたが、その時はもう、默つてぢつと彼を睨めてゐた中村が、後からぱつと飛びついた。低い唸り聲を彼は聞いた。首筋に細引を卷かれてしまつてゐた。ばたりと倒れて氣を失つてしまつたのだ。

使ひに出てゐた小僧の歸りがもつと遲かつたら、彼も恐らく、婆さんや女中と運命を共にしたかも知れなかつた。小僧が歸つてから、軒を並べた家の中から、それからこの町筋に氣味の惡い騷ぎが起つたのである。番頭は漸々息を吹き返した。さうして今まで奥の部屋で、寢かされてゐたのだ、と警部の前で、かすれた聲でやつと語り終つた。

二人も人が殺される二階の騷ぎが、それほど烈しくないと云ふのが、警部の抱いた疑問であつた。

『ふだん穏和しい人ですし、そんなにどたばたもしませんでしたから、何か片附けものでもしてるのかと思つたのです。それにしても、たゞ、何だか少し變なような氣持もしたので、一寸上つて行つて見たのですが』それに對して番頭はさう答へただけだつた。

『死體はまだそのまゝになつてゐるかね』と警部が訊ねると、

『はあ、まだそのまゝです』と刑事が答へた。

『それでは一應見ておかうか』警部はすでに立ち上つた。番頭は一番先きに立つて案內した。Y社の男も僕次もすでに

それにつゞいたが、番頭は飾棚の後ろに立ち止つてじろりとこちらを振り向いた。かさ〳〵に乾いた力のないその眼の中には、何かこちらを非難するような色が浮んでゐた。人の家に起つた重大な、悲しむべき事件である。他人の興味の犠牲となるべき事ではない。殊にそれはその家の內部で行はれた事なのだ。人は誰でも、自分の家の內幕をさらけ出すのは嫌ひである。彼はまた、そこに侵入しようとするものをこばむ權利を持つてゐる。

健次は番頭の眼に出合つたとき、ひよつとたぢろぐような氣持になつた。がそれと同時に、

『君達は、まあこれまで話も聞かせたのだから、これから先は遠慮してくれ給へ。殊に搜査上の邪魔になるような事があつても困るから』警部はそこで彼等を遮つた。二人はそれ以上、進む勇氣を失つてゐた。彼等は默つて引つ返してそとに出た。

健次は社へ報告するにしても、加害者がどんな風の男か、どんな態度で逃げたのか判らないのに困り果てた。彼は十丁近い警察と、その家の間を二度も三度も往復した。知合の巡査から、漸くその男の姓名や出生地を聞き出したり、客待の俥屋から、犯人はドテラを着て鞄を下げて、阪下の方へ下つて行つたと云ふ事から、刑事は附近の活動寫眞館まで探してゐたと云ふような事を漸く聞き出して彼はやつと、電話をかけることが出來たのだつた。

彼はこの異常な事件を報告したら、夜勤の社員は必ず歡迎して聞くだらうと云ふような、誇りと喜びを、幾分か持つてゐた。然し電話口に出た、社員の態度は例の通り冷淡で、差別的な調子を失つてはゐなかつた。彼が事件の報告を終つてしまふと、

『それだけで終りですか、それでは明日朝早く河內さんの家を尋ねて、その事を話してあの人と一緒にまた警察へ行つて下さい。今夜はそれで歸つて好いのです』と、社員はそれに答へただけだつた。

健次が電話をかけてしまつて、再び藥屋の前を通りかけたとき、眞暗な往端の方から走つて來た自動車がそこに止つた。自動車の中から下りた男は、大きな犬を二匹つれて店の中へ入つて行つた。健次はそれがどこから來たのか判らないので、運轉手にそつと尋ねてみた。

『中野から來たのだよ』と運轉手は敎へてくれた。彼はまた一丁ほどの阪を下つて、電話を借りて報告した。

『そんな事は必要がありません』社員の答へはまた冷淡なものだつた。つまらない顏をして健次は阪を上つて、自分の家に歸る途すがら、また一寸警察に寄つてみた。

警察の前には自動車や人力車が五六臺止つてゐた。それは丁度、その時分になつてやつて來た各社の社員の乘つて來た車だつた。彼はそれに興味を引かれて、警察の中に入つて見た。記者達が刑事部屋に集つてゐると云ふのを聞いて彼もその方に行つて見た。そこで彼等は、赤々と炭火のおこつた火鉢に手をかざし、熱さうな茶をすゝつて愉快さうに話をしながら、西洋紙に鉛筆を走らせてゐた。

『でその男は幾歳ですか』一人の記者が尋ねると、

『二十三だ』と刑事が答へた。

『出生地は』

『仙臺さ』

犯罪の模樣も、番頭の頭筋の赤く二筋に腫れ上つてゐる事も、何も彼も彼等はそこで委しく聞いてしまつてゐた。健次がさつきから二時間も、寒い風に吹かれたり、恥かしい思ひをしたり、十丁餘の道を二三度も馳けずり廻つて往復して、やつと聞き出した事の悉くは、車に乘つて馳けつけて來て、暖かい部屋に坐りながら、笑つて彼等が得た材料より

も、却つて貧弱な位なものだつた。

彼はつまらなさうな顔をしてその部屋を出た。だゞつ廣い町はさつきよりも森として、風は一層寒くなつてゐた。

『果してそれは、自分が不慣れなためにあれほど苦勞をしなければならなかつたのか、原因はほかにあるのか』健次はそれを考へるとさつきの巡査の態度まで思ひ出されて不愉快になつて來た。社員の冷淡な口調を思ひ浮べると、彼は事件を忠實に報告する事に對する興味や希望もだん〳〵に失せてくる。

そして今まではそれほどにも感じないでゐた、二階の押入からぬつと出てゐた、若い女の二本の足が、無氣味な姿で彼の頭に映つて來た。――いやその女ばかりではないのである。冷たくなつた、若い女中の身體の下には、それより前に絞め殺された婆さんの死骸が、やつぱり横たはつてゐたのである。死んでしまつてゐるから、水々と肥つた女の身體も重たくはなかつたらう。が然し、石のように冷たくなつて積み重ねられた身體と身體、それが、彼には一層無氣味に思はれた。下から上つてくる番頭の足音を聞きつけて、血相をかへて細引を手にして立ち上つた若者の顏、――どんなつもりで殺す氣になつたのか――彼は樣々に空想を馳せて見た。少時前に見た『罪と罰』のラスコリニコフの物凄い形相や苦痛や煩悶が、若者の顏とごちや〳〵になつて健次の頭に浮んで來た。

「殺すと云ふことはそれほど大變なものなのか、案外造作のないものか』彼はこんな事も考へてゐた。職業的な興味よりも、早く殺す氣になつた、志願兵の心持や動機が知りたくなつて來た。

火の氣の絕えた寒い部屋に、冷たい床の敷いてある自分の部屋を、張合もなく頭に浮べながら、夜中の町を彼は自分の家に歸つて行つた。

その翌朝、健次は河內老人を麴町の家に訪ねた。老人はもうすでに、その朝の記事を讀んでほく〳〵と喜んでゐた。

社員の冷淡な態度に似ず、記事は馬鹿に詳細に書いてあつた。所々、夜勤記者の空想も交つてゐた。

『怠けとらなくつてまあ好かつた。こんな所から叩き上げて行かないと、中々立派な記者にはなれんからな。今の中にうんと勉强したら好いのだ』老人はそんな事を云ひながら、彼を連れて警察へやつて來た。二人はそれから警察や、その附近の家を訪ねて、犯罪の動機を調べて歩いた。主人の婆さん、——と云つてもそれは四十五六の女だつた——と關係があると云ふものもあつた。女中と可笑しいと云ふのもあれば、その男は何か志を立てゝ海外へ行くために、婆さんに金を借りて、その事から殺さなければならなくなつたのだ、と云ふものもあつた。然しそれは、無論どれも信を措くには足りない程度の事である。

一番事情を知つてゐるらしい番頭は、警察の手でどこにか隱されてしまつてゐた。藥屋の店には、昨夜とまるで違つた人達が來て坐つてゐた。

『さあ、どんな理由でこんな事になりましたか、何分留守番の事で一向見當もつきませんので』敬遠的な態度で河内老人に彼等は答へた。志願兵の國許が、案外素封家である事や、實兄が、上京して來たと云ふ事を聞いた以外に、二人は目欲しい材料も得られなかつた。

『まあ好いさ、近い中につかまるだらう、その時ほかに遲れさへしなければ好いのだ。君は毎日午前に一度、午後に一度、それから夜と、時々樣子を見に來てくれ給へ、何れ手當は社から取つてあげる。それにこんな時に腕を見せておけば、社員になれる機會も早いからな』老人はそんな事を云ひつけて、午過ぎに社に歸つて行つてしまつた。

健次は昨夜の寢不足で疲れてゐたので、老人に別れると警察の中庭のベンチに腰を下して二三十分休んでゐた。裏口の方からこつそりと出て來る刑事が、彼の前を通り過る。

すると彼は立ち上つて、
『どうです、何か手懸りがありましたか』と訊ねてみる。
『どうしてどうして、まだ中々だ。が然し君は随分辛抱強いね、そんな所に張り込んでゐるようぢや』と云つて刑事は笑つた。『この頃の記者はうるさくつて全く困る。それにこつちは歩くのだが、向ふは俥でも自動車でも平氣だから、うつかり口を滑らすと先廻りをされるので叶はないよ』とまた『ふゝ』と笑つてさつさと門を出て行つた。
警察の中へは、様々な姿をした人が、出たり入つたりしてゐるのだ。検札を受けるもの、普請場の願ひ、凡ての人が色々な用事を持つてゐる。一人や二人の人が殺されたのは、彼等に取つて大した事件でもないのである。ベンチに腰を下して、それらの人を眺めてゐると、かうしてぼんやりしてゐることが、恐ろしくつまらなく思はれて、疲れが一時に出て來るように思はれて、彼は思ひ切つて立ち上つた。歸りしなに、彼は思ひ出して憲兵隊に寄つてみた。
そこでは私服を着た憲兵が
『警察は君怪しからんよ、證據となるべき物件や、手懸りになるものをみんな獨占してしまふのだからな、僕等の方は不自由で思ふように働けない』と彼に不平を述べ立てた。
『何でも好いから早く捉へてくれゝば好い。俺は午前に一度、午後に一度、夜またこゝへやつて來なければならないのだ』と彼は心でつぶやいて、狭い部屋へ歸つて行つた。
彼にとつては昨日とは反對に、宵の中から薬屋の店だけが、暗くなつてゐた。二階の戸も早くから閉められてゐる。思ひなしか、近所の店も何となく寂しさうな姿だつた。彼はぶら〱とその邊を歩きながら、いま逃げ隠れてゐる志願兵の事を思つた。東京に隠れてゐるのか、もうすでに遠くに逃げたらうか、恐らくは彼も、自分の手にかけて失はせた、

人の命に就て思ひ惱んでゐるに違ひはないのだ。押入から現れてゐた青い足と、逃げまはつてゐる青年の姿が、取り止めもなく彼の頭で渦を卷いた。

藥屋の店先を通る度に、彼は何かさうした幻想的な興味を刺戟された。然し一月に三度づゝ、警察に樣子を見に來る事は、退屈で張合のない仕事だつた。彼の興味は一日ましに減つて行つた。四日目頃からは午前には來なかつた。五日目には午後にもやつて來なかつた。

『それは自分のような、社外の通信員の責任ではありやしない』。彼はそんな事を自分で自分に辯解して怠けてゐた。が然し、七月目の朝になつて、志願兵はとう〳〵捉つてしまつた。彼の退屈な張合のない仕事もそれで終りを告げたのだ。

警察の中では受附の巡査から、氣むづかしい顏をした刑事までが、その日はにこ〳〵とはしやいでゐた。

『どんな工合で逮捕されるやうになつたのですか』健次が刑事の一人に訊ねたとき、

『それはいま、まだ話してはゐられない。何しろ犯人の調べがまだ完全に濟んでゐないからね、今夜になつたら、各社の人を集めて、一時に話すだろ』と穩かに話してくれた。

健次はすぐにその事を、河内老人に電話で知らせてやつた。

夜になつて、彼が再び出かけて行つたときは、警察の中は一層賑になつてゐた。若い記者達は、刑事部屋に入り込んで、

『いやどうもお芽出度う』と愛嬌を振りまくと、

『いや、それほどでもないけれど』と刑事はてれたような顏を見せて『何しろ君達にはいつもいぢめられるからな』と笑つてゐた。

『いや、こちらも何しろ商賣ですからな。』と記者もまた笑つてゐた。

いつも夜は寂しい署長室にも、二三人の人が集つて、何か大聲で話しては笑ふのが、扉のそとまで響いて來た。見すぼらしい衣をして、多勢の記者の仲間に入つてゐる事が、身の引けるようにつまらなく、手持無沙汰になつて來たので、健次はそこを離れて、入口のベンチの所にやつて來て腰を下した。

憲兵が慌しさうにやつて來て、不服らしい顏をして出かけて行く。刑事が出たり入つたりする。夜とも思へないほどさわめいてゐる、警察の中を彼はただぼんやりと眺めてゐた。

『どうしたね、まだ話ははじまらないか』酒臭い息を吐きながら、河内老人はその時分になつてやつと姿を現はした。

『えゝ、さつきから待つてゐるのですが、まだですよ』健次は退屈らしい顏をした。

『警察の仕事なんて、大抵こんなものだ。だからわしはゆつくり晩飯を喰つて來た』老人は如何にも場慣れた事を誇るような顏をしたが、『然し何だな、何とかして寫眞が欲しいな、ほかの社に取られないように手に入れたいが、君もそのつもりで氣をつけてくれ』とさゝやくと、老人はそのまゝ刑事部屋の方へ姿を消した。

長い間待たされて、九時近くなつたとき、

『やあ諸君お待ち遠う。ではこれから主任がお話をするからどうかあちらへ』と巡査が皆を呼んで歩いた。待ち兼てゐた記者達は、どや／＼と署長室の中へ流れ込んで行つた。

まだ三十二三になつた位の警部補が、卓子の前の椅子に腰を下して、皆の入るのを待つてゐた。記者達はそこに入ると、

『や、お芽出度うでしたな、大したお手柄で大いにお祝ひをやられる事でせう』と挨拶をした。

『いやあ、諸君も毎日御苦勞でした。まあどうか掛けてくれ給へ』と警部補は得意らしく右の手を差し出した。皆が椅子に腰を下すと、

『ではこれから、逮捕までの事柄をざつと話をしますが、加害者は　あの晩、二人を絞殺して、番頭も氣絶させると、すぐそのまゝ芝の親戚の許へ逃走した。さうして彼は、今夜急に、實家まで歸つて來なければならない事が出來たので、除の許しを受けて出て來たが、旅費が少し足りないから貸してくれと、そこから二十圓の金を借りて、すぐにその家を出てしまつた。平素は穏和で着實な男であるから、よく原因も尋ねないで、その家では借してしまつたのだ』と警部補は語りはじめた。

『はゝあ、矢張りあの晩、その親戚へ張り込みに行つたのですな。僕はどうも芝と云ふ事だけを耳にしたので、すぐに後をつけたのだが、途中で甘く捲かれてね』と健次の知らない、若い社員は口惜しさうに云つて、『はゝゝ』と笑つた。

『それはお氣の毒だつたが、何しろ親戚の所在地などを諸君に知られると、すぐに先廻りをされるのでね』と警部補も愉快らしく笑つた。そしてそのあとを語りつゞけた。加害者は、その晩は神田に出て、宿屋に泊つた。翌朝になつて新聞を見ると、番頭は蘇生してゐる。犯人が自分である事も既に判つてしまつたのだ。もしそれが、判らずにゐたならば國へ歸つて父親を何とか欺いて、滿洲まで行く旅費でも貰ひ受けて、それから更に、南亞米利加でもメキシコでも、どこか遠い外國に逃げ出して、平素から考へてゐた通り、海外で一生を送るつもりでゐたのだ、と自白した、と警部補は語つた。

然し彼は、自分の身體がもう全く包圍されたような狀態にあることを知ると、どうかしてこの圍みを拔けなければならないことに苦心しはじめた。そして第一に弱つたのは、ドテラ一枚と云ふその服裝である。縞の荒い記憶に止り易い、その服裝を考へると、彼はすぐにその宿屋を出て、柳原で古洋服を買ひ入れた。さうして漸く身なりを整へ終つた

時には、彼の懐ろにしてゐた。金は、もう幾干も殘つてはゐなかつた。それからの彼はたゞ、東京市中をうそ〳〵と歩き廻つてゐただけで、最後に一文もなくなつて、身動きが出來なくなつたとき、またふら〳〵と戻つて來たのは、芝の親戚の家である。彼はそこで何とか泣きついたら、親戚の情として、彼の身を安全な所に落してくれるだらうと云ふような考へを持つてゐたのである。

然し、親戚の家にはすでに、警察の手が廻つてゐた。彼が泣きついて賴み込んでゐる時に、さうしてその話をもつともらしい顏をして聞きながら、彼の逃亡の時機を延してゐる間に、その家からはもうこの警察に、密告の使ひが出されてゐたのである。待ち構へてゐた刑事達は、すぐにその家に逮捕に向つた。犯人は別に手向ひもしなかつた。たゞ『自分が一生の誤ちだつた』と云つて少時そこで泣いてゐたが、それからは穩和しく、刑事に引致されてしまつたのである。

警部補が演說口調でゐ並んだ記者達に語り終つたとき、

『はゝあゝ、すると何ですな、極めて溫順な、大して惡意のない男だつたのですな』眞先に腰をかけてゐた、髯を生やしてゐた記者は如何にも單純な、面白くもない事件だと云ふような顏をして聞き返した。

『人間は非常に穩和しい男らしいが、どうしてあんな事をしたものか』警部補はつまらなさうにそれに答へた。

『然しまあ、早くあなたの方の手でつかまつて結構でした。ほかの署の手であげられては全く堪りませんからな』と若い記者が口を入れた。

『いや全くそれだけで、我々も苦心した。自分の管内で起つた事で、殊にこんな風な事件を、ほかに取られては面目を失するから。』

警部補は、いかにも苦心したらしく首を傾げた。

『なるほど、所でその男は、餘程外國へ行きたがつてゐたやうですが、それには何か事情でもあつたのでせうか』若い記者は何氣なく訊ねたが、

『さあそれはどう云ふものか、今僕には云ひ兼る』と警部補は、急に顏色を引きしめて、默つて煙草をぷかりと吹かした。

『いや、どうも有難うございました』と髯の男は豫期したほどの事件でもないらしいのに、失望したやうな顏をして、最初に椅子から立ち上つて、頭を輕く下げると扉のそとに出てしまつた。ほかの記者も、ぞろ／＼と立ち上つて部屋のそとに出て行つた。河內老人は、一番最後まで殘つてゐたが、ほかの記者の姿が見えなくなると、警部補の前に出て、

『ところでその、寫眞を一枚何とかお願ひしたいのですがな』と聲をひそめて慇懃に頭を下げた。

『さあ、僕の手許には今ないから、あとで聞いてみて上げよう』警部補は初めておほやうにうなづいた。

『どうか一つ、御盡力を』老人はまた一つ頭を下げてそこを出た。

廊下には刑事達が、如何にも浮々とした顏をして記者を相手に何か話し合つてゐたが、

『どうです一つ、その犯人と云ふのを一寸見せて貰へないですかな』と記者の一人が云ひ出した。

『さあ』と刑事は、一寸考へるやうなふりをしたが、『もうレコもゐないから好いだらう、まあ來て見給へ』と先に立つて、暗い留置場の方へ歩いて行つた。記者達はまたそのあとに、ぞろ／＼とついて行くので、健次も一番あとから恐ろしさうについて行つた。

薄暗い留置場の中の、堅いベンチの上に腰を下した若い男は、向ふむきに突つ伏して、腕の中に頭を隱したまゝ、身

動きもしないでゐた。
『あの男だ』と刑事が云つた。
『はゝあ、どうです好男子ですか』と一人の記者が訊ね返した。
『中々品の好い優しい顔をしてゐる男だ』と云ひながら、刑事は前の格子を開けると、暗い留置場へ入つて行つて、突つ伏してゐる男のわきに腰を下して、その肩に手をかけた。
『どうしたな、好い若いものがそんなにめそ〳〵泣く事はないだらう、新聞社の連中が、君の顏を見たいと云つて來てゐるのだ、一寸起きて好男子ぶりを見せてやれ』
と云ひながら、刑事は肩にかけた手をゆすつた。青年は默つて身動きもしなかつた。この暗い留置場の中に入れられて、彼は恐らく世間に對して希望を失つた。これからの生活の暗さを考へてゐるのだらう。自分の手にかけて殺した二人の女の事も考へてゐるに違ひない。凡てが悔ても、及びもつかない事である。けれども彼は、いくら悔ても及ばない悔を、心に繰り返し繰り返して苦んでゐるのである。彼の犯した罪に對しては、それに價した刑罰が、眞暗な彼の前途に待ち受けてゐる。いくら嘆いても、それも及ばない事である。彼はいま、悔恨と、悲哀と苦痛のどん底に投げ込まれてうめいてゐるのだ。彼のした事に對しては、彼がその責を負はふとしてゐるのだ。羞恥も心を咬んでゐるだらう。それだのに、この刑事は、彼を捉へた喜びから、たゞ一寸した物好や好い子になりたい心持から、面白半分にこの苦痛の底にゐる男をまだ苦しめようとしてゐるのである。健次の心には、何か測な堪へ切れない憤懣と、憐憫の情が起つて來た。
『さあ一寸起きて、諸君に顏を見せてやれ』

刑事は自分の思ふようにならないのに焦れ初めて、今度は立ち上ると青年の横に立つて肩に手をかけると力を籠めて起こさうとした。青年は刑事が力を入れる度毎に、肩を振つて手を外した。

『えゝ強情だなあ』と最後に刑事はその兩肩に手をかけて、うんと力を入れた時に、青年はぴたりとベンチに嚙りついて身を振つた。

『へゝ、强情張りな奴だな、人を二人も殺すような悪黨のくせにして、赤ん坊みたいに泣く奴があるか、悪黨は悪黨らしく、もつと男らしくするものだ』どうしても自分の力に及ばないと見極めると、彼は突つ伏してる頭の上に、悪罵をあびせて、苦笑しながらそとに出て來た。記者達もさすがに暗い顔をしてゐた。

『いやもう好いさ、有難う』と陰氣な聲で挨拶すると、どや／＼と表の出口の方に歩き出した。警部補は廊下の端れに立ちながら、留置場から出て來た連中を一人一人見てゐたが、河内老人の姿を見ると、

『ではこれを』と右手の中に隠してゐた、寫眞を彼にそつと渡した。

『やあどうも』と老人は素早くそれを受取ると、頭を下げて懐ろにしまひ込んだ。

警察の門を出ると老人は、

『やあどうも御苦勞さまだつた。いづれ社で相談してきつと何とかするからね』と云ひ捨てゝ、さつさと別れて歸つてしまつた。

暗い留置場で泣き伏してゐた青年の姿を思ひ浮べると、彼にはそれが、そんなに大それた悪人とは思へなかつた。彼がそれほどの悪人なら、のめ／＼と親戚の家まで歸つて來て哀訴までして密告されるような筈はないのである。彼は何のために人を殺したのか、さうして今は何を悲んで泣いてゐるのか、之れは倣次には解らない事である。けれども重い

苦痛と暗い悲哀は、健次の心にもそのまゝに響いて來る。彼を惡黨と罵つた刑事や、極めて單純だと笑つた記者の心の中に、もつと暗いものがひそんでゐるようにさへ彼には思はれた。

寒い風に吹かれながら、暗い道を彼はまだとぼ〳〵と冷たい部屋のある家の方へ歸つて行つた。頸筋を赤くして、厚かましい彼の態度を非難するような眼つきで眺めた番頭の顏が、ちらりとまた彼の頭に浮んで來た。押入の中から出てゐる二本の足、凡てが不愉快なものばかりだ。悲哀と悔恨の底に沈んでゐた青年の哀れな姿を思ひ浮べると、彼は本當にあの青年が惡人であるのかないのか、それが決定しない中に、寫眞までかゝげて世の中に報道しなければならない義務があるだらうか。――ましてこんな不愉快な想ひを忍んでまで――と、暗い疑問はあとから〳〵起つて來た。初めの日に描いたような、本社員、社會部長、主筆、そんな空想は、だん〳〵に力なく消えかけてゐたのであつた。

殺人事件が終つてしまふと、彼の仕事はもと通り、單調になつてしまつた。彼は寧ろそれを喜んだ。最初の中抱いてゐた もつと事件のある賑かな區に廻されて、出來るだけの力を振つて見たいと云ふような、變な希望はだん〳〵に影を薄くして行つた。

それでも彼はO警察へ行く度に、あの青年の刑期が決定したかどうかを尋ねる事は忘れなかつた。青年は間もなく軍法會議に廻された。そしてそれから半月ほど經つて、七年の刑にきまつたと憲兵隊から通知があつたと、ある晩巡査が彼に話した。事件の內容は巡査にも判らなかつた。然し二人の人を殺して七年の刑である。然も云ひ渡しまでには漸々二十日許りであつた事を思ふと、內容は單純で、青年に惡意の尠かつた事が略わかる。

健次はそれを聞いたとき、あの青年をこづき廻した刑事の顏を、不快な感情で回想した。

彼の仕事は單調で面白くもなかつたが、然し彼はそれを續けるよりほかに、收入の道が得られないので、毎晩決つた時間に家を出て警察を歩き廻つた。それでも健次の生活はだん／＼に苦しくなつて行くばかりであつた。彼はそれから二度ばかり、間借の家を追ひ立てられて、彼の歩く管轄區から、遠くの方へ越さなければならなかつた。たゞ幸ひなのは、時候が暖かになつて行く事であつた。健次は毎晩、一里餘もある遠い所から、警察のある區域まで歩いてゐた。報告すべき事は何にもない。夜勤の社員は依然として冷淡でけんつくを喰はせてゐる。本社員になる希望も、興味も彼は失ひ初めた。

八月の中頃の晩だつた。健次が三つの警察を廻り終つて、R署へ來た時にはもう十一時を過ぎてゐた。いつも事件のないその警察の受附巡査が、

『君、今夜は變つた事があるぞ』と彼に話した。彼はそれを聞いても最初ほどの興味も浮かなかつたが、

『變つたことつて何なんです』と反射的に聞き直した。

『大した事ではないがね、兄妹心中と云ふ奴だ』と巡査も大して張合もないらしい顔をした。

『兄と妹で？　どうしてそんな事をしたのですかね』健次は不審さうに尋ね返した。

『それはまだ判らない、ともかくまあ行つて見るさ』巡査はすぐにその道筋と、その家の番地を敎へてくれた。健次は餘り浮かない顔をしてゐたが、習慣的な義務觀念が、彼の足をその方に向はせた。

敎へられた家に曲る、細い路次の表の町には、緣日が立つてゐた。夏の夜らしく、明るい灯のついた店の澤山出てゐる通りには、まだ、浴衣を着た若い女や男が、涼しさうな顔をして歩いてゐた。路次を折れた先の方には、また一層細

い路次があつた。立ち並んだ小さな家から洩れる、垢いきれと便所の匂ひが、すぐにむつと鼻を打つた。

『篠田と云ふ家はどこですかな』彼はその細い路次を曲るとそこにゐた細君に尋ねて見た。

『心中のあつた家でせう』と胸をはだけたかみさんは、すぐに角からの數をかぞへて敎へてくれた。

健次はまた、何となく無氣味な氣持でそろ〳〵と進んで行つた。數へて見るとその家の前ではあるが、人だかりも何にもなく、家の中はしんとして、開けつ放しになつてゐた。家の中には、小さなランプが、かすかな光を放つてゐる。上り口の土間を圍んで、死體が、もの〻六疊と廣くない部屋である。部屋の隅に何か薄黑い物の下つたのが、中をすかした彼の眼にちらりとうつ〻た。彼は障子の小影に身をよせながら

『ごめんなさい』と恐る恐る聲をかけた。悲哀に心を失つた人達の怒りを恐れたからだつた。然し中からは勢のうせたかすれた聲で、

『はいどなで』と老人が答へるのが聞へたので、彼はほつと息をついて、思ひ切つて障子を開けた。

眼の前の壁のわきに、汚れた浴衣を着た瘠せかれた老人が、しよんぼりと坐つてゐる。ほかには誰もゐないのだ。彼は最初親戚や近所の人の集つてゐる事を豫想したので、家を間違へたのではないかとも考へた。そして、

『篠田さんと云ふのはこちらですか』と念を押すように訊ねると、老人は

『はい左樣で』と靜かに答へた。

『僕はM新聞のものですが、いま警察でこちらに何かお間違ひがあつたと聞いたのでやつて來たのですが』と彼はまだ確信のない調子で思ひ切つて訊ふてみた。

『へえ、悴ゝ娘が死にまして』老人はやつぱり以前と同じ聲でそれに答へた。

『それで死骸はもうどつかへ運んでしまはれたのですか』と老人の顔色ばかりに心を奪はれてゐた彼が訊ねたとき、
『いえ、まだこゝに』と老人は自分の眼の前を指した。
健次は思はず、
『えつ』と云つて、一足下つた。そして自分がいま立つてゐる土間の前の疊の上に、何かから平たいものに、浴衣をかけてあるものがあるのに、つと眼をつけた。浴衣の布は平らに四角に突つ張つてゐた。けれども彼の膝の先あたりの部屋の隅に、蒼白い二本の足が、布のそとに、はみ出してゐるのを見たのである。
『あゝまだこちらですか』と思はずてれた彼は變てこな事を云つてから、『然しお氣の毒な事でしたな、いつこんな事をなすつたのです』
と訊ねたのだ。
『今夜です。もう少しさつき、二人とも緣日から歸つて來ると、私にも行つて來る方が好いと云ふから、出て行つたあとでこんな事をやりましてな』
『さうですか、それで何か毒藥でも』
『へえ、娘の方がどつかゝら、モルヒネを盗んで來て持つてゐたと見えまして』と老人はそれから、兄の方は肺が惡いので、いつも弱つて寢込んでゐたが、妹は邸奉公に出てゐた事も話した。そして二人とも腹違ひでもない本當の兄妹で、妹はいつも穏和しい、間違ひのない娘だつたとも話して聞かせた。
『それは本當にお氣の毒な事でしたな』餘り平然と落ちついてゐる、老人の態度を不思議に思ひながら、彼が思はず云つたとき、

『へいへいどうも貧乏ですから仕方がありませんや』と老人は前の壁をぼんやりと眺めながら彼に答へた。ゐるにも歸るにも、取りつき穂のないやうな老人に、

『やあどうも失敬しました』と、健次は思ひ切つて挨拶をしてそとに出た。

表の通りには、緣日に居殘つた花屋の店のランプの光が輝いて、店を終つてから出て來たらしい人達も歩いてゐた。

然し健次は、今のさつき、自分の眼の前に並んでゐた死人の事を考へると、彼の心は變てこに胸苦しくなつて來た。そして今夜こそ、自分の眼がまざまざと、青ざめた死人の足を見たのである。

どんな理由で死んだのか、あの老人の話ではまるで知る事も出來なかつた。然し、あの狹い家も、肺病で寢てゐた兄と、その家で育つた妹の事を考へると、彼は何も彼も理解する事が出來るやうに思はれた。

『どうしてこんな、不愉快な事ばかりに出會はなければならないのか』緣日の外れの暗い道に出た時に彼はふと考へた。さうして自分のしてゐる事が、人の憂ひや悲しみに乘じてやつと暮してゐるやうな、無暗に醜いものに思はれて堪らなくなつて來た

『社に報告したものか知ら』彼はそれを考へると、あの無愛想な社員を相手に、こんな息苦しい事を話すのさへいやになつた。

『どうでもなれ』と彼は思つた。殺人だの自殺だの、そんな事ばかり探して歩いて暮さなければならない位なら、新聞記者なんかにならなくたつて俺は好いのだ。彼は強て自分の心に力をつけた。

一番最後が月八圓の手當のなくなるだけの事である。

『さうすれば俺は働く、車力でも土方でも』

彼は男敢らしく考へた。

『それでももし喰へなくなれば。』

『その時は、第一に出會つた事件の時に見た青年の態度に出るか、今夜の人達のようにするか、それは俺の心任せだ』

彼はここまで考へると思はず、『ふゝん』と鼻で笑つた。

二里近くある道を、さま〳〵な想ひに耽りながら彼はてく〳〵と歩いて歸つた。疲れ切つた彼の頭に、蒼白い死人の足ばかりが、時々ぽつりと浮び出した。彼にはそれが彼の將來の運命であるような不吉な豫感にさへ思はれた。

『然しそれが何なのだ、その時は俺にはもう自分の蒼白い足は見えないのだ』暗い往來の眞中で、彼はまた顏を歪めて『ふゝ』と笑つた。



マツダ瓦斯入電球

日は落ちて尚ほ日の光

知らざればこそ

■今から約三十年前に空氣中に「アルゴン」といふ瓦斯が發見されました、「アルゴン」とは希臘語で役に立たぬと云ふ事です。

■永年苦心と研究は遂にこの「役に立たぬ」瓦斯を利用して夜を知らぬ**マツダ**瓦斯入電球の製造に成功しました。

■知らざればこそ名づけられた「アルゴン」……「役に立たぬ」瓦斯は今ではなくてならぬ**マツダ**瓦斯入電球の主要成分です。

■普通電球の二倍の効力ある**マツダ**瓦斯入電球はこの「アルゴン」から生れました。

◎定價　金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）
但支那を除く

國別／冊數	內國	外國	
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢	以上郵稅共
十二冊	金九圓六十錢	金拾貳圓九拾六錢	

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、卽ち一ケ年通計十七册分の割合なれば一ケ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金口座番號は**東京三四番　長野三二〇五番なり**
一郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず
一代金引替　小包の取扱は一切謝絶す
一集金郵便　御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる共總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
　一金二圓以上五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
　一金拾圓迄　金八錢
一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十三年六月廿八日印刷納本
大正十三年七月一日發行　（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木島三

發行所　東京市丸ノ内ビルヂング七階七百七十六區　中央公論社
電話　長丸ノ內三〇二（當分不通）　牛込五〇八九
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　株式會社秀英舍

CHUO KORON *(The Central Review.)*

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

東京株式會社秀英舍印刷